岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第110集

桂平遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

桂平遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7,000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特に、その基幹となる道路など交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和59・60年度に発掘調査した二戸郡浄法寺町桂平遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は浄法寺町中心部の東側丘陵上にあり、沢沿いの段丘縁には縄文時代後期の集落が、その背後の尾根沿いには平安時代の集落が発見されました。平安時代の住居跡には焼失したものがあり、板敷が炭化して残存しております。また住居跡と小屋跡とも考えられる竪穴が対になっているものがあるなど、興味深い資料を提示できたものと思います。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、浄法寺町、浄法寺町教育委員会をはじめ関係各位に感謝するとともに、今後の御指導、御協力をお願いいたします。

昭和61年6月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　中村　直

例　言

1．本報告書は、岩手県二戸郡浄法寺町大字御山字桂平（かつらだい）地内に所在する桂平遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い、岩手県教育委員会文化課の調整を経て日本道路公団の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．調査面積は8,380m²である。野外調査は、昭和59年9月10日～10月31日、昭和60年6月15日～10月31日の2年間にわたって実施した。

4．発掘調査の結果、縄文時代の住居址4棟、古代の住居址14棟、住居址状遺構3棟、陥し穴36基、ピット39基が検出された。

　出土遺物は縄文土器、土製品、弥生土器、土師器、須恵器、石器、石製品、金属器、鉄滓、木器、木製品及び古銭のほか、アスファルト、炭化材等が出土した。

5．遺物は実測図、拓影図及び写真に掲載することを原則としたが、小破片や同一個体の破片及び地文のみの縄文土器片は大幅に割愛した。また、天然遺物はアスファルトのみを写真に掲載し、他はすべて割愛した。

6．遺物番号は遺物の種類に関係なく、図版別に連番を付して、遺物番号とした。

　例、11－4→第11図の4番

7．本報告書で使用した土色は農林省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帖」によった。

8．調査及び本報告書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1の地形図、日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所作成の千分の1の地形図を使用した。また、標高は同公団作成の成果表を使用した。

9．石質鑑定は佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）による。

10．火山灰の分析鑑定は三辻利一氏（奈良教育大学教授）による。

11．炭化材の材質鑑定は浄法寺町田島三郎氏と早坂松次郎氏（岩手県木炭協会指導員）による。

12．本報告書で使用したメッシュは公共座標の座標軸に合致しており、真北はY軸と同一方向である。

13．野外調査及び室内整理は下記の調査員が担当した。

昭和59年度　国生尚主任専門調査員、平井進専門調査員

昭和60年度　平井進文化財専門調査員、酒井宗孝文化財専門調査員

14. 本報告書の執筆分担は「Ⅰ．調査に至る経過」は近藤宗光が担当し、他は平井進が担当した。

15. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

16. 野外調査に当っては、勝又善四郎氏、田口季司氏をはじめ地元の方々の御協力をいただいた。

目　　次

序
例　言
本　文
I　調査に至る経過……3
II　調査方法と整理方法……4
〔1〕調査経過の概要……4
〔2〕調査方法……7
〔3〕整理方法……8
III　遺跡の環境……11
〔1〕地形……11
〔2〕遺跡の立地の現況……11
〔3〕基本層序……12
〔4〕周辺の遺跡……16
IV　検出された遺構と遺物……19
〔1〕縄文時代の竪穴住居址と出土遺物……19
〔2〕古代の竪穴住居址と出土遺物……34
〔3〕陥し穴と出土遺物……105
〔4〕ピットと出土遺物……122
〔5〕焼土遺構……142
〔6〕遺構外出土遺物……142
V　まとめと考察……164
〔1〕縄文時代の住居址……164
〔2〕平安時代の住居址……165
〔3〕陥し穴……168
〔4〕ピット……170
〔5〕遺物……174
〔6〕考察……177
資料：岩手県内遺跡出土火山灰の蛍光X線分析……奈良教育大学教授　三辻利一　199

図 版 目 次

第１図　桂平遺跡位置図……1
第２図　遺跡周辺の地形図……2
第３図　グリッド配置図……10
第４図　基本層序模式図と土層観察用
　　トレンチの位置……13
第５図　浄法寺町内遺跡分布図……14
第６図　桂平遺跡遺構配置図……17
第７図　ⅧD－２住居址……20
第８図　ⅧD－２住居址内出土遺物……21
第９図　ⅧD－３住居址焼失状況と
　　柱穴断面……22
第10図　ⅧD－３住居址……23
第11図　ⅧD－３住居址内出土遺物(1)……25
第12図　ⅧD－３住居址内出土遺物(2)……26
第13図　ⅧD－３住居址内出土遺物(3)……27
第14図　ⅨD－１住居址焼失状況及び
　　柱穴断面……28
第15図　ⅨD－１住居址……29
第16図　ⅨD－１住居址内出土遺物……31
第17図　ⅧD－４住居址及び出土遺物……32
第18図　ⅦC－１住居址……35
第19図　ⅦC－１住居址焼失状況、遺物
　　分布図及びカマド平・断面図……36
第20図　ⅦC－１住居址内出土遺物(1)……38
第21図　ⅦC－１住居址内出土遺物(2)……39
第22図　ⅦC－１住居址内出土遺物(3)……40
第23図　ⅦC－２住居址……42
第24図　ⅦC－５住居址状遺構
　　ⅦC－３住居址状遺構……44
第25図　ⅦC－４住居址……46
第26図　ⅦC－４住居址内出土遺物……47
第27図　ⅧC－３住居址……49
第28図　ⅧC－３住居址、カマド……50
第29図　ⅧC－３住居址内出土遺物(1)……51
第30図　ⅧC－３住居址内出土遺物(2)……52
第31図　ⅧC－２住居址……54
第32図　ⅧC－２住居址内出土遺物(1)……55
第33図　ⅧC－２住居址内出土遺物(2)……56
第34図　ⅥE－２住居址状遺構及び
　　出土遺物……58
第35図　ⅥD－１住居址……60
第36図　ⅥD－１住居址焼失状況……61
第37図　ⅥD－１住居址、カマド……62
第38図　ⅥD－１住居址内出土遺物(1)……64
第39図　ⅥD－１住居址内出土遺物(2)……65
第40図　ⅥD－１住居址内出土遺物(3)……66
第41図　ⅦD－２住居址……70
第42図　ⅦD－２住居址カマド及び
　　遺物出土状況……71
第43図　ⅦD－２住居址内出土遺物(1)……72
第44図　ⅦD－２住居址内出土遺物(2)……73
第45図　ⅦD－２住居址内出土遺物(3)……74
第46図　ⅦD－２住居址内出土遺物(4)……75
第47図　ⅦD－２住居址内出土遺物(5)……76
第48図　ⅦD－３住居址……78
第49図　ⅦD－３住居址、焼失状況・カマド79
第50図　ⅦD－３住居址内出土遺物……80
第51図　ⅦD－１住居址……83

第52図　VIID－1住居址、焼失状況・カマド84
第53図　VIID－1住居址内出土遺物(1)……85
第54図　VIID－1住居址内出土遺物(2)……86
第55図　VIE－1住居址……87
第56図　VIE－1住居址内出土遺物……88
第57図　VIIID－1住居址……90
第58図　VIIID－1住居址、焼失状況・カマド91
第59図　VIIID－1住居址内出土遺物(1)……92
第60図　VIIID－1住居址内出土遺物(2)……93
第61図　VIIIC－1住居址……95
第62図　VIIIC－1住居址内出土遺物……96
第63図　IXC－1住居址……97
第64図　IXC－1住居址、焼失状況・カマド98
第65図　IXC－1住居址内出土遺物……99
第66図　XC－1住居址……102
第67図　XC－1住居址・カマド……103
第68図　XC－1住居址内出土遺物……104
第69図　円筒状陥し穴(1)……108
（VIID－16、VIIID－10、VIIID－11、XC－5）
第70図　円筒状陥し穴(2)……109
（VIIID－15、IXC－6、IXC－4、VIIID－9、VIIIE－1）
第71図　円筒状陥し穴(3)……110
（VIIIC－5、VIIID－14、VIIID－6、XC－2、VIIE－1）
第72図　円筒状陥し穴(4)……111
（VIIID－13、IXC－7、IXC－9、IXC－8）
第73図　溝状陥し穴(1)……117
（VID－11、VIIID－3、VIID－18、VIC－2）
第74図　溝状陥し穴(2)……118
（VID－3、VIIID－7、VIIIC－4、XIB－1）
第75図　溝状陥し穴(3)……119
（VID－6、VIE－3、VIE－6、VIE－4、VIE－5）
第76図　溝状陥し穴(4)……120
（VIIIC－1、IXC－1、XC－3、XB－1）
第77図　陥し穴内出土遺物(1)……121
第78図　陥し穴内出土遺物(2)……122
第79図　VIID－2ピット～VID－7ピット132
第80図　VID－5ピット～IXC－5ピット133
第81図　VIID－14ピット～VIIE－2ピット134
第82図　VIID－10ピット～VIIIC－2ピット135
第83図　VIIIC－3ピット～VIIID－4ピット136
第84図　IXC－10ピット～VIIC－2ピット137
第85図　VIC－1ピット～IXC－2ピット138
第86図　ピット内出土遺物(1)……139
第87図　ピット内出土遺物(2)……140
第88図　ピット内出土遺物(3)……141
第89図　焼土遺構……149
第90図　遺構外出土遺物（土器1）……150
第91図　遺構外出土遺物（土器2）……151
第92図　遺構外出土遺物（土器3）……152
第93図　遺構外出土遺物（土器4）……153
第94図　遺構外出土遺物（土器5他）……154
第95図　遺構外出土遺物（石器1）……155
第96図　遺構外出土遺物（石器2）……156
第97図　遺構外出土遺物（石器3）……157
第98図　遺構外出土遺物（礫石器）……158
第99図　遺構外出土遺物（礫石器）……159

第100図　遺構外出土遺物（礫石器）……160
第101図　遺構外出土遺物（礫石器）……161
第102図　遺構外出土遺物（礫石器）……162
第103図　遺構外出土遺物（鉄製品等）……163
第104図　川口Ⅰ遺跡の陥し穴の配列……171
第105図　五庵Ⅰ遺跡の陥し穴の配列……172
第106図　小井田Ⅲ遺跡の遺構配置図……173
第107図　第1群住居址内出土の
土器集成図……184
第108図　第2群住居址内出土の
土器集成図……185
第109図　第2～3群住居址内出土の
土器集成図……186
第110図　時期別遺構配置図……187
第111図　住居址・ピット時期別
遺構配置図……188

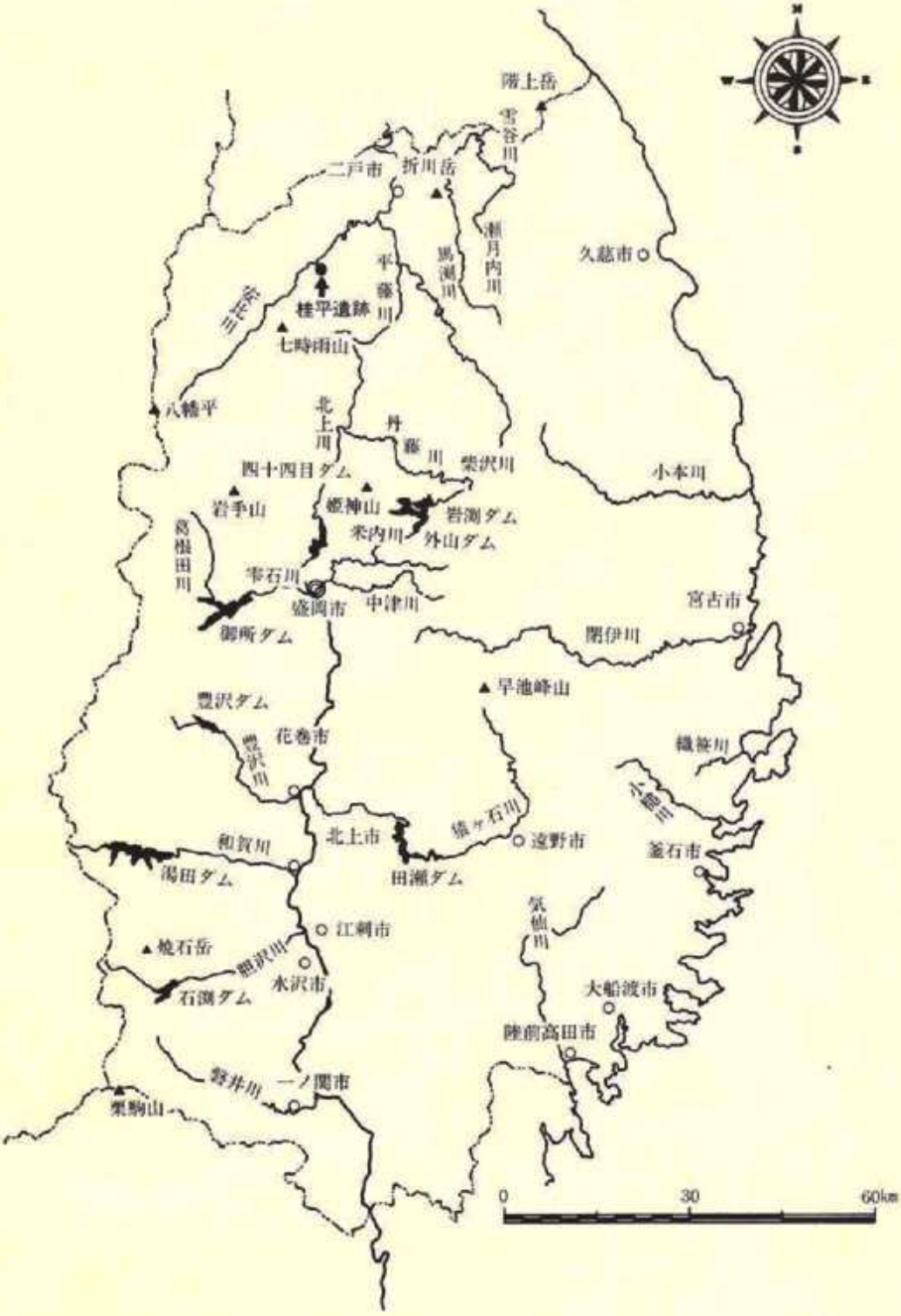
表　目　次

第1表　浄法寺町遺跡一覧表……15
第2表　住居址一覧表……101
第3表　円筒状陥し穴遺構一覧表……115
第4表　溝状陥し穴遺構一覧表……116
第5表　ピット遺構一覧表……131
第6表　平安時代の住居址一覧表……167
第7表　土器観察表……189
第8表　石器一覧表……196

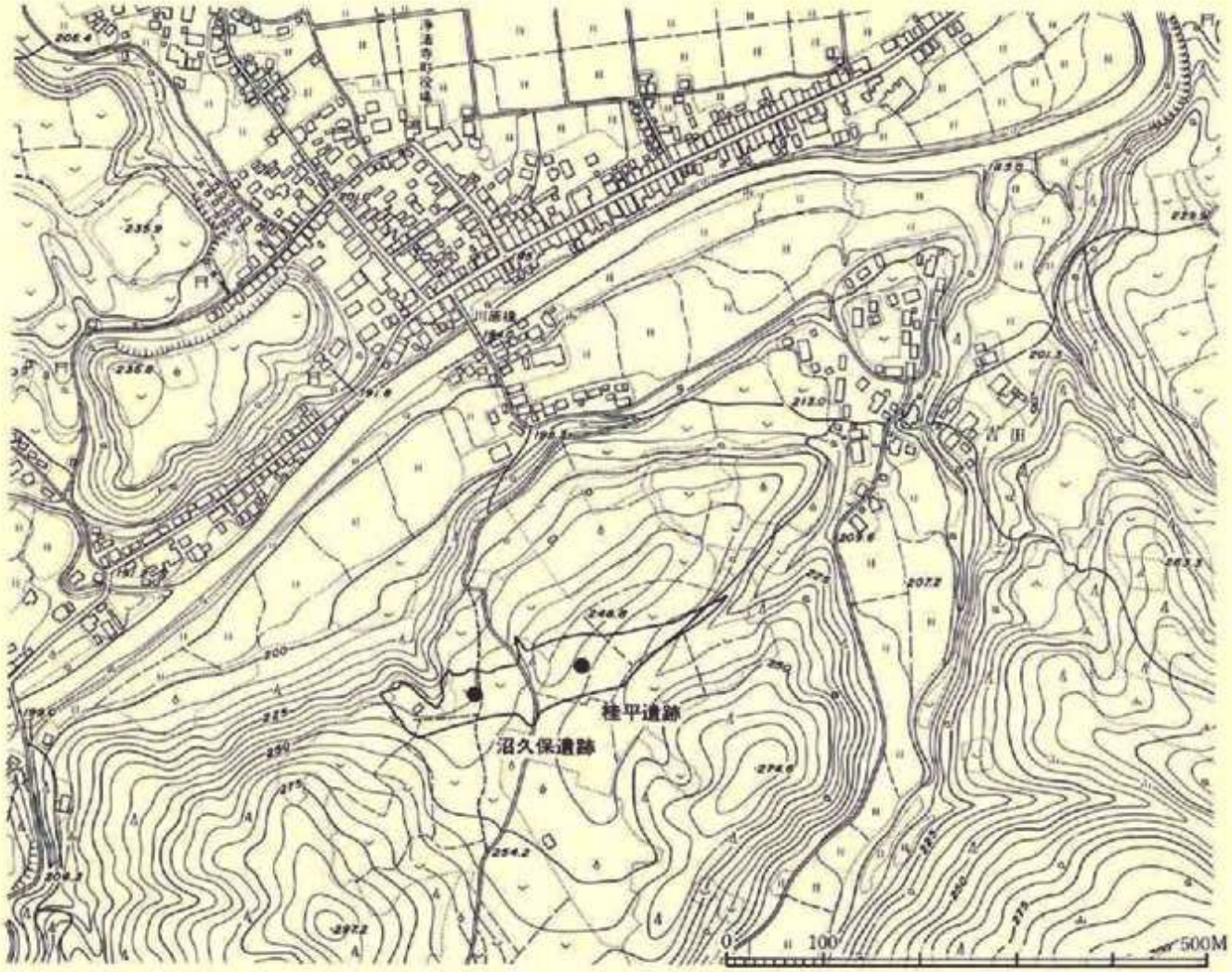
写真図版目次

写真図版1　桂平遺跡の周辺状況……205
写真図版2　桂平遺跡全景……206
写真図版3　調査前・実測風景・現地説明会207
写真図版4　ⅧD－2住居址……208
写真図版5　ⅧD－3住居址……209
写真図版6　ⅨD－1住居址……210
写真図版7　ⅧD－4住居址及び出土遺物211
写真図版8　ⅦC－1住居址……212
写真図版9　ⅦC－2住居址……213
写真図版10　ⅦC－3住居址状遺構……214
ⅦC－5住居址状遺構
ⅥE－2住居址状遺構
写真図版11　ⅦC－4住居址……215
写真図版12　ⅧC－3住居址……216
写真図版13　ⅧC－2住居址……217
写真図版14　ⅥD－1住居址……218
写真図版15　ⅥD－1住居址・敷板等……219
写真図版16　ⅦD－2住居址……220
写真図版17　ⅦD－3住居址……221
写真図版18　ⅦD－1住居址……222
写真図版19　ⅥE－1住居址……223
写真図版20　ⅧD－1住居址……224
写真図版21　ⅧC－1住居址……225
写真図版22　ⅨC－1住居址……226
写真図版23　ⅩC－1住居址……227
写真図版24　円筒状陥し穴(1)……228
写真図版25　円筒状陥し穴(2)……229
写真図版26　円筒状陥し穴(3)……230

写真図版27　円筒状陥し穴(4)……231
写真図版28　溝状陥し穴(1)……232
写真図版29　溝状陥し穴(2)……233
写真図版30　溝状陥し穴(3)……234
写真図版31　溝状陥し穴(4)……235
写真図版32　溝状陥し穴(5)……236
写真図版33　ピット（縄文）(1)……237
写真図版34　ピット（縄文）(2)……238
写真図版35　ピット（縄文）(3)……239
写真図版36　ピット（縄文・土師）(4)……240
写真図版37　ピット（土師）(5)……241
写真図版38　ピット（土師）(6)……242
写真図版39　ピット（土師）(7)……243
写真図版40　ピット（土師・時期不明)(8) 244
写真図版41　ピット（時期不明）(9)……245
写真図版42　VIIID－2住居址
VIIID－3住居址内出土遺物…246
写真図版43　VIIID－3住居址内出土遺物…247
写真図版44　IXD－1住居址内出土遺物…248
写真図版45　VIIC－1住居址内出土遺物(1)249
写真図版46　VIIC－1住居址内出土遺物(2)250
写真図版47　VIIC－4住居址内出土遺物…251
写真図版48　VIIIC－3住居址内出土遺物…252
写真図版49　VIIIC－2住居址内出土遺物…253
写真図版50　VIE－2住居址状遺構
VID－1住居址内出土遺物(1)254
写真図版51　VID－1住居址内出土遺物(2)255
写真図版52　VIID－2住居址内出土遺物(1)256
写真図版53　VIID－2住居址内出土遺物(2)257
写真図版54　VIID－2住居址内出土遺物(3)258
写真図版55　VIID－3住居址内出土遺物…259
写真図版56　VIID－1住居址内出土遺物…260
写真図版57　VIE－1住居址、
VIIID－1住居址内出土遺物…261
写真図版58　VIIID－1住居址内出土遺物
VIIIC－1住居址内出土遺物
IXC－1住居址内出土遺物
XC－1住居址内出土遺物…262
写真図版59　XC－1住居址内出土遺物
陥し穴内出土遺物……263
写真図版60　陥し穴内出土遺物……264
写真図版61　ピット内出土遺物……265
写真図版62　ピット内出土遺物……266
写真図版63　ピット内出土遺物……267
写真図版64　遺構外出土遺物（土器1）…268
写真図版65　遺構外出土遺物（土器2）…269
写真図版66　遺構外出土遺物（土器3）…270
写真図版67　遺構外出土遺物（土器4）…271
写真図版68　遺構外出土遺物（土器5他)…272
写真図版69　遺構外出土遺物（石器1～2）273
写真図版70　遺構外出土遺物（石器2～3）274
写真図版71　遺構外出土遺物（礫石器）…275
写真図版72　遺構外出土遺物（礫石器）…276
写真図版73　遺構外出土遺物（礫石器）…277
写真図版74　遺構外出土遺物(鉄製品等)他278


陸上岳
雪谷川
二戸市
折川岳
瀬月内川
久慈市
馬渕川
平藤川
桂平遺跡
七時雨山
八幡平
北上川
丹藤川
柴沢川
四十四日ダム
小本川
岩手山
姫神山
岩洞ダム
来内川
外山ダム
葛根田川
雫石川
盛岡市
中津川
宮古市
御所ダム
閉伊川
早池峰山
豊沢ダム
花巻市
豊沢川
織笠川
北上市
猿ヶ石川
遠野市
和賀川
釜石市
湯田ダム
田瀬ダム
気仙川
江刺市
焼石岳
胆沢川
水沢市
石淵ダム
大船渡市
陸前高田市
磐井川
一ノ関市
栗駒山
0
30
60km

第1図　桂平遺跡位置図



第２図　遺跡周辺の地形図

Ⅰ　調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道であり、本県にかかるのは第７次施行命令区間約27.6kmと第８次施行命令区間約26.7kmである。このうち第７次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年で終了している。

昭和53年11月第８次施行命令が出された。二戸郡安代町、浄法寺町、二戸市、一戸町を通る路線である。岩手県教育委員会はその区間の埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。そのなかで、浄法寺町には天台宗の古刹である天台寺が所在し、天台寺緑地保全区域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることとなった。

県教育委員会事務局文化課は、昭和54年10月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿い500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両者で協議を重ねた。昭和56年５月には路線発表があり、文化課は路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、約30遺跡を確認した。昭和57年には安代町内の５遺跡について発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和58年度事業として、安代町内４遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繋沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の発掘調査と関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査を行った。文化課はこの年度に浄法寺町内12遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和59年度には、安代町２遺跡・関沢口遺跡、水神遺跡及び浄法寺町９遺跡・柿ノ木平Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、五庵Ⅱ遺跡、海上Ⅰ遺跡、海上Ⅱ遺跡、大久保Ⅰ遺跡、沢久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡の発掘調査が委託された。このうち、関沢口遺跡は58年度の継続調査であり、沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰ遺跡は工事用道路分の調査である。文化課はこの年度に二戸市・一戸町所在のそれぞれ６遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。またその際、新たに発見された浄法寺町内２遺跡・五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡の確認も行っている。その結果縦貫道関連の浄法寺町内の遺跡は14箇所となった。

昭和60年度には、浄法寺町８遺跡・田余内Ⅰ遺跡、田余内Ⅱ遺跡、五庵Ⅲ遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、安比内Ⅰ遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡、広沖遺跡及び二戸市２遺跡・西久保遺跡、大久保遺跡、一戸町３遺跡・堀切遺跡、竹林遺跡、親久保Ⅲ遺跡の発掘調査が委託された。このうち親久保Ⅲ遺跡は粗掘遺構確認調査であり、沼久保・飛鳥台地Ⅰ遺跡そして当桂平遺跡は59年度の継続調査である。

II　調査方法と整理方法

〔1〕調査経過の概要

野外調査は2年計画で進められた。初年度の昭和59年は9月10日から調査を開始した。調査は工事用道路予定地の調査区の南側境界より約10m巾で桂平遺跡は約1,190㎡、町道を隔てた沼久保遺跡は約1,000㎡がその対象であった。

9月11日　現地で県教育委員会文化課、当センター調査担当者の現状確認等が行われた。この時点で、桂平遺跡については調査を進めるうえでの支障となる条件はなかったが、沼久保遺跡については土地の売買契約等にかかわって当分の間調査には入らないこととなった。

9月12日　グリッド設定について、調査担当者間で次のような確認がなされた。桂平遺跡と沼久保遺跡は地形等から判断して、連続する一つの遺跡と理解できる。そのため、両遺跡は統一的に把握する必要があり、桂平・沼久保両遺跡は同一のグリッドを設定することとした。グリッドは公共座標に合致させることとした。粗掘りは調査区東端より手掘りで開始した。東端は沢に落ち込むため表土の黒褐色土は深くⅦ区より斜面上位側は20～30cmであり、しかも畑地であったため粗掘りの作業は容易であろうとの見通しを得た。

9月17日　ⅧD－1ピット検出する。遺構は黒褐色土の地山に対し、埋土は暗褐色土と灰褐色土であったため平面プランは明瞭に把握された。

9月21日　ⅧE区の東半分には遺構が検出されなかったため、土層観察用トレンチとして深掘りを実施した。ⅧD－1ピットの埋土断面及び掘り込み面と深掘りトレンチで観察された土層を比較検討し、表土直下が出土した土師器により平安時代と推定される時期の遺構検出面であることを確認した。また、縄文時代の遺構検出面は、上位は表土直下であるが、下位は第Ⅱ層下位の可能性が強く、ダメ押しはそこまでする必要があると考えられた。

9月22日　ⅧD－1住居址、ⅦD－1住居址を検出する。前者は地山より暗い黒褐色土で縄文時代の住居址である。後者はⅧD－1ピットと同様の埋土で平安時代の住居址である。今後二つのタイプ別に遺構が検出された。

9月27日　尾根頂部付近のⅥ区まで粗掘りが進行する。Ⅵ区は縄文時代の溝状の陥し穴状遺構及びピット、平安時代の住居址とピットが検出された。しかし、Ⅶ区はⅦD－1住居址とそれに重複するピットが検出されたのみで他には遺構が検出されなかった。しかし、黒褐色土が10cmほどの厚さで一部残っていることからダメ押しをすることにする。沼久保遺跡の調査について地権者と公団との協議が行われ、本年度分の調査は10月1日以降に着手することとなった。その際の作付け、雑物撤去等について地権者と調査員との間で協議を行った。

9月29日　ⅥF－1住居址を検出する。大半は現町道によって切られている。

10月２日　沼久保遺跡の調査を開始する。表土は浅く、表土下は褐色土となる。桂平遺跡は精査・実測、沼久保遺跡は粗掘りの作業となる。

10月４日　VIF－１住居址は町道によって分割され、西半が沼久保遺跡で検出された。

10月18日　沼久保遺跡の精査が始まる。桂平遺跡の精査・実測と同時進行となる。

10月20日　現地説明会用の資料を作成する。

10月22日　現地説明会は調査日程に余裕がないこと、次年度の発掘が本遺跡の主体部にせまることから、作成した資料は概要として関係者に配布することとした。

10月31日　昨夜以来の雪も上がった。雪払いの後、残っているカマドの断ち割り等一部の調査を進めながら器材の荷作りをし、午前中で終了した。

調査２年目の昭和60年度は４月15日より調査を開始した。当初計画では、沼久保遺跡の工事用道路部分の残りを優先的に調査を進め、その後沼久保遺跡の他の地点を調査し、６月15日から桂平遺跡の調査に入る予定であった。しかし、埋没谷にあたり第１層が180cmを越え、かつその下から遺構が検出されたため、沼久保遺跡の調査は大幅に延長されるであろうという見通しとなった。そのため、桂平遺跡と沼久保遺跡は同時進行で調査することとなり、５月27日より桂平遺跡の調査を開始した。それに伴い調査員及び作業員の分担を行った。また沼久保遺跡は酒井調査員が、桂平遺跡は平井調査員が担当することとなった。

作業員も二つに分けたため、桂平遺跡としては13～15人の作業員となった。調査面積は7,190㎡である。また、現場の調査事務所は前年度に調査した場所に建てたが、調査期間内に移転しなければならなかった。そのため事務所の移転場所を優先的に調査する必要があり、まず調査区北側に３m幅のトレンチを入れた。

５月28日　トレンチの結果、①一段低くなるVIII、IX、X区は耕作土直下がローム土となるため表土は10～20cmと浅い、②住居址１棟、陥し穴状遺構５基等が確認される。③VIC、VIIC区は遺構外遺物が多いが、他は少ない、等が判明した。

５月30日　人数が少なく、遺物も少ないことからVI・VII区をのぞいて重機による粗掘りを、VI区は手掘りによる粗掘りを行うこととした。

６月８日　調査事務所移転場所であるVI区の精査に入る。本グリッドには大型の竪穴住居址１棟と小屋址と思われる竪穴住居址状遺構が検出された外はピット群である。

６月13日　V・VI区の凹地にトレンチを入れる。

６月17日　沼久保遺跡で表土の土捨て場を確保できなくなったため、その予定地であるA区の包含層精査が急務となった。そのため、一部の作業員を残し、他は全員沼久保遺跡の調査を行うこととなった。

６月21日　沼久保遺跡の包含層中に遺構が検出されたため一部は桂平遺跡へ戻り、トレンチ

をいれる。

6月28日　当面の進め方について現地協議し、①沼久保遺跡の工事用道路分として明け渡す部分について、7月中旬に現地説明会を開くこと。②沼久保遺跡の貯水槽跡は現地説明会まで保存しておくこと。したがって包含層の調査は一時やめ、桂平遺跡に戻ること。③桂平遺跡の凹地はトレンチのみにすることとした。

7月2日　桂平遺跡のVI区とVIIC区の精査を再開した。

7月3日　道路公団、当センターとの協議を現場で行った。桂平遺跡についてはセンター杭より南側半分を急いで欲しいという要望が出された。

7月4日　前回の協議事項に従い、センター杭より南側の調査に入る。

7月8日　重機2台による粗掘りを開始する。

7月13日　第1回目の空中写真撮影を行う。

7月16日　重機による粗掘りを終了する。

7月18日　沼久保遺跡現地説明会を開催する。

8月6日　調査事務所をVIC区に移転する。

9月3日　センター杭より南側の調査を終了する。これによって東端より西に向かって調査をすることにする。

10月22日　町道下のVF－1住居址の調査について、道路を切り替える等の対策をして可能な限り調査することとしたが、借地をせずに道路を切り替えることは困難であった。道路から同住居址床面までの深さは20～30cmであることから、重機を利用して道路を掘り、通行する車がきた場合は長板を敷いて通す方法が考えられ、10月28日に調査することとなった。

10月25日　桂平遺跡の現地説明会を行う。参加者約80名。

10月31日　空中写真撮影を行う。VIIC－1住居址の実測を最後に野外調査を終了する。

〔2〕調査方法

（1）グリッドの設定（第3図）

グリッドのメッシュは公共座標の軸線に合わせた。グリッドは桂平遺跡と沼久保遺跡を包含する単一のものとした。グリッドは一辺を30mとする大グリッドを設定し、更にそれを10等分し3m四方の小グリッドを設定した。グジッド設定の原点は調査区の北東、安比川畔の調査区内の任意の一点をとり、その点から公共座標に合わせてメッシュを組んだものである。その最初に設定した軸線はE－240、S－120である。以上の操作により得られたグリッドに対して、原点より東へ向かってⅠ・Ⅱ・Ⅲ……、南へ向かってA・B・C……と命名し、グリッド名はその組み合わせによりⅠA・ⅡB……のごとく呼称した。小グリッド名も同様の方法で呼称したが、数字は0から9までの算用数字を、アルファベットはaからjまでの小文字を使用した。桂平遺跡は、東西のメッシュはⅤ～Ⅺ、南北はB～Fに位置することとなった。したがって設定されたメッシュの経線（Y軸）は真北方向を指す。

（2）粗掘り

昭和59年度はすべて手掘りによって実施したが、60年度はⅤ～Ⅶ区は手掘り、その他は重機を使用した。Ⅵ～Ⅶ区の手掘りは遺物が集中的に出土したためである。

（3）遺構検出と遺構の命名

遺構検出は大グリッドごとに進めた。輪郭がやや不明瞭な遺構は検出直後に石灰を使用して枠どりを行った。遺構名は大グリッドごとに命名した。命名は住居址と焼土遺構のみを区別し、他の遺構は一括して連番を付した。命名は検出直後に行われたため、精査により遺構にならなかったものは欠番とした。

（4）精　査

住居址は4分割、その他の遺構は2分割によって精査することを原則とした。遺構内から出土した遺物は必要に応じ実測や写真撮影した後取り上げた。遺物の洗浄は野外調査と併行して現場で行った。

（5）実　測

遣り方実測によって行い、一部は平板実測も併用した。実測は作業員と調査員が担当した。実測の指示、点検は調査員が行った。柱穴やカマド等は1/10、その他は1/20の縮尺を原則とした。土層注記はすべて調査員が行った。

（6）写真撮影

写真は6×7判1台（モノクロ）と35mm判2台（モノクロ、カラーソバーサル）を使用して撮影した。撮影に当っては撮影カードを使用した。遺構写真はすべて調査員が、遺物写真は当センターの撮影技師が担当した。遺物写真は35mm判モノクロのみを使用した。

〔3〕整理方法

室内整理は下記のとおり行った。

昭和59年11月1日～60年3月31日　●遺構図面の点検、合成、第2原図作成
　●遺物注記、復元、実測、トレース、写真撮影

昭和60年11月1日～61年3月31日　●遺構図面の点検、合成、第2原図作成、遺構図面台帳作成
　●遺物注記・復元、実測、拓本、トレース、写真撮影
　図版作成、遺物台帳作成、本文執筆

（1）遺構図版

遺構配置図は野外調査時に作成した個々の遺構図面を合成し、縮少したものである。各遺構図面は1/40を原則とし、各図版ごとにスケールを付けた。方位は遺構の中央又は左肩に付けた。方位は真北をさす。平安時代の住居址はカマドの位置が上にくるように、溝状の陥し穴は横位とし、その他の遺構はセクション面が水平になるようにした。また、図版中に使用したスクリーントーンは凡例に示したとおりである。遺構名は野外調査時に使用した遺構名を用いることを原則としたが、陥し穴のみはその他の遺構群の中から区分し、「陥し穴」とした。

（2）遺物図版

土器は円周の1/4以下が残存している場合は拓影又は平面実測、1/4以上1/2以下の場合は反転実測、1/2以上の場合は側面実測をした。器表面の文様及び調整痕は全又は1/2を、地文は最大幅の1/4のみを表現した。成形痕（ロクロ痕、巻き上げ痕等）は1/2を表現した。遺物の欠損面は白抜きを原則とした。剥片石器は1/2、礫石器及び土器は1/3に縮少した。特殊な遺物は適宜縮尺を変え、そのつど縮尺率を表示した。その他作図の表現法及びスクリーントーンの使用法は凡例に示したとおりである。

（3）写真図版

遺構の写真は縮尺不定である。遺物の縮尺は遺物図版に準じた。また、遺構・遺物とも掲載された図版の中から更に選択して掲載した。

（4）遺物番号

遺構内より出土した遺物は遺構ごとに、遺構外の遺物は出土地点に関係なく一括して各図版ごとに連番を付した。また、記述にあたっては図版番号を頭に冠したが、図版番号が明瞭な場合は省略した。

〔凡　例〕

石・礫……　S

土　器……　土器

柱穴，ピット……　P_1、P_2

炭化材……

調査区外……

地　山……

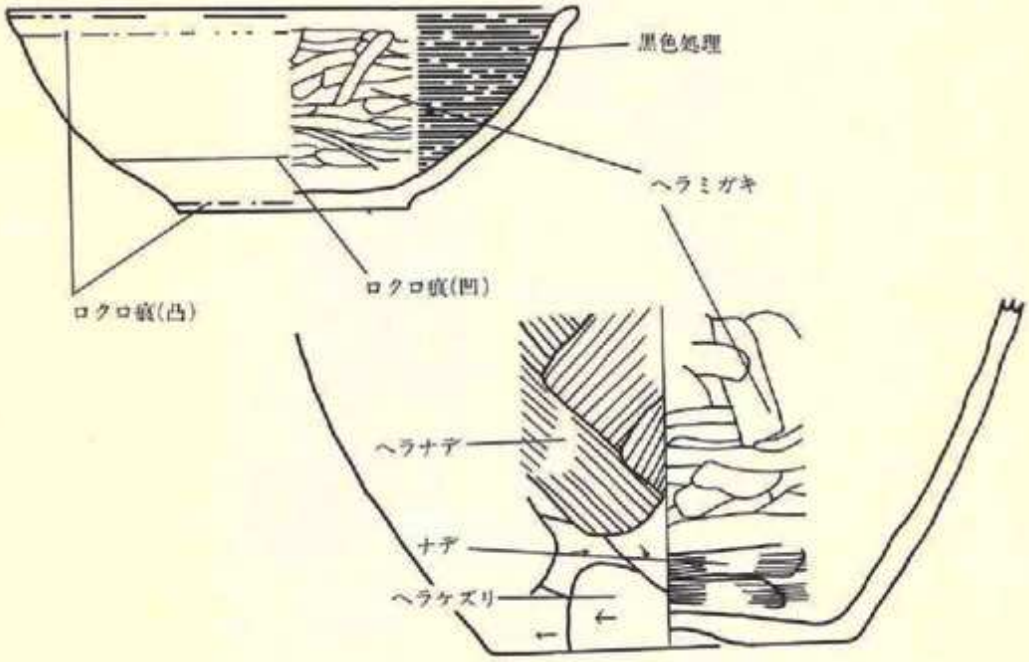
焼　山……

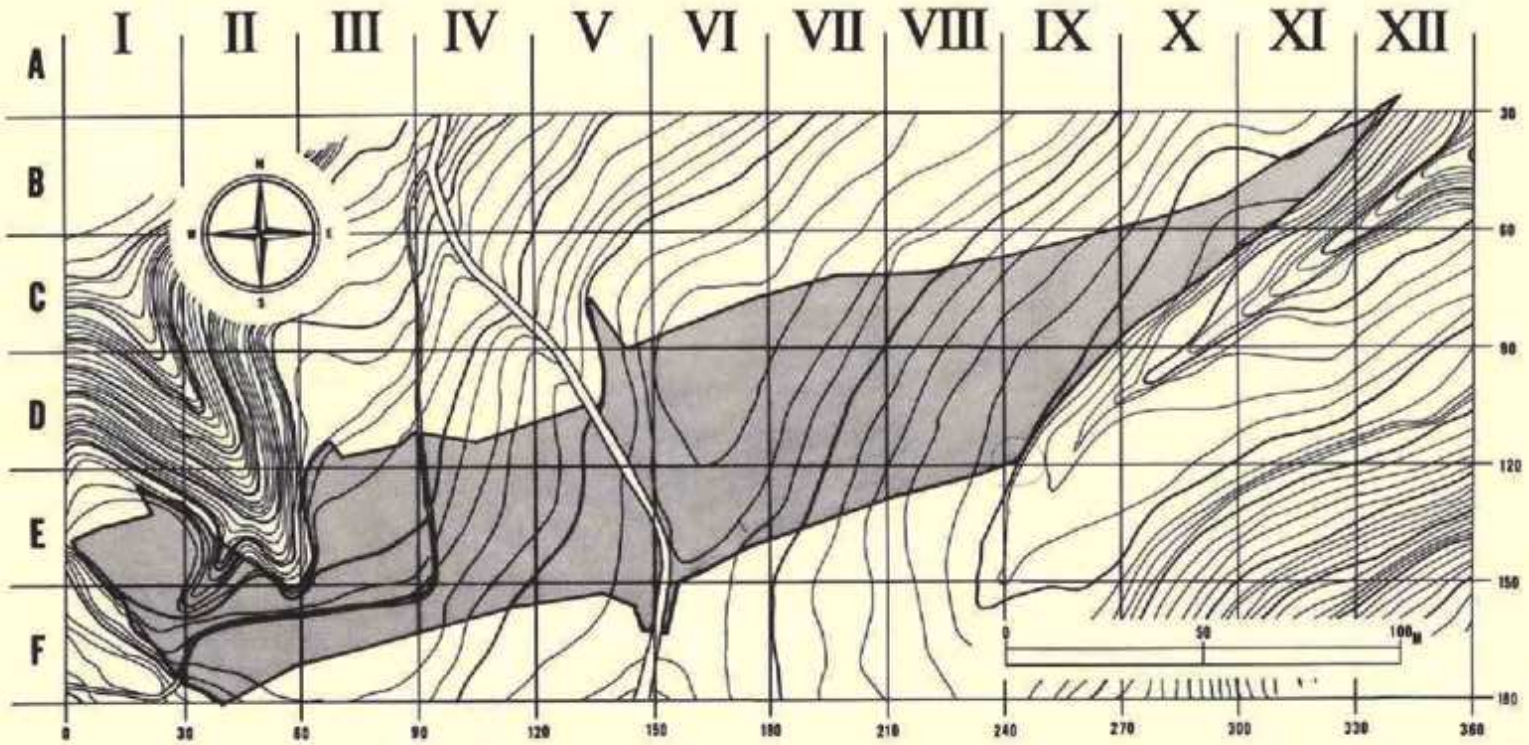
褐色土……

撹　乱……

貼り床……

炭化物（粉炭）……




I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
A
B
C
D
E
F
0
30
60
90
120
150
180
210
240
270
300
330
360
30
60
90
120
150
180
0
50
100M

第3図　グリッド配置図

III　遺跡の環境

〔1〕地　形

桂平・沼久保の両遺跡は岩手県二戸郡浄法寺町大字御山字桂平ほかに所在する。同町は岩手県北西部に位置する。北縁は青森県田子町、北東縁は二戸市、南東縁は一戸町、西縁は安代町に接する。奥羽山脈の東側山麓の山地及び山地性丘陵からなり、平野は安比川及びその支流となる沢、小河川沿いのわずかに開析された谷底平野に限られる。町内の最高峰は西部に位置する稲庭岳（1,078m）であり、その山麓は丘陵となって東部に向かってしだいに高度を下げ、東縁は北流する馬淵川に限られる。また、南縁はその支流である安比川に限られる。町内の南半部は、安代町東端に位置する七時雨山（1,060m）及び一戸町西端に位置する西岳（1,018m）から延る山麓丘陵となっており、北縁は安比川で限られる。巨視的には二つの丘陵によって構成され、その中央部を安比川が北東に向かって町を二分する形で流れている。

平坦な地形は安比川及びその支流の流域に限られ、そのほとんどが狭い谷底平野である。段丘の発達は不良であり、小規模な段丘が丘陵の縁辺に散見できる程度である。

本遺跡は七時雨山から延びる丘陵の縁辺部にのる。両遺跡は町道によって分けられるが、町道は北～北東へ延びる尾根沿いに作られているため、桂平遺跡は尾根の頂部から東斜面に、沼久保遺跡は西斜面及び埋没谷を越えた反対側の尾根の東斜面に位置している。両遺跡を分ける尾根は標高248mである。

桂平遺跡は東～南東の緩斜面であり、東端は急速に落ちこむ沢となっている。尾根の先端部は侵食が進み薄い表土の下は硬いローム土であり、一部は露出している。傾斜も急激な角度となる。それに対して谷頭の方は極めて緩やかな斜面であるが、これは表土の黒色土が中世以降に厚く堆積した結果である。したがって古代以前は現状より急斜面であったことを窺わせる。

〔2〕遺跡の立地の現況

本遺跡は上記の丘陵地に立地する。本遺跡は尾根沿いに広がりをもっているが、南側の山沿いの範囲は不明である。本遺跡での生活用水の供給源は、本調査区の南約150mに位置する湧水である。水量は多くはないが年中枯れることはない。尾根の頂部は風も強いが、西風のため斜面の中位以下は弱い。年平均気温は10°Cに達せず冷涼で、降水量も少ない。

遺跡の現況は畑地である。尾根の北側は植林され、南側は果樹園として利用されている。畑作物は一時ゴボウ等の根菜も作られたが、大豆・陸稲・タバコ等の比較的根張りの小さな作物が作られている。

〔3〕基本層序

調査区の2箇所（IXC区とVIIIE区）において土層観察用トレンチを入れた。観察地点により層厚に差があったり、一部の層が欠落したりするが、層の逆転は見られない。以下各層の要約と模式図を示す。なお、土層名は上位からローマ数字でⅠ・Ⅱ・Ⅲ……とし、算用数字で表わした遺構の埋土とは区別した。また、この層序は沼久保遺跡においても同様であったため統一した基本層序のモデルを策定したものである。

第Ⅰ層　黒～黒褐色土　概ねチョコレート状の色を呈する。耕作土として使用され、乾燥しかかると白っぽくなる。砂質シルト状で水はけがよい。所により幾つかに細分される。沢に近いIX・X区では1.7m以上の堆積となるが平均的な層厚は20cm程度である。縄文土器や土師器等を若干包含する。

第Ⅱ層　黄灰白色土　白頭山火山灰。粒状のパミスである。平安時代の遺構の埋土上位から2cm程の層厚をもって検出される。遺構外からは検出されていない。

第Ⅲ層　灰白色土　十和田a降下火山灰。ガラス状でパサパサしており全く粘性を欠く。平安時代の遺構からは貼床を構成する土や埋土下位にブロック状あるいは層状に検出される。雨裂跡のように凹地跡や沼久保遺跡の埋没谷では検出されるが、概ね遺構外からは検出されない。

第Ⅳ層　暗褐色土　沼久保遺跡のⅠE区においてのみ観察される。遺物包含層である。

第Ⅴ層　黒色土　粒径2～5mmの浮石粒が混入する。大多数の遺構の埋土を構成する。

第Ⅵ層　灰白色土　中振浮石、上位は粉状、下位は砂状を呈する。純粋な層として残っているのは数少ない。その場合でも層厚は平均数センチである。

第Ⅶ層　黒褐色土　シルト質で粒径2～5mmの黄褐色・赤褐色・灰白色等の浮石が混入する。遺跡の全面を覆い、上位で古代～縄文時代の、下位で縄文時代の遺構検出面となる。

第Ⅷ層　褐色土　0.3～0.5cm大の礫、下位赤褐色のパミスを若干含む。斜面の上位では流失するが、中下位では2～4cmほどの層厚でほぼ全域に見られる。

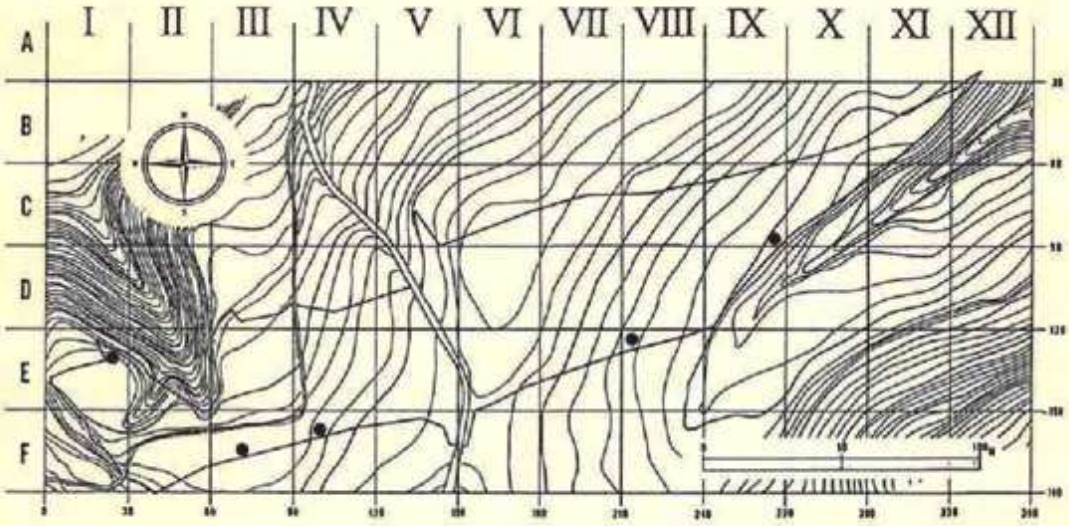
第Ⅸ層　赤褐色土　粒径0.2～0.5cm大のパミスである。全く粘性を欠く。Ⅷ層と同様の分布状況を示す。残存している所ではほぼ純層と考えられる。層厚は3cmほどである。

第Ⅹ層　褐色土　本遺跡ののる丘陵を構成する基盤層で全域に分布する。本層より下位に明褐色土の粘土層や浅黄色砂質土等がくるが、詳細な観察は省略した。八戸火山灰である。

I	黒 ～ 黒 褐 色 土	上位は耕作土
II	白 頭 山 火 山 灰	
III	十和田 a 降下火山灰	
IV	暗 褐 色 土	沼久保遺跡A区にのみ検出
V	黒 ～ 黒 褐 色 土	遺構の埋土
VI	中 撹 浮 石	土師・縄文検出面
VII	黒 褐 色 土	縄文検出面
VIII	褐 色 土	
IX	赤 褐 色 土	遺構の壁及び床
X	褐 色 土	

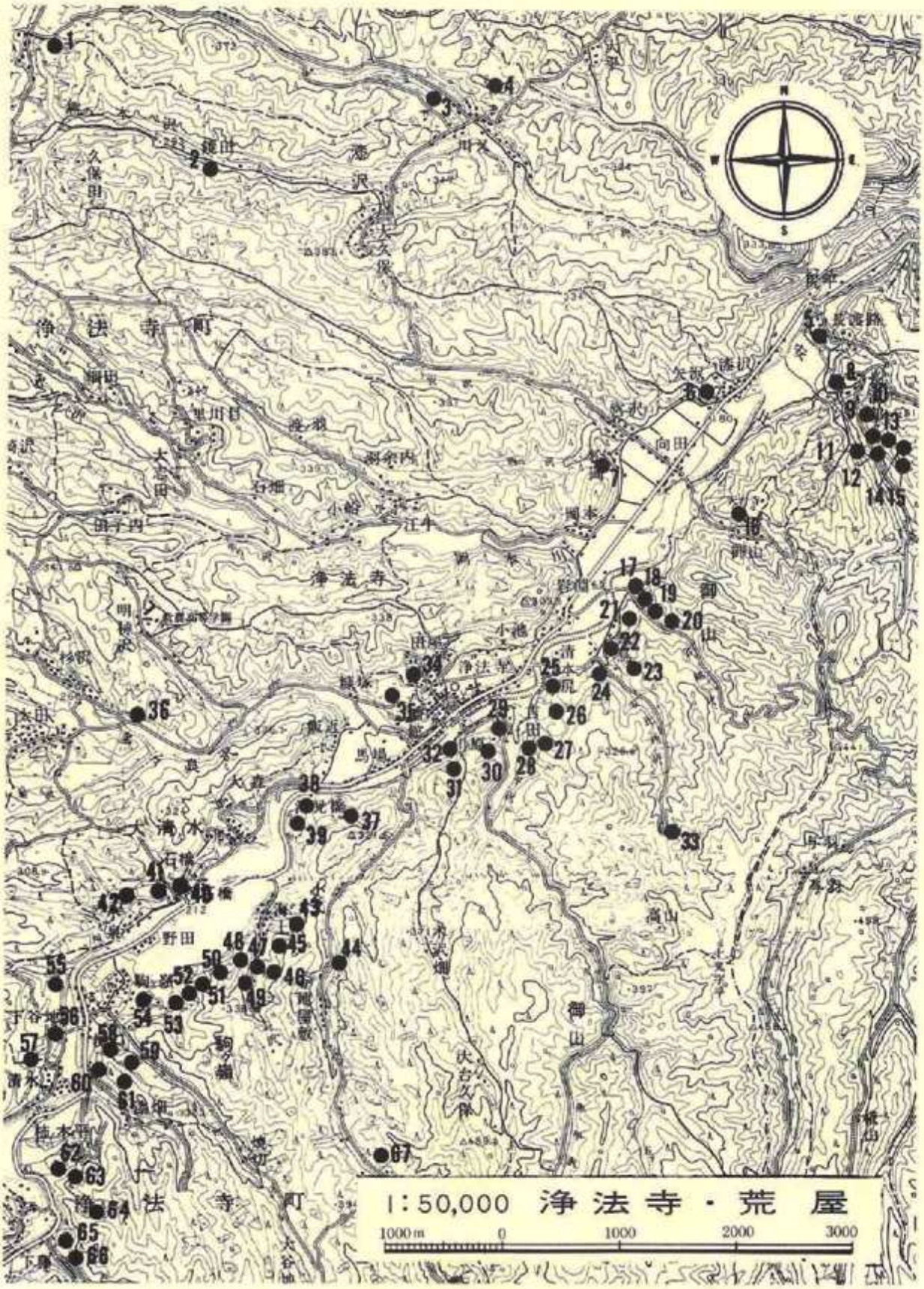
↑遺物包含層↓

※層厚不定につき層間の縮尺は不定



● 基本層序観察地点

第4図　基本層序模式図と土層観察用トレンチの位置



第5図　浄法寺町内遺跡分布図

第1表　浄法寺町遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物等	備考
1	馬洗場	散布地		
2	鍛田	集落跡	土師器	
3	川又館	館跡		
4	川又古墳	古墳		
5	漆沢館	館跡		
6	長渡路館	〃		
7	松岡館	〃		
8	上野 I	散布地	縄文前期末	
9	〃 II	〃	縄文	
10	〃 III	集落跡	縄文前期～後期	
11	〃 IV	〃	縄文後期	
12	〃 V	〃	縄文後期・晩期	
13	〃 VI	〃	縄文晩期	
14	〃 VII	散布地	縄文	
15	〃 VIII	〃	縄文後期	
16	天台寺跡	寺院跡		浄法寺教委、天台寺跡ほか
17	広沖	集落跡	縄文前・後・晩期・土師器	岩文埋報111集
18	名越 I	散布地	縄文前～後期・土師器	
19	飛鳥台地II	〃	縄文・土師器	
20	名越 II	〃	縄文後期	
21	飛鳥台地I	集落跡	縄文後期・土師器	
22	安比内 I	〃	縄文後期・晩期・土師器	岩文埋報106集
23	〃 II	散布地	縄文	
24	館	集落跡	縄文後期・晩期	
25	吉田館	館跡・集落跡	縄文中～晩期・塚・土塁	
26	大久保 I	集落跡	縄文後期・晩期・土師器	岩文埋報90集
27	〃 II	散布地	縄文前期	
28	〃 III	〃	縄文後期・晩期	
29	大手	集落跡	土師器	
30	桂平	〃	縄文後期・土師器	岩文埋報110集
31	沼久保	〃	縄文前・後期・土師器	岩文埋報109集
32	大坊	散布地	縄文後期・晩期	
33	飛鳥	〃	縄文後～晩期・石偶	
34	上外野	集落跡	土師器・須恵器	
35	浄法寺城	館跡		
36	明神沢	散布地	縄文晩期・石鏃	
37	馬場向 I	〃	縄文後期	
38	〃 II	〃	縄文後期・晩期	
39	〃 III	〃	縄文前～中期	
40	大森館	館跡		
41	大泉館	〃		
42	小泉	散布地	縄文	
43	海上 III	〃	縄文後期・晩期	
44	小又	〃	縄文中・晩期・石鏃	
45	海上 IV	〃	縄文後期・晩期	
46	山根	〃	〃	
47	海上 V	〃	〃	
48	〃 II	〃	〃	岩文埋報90集
49	前谷地	〃	縄文中～晩期・土師器	
50	海上 I	〃	縄文後期・晩期・土師器	岩文埋報90集
51	五庵 II	集落跡	縄文・弥生・古代・中近世	岩文埋報94集
52	〃 III	〃	縄文・弥生・土師器	
53	〃 I	〃	縄文後～晩期・土師器	岩文埋報97集
54	駒ヶ嶽館	館跡		
55	大清水館	〃		
56	下谷地	散布地	縄文後期	
57	大清水	〃	縄文後期・石鏃・石剣・土偶	
58	田余内 I	集落跡	縄文・土師器・須恵器	岩文埋報105集
59	〃 II	散布地	縄文・土師器	岩文埋報105集
60	漆畑	〃	縄文前期末	
61	田余内 III	〃	縄文後期・晩期	
62	柿ノ木平館	館跡	空堀・土塁	
63	柿ノ木平 I	散布地	縄文後期・晩期	
64	〃 II	〃	縄文	
65	〃 III	〃	縄文中～晩期	岩文埋報89集
66	〃 IV	〃	縄文	
67	沼久保 II	〃	縄文中・晩期・石鏃	

※本表は文化課の遺跡台帳を基本に、昭和60年度末時点で調査された遺跡を加えて作成したものである。

〔4〕周辺の遺跡

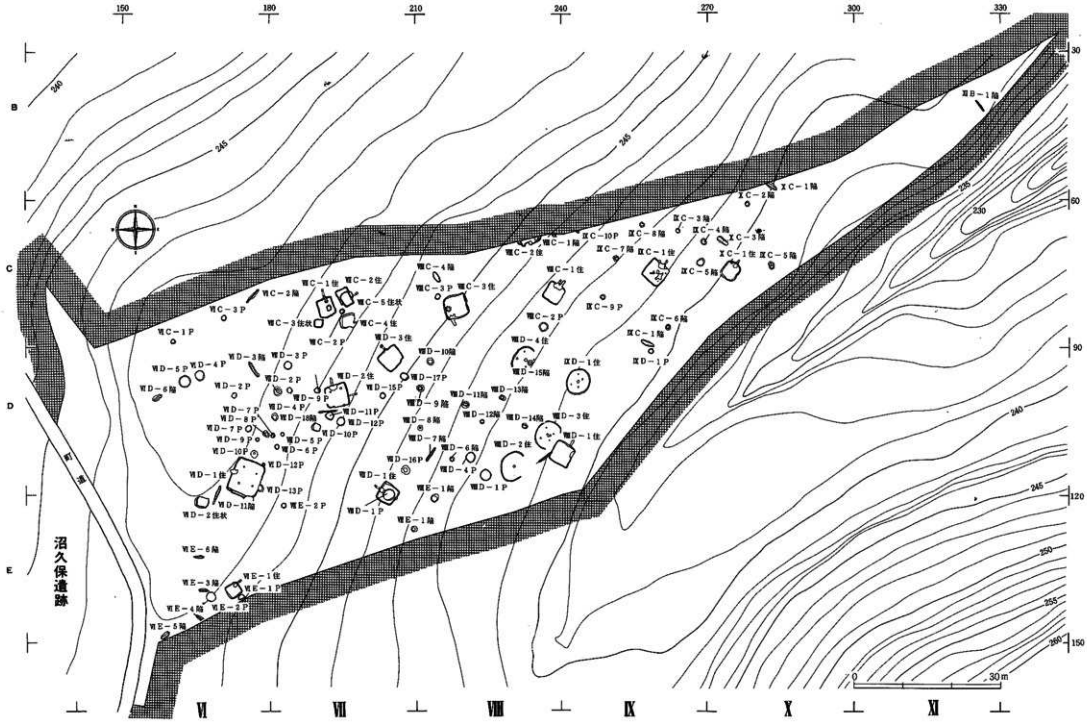
岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳に登録されている浄法寺町内の遺跡数は72箇所となっている。時期別にみると縄文時代後・晩期が圧倒的に多い。また、土師器（平安時代が多いと思われる）も12遺跡から出土しており、うち8遺跡は縄文時代と複合する。これらの遺跡は安比川流域に集中しているが、これは同地帯を集中的に調査したためであり、他地域も詳細に調査すれば相当の広がりをもって遺跡数が増加すると考えられる。上記の台帳に登録されている城館は12遺跡であるが、更に23遺跡が確認されている。しかも、その分布は安比川流域に限定されるわけではない。今後の分布調査に期待するところが大きい。

町内の遺跡のうちこれまでに発掘調査されたのは戦前に小田島禄郎氏が行った2遺跡を含め[註1]17遺跡である。しかし、本格的な調査は大正5年（1916）赤塚治持氏が行った「土踏まずの丘」[註2]から始まる天台寺の発掘調査と当センターが東北自動車道関連遺跡として行った14遺跡がその主体となっている。

天台寺は寺伝によると神亀5年（728）行基によって創建されたといわれている。その真偽は別としても、明治3年の廃仏毀釈に名をかりた一団の暴徒により仏像、堂宇の大半を破壊され、更に昭和28年から3年間にわたって一山に林立していた樹令1,000年ともいわれる杉の大木1,200本がことごとく切られるという災過に遭い、今はその信仰とともに寺運も衰退してしまったが、浄法寺町の歴史を考えるうえでは重要な位置を占めていることにはかわりはない。天台寺の創建年代が平安時代末まで遡る可能性を指摘したのは、昭和45・47年の板橋源岩手大学教授であるが[註3]、昭和54年に高橋富雄東北大学教授を中心に発足した天台寺研究会においても、同様の可能性を指摘している[註4]。このことから平安時代の遺跡を考えるうえでは当寺の存在も考慮におく必要があると思われる。

当センターが発掘調査をした遺物は14遺跡で、既に報告書が刊行されたのは昭和60年12月末現在4遺跡で、昭和62年度には全遺跡の報告書が刊行される予定となっている。これらの詳細な内容は各々の報告書を待つことになるが、その概略をみると[註5]、住居址を検出した遺跡は12遺跡である。そのうち平安時代の住居址を検出した遺跡は80棟以上の飛鳥台地Ⅰ遺跡を筆頭に10遺跡、縄文時代後～晩期の住居址を検出したのは7遺跡となっている。これらの遺跡は安比川東岸の丘陵や台地で標高240m前後という一定の制約のもとではあるが、平安時代の遺構が多いという特徴を有している。

註1．小田島禄郎共著『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書』4及び5　岩手県教育委員会、1924・5年
2．赤塚治持『天台寺「土踏まず丘」発掘記』大正5年『岩手史学研究』31号所収
3．中村　裕『天台寺跡—第7次発掘調査概報』浄法寺教育委員会　1983年
4．高橋富雄「天台寺研究の現状と課題」天台寺研究会　1980年（『天台寺研究』創刊号所収）
5．『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩手県埋蔵文化財センター　1984・5年



第６図　桂平遺跡遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は住居址及び住居址状遺構は21、陥し穴36、ピット39、焼土遺構7である。時期別にみると住居址及び住居址状遺構は縄文時代が4棟で他は平安時代と思われる。陥し穴は時期不詳のものが大半であるが、形状や埋土、検出状況等から考えると一部を除いて大部分は縄文時代に属すると考えられる。ピットは、埋土や形状から明らかに古代（平安時代）と思われるもの16基、縄文時代と思われるもの14基、時期不明のもの9基となる。焼土遺構は全て時期不明である。住居址及び住居址状遺構については時期別に記述し、他の遺構については一括して述べることにする。

遺物は一部の縄文土器が遺構外から出土したが、大半は遺構内から出土したものである。遺構内から出土した遺物については遺構ごとに、他は出土地点に関係なく一括して取り上げた。また、個々の遺物の観察は一覧表に記した。以下、項目に従って詳述する。

〔1〕縄文時代の竪穴住居址と出土遺物

縄文時代に属する竪穴住居址は4棟検出された。これらはすべてⅧD区及びⅨD区からまとまって検出されたもので、相互に大きな時期差は考えられないものである。出土遺物は少ないがいずれも床面から出土した土器を有している。

ⅧD－2住居址

本住居址は、斜面下位側の一部の壁が不明瞭である。また、東壁は調査の不備により不明であり、明瞭なプランを把握できない。出土遺物は少ない。

遺構（第7図、第2表、写真図版4）

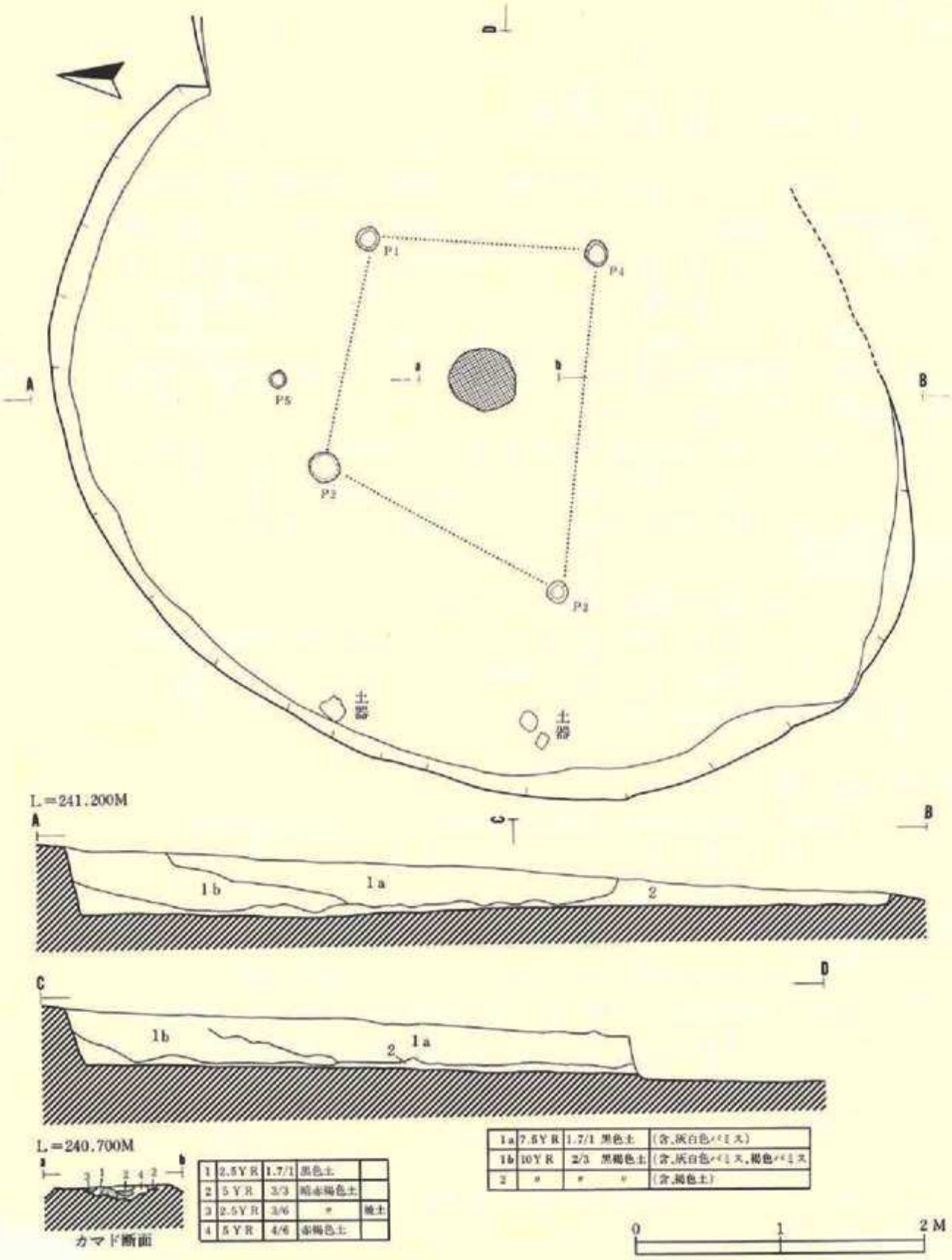
（位置）本住居址は沢に面した南東斜面下位に位置する。床面の標高は240.6mで沢までの距離は約15m、沢からの比高は2～3mである。東側6mでⅧD－3住居址に接する。

（埋土）2層に大別される。1層は黒色土に灰白色の粒状パミスが含まれる。同層には褐色土粒も含まれているが、その割合によって更に2層に細分される。自然堆積である。なお、本埋土の上にのる表土（耕作土）は15cmほどの層厚である。

（平面形・規模）壁の一部が不明のため詳細は不明である。長軸6.3m、短軸5mの楕円形と思われる。

（壁）壁の高さは北壁で最大の63cmを測る。斜面下位の一部は流失する。ほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。

（床）水平、かつ平坦である。特に硬く締まっている所はない。



1	2.5YR	1.7/1	黒色土	
2	5YR	3/3	暗赤褐色土	
3	2.5YR	3/6	〃	焼土
4	5YR	4/6	赤褐色土	

1a	7.5YR	1.7/1	黒色土	(含,灰白色パミス)
1b	10YR	2/3	黒褐色土	(含,灰白色パミス,褐色パミス
2	〃	〃	〃	(含,褐色土)

0 1 2M

第7図　Ⅷ D－2 住居址

（柱穴）4本柱である。配置は台形状となる。柱穴の深さは全て45cm以上を測るが、掘り方は不明である。

（炉）主柱穴によって区画されるほぼ中央に地床炉1基が検出された。焼土の厚さは最大5cmを測る。焼土は硬くない。

遺物（第8図、第7～8表、写真図版42）

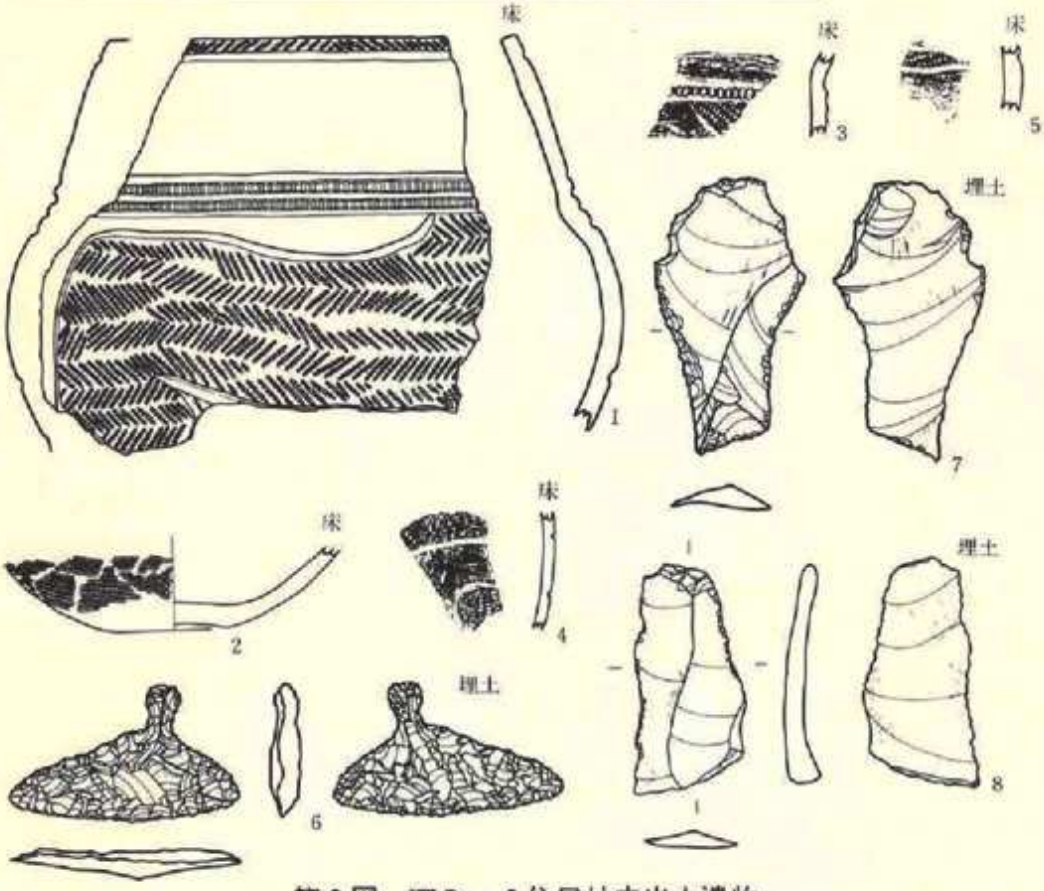
土器はすべて床面出土である。1と2は同一個体の可能性も考えられる。ともに西壁際からの出土である。6は横型石匙で完形品である。7はスクレイパー、8は加工痕を有する剥片石器である。石器は埋土内からの出土である。

遺構の時期

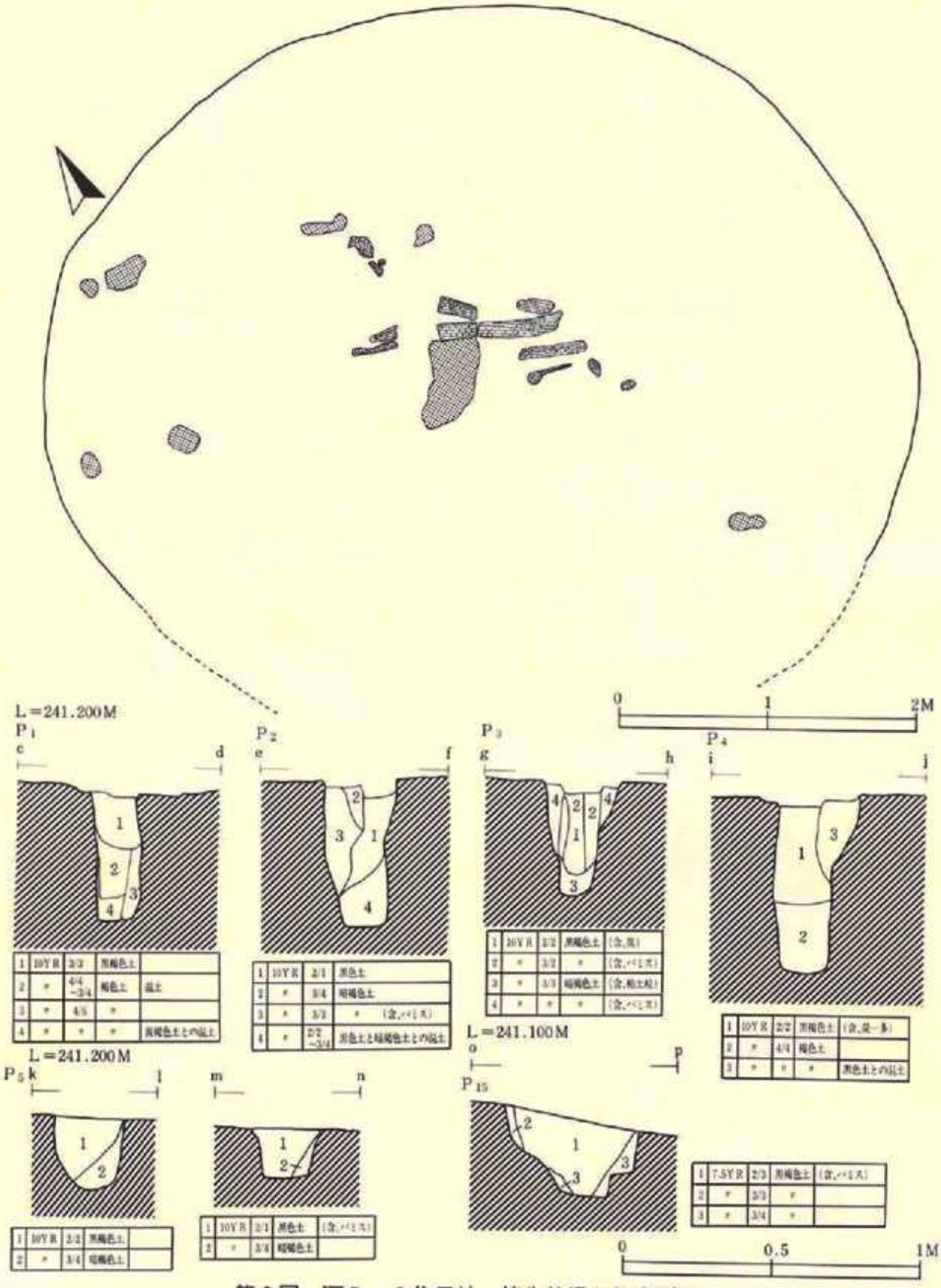
土器は本住居址に伴うと考えられる。1の土器により後期中葉と考えられる。

付表：Ⅷ D－1　住居址の柱穴規模

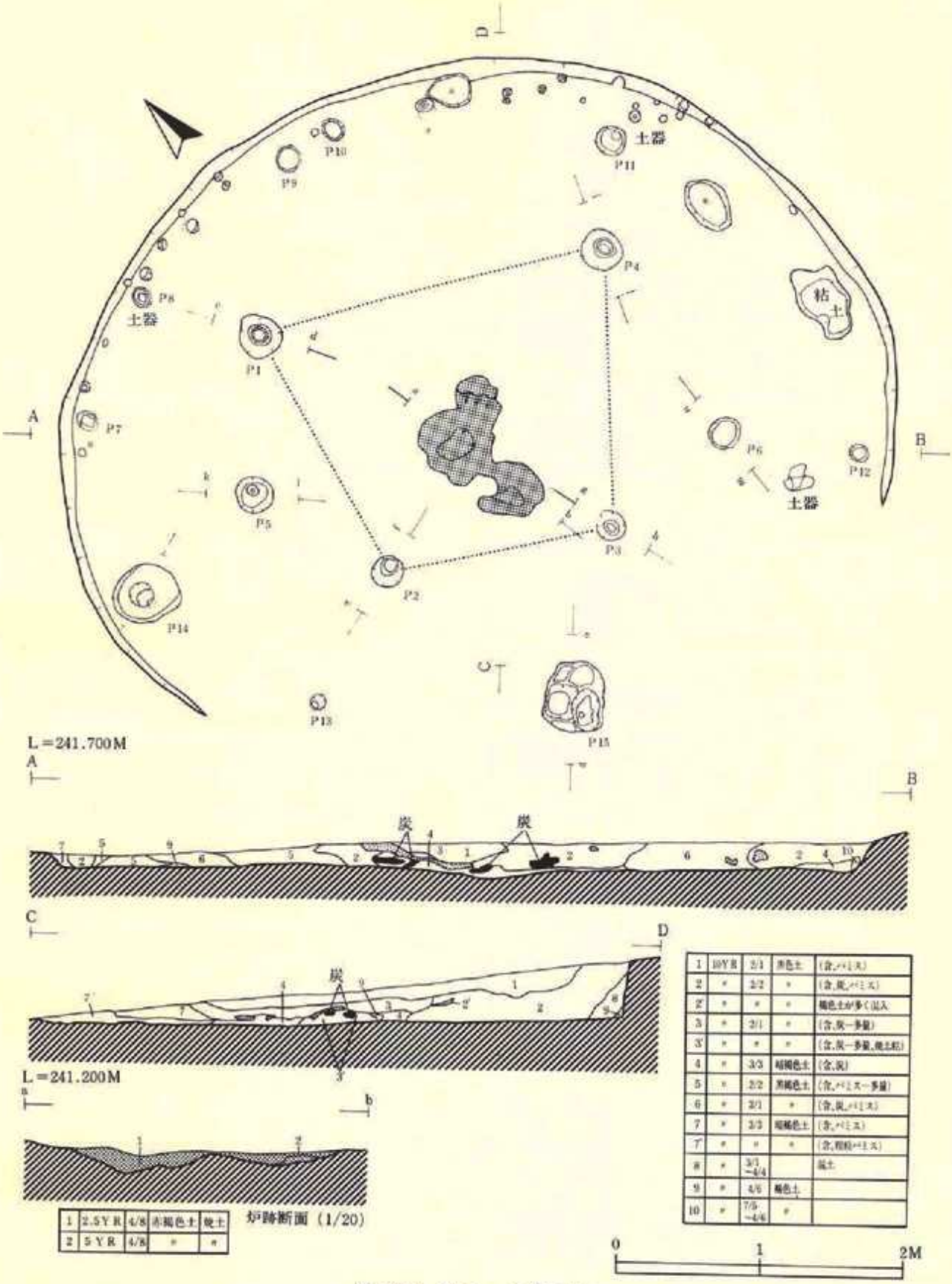
柱穴番号	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5
開口部径（cm）	32.0	40.5	30.0	32.0	20.0
深　さ（cm）	46.5	47.5	64.5	101.5	12.5



第8図　ⅧD－2住居址内出土遺物



第９図　Ⅷ D－３住居址　焼失状況と柱穴断面



1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	2/2	〃	(含,炭,パミス)
2'	〃	〃	〃	褐色土が多く混入
3	〃	2/1	〃	(含,炭一多量)
3'	〃	〃	〃	(含,炭一多量,焼土粒)
4	〃	3/3	暗褐色土	(含,炭)
5	〃	2/2	黒褐色土	(含,パミス一多量)
6	〃	2/1	〃	(含,炭,パミス)
7	〃	3/3	暗褐色土	(含,パミス)
7'	〃	〃	〃	(含,粗粒パミス)
8	〃	3/1 ~4/4		崩土
9	〃	4/6	褐色土	
10	〃	7/5 ~4/6	〃	

1	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
2	5YR	4/8	〃	〃

第10図　VIIID－3住居址

ⅧD－3住居址

本住居址は斜面下位側が一部流失しているが、柱穴、炉等が明瞭に残っており、保存状態は良好である。また、焼失の住居址ではあるが、原形をとどめるほどの炭化材や焼土は少なく、粉炭は埋土の中～下位に広く分布する。

遺構（第9～10図、第2表、写真図版5）

（位置）本住居址は南東斜面下位に位置し、床面の標高は241.1mである。ⅧD－2住居址の東側6mに位置する。

（埋土）3層に大別される。埋土中にみられる焼土粒はシルト化している。細かな粉炭が広く見られる。攪乱はみられず、自然堆積状況を示す。

（平面形・規模）斜面下位側の一部の壁が流失しており詳細は不明であるが、長軸5.5m、短軸5mの楕円形と思われる。

（壁）壁の高さは最大42cmを測る。ほぼ直線的に立ち上がる。南東壁は流失する。

（床）水平かつ平坦である。特に硬い所はないが南東床を除き比較的よく締まっている。南東床は一部流失によって不明である。

（柱穴）P_1～P_4の4本柱と思われるが、P_1～P_6の6本柱の可能性もある。P_1～P_4には掘り方も見られる。4本柱の配置は台形状で、斜面下位側が狭くなる。

（炉）主柱穴によって区画されたほぼ中央に地床炉1基がある。炉の中心は2箇所あるが、焼土は連続しており、二時期にわたって形成されたものか、同時期であるかは不明である。

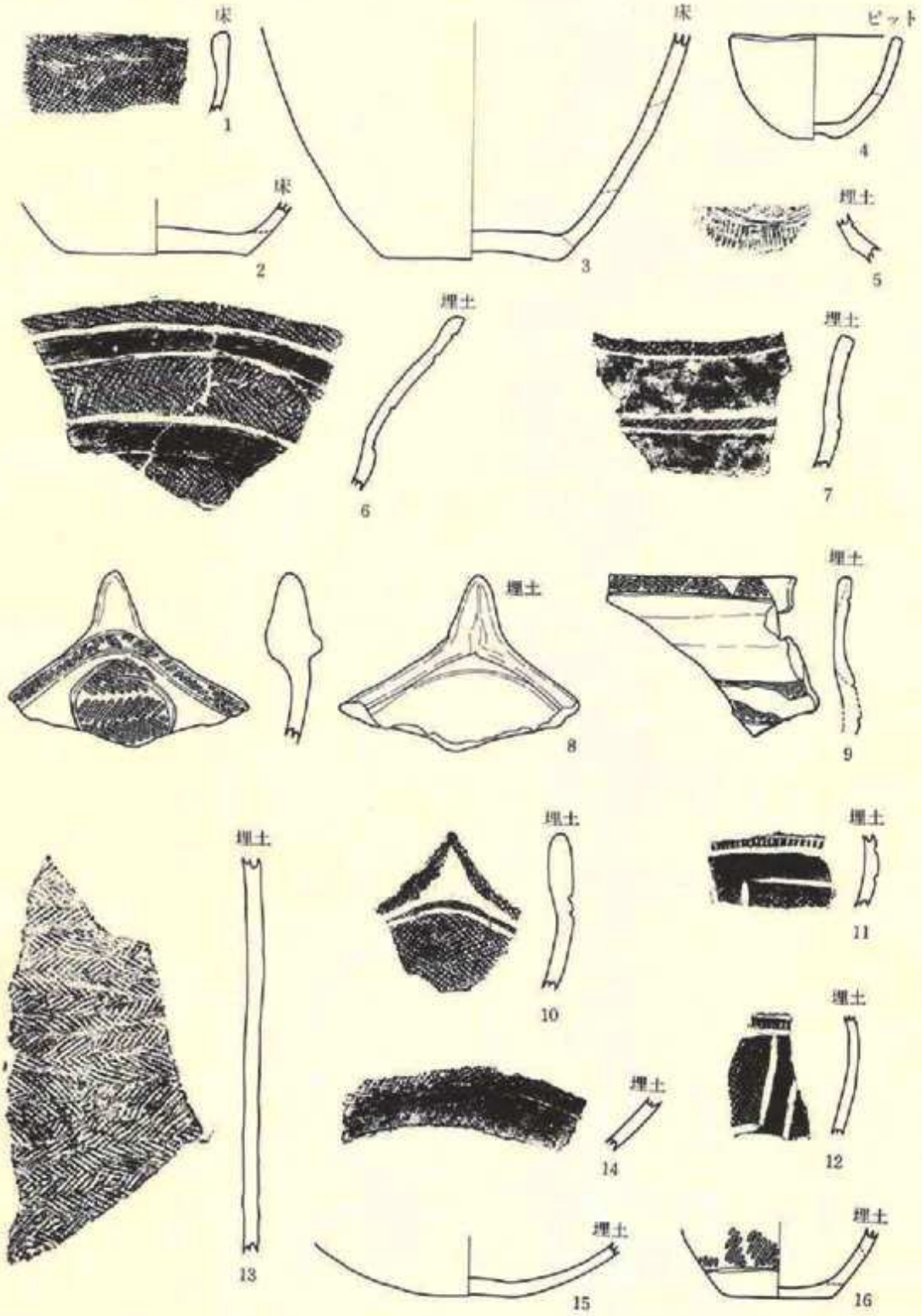
（その他）柱穴状ピットについて壁及び床が流失している南東側にP_{15}が検出された。この柱穴は2～3回の立て替えがあったと思われる。底部の凹凸がはげしい。

遺物の出土状況について　北東壁及び東側の床面から石皿が出土する。いずれも磨耗しており使用痕は明瞭であるが、器面が凹む程にはなっていない。また、ともに加熱を受け黒色化及び赤色化している。東壁際の床面には50cm×30cm×5cmほどの粘土と若干の砂が出土した。これは出土状況からみて、人為的に持ち込まれたものと考えられる。4の小鉢はP_{11}のピットの底部から正立の状態で出土したものである。埋置されたものと考えられる。

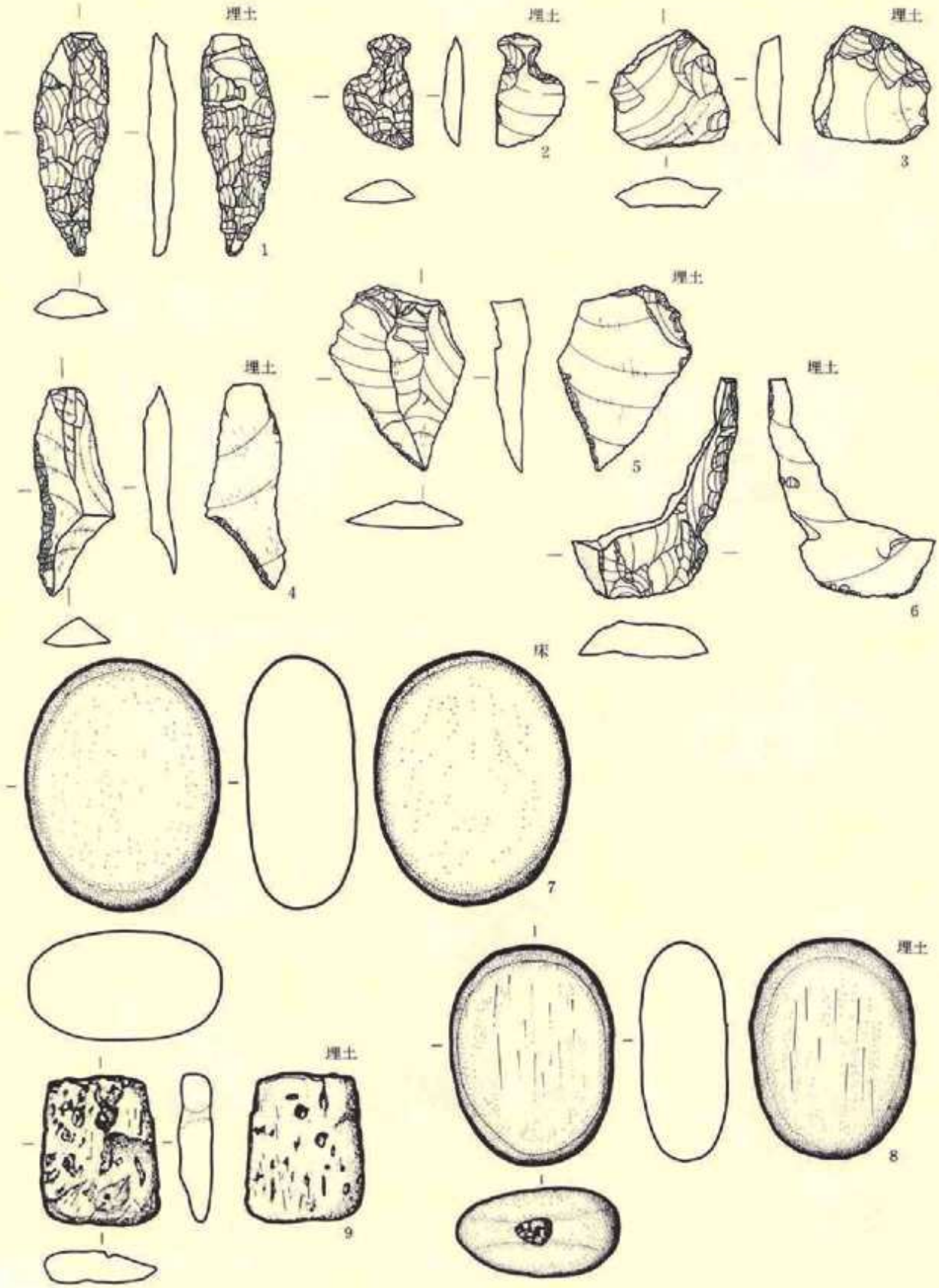
遺物（第11～13図、第7～8表、写真図版42～43）

（土器）1～3は床面から出土する。4はP_{11}の底部から、5はP_{12}の埋土上位から出土する。11と12、14と15は同一個体の可能性が強い。4のみが完形品で、他はすべて破片である。1と8は口縁部内側を肥厚させている。2～4、15はヘラミガキを施したのみである。1、6、8、10～14はRLとLRを交互に施文し羽状縄文としている。

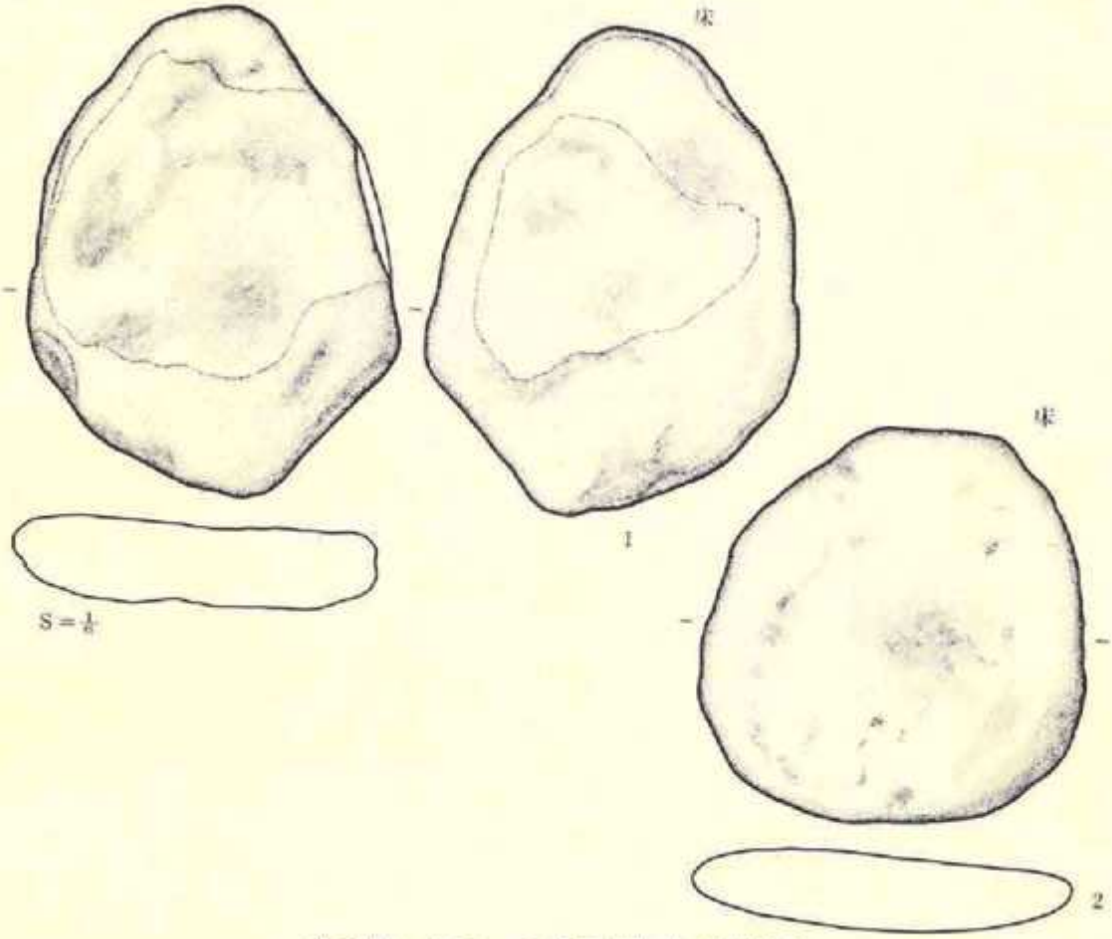
（石器）12－7、13－1、2は床面、他は埋土内からの出土である。12－1は2片、12－6は3片が接合したものであるが、どちらも一部が欠損する。他は完形品である。12－1はつまみ



第11図　Ⅷ D－3住居址内出土遺物(1)



第12図　Ⅷ D － 3 住居址内出土遺物(2)



第13図　VIIID－3住居址内出土遺物(3)

が欠損した石匙と思われる。全面に調整が加えられる。12－2も縦形の石匙であるが、片面からの調整である。12－3～5のスクレイパーは両面に調整痕がみられるが、刃部形成のための調整は12－6も含めて片面調整である。12－7、8は磨石であるが、縁辺には敲打痕が見られる。12－8は加熱により一部黒色化する。12－9は浮子といわれている石製品である。中央やや上辺に寄った所に径0.5cmの孔が一つ穿たれる。13－1は両面に、2は片面に使用痕をもつ石皿である。

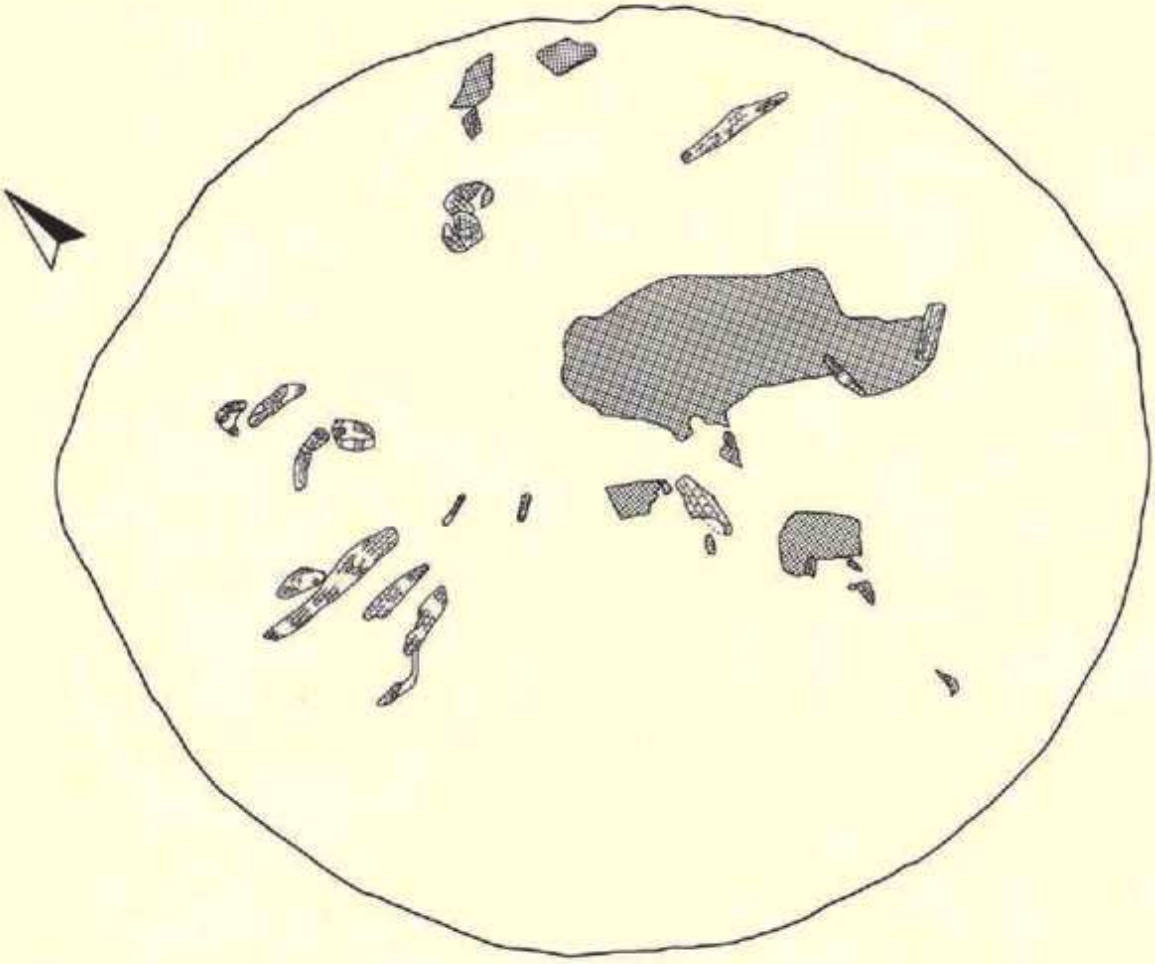
（その他）埋土上位から、アスファルトの小塊が出土する。2.2gである。

遺構の時期

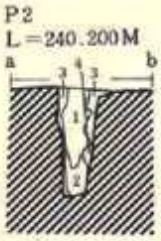
床面出土の土器や柱穴配置により、後期中葉と考えられる。

付表：IIID－3住居址の柱穴規模

柱穴番号	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}
開口部径(cm)	29	22	21	28	36	22	14	15	17	17	21	12	11	17	47
深　　さ(cm)	43	43	38	61	14	22	36	6	15	22	28	29	26	36	61

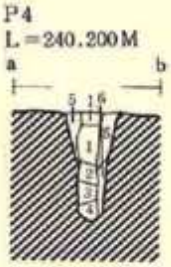


1	10YR	2/1	黒色土	(含,焼土,炭)
2	〃	4/4	褐色土	
2'	〃	〃	〃	2より赤い
3	〃	2/3	黒褐色土	炭土
4	〃	4/6	褐色土	



1	10YR	2/1	黒褐色土	(含,焼土,炭)
2	〃	3/3	暗褐色土	
3	〃	4/6 ~3/3	褐色土	
4	〃	4/6	〃	崩落土

1	7.5YR	2/3	極暗褐色土	(含,パミス)
2	〃	3/4	暗褐色土	(含,パミス)
3	〃	5/6	明褐色土	
4	〃	4/4	褐色土	(含,パミス)
5	10YR	3/2	黒褐色土	



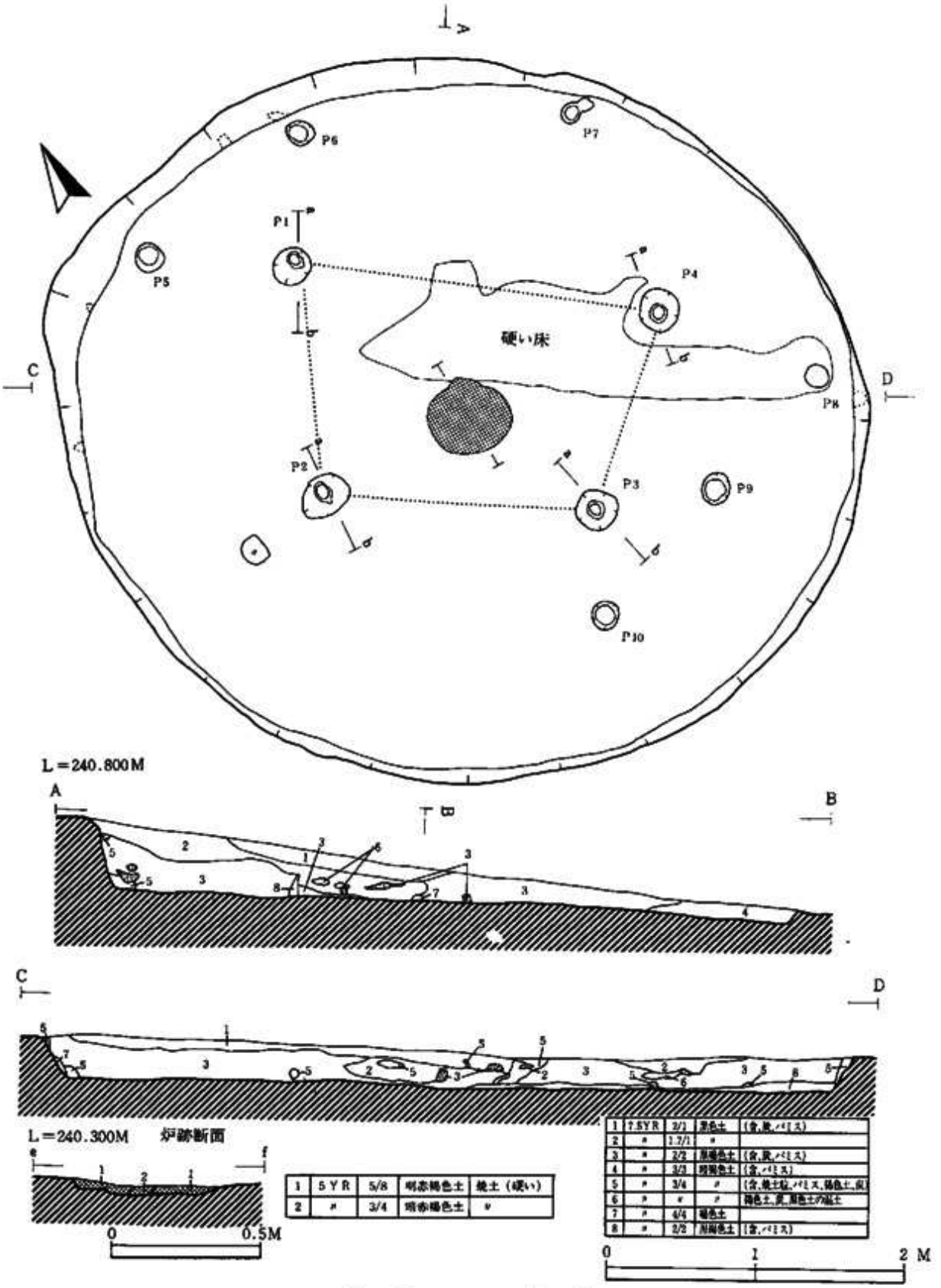
1	10YR	2/1	黒色土	(含,炭,パミス)
2	〃	3/3	暗褐色土	
3	〃	3/1	黒褐色土	
4	〃	3/4	暗褐色土	
5	〃	5/6	黄褐色土	
6	〃	4/4	褐色土	崩壊土

0 1 2M

付表：柱穴の規模

柱穴番号	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}
開口部径(cm)	24	28	26	28	19	16	13	17	21	18
深　さ(cm)	53	55	57	54	9	20	10	10	8	13

第14図　Ⅸ D－1 住居址　焼失状況及び柱穴断面



1	5YR	5/8	明赤褐色土	焼土（硬い）
2	〃	3/4	暗赤褐色土	〃

1	7.5YR	2/1	黒色土	（含,炭,パミス）
2	〃	1.7/1	〃	
3	〃	2/2	黒褐色土	（含,炭,パミス）
4	〃	3/3	暗褐色土	（含,パミス）
5	〃	3/4	〃	（含,焼土粒,パミス,褐色土,炭）
6	〃	〃	〃	褐色土,炭,黒色土の混土
7	〃	4/4	褐色土	
8	〃	2/2	黒褐色土	（含,パミス）

第15図　ⅨD－1住居址

IXD－1住居址

本住居址はVIIID－3住居址と同様に焼失住居址であり、遺構の遺存状態は良好である。規模や形態、出土遺物等もVIIID－3住居址に酷似する。

遺構（第14～15図、第2表、写真図版6）

（位置）VIIID－3住居址の北側約7mに位置し、床面の標高は240.2mである。

（埋土）4層に大別される。斜面上位側には黒褐色土が厚く堆積し、下位側は褐色土が多く混入する暗褐色土となる。中央部一帯の埋土下位には焼土粒及び炭が多量に残存している。攪乱の跡はみられず自然堆積状況を示す。

（平面形・規模）長軸5.3m、短軸4.6mの楕円形である。

（壁）壁の高さは北壁で最大値65cmを測る。北西壁の一部に崩壊が進んだ所もあるが、ほぼ直線的に立ち上がる。南壁の高さは最小値13cmを測る。

（床）南壁付近（斜面下位側）の床は若干低くなるが、有段をもつほどではなく、概ね水平かつ平坦である。北東の一部の床面は極めて硬く締まっている所が帯状に認められる。

（柱穴）P_1～P_4の4本柱である。床面のほぼ中央に台形状の配置をとる。このP_1～P_4はいずれも掘り方を有する。ただし、斜面上位の壁際に3基、斜面下位側の床にも3基の柱穴状ピットが検出されたが、これらには掘り方は見られなかった。また、主として斜面上位側の壁際に細い杭状の穴が合計11基検出された。いずれも直径4～7cm、奥行き5～7cmほどである。しかし、その向きには規則性は見られず、深さも床面又はそれより2～3cm下がる程度で、むしろ水平に近い角度である。性格等は不明である。

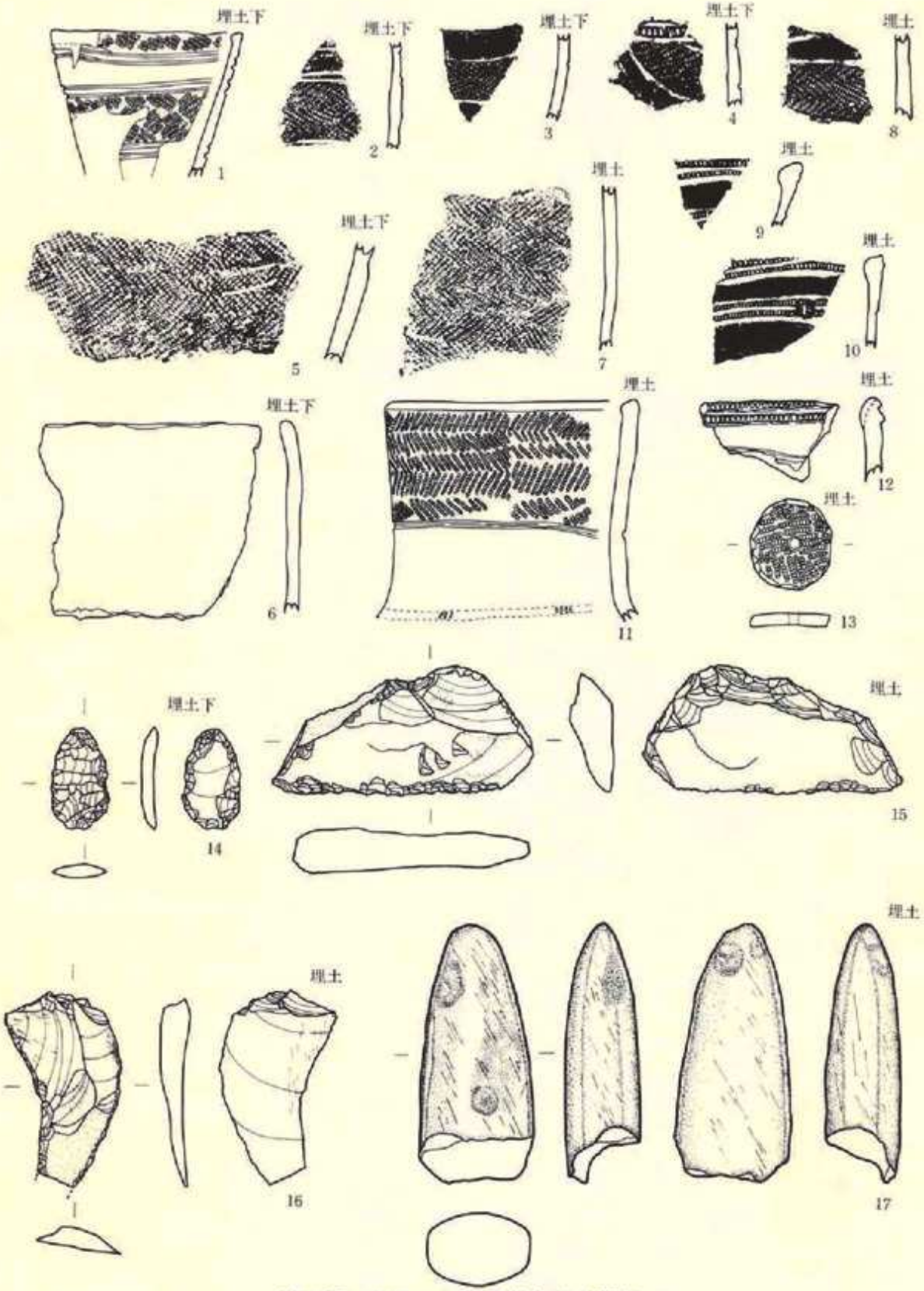
（炉）床面中央部に地床炉が一基ある。焼土は厚さ最大3cmで全体が硬い。中央部は明褐色で特に硬い。

遺物（第16図、第7～8表、写真図版44）

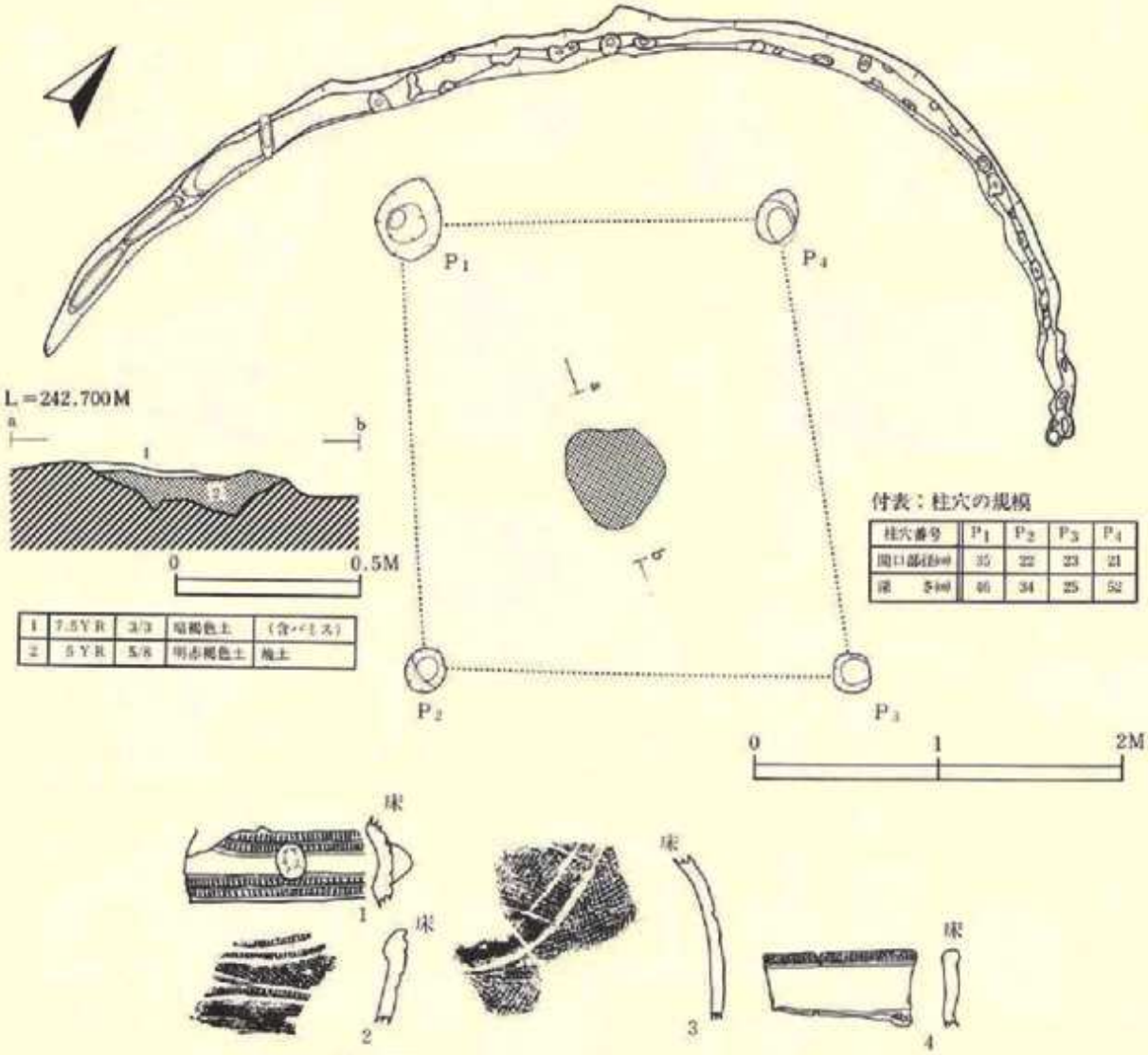
（土器）1～6は埋土下位、7～10は中位、11～13は上位から出土する。1と2、8と12、9と10は同一個体と思われる。1～4、8、11は磨消縄文、4、9、10、12は浮き彫りによる細い隆帯に細かなキザミがつけられる。9、10は破損している周辺にアスファルトを塗布している。8と12の器表面は赤色の化粧土で仕上げられている。6は無文、7、9、10、12を除く土器に使用されている地文は、すべて、LRとRLの原体を交互に施文し羽状縄文としている。12は壺の口縁部である。13は土器片を二次使用した紡錘車である。

（石器）14は埋土下位、15、16、17は上位から出土する。17のみ一部が欠損している。14は両面調整石器、15、16はスクレイパー、17は磨製石斧の基部である。14は刃部に、16は裏面の一部にタール状のものが付着する。

（その他）北壁際からアスファルトの塊が出土する。極めて純度が高い。採集した量は約70g



第16図　ⅨＤ－１住居址内出土遺物



付表：柱穴の規模

柱穴番号	P1	P2	P3	P4
開口部径cm	35	22	23	21
深　さcm	46	34	25	52

1	7.5YR	3/3	暗褐色土	（含パミス）
2	5YR	5/8	明赤褐色土	地土

第17図　Ⅷ D－4 住居址及び出土遺物

であるが、調査の不手際により一部を廃棄しており、100g以上が遺存していたものと思われる。

遺構の時期

出土した土器及び柱穴配置等により、後期中葉と考えられる。

Ⅷ D－4 住居址

本住居址の壁及び床の大部分が流失し、詳細は不明である。周溝と柱穴・炉跡により住居址と判断したものである。

遺構（第17図、第2表、写真図版7）

（位置）緩い南斜面の中位に位置し、床面の標高は242.6mである。Ⅷ D－3住居址の北西約12mに位置する。

（重複）Ⅷ D－15ピットを切っている。

（埋土）表土を除去した時点で、周囲の黒色土よりやや暗い黒色土が半円状に淡く検出された。土層観察用トレンチを入れて観察したが、壁の立ち上がりが不明であり、埋土も薄く、作図は省略した。

（平面形・規模）周溝と柱穴配置から楕円形と推定される。規模は不明である。

（壁）流失しており不明である。

（床）炉より斜面の上位側に遺存していたと思われるが、明瞭に床と認定できる所はない。埋土の黒色土直下は斜面なりに傾斜する。炉より下位側は完全に流失する。

（柱穴）P_1～P_4の４本柱で、その配置は柱間２ｍ×2.4ｍの長方形である。

（炉）柱によって区画される長方形のほぼ中央に地床炉が１基ある。焼土の厚さは最大で10cmであるが、硬くはない。

（その他）斜面上位側に幅20～15cmの周溝が回わる。深さは10cmほどであるが処々杭跡状に窪む。全体の形状は楕円形ないし不正円形である。

遺物（第17図、第７表、写真図版７）

本住居址に伴うと思われるものは図示した４点のみである。周囲から若干のフレーク・チップが出土している。出土した遺物は床面相当からの出土である。１と２は同一個体で、３もその可能性がある。１は破損した周囲にアスファルトを塗布する。しかし、補修孔は見られない。１～３は細砂が多く、器表面が著しく磨耗する。１、２、４は浮彫りによって細く薄い隆帯を作り出し、刻み目を加える。なお、１には瘤が貼付される。２、３は撚りの異なる原体を交互に施文することによって羽状縄文を作り出している。

遺構の時期

出土した遺物と遺構の状態から、後期中葉と考えられる。

〔2〕古代の竪穴住居址と出土遺物

古代に属する竪穴住居址は14棟、それに住居址状と分類されたもの3棟を加えると合計17棟が検出された。これらは遺構配置図に示すとおり、ほとんど重複することなく、適当な間隔をもって分布することから、当初は同時存在の可能性も考えられた。しかし、以下に述べるように若干の時期差が考えられる。したがって、古いと考えられる遺構群より順に詳述することとする。なお、住居址とピットとの関係も考えられるが、それらについては、V．まとめと考察の項で触れることとする。

ⅦC－1住居址

本住居址は当遺跡で最も多くの遺物を包含していた住居址の一つである。焼失住居址であり、多量の炭と焼土が出土したが、それらに混じって炭化した木器も出土した。カマドは北壁の中央に作られている。埋土に十和田a降下火山灰を含んでいる。

遺構（第18～19図、第2表、写真図版8）

（位置）尾根の頂部に位置し、床面の高さは247.1mと最も高い。東1.5mでⅦC－2住居址、南東1.5mでⅦC－4住居址にそれぞれ接する。

（埋土）黒色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に大別される。黒褐色土及び暗褐色土に十和田a降下火山灰がブロック状に混入する。埋土7の褐色土は、北西隅から南東隅へ三日月状に検出された。埋土の堆積は多少錯綜するが自然堆積と思われる。

（平面形・規模）3m×3.4mの長方形である。長軸線は北より約20度西偏する。

（壁）壁の上位はやや外反する。南壁の一部は著しく崩壊している。壁の高さは北西隅で55cmと最大になり、南東側で最小値37cmを測る。

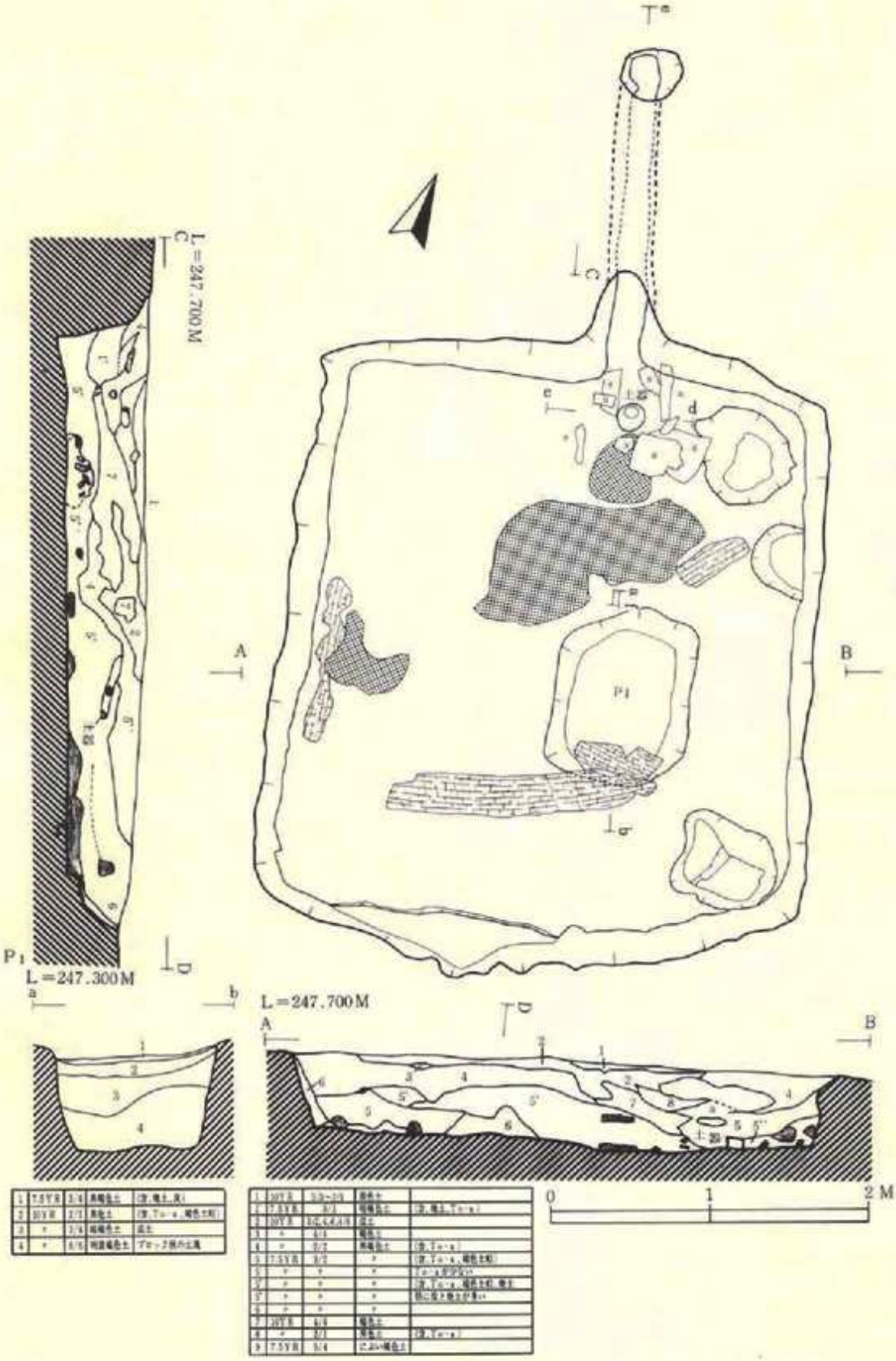
（床）水平かつ平坦である。西壁際と南側から厚さ2cmほどの板材が出土したが、これは床に密着してはいるが、敷板かどうかは不明である。カマドの東側と東壁の一部を刳貫くように小ピットが作られている。南東隅にも不整形な掘り込みが検出された。

（柱穴）なし。

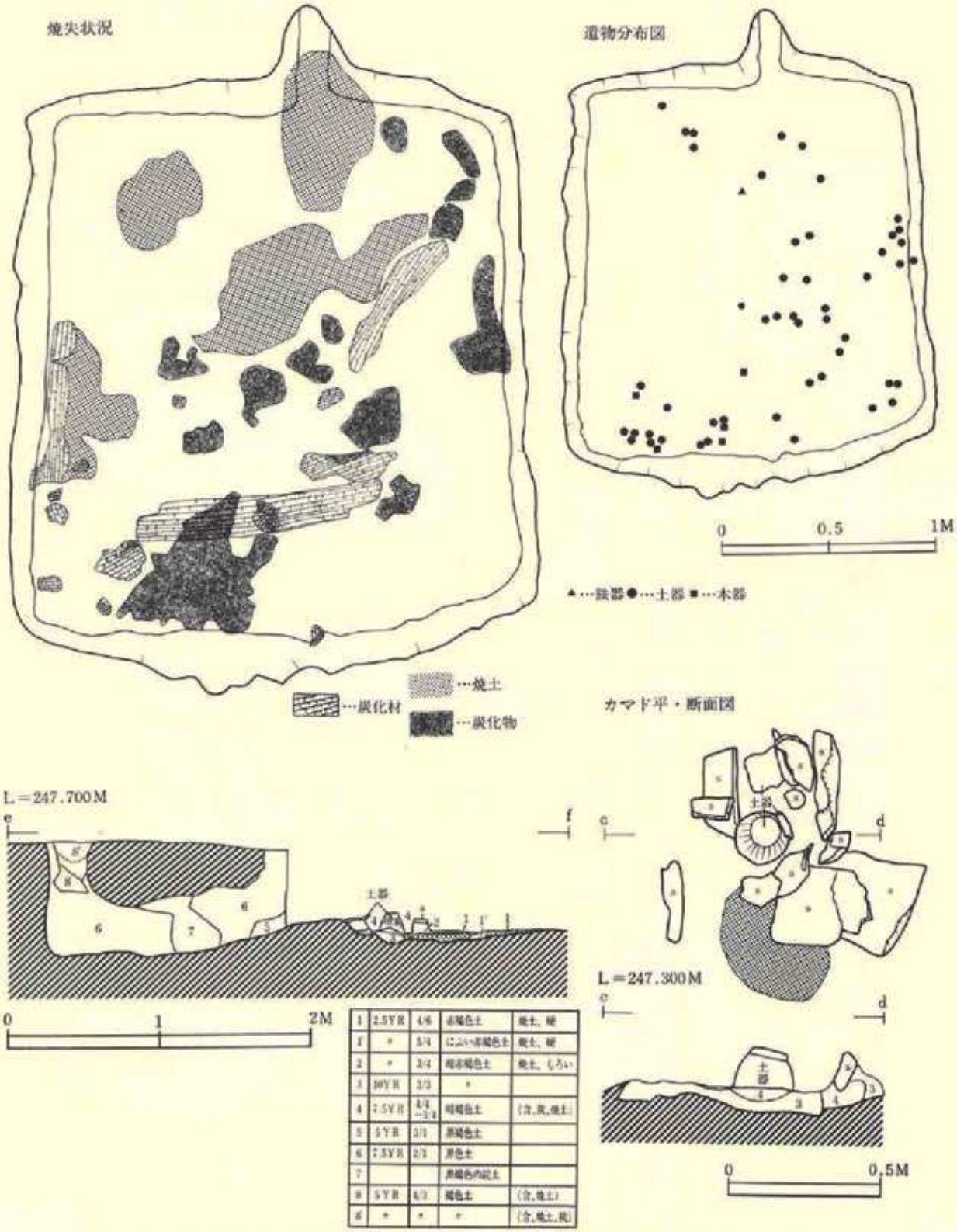
（カマド）北壁中央からやや東に寄った所に構築される。扁平な角礫を主な芯材として使用しているが、その構築土は礫のまわりに僅かに見られるのみである。他は締まりの悪いシルト状となり原形をとどめていない。カマドの中央部の奥に甕が1個倒立の状態に設置されている。支脚と思われる。焼土は板状に形成されており、燃焼部の掘り込みはない。煙道部は刳貫き式である。壁から煙出し部までは1.5mである。

（その他）○焼失状況について

埋土中に多量の焼土と炭化物を包含し、床面には広く淡い焼土が形成されている。しかし、



第18図　Ⅶ C－1 住居址



1	2.5YR	4/6	赤褐色土	焼土、硬
1'	〃	5/4	にぶい赤褐色土	焼土、硬
2	〃	3/4	暗赤褐色土	焼土、もろい
3	10YR	2/3	〃	
4	7.5YR	3/4 ～3/4	暗褐色土	(含、炭、焼土)
5	5YR	3/1	黒褐色土	
6	7.5YR	2/1	黒色土	
7			黒褐色内記土	
8	5YR	4/3	褐色土	(含、焼土)
8'	〃	〃	〃	(含、焼土、炭)

第19図　Ⅶ C－1 住居址　焼失状況、遺物分布図及びカマド平・断面図

柱や垂木の遺存状態は悪く、それらは出土範囲を記録しただけである。炭化物の材質はそのほとんどがクリであり、ミズキとホウの木が若干混じっている。

○遺物の出土状況について

第19図は遺物の出土地点を表わしたものである。これは埋土5″と5‴の層からした遺物についてのみとりあげたものである。また、一括出土の遺物は1点としているため、出土量と表の点数とは一致しない。しかし、遺物の出土地点は、東～南側に偏っている。南側の床からは炭化した木器が集中的に出土する。

○中央のピットについて

住居址中央よりやや南東に寄った所に105cm×85cmのピットが検出された。同ピットは人為的に埋め戻されてはいるが、貼り床をし突き固めてはいない。本住居址に伴うピットと考えられる。

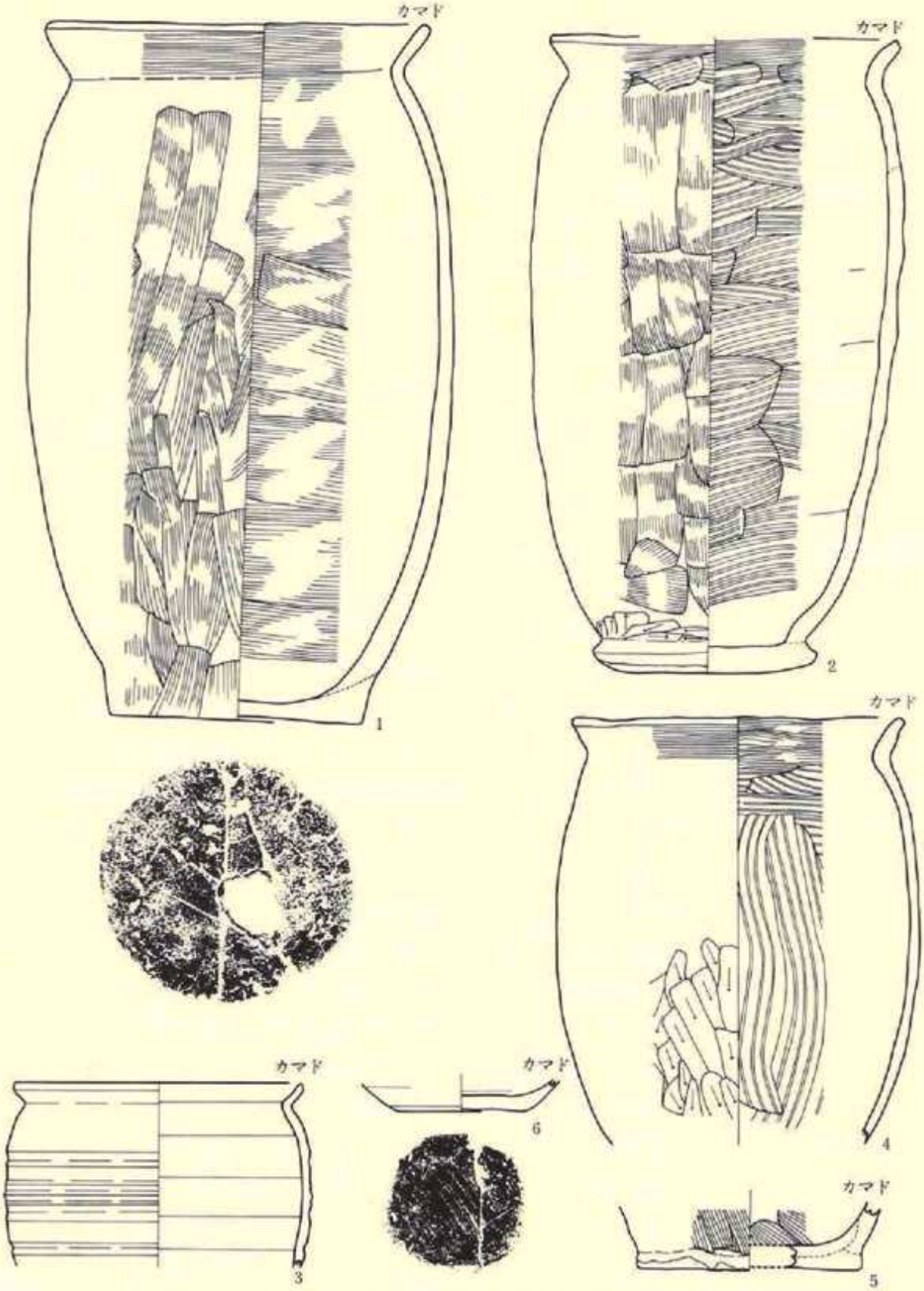
遺物（第20～22図、第7表、写真図版45～46）

（土器）埋土最上位から10数点の縄文土器片（すべて地文のみ）が出土したが図化は省略した。20－1～20－6はカマド内から、21－1～21－10は埋土中～下位から出土する。21－11は住居址中央のピットの埋土3より出土する。20－2は下半部は支脚として、上半部は袖部の芯材として利用されている。20－1～2、4～5は長胴甕である。いずれもロクロ不使用で口縁部は短く外反し、胴部は張り出さない。底部は1が木葉痕、2は平底、5は砂底であるが、いずれも厚い。器面調整もほとんど共通する。外面は口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向にヘラナデの調整、内面はヨコナデであるが、4と5は縦方向に調整される。3はロクロ水挽きの甕、6はロクロ水挽きの杯である。3は口縁部が極めて短く、口唇部は直立する。6の底部は静止糸切りで再調整される。内面は無調整である。

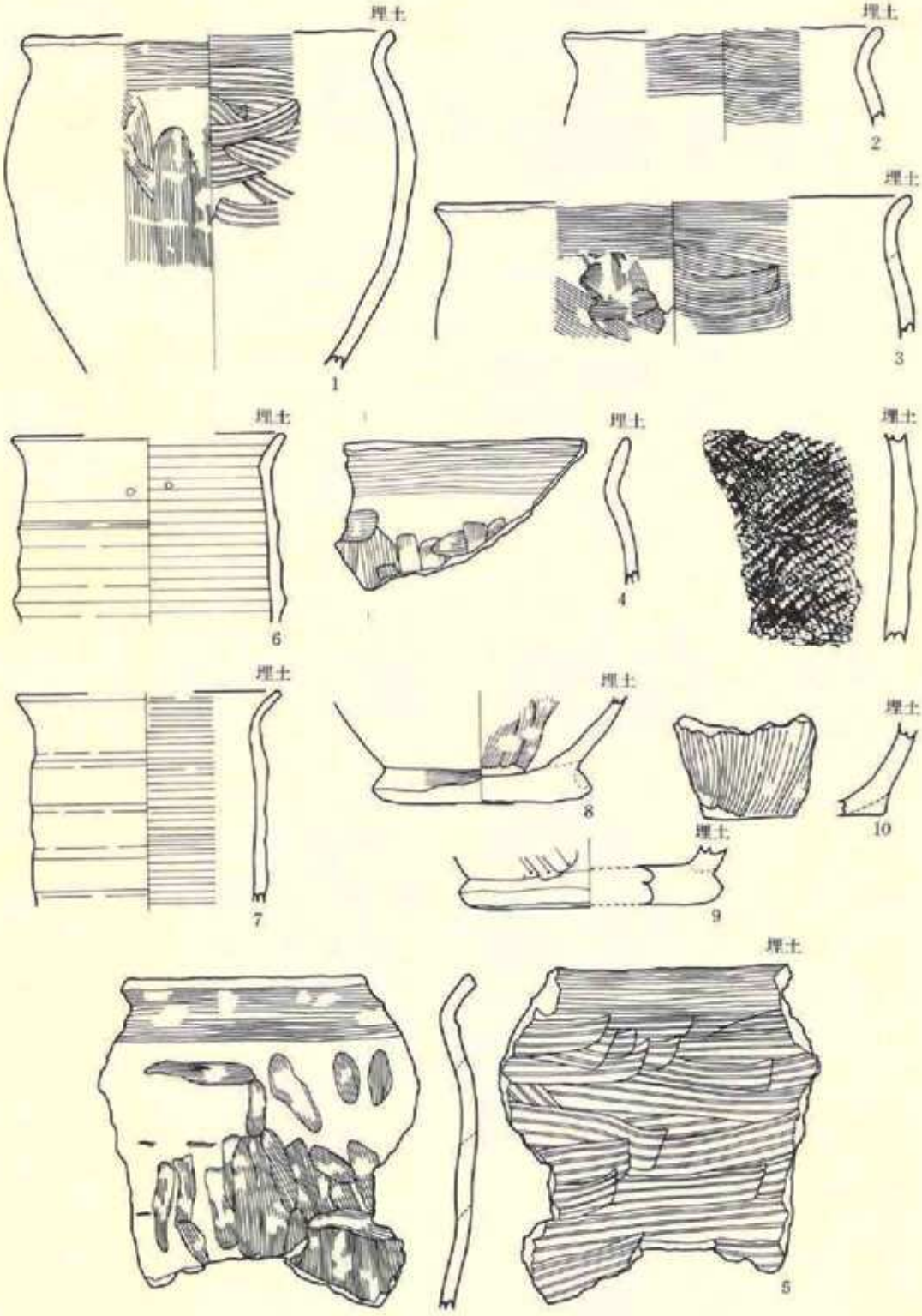
21－1～10はすべて甕である。6と7を除く1～10では1の胴部がやや張り出し、4の口縁部がやや長い以外は20図であげた甕と胎土、成形、調整技法は同じである。6と7はロクロ水挽きで胴部は円筒状であるが口縁部は緩く外反する。6には2個1対の補修孔が口縁部直下にあけられる。8～10はすべて平底である。11はＬＲの単節斜縄文である。

（鉄器）22－1～2は埋土中位から出土する。1は腐蝕が進み一部欠損する。長辺の一端には刃が付けられる。端部には径0.5cmの穴があけられる。穂積み具の可能性がある。2も腐蝕が進み先端部が欠損するため詳細は不明である。刀子状ではあるが両刃造りの可能性もある。茎は2.7cm、身幅は刃区で1.3cm、端部で1cmである。遺存する刃渡りは4cmである。

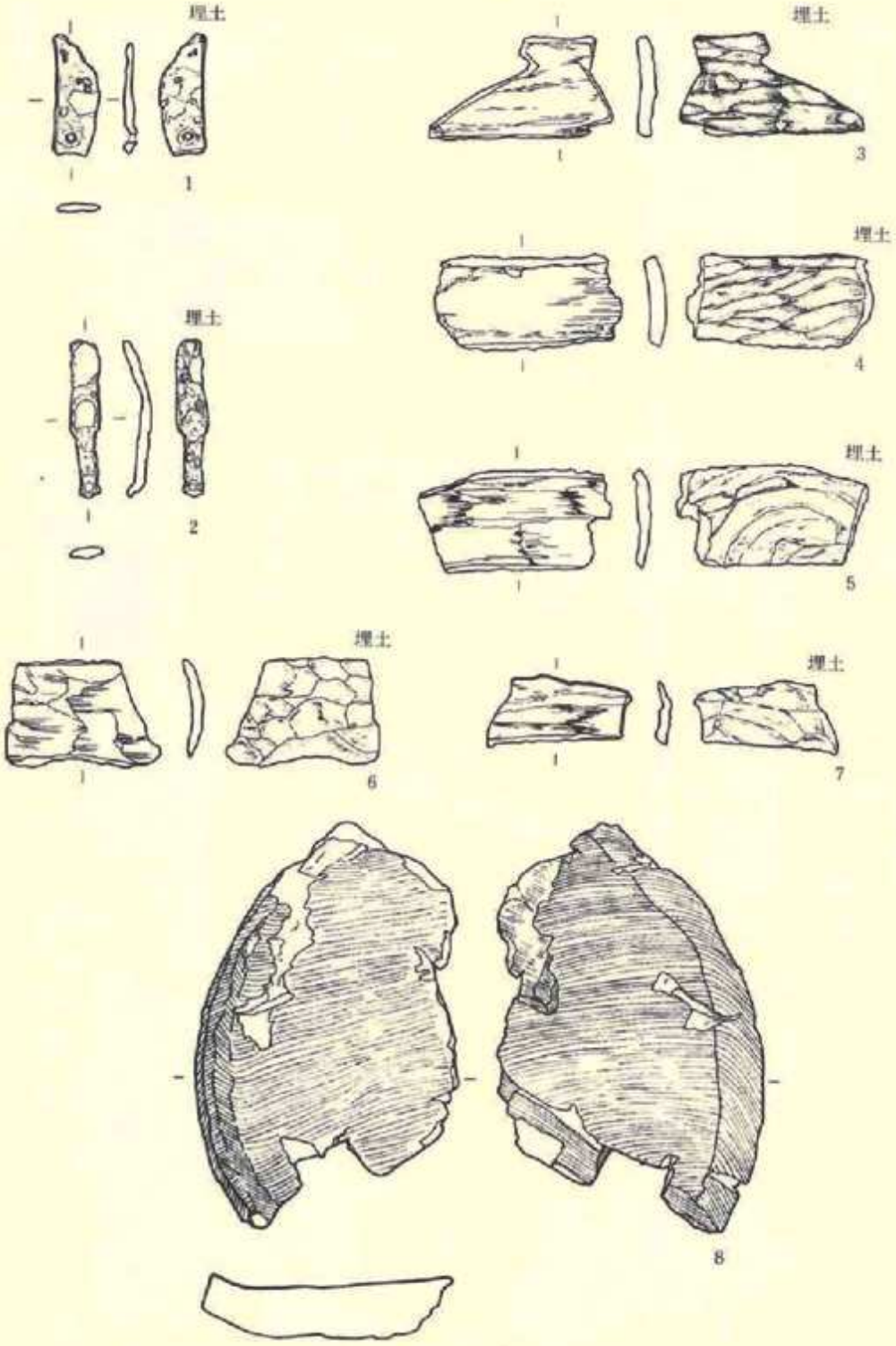
（木器）22－3～8は木器であるが、すべて炭化している。3～7は厚さ0.5cmほどの木器の破片である。すべて内側は削られた痕跡が明瞭に認められるが、外側には見られない。5は特に湾曲が明瞭な曲物である。同様の木器片は30個以上出土したが復元はできなかった。8は木皿



第20図　VIIC－1住居址内出土遺物(1)



第21図　Ⅶ C－1 住居址内出土遺物(2)



第22図　ⅦC－Ⅰ住居址内出土遺物(3)

と思われる。縁辺は1cmほどの深さになるように彫り残して縁どりをしている。裏はやや丸味をおびる平底で、脚や台部等はみられない。約1/4ほどの遺存と考えられるため長径40cm、短径30cmほどの楕円形と推定される。材質はセンである。

遺構の時期

カマドから出土した土器から平安時代後葉（第1期）と考えられる。

ⅦC－2住居址

本住居址はⅦC－5住居址状遺構によって大半を切られたため、北～西壁と北側の一部の床とカマドの煙道部のみが残っている。

遺構（第23図、第2表、写真図版9）

（位置）尾根の頂部に位置し、床面の高さは246.7mである。ⅦC－1住居址の東隣1.5mに位置する。

（重複）ⅦC－5住居址状遺構によって切られる。

（埋土）十和田a降下火山灰を含む黒色土と褐色土の層が交互に数層も重なり、ラミナが発達する。自然堆積である。

（平面形・規模）2.6m×2.4mの長方形である。

（壁）掘り込みが深く、壁の高さはほぼ80cmである。崩壊はみられず、ほぼ垂直に立ち上がる。

（床）水平かつ平坦である。浅い周溝が壁際に回る。

（柱穴）なし。

（カマド）主体部は完全に破壊され全く残っていない。煙道部刳貫き式である。煙出し部は90cmの深さである。埋土は極めて軟らかな焼土粒を含むシルトである。

遺物（第90図、第7表、写真図版64）

煙道部内より90－16の縄文土器片が1点出土する。流れ込んだものである。

遺構の時期

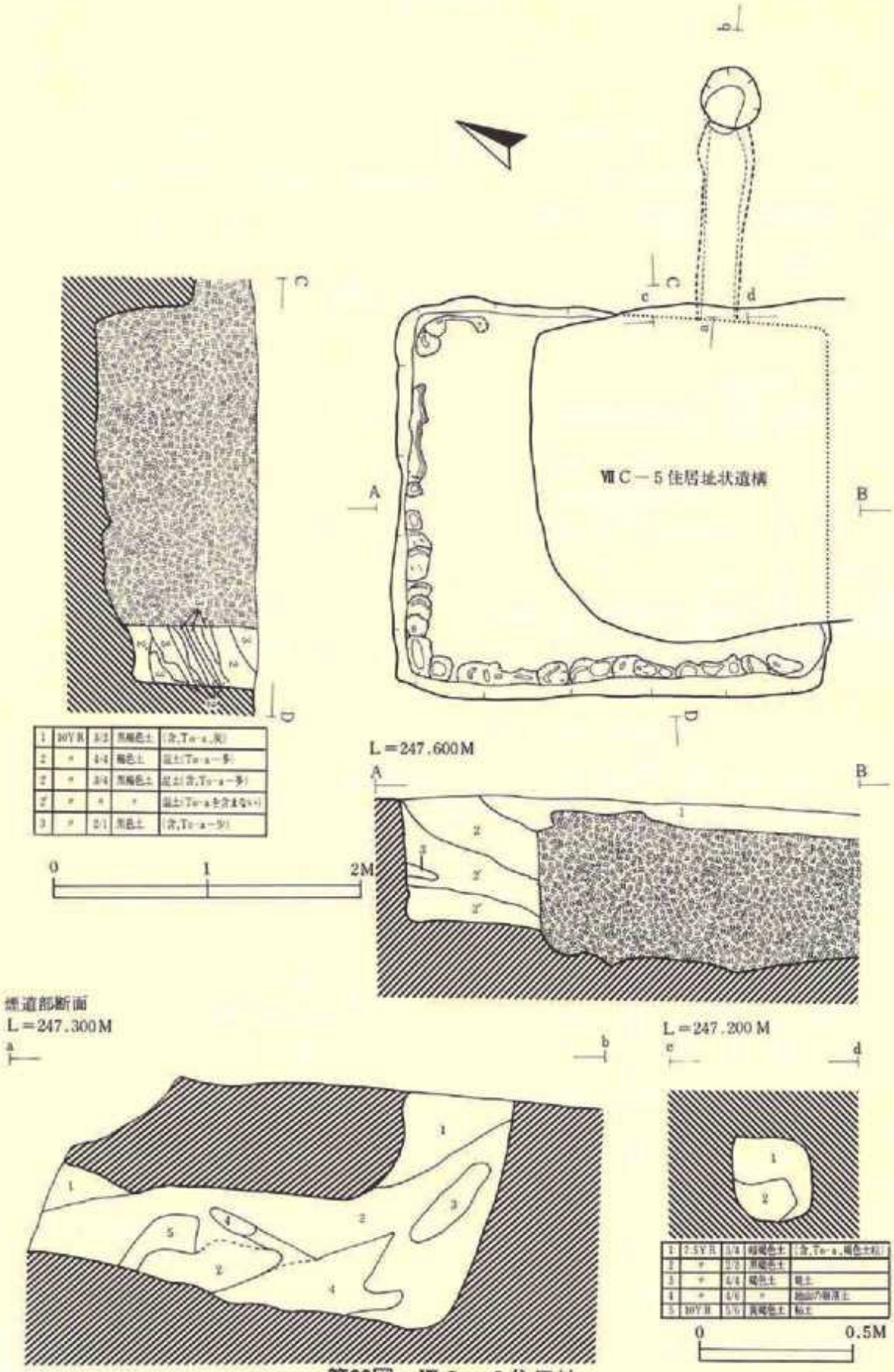
埋土からⅦC－4住居址と同時期と考えられる。平安時代後葉と考えられる。

ⅦC－5住居址状遺構

本遺構は形状からは住居址と思われたが、カマド、炉等もなく住居址とする根拠を欠く遺構である。

遺構（第24図、写真図版10）

（位置）尾根の頂部に位置し、床面の高さは246.5mである。ⅦC－1住居址の2m東に位置する。


Ⅶ C－5 住居址状遺構
A
B
c
d
L＝247.600M
0
1
2M
煙道部断面
L＝247.300M
a
b
L＝247.200 M
0
0.5M

第23図　Ⅶ C－2 住居址

（重複）ⅦC－2住居址を切り、ⅦC－1ピットに切られる。

（埋土）3層に大別される。埋土2には十和田a降下火山灰が含まれる。埋土3の下位の一部から異地性の焼土が検出される。

（平面形・規模）2.6m×1.8mの隅丸長方形である。

（壁）壁の高さは100～80cmである。ほぼ垂直に立ち上がる。ⅦC－1ピットに切られた所以外は崩壊等はない。

（床）水平ではあるが凹凸がある。

（柱穴）なし。

（カマド・炉）なし。

遺物

本遺構に伴う遺物は出土していない。

遺構の時期

埋土の状況から、ⅦC－2住居址とあまり時期差はないと考えられる。したがって平安時代後葉（第1期）と考えられる。

ⅦC－3住居址状遺構

本遺構は規模は小さいが長方形をなし、検出時の埋土はⅦC－4住居址及びⅦC－3住居址状遺構と同様であった。しかし、精査の結果、住居址と認定できる資料は得られなかった。

遺構（第24図、写真図版10）

（位置）尾根の頂部に位置し床面の高さは247mである。ⅦC－1住居址の南1mに位置する。

（埋土）2層に大別される。十和田a降下火山灰がブロック状となって混入する。

（平面形・規模）1.5m×1.3mの長方形である。

（壁）壁の高さは60cmである。ほぼ垂直に立ち上がる。

（床）ほぼ水平かつ平坦ではあるが、東側が掘り込まれ凹凸をもつ。壁際に浅い周溝が回る。

（柱穴）なし。

（カマド・炉）なし。

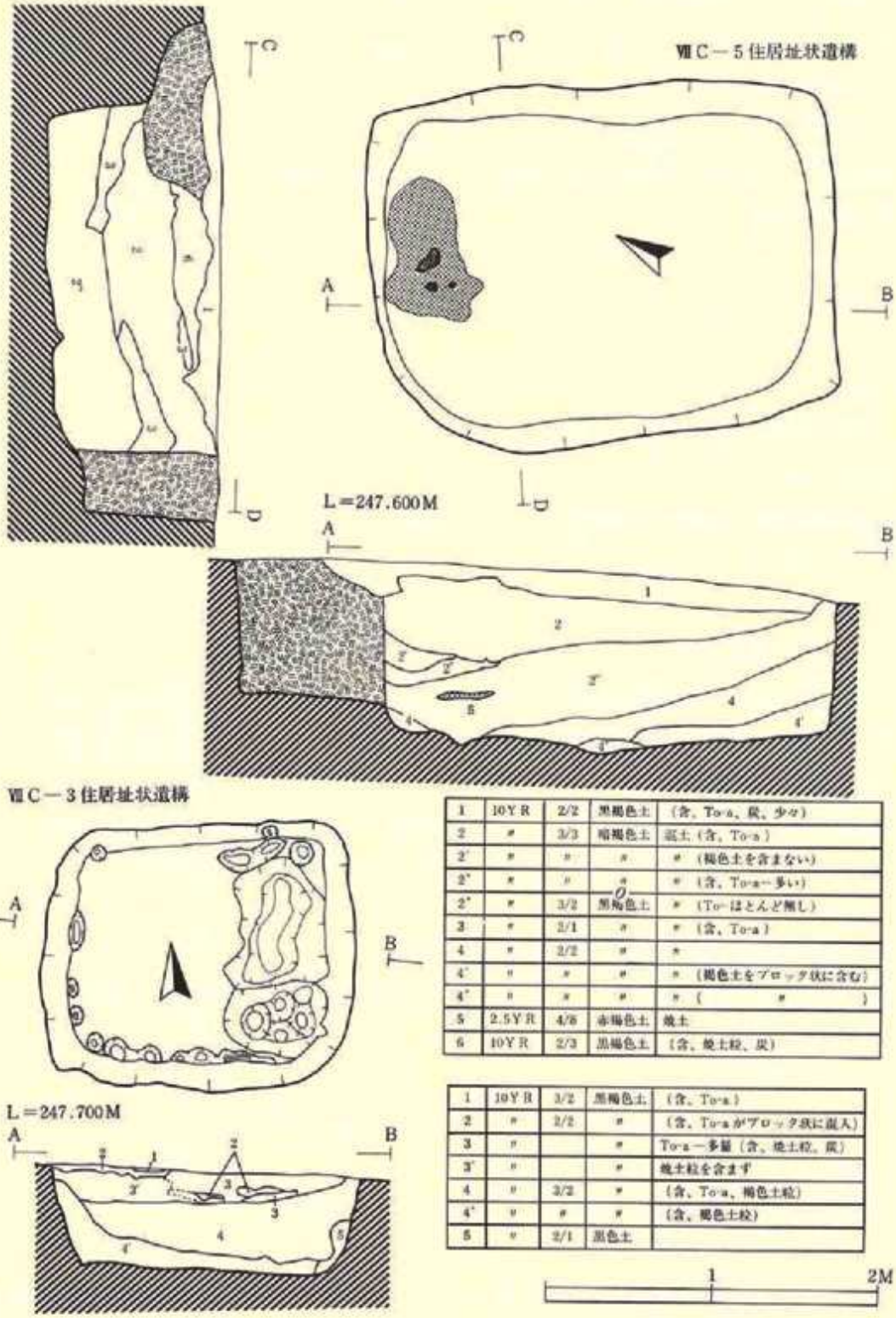
（その他）床面から丸太状の炭化材が一本出土する。材質はセンである。

遺物

縄文土器数点、土師器2～3点出土する。埋土上位で、いずれも小片のため図化は省略する。

遺構の時期

埋土と形状から、ⅦC－2住居址と同時期と考えられ、平安時代後葉（第1期）と思われる。



1	10YR	2/2	黒褐色土	(含、To-a、炭、少々)
2	〃	3/3	暗褐色土	盛土 (含、To-a)
2'	〃	〃	〃	〃 (褐色土を含まない)
2"	〃	〃	〃	〃 (含、To-a一多い)
2"	〃	3/2	黒褐色土	〃 (To-ほとんど無し)
3	〃	2/1	〃	〃 (含、To-a)
4	〃	2/2	〃	〃
4'	〃	〃	〃	〃 (褐色土をブロック状に含む)
4"	〃	〃	〃	〃 (　　〃　　)
5	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
6	10YR	2/3	黒褐色土	(含、焼土粒、炭)

1	10YR	3/2	黒褐色土	(含、To-a)
2	〃	2/2	〃	(含、To-aがブロック状に混入)
3	〃		〃	To-a一多量 (含、焼土粒、炭)
3'	〃		〃	焼土粒を含まず
4	〃	3/2	〃	(含、To-a、褐色土粒)
4'	〃	〃	〃	(含、褐色土粒)
5	〃	2/1	黒色土	

1　2M

第24図　Ⅶ C－5 住居址状遺構，Ⅶ C－3 住居址状遺構

VIIC－4住居址

本住居址は耕作地造成等により、遺構のおよそ半分が破壊されている。柱穴はないが、焼土の遺存や周溝、出土遺物等から住居址と判断したものである。

遺構（第25図、第2表、写真図版11）

（位置）尾根の頂部と南東斜面の傾斜変換点付近に位置し、床面の高さは246.3mである。VIIC－1住居址の南東約1.5mに位置する。

（重複）他の遺構との重複はないが、耕作地の造成により、北東隅から南西隅にかけて対角線状に斜めに削平されている。したがって南東隅は壁・床とも完全に破壊されている。

（埋土）黒褐色土、褐色土、暗褐色土の3層に大別される。壁際の埋土を除くすべての埋土に十和田aの降下火山灰がブロック状に混入する。埋土3には若干の粉炭が含まれるが、焼失住居址ではない。自然堆積状況を示す。

（平面形・規模）詳細は不明であるが、2.5m×2.1mの長方形と思われる。

（壁）中～下位ではほど直立に近い立ち上がりであるが、上位は外反する。壁の高さはほぼ80cmである。

（床）南東隅は一段低くなるが、他はほぼ水平かつ平坦である。全般によく締まっている。西壁際の一部には浅い溝状の、北～東壁際には杭跡状の周溝が回る。

（柱穴）なし。

（カマド）カマドは全く不明であるが、東壁際と思われる所に焼土が形成されている。焼土の両側は大きく凹むこと、焼土の一部が流失して不明なことから、この焼土がカマドの燃焼部に形成された可能性が強い。焼土の厚さは5～6cmである。

（その他）○南西隅のピットについて

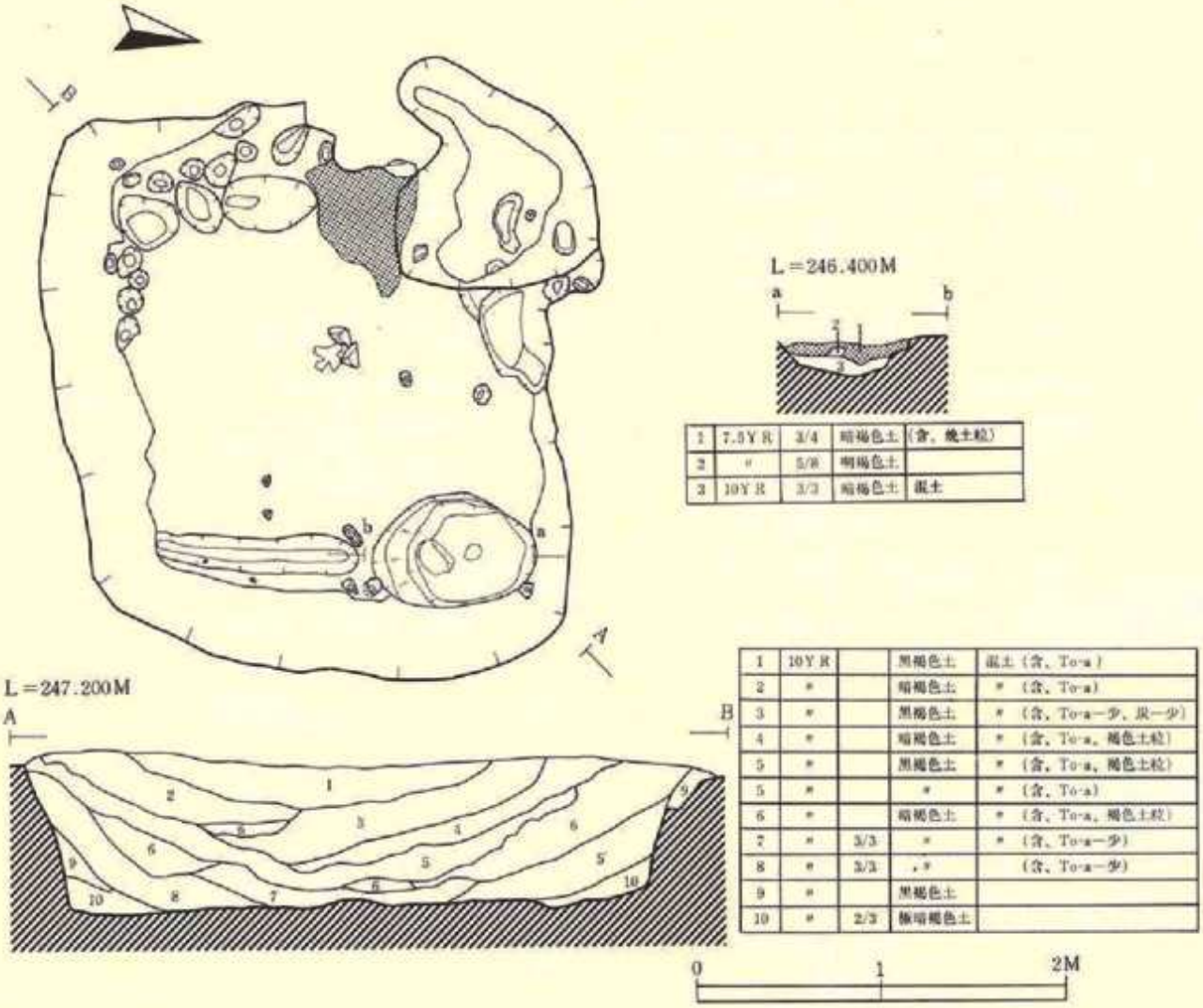
本ピットの深さは約20cm、断面形は鍋底であり、やや不正ではあるが円形である。埋土1には粗大な焼土粒が多量に混入する。上・下位とも軟らかく、同ピットを埋めて床を貼った形跡はない。用途、性格等は不明である。

○遺物の出土状況について

ほぼ中央の床面に2個の角礫と4個の土器片がまとまって出土した。この下や周囲にはピット等は作られていない。4点の土器は全て土師器の甕であるが、少なくとも2個体以上の土器であり、互いに接合しない。口縁部破片は他の床面から出土した土器と接合し26－1となる。

遺物（第26図、第7～8表、写真図版26）

（土器）1と2は床面から、他は埋土内から出土する。1は比較的胴部が張り出す甕で輪積み痕ないし巻き上げ痕が完全には調整されずに一部に残っている。底部は木葉痕である。2はほぼ底部面が欠損する鉢状の土師器である。3は比較的口縁部が長い長胴甕、4は平底の甕であ



1	7.5YR	3/4	暗褐色土	(含、焼土粒)
2	〃	5/8	明褐色土	
3	10YR	3/3	暗褐色土	混土

1	10YR		黒褐色土	混土(含、To-a)
2	〃		暗褐色土	〃 (含、To-a)
3	〃		黒褐色土	〃 (含、To-a少、炭少)
4	〃		暗褐色土	〃 (含、To-a、褐色土粒)
5	〃		黒褐色土	〃 (含、To-a、褐色土粒)
5	〃		〃	〃 (含、To-a)
6	〃		暗褐色土	〃 (含、To-a、褐色土粒)
7	〃	3/3	〃	〃 (含、To-a少)
8	〃	3/3	〃	(含、To-a少)
9	〃		黒褐色土	
10	〃	2/3	極暗褐色土	

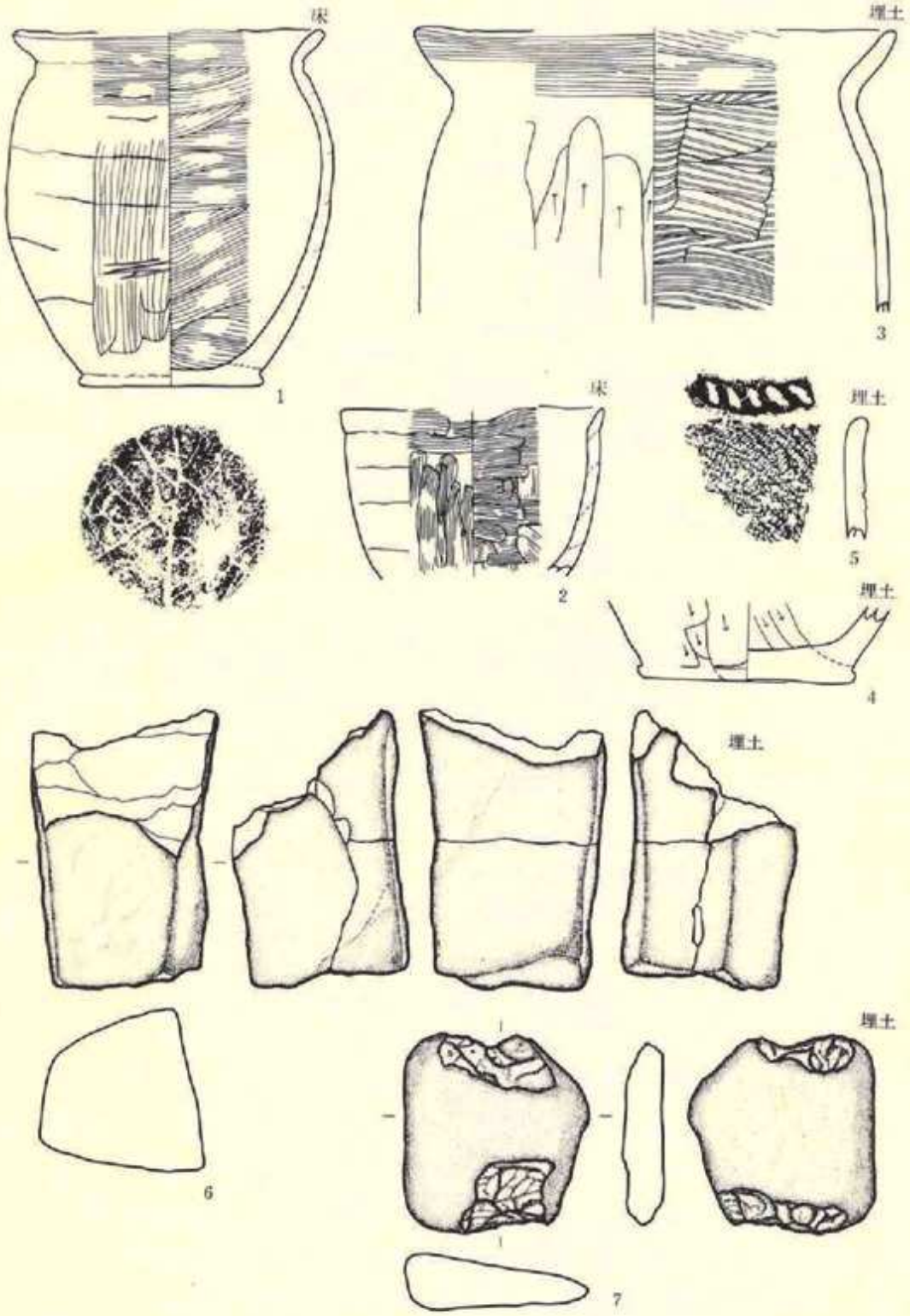
第25図　Ⅶ C－4 住居址

る。5は口唇部に棒状工具を押圧してキザミをつけたものである。体部は綾絡文が施文される。流れ込んだものと思われる。

（石器）6は砥石である。4片が接合したが、なお一部欠損する。7は石錘である。完形品である。6は埋土下位から、7は埋土中～上位からの出土である。

遺構の時期

1～3の土器によって、平安時代後葉（第1期）と思われる。



第26図　VII C － 4 住居址内出土遺物

ⅧC－3住居址

本遺跡においては中規模の住居址である。南壁（斜面下位側）にカマドをもち、煙道部に著しい焼土が形成されている。焼失住居址ではない。

遺構（第27～28図、第2表、写真図版12）

（位置）尾根の上位に位置し、床面の高さは243.8mである。ⅦC－4住居址の東9mに位置する。

（重複）ⅧC－5ピットを切っている。

（埋土）黒色土と十和田a降下火山灰を含む黒褐色土の2層に大別される。自然堆積である。

（平面形・規模）多少歪つではあるが、一辺が4.4mの隅丸方形である。

（壁）壁の高さは北壁の69cmが最大で、南壁の6cmが最小である。立ち上がりは垂直に近く、大きく崩壊している所はない。

（床）水平かつ平坦である。カマドのある南西側は極めて硬く叩かれている。ⅧC－5ピットの埋土はそのまま利用され、その上に貼床をしたり土突きした痕跡はみられない。カマド及びその左側の一部を除いて周溝が回る。

（柱穴）なし。

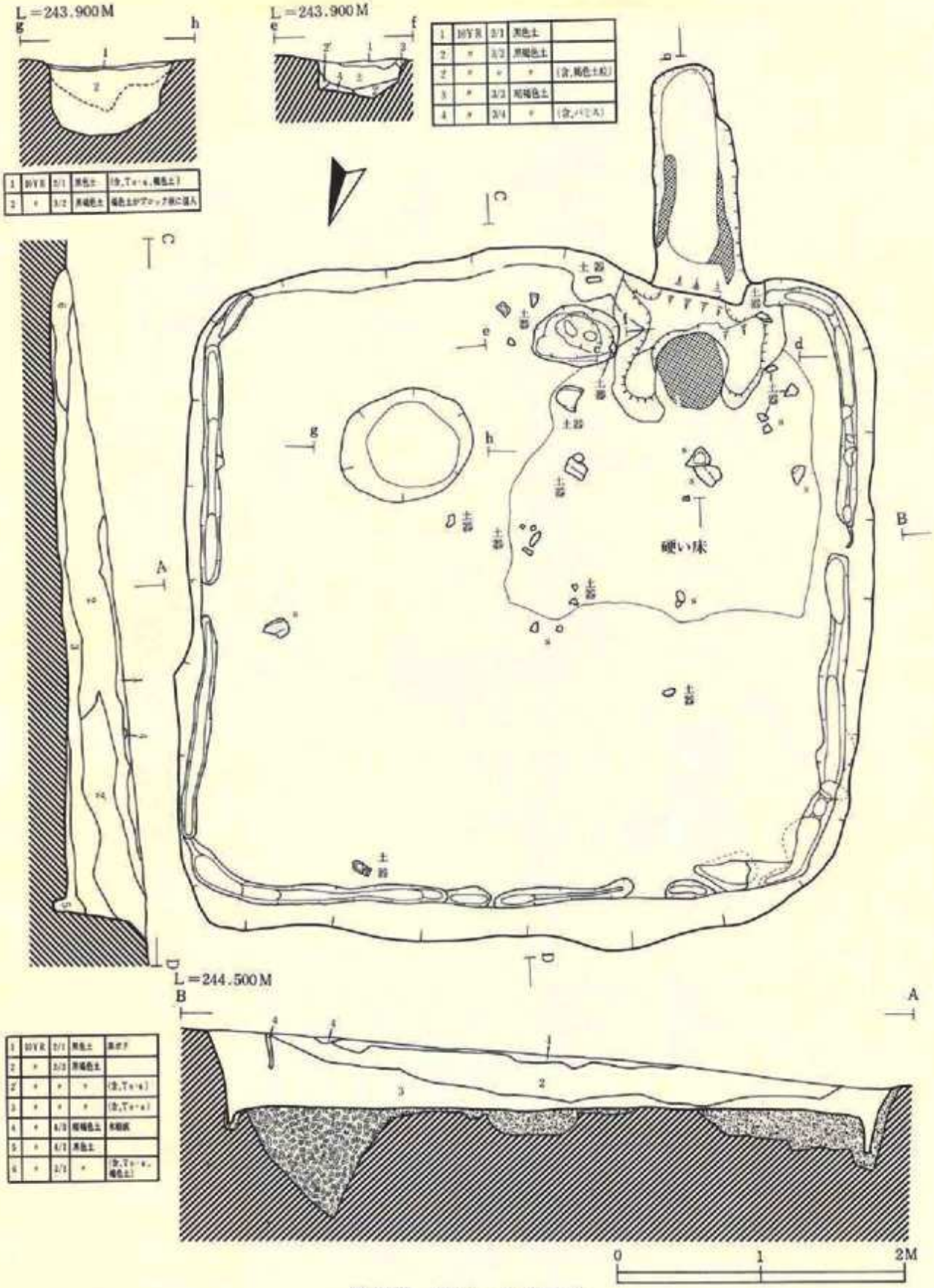
（カマド）カマドは南西隅に設置されている。天井部は崩壊し残存しないが、礫と土器片を芯材として造られた両袖部は潰れて遺存している。燃焼部は鍋底に掘り込まれ、底部に形成された焼土は厚さが6cmで硬い。煙道部は掘り込み式で焼土が広く厚く形成されている。煙出し部は流失している。カマドの左側には開口部径が60cm×40cm、深さ30cmの楕円形のピットが作られている。

（その他）○ピットについて

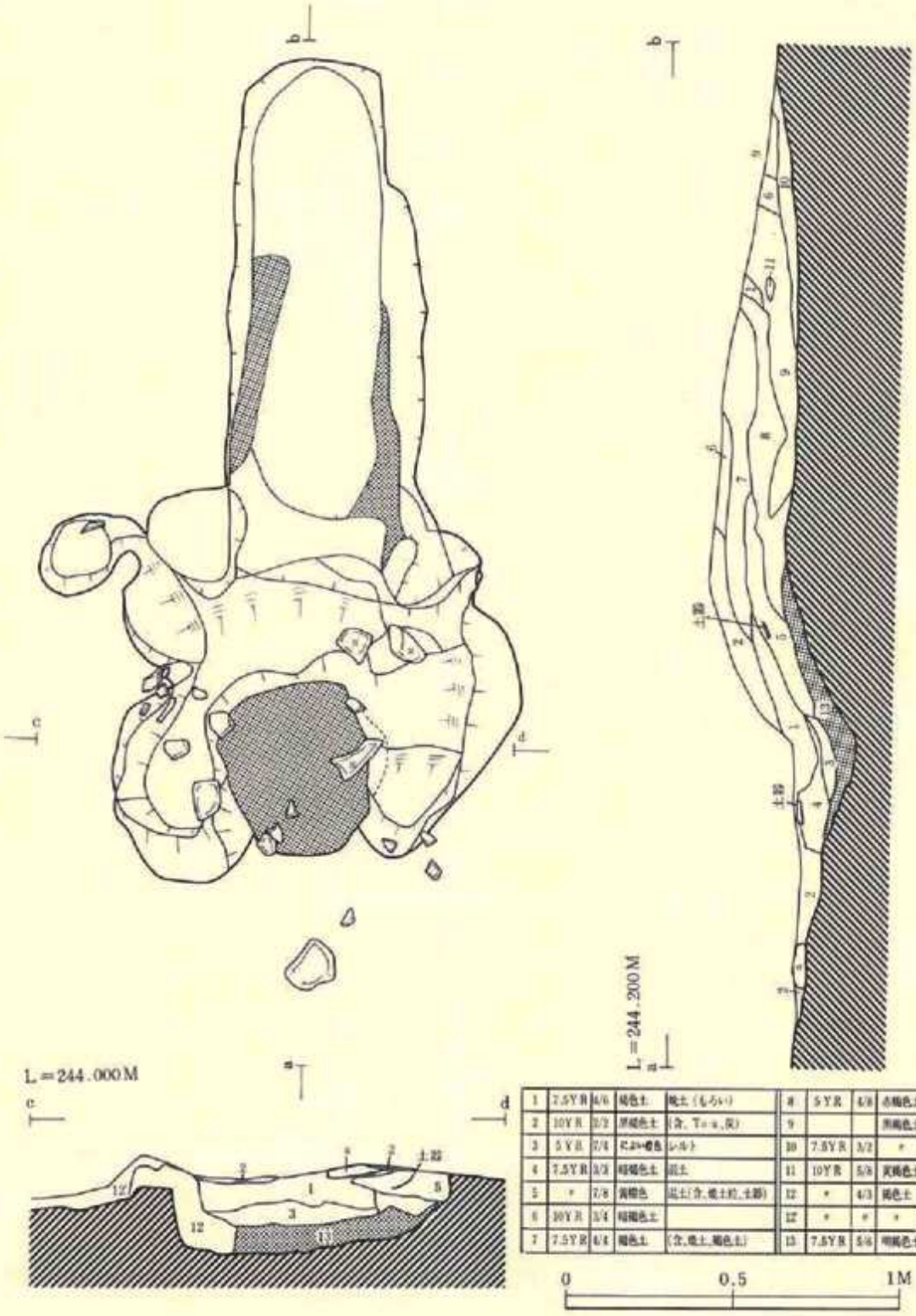
南東隅に円形のピットがある。規模は開口部径90cm×80cm、深さ66cmで、断面形はビーカー形である。埋土は住居址のそれとは連続しない。しかし、縄文時代のものとは異なること、人為堆積と思われること等から、本住居址が使用されていた時に一時的に使用されていたと思われる。

遺物（第29～30図、第7～8表、写真図版48）

（土器）29－1～9は床面から、29－10はP_2内から出土する。30－1～3はカマド内、4～7は埋土から出土する。29－2、4は口縁部は長く「く」の字に外傾する。29－1の口縁部は丸味を帯びて外反する。29－5は短い口縁部が急角度に外傾する。29－3、6は緩く外反する。29－7、8はともに砂底である。29－9は須恵器の甕の破片である。胴部側は縦位に、肩部は横位にヘラナデ調整を施す。肩部には自然釉がかかる。29－10は急角度で立ち上がる内面黒色処理の杯である。底部はヘラ切り再調整をしている。30－1の口縁部は短く、外反する。30－2

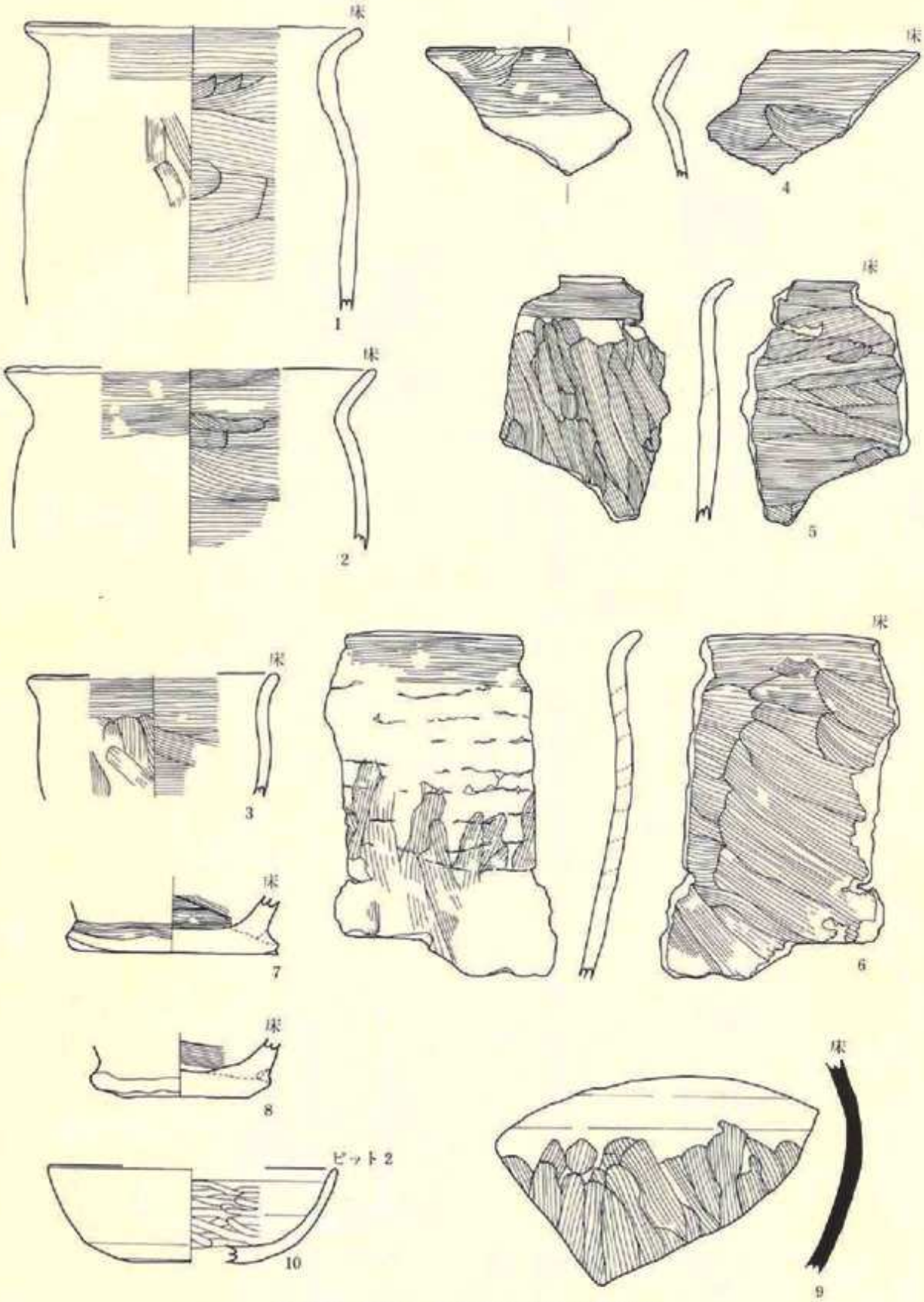

L＝243.900M
g
h
L＝243.900M
e
f
1 10YR 3/1 黒色土
2 〃 3/2 黒褐色土
2' 〃 〃 〃 (含,褐色土粒)
3 〃 3/2 暗褐色土
4 〃 3/4 〃 (含,パミス)
1 10YR 3/1 黒色土 (含,Tr-a,褐色土)
2 〃 3/2 黒褐色土 褐色土がブロック状に混入
土器
硬い床
A
B
C
D
L＝244.500M
1 10YR 3/1 黒色土 表ボケ
2 〃 3/2 黒褐色土
2' 〃 〃 〃 (含,Tr-a)
3 〃 〃 〃 (含,Tr-a)
4 〃 4/3 暗褐色土 本貼床
5 〃 4/1 黒色土
6 〃 3/1 〃 (含,Tr-a,褐色土)
0
1
2M

第27図　Ⅷ C ― 3 住居址

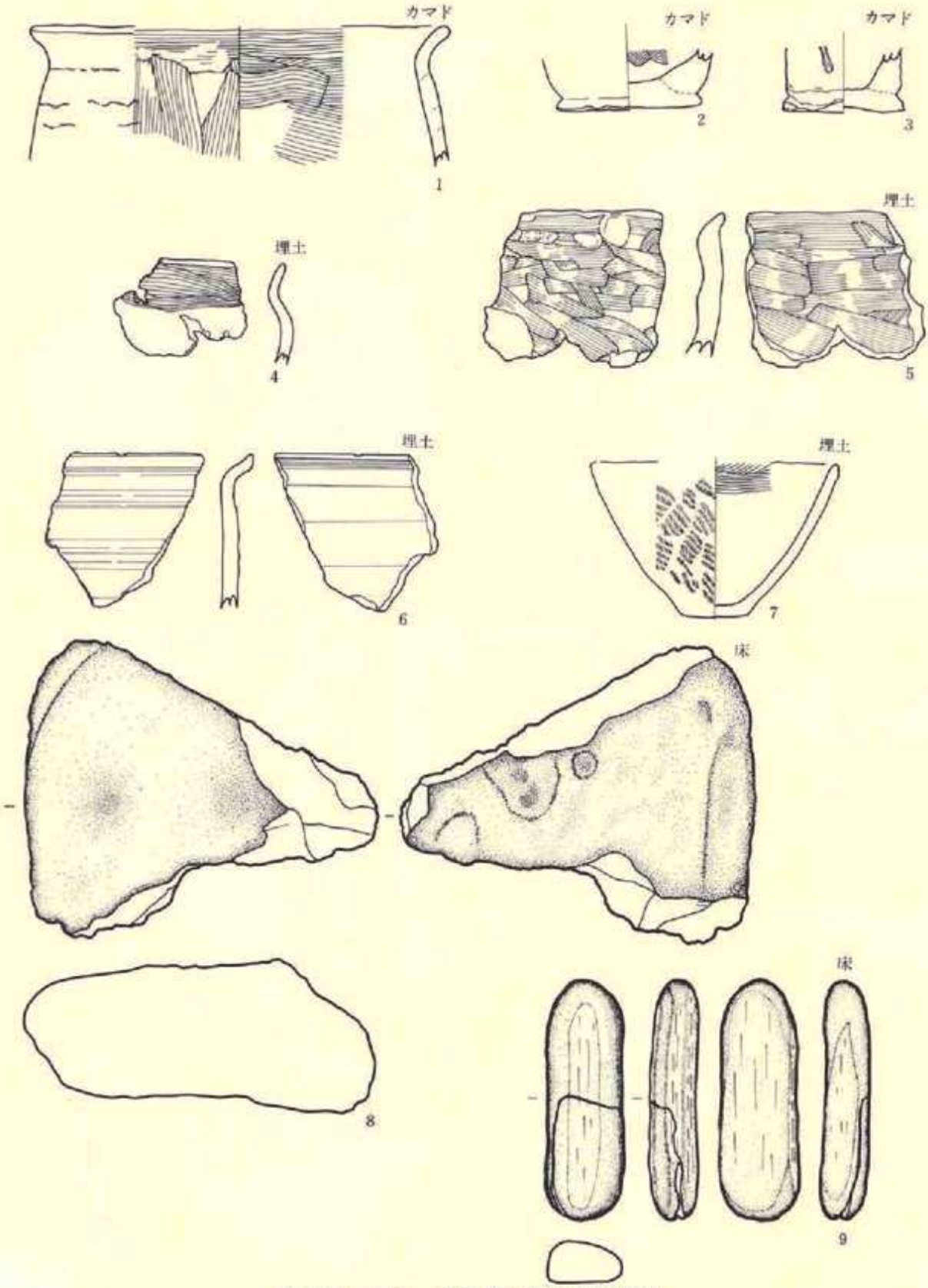


1	7.5YR	4/6	褐色土	粘土（もろい）	8	5YR	4/8	赤褐色土	粘土（シルト質）
2	10YR	2/2	黒褐色土	（含、To＝u、炭）	9			黒褐色土	泥土
3	5YR	2/4	にぶい赤色	シルト	10	7.5YR	3/2	＊	粘土化
4	7.5YR	3/3	暗褐色土	泥土	11	10YR	5/6	黄褐色土	
5	＊	7/8	黄橙色	泥土（含、粘土粒、土器）	12	＊	4/3	褐色土	
6	10YR	3/4	暗褐色土		12'	＊	＊	＊	もろい
7	7.5YR	4/4	褐色土	（含、粘土、褐色土）	13	7.5YR	5/6	明褐色土	粘土

第28図　VIIIC－3住居址　カマド



第29図　Ⅷ C － 3 住居址内出土遺物(1)



第30図　Ⅷ C － 3 住居址内出土遺物(2)

は木葉痕がみられる。3は中央部がやや凹むが、所謂上げ底ではない。4は小型の甕である。4と5の口縁部はほぼ垂直に近い立ち上がりである。6はロクロ成形の甕である。口縁部は短く、口唇部は真上を向く、7は底部が極端に小さい小型深鉢である。胎土に繊維が入る。無節斜縄文である。内側に残滓が見られる。この縄文土器は流れ込んだものである。

（石器）30－8は石皿状の礫器、9は砥石と思われる。いずれも床面から出土する。8は欠損部が多く、全体の形状は不明である。両面が磨耗する。全面に加熱を受け赤色化する。9は破損したものが接合したものであるが、一部欠損する。

遺構の時期

29－1～9により、平安時代後葉（第1期）に属すると思われる。

Ⅷ C－2住居址

本住居址はその大半が調査区外にあるため、調査できたのは南側の一部のみである。南東隅から焼土や炭化物が検出されたが、焼失したかどうかは不明である。埋土内からは十和田a降下火山灰は検出されたが、白頭山火山灰は検出されなかった。

遺構（第31図、第2表、写真図版12）

（位置）尾根の上位に位置し、床面の高さは243.8mである。ⅧC－3住居址の北東15mに位置する。

（埋土）黒色土、黒褐色土、暗褐色土の3層に大別される。十和田a降下火山灰は黒褐色土中にブロック状に混入する。自然堆積である。

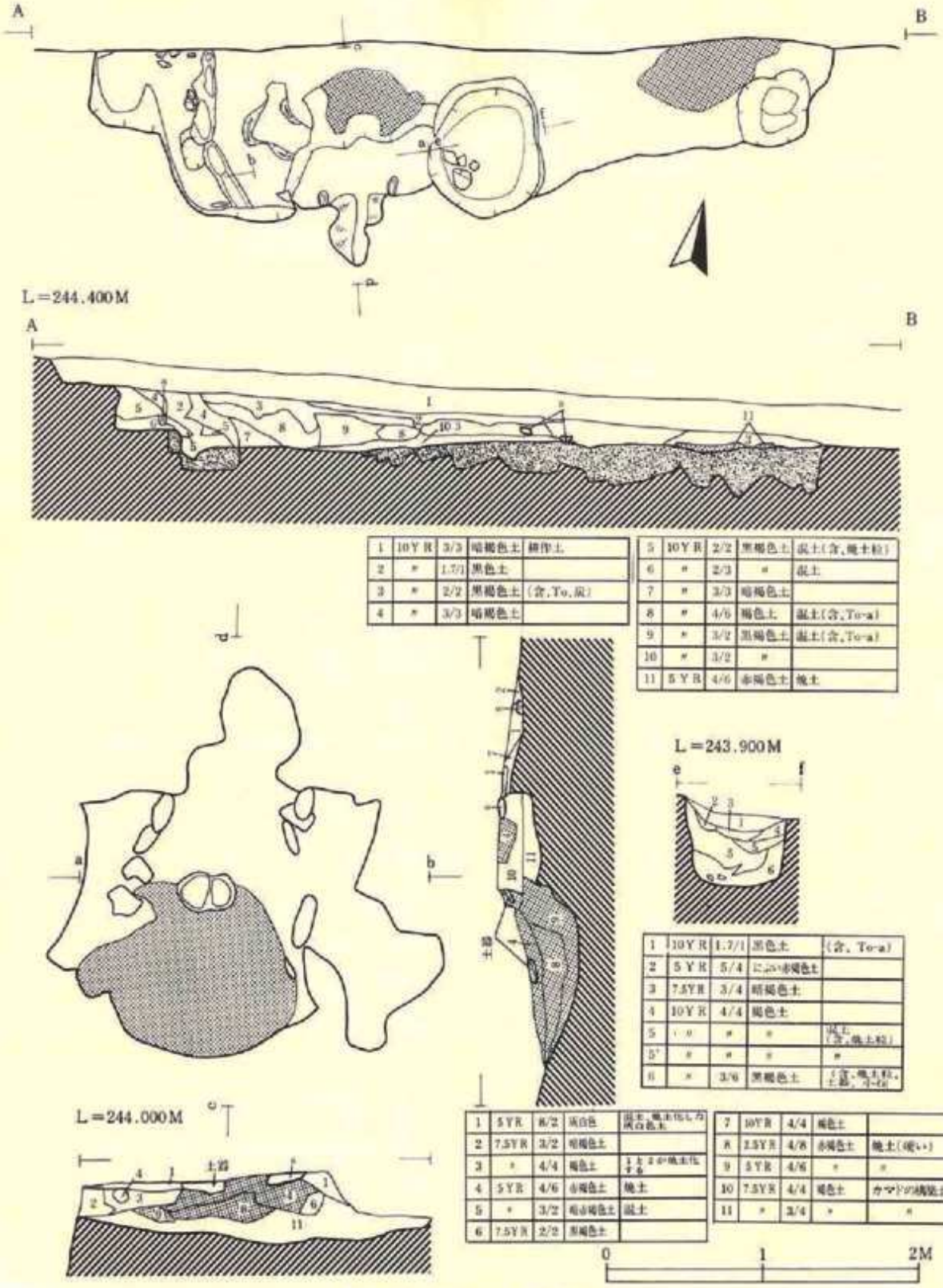
（平面形・規模）大半が調査区外のため、方形か長方形か不明である。また、南壁は流失しており、それに伴って南東隅も不明な点が多い。南辺で約4.2mと推定される。

（壁）西壁の一部が検出されたのみである。壁の高さは最大で30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁際に杭跡状の周溝が見られる。深さは床面からは20～30cmである。

（床）カマドの周囲はやや低くなるが、概ね水平かつ平坦である。南東隅付近の床は薄く淡い焼土が形成されている。同付近の床は硬く締まっている。

（柱穴）なし。

（カマド）南西隅に作られている。上部及び煙道部の大半は流失している。両袖部は礫と土器片を芯材に褐色の粘土質シルトで固められているが、その遺存状態は不良である。燃焼部は鍋底状に掘り込まれており、ややもろい焼土が形成されている。最大8cmの厚さである。煙道部は主体部の近くで僅かにその痕跡をとどめるのみでほとんどが不明である。カマドの左側には平面プランが楕円形、断面は円筒状のピットが作られている。規模は開口部径が80cm×70cm、深さ50cmである。



1	10YR	3/3	暗褐色土	耕作土
2	〃	1.7/1	黒色土	
3	〃	2/2	黒褐色土	(含,To,灰)
4	〃	3/3	暗褐色土	

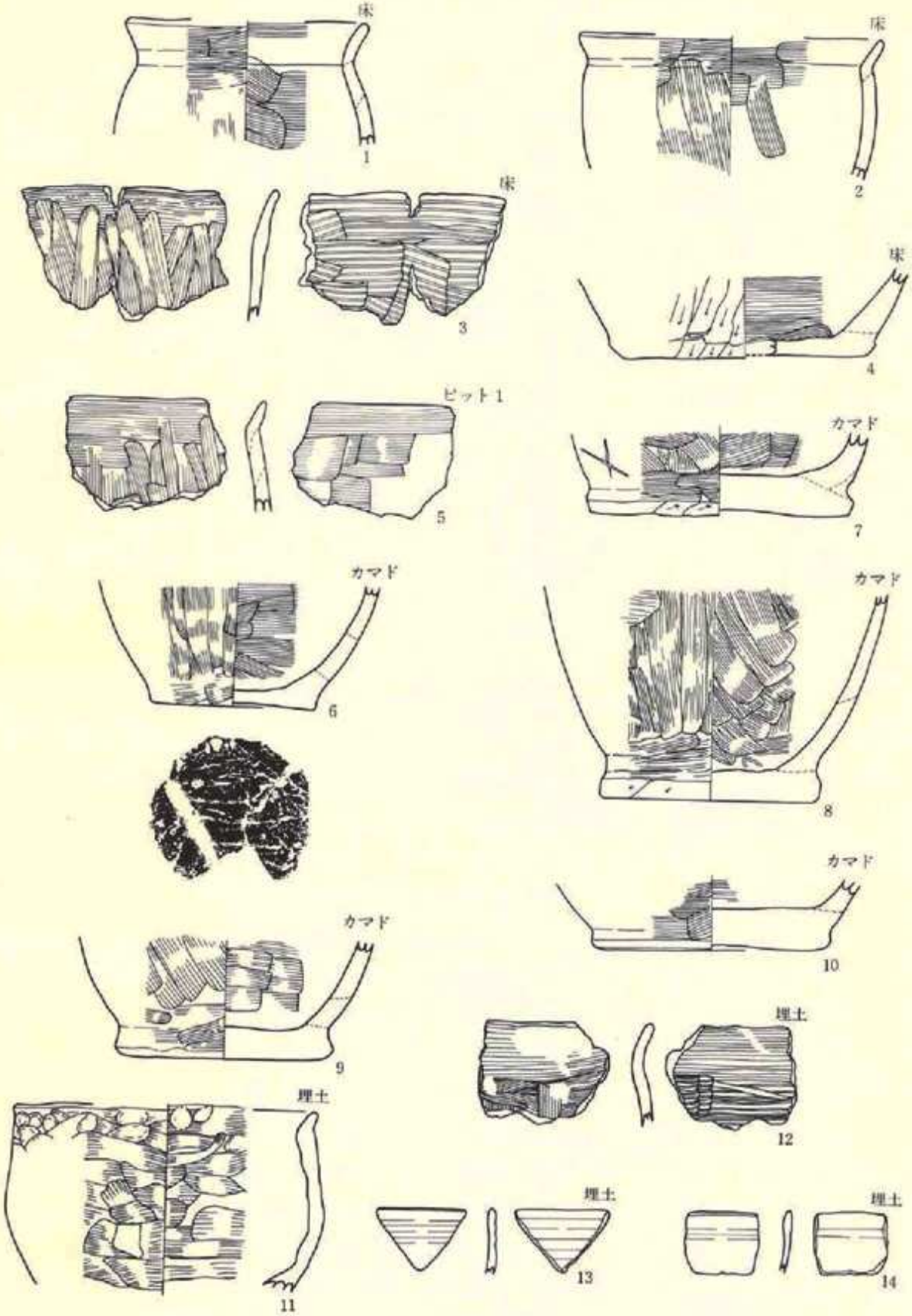
5	10YR	2/2	黒褐色土	灰土(含,焼土粒)
6	〃	2/3	〃	灰土
7	〃	3/3	暗褐色土	
8	〃	4/6	褐色土	灰土(含,To-a)
9	〃	3/2	黒褐色土	灰土(含,To-a)
10	〃	3/2	〃	
11	5YR	4/6	赤褐色土	焼土

1	10YR	1.7/1	黒色土	(含, To-a)
2	5YR	5/4	にぶい赤褐色土	
3	7.5YR	3/4	暗褐色土	
4	10YR	4/4	褐色土	
5	〃	〃	〃	灰土(含,焼土粒)
5'	〃	〃	〃	〃
6	〃	3/6	黒褐色土	(含,焼土粒,土器,To-a)

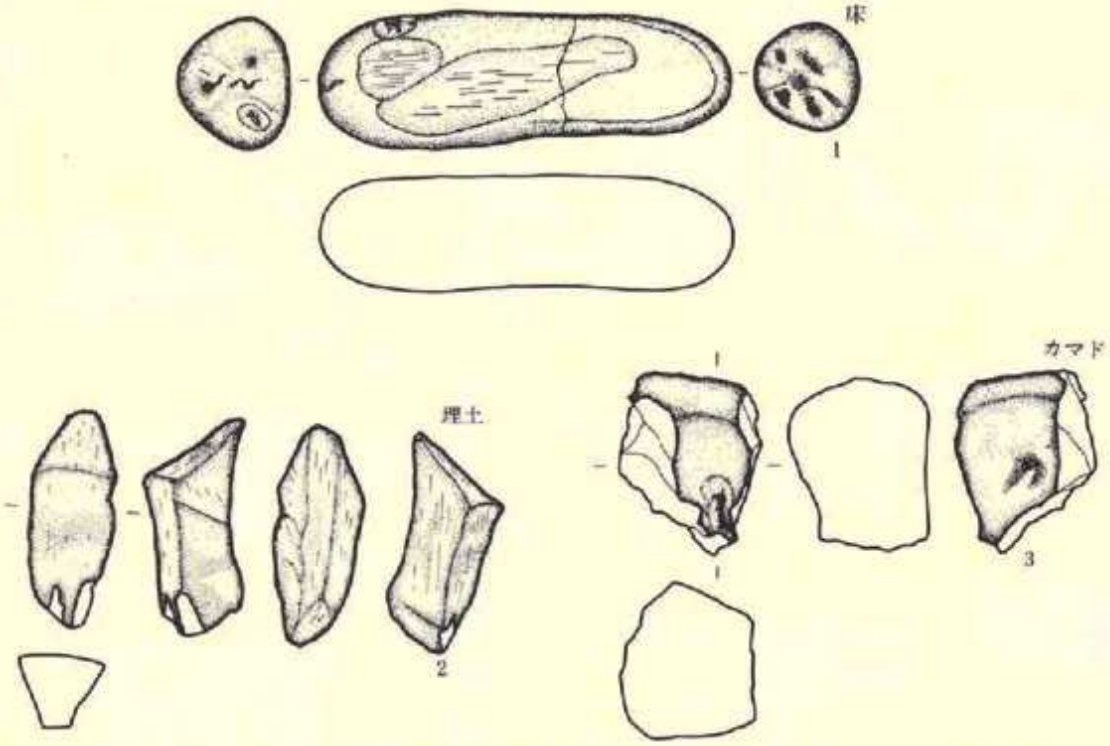
1	5YR	8/2	灰白色	灰土,焼土化し方灰白色土
2	7.5YR	3/2	暗褐色土	
3	〃	4/4	褐色土	1と2が焼土化する
4	5YR	4/6	赤褐色土	焼土
5	〃	3/2	暗赤褐色土	灰土
6	7.5YR	2/2	黒褐色土	

7	10YR	4/4	褐色土	
8	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土(硬い)
9	5YR	4/6	〃	〃
10	7.5YR	4/4	褐色土	カマドの構築土
11	〃	3/4	〃	〃

第31図　Ⅷ C－2住居址



第32図　Ⅷ C － 2 住居址内出土遺物(1)



第33図　Ⅷ C －２住居址内出土遺物(2)

（その他）○西壁の張り出しについて

西壁の調査区境に一辺が50cmの方形に張り出しが掘られているが、性格等は不明である。

遺物（第32～33図、第７～８表、写真図版48）

（土器）32－１～４は床面、５はピット１の底部、６～10はカマド内、11～14は埋土から出土する。１は粗砂が多く、２は小石を含む胎土である。ともに口縁部は短く外傾する。３は頸部が見られず、口縁部はほぼ直立する。４は甕の体下半で底部は木葉痕となっている。５も口縁部は非常に短く、内側が削がれたように外傾する。６～10は甕の底部である。６は木葉痕、７、10は砂底である。７は支脚に転用されている。11は体部下半が最大となる甕であるが、むしろ椀形である。口縁部は直立し、内側が削がれる。口縁部には指頭圧痕が残っており、内外面とも凹凸がひどく、調整は粗雑である。12は緩く外反する甕の口縁部破片である。13と14はロクロ水挽きの杯の破片である。ともに調整痕は見られないあか焼き土器である。

（石器）33－１～３の３点が出土する。１は中央部付近で折れ、一方は床面より僅かに上がった埋土内（土層断面にかかる）から出土したが、もう一方は床面からの出土である。２は埋土下位、３はカマドの芯材として使用されていたものである。１は両端に敲打痕、一方の側面は凹んで磨滅している。２は一部を除いてほぼ全面を使用している砥石である。ほぼ完形品である。３は凹石と思われるが欠損部が大きく、全体の形状等詳細は不明である。

遺構の時期

床面およびカマド内から出土した遺物により、平安時代後葉（第1期）に属すると思われる。

VIE－2住居址状遺構

本遺構の形状は長方形であるが、柱穴、カマド、炉等は一切検出されず、床面も平坦とはいいがたい。埋土には焼土と炭が多量に混入しており、焼失したものである。以上の状況から住居址とは認定できなかった遺構である。

遺構（第34図、写真図版10）

（位置）尾根の頂部に位置し、床面の高さは246.8mである。VID－1住居址の南西4mに位置する。

（重複）東壁の上部の一部は、後世の耕作地造成に伴う溝と重複し切られる。

（埋土）埋土は黒色土、暗褐色土、十和田a降下火山灰、褐色土の4層に大別される。暗褐色土中には焼土粒と炭化物が多量に混入する。十和田a降下火山灰は一部分ブロック状となるが、大むね層状を呈する。最下位の埋土9は明褐色土で床及び壁の下位を構成する地山と同一のものと思われるが、大小の土塊となっており、壁及び床では明瞭に分離される。しかし、他の埋土は一切混入していない。以上のことから、埋土9も含めて自然堆積かどうか検討の余地をのこすが、大むね自然堆積と考えられる。なお、34－1は床面から、2は埋土9の最上位から出土したものである。

（平面形・規模）2.2m×1.8mの長方形である。

（壁）壁の高さは西壁で最大の1m、東壁で最小の0.5mである。南西壁の上部は崩壊が進み外反するが、外はほぼ垂直に立ち上がる。

（柱穴）なし。

（カマド・炉）なし。

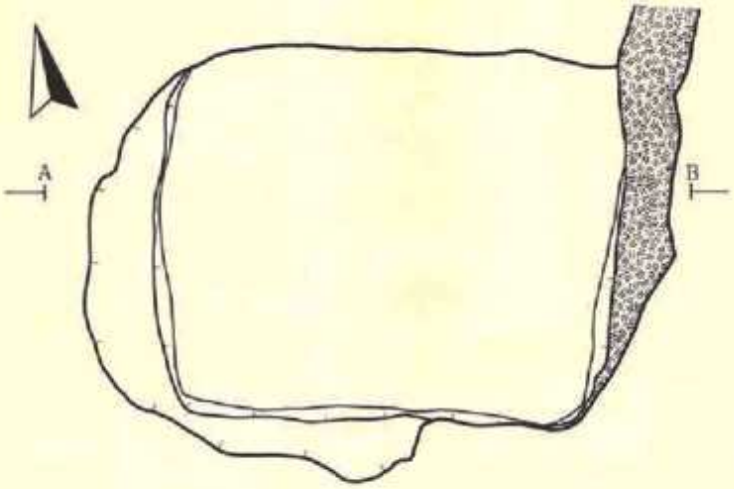
遺物（第34図、第7表、写真図版50）

（土器）1は床面から、2は埋土下位から出土する。1は須恵器の蓋付き坏の蓋である。縁辺の一部のみであり詳細は不明であるが、推定される直径は12.7cmである。須恵器特有の青灰色の色調であるが、オレンジ、黄色等の粉状の斑点が見られる。外側は段をもつが、内側にはない。2は長胴甕の口縁部破片である。口縁部は短く外傾する。口縁部はヨコナデ、体部は縦位にヘラナデ調整を加えるが、その調整は粗雑で成形痕（輪積み痕又は巻き上げ痕）が残っている。

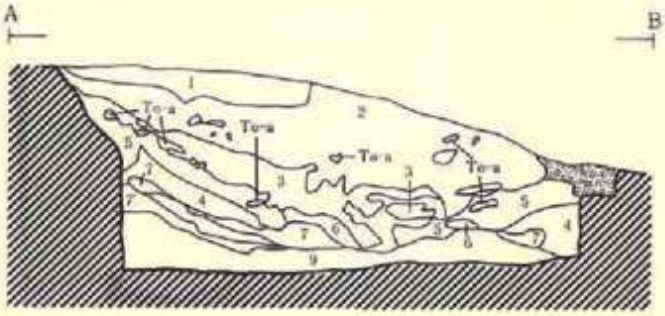
本遺構からの出土遺物は上記の2点のみで、石器等は出土していない。

遺構の時期

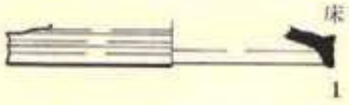
出土遺物及び埋土の状況から平安時代後葉（第1期）に属すると思われる。



L＝248.00M



1	7.5YR	2/1	黒色土	
2	〃	3/4	褐色土	混土(含,To-a,炭)
3	〃	5/1	淡褐色	(含,To-a炭,焼土粒)
4	〃	5/4	にぶい褐色	
5	〃	3/4	暗褐色土	混(含, 炭)
6	〃	3/2	黒褐色土	(含, To-a,炭)
7	〃	3/4	暗褐色土	(含,炭,焼土粒…多量)
8	〃	5/8	明褐色土	
9	〃	5/6	〃	(含,炭,焼土粒)



第34図　Ⅵ E－2住居址状遺構及び出土遺物

VID－1住居址

本住居址は壁際の一部の埋土中には十和田ａ降下火山灰が、床面直上には白頭山火山灰が検出されたものである。南東側の床面には両方の火山灰が堆積するが、上位から白頭山――黒褐色土――十和田ａの順で、間層をはさんで明瞭に層をなして堆積し、攪乱は見られない。

また、本住居址は当遺跡で検出された住居址の中で、著しく異なる幾つかの特徴を有する住居址である。規模は最大であり、唯一の板敷の住居址である。カマドを西向きにするのも例が少ない。遺物では鉄剣が出土している。

遺構（第35～37図、第２表、写真図版14）

（位置）検出された住居址群の中で最も高位置にあり、ほぼ尾根の頂部に位置する。床面の高さは246.8mである。

（重複）VID－13ピットを切っている。

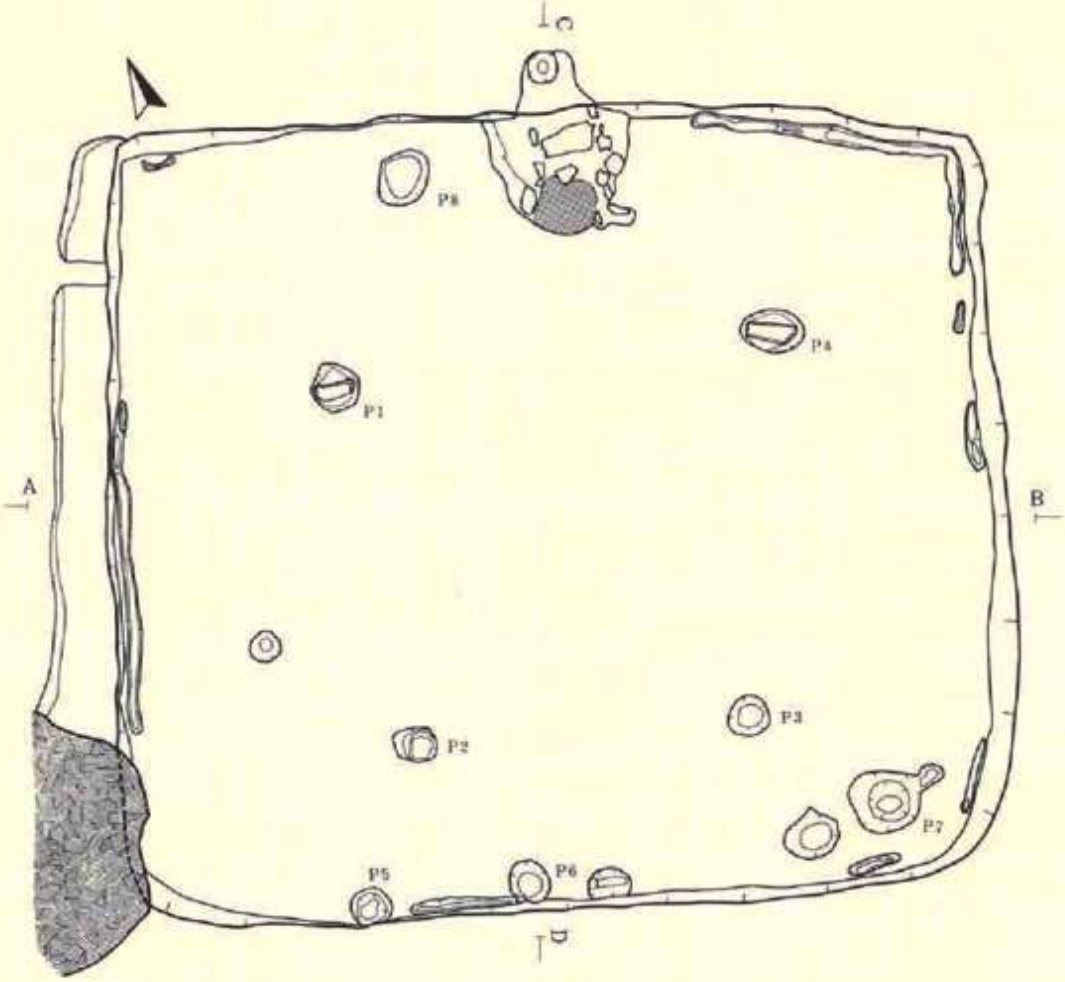
（埋土）黒褐色土、暗褐色土、褐色土、十和田ａ降下火山灰を含む層、白頭山火山灰を含む層の５層に大別される。各層は混土の割合によって細分される。十和田ａ降下火山灰は壁際の埋土中位に、白頭山火山灰は床面直上及び貼床として利用された土に若干混入する。なお、６層の暗褐色土は南東壁側には見られず、壁より１ｍほど内側の所にコの字状に厚く堆積する。この土はVIIC－１住居址では弧状に検出されたものである。

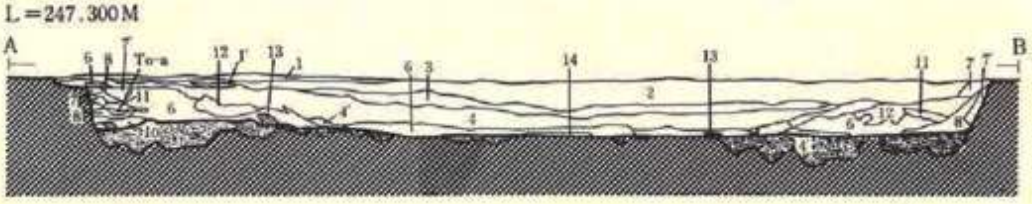
（平面形・規模）辺の中央部が僅かに膨らむが、南西―北東に長軸をもつ長方形である。規模は6.5m×5.5mである。

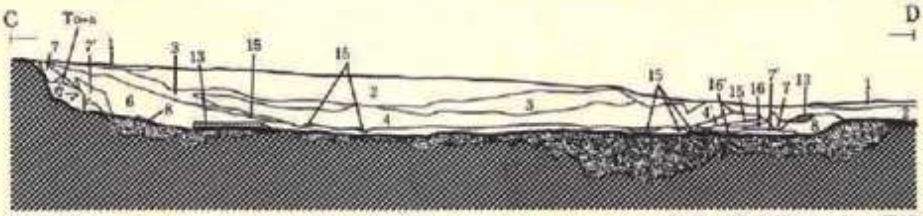
（壁）壁の高さは北西壁で52cmと最大を測る。南東壁は低くなり、出入口状の施設と思われる所では20cmとなる。南東隅の一部は土取りによって破壊を受けたため、一部は不明である。壁は褐色土を切ってほぼ垂直に立ち上がり、崩壊は見られない。

（床）南西側には壁から1.5m幅で北西―南東方向に板が敷かれている。板はすべて焼けて炭化している。板の幅は30cmほどで５列に敷いているが、一枚の長さは不詳である。北西側３分の１の板は直接地面に密着して敷かれているのに対して、他は根太を使用している。この根太の配置や板の出土状況からほぼ中央で継ぐ形に敷かれていたと推測される。板の厚さは概ね２～３cmであるが最大のものは４cmである。根太は４本使用されている。そのうち西端の一本は細い丸太材（直径３～４cm）で材質はミズキである。他の根太はすべて角材でしかも柄穴があけられている。柄穴が上を向いていることから柱を立てた可能性は否定できないが、出土状況からみて、むしろ古材を転用したものと考えられる。敷板及び根太はすべてクリ材である。

板が敷かれてある床は僅かに高くなっており、軟らかい。それに対して、他の床はやや低く、締まっている。カマド付近は更に少し低く硬く締まっているが、他は出入口状施設と思われる所もふくめて、特に硬い所はない。







1	10YR	2/3	黒褐色土		8	10YR	2/3	黒褐色土	(含,To-a)
1'	〃	〃	〃	やや赤い	9	〃	4/6	褐色土	
2	〃	2/2	〃		10	〃	3/3	暗褐色土	(含,焼土粒,炭)
3	〃	2/1	黒色土		11	〃	4/4	褐色土	
4	〃	1.7/1	〃		12	〃		暗褐色土	粗土
4'	〃	〃	〃	(含,褐色土粒)	13	5YR	2/4	極暗赤褐色土	焼土
5	〃	3/3	暗褐色土	(含,褐色土粒,パミス)	14				炭と焼土粒の混土
6	〃	3/4	〃	(含,焼土粒,炭)	15	10YR	5/4	にぶい黄褐色土	白頭山大山灰
7	〃	3/3	〃	混土	16	〃	3/3	暗褐色土	(含,白頭山大山灰)
7'	〃	〃	〃	(含,To-a少々)	16'	〃	〃	〃	

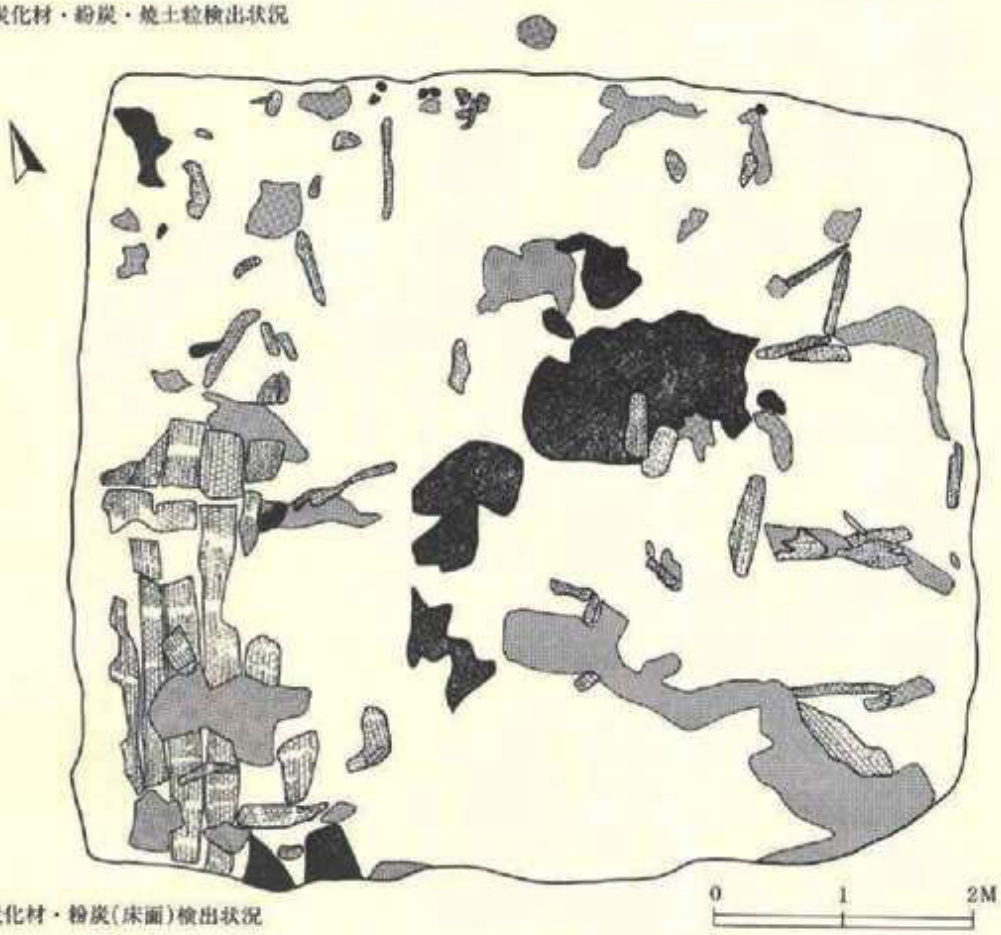
付表：柱穴状ピットの規模

柱穴番号	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
開口部(cm)	37	36	34	40	30	35	50	48
深さ(cm)	50	51	53	50	57	27	49	6

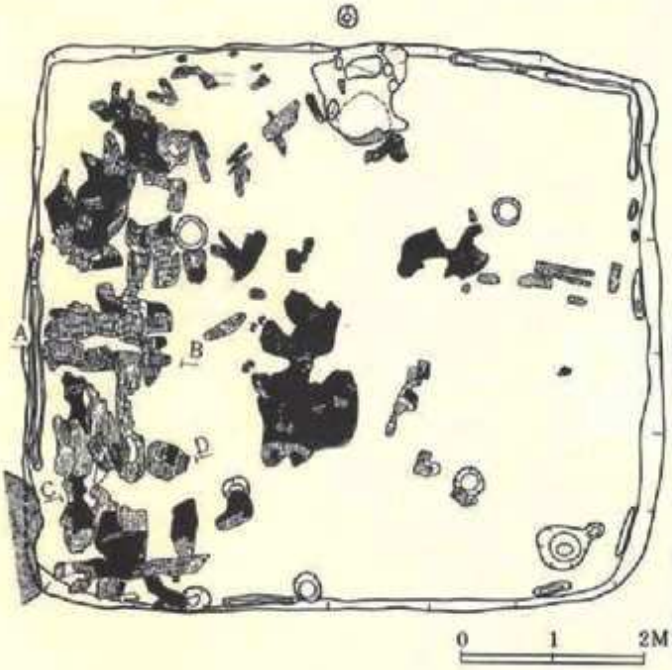
0　1　2M

第35図　Ⅵ D－1 住居址

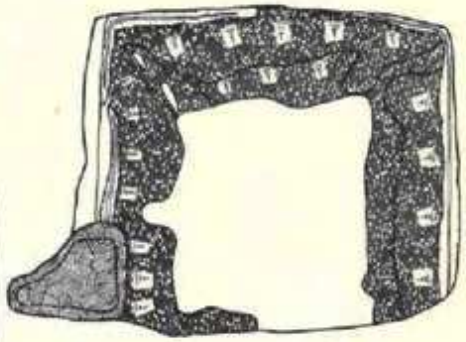
炭化材・粉炭・焼土粒検出状況



炭化材・粉炭(床面)検出状況

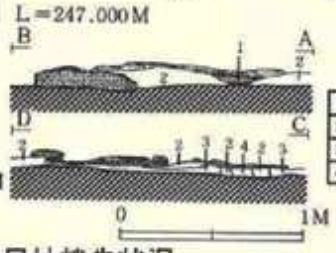


埋土6層検出状況



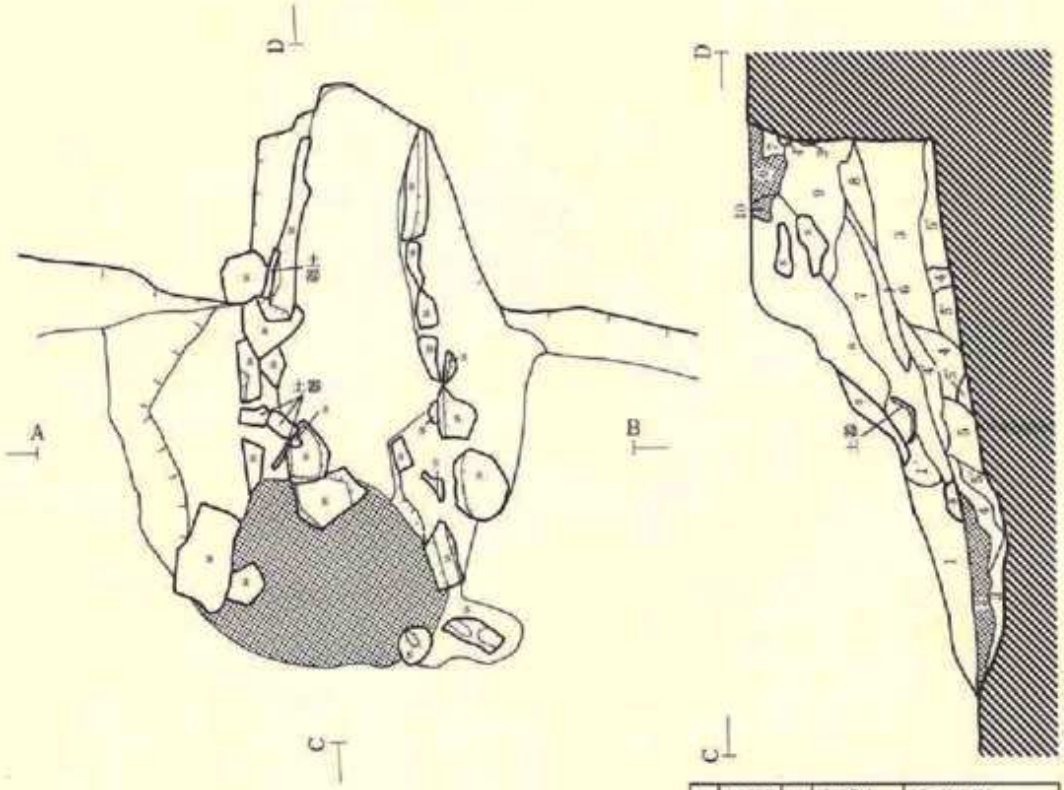
S与$\frac{1}{150}$

…埋土6層

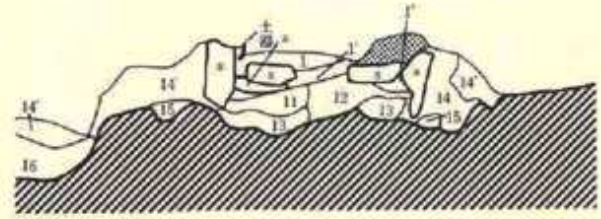


1	5YR	明赤褐色土	焼土
2	10YR	暗褐色土	(含,焼土粒)
3	〃	〃	粘土
4	〃	黄褐色土	

第36図　VI D－I 住居址焼失状況



L＝247.400M



1	7.5YR	3/4	暗褐色土	(含,焼土粒)
1'	〃	〃	〃	(含,粗大焼土粒)
2	2.5YR	5/8	明赤褐色土	焼土
3	10YR	4/6	褐色土	上位…焼土化
4	〃	4/3	にぶい黄褐色土	(含,黒色土)
4'	〃	〃	〃	(含,粗大焼土粒)
5	〃	5/6	黄褐色土	(含,黒色土)
5'	〃	〃	〃	(〃)硬い
6	5YR	3/4	暗赤褐色土	焼土
7	10YR	3/4	暗褐色土	(含,焼土粒,パミス)
8	7.5YR	2/3	極暗褐色土	(含,焼土粒)
9			黒色土	盛土(含,焼土粒,炭)
10	5YR	4/6	赤褐色土	焼土
11	7.5YR	4/4	褐色土	一部焼土化する
12	10YR	6/8	明黄褐色土	
13	7.5YR	2/2	黒褐色土	(含,灰白色火山灰)
14	〃	4/4	褐色土	
14'	〃	〃	〃	(含,焼土粒,炭)
15	〃	5/6	明褐色土	粘土
16	〃	3/3	暗褐色土	

0 1M

第37図　VI D－I 住居址，カマド

（柱穴）P_1～P_4の４本柱である。P_1とP_3は柱当りが長方形に検出されたが、P_2、P_4の当りは不明である。P_1の柱当りは30cm×13cm、P_3は35cm×13cmの長方形であり、掘り方の埋土は褐色の粘土が硬く詰め込まれている。柱当りの埋土は上位は褐色土、中～下位は暗褐色土と黒色土の混土で軟らかい。掘り方はP_1～P_4とも円形で規模は開口部径30cm、深さ50cmほどである。これらの主柱穴の配置は、カマド側の柱間が最長で3.5m、東側は2.6m、P_1－P_2、P_3－P_4は３mほどの台形状となっている。東壁際のやや南に寄った所に２基の柱穴が検出された。柱間は1.3mで、出入口状施設に伴うものと思われる。また、南東隅に深さ50cm弱の柱穴状ピットが検出されたが、性格等は不明である。

（カマド）西壁の中央部にある。両袖から煙出し部まで大小の角礫を芯材として使用し、きわめて入念に作っている。燃焼部と煙出し部との間の天井部には20cm×40cm×４cmの扁平な礫がある。石質はきわめてもろい凝灰岩である。煙道部は燃焼部から煙出し部に向かってせり上がるため、住居址外の煙道部はきわめて短い。燃焼部の焼土は層厚５cmで硬い。

（その他）○焼失状況について

西壁の大部分と南北の一部の壁際に厚さ0.5cmほどの炭化した板材が差し込まれた状態で出土した。しかし、遺存状態が非常に悪く、一部を除き側面からの実測はできなかった。北壁際で見られたものから、板の幅は25～30cm、長さは40cm以上と推定される。材質はすべてクリである。

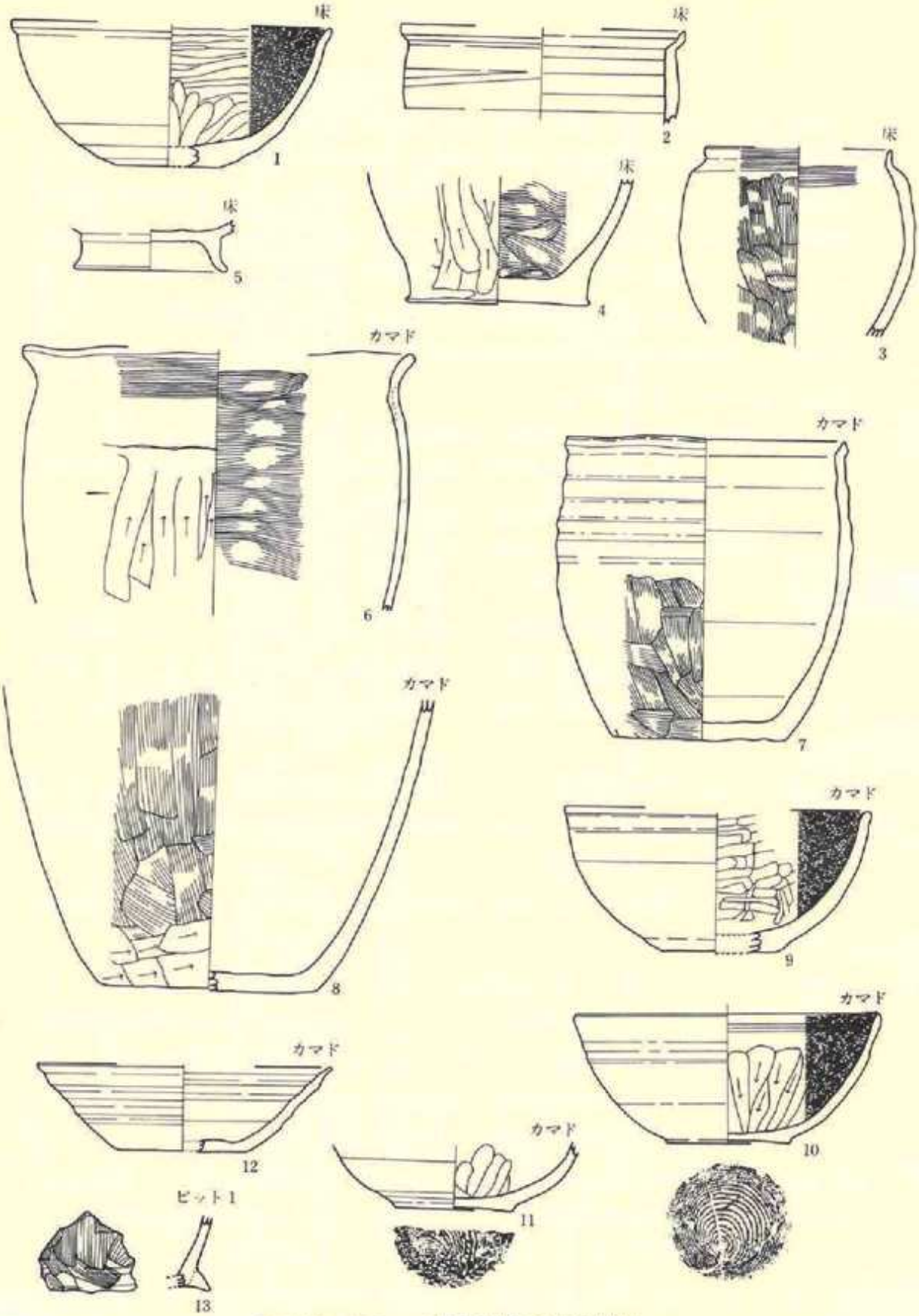
敷板は比較的良好な状態で残存していたが、柱及び垂木等は原形をとどめていない。僅かに処々で散見できる程度である。また、カヤと思われる草木の炭化材も北東側床面より出土した。

○住居址の外側の掘り込みについて

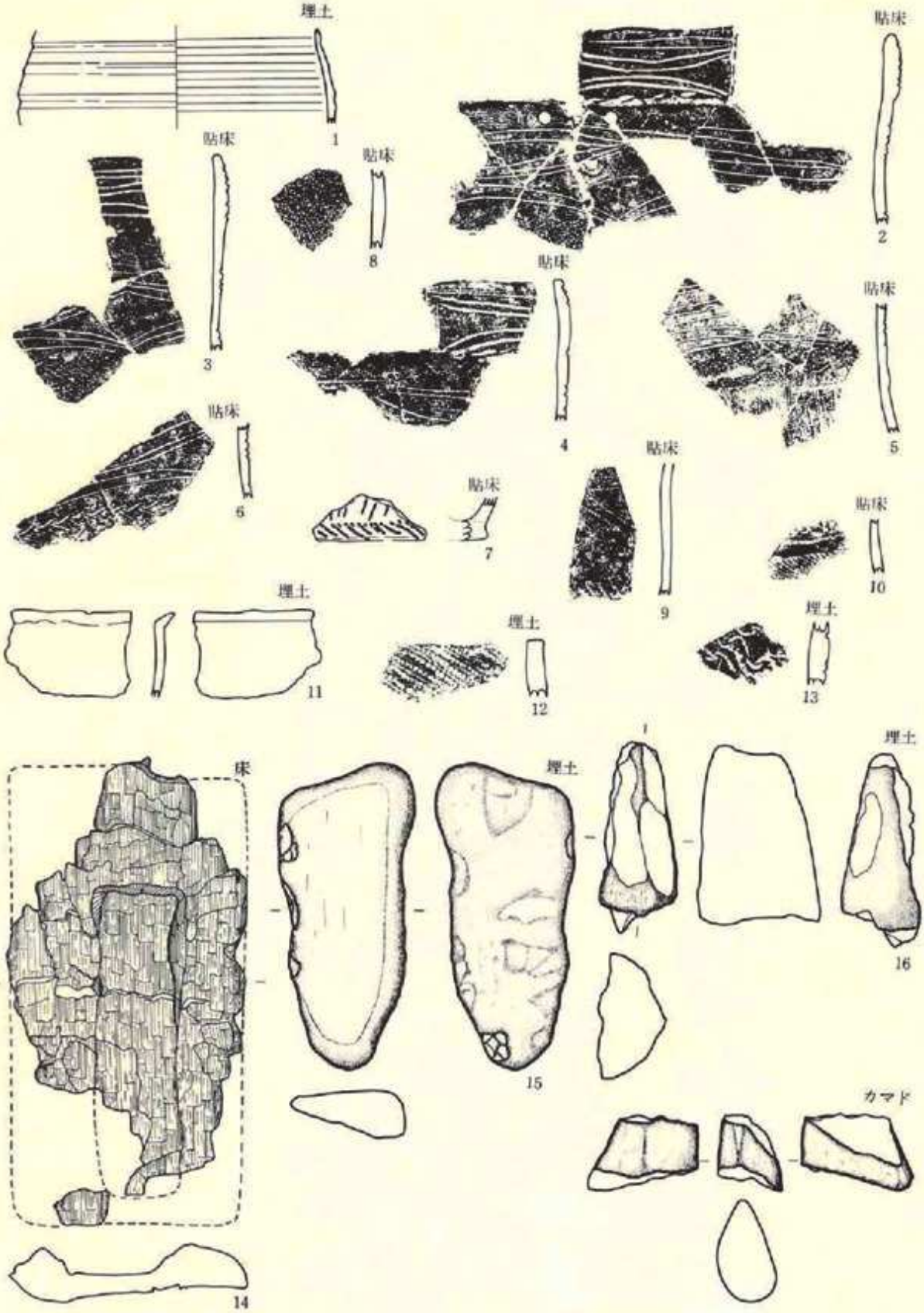
住居址の南辺に、深さ２～５cm、幅25～45cmの掘り込みが見られる。用途・性格等は不明である。

遺物（第38～40図、第７～８表、写真図版50）

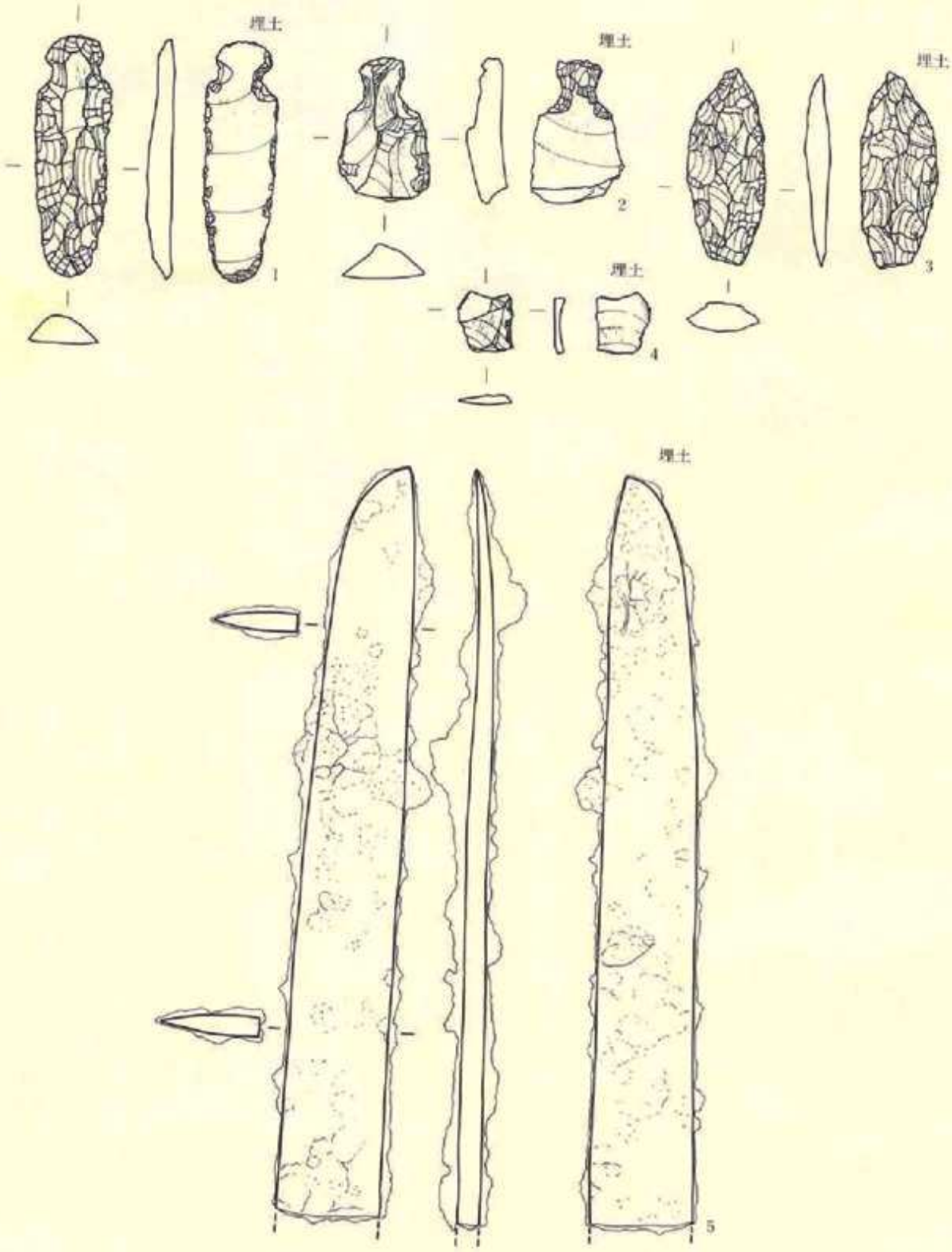
（土器）床面からも出土しているが（38－１～５）、その出土量は少なく、すべて土師器である。カマドから出土したものは38－６～11の土師器６点と12のあか焼き土器１点である。13はカマドの左側にあるピット１から出土した土師器である。39－１、39－11～13は埋土から、39－２～10は貼床を構成する埋土から出土したものである。39－２～７は同一個体と思われる。39－８と９も同一個体の可能性が強い。38－１、９～11は内面黒色処理の坏、12は非黒色処理の坏である。ただし、11は黒色処理されたものが剝落している。１は底部の残存がきわめて少ないことから詳細は不明であるが、再調整されている。９～11の底部は回転糸切り無調整である。これらの坏は立ち上がりもやや急角度で、口唇部も丸味をおびて立ち上がる。内面調整は１が体部下半から底部にかけて放射状に、体部は横位、体部上半は無調整となっている。それ



第38図　VI D－I 住居址内出土遺物(I)



第39図　VI D－I 住居址内出土遺物(2)



第40図　Ⅵ D－Ⅰ住居址内出土遺物(3)

に対して9は体部下半から底部にかけて放射状に調整した後、体部下半まで横位の調整が施される。10～11は放射状の調整のみが施される。以上の土師器に対して、12は全く調整されず、底部は回転糸切り無調整である。底部から大きく外傾し、口唇部は薄くなる。胎土も上記の坏に比し粗砂が混入しザラザラしている。色調も灰白色である。

38－2は鉢、3～4、6～8、13、39－1、11は甕である。38－3は小型の球胴甕であるが外はいずれも長胴甕と思われる。38－7は上半部のみロクロを使用し調整している。38－2と39－1はロクロ水挽きと思われる。38－2、3、7、39－1、11の口縁部は極めて短くほぼ直立する。6の口縁部は短く緩く外反する。38－4、7～8は平底、13は上げ底である。5は台付坏の台部と思われる。回転糸切り無調整の底部に台を貼付し、ロクロ調整している。

39－2～6は口縁部に2～3本を1組とする沈線が施文される甕の口縁部破片である。体部は細粒の撚糸文が縦走する。また、口縁部文様との境には2条の綾絡文が施文される。7はこの甕の底部と思われる。8～9は前述の甕と同一個体の可能性も考えられる。胎土、壁厚、縄文、色調も同じであるが、縄文の施文する方向が5とは一致しない。10は8、9に胎土等は類似するが、口縁部は地文の上に沈線が施される。

39－12は胎土に繊維を含む付加条文、13は連鎖沈線文である。

（石器）39－17はカマド内から出土する。他はすべて埋土内からの出土である。39－15は一面のみに磨滅痕が見られる。16は加熱を受け表面が薄く剝落し、詳細は不明であるが、石皿又は砥石の破片と思われる。一面のみであるが磨耗が著しい。17は石斧状の破片であり、両側面が磨耗している。40－1～2は石匙である。1は完形、2は先端部側が欠損する。3は扁平なポイントである。4は両端部が欠損しているが、調整痕を有する剝片石器と思われる。

（鉄器）40－5は埋土中位から出土した刀剣である。刀身の中頃から下半が欠損している。残存する長さ24.5cm、身幅3.4cm、厚さ0.7cmである。切先は反らず、むしろ幾分下がる。切先は丸味を帯びており短峰である。明瞭な棟はみられない。刀身は少くとも二重の部分に分けられ、鉄芯部分はほとんど腐蝕されず良好な遺存状態である。総重量は240gである。

（その他）39－14は根太に使用されていた木材の一部である。本材は木質部はなく、すべて炭化している。出土時点での木材は13cm×9cmほどの角材で長さは約85cmであった。図示した中央部には15.5cm×4cmの柄穴（はぞあな）が穿たれている。しかし、この柄穴は貫通はしておらず、約1cmほど残して止まっている。この柄穴は出土時点では暗褐色土のシルトがつまっていたもので、出土時に明瞭にそれと判別されたものである。材質はクリである。

遺構の時期

出土した土器により平安時代後葉（第2期）に属すると思われる。

ⅦD－2住居址

本住居址のカマド跡から多量の土師器が一括出土した。カマドは東向きから北向きに作り替えられている。規模は中程度で、埋土から白頭山火山灰と十和田a降下火山灰が検出される。

遺構（第41～42図、第2表、写真図版16）

（位置）尾根の上位に位置し、床面の高さは245.7mである。ⅥD－1住居址の北東18m、ⅦD－3住居址の南西8mに位置する。

（埋土）白頭山火山灰を含む黒～黒褐色土と、十和田a降下火山灰がブロック状に混入する黒褐色土の2層に大別される。掘り込みが浅いため、斜面下位側の埋土は一部流失している。貼床を構成する埋土の一部に十和田a降下火山灰が混入する。焼失住居址のため、埋土の広い範囲に焼土粒や粉炭・炭化材が混入している。しかし、原形をとどめる炭化材はほとんどない。

（平面形・規模）西辺が4mで、他の三辺は4.3mを測る。やや歪つな方形である。長軸方向はほぼ南北線に沿うが、約10度西偏する。

（壁）掘り込みが浅く、壁の高さが最大32cmである。南壁の一部は流失している。

（床）ほぼ水平である。北西隅付近は深さ20cmの不整形な掘り込みがある。底部やその周囲には淡い焼土がまだらに形成されている。この掘り込みの上には黒褐色土の貼床が作られているが、それほど硬く突き固められたものではない。この掘り込みの南側に平面プランがほぼ円形で直径55cm、断面形は皿状で深さ20cmのピットがある。カマドの右側には直径45cm、深さ12cmの同様のピットが作られている。また南東隅にはやや不整形ではあるが、深さ20cmほどのピットが作られている。床面の掘り方は南東側の一部と南辺にみられるのみである。全般に床は硬く締まっている。西壁の北側をのぞき、壁際に周溝が回る。南西隅付近は小さな柱穴が連続する。

（柱穴）P_1～P_4の4本柱である。P_2とP_3は南壁際に寄る。柱間は南北3～3.2m、東西2mで長方形の配置をとる。深さは概ね40cmほどである。P_1とP_4はやや不明瞭ではあるが柱当りが検出された。柱当りは25～30cm×15cmの長方形をなし、掘り方の埋土は硬く締まっており、柱当りの埋土とは区分される。P_2とP_3は柱当りは不明であるが、掘り方の形状からP_1、P_4と同様の柱を使用していたと思われる。建て替え等は不明である。

（カマド）カマドは三期にわたって作り替えが行われている。第1期は最も古い時期で東向きに設置されたものである。主体部は完全に破壊され、貼床が同所を覆っているため、燃焼部に形成された焼土が僅かに残存しているのみである。煙道部は刳貫き式で、長さ1.5mである。煙道部の上面まで削平されている。煙出し部は40cmほど遺存している。このカマドは東壁の中央部よりやや南に寄った所に設置されたものであるが、このカマドは作り替えがあったかどうかは不明である。第2期は北壁の中央部に設置されたものである。煙道部は半円状に掘り込んで

構築されるが、周囲に礫等を埋置された痕跡は見られない。長さは1.2mである。主体部の構造は不明であるが燃焼部は鍋底状に掘り込んでおり、焼土が形成されている。その焼土の状況から推測すると、両袖は次の第3期とほぼ同じであるが、焚き口部は第3期より手前にあったと思われる。第3期は最も新しい時期である。第2期のカマドを部分改良したもので、煙道部は第2期と同じである。主体部は比較的大きな円礫や亜円礫を使用して構築している。使用された構築土は下部に僅かに残っているが、大半は締まりの悪いシルト状となっており原形をとどめていない。燃焼部は掘り込まれず平坦で、床面の高さとほぼ同じである。焼土は奥に帯状に形成されるが締まりの悪いものである。焚き口部には70cm×30cm×12cmの大きく扁平な角礫が設置されている。締まりの悪い凝灰岩で、VID－1住居址のカマド際で検出されたものと形状・石質とも同一である。このカマドが廃棄される時点で燃焼部に多量の土器が廃棄された。全ての土器片をとり上げ復元を試みたが完形品はなく、また同一個体と思われるものが僅か数片のみの土器もあることから、これらは破損した土器をここに投棄したものと考えられる。

（その他）○北西隅の掘り込みについて

北西隅の壁際から鉄滓が出土した。同付近には不整形な掘り込みと焼土が検出されているが、これは貼床の下からの検出である。鍛冶場等の何らかの施設が作られていた可能性がある。その場合、カマドが東壁に設置されていた時期であるかどうかは不明である。

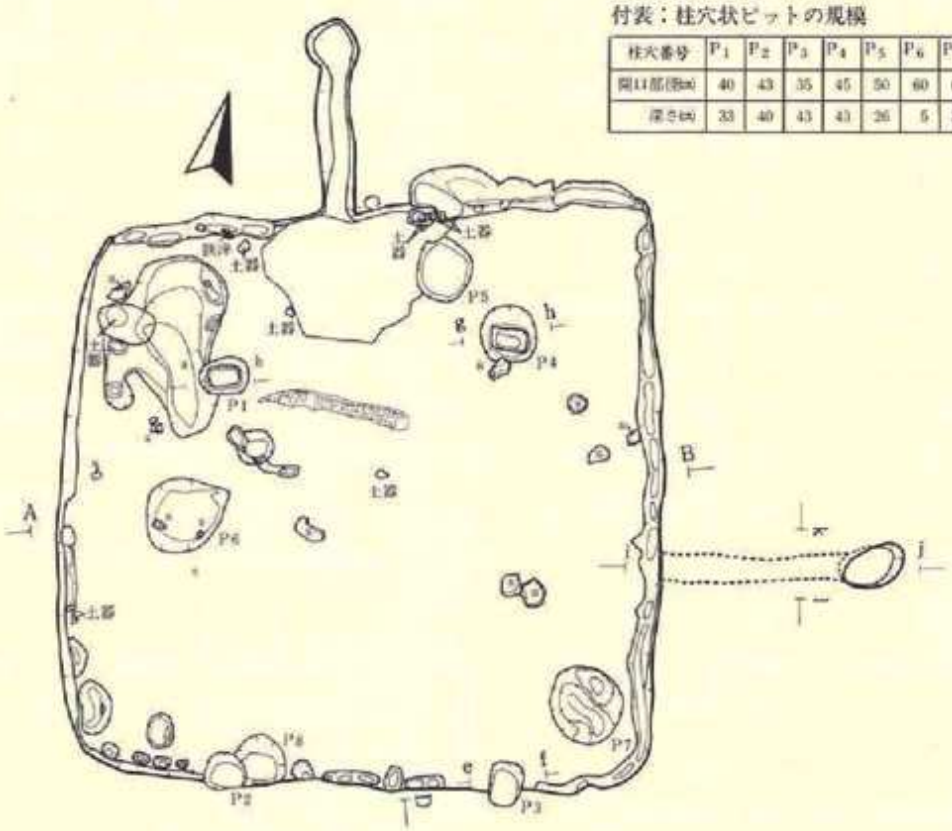
遺物（第43～47図、第7～8表、写真図版52～54）

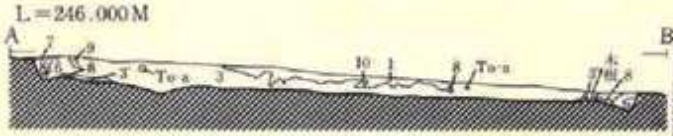
（土器）43－1～8は床面からの出土、44－1～6、45－1～7はカマド内から出土したものである。43－1～6は長胴甕である。ロクロは使用されず、口縁部は短く緩く外反する。調整は口縁部がヨコナデ、体部は縦位にヘラナデ、内部はヨコナデとなるが、概して粗雑である。43－4の胎土は粗砂や小石が多量に含まれザラザラする。43－5は体部の調整はむしろヘラケズリ状となっている。43－7は内面黒色処理した杯である。内面調整は体部下半まで横位にヘラミガキが施され、底部のみ放射状にヘラミガキ調整となる。底部は回転糸切り無調整である。43－8は須恵器の甕の体部破片である。外面は平行叩き目文、内面は放射状当て具痕が見られる。44－1～6はすべて長胴甕である。44－3はやや体部が膨らみ、44－6は口縁部が若干長いほかは床面から出土した長胴甕と成形・彫整とも同じである。45－1は口縁部の成形に伴う多量の指頭圧痕が明瞭に残っており、体部の成形痕（輪積み又は巻き上げ痕）も残るなど調整は粗雑である。45－2、3は比較的口縁部が長い。以上の特徴はあるが、これらも前述の長胴甕と基本的な差はない。45－4～6は長胴甕の体部下半で底部は砂底である。45－7は平底である。また、図化を省略したが、あか焼き土器の底部片と若干の縄文土器片が出土した。これらはいずれも埋土中からの出土である。

（石器）47－1はカマドから、47－3は埋土中から出土したほかはすべて床面から出土した。

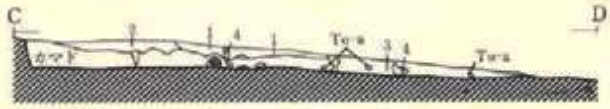
付表：柱穴状ピットの規模

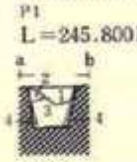
柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
開口部(cm)	40	43	35	45	50	60	60	40
深さ(cm)	33	40	43	43	26	5	36	11





1	10YR	2/1	黒褐色土	(含,白頭山大山灰)
2	〃	3/3	〃	(含,白頭山大山灰)
3	〃	3/2	〃	(含,To-a,焼土粒,炭)
3	〃	〃	〃	やや硬い
4	〃	4/4	褐色土	
5	〃	2/3	黒褐色土	
6	〃	3/4	暗褐色土	(含,To-a)
6'	〃	〃	〃	(To-aを含まない)
7	〃	3/1	黒褐色土	
8	〃	4/4	褐色土	黒色土混入
9	5YR	4/6	赤褐色土	焼土
10	7.5YR	3/4	暗褐色土	To-aと黒色土との混入





1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,白頭山大山灰)
2	〃	4/6	褐色土	
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	4/4～2/4	褐色土	混土

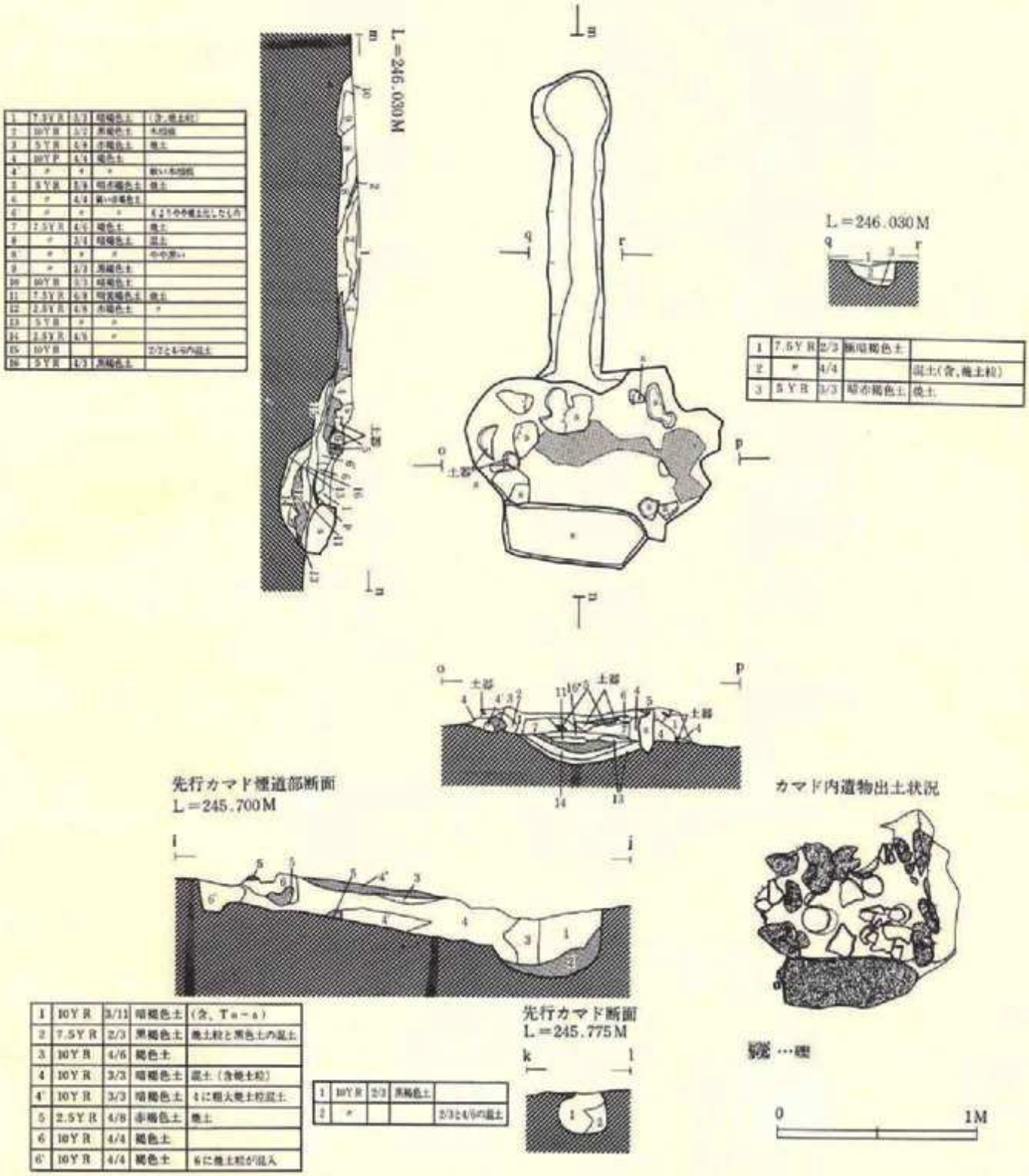
1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,白頭山大山灰)
2	〃	〃	〃	(含,黒色土,To-a)

1	10YR	4/4	褐色土	混土
2	〃	3/4	黒褐色土	〃

1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,粒炭)
2	〃	3/4～2/2	〃	混土
3	〃	4/4	褐色土	混土(硬い)

0　1　2M

第41図　Ⅶ D－2住居址



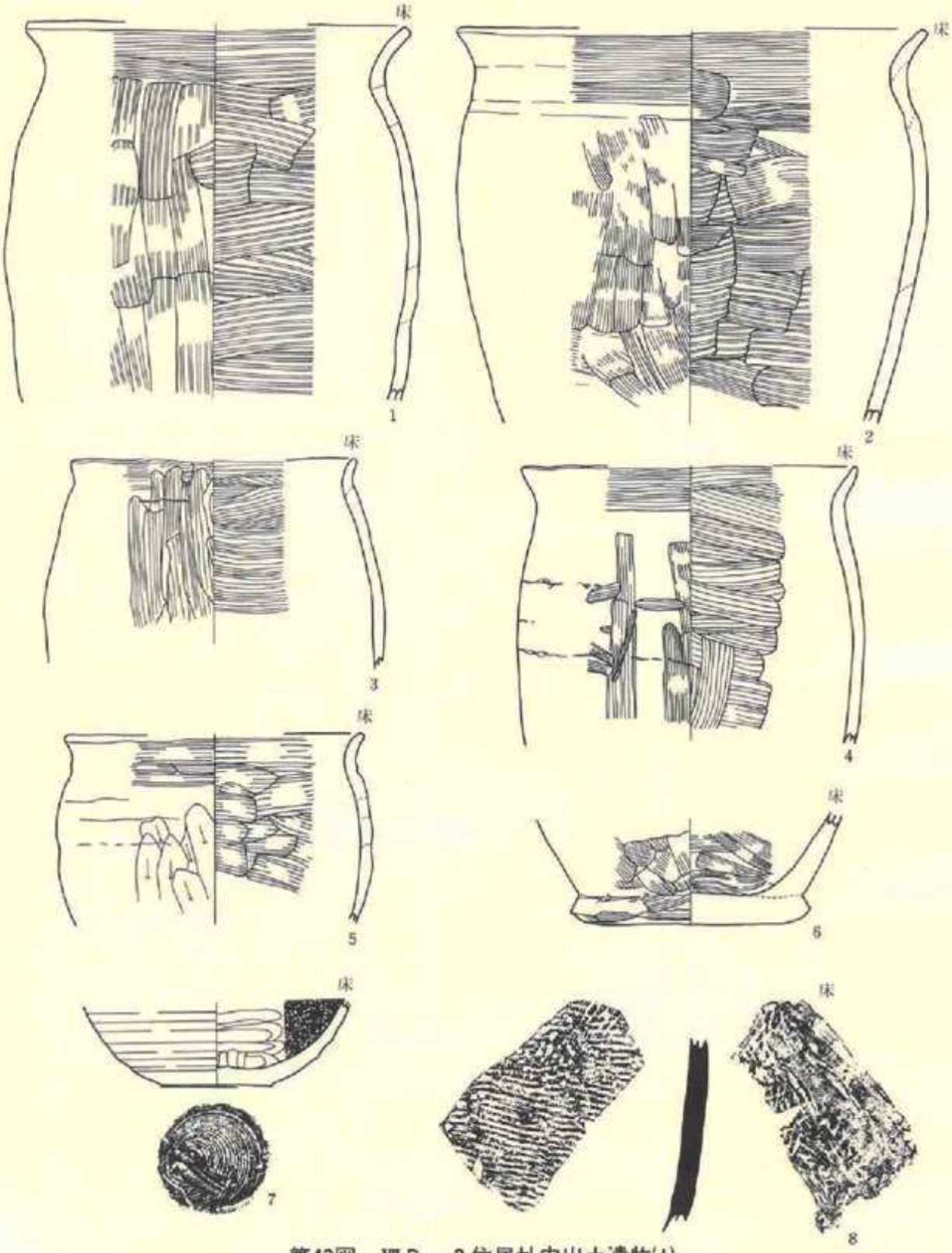
1	7.5YR	2/3	暗褐色土	(含、焼土粒)
2	10YR	2/2	黒褐色土	木炭層
3	5YR	4/6	赤褐色土	焼土
4	10YR	4/4	褐色土	
4	〃	〃	〃	軟い木炭層
5	5YR	3/8	明赤褐色土	焼土
6	〃	4/4	黄いい赤褐色土	
6	〃	〃	〃	6より小焼土がしたしく方
7	7.5YR	4/6	褐色土	焼土
8	〃	3/4	暗褐色土	混土
8	〃	〃	〃	中中黒い
9	〃	2/3	黒褐色土	
10	10YR	3/3	暗褐色土	
11	7.5YR	6/8	明黄褐色土	焼土
12	2.5YR	4/8	赤褐色土	〃
13	5YR	〃	〃	
14	2.5YR	4/8	〃	
15	10YR			2/2と4/6の混土
16	5YR	4/3	黒褐色土	

1	7.5YR	2/3	極暗褐色土	
2	〃	4/4		混土(含、焼土粒)
3	5YR	3/3	暗赤褐色土	焼土

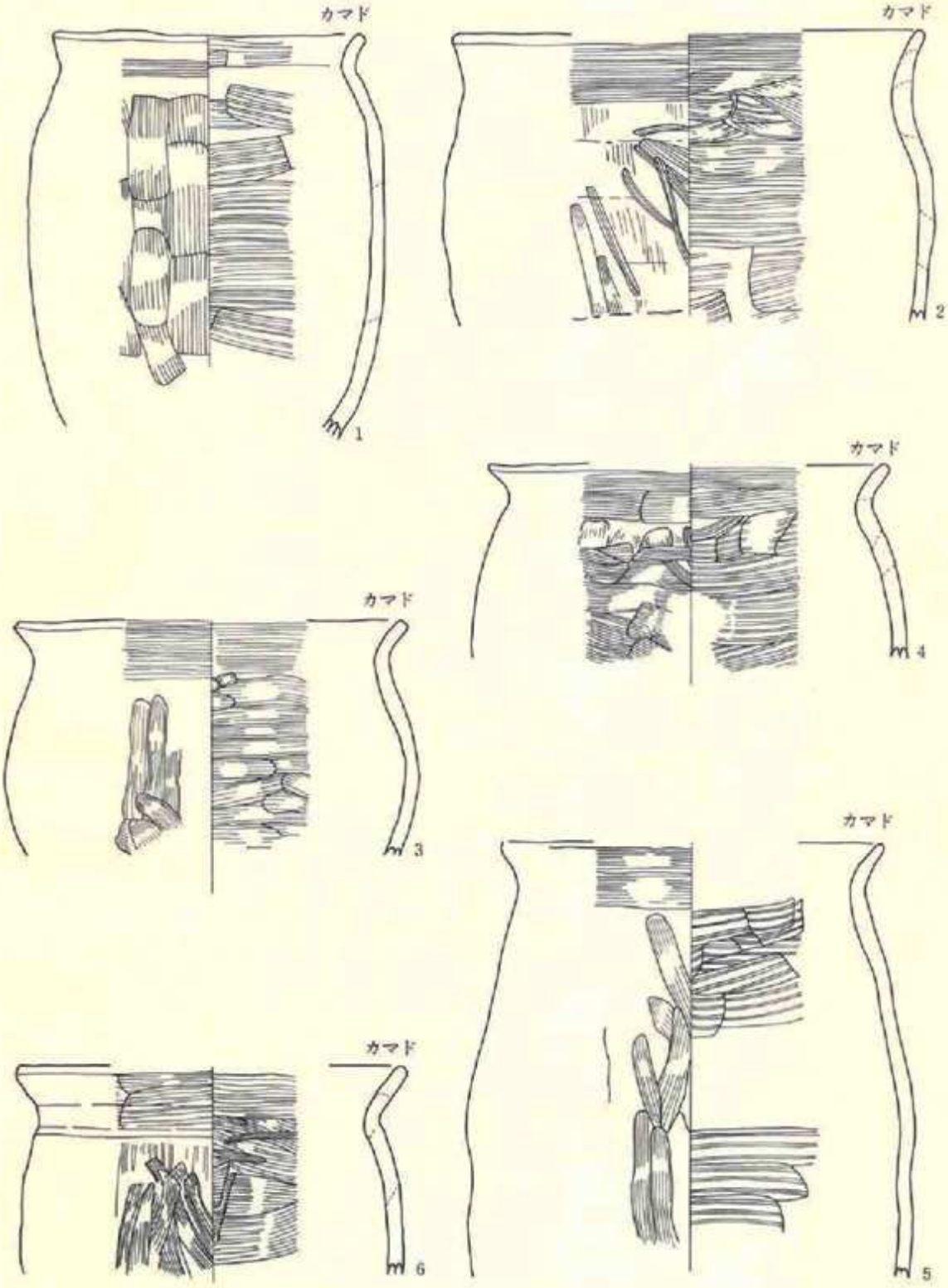
1	10YR	3/11	暗褐色土	(含、Tm－a)
2	7.5YR	2/3	黒褐色土	焼土粒と黒色土の混土
3	10YR	4/6	褐色土	
4	10YR	3/3	暗褐色土	混土 (含焼土粒)
4'	10YR	3/3	暗褐色土	4に粗大焼土粒混土
5	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
6	10YR	4/4	褐色土	
6'	10YR	4/4	褐色土	6に焼土粒が混入

1	10YR	2/3	黒褐色土	
2	〃			2/3と4/6の混土

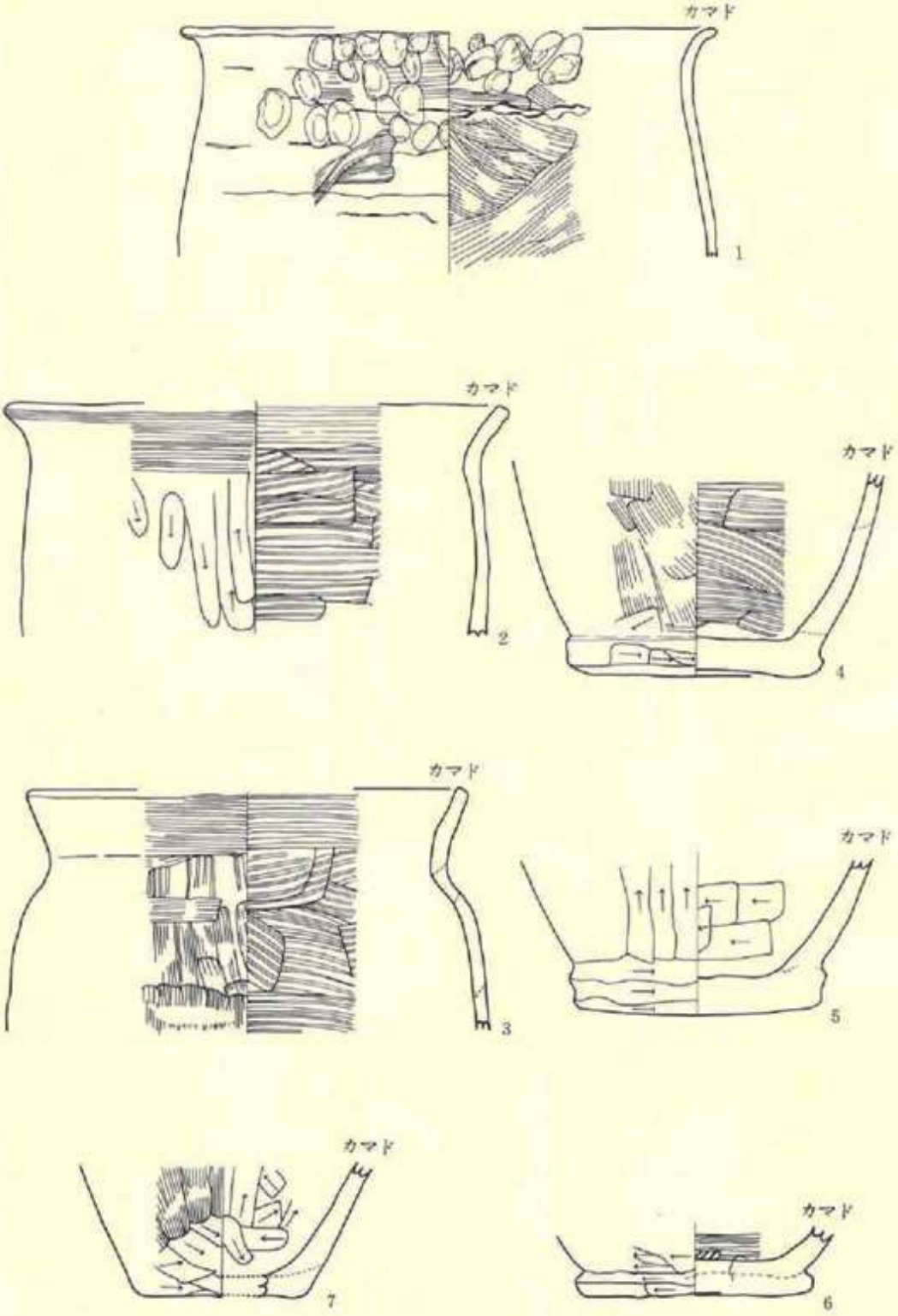
第42図　Ⅶ D－2住居址カマド及び遺物出土状況



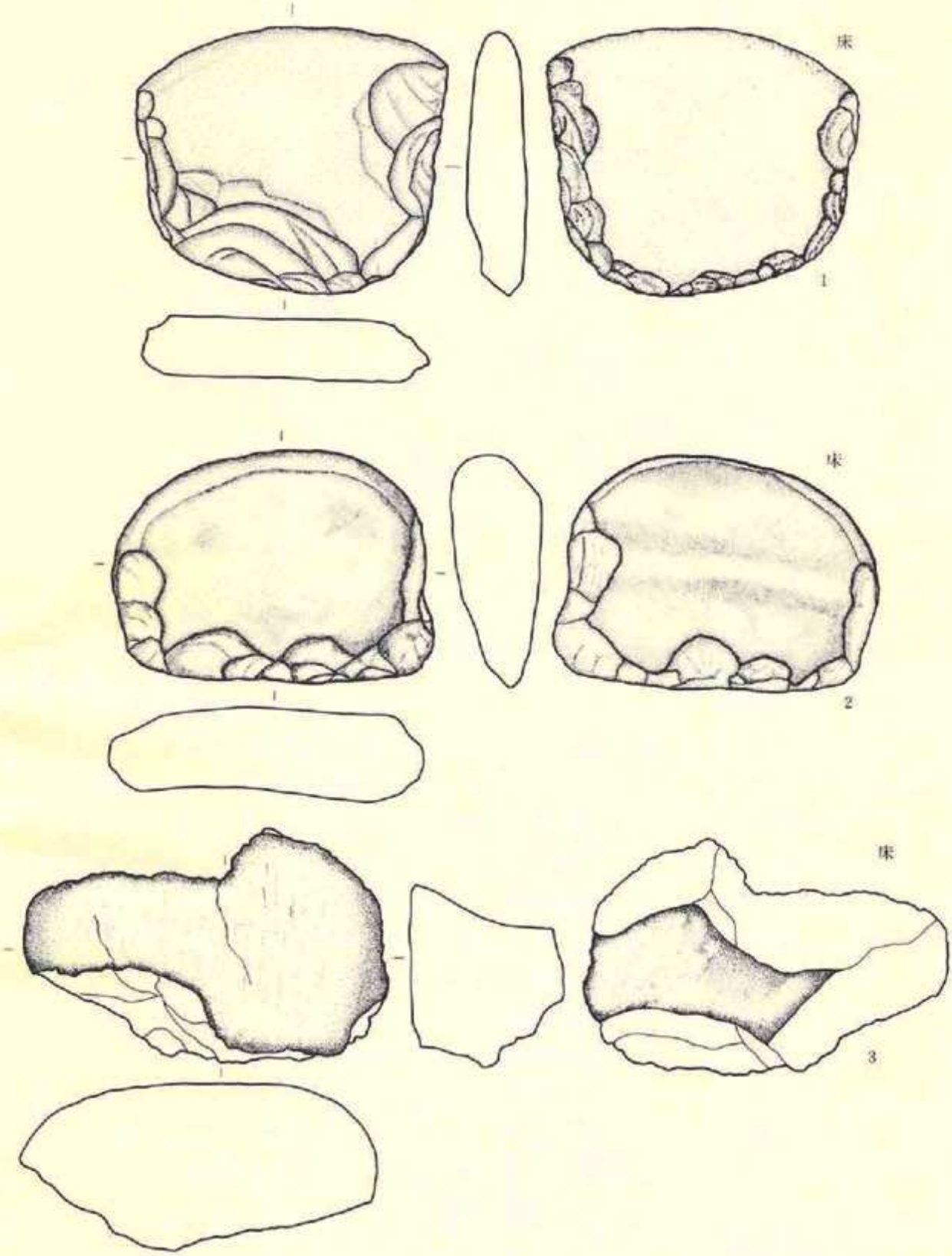
第43図　ⅦＤ－２住居址内出土遺物(1)



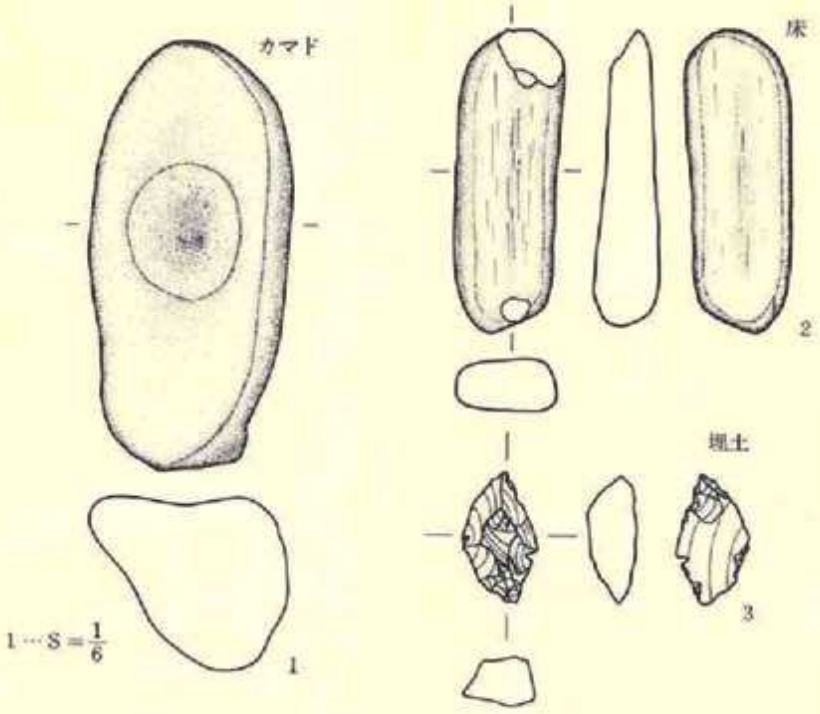
第44図　ⅦＤ－２住居址内出土遺物(2)



第45図　ⅦＤ－２住居址内出土遺物(3)



第46図　ⅦＤ－２住居址内出土遺物(4)



第47図　ⅦＤ－２住居址内出土遺物(5)

46－１～２は半円状扁平打製石器である。しかし、両面は磨耗しているが、所謂直線の刃部に当る部分には何らの加工痕や使用痕は見られない。また、曲線部は両面から粗い調整が加えられるが、その剥離面にも使用痕は見られない。46－２は一方の側面中央部が溝状に磨耗しており、砥石に転用された可能性も考えられるが、溝は極めて浅くかつ明瞭な擦痕を伴っているわけではない。46－３は両面が摩耗し、規則的な擦痕が見られることから、石皿又は砥石として使用されたものと思われるが大きく欠損しているため詳細は不明である。加熱を受け、欠損面も含めて全体が赤色化し、欠損面はもろくなっている。47－１はカマドの芯材として利用されていたものである。１面が薬研状に凹んでおり石皿として使用されたと思われる。47－２は２点が接合したものであるが、なお一部が欠損する。両面が明瞭に磨耗しており、規則的な擦痕も見られる。砥石である。両端に一部欠損が見られる人為的な敲打によるものかどうかは不明である。47－３はマイクロ・コアと思われる。

本住居址の床面から20数点の亜角礫、亜円礫、円礫が出土した。出土地点には何らの規則性は見られず、また個々の礫にも加工痕や使用痕は見られなかったため図化は省略した。石質は安山岩系統のもので、大きさは約25cm～10cmほどのものである。

遺構の時期

出土遺物により平安時代後葉（第２期）と思われる。

ⅦD－3住居址

本住居址は斜面に作られているため、斜面下位側の壁はほとんど流失している。焼失住居址ではあるが遺物の出土は少ない。埋土に白頭山火山灰と十和田a降下火山灰が混入する。

遺構（第48～49図、第2表、写真図版17）

（位置）ⅦD－1住居址やⅦC－1住居址が検出された尾根の頂部より一段低い南東斜面に位置する。ⅦD－2住居址から北東約8mに位置する。床面の高さは244.9mである。

（埋土）黒色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に大別される。斜面上位側のカマド付近の埋土中に十和田a降下火山灰がブロック状に混入する（埋土12）。床面直上を覆う埋土には白頭山火山灰が断続的にではあるが、層状に広く堆積する（埋土11）。床面及び床面直上の埋土には焼土粒や炭化材が混然となって堆積するが、層厚は一部を除き10cm未満である。炭化材は一部を除きほとんど原形をとどめていない。材質はほとんどがクリでミズキが若干混じっている。

（平面形・規模）南西壁が北東壁より70～80cm長いため、やや歪つな長方形である。規模は4.3m×3.8mである。長軸方向は北西一南東であり、長軸線は真北より約45度西偏する。

（壁）壁の高さは北西壁で最大41cmを測るが、斜面下位側は1～2cmほど遺存しているのみで壁の大部分は流失し、僅かに床の範囲を確認できる程度である。壁の立ち上がりはほぼ垂直に立ち上がる。

（床）水平かつ平坦である。南側はやや硬く締まっている。掘り方は中央より斜面下位側の床に見られる。東隅は内側に入りこむ。その東壁際にのみ周溝が検出された。

（柱穴）なし。

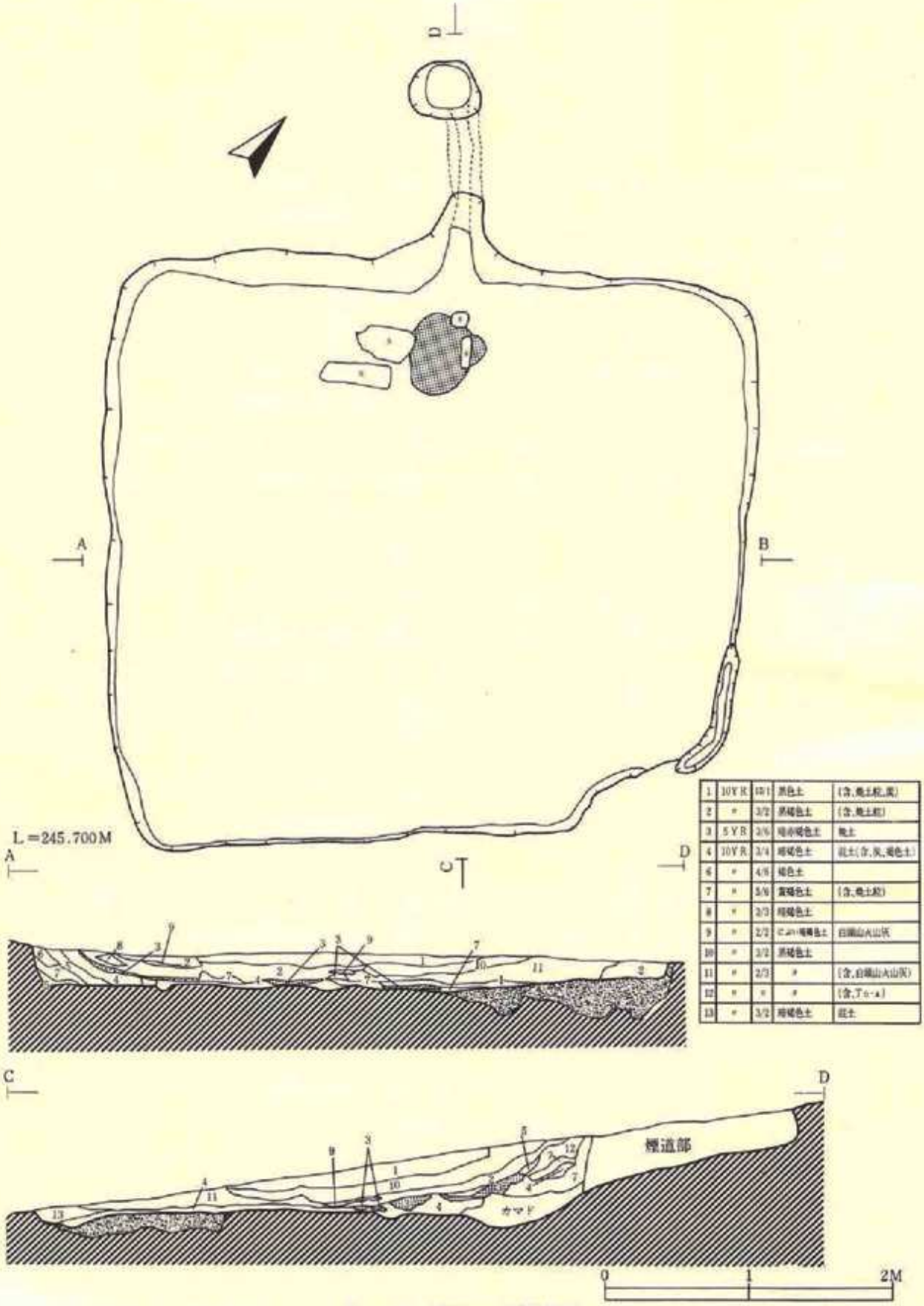
（カマド）北西壁中央部に位置する。扁平な亜角礫と土器片を芯材として作られている。構築土は芯材の下部に若干原形をとどめる形で遺存してはいるが、その大半は締まりの悪いシルト状となり、焼土粒灰と黒褐色土が入り混じり原形をとどめていない。燃焼部は鍋底状に凹んでおり、そこに形成された焼土は3cmほどの厚さである。煙道部は刳貫き式であるが、煙出し部が斜面上位にあるため、煙出し部に向かって下降せず、斜面に沿って上がっていく。カマドの左側にはⅦD－1住居址やⅦD－2住居址で見られたものと同様の扁平な石が2個放置されており、人為的な破壊を受けたことを窺わせる状況である。

（その他）○遺物の出土状況について

遺物の出土はカマドの周囲に限られ、その大半は土師器の小破片がほとんどである。また、カマドの左袖の下部から鉄製の軸が付いた紡錘車1点が出土した。

遺物（第50図、第7表、写真図版55）

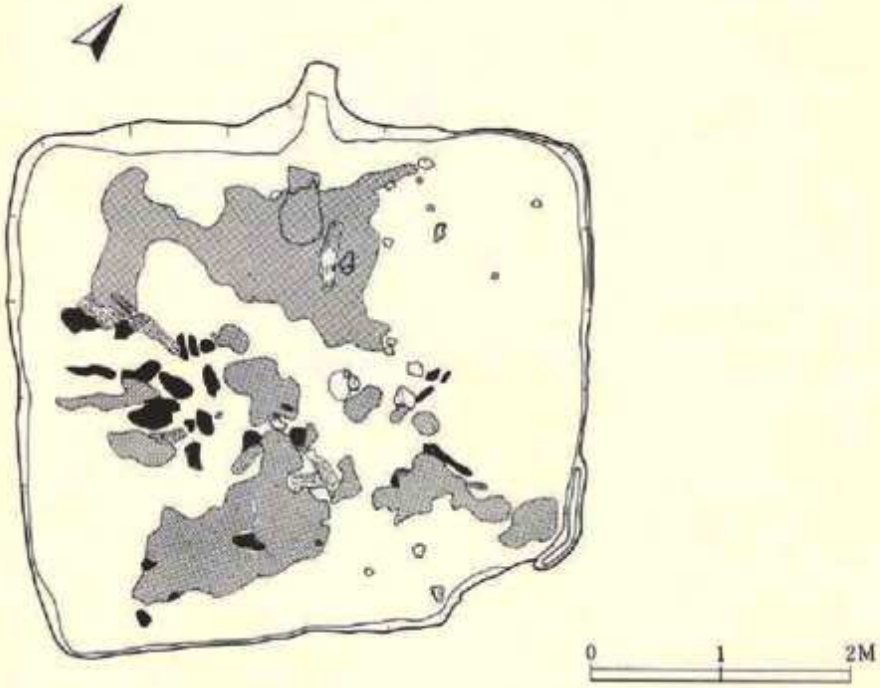
（土器）1～3はカマド内、4～5は埋土から出土する。1はほとんど体部が膨らまない長胴



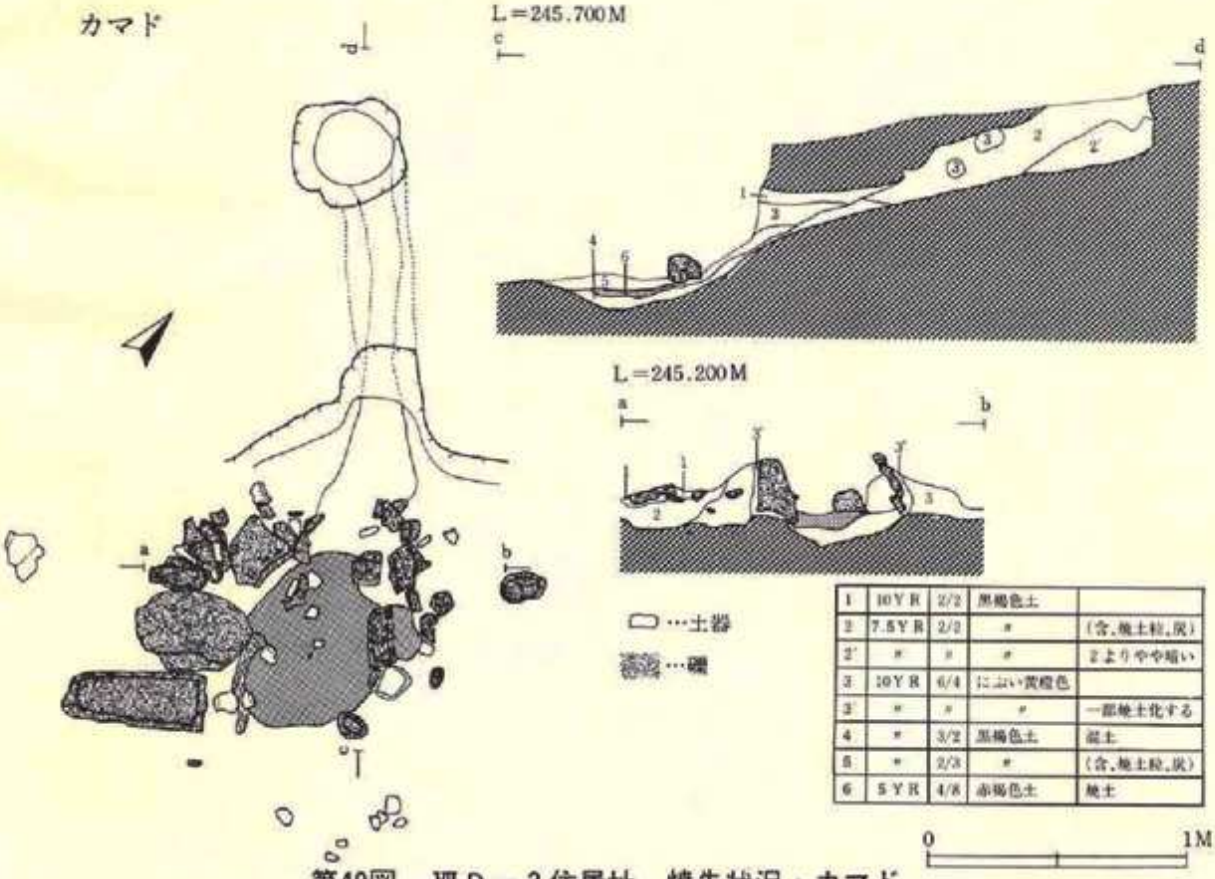
1	10YR	3/1	黒色土	(含,焼土粒,炭)
2	〃	3/2	黒褐色土	(含,焼土粒)
3	5YR	2/6	暗赤褐色土	焼土
4	10YR	3/4	暗褐色土	貼土(含,炭,褐色土)
6	〃	4/6	褐色土	
7	〃	5/6	黄褐色土	(含,焼土粒)
8	〃	3/3	暗褐色土	
9	〃	2/2	ごく暗褐色土	白頭山火山灰
10	〃	3/2	黒褐色土	
11	〃	2/3	〃	(含,白頭山火山灰)
12	〃	〃	〃	(含,Tc-a)
13	〃	3/2	暗褐色土	貼土

第48図　Ⅶ D－3 住居址

焼失状況

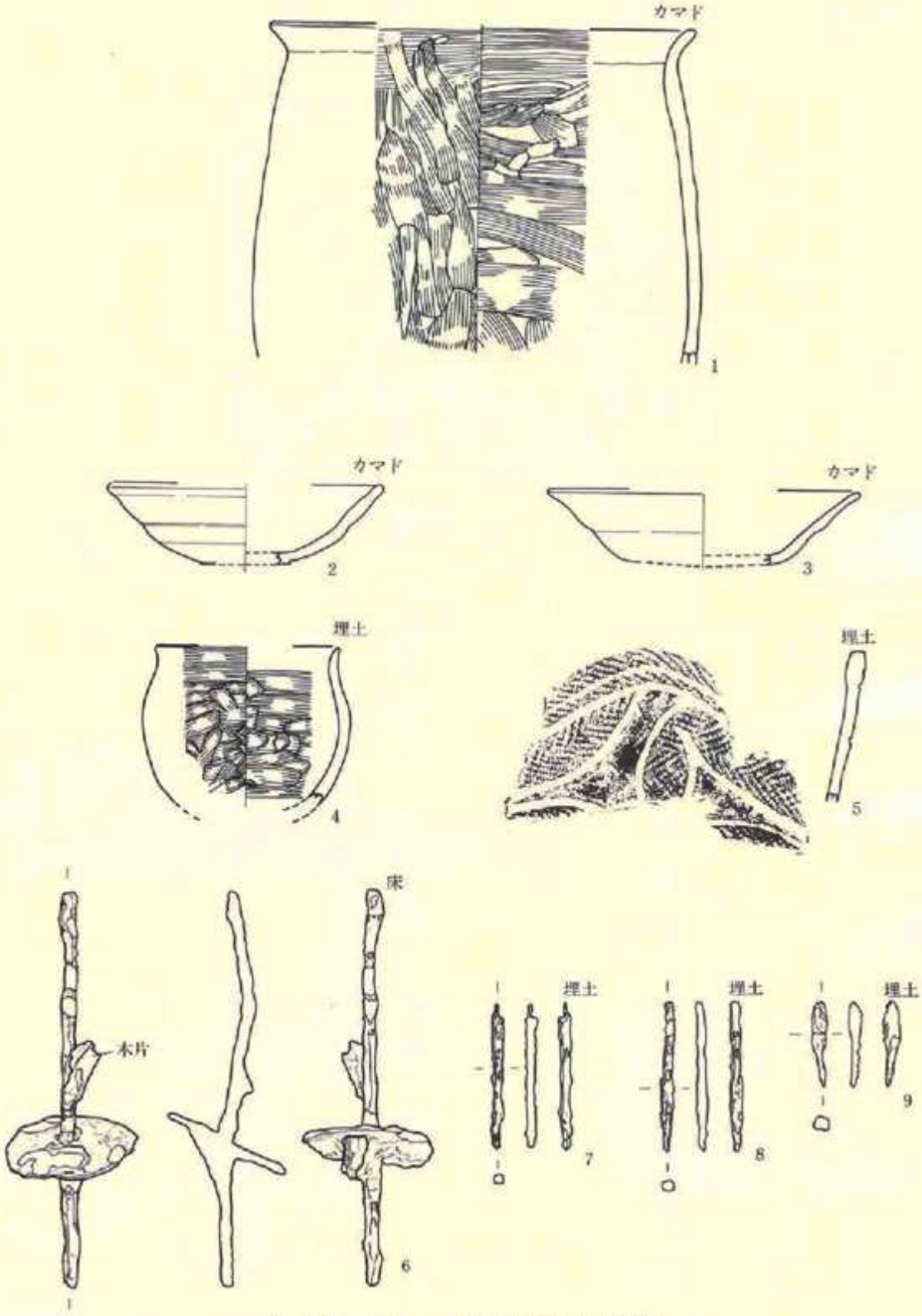


カマド



1	10YR	2/2	黒褐色土	
2	7.5YR	2/2	〃	(含、焼土粒、炭)
2'	〃	〃	〃	2よりやや暗い
3	10YR	6/4	にぶい黄橙色	
3'	〃	〃	〃	一部焼土化する
4	〃	3/2	黒褐色土	掘土
5	〃	2/3	〃	(含、焼土粒、炭)
6	5YR	4/8	赤褐色土	焼土

第49図　ⅦD－3住居址、焼失状況・カマド



第50図　ⅦD－3住居址内出土遺物

甕である。口縁部は短く外反する。焼成は良好である。2～3は底部が欠損しており不明な点もあるが、あか焼き土器である。2は僅かではあるが体の中央部が段状になっている。どちらも胎土は粗砂混じりのザラザラし、良質のものではない。4は小型の鉢である。胎土は良質で焼成も良好である。器壁は入念にナデ調整が施され、色調は明赤褐色である。内部の体部下半にモミ痕がみられる。モミ痕の大きさは5mm×3mmである。5は鉢の波状口縁である。入組文状に磨消縄文が施文される。

図化を省略した土器の大部分は土師器の甕の体部片であるが、他には内面黒色処理した坏の小破片2点も出土している。

（石器）なし。

（鉄器）6はカマドの構築土内から、7～9はカマド周辺の床面から出土した。6は軸も装塡した紡錘車である。軸の長さは18.7cm、紡錘車の直径は6.2cmである。軸の一部に木片が付着している。7～9は7～4.5cmの釘状の鉄製品である。7～8は両端部が、9は一方の端部が欠損している。横断面はいずれも四角形である。

遺構の時期

出土した遺物のうち、5を除く遺物と遺構の状態から、平安時代後葉（第2期）と思われる。

ⅦD－1住居址

本住居址はⅦD－1ピットによって中央部を切られている。埋土に白頭山火山灰と十和田a降下火山灰が含まれている。カマドは北西壁の中央部に設置される。焼失住居址である。

遺構（第51～52図、第2表、写真図版18）

（位置）尾根の中位に位置し、床面の高さは242.7mである。ⅥD－住居址の東25mに、ⅦD－2住居址の南東17mに位置する。

（重複）ⅦD－1ピットによって切られる。

（埋土）ⅦD－1ピットに切られたため詳細は不明であるが、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別される。埋土中～下位には焼土粒と炭化物が多量に混入する。5層、7層、11層には白頭山火山灰が層状に混入する。9層及び9層相当面の埋土下位には焼土粒及び炭化物に混じって十和田a降下火山灰が小ブロック状に混入するが、その量は少ない。自然堆積と思われる。

（平面形・規模）正方形で、一辺が3.2mである。南北の軸線は真北より55°西偏する。

（壁）掘り込みは深く、西壁で最大74cmを測る。中～上位の壁はやや崩壊が進み外反する。南東壁中央部の上位は一部削られている。

（床）水平かつ平坦である。締まっているが、特に硬い所はない。カマドのある北西壁を除い

て、周溝が回る。カマドの左側には深さ25cmの楕円形のピットがある。右側には皿状の凹みがあり、焼土粒や炭化物が埋土内に多量に混入している。しかし、明瞭な掘り込みは見られず、所謂ピットとは見做されない。

（柱穴）検出されなかった。

（カマド）北西壁の中央部に位置する。亜角礫と土器片を芯材として造られているが、右袖が比較的遺存しているほかは、構築土がシルト化し、草木灰やシルト状の焼土と混じり原形をとどめていない。燃焼部には2～4cmの焼土が形成されているが、特に掘り込まれた様子は見られない。支脚は長さ12cm、厚さ4～6cmの亜角礫を使用している。煙道部は刳貫き式であるが、斜面上位に向かうため、煙出し部に向かって上がる。煙道部の長さは80cmほどである。

（その他）○埋土と火山灰の堆積について

本住居址の埋土を切ってVID－1ピットが造られたが、同ピットの上位の埋土は本住居址の埋土が流れ込んだものがほとんどである。その埋土内から検出された灰白色系の火山灰はすべて白頭山火山灰である。それに対して、本住居址の床面にのる埋土から検出された同系の火山灰は十和田a降下火山灰である。なお、同ピットの埋土の堆積状況はVIIC－2住居址で見られた状況とは異なっているが、これについては同ピットの項で触れることにする。

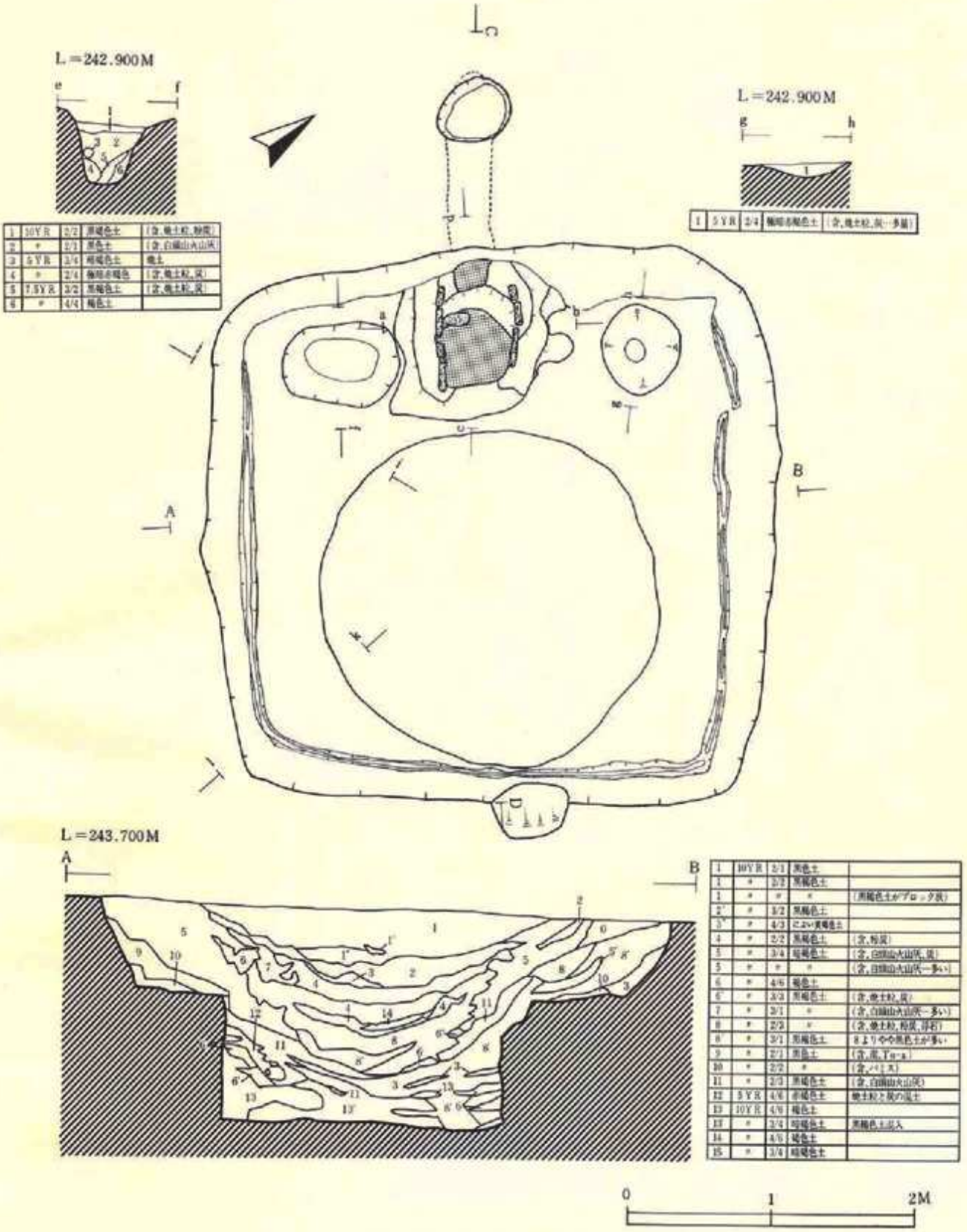
遺物（第53～54図、第7表、写真図版56）

（土器）53－1～3は床面、53－4～54－1はカマド内、54－2～10は埋土から出土する。53－1はあか焼き土器である。胎土に小石を含みザラザラする。53－2は甕の底部で砂底である。53－3は須恵器の甕の体部片である。表面は平行叩き目文、裏は放射状の当て具痕である。他に同様の小片が3点出土している。53－4～54－3は甕である。53－4は口縁部が大きく外傾するが短い。長胴甕ではあるが体部中位より底部にかけて急角度ですぼまる。53－6、11、54－2～3はロクロを使用によって調整している。この4点の口縁部はほぼ直立し、他は外反するが、すべて短い。54－4は内外黒色処理した杯である。54－5～6は小型の鉢ないしミニチュア土器である。同一個体の可能性がある。54－7は口縁部が肥厚する。結束しない羽状縄文が施文される。口縁部に直径6mmの補修孔が穿たれる。54－8も口縁部が肥厚する。磨消し縄文である。54－9は沈線文で区画された部分に刻み目が充填される。54－10は網目状撚糸文である。

（石器）出土していない。

遺構の時期

出土遺物や遺構の状況から、平安時代後葉（第2期）と思われる。



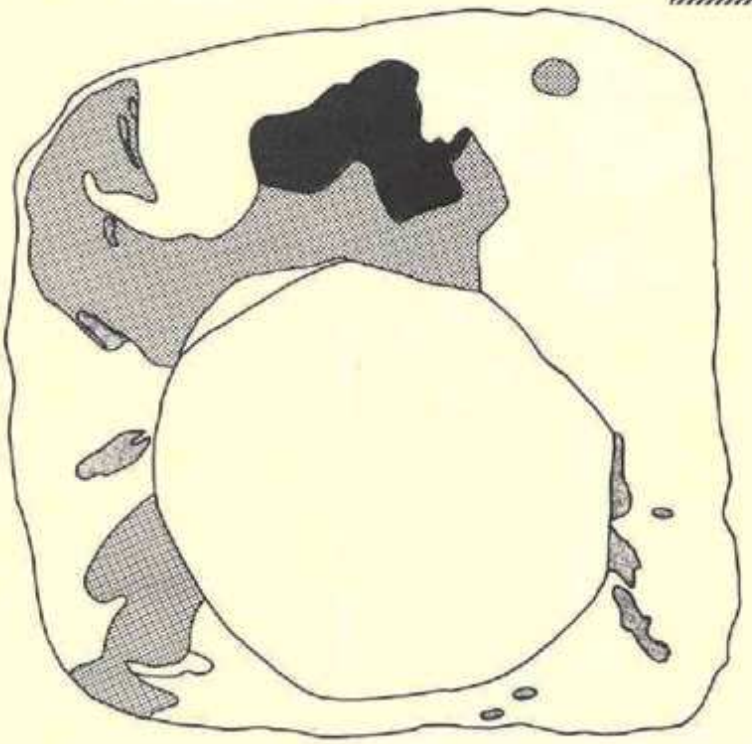
1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,焼土粒,炭粒)
2	〃	2/1	黒色土	(含,白頭山火山灰)
3	5YR	3/4	暗褐色土	焼土
4	〃	2/4	極暗赤褐色	(含,焼土粒,炭)
5	7.5YR	3/2	黒褐色土	(含,焼土粒,炭)
6	〃	4/4	褐色土	

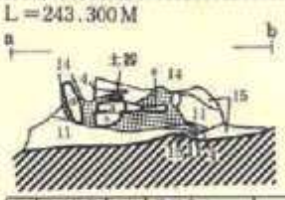
1	5YR	2/4	極暗赤褐色土	(含,焼土粒,炭…多量)

1	10YR	2/1	黒色土	
1	〃	2/2	黒褐色土	
1	〃	〃	〃	(黒褐色土がブロック状)
2'	〃	3/2	黒褐色土	
2''	〃	4/3	にぶい黄褐色土	
4	〃	2/2	黒褐色土	(含,粒炭)
5	〃	3/4	暗褐色土	(含,白頭山火山灰,炭)
5	〃	〃	〃	(含,白頭山火山灰一多い)
6	〃	4/6	褐色土	
6'	〃	3/3	黒褐色土	(含,焼土粒,炭)
7	〃	3/1	〃	(含,白頭山火山灰一多い)
8	〃	2/2	〃	(含,焼土粒,粒炭,浮石)
8'	〃	3/1	黒褐色土	8よりやや黒色土が多い
9	〃	2/1	黒色土	(含,炭,Tu-a)
10	〃	2/2	〃	(含,パミス)
11	〃	2/3	黒褐色土	(含,白頭山火山灰)
12	5YR	4/6	赤褐色土	焼土粒と炭の混土
13	10YR	4/6	褐色土	
13'	〃	3/4	暗褐色土	黒褐色土混入
14	〃	4/6	褐色土	
15	〃	3/4	暗褐色土	

第51図　Ⅶ D－1 住居址

焼土、炭等検出状況

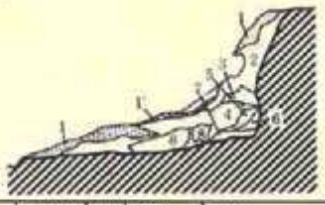


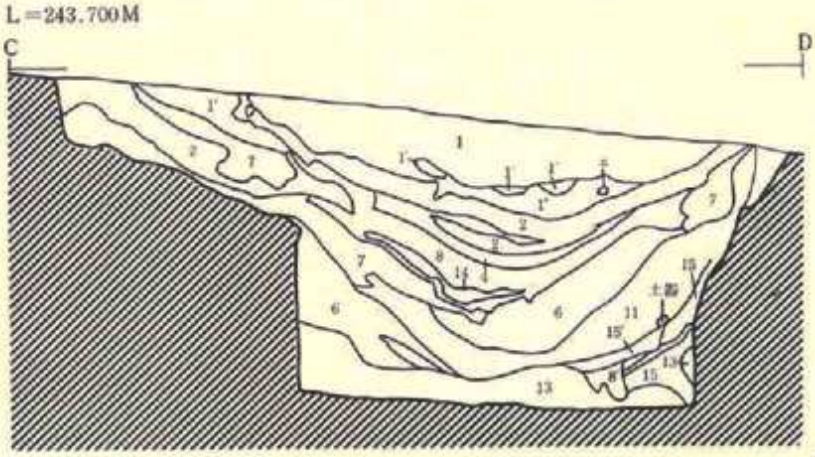


1	7.5YR	3/1	黒褐色土	
2	〃	5/3	にぶい褐色土	
3	〃	4/4	褐色土	
3'	〃	〃	〃	焼土
4	2.5YR	4/8	赤褐色土	〃
5	〃	3/4	暗赤褐色土	〃
6	5YR	3/4	暗褐色土	〃
7	7.5YR	2/3	極暗褐色土	
8	〃	3/1	黒褐色土	焼土
9	〃	3/4	暗褐色土	〃
10	〃	4/4	褐色土	炭
11	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
12	2.5YR	2/3	極暗赤褐色土	焼土
13	〃	3/8	暗赤褐色土	〃
14	7.5YR	3/3	暗褐色土	〃

1	7.5YR	3/2	黒褐色土	
2	〃	2/2	極暗褐色土	(含,焼土粒,炭化材)
3	〃	2/1	黒色土	(含,炭化材)
4	〃	2/2	黒褐色土	(含,Tu-a)
5	〃	〃	〃	
6	5YR	4/6	赤褐色土	焼土
7	〃	2/4	極暗赤褐色土	焼土粒と黒褐色土との混土
8	〃	4/8	赤褐色土	焼土粒(多量)と黒褐色土との混土

L＝243.760M

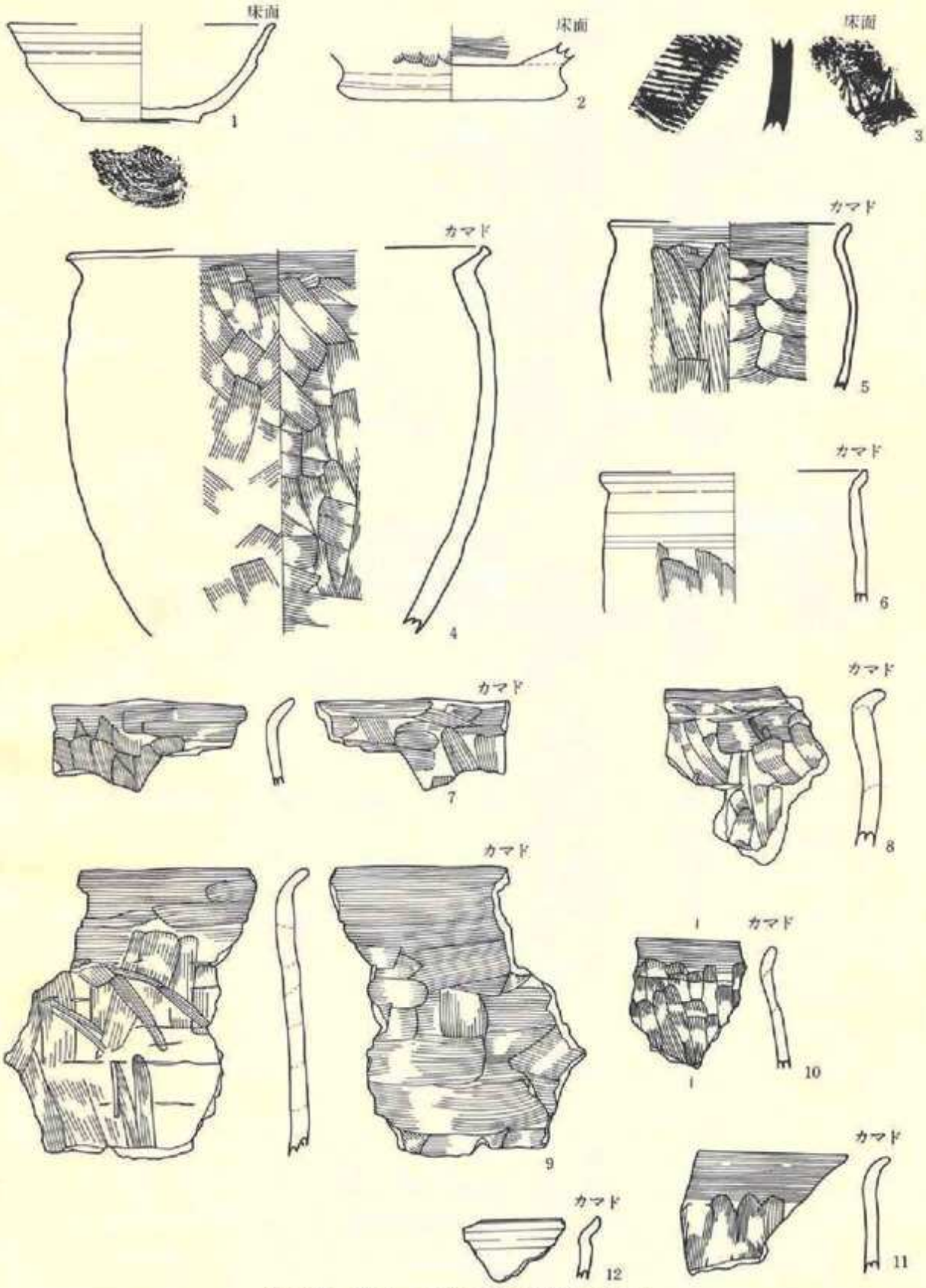




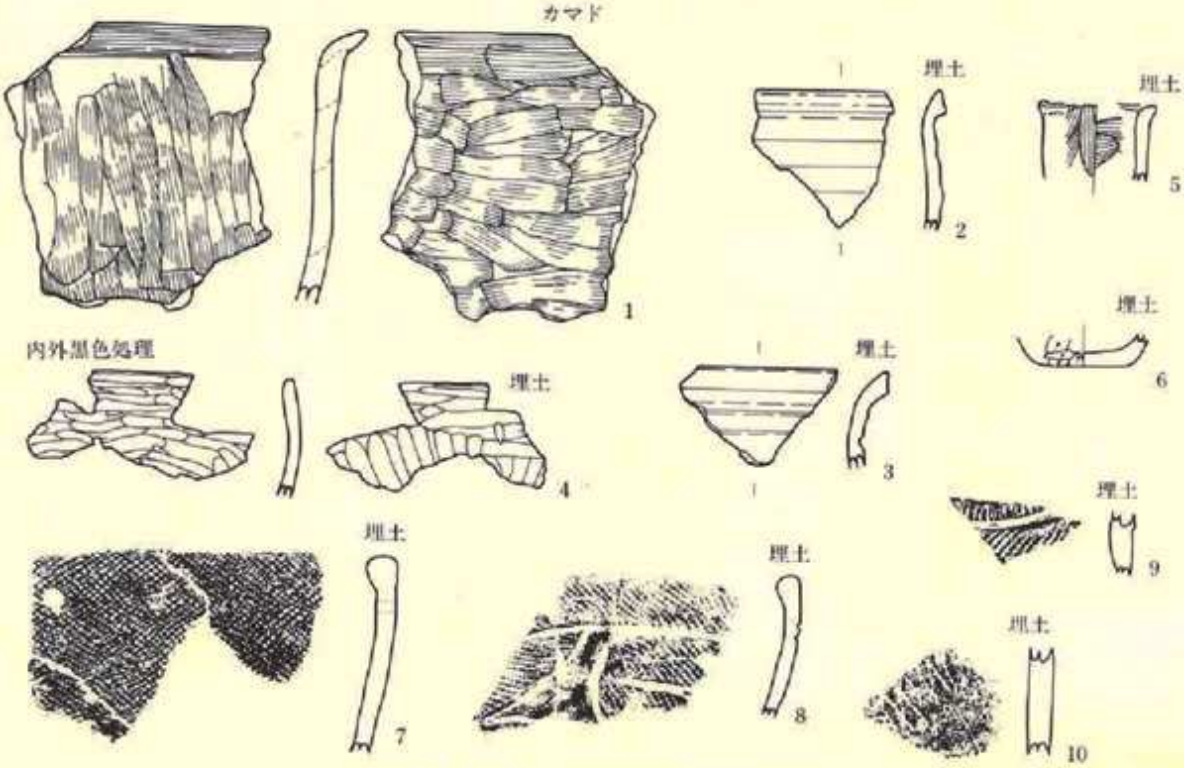
1	2.5YR	6/8	橙色	焼土
1'	〃	〃	〃	1に炭化材が混入
2	7.5YR	3/1	黒褐色土	(含,粉炭)
3	〃	3/2	〃	(含,焼土粒,粉炭)
4	〃	2/1	黒色土	(含,褐色土)
5	〃	3/4	暗褐色土	
6	〃	3/3	〃	
7	〃	4/6	褐色土	
8	〃	1.7/1	黒色土	
9	〃	3/3	暗褐色土	

0　1　2M

第52図　Ⅶ D－1 住居址、焼失状況・カマド



第53図　ⅦＤ－１住居址内出土遺物(1)



第54図　ⅦＤ－１住居址内出土遺物(2)

ⅥＥ－１住居址

本住居址は規模において最小のグループに属する。掘り込みは深く、遺構の遺存状態も良好である。カマドは北東向きで埋土内には白頭山火山灰が層状に堆積する。出土遺物は少ない。

遺構（第55図、第２表、写真図版19）

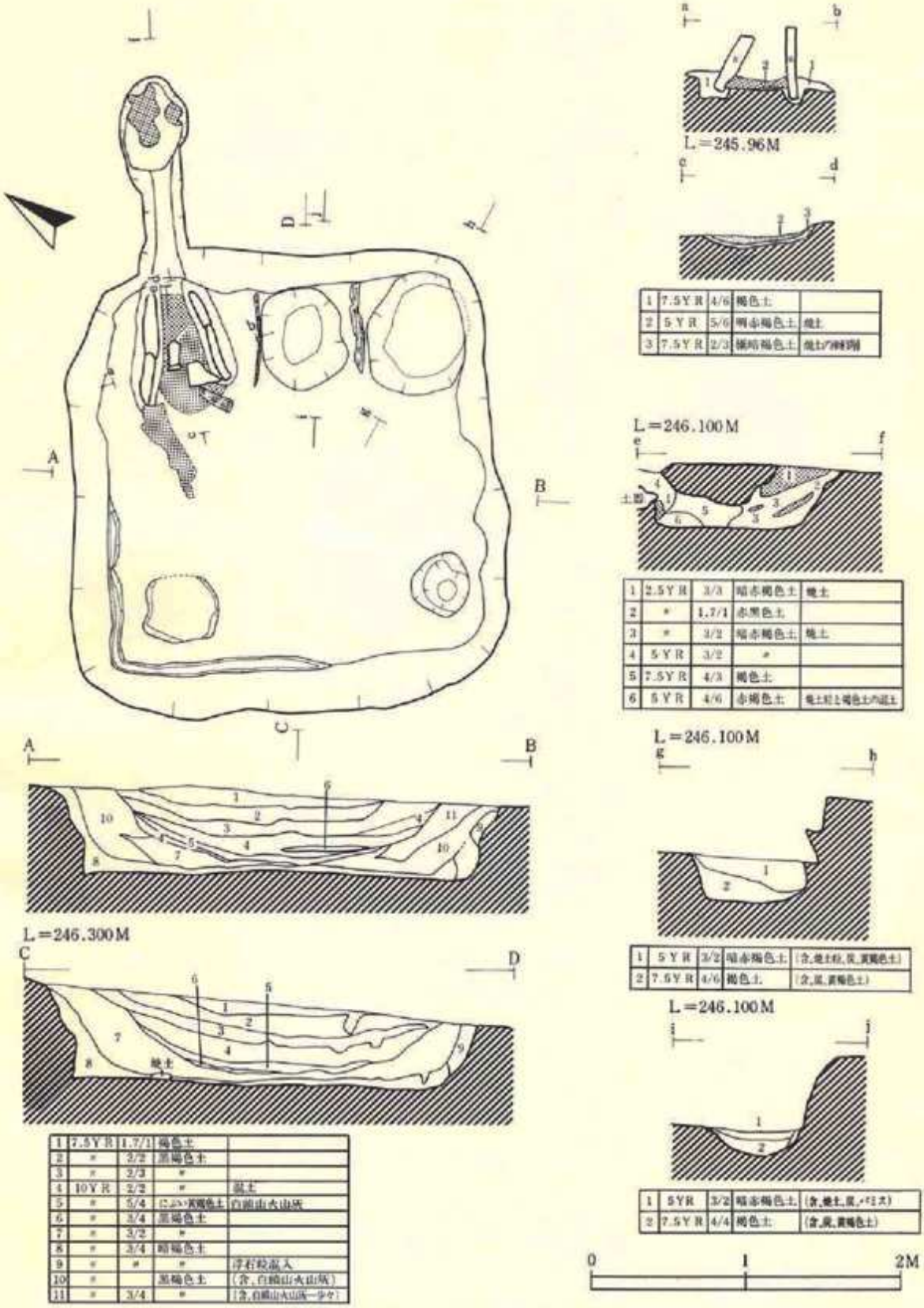
（位置）尾根の頂部付近に位置し、床面の高さは246.4mである。

（埋土）上位より黒褐色土、暗褐色土、白頭山火山灰、褐色土の４層に大別される。４層に炭化物が少々含まれるが、焼失に伴うものとは考えられない。白頭山火山灰は最大５～６cmの厚さで帯状に堆積する。自然堆積である。

（平面形・規模）正方形で、一辺の長さが2.4mである。

（壁）高さは南西壁で最大60cm、北東壁では44cmで最少となる。床面から中位までは垂直に立ち上がるが、中位より上は崩壊のため外反する。

（床）水平かつ平坦である。特に硬い所はないが、よく締まっている。北西から南西にかけての壁際に浅い周溝がめぐる。北東壁側はカマドと２基の小ピットで三分割され、それぞれの境に板材が埋置されている。板材は炭化しており詳細は不明であるが、樹皮部分と思われる。厚さ２cmほどである。西隅と南隅に汚れた褐色土が検出されたが、極めて浅く、掘り込んだ様子も観察されなかった。一部の床は掘り方が見られ貼床となっていることから、同所も貼床の可



1	7.5YR	4/6	褐色土	
2	5YR	5/6	明赤褐色土	焼土
3	7.5YR	2/3	極暗褐色土	焼土ブロック別

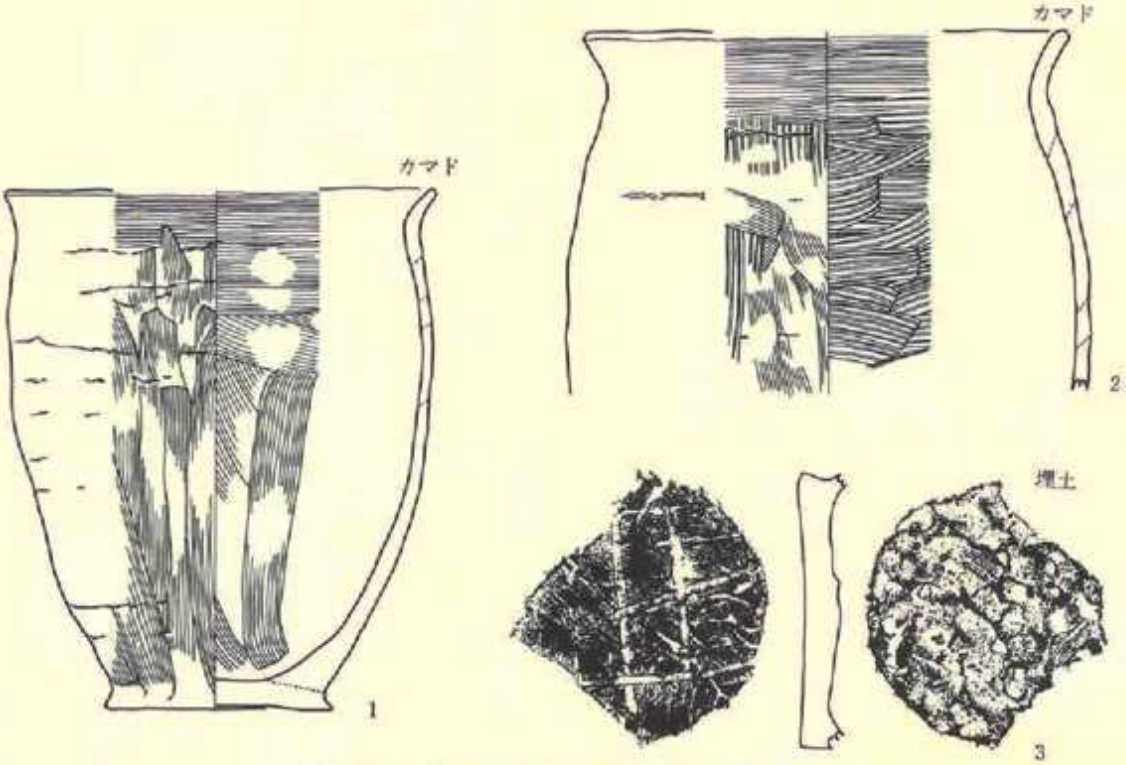
1	2.5YR	3/3	暗赤褐色土	焼土
2	〃	1.7/1	赤黒色土	
3	〃	3/2	暗赤褐色土	焼土
4	5YR	3/2	〃	
5	7.5YR	4/3	褐色土	
6	5YR	4/6	赤褐色土	焼土粒と褐色土の混土

1	5YR	3/2	暗赤褐色土	(含,焼土粒,炭,黄褐色土)
2	7.5YR	4/6	褐色土	(含,炭,黄褐色土)

1	5YR	3/2	暗赤褐色土	(含,焼土,炭,パミス)
2	7.5YR	4/4	褐色土	(含,炭,黄褐色土)

1	7.5YR	1.7/1	褐色土	
2	〃	3/2	黒褐色土	
3	〃	2/3	〃	
4	10YR	2/2	〃	粘土
5	〃	5/4	にぶい黄褐色土	白頭山火山灰
6	〃	3/4	黒褐色土	
7	〃	3/2	〃	
8	〃	3/4	暗褐色土	
9	〃	〃	〃	浮石粒混入
10	〃		黒褐色土	(含,白頭山火山灰)
11	〃	3/4	〃	(含,白頭山火山灰一少々)

第55図　Ⅵ E－Ⅰ住居址



第56図　Ⅵ E－1住居址内出土遺物

能性がある。

（柱穴）なし。

（カマド）カマドは北隅に北東向きに造られている。本体の天井部は不明であるが、両袖部は8～10cmの厚さの扁平な角礫と土器を芯材として造られている。燃焼部の焼土の厚さは最大5cm程である。煙道部は刳貫き式であるが焼出し部に向かって下がっていない。煙道部の長さは約1mである。焚き口部付近の床の一部には焼土が形成され、炭化材も出土している。

遺物（第56図、第7表、写真図版57）

（土器）1～2はカマド、3は埋土下位から出土する。いずれも長胴甕と思われる。1～2は口縁部は短く、緩く外反する。3は内面には指痕が残っており、外面には格子状の沈線が見られる。

図化は省略したが多数の甕の体部片がカマドから、内面黒色処理の坏の小片（2点）が埋土下位から出土している。また、埋土中からは縄文土器（地文のみ）若干と弥生土器1点が出土している。

（石器）埋土中からチップとフレーク各1点が出土する。図化は省略した。

遺構の時期

1～2の土器及び遺構の状況から、平安時代後葉（第3期）と考えられる。

ⅧD－1住居址

本住居址は最も下位に位置し、規模は中程度である。カマドは北東から南東に造り替えられている。埋土下位に白頭山火山灰が含まれる。

遺構（第57～58図、第2表、写真図版20）

（位置）南東斜面の下位に位置し、床面の高さは240.5mである。ⅧC－1住居址の南28mに位置する。

（重複）ⅧD－3陥し穴遺構を切っている。

（埋土）上位から黒色土、黒褐色土、白頭山火山灰、暗褐色土の4層に大別される。第3層の黒褐色土以下に多量の焼土粒と炭化物が含まれており、焼失住居址である。白頭山火山灰は層状に堆積するが、住居址の全面を覆っているわけではない。自然堆積である。

（平面形・規模）正方形で一辺が4mである。南北方向の軸線は真北より30度東偏する。

（壁）斜面上位の北隅で最大77cmの壁高を測るが、南東壁はほとんど流失している。北東壁の一部は黒褐色土の地山と識別が困難であったため、一部掘り過ぎた所もある。北西～南西壁はほぼ垂直に近い立ち上がりとなっている。

（床）水平かつ平坦である。ほぼ中央に開口部径50cm、深さ20cmの円筒状ピットがあるが、これを埋めて貼床としている。南東壁の壁際には長方形のピットと二段の掘り込みがある。

（柱穴）P_1～P_9又はP_{10}の9～10本柱である。Pの柱穴のみ30cmと深く、他は20cm以下である。建て替え等による柱配置の変更については不明である。

（カマド）東隅に南東向きに設置されている。主体部は徹底的に破壊されており原形をとどめていない。放置された礫と散乱する土器及び僅かに遺存する褐色土によって主体部のあった場所と方向を窺うのみである。燃焼部には10cm程も厚く焼土が形成されている。また、焚き口部付近には掻き出されたか又は破壊した時のものであるかは判然としないが、焼土、炭化物、草木灰が検出された。煙道部は斜面下位に向かうため全く不明である。

このカマドが使用される以前に、ほぼ同じ場所に北東向きのカマドが設置されていた。主体部は除去されて、床が貼られているため、燃焼部の焼土と煙道部のみが遺存している。焼土の厚さは4cmで掘り込み等は見られない。煙道部は掘り込み式である。煙出し部は若干深く掘り込まれている。煙道部の規模は長さ1m、幅40cmである。煙道部の埋土中から白頭山火山灰が検出された。

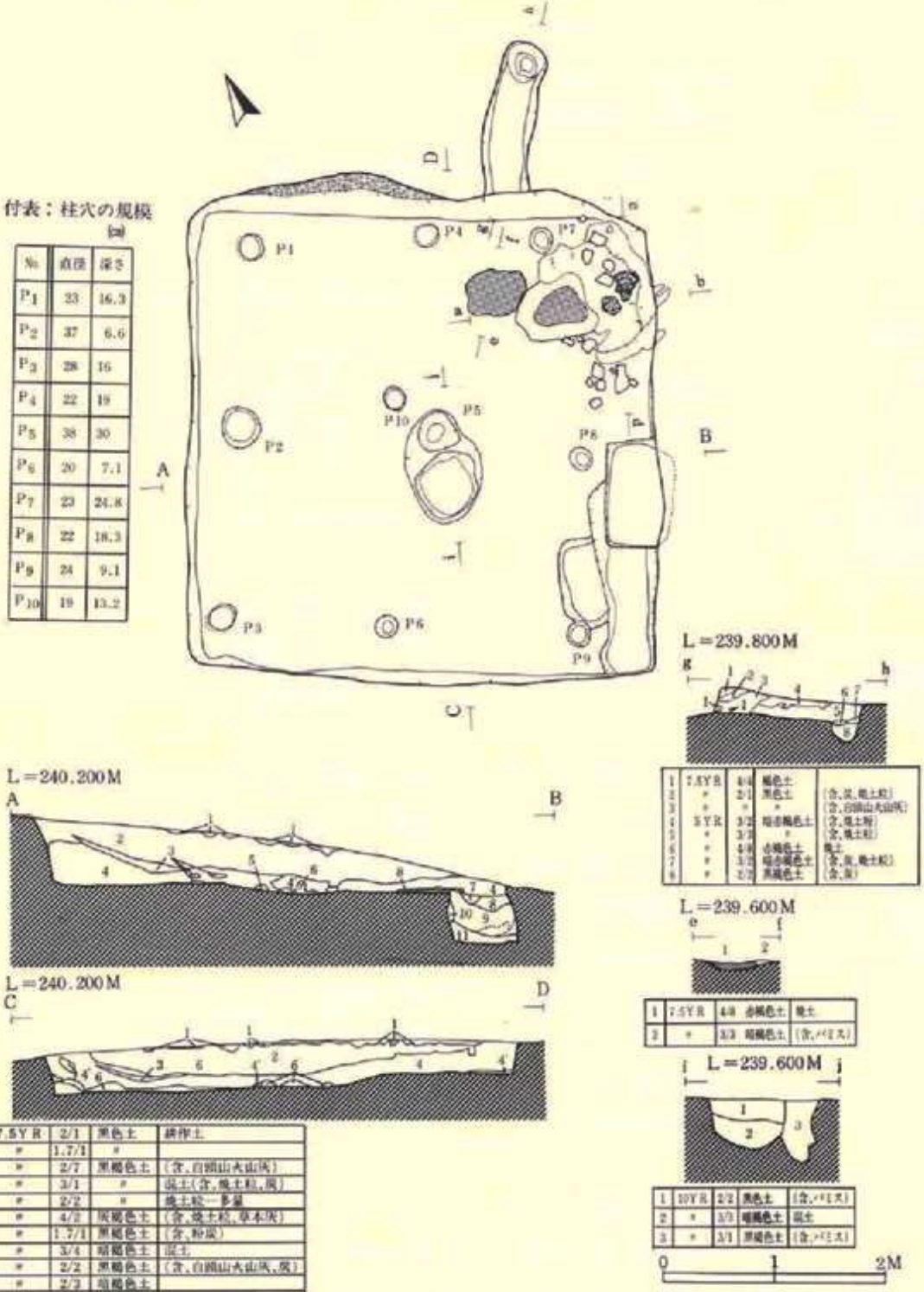
（その他）○南東壁際の掘り込みについて

南東壁のほぼ中央に長方形のピットが造られている。底部が若干外側に膨らむ。規模は40cm×90cm×55cmである。このピットには焼土粒や炭化物が床面から流れ込んでおり、住居が廃棄される時まで使用されていたものである。このピットの南側は住居址の床面から20cmほど低いテ

付表：柱穴の規模

(cm)

No	直径	深さ
P1	23	16.3
P2	37	6.6
P3	28	16
P4	22	19
P5	38	30
P6	20	7.1
P7	23	24.8
P8	22	18.3
P9	24	9.1
P10	19	13.2



1	7.5YR	2/1	黒色土	耕作土
2	〃	1.7/1	〃	
3	〃	2/7	黒褐色土	(含,白頭山大山灰)
4	〃	3/1	〃	混土(含,焼土粒,炭)
4'	〃	2/2	〃	焼土粒一多量
5	〃	4/2	灰褐色土	(含,焼土粒,草本灰)
6	〃	1.7/1	黒褐色土	(含,粒炭)
7	〃	3/4	暗褐色土	混土
8	〃	2/2	黒褐色土	(含,白頭山大山灰,炭)
9	〃	2/3	暗褐色土	
10	〃	2/1	黒褐色土	混土
11	〃		〃	混土

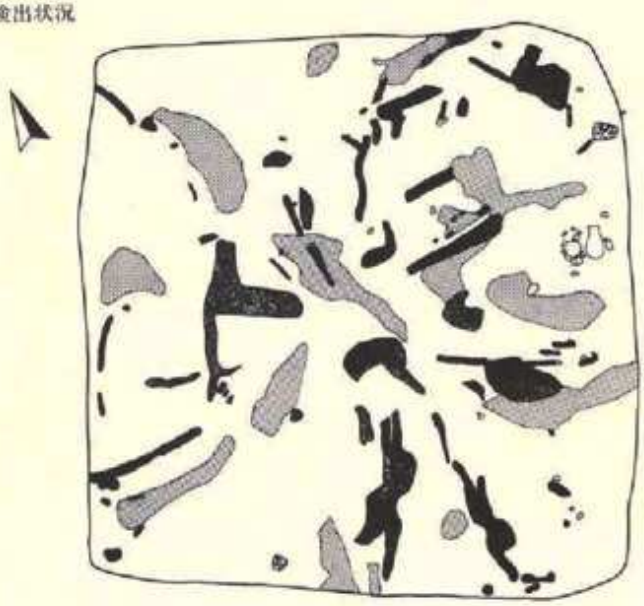
1	7.5YR	4/4	褐色土	
2	〃	2/1	黒色土	(含,炭,焼土粒)
3	〃	〃	〃	(含,白頭山大山灰)
4	5YR	3/2	暗赤褐色土	(含,焼土粒)
5	〃	3/3	〃	(含,焼土粒)
6	〃	4/8	赤褐色土	焼土
7	〃	3/2	暗赤褐色土	(含,炭,焼土粒)
8	〃	2/2	黒褐色土	(含,炭)

1	7.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
2	〃	3/3	暗褐色土	(含,パミス)

1	10YR	2/2	黒色土	(含,パミス)
2	〃	3/3	暗褐色土	混土
3	〃	3/1	黒褐色土	(含,パミス)

第57図　Ⅷ D－1 住居址

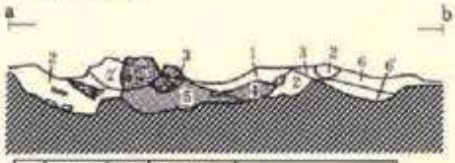
焼土・炭化物等検出状況



0 1 2M

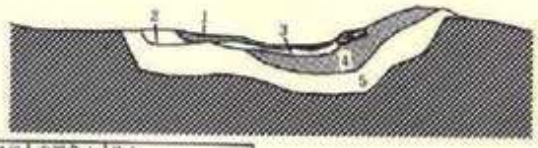
カマド

L＝240.800M



1	7.5YR	4/4	黄褐色土	
2	〃	2/3	極暗褐色土	試土
2'	〃		黒褐色土	2よりも黒色土が多い
3	〃	2/1	黒色土	
4	5YR	4/8	赤褐色土	焼土
5	2.5YR	4/8	〃	〃
6	5YR	3/2	黒褐色土	
6'	5YR	〃	〃	6よりも暗い

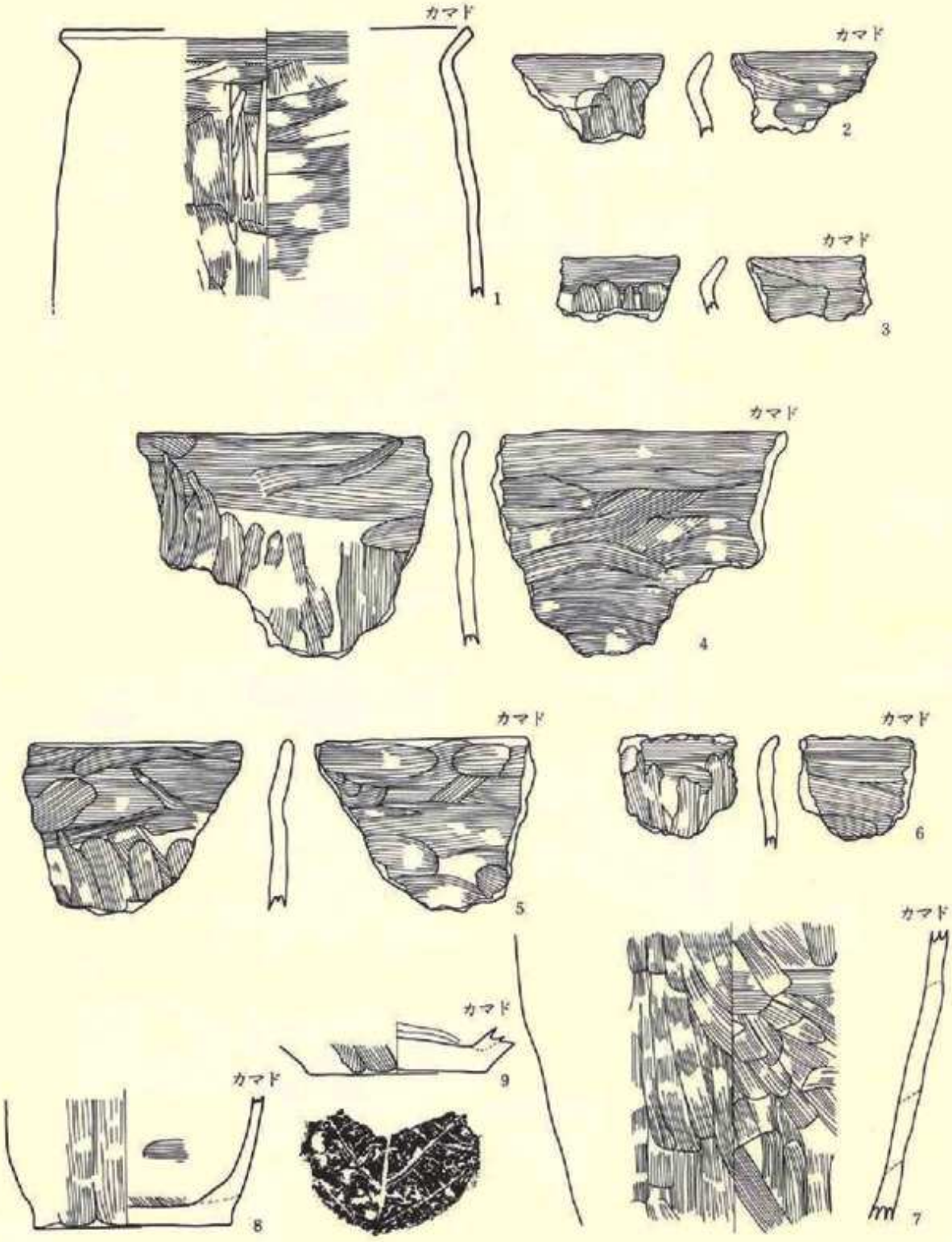
L＝240.800M



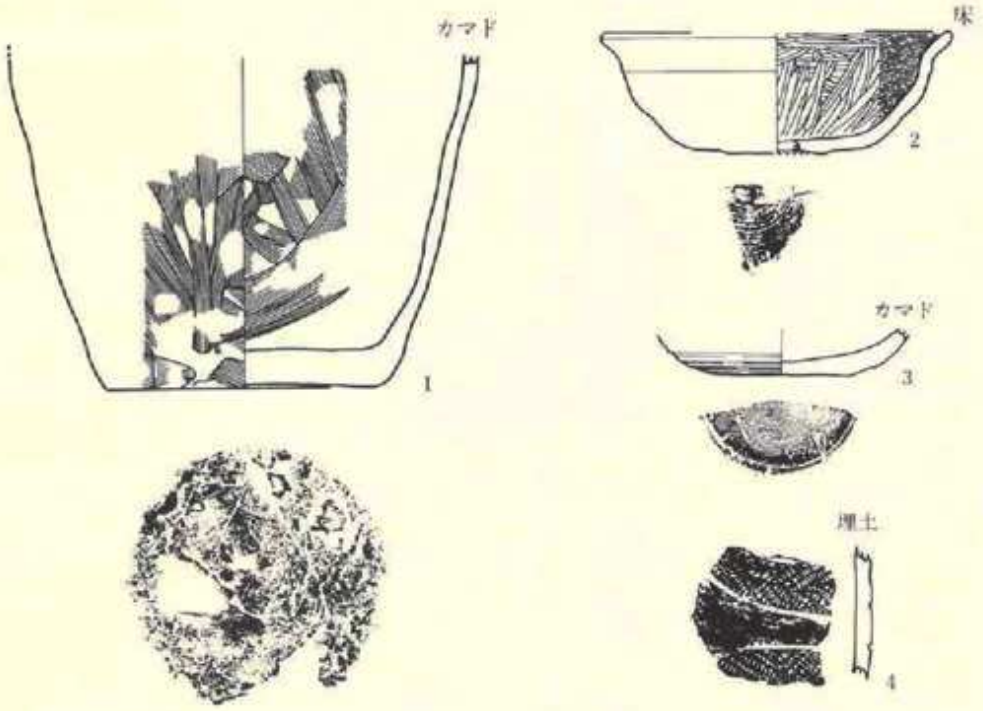
1	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
2	7.5YR	2/1	黒色土	(炭、灰、焼土粒)
3	〃	3/1	〃	(炭、焼土粒、灰一多)
4	5YR	4/8	赤褐色土	焼土
5	〃	2/2	黒褐色土	

0 1M

第58図　Ⅷ D－Ⅰ住居址、焼失状況・カマド



第59図　Ⅷ D－Ⅰ住居址内出土遺物(1)



第60図　Ⅷ D－1 住居址内出土遺物(2)

ラスになっている。その西側は一段高いテラスとなる。いずれも、特に硬いとか締まっているわけではない。また遺物も出土しない。この二段のテラスの性格は不明である。

遺物（第59～60図、第7表、写真図版57～58）

（土器）59－1～8と60－1、3の10点はカマド内又はその付近から出土し、60－2は床面、59－9は住居址中央部のピット内から、60－4は埋土下位から出土する。59－1～9と60－1、60－2～3は坏、60－4は縄文土器で鉢の体部片と思われる。長胴甕はすべてロクロ不使用で、口縁部は短く、緩く外反する。59－1と60－1は胎土や焼成から同一個体の可能性がある。59－9と60－1は底部に木葉痕が、59－8は平底である。60－2は内面黒色処理をしているが、60－3はあか焼き土器である。底部の切り離しはともに回転糸切り無調整である。60－3は体部上半から口縁部にかけてやや開らく。59－1、3、5、60－3には残滓が、59－7と60－3は煤が付着している。

（石器）出土していない。

遺構の時期

出土した遺物と遺構の状況から、平安時代後葉（第3期）に属すると思われる。

ⅧC－1住居址

本住居址はカマドを造り替えているが、ともに同一方向を向いている。白頭山火山灰が床面直上に面的な広がりをもって堆積している。規模は中程度である。

遺構（第61図、第2表、写真図版21）

（位置）尾根の中位に位置し、床面の高さは241.9mである。ⅧD－1住居址の北28m、ⅨC－1住居址の西16mに位置する。

（埋土）黒色土、黒褐色土、白頭山火山灰土の3層に大別される。床面及び床面直上に白頭山火山灰が面的な広がりをもって堆積する。自然堆積である。

（平面形・規模）隅丸長方形で、3.7m×3.4mである。カマドの長軸方向は真北より約30度東偏する。

（壁）斜面下位にあたる南東壁の大半は流失している。壁の高さは北西隅で最大の50cmを測る。

（床）水平かつ平坦である。締まってはいるが、特に硬い所はない。カマド際も含め、ピットもしくは掘り込み等は検出されていない。

（柱穴）なし。

（カマド）北東壁中央に造られている。しかし、主体部はほとんど破壊されており、僅かに燃焼部に形成された焼土と煙道部のみが遺存している。燃焼部は皿状に凹み焼土の厚さは数センチである。煙道部は刳貫き式で、煙出し部に向かって下降する。煙道部の長さは1.1m、煙出し部の深さは70cmである。このカマドの斜面下位側に、このカマドに先行するカマドが検出された。主体部は破壊され、床を貼っている。燃焼部は鍋底に掘り込まれており、形成された焼土の厚さは数センチで硬い。煙道部は掘り込み式で1.3mの長さである。

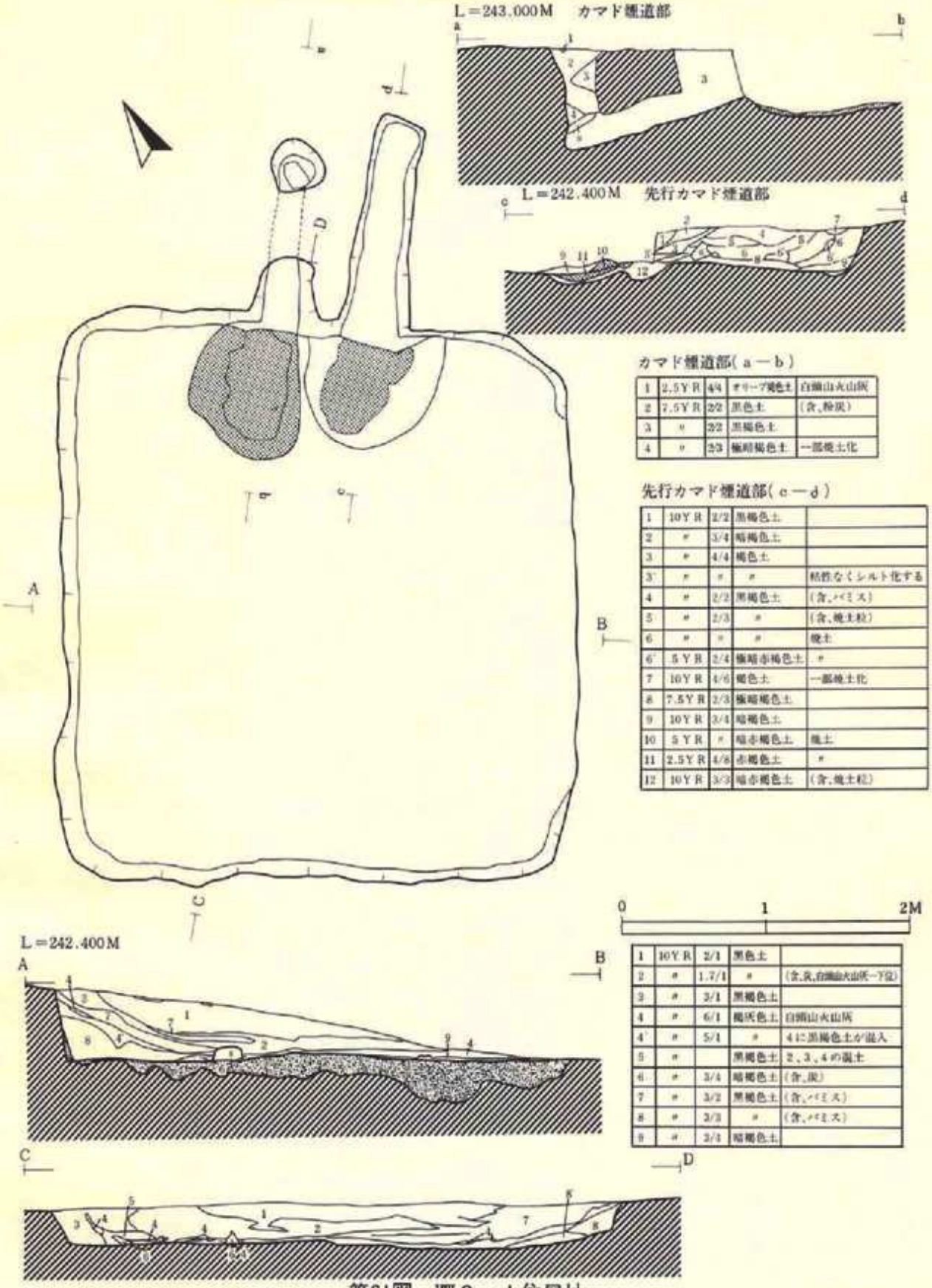
遺物（第62図、第7表、写真図版58）

（土器）図示した4点はすべて埋土から出土する。1～3は長胴甕の口縁部破片、4は弥生土器の底部片である。甕の口縁部は短く、僅かに外反する。4は体部下端から底部に向かって直径2mm程の穴が穿たれる。一部を欠損するため詳細は不明であるが、底部を4等分するように4個の穴が穿たれたものと思われる。底部には細かい縄文が不規則に施文される。

（石器）出土していない。

遺構の時期

遺構の状況及び白頭山火山灰の検出状況から、平安時代後葉（第3期）と考えられる。



カマド煙道部（a－b）

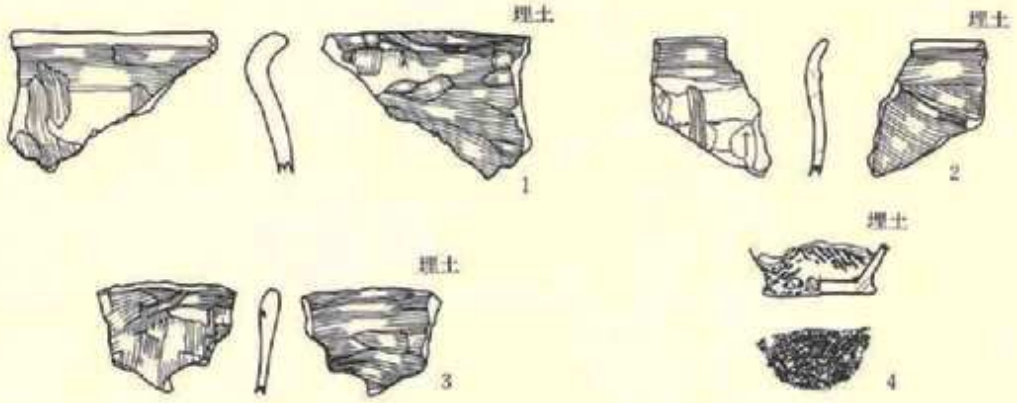
1	2.5Y R	4/4	オリーブ褐色土	白頭山火山灰
2	7.5Y R	2/2	黒色土	（含、粒炭）
3	〃	2/2	黒褐色土	
4	〃	2/3	極暗褐色土	一部焼土化

先行カマド煙道部（c－d）

1	10Y R	2/2	黒褐色土	
2	〃	3/4	暗褐色土	
3	〃	4/4	褐色土	
3'	〃	〃	〃	粘性なくシルト化する
4	〃	2/2	黒褐色土	（含、パミス）
5	〃	2/3	〃	（含、焼土粒）
6	〃	〃	〃	焼土
6'	5Y R	2/4	極暗赤褐色土	〃
7	10Y R	4/6	褐色土	一部焼土化
8	7.5Y R	2/3	極暗褐色土	
9	10Y R	3/4	暗褐色土	
10	5Y R	〃	暗赤褐色土	焼土
11	2.5Y R	4/8	赤褐色土	〃
12	10Y R	3/3	暗赤褐色土	（含、焼土粒）

1	10Y R	2/1	黒色土	
2	〃	1.7/1	〃	（含、炭、白頭山火山灰一下位）
3	〃	3/1	黒褐色土	
4	〃	6/1	褐灰色土	白頭山火山灰
4'	〃	5/1	〃	4に黒褐色土が混入
5	〃		黒褐色土	2、3、4の混土
6	〃	3/4	暗褐色土	（含、炭）
7	〃	3/2	黒褐色土	（含、パミス）
8	〃	3/3	〃	（含、パミス）
9	〃	3/4	暗褐色土	

第61図　Ⅷ C－Ⅰ住居址



第62図　ⅧC－1住居址内出土遺物

ⅨC－1住居址

本住居址は焼失した住居址である。東隅付近は風倒木痕を切っている。埋土から白頭山火山灰が検出される。

遺構（第63～64図、第2表、写真図版22）

（位置）南東斜面の下位に位置し、床面の高さは241.1mである。ⅧC－1住居址の東16m、XC－1住居址の西10mに位置する。

（埋土）黒色土、白頭山火山灰、黒褐色土、暗褐色土の4層に大別される。白頭山火山灰は、焼失に伴う焼土粒や炭化物を含む黒褐色土（埋土3）層の上に堆積する。自然堆積である。

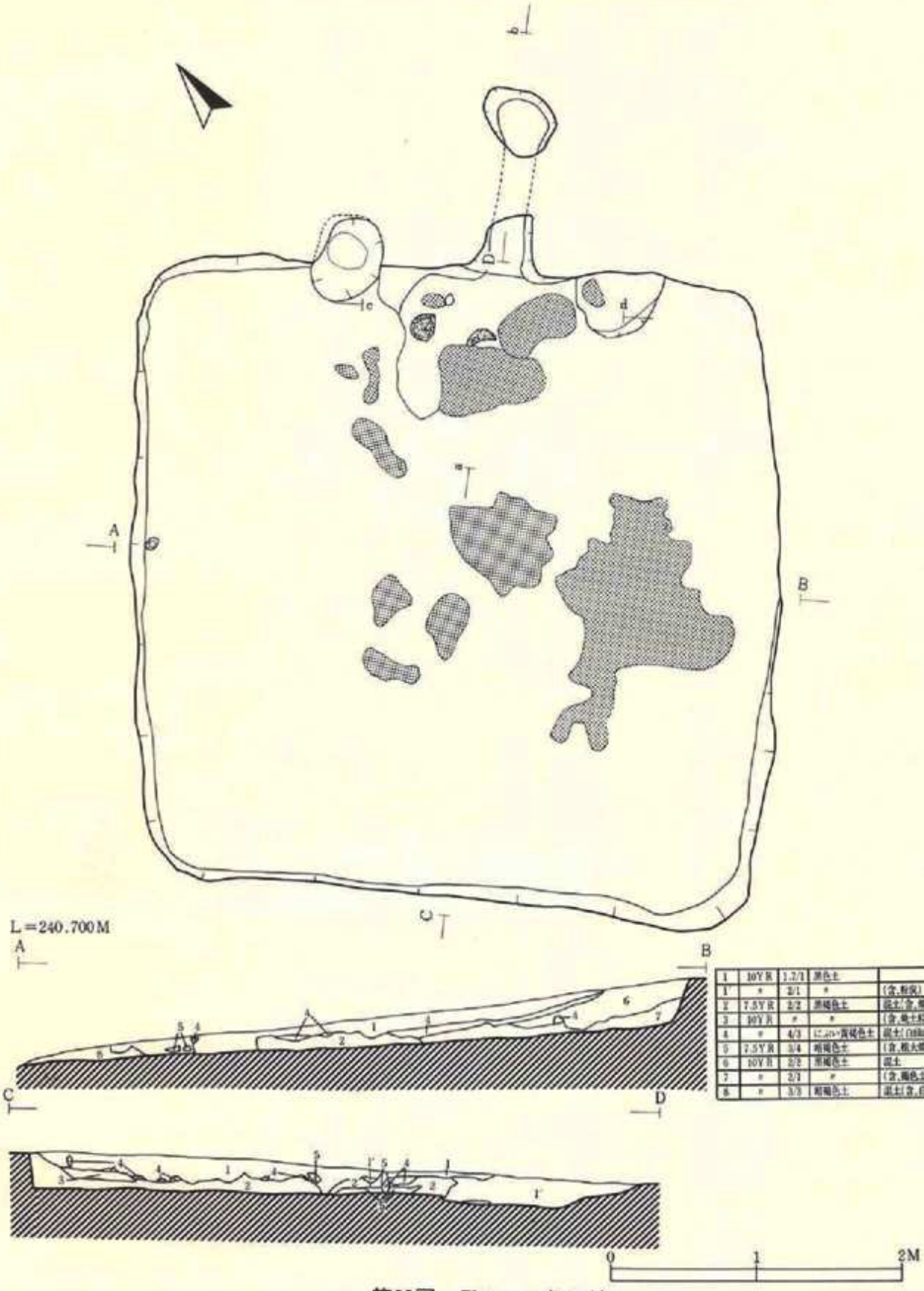
（平面形・規模）多少歪んではいるが、一辺が4.1mの隅丸方形である。

（壁）掘り込みが浅く北隅で最大値38cmを測るが、概ね30cm以下である。斜面下位の南西壁は大半が流失している。遺存する壁はほぼ垂直に近い立ち上がりとなっている。

（床）平坦ではあるが、斜面に沿って傾斜する。北西壁際と南東壁際との高低差は約30cmである。北隅は褐色土を掘り込んであり、極めて硬い。南側の床は貼床となっているが、西隅及び南隅付近は貼床の一部が破損している。

（柱穴）なし。

（カマド）北東壁中央に造られる。主体部はほとんど破壊され、原形をとどめていない。両袖部は若干構築土が残って小高くなっている。カマドの周囲からは大小5個の亜角礫が出土していることから、人為的な破壊を窺わせる。燃焼部は鍋底状に掘り込まれている。形成された焼土は極めて硬い。厚さ15cmである。煙道部は刎貫き式で長さ90cmである。煙出し部の壁は暗赤褐色の硬い焼土が形成されている。カマドの両側には小ピットが造られている。

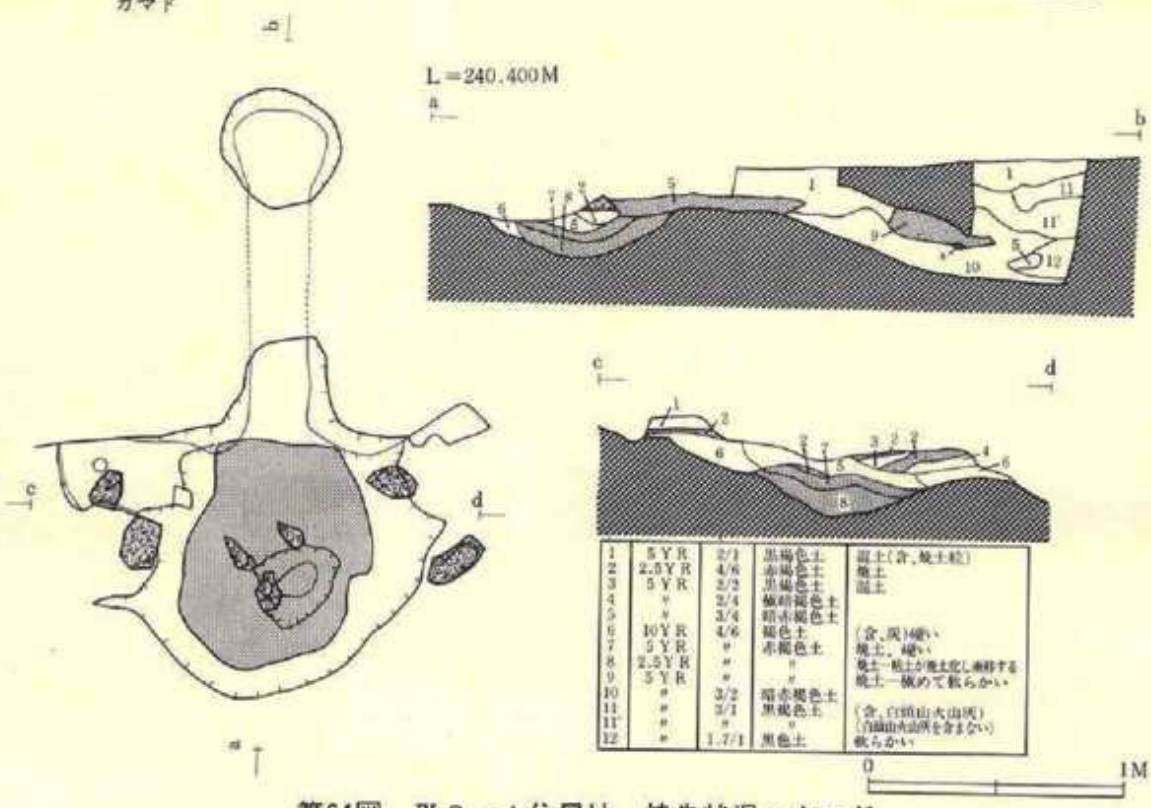


1	10YR	1.2/1	黒色土	
1'	〃	2/1	〃	(含,粉炭)
2	7.5YR	2/2	黒褐色土	混土(含,焼土粒,炭)
3	10YR	〃	〃	(含,焼土粒,粉炭)
4	〃	4/3	にぶい黄褐色土	混土(白頭山大山降)
5	7.5YR	3/4	暗褐色土	(含,粒大焼土粒,炭)
6	10YR	2/2	黒褐色土	混土
7	〃	2/1	〃	(含,褐色土粒)
8	〃	3/3	暗褐色土	混土(含,白頭山大山降)

第63図　Ⅸ C－Ⅰ住居址

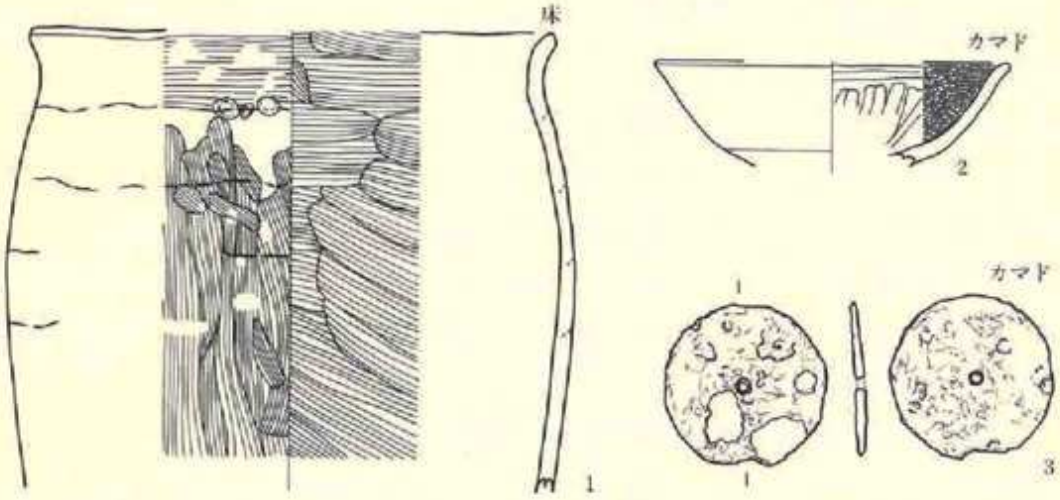
焼土・炭化材等検出状況

カマド



1	5YR	2/1	黒褐色土	混土（含、焼土粒）
2	2.5YR	4/6	赤褐色土	焼土
3	5YR	2/2	黒褐色土	混土
4	〃	3/4	暗赤褐色土	
5	〃	3/4	暗赤褐色土	
6	10YR	4/6	褐色土	（含、灰）硬い
7	5YR	〃	赤褐色土	焼土、硬い
8	2.5YR	〃	〃	焼土―粘土が焼土化し剥落する
9	5YR	〃	〃	焼土―極めて軟らかい
10	〃	3/2	暗赤褐色土	
11	〃	3/1	黒褐色土	（含、白頭山火山灰）
11′	〃	〃	〃	（白頭山火山灰を含まない）
12	〃	1.7/1	黒色土	軟らかい

第64図　Ⅸ C－1 住居址、焼失状況・カマド



第65図　ⅨＣ－Ⅰ住居址内出土遺物

（その他）○焼失状況について

多量の炭化物と焼土が出土したが、個々の炭化材はほとんど原形をとどめていない。しかし、垂木状の丸太材は概ね放射状に倒れている。材質は中央部付近でナラ、東隅でホオノキが各1点出土したほかはすべてクリである。北隅、南隅及び北東壁際でカヤが出土している。

遺物（第65図、第7表、写真図版58）

（土器）1の長胴甕はカマド付近の床から、2の坏はカマドから出土する。1は口縁部は短く緩やかに外反する。巻き上げ痕が明瞭に見られ、器表面の調整は雑である。残滓が口縁部付近に付着する。2は内面黒色処理をしている。底部は欠損し不明である。やや小型で、体部は開き気味である。

他に、土師器の小片が7点出土したが、図化は省略する。

（石器）出土していない。

（鉄製品）3はカマドの左袖部内から出土する。袖部の最下部から出土したもので、故意に埋め込んだ可能性がある。紡錘車であるが、軸はない。直径6.5cm、厚さは中央部で0.4cmである。比較的良好な遺存状態である。

遺構の時期

出土した遺物及び遺構の状況から、平安時代後葉（第3期）に属すると思われる。

ＸＣ－１住居址

本住居址は黒色土を壁としているため、一部に掘り過ぎがあった。小規模な住居址で、埋土には白頭山火山灰が含まれる。

遺構（第66～67図、第２表、写真図版23）

（位置）検出された住居址の中で最も東側に位置する。南東斜面の下位で、急激に谷へ向かう傾斜変換点に近い。床面の高さは238.2mである。ⅨＣ－１住居址の東10mに位置する。

（埋土）黒色土、白頭山火山灰、黒褐色土、暗褐色土の４層に大別される。白頭山火山灰は埋土下位にあり、ほぼ全面を覆う。床面直上の一部の埋土から焼土粒と粉炭が多少検出されたが、焼失した住居址とは考えられない。

（平面形・規模）隅丸長方形で、3.4m×2.9mである。長軸線は真北より35度東偏する。

（壁）斜面上位側は褐色の地山まで掘り込んでいるが、斜面下位側は黒色土中でとまる。深さは北西壁で最大の65cmを測り、最小は南西壁の23cmである。ほぼ垂直に近い立ち上がりを示すが、黒色土で構成される壁は概ね締まりがない。

（床）ほぼ水平かつ平坦である。特に硬い所はなく、締まりも普通である。斜面上位の壁際には杭跡状の浅い周溝が検出された。床は全面が貼床で掘り方が見られるが、斜面下位ではやや深い掘り方となっている。

（柱穴）なし。

（カマド）北東壁中央に設置されている。主体部は褐色土の外に多量の黒色土を使用しており、左袖部を中心に若干遺存しているが、大半は締まりの無いシルト質で原形をとどめていない。支脚には甕を倒立に用いている。焚口部は皿状に掘り込まれ、それに続く燃焼部は鍋底状にやや深く掘られている。煙道部は刳貫き式で、煙出し部に向かってやや急な角度で傾斜する。

（その他）○カマド脇のピットについて

カマドの左側に径60cmほどのピットがある。壁を刳貫いて造っており、平面形は隅丸方形であるが、断面形は奥に向かって深くなる袋状である。内部に遺物はないが、白頭山火山灰が堆積する。厚さは10～15cmで、しかも純層に近い。

上記のピットが造られる前に、ほぼ同じ場所に同じ大きさのピットが造られている。このピットは壁を抉らず、ほぼ円筒状に造られている。しかし、本住居址の検出時には、本ピットは廃棄され、上位には床が貼られていた。

遺物（第68図、第７表、写真図版58～59）

（土器）１～４はカマド内から、５～８は埋土からの出土である。１は支脚として使用されていたもので、上半部が打ち欠かれ、その破片は袖部の芯材として使用されている。二次加熱を受け器壁の一部に剝落が見られる。１、２とも器高は30cm程の長胴甕であり、底部には木葉痕

が見られる。4は小型の鉢である。器高は10cm、最大径は体部中央で11cmである。口縁部はほぼ直立し、内側が削がれている。完形品である。5は小型の甕である。口縁部のみロクロ調整となっている。頸部は沈線がまわるように強く縊れる。胎土は良好で、焼成もよい。残滓が口縁部付近に付着する。6は大半が欠損し詳細は不明であるが、坏の口縁部である。あか焼き土器である。8は縄文土器で磨消し縄文である。

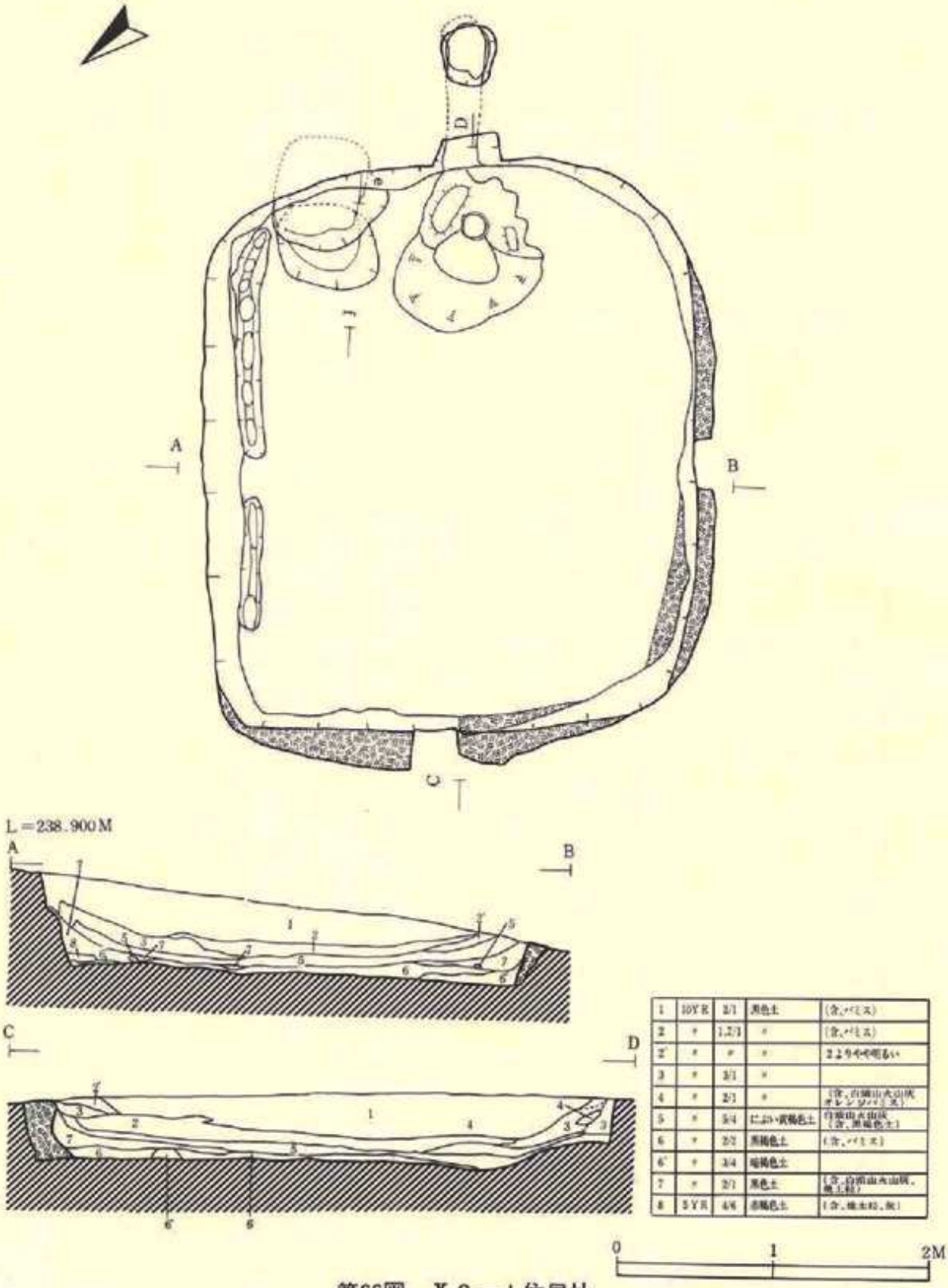
（石器）出土していない。

遺構の時期

8を除く出土遺物と遺構の状況から、平安時代後葉（第3期）と思われる。

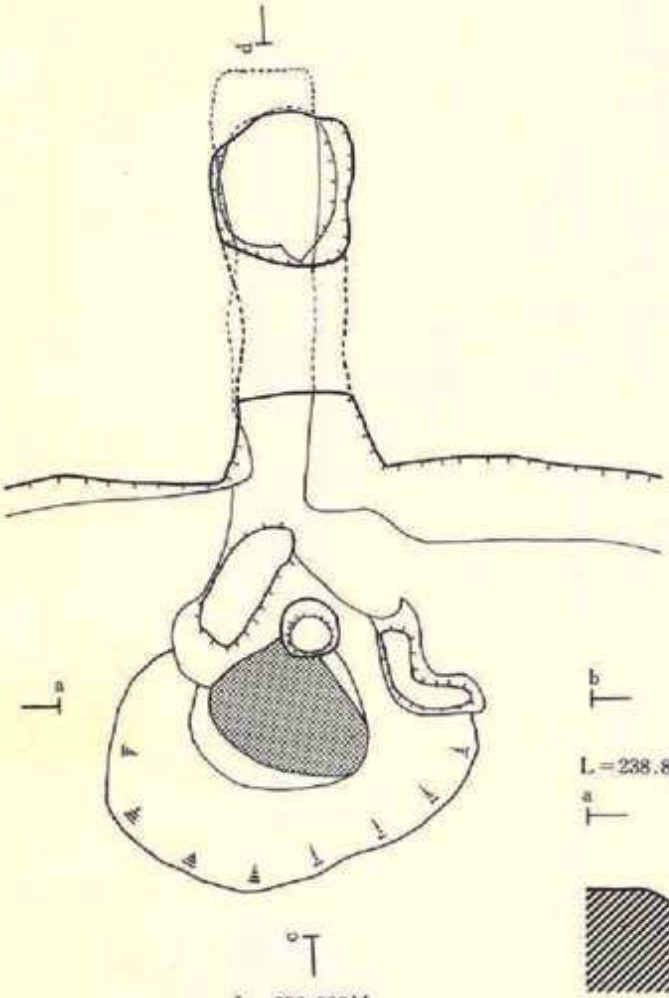
第2表　住居址一覧表

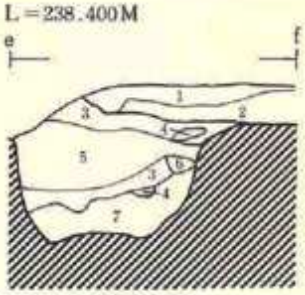
住居址名	位置	平面形	規模		床面の高さm	柱穴	カマド		その他	
			m	m²			位置	方向		
Ⅷ D－2住	南東斜面下位	楕円形	6.3×5	23.4	240.6	4				縄文
Ⅷ D－3住	〃	〃	5.5×5	21.6	241.1	〃			焼失	〃
Ⅸ D－1住	南斜面下位	〃	5.3×4.6	19.7	240.2	〃			〃	〃
Ⅷ D－4住	〃 中位	〃	——	—	242.6	〃			流失	〃
Ⅶ C－1住	尾根頂部	長方形	3.4×3.0	10.2	247.1	0	中央	北	焼失	平安
Ⅶ C－2住	〃	〃	2.4×2.7	6.5	246.7	〃	隅	北東		〃
Ⅶ C－4住	〃	〃	2.5×2.1	5.3	246.3	〃	〃	東		〃
Ⅷ C－2住	南斜面上位	不明	？×4.3	？	243.8	？	〃	南東	一部調査	〃
Ⅷ C－3住	南東斜面上位	隅丸方形	4.3×4.5	19.4	243.8	0	〃	南		〃
Ⅵ D－1住	尾根頂部	長方形	6.0×7.8	46.8	246.8	4	中央	西	焼失、板敷	〃
Ⅶ D－2住	東斜面上位	方形	4.4×4.6	18.5	245.7	〃	〃	東/北	焼失	〃
Ⅶ D－3住	〃	長方形	3.7×4.3	15.9	244.9	0	〃	北西	〃	〃
Ⅶ D－1住	〃 中位	正方形	3.2×3.4	10.5	242.7	〃	〃	〃	〃	〃
Ⅵ E－1住	尾根頂部	〃	2.4×2.4	5.8	246.4	〃	隅	北東		〃
Ⅷ C－1住	東斜面中位	隅丸長方形	3.6×3.4	12.2	241.9	〃	中央	〃		〃
Ⅷ D－1住	〃 下位	正方形	4.1×4.1	16.8	240.5	9	〃	〃	焼失	〃
Ⅸ C－1住	〃 中位	〃	4.2×4.4	18.5	241.1	0	〃	〃	〃	〃
Ⅹ C－1住	〃 下位	隅丸長方形	3.4×2.9	9.9	238.2	〃	〃	〃		〃



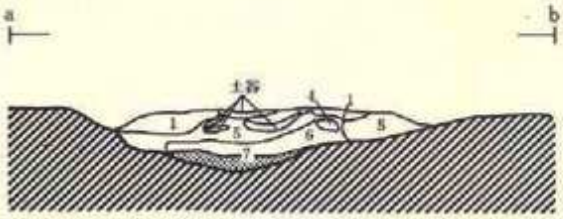
1	10YR	2/1	黒色土	(含、パミス)
2	〃	1.2/1	〃	(含、パミス)
2'	〃	〃	〃	2よりやや明るい
3	〃	2/1	〃	
4	〃	2/1	〃	(含、白頭山火山灰 オレンジパミス)
5	〃	3/4	にぶい黄褐色土	白頭山火山灰 (含、黒褐色土)
6	〃	2/2	黒褐色土	(含、パミス)
6'	〃	3/4	暗褐色土	
7	〃	2/1	黒色土	(含、白頭山火山灰、焼土粒)
8	5YR	4/6	赤褐色土	(含、焼土粒、灰)

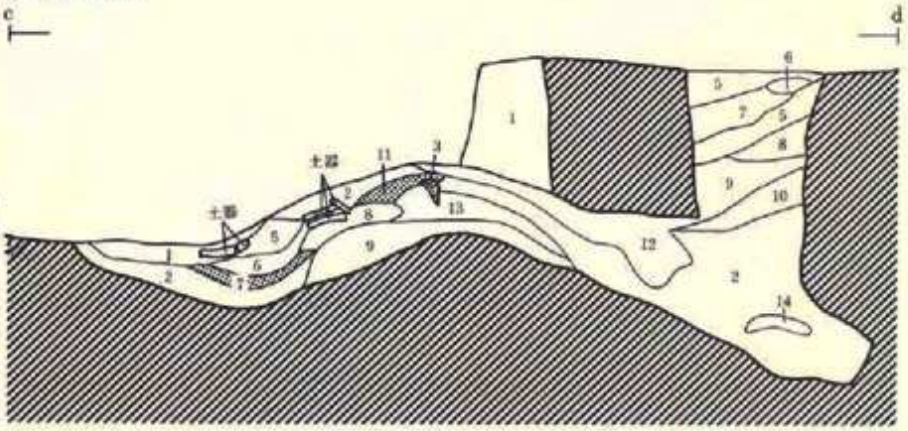
第66図　ＸＣ－１住居址



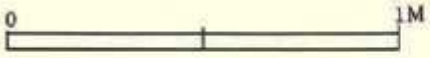


1	7.5YR	2/1	黒褐色土	粘土
2	〃	〃	〃	1より黒い(含,褐色土)
3	〃	4/3	褐色土	(含,地土)粘土
4	2.5YR	2/2	オリーブ褐色土	白鶴山火山灰
5	7.5YR	2/1	黒色土	(含,褐色土)
6	〃	4/6	褐色土	
7	〃		黒褐色土	粘土

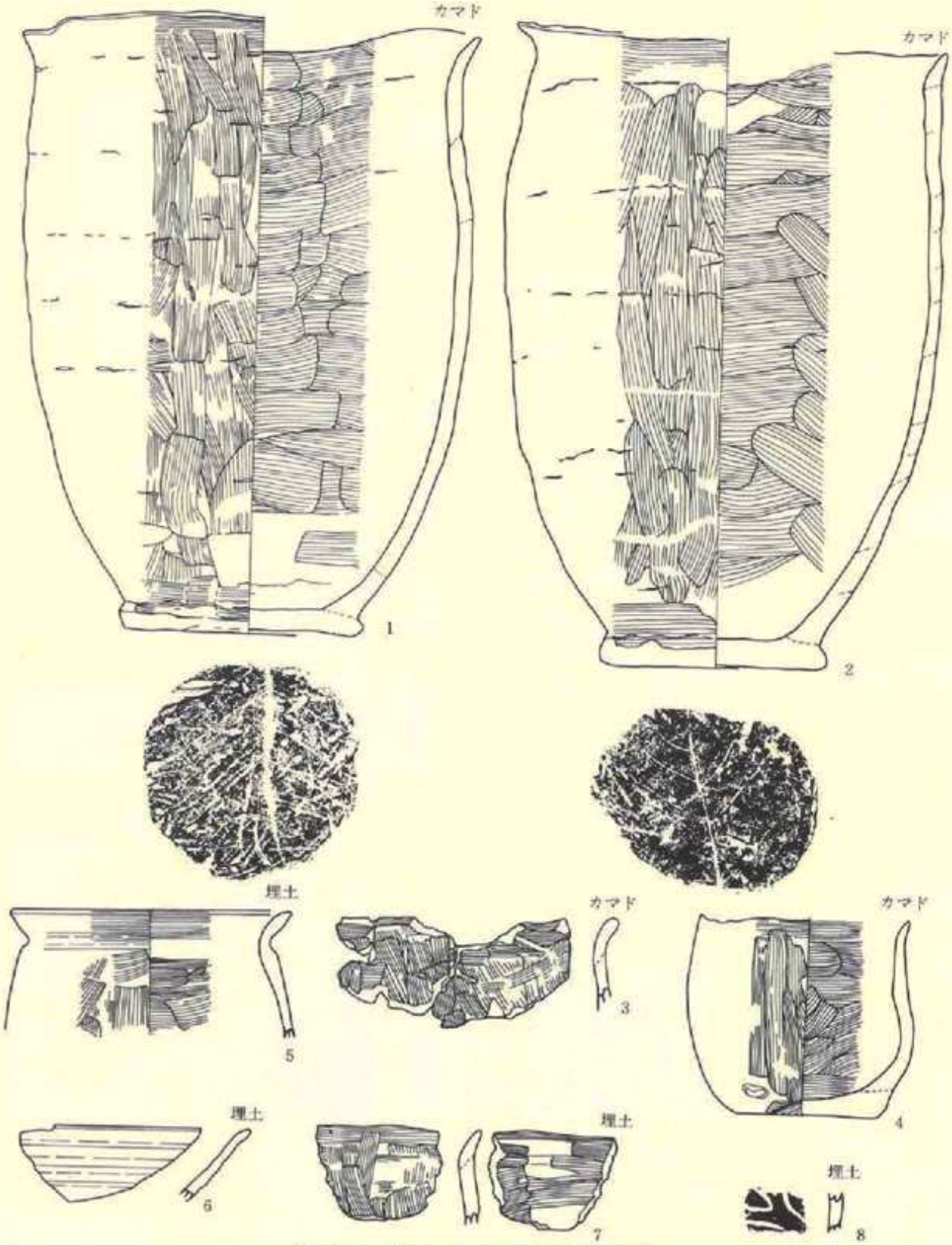




1	7.5YR	2/2	黒褐色土	(含,粗大焼土粒,炭)
2	5YR	2/4	極暗褐色土	
3	2.5YR	3/4	暗赤褐色	
4	5YR	〃	〃	
5	7.5YR	〃	極暗褐色土	(含,草本根)
6	〃	4/6	褐色土	
7	2.5YR	4/8	赤褐色土	焼土
8	5YR	〃	〃	〃
9	〃	3/1	黒褐色土	
10	〃	2/4	極暗赤褐色	
11	〃	4/8	赤褐色土	
12	7.5YR	4/6	褐色土	粘土
13	〃	2/3	極暗褐色土	(含,焼土粒)
14	〃	4/6	褐色土	焼土



第67図　ＸＣ－１住居址・カマド



第68図　ＸＣ－１住居址内出土遺物

〔3〕陥し穴と出土遺物

本稿で「陥し穴」の呼称で呼ぶ遺構は、従来「陥し穴状遺構」と呼ばれてきたものである。当該遺構の類例が近年数多く報告され、その性格は陥し穴と考えることが妥当と思われる状況となってきている。

ここでは定義の変更に伴う呼称の変更という厳密な意味ではなく、状遺構を省略して簡便にし、形状を表わす「円筒状」「溝状」を付加して呼称するものである。

以下、各遺構と出土遺物について述べるが、各々の規模等は一覧表にまとめ、特徴的な事項についてのみ触れることとする。

A．円筒状陥し穴

Ⅶ D－16陥し穴

遺構（第69図、第３表、写真図版24）

開口部は不整形で、上位の埋土は黒褐色土にオレンジ色のパミス（以下、オレンジパミス）や褐色土が混入する。しかし、壁に向かって漸移しており、地山と埋土を明瞭に識別するのは困難である。しかし、中～下位は比較的容易に識別できる。

Ⅷ D－10陥し穴

遺構（第69図、第３表、写真図版24）

開口部は円形であるが、底部は隅丸長方形ないし楕円形である。埋土は上位が黒褐色土、下位は褐色土でどちらにもオレンジパミスが多量に混入する。壁は、地山にオレンジパミスが含まれていないため埋土と識別することが可能となったもので、不詳な点が多い。しかし、底部はＸ層を掘り込んでいるため、ほぼ正確に掘り上げている。

Ⅷ D－11陥し穴

遺構（第69図、第３表、写真図版24）

開口部は楕円形、底部は長方形である。埋土にはオレンジパミスが混入する。

Ｘ C－５陥し穴

遺構（第69図、第３表、写真図版24）

開口部、底部とも楕円形である。底部中央に径20cm、深さ30cmの副穴が１基検出される。副穴の底部は平坦である。

Ⅷ D－15陥し穴

遺構（第70図、第３表、写真図版24）

本遺構はⅧ D－４住居址の炉の付近に位置しているが、同住居址の床面が流失しているため、本遺構との先後関係は不明である。底部から杭跡と思われる小穴を４基検出する。すべて直径５cmほどで深さ10～６cmである。

IXC－6陥し穴

遺構（第70図、第3表、写真図版25）

開口部は楕円形、底部は円形に近い。壁には4基の杭穴が見られる。それらは、本遺構を4分割するように位置し、角度はほぼ水平である。いずれも底部から50cm前後の高さである。杭穴は奥に向かって細くなる。開口部径10～7cm、奥行き15～10cmである。これらを対角線で結ぶと、ほぼ中央で交差する。その交点の真下に柱穴（杭穴）が1基検出された。平面形は三角形で1辺が10～8cm、深さ28cmである。先端に向かって細くなる。また、横杭穴より10cm程上位の壁に3個の小礫が埋め込まれている。

遺物（第77図、第7～8表、写真図版59）

埋土中より77－1、2が出土する。1はスクレイパー、2は深鉢の口縁部で補修孔が穿たれる。綾絡文と撚糸文が施文され、胎土に繊維が含まれる。他にフレイクが1点出土する。

IXC－4陥し穴

遺構（第70図、第3表、写真図版25）

開口部、頭部、底部が同心円状に重なる。開口部、壁とも崩壊は認められない。壁は底部に向かって僅かにすぼまるが、ほぼ直立する。円筒状陥し穴の典型的な形を保っている。

VIIID－9陥し穴

遺構（第70図、第3表、写真図版25）

底部に厚く褐色の粘土が堆積している。壁は崩落の為か凹凸が見られる。平面プランは概ね楕円形である。

VIIIE－1陥し穴

遺構（第70図、第3表、写真図版25）

開口部及び下位の壁は大きく崩壊している。

VIIIC－5陥し穴

遺構（第71図、第3表、写真図版25）

VIIIC－3住居址によって切られる。埋土はVIID－16Pに類似する。底部から大きな礫1個が出土する。壁の最下端は抉られて、やや広くなっている。

VIIID－14陥し穴

遺構（第71図、第3表、写真図版26）

埋土下位には褐色の粘土が厚く堆積する。

VIIID－6陥し穴

遺構（第71図、第3表、写真図版26）

中～下位の壁はほとんど崩壊していない。しかし、下位には褐色土が厚く堆積する。

ＸＣ－２陥し穴

遺構（第71図、第３表、写真図版26）

ⅧＤ－６陥し穴に比較して頸部より下位の深さが若干浅い。開口部、頸部、底部が同心円上にのり、崩壊している所はない。

ⅦＥ－１陥し穴

遺構（第71図、第３表、写真図版26）

開口部はやや斜面下位側に広がる。中～下位の壁はほとんど崩壊していない。下位には褐色土が厚く堆積する。

ⅧＤ－13陥し穴

遺構（第72図、第３表、写真図版26）

開口部は斜面に沿うように広がり楕円形状となる。底部が斜面上位へ寄るため、全体が斜面に沿って傾斜している。

ⅨＣ－７陥し穴

遺構（第72図、第３表、写真図版27）

開口部が削平され、斜面下位側は頸部が残っていない。従って、開口部は斜面上位側に広がる形となっている。全体が楕円形である。

ⅧＤ－12陥し穴

遺構（第72図、第３表、写真図版27）

開口部は削平されている。壁の最下端は抉れるように膨らむ。やや楕円形である。

ⅨＣ－９陥し穴

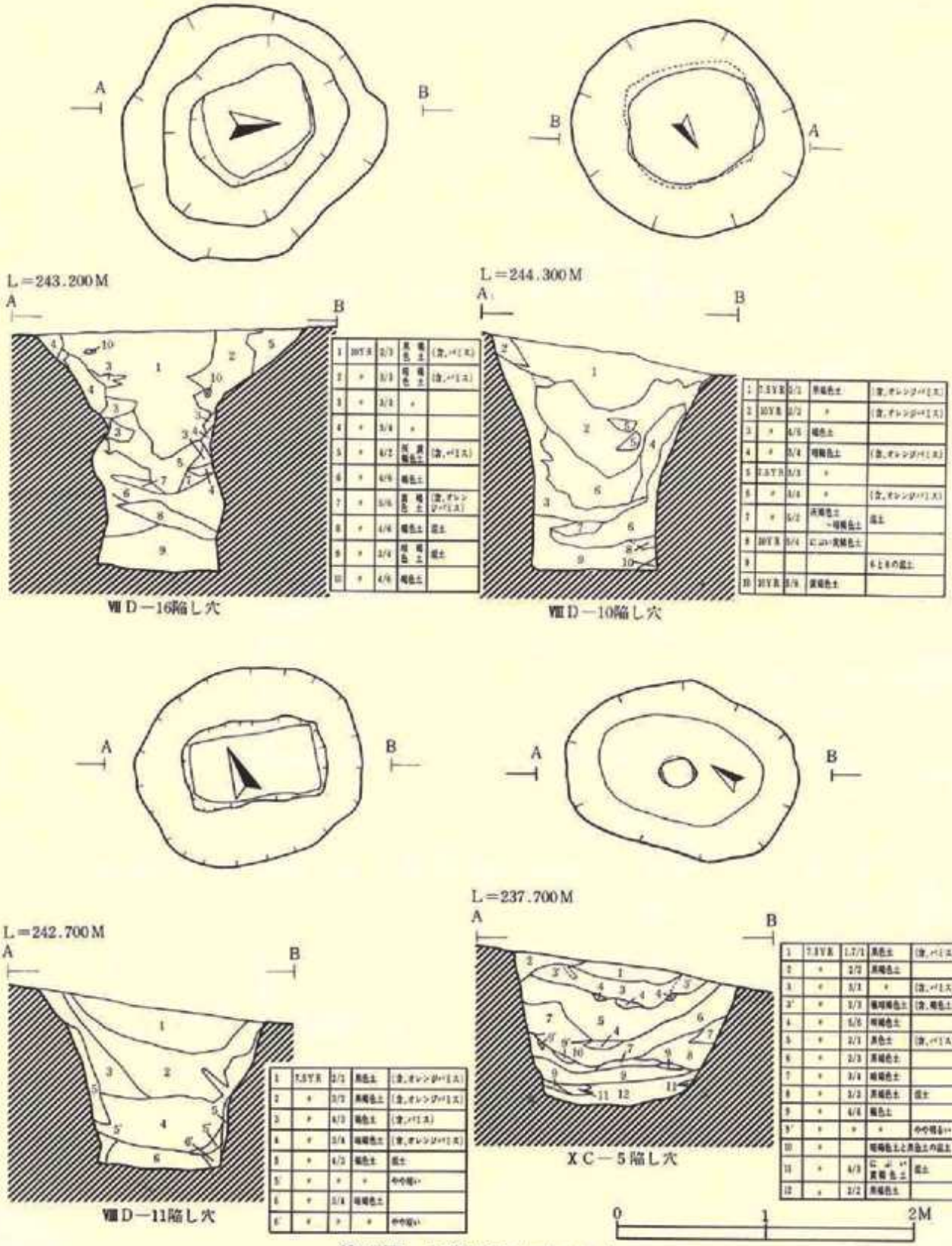
遺構（第72図、第３表、写真図版27）

開口部は削平されている。一部の底部は頸部より内側に入るが、全体に他の円筒状陥し穴と同様である。下位には褐色土が厚く堆積する。

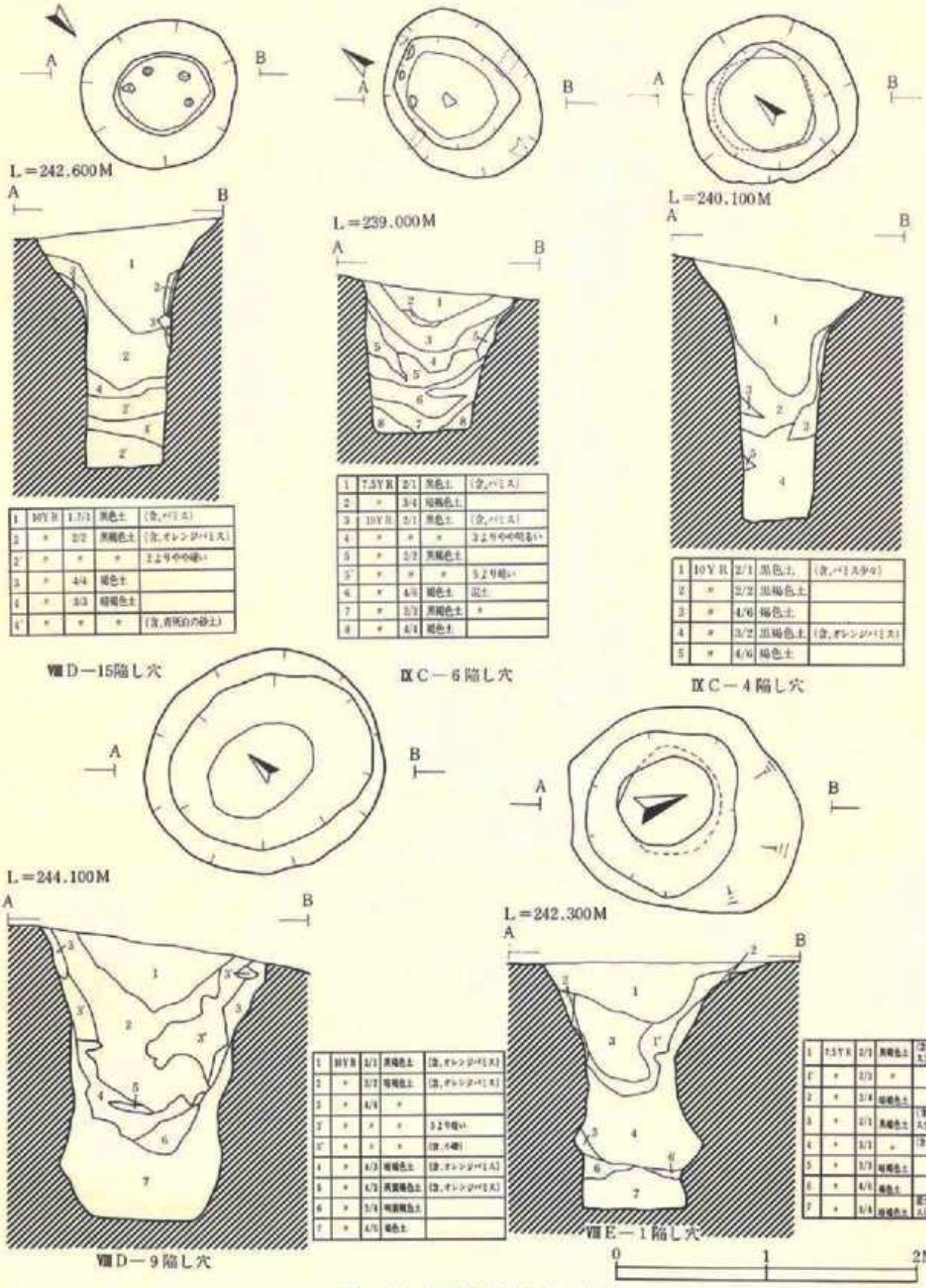
ⅨＣ－８陥し穴

遺構（第72図、第３表、写真図版27）

開口部は削平されている。斜面下位側の開口部は若干広くなる。下位には褐色土が厚く堆積する。



第69図　円筒状陥し穴（1）



1	10YR	1.7/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	2/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
2'	〃	〃	〃	2より中の硬い
3	〃	4/4	褐色土	
4	〃	3/3	暗褐色土	
4'	〃	〃	〃	(含,青灰白の砂土)

Ⅷ D－15陥し穴

1	7.5YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	3/4	暗褐色土	
3	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
4	〃	〃	〃	3より中の明るい
5	〃	2/2	黒褐色土	
5'	〃	〃	〃	5より暗い
6	〃	4/6	褐色土	泥土
7	〃	2/2	黒褐色土	〃
8	〃	4/4	褐色土	

Ⅸ C－6陥し穴

1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス少々)
2	〃	2/2	黒褐色土	
3	〃	4/6	褐色土	
4	〃	3/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
5	〃	4/6	褐色土	

Ⅸ C－4陥し穴

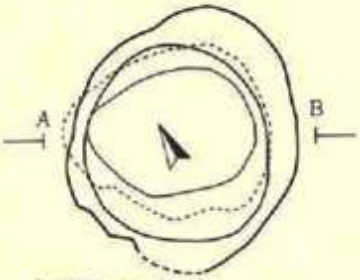
1	10YR	2/1	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
2	〃	3/2	暗褐色土	(含,オレンジパミス)
3	〃	4/4	〃	
3'	〃	〃	〃	3より暗い
3''	〃	〃	〃	(含,小礫)
4	〃	4/3	暗褐色土	(含,オレンジパミス)
5	〃	4/3	黒黄褐色土	(含,オレンジパミス)
6	〃	3/4	明黄褐色土	
7	〃	4/6	褐色土	

Ⅷ D－9陥し穴

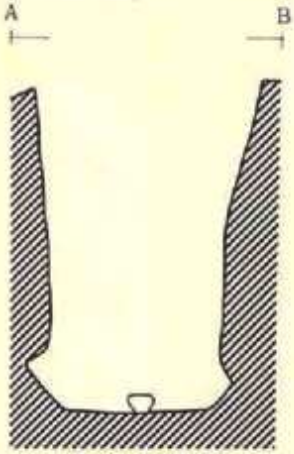
1	7.5YR	2/1	黒褐色土	(含,明白色パミス)
1'	〃	2/3	〃	
2	〃	3/4	暗褐色土	
3	〃	2/1	黒褐色土	(含,黒白色パミス少々)
4	〃	3/3	〃	(含,パミス)
5	〃	3/3	暗褐色土	
6	〃	4/6	褐色土	
7	〃	3/4	暗褐色土	泥土 (含,パミス)

Ⅷ E－1陥し穴

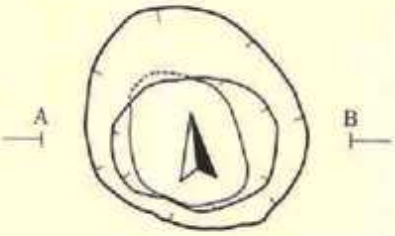
第70図　円筒状陥し穴（2）



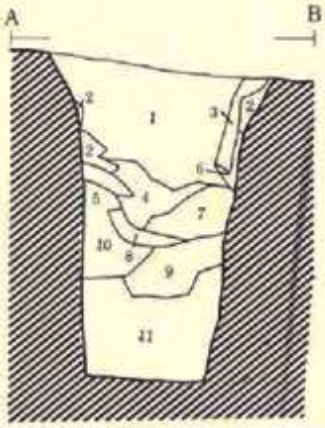
L＝244.400M



Ⅷ C－5陥し穴

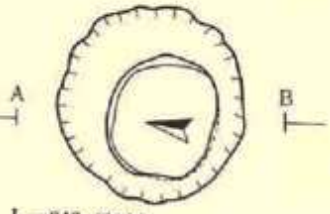


L＝241.000M

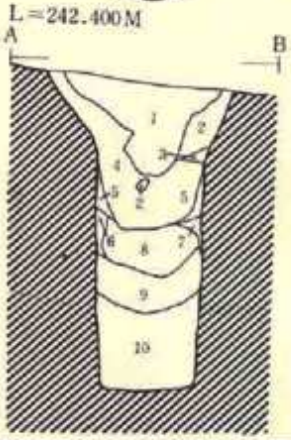


1	10Y R	2/2	黒褐色土	粘土(含,オレンジパミス)
2	〃	3/4	暗褐色土	(含,炭)
3	〃	2/3	黒褐色土	1との漸移層
4	〃	2/3	〃	(含,オレンジパミス)
5	7.5Y R	3/4	暗褐色土	(含,オレンジパミス)
6	10Y R	4/6	褐色土	
7	7.5Y R	3/4	暗褐色土	
8	〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃	
10	〃	〃	にぶい黒褐色土	
11	10Y R	4/6	褐色土	粘土

Ⅷ D－14陥し穴

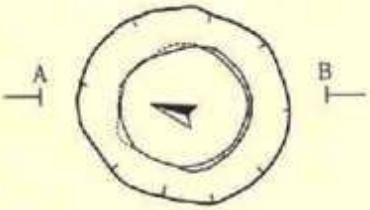


L＝242.400M

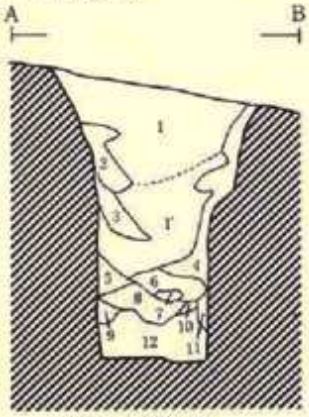


1	10Y R	2/1	黒色土	(含,オレンジパミス)
2	〃	3/1	黒褐色土	(含,パミス)
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	4/6	褐色土	
5	〃	2/3	黒褐色土	(含,砂)
6	10Y R	4/4	褐色土	
7	〃	2/2	黒褐色土	
8	〃	2/3	〃	(含,パミス)
9	7.5Y R	3/3	暗褐色土	(含,オレンジパミス)
10	10Y R	4/4	褐色土	(含,オレンジパミス,砂)

Ⅷ D－6陥し穴



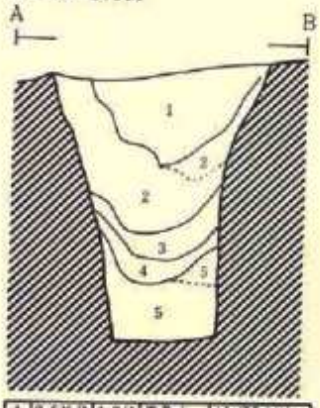
L＝239.800M



1	10Y R	2/1	黒色土	(含,パミス)
1'	〃	〃	〃	パミス層し
2	〃	2/2	黒褐色土	
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	2/3	黒褐色土	
5	〃	3/4	暗褐色土	
6	〃	2/3	黒褐色土	
7	7.5Y R	3/4	暗褐色土	(含,オレンジパミス)
8	10Y R	2/3	黒褐色土	
9	〃	4/6	褐色土	
10	7.5Y R	2/3	極暗褐色土	
11	10Y R	4/6	褐色土	(含,砂,礫)
12	〃	2/2	黒褐色土	(含,砂)

Ⅹ C－2陥し穴

L＝242.500M

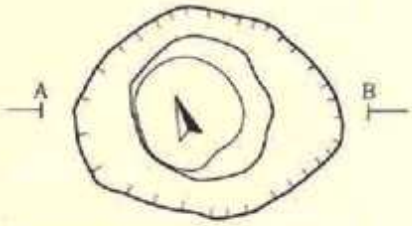


1	7.5Y R	1.7/1	黒色土	(含,褐色土粒)
2	〃	3/4	暗褐色土	(含,明褐色土粒)
3	〃	4/4	褐色土	
4	〃	3/4	暗褐色土	
5	〃	4/6	褐色土	

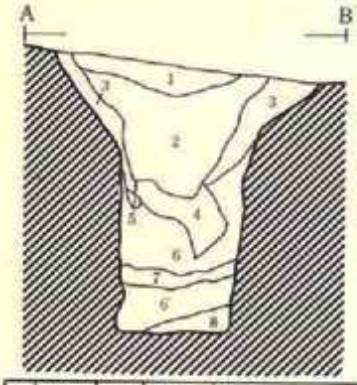
Ⅶ E－1陥し穴

0 1 2M

第71図　円筒状陥し穴（3）

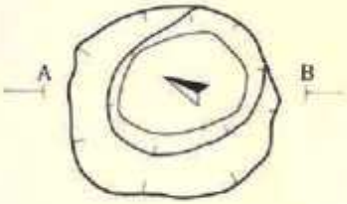


L＝242.900M

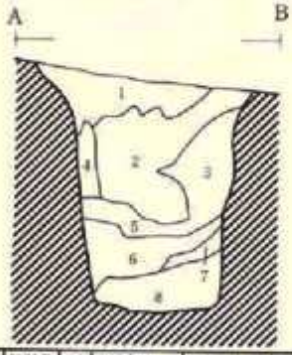


1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	1.7/1	〃	(含,パミス)
3	〃	2/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
4	〃	3/1	〃	(含,パミス)
5	7.5YR	3/4	暗褐色土	
6	〃	2/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
6'	〃	〃	〃	(含,オレンジパミス少々)
7	〃	4/6	褐色土	(含,オレンジパミス)
8	〃	5/6	明褐色土	

Ⅷ D－13陥し穴



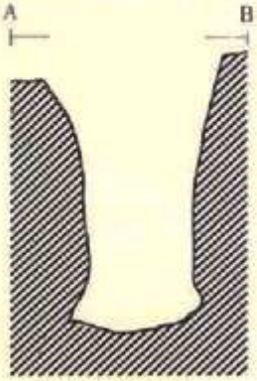
L＝241.500M



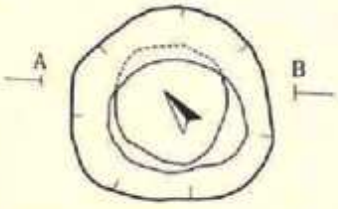
1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
2	〃	2/3	〃	(含,オレンジパミス)
3	〃	3/2	〃	(含,オレンジパミス)
4	〃	4/3	褐色土	
5	5Y	3/1	オリーブ黒色土	(含,砂)
6	10YR	3/4	暗褐色土	
7	〃	3/3	〃	硬い
8	〃	4/3	褐色土	

Ⅺ C－7陥し穴

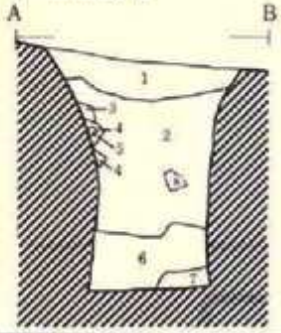
L＝242.100M



Ⅷ D－12陥し穴

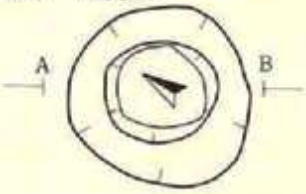


L＝241.100M

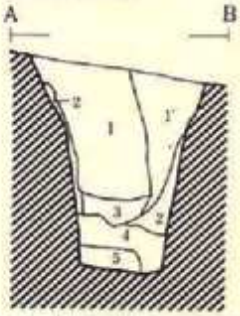


1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	3/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	3/4	〃	
5	〃	4/6	褐色土	
6	〃	5/2	灰黄褐色土	
7	7.5YR	4/4	褐色土	

Ⅸ C－9陥し穴

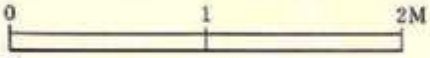


L＝241.700M



1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
1'	〃	3/4	〃	
2	〃	4/4	暗褐色土	
3	〃	3/3	〃	(含,オレンジパミス少々)
4	〃	4/6	褐色土	
5	〃	3/4	暗褐色土	粘土(含,オレンジパミス少々)

Ⅸ C－8陥し穴



第72図　円筒状陥し穴（4）

B．溝状陥し穴

溝状陥し穴は二つに細分される。一つは底部幅が概ね20cmと狭い（aタイプ）。他は底部幅がaタイプの約2倍と広く、埋土上位に十和田a降下火山灰が堆積する（bタイプ）。以下、円筒状陥し穴と同様に個々の遺構で特徴のあるもののみを述べることにする。なお、一覧表中の「長軸方向」とは斜面に対して長軸のとる方向を表わしたものである。

aタイプ

VID－11陥し穴

遺構（第73図、第4表、写真図版28）

上位が耕作地造成に伴って、ある程度削平されたと思われる。検出されたこのタイプの遺構では最大の長さである。開口部の中央部はやや広がる。

遺物（第77図、第8表、写真図版59）

埋土上位から、77－3が1点出土する。磨石で、両面はよく磨滅し、擦痕が観察される。完形品である。

VIID－3陥し穴

遺構（第73図、第4表、写真図版28）

一部がVIID－1住居址によって切られる。黒褐色土（VII層）の地山から掘り込んでいる。両端はオーバー・ハングしている。

遺物（第77図、第8表、写真図版59）

埋土上位から77－4が1点出土する。完形の石槍である。全面に丁寧な押圧剥離調整が加えられる。本遺構に共伴するかどうかは不明である。

VIID－18陥し穴

遺構（第73図、第4表、写真図版28）

上位が耕作地造成に伴って、ある程度削平されたと思われる。中央の一部がVIID－11Pによって切られる。断面形は長方形で、両端はオーバー・ハングする。

VIC－2陥し穴

遺構（第73図、第4表、写真図版29）

尾根の頂部に位置する。中央部の上位が一部崩壊している。底部は更に深く掘り込まれている部分があるが、その幅は10cmと狭くなる。

遺物（第77図、第7表、写真図版60）

埋土上位から77－5～7の縄文土器3点が出土する。5は軸の縄の撚りと反対の方向に絡げる付加条文、6は無節縄文、7は結束の羽状縄文である。石器はフレイク6点が出土する。いずれも小片であり、図化等は省略する。土器は前期と思われるが、いずれも流れ込みであり、

時期決定資料とはなり得ない。

VID－3陥し穴

遺構（第74図、第4表、写真図版29）

尾根の頂部に位置する。両端はオーバー・ハングする。

遺物（第77～78図、第7～8表、写真図版60）

埋土中～上位から、77－8～12の縄文土器5点と78－1～2の石器2点が出土する。77－8は平縁で口唇部は外反気味である。R－Lの撚糸文である。9は撚糸文の地文の上に口縁部に平行な2条の原体側面圧痕文が押圧される。10はS字状連鎖沈線文、11は口唇部がやや肥厚する。L－Rの単節斜縄文と4本丸組紐の原体を交互に施文する。12は撚りの異なる単節斜縄文を交互に施文する羽状縄文である。端部にループ痕が見られる。8～11の4点は胎土に繊維を含む。8は器面調整が雑で凹凸が著しく、9は施文が雑ではあるが、いずれも焼成は良好である。石器は78－1～2の2点が出土する。前者は磨製石斧であるが刃部を欠損する。後者は凹石である。

以上の遺物は前期前葉を示唆するが、出土層位と周辺から出土する遺物が比較的同期のものが多いことから、直接本遺構の時期決定資料とは見なされない。

VIID－7陥し穴

遺構（第74図、第4表、写真図版29）

開口部は削平されている。両端はオーバーハングしない。

VIIC－4陥し穴

遺構（第74図、第4表、写真図版29）

中央部の上位は大きく崩落し、開口部がやや小判状に膨らむ。崩落した地山が埋土下位に厚く堆積する。両端はオーバーハングがきつい。

IXB－1陥し穴

遺構（第74図、第4表、写真図版30）

開口部は大きく削平されている。長軸方向が斜面に平行しているため、両端のオーバーハングはきつい。また、底部は斜面の上位で屈折して上がり、即ちX層まで掘り込んでいる。

VID－6陥し穴

遺構（第75図、第4表、写真図版30）

尾根の頂部に位置する。中央部の中～上位は崩壊している。両端はオーバーハングしており、その角度はきつい。東端部は、やや南側に屈曲している。

VIE－3陥し穴

遺構（第75図、第4表、写真図版30）

開口部は多少削平されている。開口部の長さに比し底部は長く、オーバーハングが最もきつい陥し穴の一つである。

VIE－6陥し穴

遺構（第75図、第4表、写真図版30）

開口部は削平されている。両端はオーバーハングする。

VIE－4陥し穴

遺構（第75図、第4表、写真図版31）

尾根の頂部に位置する。遺構の一部は調査区外へ延びるため未調査である。上位は外反する。

VIE－5陥し穴

遺構（第75図、第4表、写真図版31）

尾根の頂部に位置する。開口部は大きく広がる。aタイプに属する陥し穴では、本遺構のみが底部幅約1.5倍と広い。

遺物（第78図、第7表、写真図版60）

埋土中～上位から78－3～4の2点が出土する。ともに磨消し縄文である。器種は不明である。流れ込みと思われる。

VIIIC－1陥し穴

遺構（第76図、第4表、写真図版31）

遺構の一部は調査区外へ延びるため未調査である。底部幅はやや狭い。端部はオーバーハングする。

bタイプ

IXC－1陥し穴

遺構（第76図、第4表、写真図版32）

南東斜面の下位に位置する。斜面上位側の底部には2基の、下位側には1基の杭跡が検出された。杭跡の直径は7～5cm、深さは15～10cmである。斜行する。また、同様に上位側には2つ、下位側には1つの凹みが検出された。これらは他に検出された杭穴と同様の性格を有する可能性が考えられる。

XC－3陥し穴

遺構（第76図、第4表、写真図版32）

南東斜面の中位に位置する。底部に検出された杭跡は方向・規模ともIXC－1陥し穴と同様であるが凹みはない。斜面上位の底部は上方に屈折する。

遺物（第78図、第７表、写真図版60）

78－５は０段２条で胎土に繊維を含む。他に土師器の甕の体部片３点が出土する。

ＸＢ－１陥し穴

遺構（第76図、第４表、写真図版32）

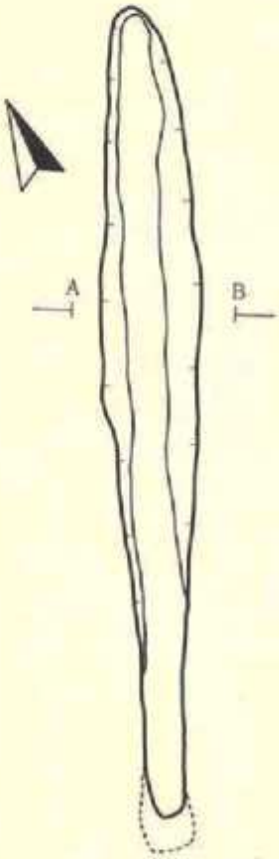
南東斜面中位に位置する。斜面上位側の一部は調査区外へ延びるため未調査である。斜面下位の底部から杭穴が１基（直径10cm、深さ18cm）が検出される。斜行している。

第３表　円筒状陥し穴遺構一覧表

遺構名	開口部 (cm)	底部 (cm)	深さ (cm)	備考	図版番号	写真図版
Ⅷ D－16陥	135×105	70× 60	160	不整円形	第69図	24
Ⅷ D－10陥	145	85	150	開口部－円、底部－隅丸長方形	〃	〃
Ⅷ D－11陥	153×130	74× 43	108	開口部－楕円、底部－長方形	〃	〃
Ⅹ C－５陥	157×112	110× 70	94	杭跡１、楕円形	〃	〃
Ⅷ D－15陥	105× 96	55× 48	160	杭跡４	第70図	〃
Ⅸ C－６陥	118× 95	65× 52	96	杭跡５	〃	25
Ⅸ C－４陥	115	60	170		〃	〃
Ⅷ D－９陥	160×145	75× 51	185		〃	〃
Ⅷ E－１陥	161×135	70	166		〃	〃
Ⅷ C－５陥	125	85× 60	165	硬１ヶ、Ⅷ C－３住によって切られる	第71図	〃
Ⅷ D－14陥	118×108	72× 55	160		〃	26
Ⅷ D－６陥	100	55	158		〃	〃
Ⅹ C－２陥	106×100	65	140		〃	〃
Ⅷ E－１陥	115	58	140		〃	〃
Ⅷ D－13陥	136×105	56	136		第72図	〃
Ⅸ C－７陥	105× 97	77× 48	117		〃	27
Ⅷ D－12陥	90	60	135		〃	〃
Ⅸ C－９陥	102× 97	63	116		〃	〃
Ⅸ C－８陥	96× 92	40× 45	104		〃	〃

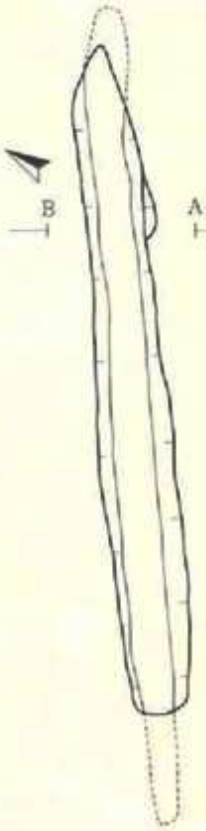
第4表　溝状陥し穴遺構一覧表

遺構名	開口部(cm)		底部(cm)		深さ(cm)	長軸方向	備考	図版番号	写真図版
	長さ	巾	長さ	巾					
a タイプ									
ⅥD－11陥	414	53	428	21	116	平行		第73図	28
ⅧD－3陥	328	36	420	20	140	〃	ⅧD－1住に切られる、石器	〃	〃
ⅦD－18陥	346	18	406	17	70	直交	ⅦD－11Pに切られる	〃	〃
ⅥC－2陥	346	60	366	18	119	平行	土器	〃	29
ⅥD－3陥	312	56	344	23	115	直行	〃	第74図	〃
ⅧD－7陥	326	45	300	20	90	平行		〃	〃
ⅧC－4陥	232	87	286	20	140	直交		〃	〃
ⅪB－1陥	264	36	286	18	72	〃		〃	30
ⅥD－6陥	206	95	252	20	131	〃		第75図	〃
ⅥE－3陥	183	55	250	20	116	〃		〃	〃
ⅥE－6陥	157	41	220	20	111	〃		〃	〃
ⅥE－4陥	114	70	190	20	152	〃	一部調査	〃	31
ⅥE－5陥	200	80	175	33	96	平行	土器	〃	〃
ⅧC－1陥	115	55	125	15	128	直交	一部調査	第76図	〃
b タイプ									
ⅨC－1陥	258	85	280	40	105	直交	杭跡3	第76図	32
ⅩC－3陥	244	90	278	40	125	〃	〃 3、土器	〃	〃
ⅩB－1陥	240	97	232	40	110	〃	〃 1、一部調査	〃	〃



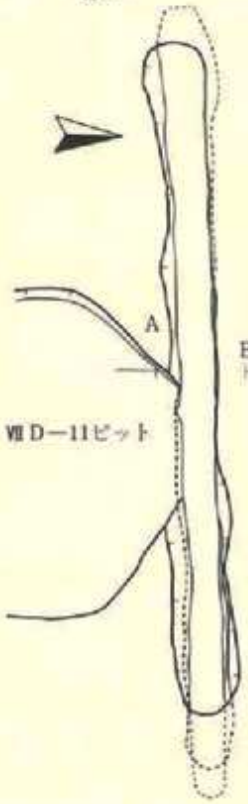
1	10YR	3/1	黒褐色土	
2	〃	2/3	〃	(含,パミス少々)
3	〃	3/4	暗褐色土	
4	〃	2/3	褐色土	(含,パミス少々)
5	〃	4/6	〃	
6	〃	5/4	黄褐色土	
7	〃	2/2	黒褐色土	粘土

Ⅵ D－11陥し穴



1	10YR	1.7/1	黒　色	(含,パミス)
2	〃	2/3	黒褐色	(含,パミス)
3	〃	3/1	黒　色	(含,パミス)
3'	〃	〃	〃	(含,褐色土少々)
4	〃	4/6	暗褐色土	
5	〃	2/2	黒褐色土	粘土
6	〃	6/6	明黄褐色土	
7	〃	3/4	暗褐色土	

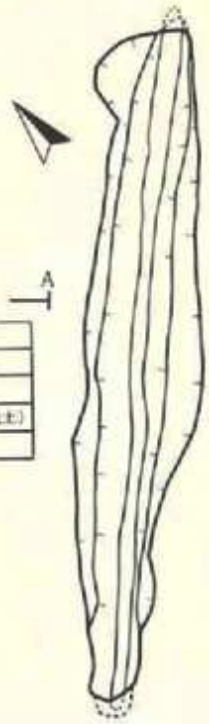
Ⅷ D－3陥し穴

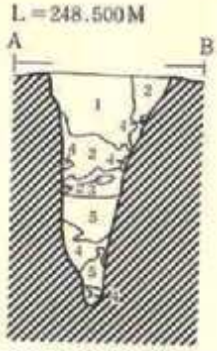


Ⅶ D－11ピット

1	10YR	2/1	黒色土	
2	〃	2/2	黒褐色土	
3	〃	4/4	褐色土	
4	〃	2/1	黒褐色土	(含,褐色土)
5	〃	〃	黒色土	粘土

Ⅶ D－18陥し穴



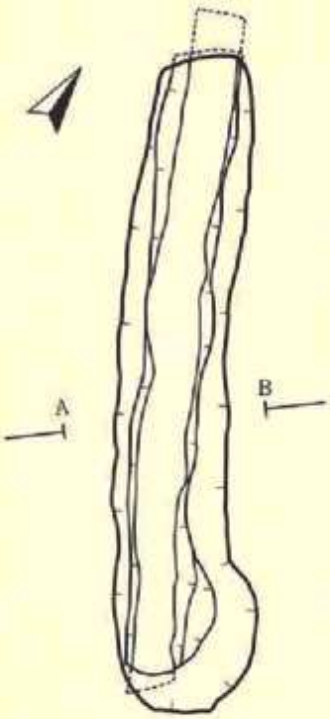


1	7.5YR	2/2	褐色土	粘土
2	〃	3/3	〃	粘土(含,オレンジパミス)
3	〃	4/6	〃	
4	〃	5/6	明褐色土	
5	〃	2/2	褐色土	(含,黒褐色土ー下段)

Ⅵ C－2陥し穴

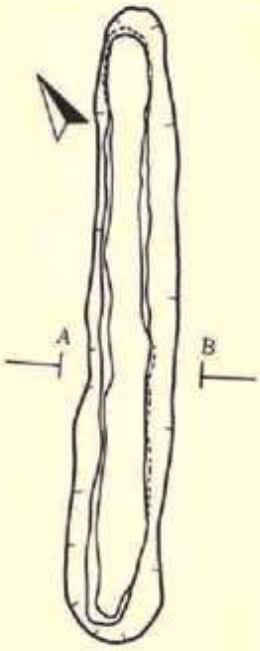
0　1　2M

第73図　溝状陥し穴（1）



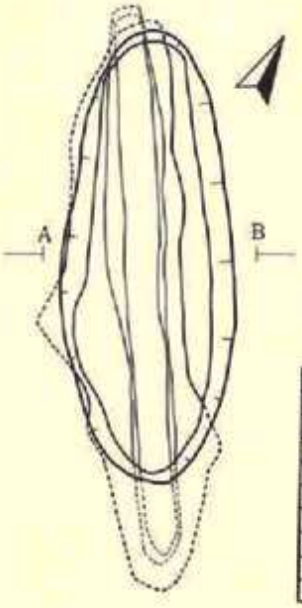
1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
1'	〃	〃	〃	(含,褐色土少々)
1"	〃	〃	〃	
2	〃	2/2	黒褐色土	(含,パミス)
3	〃	3/2	〃	混土
4	〃	3/1	〃	混土(含,パミス)
5	〃	3/4	暗褐色土	
6	〃	2/2	黒褐色土	混土
7	〃	4/6	褐色土	
8	〃	2/2	黒褐色土	

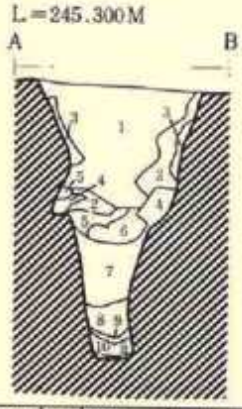
Ⅵ D－3 陥し穴



1	10YR	3/1	黒褐色土	(含,パミス)
1'	〃	〃	〃	
2	〃	2/2	〃	
2'	〃	〃	〃	(含,褐色土)
3	〃	3/4	暗褐色土	
4	〃	〃	〃	混土(含,砂,粉炭)
5	〃	2/1	黒色土	(含,砂)
6	〃	3/3	暗褐色土	(含,黒色土)
7	〃	2/1	黒色土	

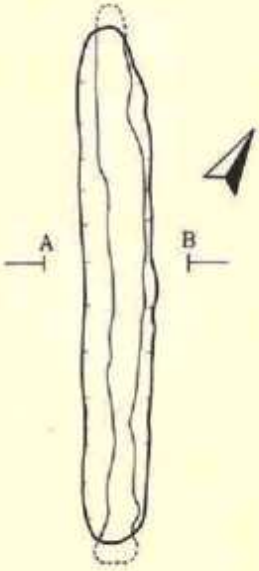
Ⅷ D－7 陥し穴





1	10YR	1.7/1	黒色土	(含,オレンジパミス)
2	〃	2/2	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
3	〃	〃	〃	(含,褐色土)
4	〃	3/3	暗褐色土	混土
5	〃	4/4	褐色土	
6	〃	2/1	黒褐色土	(含,オレンジパミス)
7	〃	5/6	黄褐色土	
8	〃	6/6	明黄褐色土	(含,スコリア)
9	〃	2/1	黒色土	
10	〃	3/3	暗褐色土	混土

Ⅷ C－4 陥し穴

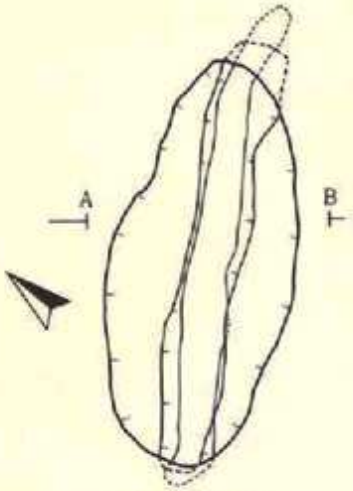


1	7.5YR	3/4	暗褐色土	混土
2	〃	3/3	〃	
3	〃	2/3	極暗褐色土	
4	〃	4/4	褐色土	
5	〃	5/4	鈍い褐色土	

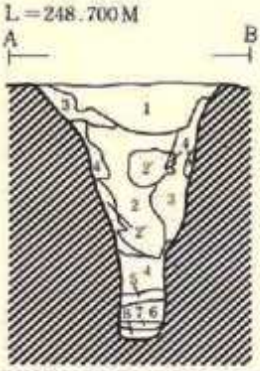
Ⅺ B－1 陥し穴

0 1 2M

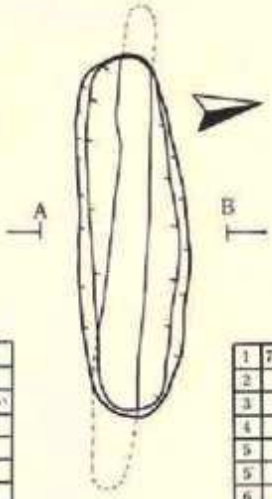
第74図　溝状陥し穴（2）



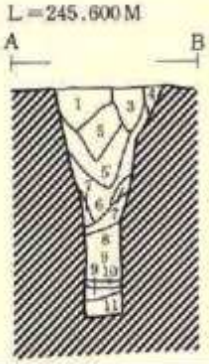
VI D－6陥し穴



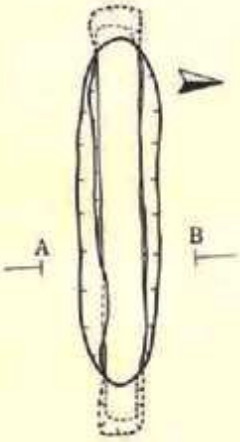
1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	3/4	暗褐色土	(含,パミス)
2'	〃	〃	黒褐色土	2より黒褐色土が多い
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	4/6	褐色土	
4'	〃	3/4	〃	
5	〃	2/3	黒褐色土	
6	〃	5/3	にぶい黄褐色土	
7	〃	4/6	暗褐色土	混土
8	〃	〃	褐色土	混土(含,パミス)



VI E－3陥し穴

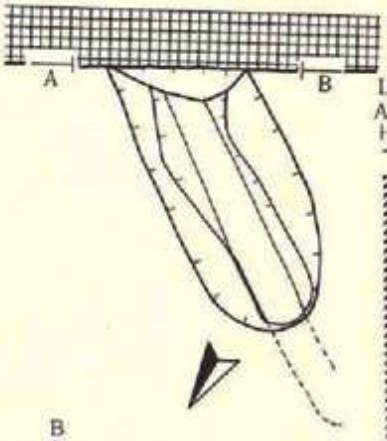


1	7.5YR	3/3	暗褐色土	混土
2	〃	4/4	褐色土	
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	4/3	褐色土	混土
5	〃	3/2	黒褐色土	(含,灰白色,浮石)
5'	〃	〃	〃	(含,灰白色浮石粒一細粒)
6	〃	4/3	褐色土	混土
7	〃	4/4	〃	
8	〃	3/2	黒褐色土	
9	〃	〃	にぶい褐色土	
10	〃	4/3	褐色土	混土
11	〃	3/2	黒褐色土	

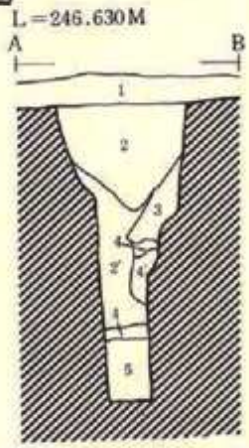


VI E－6陥し穴

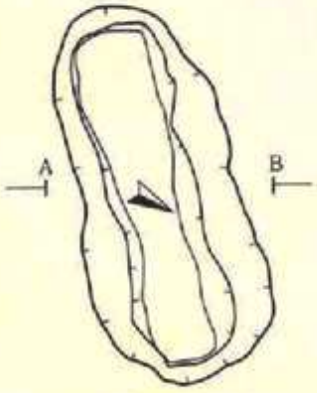
1	10YR	2/1	黒色土	(含,スコリヤ)
2	〃	2/2	黒褐色土	(含,スコリヤ,パミス)
3	〃	3/4	暗褐色土	
4	〃	4/6	褐色土	
5	〃	3/3	暗褐色土	混土
6	2.5YR	3/1	黒褐色土	混土



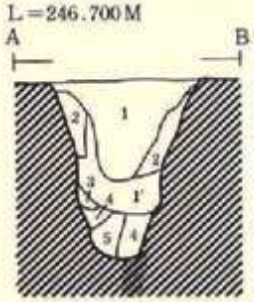
VI E－4陥し穴



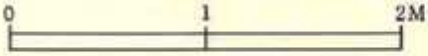
1	7.5YR		暗褐色土	耕作土
2	〃	3/1	黒褐色土	(含,浮石粒)
2'	〃	〃	〃	
3	〃	2/2	〃	混土
3'	〃	〃	〃	3よりやや黒い
4	〃	5/6	明褐色土	
5	〃	2/3	極黒褐色土	



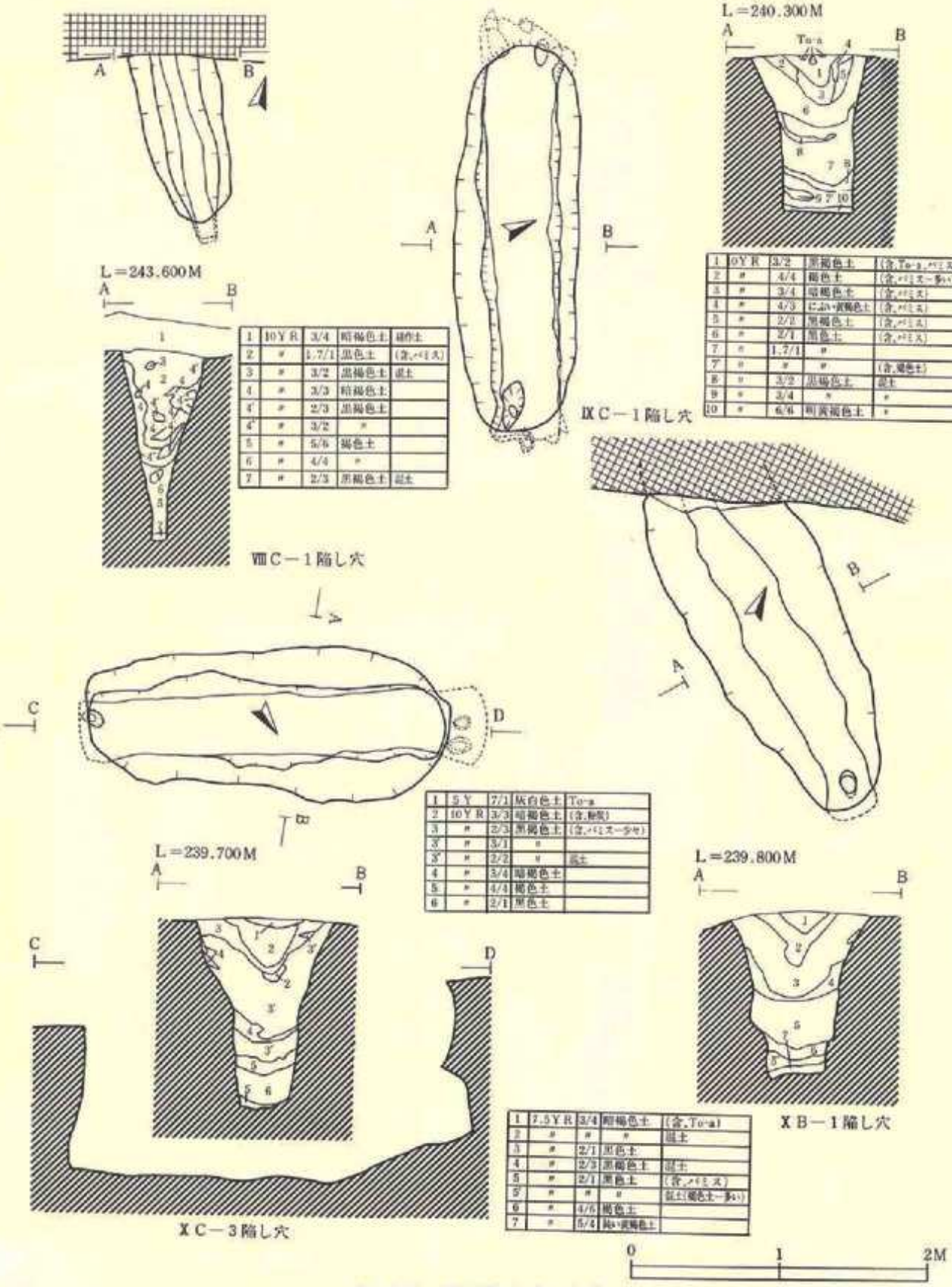
VI E－5陥し穴



1	7.5YR	2/2	黒褐色土	(含,白色パミス)
1'	〃	〃	〃	
2	〃	〃	〃	混土
3	〃	2/2	〃	〃
4	〃	4/6	褐色土	〃
5	〃	2/3	〃	〃



第75図　溝状陥し穴（3）



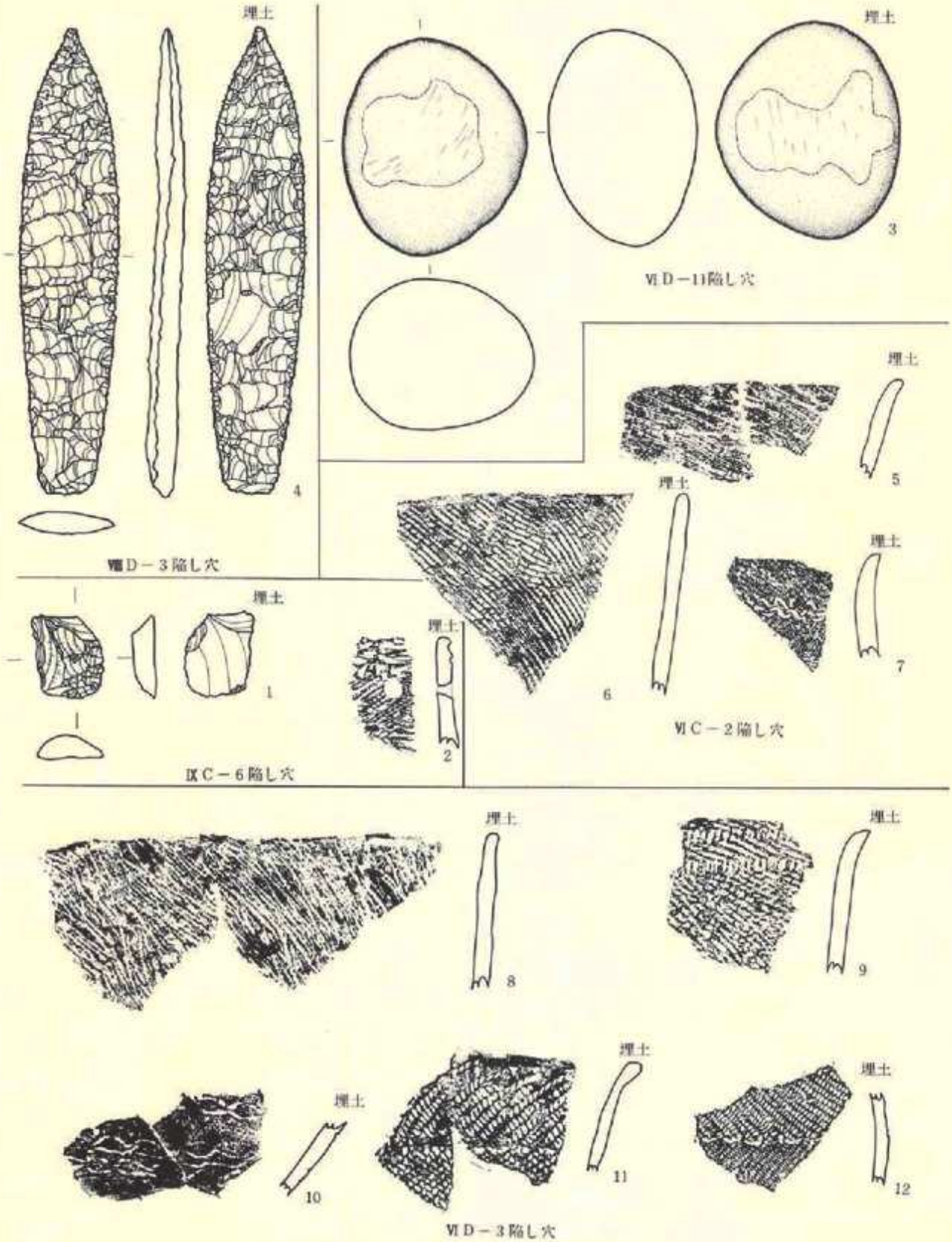
1	10YR	3/2	黒褐色土	(含,To-a,パミス,炭)
2	〃	4/4	褐色土	(含,パミス一多い)
3	〃	3/4	暗褐色土	(含,パミス)
4	〃	4/3	にぶい黄褐色土	(含,パミス)
5	〃	2/2	黒褐色土	(含,パミス)
6	〃	2/1	黒色土	(含,パミス)
7	〃	1.7/1	〃	
7'	〃	〃	〃	(含,褐色土)
8	〃	3/2	黒褐色土	崩土
9	〃	3/4	〃	〃
10	〃	6/6	明黄褐色土	〃

1	10YR	3/4	暗褐色土	耕作土
2	〃	1.7/1	黒色土	(含,パミス)
3	〃	3/2	黒褐色土	崩土
4	〃	3/3	暗褐色土	
4'	〃	2/3	黒褐色土	
4''	〃	3/2	〃	
5	〃	5/6	褐色土	
6	〃	4/4	〃	
7	〃	2/3	黒褐色土	崩土

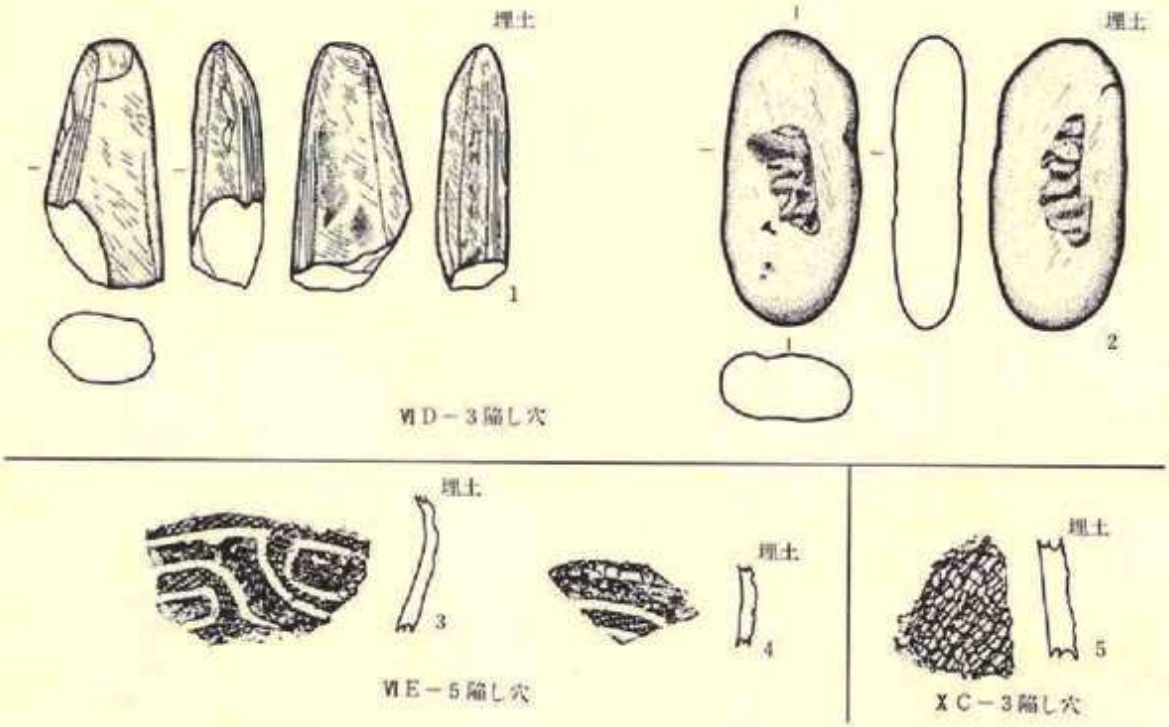
1	5Y	7/1	灰白色土	To-a
2	10YR	3/3	暗褐色土	(含,炭)
3	〃	2/3	黒褐色土	(含,パミス一少々)
3'	〃	3/1	〃	
3''	〃	2/2	〃	崩土
4	〃	3/4	暗褐色土	
5	〃	4/4	褐色土	
6	〃	2/1	黒色土	

1	7.5YR	3/4	暗褐色土	(含,To-a)
2	〃	〃	〃	崩土
3	〃	2/1	黒色土	
4	〃	2/3	黒褐色土	崩土
5	〃	2/1	黒色土	(含,パミス)
5'	〃	〃	〃	崩土(褐色土一多い)
6	〃	4/6	褐色土	
7	〃	5/4	鈍い黄褐色土	

第76図　溝状陥し穴（4）



第77図　陥し穴内出土遺物(1)



第78図　陥し穴内出土遺物(2)

〔4〕ピットと出土遺物

本項のピットは、人為的な掘り込みと認められるものから住居址及び住居址状遺構と陥し穴を除いたすべての遺構を包括したものである。従って、これらは形態的機能的に、あるいは時期別等に分類することができるし、幾つかの分類基準を併用させることも可能である。しかし同時に、ある分類基準ですべての遺構を完全に分類しきれないのも事実である。従って以下では、まず時期別に分類し、さらに形態的に分類することにする。しかし、共伴遺物は極めて少なく各遺構の時期決定資料をほとんど欠く状態にある。従って、埋土の土層状態（混入物等）とその堆積状況によって分類することを基本に、遺構の形態等をも勘案して縄文時代、平安時代、時期不明の分類とした。平安時代の遺構は埋土に十和田ａ降下火山灰か又は白頭山火山灰がかなり明瞭に混入していることを原則とし、縄文時代に分類したピットはこれまでに報告された縄文時代のピットに形態的に類似するものを一括した。従って厳密には本項に分類された中には、弥生時代等の遺構も含まれている可能性がある。また、時期不明のものは中世以降のより新しい時代を想定しているものが多い。すなわち、平安時代を中心に、それ以前を縄文時代、それ以外を時期不明としたもので極めて概括的なものである。

（1）縄文時代

本項に一括されるピットは合計14基である。それらを断面形の形態で分類すると、フラスコ状ピット5基、ビーカー状ピット6基、皿状ピット3基となる。上部は何らかの削平を受けているものがほとんどであるが、なかでも皿状ピットとした3基は大きく削平されたり流失したものである。以下、特徴のみを記すことにする。

Ⅶ D－2ピット

遺構（第79図、第5表、写真図版33）

尾根の頂部付近に位置する。中位より下半で大きく膨らむ。底部は平坦で中央に副穴1基がある。壁の一部に明瞭な崩落の跡が見られる。

遺物（第86図、第7表、写真図版61）

86－1～2は埋土下位、86－3～9は埋土中～上位、86－10～12は埋土上位から出土する。1は付加条、2は結束の羽状縄文でともに胎土に繊維を含む。同種の小片が同様の高さから数点出土する。3は片口土器である。口縁部には平行沈線を主体とする沈線が回る。注口の口唇部の両側には小突起が付けられる。口唇部には縄文が施文される。4は短い口縁部が緩やかに外反する鉢形土器で、口唇部に縄文が施文される。5は口縁部に幅の広い粘土帯を貼布し、折り返し口縁状となっている。6は口縁部に原体側面圧痕文が回る。7は口唇部に外側から刻みが加えられる。体部には網目状撚糸文が施文される。8は無節の網目状撚糸文、9はLの無節撚糸文である。10～12は土師器である。10は底部に綱代痕がみられる。11は内外ともヘラミガキが施される。12は台付坏の底部片と思われる。外面は赤く採色されている。

1～2とそれ以外の遺物はその出土層位が著しく異なることから、1～2は本遺構に共伴する可能性が大きい。

Ⅶ D－10ピット

遺構（第79図、第5表、写真図版33）

尾根の頂部付近に位置し、Ⅶ D－2ピットの南約6mの距離にある。底部中央に副穴があること、規模等からⅦ D－2ピットに似ているが、断面形はフラスコ状というよりむしろ円錐台形に近い。

遺物（第86～87図、第7～8表、写真図版62）

86－13～15は埋土下位、86－16、87－1～2は埋土中－上位から出土する。86－13～16は胎土に繊維が含まれる。86－13は平底の深鉢である。原体側面圧痕文であるが体部には撚糸を用いたような部分も見られる。底部には円形に原体側面を押圧する。胎土、焼成とも良好である。14、15は尖底深鉢土器の尖底部である。前者は単節斜縄文、後者は撚糸文である。16は平縁の深鉢土器で体部には口縁端部まで撚糸文が右上がりを基調としながら不規則に施文される。

87－1は片口土器又は箕の形をしたミニチュア土器の完形品である。87－2は片側の側縁部に細部調整が施されるスクレイパーである。

VIE－1ピット

遺構（第79図、第5表、写真図版33）

尾根の頂部付近に位置する。一部は調査区外に延びるため未調査である。壁の内傾する角度はきつくはない。開口部が最も狭くなり、頸部を有していない。

VIID－9ピット

遺構（第79図、第5表、写真図版33）

尾根の頂部から南東斜面への傾斜変換点に位置する。耕作地造成に伴い上部は大きく削平されている。頸部が多少長かったと思われる。

VIID－8ピット

遺構（第79図、第5表、写真図版34）

南東斜面に位置するため、上部は多少削平されたと思われる。VIE－1ピットと同様頸部をもたないピットである。規模は小さい。底部中央が副穴状に凹む。

VID－7ピット

遺構（第79図、第5表、写真図版34）

尾根の頂部付近に位置する。断面形はほぼビーカー状であるが、一部底部に膨らみが見られる。埋土中から縄文土器の小片7点が出土する。作図等は省略する。

VID－5ピット

遺構（第80図、第5表、写真図版34）

尾根の頂部に位置する。上部は多少削平を受けた可能性があり、一部の埋土は耕作に伴う攪乱が見られる。埋土中から縄文土器（前期）の小片9点が出土する。作図等は省略する。

VID－4ピット

遺構（第80図、第5表、写真図版34）

尾根の頂部に位置する。上部は多少削平を受けた可能性がある。底部の埋土は壁を構成する褐色土が崩壊していたため、一部に掘り過ぎが見られた。

遺物（第87図、第7～8表、写真図版62）

7点の遺物を出土するが、すべて埋土中～上位である。87－3は4本丸組紐で施文され胎土に繊維が含まれる。4は網目状撚糸文で外側に炭化物が付着している。5は口縁部下端に隆帯が貼付され、その隆帯に刻みが施される。6は細い隆帯を貼付し、丁寧に調整している。7は細粒の縄文が施文される弥生土器である。8は須恵器の甕で、内外に平行叩き目文が見られる。内側はその上に渦巻状の当て具痕が見られる。9は一部欠損するため不詳な点があるが、石匙

の先端部又はスクレイパーである。欠損面を除いて細部調整によって刃部を形成するが片面調整である。

VIID－3ピット

遺構（第80図、第5表、写真図版35）

底部の一部が抉られるように広がり、断面形はビーカー状である。埋土は暗褐色土を基調としている。

遺物（第87図、第7表、写真図版62）

埋土中より87－10が出土する。沈線文である。これと同一個体と思われる4点（無文）と地文のみの縄文土器片30点ほどが出土している。胎土や原体（単節斜縄文）に特徴が見られず、小片であることから図化等は省略する。

IXC－5ピット

遺構（第80図、第5表、写真図版35）

開口部はやや不整円形である。断面形は浅いビーカー状である。南斜面上に位置するため、上部は多少流失していると思われる。埋土は黒褐色土を基調とする。

VIID－14ピット

遺構（第81図、第5表、写真図版35）

上部が削平されており詳細は不明であるが、断面形がフラスコ状であった可能性もある。底部は平坦であるが、壁に向かって高くなる。埋土は黒褐色土が主体である。

VIID－15ピット

遺構（第81図、第5表、写真図版35）

上部が多少削平されている。埋土の上位から下位まで粉炭が混入するが、その量は少ない。

VID－13ピット

遺構（第81図、第5表、写真図版36）

遺構の3分の1がVID－1住居址によって切られる。また、上位は削平されている。

遺物

底部中央から拳大の亜角礫4個がまとまって出土する。使用痕や加工痕が見られず、性格等は不明である。作図等は省略する。

VIIE－2ピット

遺構（第81図、第5表、写真図版36）

遺構の大半は耕作地造成に伴って大きく削平されている。僅かに底部のみが遺存しているのみである。パミス等を含んでいる埋土の状況から、縄文時代の遺構と推測される。

（2）平安時代

本項に一括されるピットは合計16基である。それらを平面プランで分類すると隅丸方形及び隅丸長方形が5基、円形8基、不整形ないし不整円形3基となる。この分類はピットの性格をある程度規制すると考えられることから、機械的には分けていない。また、一部のピットは上部が一部削平されているが、概ね原形を保っている。

VIID－10ピット

遺構（第82図、第5表、写真図版36）

開口部は隅丸長方形であるが、2期にわたって使用されている。当初は隅丸長方形であるが、2期目は長軸方向を縮め、隅丸方形となっている。2期目はやや底部を掘り下げている。柱穴は検出されない。1期目の底部の一部に幅10cm、高さ数センチに帯状の粘土帯を貼付している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。開口部は耕作地造成に伴って削平されている。

VIID－17ピット

遺構（第82図、第5表、写真図版36）

隅丸長方形である。底部はほぼ水平かつ平坦であるが、斜面下位側の壁際の底部は僅かではあるが段状に掘り残している。1箇所に直径6～8cmの杭穴状の穴が1基検出されたのみで、柱穴等の掘り込みは検出されない。埋土1内に僅かではあるが十和田a降下火山灰がブロック状に散見される。埋土3は白頭山火山灰が層状となって堆積したものである。焼土粒や炭は含まれない。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、開口部は耕作地造成に伴って削平されていると思われる。

VIID－11ピット

遺構（第82図、第5表、写真図版37）

隅丸方形である。埋土の大半を占める1層は黄褐色土の混土で、十和田a降下火山灰を含んでいる。ラミナが発達している。埋土には焼土粒や炭化物は含まれない。底部は幾分中央が底くなる皿状で、底部の約4分の1からは炭化したカヤが敷きつめられた状態で出土した。

遺物（第87図、第7表、写真図版62）

87－12～13の2点が出土する。12は埋土下位、13は底部から出土する。12は坏で内面黒色処理をし、底部は回転糸切り無調整である。13は須恵器の甕で内外とも平行叩き目文である。

VIID－12ピット

遺構（第82図、第5表、写真図版37）

隅丸方形とも、不整円形ともいえるプランである。上部は耕作地造成に伴って削平されている。埋土は混土であるが、斜面上位側には十和田a降下火山灰が、下位側には焼土粒や炭が多く混入する。いずれもブロック状に点在している。

遺物（第88図、第７表、写真図版63）

88－１～２が出土する。いずれも埋土からの出土である。１は土師器の長胴甕の口縁部である。ロクロ不使用で輪積み又は巻き上げ痕が見られる。２は縄文土器の鉢で深く粗い撚糸文が施文される。口縁部上端に縄文原体側面圧痕文が１条施文される。胎土に繊維が含まれる。

Ⅷ C－２ピット

遺構（第82図、第５表、写真図版38）

南東斜面のやや急勾配な地点に位置するため、上位は流失し、更に耕作地造成に伴って削平されたと思われる。平面プランは円形であるが、断面形は皿状である。埋土には鍵層の火山灰は含まれない。底部は平坦であるが、斜面に沿うようにやや傾斜する。

遺物（第87図版、第７表、写真図版62）

87－11が埋土内から出土した土師器の長胴甕である。体部上半部と体部下半部が直接には接合しないが同一個体である。ロクロ不使用で口縁部は短く、僅かに外反する。

Ⅷ C－３ピット

遺構（第83図、第５表、写真図版37）

本遺構はやや不整形ではあるが隅丸長方形である。しかし、既述の４基のピットと比べると規模や掘り込みの深さ、埋土が著しく異なっている。埋土に十和田ａ降下火山灰が混入していること、その占地はⅧ C－３住居址に近いこと等から４基のピットと同様の性格を有していた可能性がある。底部の一部に杭穴が検出される。深さ10～６cmである。

Ⅵ E－２ピット

遺構（第83図、第５表、写真図版38）

プラン、規模ともⅦ D－１ピットに類似する。埋土上位には白頭山火山灰と十和田ａ降下火山灰が分かれて堆積している。埋土中位には白頭山火山灰とともに焼土粒と炭が層状に堆積している。副穴等は検出されない。

Ⅷ D－１ピット

遺構（第83図、第５表、写真図版83）

平面プラン、規模とも前述の２基のピットに類似する。断面形は前述の２基のピットもややフラスコ状にオーバーハングするところも見られるが、本遺構ではよりオーバーハングがきつくなりフラスコ状とも言える。しかし、直径と高さとの割合から、やはりビーカー状と見做した方が妥当である。埋土中位から底部にかけて、角材や丸太材の痕跡が検出された。いずれも投げ込まれたもので最大の長さは30cm以下である。埋土中位に白頭山火山灰が混入している。

遺物（第88図、第７表、写真図版63）

埋土中位から88－３～４、埋土上位から坏の口縁部片と甕の底部片等が出土する。埋土上位

から出土した土師器は小片のため図化等は省略する。88－3はあか焼き土器、88－4は内面をヘラミガキ調整している土師器の坏である。内面黒色処理の痕跡は見られないが、黒色処理したものが剝落した可能性が強い。底部は回転糸切り無調整である。

Ⅷ D－4 ピット

遺構（第83図、第5表、写真図版38）

平面プランはやや長円形ではあるが、断面形はビーカー状である。埋土中位に十和田a降下火山灰が含まれる。また、炭や焼土粒も検出される。

Ⅶ D－1 ピット

遺構（第84図、第5表、写真図版37）

本遺構はⅦD－1住居址を切っている。平面形は円形、断面形はビーカー状である。本遺構の埋土の大部分はⅦD－1住居址の埋土が流れ込んだものである。したがって埋土中に見られる十和田a降下火山灰もⅦD－1住居址の埋土として堆積していた可能性が強い。

遺物

埋土中から地文のみの縄文土器片2点と土師器片2点、それに石器1点（チップ）が出土する。いずれも図化等は省略する。

Ⅶ C－1 ピット

遺構（第83図、第5表、写真図版39）

本遺構はⅦC－5住居址状遺構と重複し、同遺構を切っている。平面プランは隅丸長方形状であるが、底部は北側に向かって掘り下げられている。埋土には3層に焼土が形成されている。

遺物（第88図、第7表、写真図版63）

埋土中から、88－6～7を含む6点（縄文土器3点、土師器3点）が出土している。6は胎土に繊維が含まれる縄文土器で残滓が付着している。地文はRLの単節斜縄文である。7は口縁部が短く、緩く外反する甕の口縁部片である。

Ⅵ D－8 ピット

遺構（第84図、第5表、写真図版39）

平面プランは不整形で、断面形は皿状である。底部は斜面に沿って斜行する。埋土中に焼土が形成され、草木灰も多量に出土する。埋土上位には十和田a降下火山灰が堆積する。

遺物（第88図、第7表、写真図版63）

焼土より上位の埋土中から2点出土する。88－8は須恵器の甕の破片で、外面は平行叩き目文、内面には放射状当て具痕が見られる。88－9は口縁部上端にのみ撚りの異なる原体で羽状縄文を作り出している。原体の1本は2段4条と思われる。胎土に繊維は含まれていない。

VIID－4ピット

遺構（第84図、第5表、写真図版39）

平面プランは円形を基調としながらも不整形である。断面形は皿状である。前述の2基のピットのように明瞭な硬い焼土が形成されてはいないが、埋土下位に締まりの悪い焼土が形成されている。埋土中には広く十和田a降下火山灰が小ブロック状に混入する。埋土中から縄文土器の小片9点が出土する。作図等は省略する。

IXC－3ピット

遺構（第84図、第5表、写真図版39）

平面プランは円形、断面形は皿状である。底部は一部掘り残す形で浅くなっている。埋土下位に焼土が広く残っており、焼土と密着して土師器、甕の小片が出土する。土器の作図等は省略する。

VIIC－2ピット

遺構（第84図、第5表、写真図版40）

平面プランは円形、断面形は皿状である。埋土の大部分を構成する1層には十和田a降下火山灰が小ブロック状に混入する。上位は多少の削平は想定されるが、ほぼ原形を保っている。

IXC－10ピット

遺構（第84図、第5表、写真図版39）

規模は小さく柱穴状ピットである。埋土上位に十和田a降下火山灰が層状に堆積する。

遺物（第88図、第7表、写真図版63）

埋土中位から88－5が出土する。土師器の小鉢で完形品である。巻き上げ痕が残っており、調整は稚拙である。底部は砂底である。

（3）時期不明

本項に一括されるピットは合計9基である。1例を除き尾根の頂部又はその付近に位置し、規模も直径が1m以下、深さも最大40cmと小型である。時期決定資料を欠くが、埋土が比較的単層に近いという特徴を有する。個々の遺構については特徴のみを簡単に触れることにする。なお、掲載した図版は第85図遺構の規模等は第5表、写真図版は40～41である。

IVC－1ピット

平面形はやや不整形である。埋土は黒褐色土に褐色土粒が混入したものである。

IVC－3ピット

深さは25cmである。埋土は地山とほぼ同じ褐色土である。埋土内から88－10～12が出土する。10は単節斜縄文が口縁部上端まで施文される。11は口縁部上端に原体側面圧痕文が一条押圧さ

れる。これらはともに丁寧なミガキが施されている。12は縦型石匙でつまみ部側を欠損したものと思われる。刃部は片面の細部調整によって形成される。しかし頂点の部分は反対側からも調整が加えられ切先状に鋭利な刃部を作り出している。

IVD－2ピット

本項に属するピットの中では壁の立ち上がりがビーカー状に比較的しっかり立ち上がる。埋土中から10点の縄文土器片と88－13の石器1点が出土した。土器は小片のため作図等は省略するが、10点中9点が胎土に繊維を含んでいる。88－13は砥石である。両面に線刻状の条痕が見られる。石質は凝灰質チャートである。

IVD－9ピット

規模は小さい。掘り込みも浅く、底部は褐色土まで達していない。埋土中から縄文土器4点が出土したが、作図等は省略する。

IVD－12ピット

規模は検出されたピットの中で、最も小さいものである。IVD－1住居址の北壁際に位置するが、同住居址との関係は不明である。

VIID－5ピット

上位が削平されている。埋土中から縄文土器2点（網目状撚糸文）が出土した。作図等は省略する。

VIID－6ピット

浅いが底部は褐色土まで達する。

VIID－7ピット

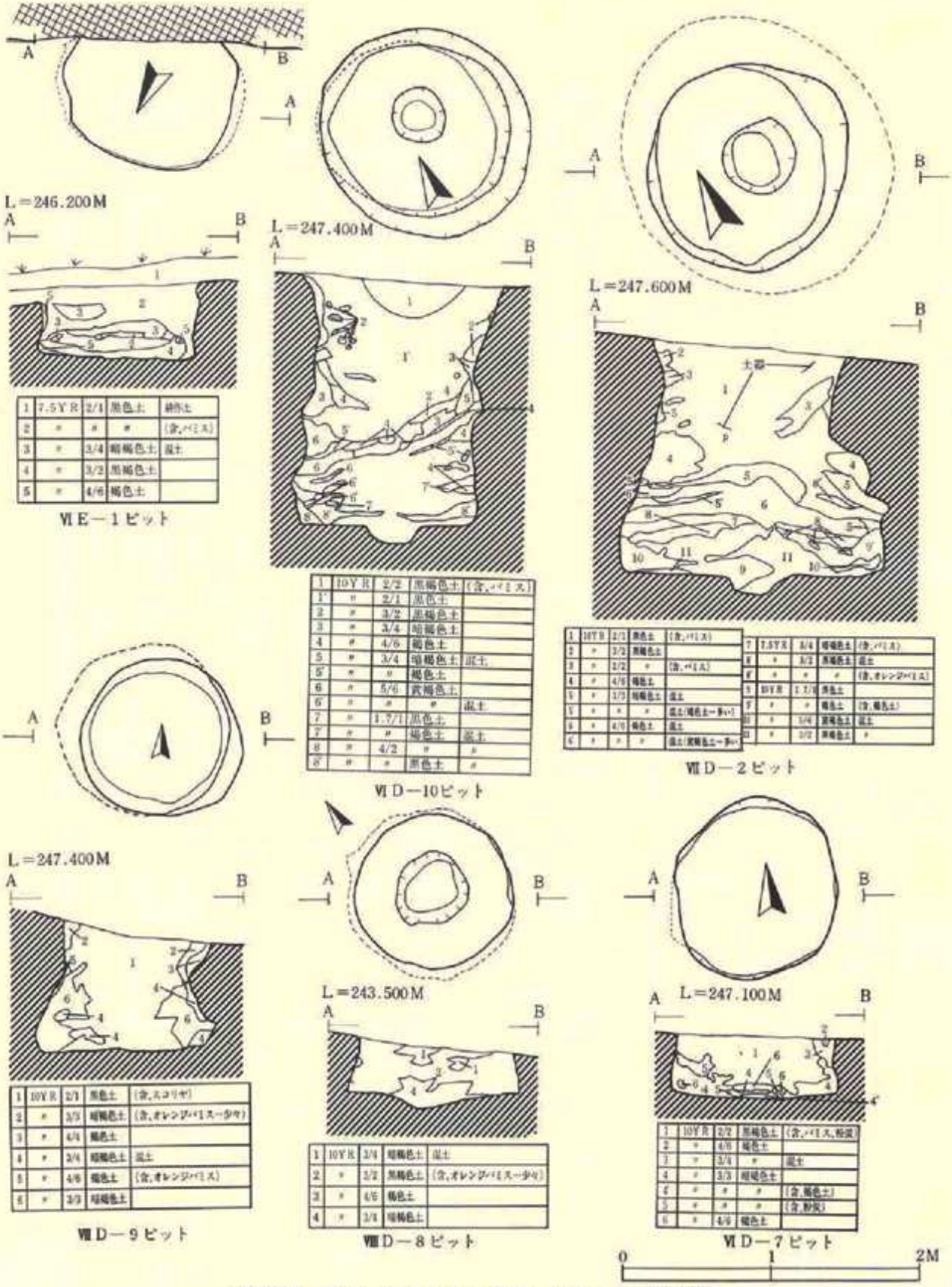
浅く、底部の平面プランも不整形である。

IXC－2ピット

埋土上位に中振り浮石が若干含まれる。

第5表　ピット遺構一覧表

遺構名	平面形	断面形	開口部 (cm)	底部 (cm)	深さ (cm)	備考	図版番号	写真図版
（縄文）								
Ⅶ D－2 P	円	フラスコ状	145×138	195×174	155	副穴1、土器	第79図	33
Ⅵ D－10 P	〃	ビーカー状	140	120	163	石器	〃	〃
Ⅵ E－1 P	〃	フラスコ状	118	127	50		〃	〃
Ⅶ D－9 P	〃	〃	100	116	77		〃	〃
Ⅶ D－8 P	〃	〃	105	115	40		〃	34
Ⅵ D－7 P	〃	〃	116	108	40	土器	〃	〃
Ⅵ D－5 P	〃	ビーカー状	246	204	55	〃	第80図	〃
Ⅵ D－4 P	〃	〃	194	182	43	〃	〃	〃
Ⅶ D－3 P	〃	〃	160	155	38	〃	〃	35
Ⅸ C－5 P	〃	皿状	160	135	35		〃	〃
Ⅶ D－14 P	〃	ビーカー状	100	120	35		第81図	〃
Ⅶ D－15 P	〃	〃	100	115	35		〃	〃
Ⅵ D－13 P	〃	皿状	135	100	30		〃	36
Ⅶ E－2 P	〃	〃	95	89	10		〃	〃
（平安）								
Ⅶ D－10 P	隅丸長方形	ビーカー状	182×149	171×136	36		第82図	36
Ⅶ D－17 P	〃	〃	166×138	145×125	45		〃	〃
Ⅶ D－11 P	隅丸方形	〃	154	149×145	52	土器	〃	37
Ⅶ D－12 P	〃	〃	165	145	35	〃	〃	〃
Ⅷ C－2 P	円	皿状	180	150	22		〃	38
Ⅷ C－3 P	隅丸方形	〃	115× 86	105× 74	35		第83図	37
Ⅵ E－2 P	円	ビーカー状	193	195	118		〃	38
Ⅷ D－1 P	〃	〃	228	230	105		〃	〃
Ⅷ D－4 P	〃	〃	200×185	180×165	85		〃	〃
Ⅶ D－1 P	〃	〃	230	204	150	Ⅶ D－1住を切る土器、石器	第84図	37
Ⅶ C－1 P	不整円形	袋状	153× 97	115× 83	35	土器	第83図	39
Ⅵ D－8 P	不整形	皿状	146×100	120× 60	28	〃	第84図	〃
Ⅶ D－4 P	不整円形	〃	144×128	115×105	14	〃	〃	〃
Ⅸ C－3 P	円	〃	90× 75	75× 68	11		〃	〃
Ⅶ C－2 P	〃	〃	105× 96	84× 80	17		〃	40
Ⅸ C－10 P	〃	ビーカー状	68× 65	38× 35	53	土器	〃	39
（時期不明）								
Ⅵ C－1 P	円	皿状	98× 89	75× 60	17		第85図	40
Ⅵ C－3 P	〃	〃	108× 92	106× 80	23	土器、石器	〃	〃
Ⅵ D－2 P	〃	〃	108	100	28	〃 、 〃	〃	〃
Ⅵ D－9 P	〃	〃	88× 76	56	16	〃	〃	〃
Ⅵ D－12 P	〃	〃	56	48	10		〃	〃
Ⅶ D－5 P	〃	〃	75	64	5	土器	〃	〃
Ⅶ D－6 P	〃	〃	98× 88	87	16		〃	〃
Ⅶ D－7 P	〃	〃	95	80	10		〃	〃
Ⅸ C－2 P	〃	ビーカー状	103	82	40		〃	〃



1	7.5YR	2/1	黒色土	縄作土
2	〃	〃	〃	(含,パミス)
3	〃	3/4	暗褐色土	泥土
4	〃	3/2	黒褐色土	
5	〃	4/6	褐色土	

VIE－1ピット

1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,パミス)
1'	〃	2/1	黒色土	
2	〃	3/2	黒褐色土	
3	〃	3/4	暗褐色土	
4	〃	4/6	褐色土	
5	〃	3/4	暗褐色土	泥土
5'	〃	〃	褐色土	
6	〃	5/6	黄褐色土	
6'	〃	〃	〃	泥土
7	〃	1.7/1	黒色土	
7'	〃	〃	褐色土	泥土
8	〃	4/2	〃	〃
8'	〃	〃	黒色土	〃

VID－10ピット

1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	3/2	黒褐色土	
3	〃	2/2	〃	(含,パミス)
4	〃	4/6	褐色土	
5	〃	3/3	暗褐色土	泥土
5'	〃	〃	〃	泥土(褐色土ー多い)
6	〃	4/6	褐色土	泥土
6'	〃	〃	〃	泥土(黄褐色土ー多い)
7	7.5YR	3/4	暗褐色土	(含,パミス)
8	〃	3/3	黒褐色土	泥土
8'	〃	〃	〃	(含,オレンジパミス)
9	10YR	2.7/1	黒色土	
9'	〃	〃	褐色土	(含,褐色土)
10	〃	3/4	黒褐色土	泥土
10'	〃	3/2	黒褐色土	〃

VIID－2ピット

1	10YR	2/1	黒色土	(含,スコリヤ)
2	〃	3/3	暗褐色土	(含,オレンジパミスー少々)
3	〃	4/4	褐色土	
4	〃	3/4	暗褐色土	泥土
5	〃	4/6	褐色土	(含,オレンジパミス)
6	〃	3/3	暗褐色土	

VIID－9ピット

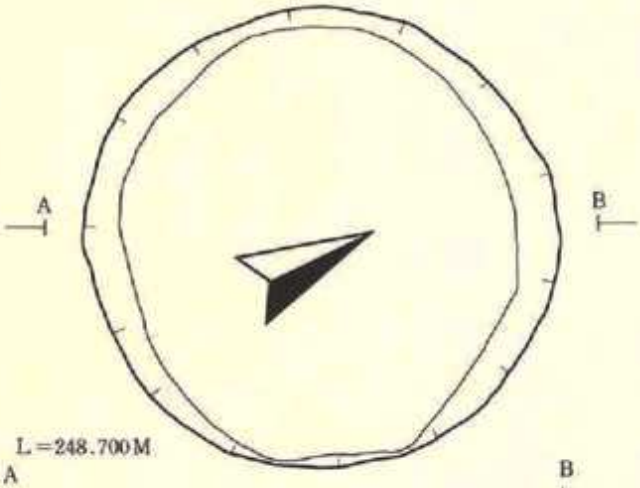
1	10YR	3/4	暗褐色土	泥土
2	〃	3/2	黒褐色土	(含,オレンジパミスー少々)
3	〃	4/6	褐色土	
4	〃	3/4	暗褐色土	

VIID－8ピット

1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,パミス,粉炭)
2	〃	4/6	褐色土	
3	〃	3/4	〃	泥土
4	〃	3/3	暗褐色土	
4'	〃	〃	〃	(含,褐色土)
5	〃	〃	〃	(含,粉炭)
6	〃	4/6	褐色土	

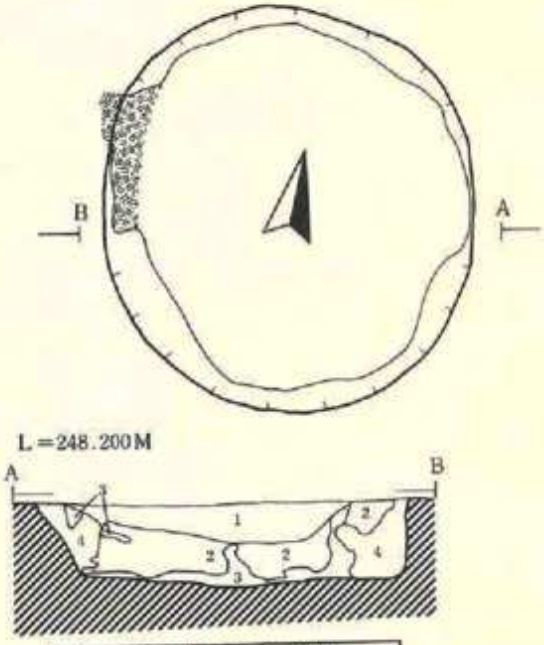
VIID－7ピット

第79図　VIID－2ピット～VIID－7ピット（縄文）



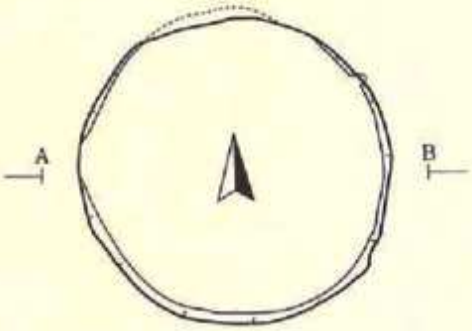
1	10YR	2/3	黒褐色土	耕作土	5	7.5YR	3/4	暗褐色土	(含,褐色土)
2	〃	3/3	暗褐色土	腐蝕廃流土	5'	〃	〃	〃	(含,褐色土一多い)
3	〃	2/3	黒褐色土	(含,パミス)	6	10YR	〃	〃	(含,パミス)
4	〃	〃	〃	流土(含,パミス)	7	7.5YR	4/4	褐色土	
5	〃	3/3	暗褐色土	木根跡	7'	〃	〃	〃	7より暗い

Ⅵ D－5 ピット



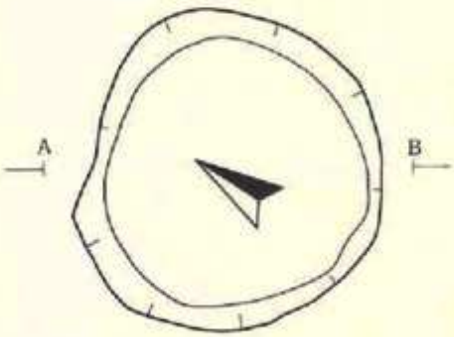
1	10YR	2/3	黒褐色土	(含,粒炭)
2	〃	2/2	〃	(含,粒炭,パミス)
3	〃	3/3	暗褐色土	乱土
4	〃	4/6	褐色土	

Ⅵ D－4 ピット



1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,スコリヤ)
2	〃	3/1	〃	
3	〃	3/4	暗褐色土	
4	〃	3/3	褐色土	乱土
5	〃	5/6	黄褐色土	
6	〃	3/3	暗褐色土	(含,スコリヤ)
7	〃	3/2	黒褐色土	
8	〃	2/1	黒色土	水根跡

Ⅶ D－3 ピット



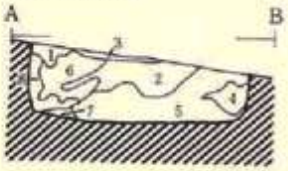
1	10YR	2/1	黒色土	(含,パミス)
2	〃	3/2	黒褐色土	(含,パミス)
3	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	2/3	黒褐色土	地山(掘り過ぎ)

Ⅸ C－5 ピット

0 1 2M

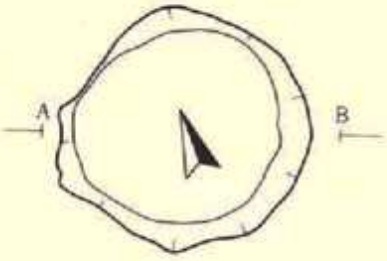
第80図　Ⅵ D-5 ピット～Ⅸ C-5 ピット（縄文）

L＝245.000M

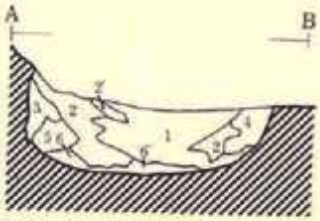


1	10YR	3/3	暗褐色土	(含,パミス)
2	〃	2/1		粘土(含,粉炭)
3	〃	3/4	暗褐色土	(含,粉炭)
4	〃	〃	〃	粘土
5	〃	2/2	黒褐色土	(含,粉炭,粗大パミス)
6	〃	2/3	〃	(含,粉炭,パミス)
7	〃	〃	〃	
8	〃	4/6	褐色土	

Ⅶ D－15ピット

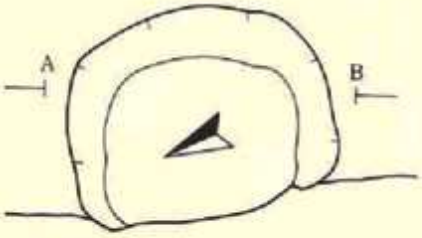


L＝246.400M

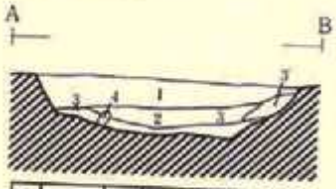


1	10YR	3/2	黒褐色土	
2	〃	2/2	〃	(含,粉炭一少)
2'	〃	〃	〃	2より黒色土多い
3	〃	3/2	〃	(含,粉炭一少)
4	〃	3/4	暗褐色土	
5	〃	4/3	にぶい黄褐色土	粘土
6	〃	3/4	暗褐色土	
6'	〃	〃	〃	6より褐色土少ない

Ⅶ D－14ピット



L＝247.000M



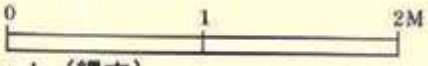
1	10YR	3/2	黒褐色土	(含,パミス,粉炭)
2	〃	2/3	〃	
3	〃	4/4	褐色土	粘土
3'	〃	3/3	暗褐色土	
4	〃	2/2	黒褐色土	木根痕

Ⅵ D－13ピット

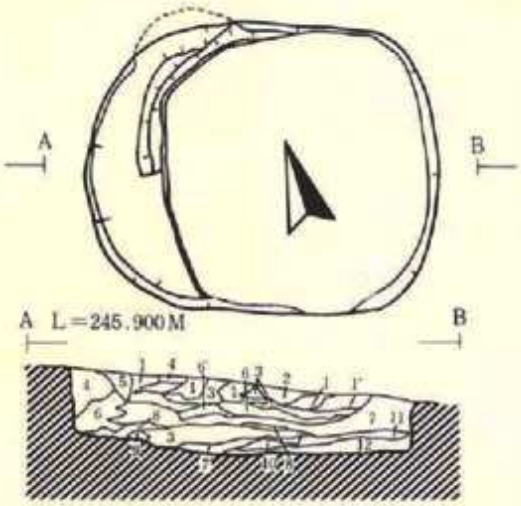
L＝245.700M

1	10YR	3/2	黒褐色土	(含,パミス)粘土

Ⅶ E－2ピット

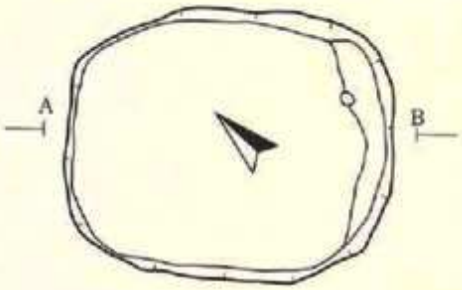


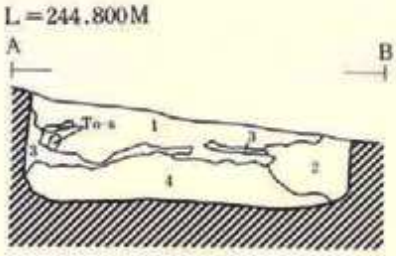
第81図　Ⅶ D-14ピット～Ⅶ E-2ピット（縄文）



1	10YR	4/2	暗灰色土	(含,To-a・少)
1'	〃	5/1	〃	(含,To-a・多)
2	〃	4/2	にぶい黄褐色土	
3	〃	5/2	黒褐色土	盛土(含,パミス)
4	〃	4/2	褐色土	
5	〃	3/4	暗褐色土	
6	〃	4/6	褐色土	(含,粉炭)
6'	〃	〃	〃	6に黒色土混入
7	10YR	3/2	黒褐色土	盛土
7'	〃	〃	〃	(含,炭)
8	〃	3/3	暗褐色土	
9	〃	5/6	黄褐色土	
10	2.5YR	3/6	暗赤褐色土	(含,焼土粒,炭)
11	〃	7/4	淡赤橙色	(含,焼土粒,炭)
12	〃	3/3	暗褐色土	

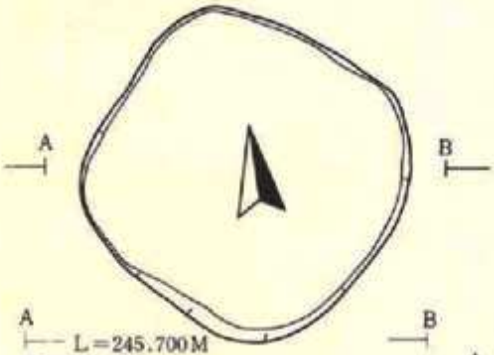
Ⅶ D－10ピット





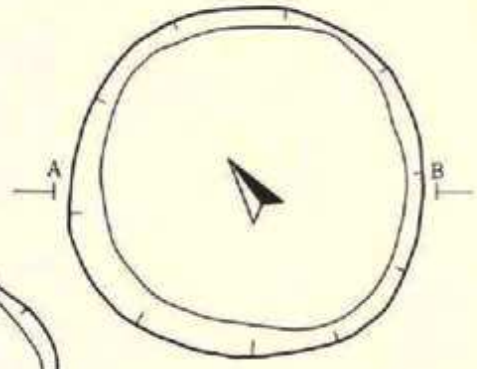
1	10YR		黒褐色土	盛土(含,To-a・ブロック状)
2	〃	4/6	褐色土	
3	〃	6/2	灰黄褐色土	白磁出土遺所
4	〃		褐色土	盛土

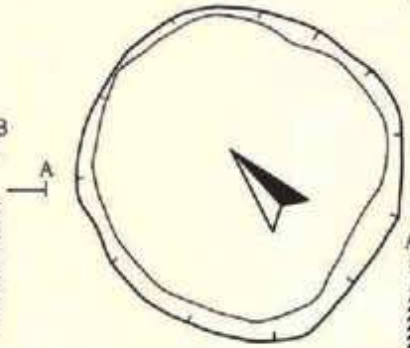
Ⅶ D－17ピット

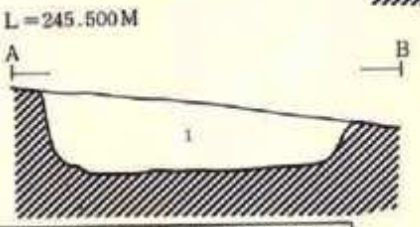


1	10YR	5/8	黄褐色土	盛土(含,To-a)
1'	〃	〃	〃	盛土(ブロック状)
1"	〃	〃	〃	褐色土が多い
1''	〃	〃	〃	1' より粒形小さい
2	〃	3/3	暗褐色土	
3	〃	4/6	褐色土	
4	〃	〃	〃	盛土(大ブロック状)
4'	〃	〃	〃	ラミナ
5	〃	3/3	暗褐色土	盛土
6	〃	4/4	褐色土	
7	〃	3/2	黒褐色土	

Ⅶ D－11ピット

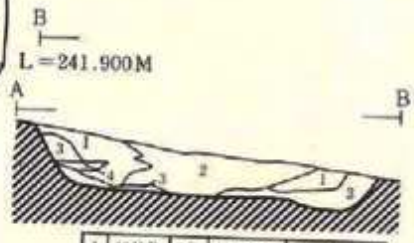






1	7.5YR	2/2	黒褐色土	盛土(含,To-a,焼土粒,炭,パミス)

Ⅶ D－12ピット

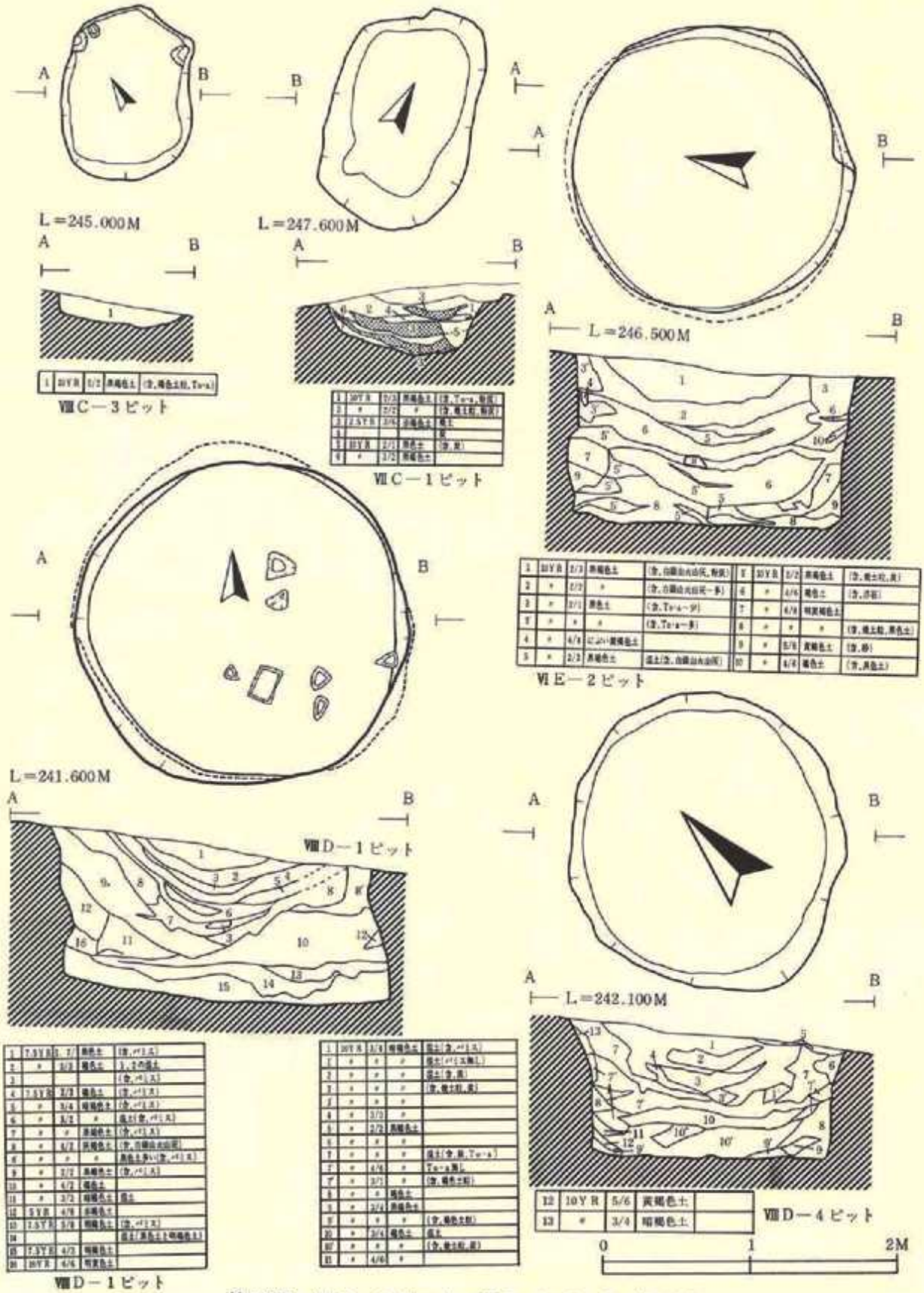


1	10YR	2/3	黒褐色土	(含,パミス・少)
2	〃	2/1	黒色土	(含,パミス)
3	〃	3/4	暗褐色土	
4	〃	4/4	褐色土	

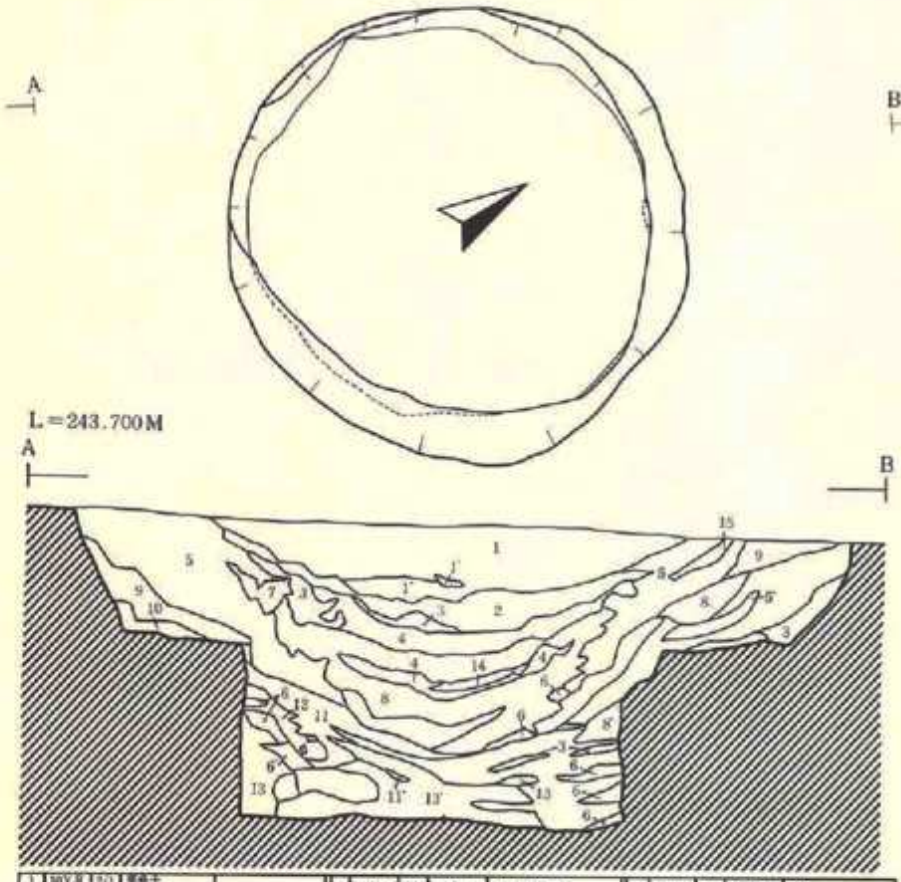
Ⅷ C－2ピット

0 1 2M

第82図　Ⅶ D-10ピット～Ⅷ C-2ピット（平安）

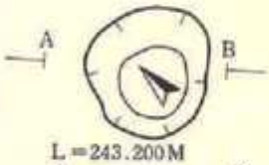


第83図　VIIIC－3ピット～VIIID－4ピット（平安）

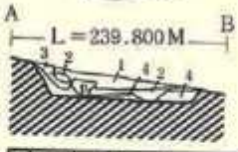


1	10YR	2/1	黒色土	
1'	〃	2/2	黒褐色土	
1'	〃	2/1	黒色土	粘土
2	〃	3/2	黒褐色土	〃
3	〃	4/3	にぶい黄褐色土	
4	〃	2/2	黒褐色土	(含,粒炭)
5	〃	3/4	暗褐色土	(含,白頭山火山灰)
5	10YR	6/1	褐灰色土	白頭山火山灰
6	〃	4/3	褐色土	
6'				多に焼土粒,炭が混入
7	〃	4/1	褐灰色土	白頭山火山灰
8	〃	2/3	黒褐色土	(含,焼土粒,粒炭,浮石)
8'	〃	〃	〃	やや暗い
9	〃	2/1	黒色土	(含,炭)
10	10YR	2/2	黒褐色土	粘土
11	〃	2/3	〃	(含,白頭山火山灰)
12	5YR	4/6	赤褐色土	焼土粒,炭
13	10YR	〃	褐色土	
13'	〃	3/4	暗褐色土	粘土
14	〃	4/6	褐色土	
15	〃	3/4	暗褐色土	粘土

VII D－1ピット

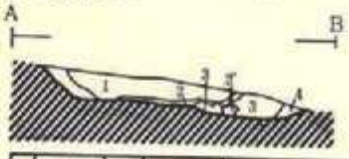


1	10YR	2/1	黒色土	
2	〃	3/4	暗褐色土	
3	〃	6/1	褐灰色土	To-a
4	〃	3/1	黒褐色土	(含,To-a)
5	〃	2/2	〃	
6	〃	〃	〃	5より色が濃い
7	〃	2/3	黒褐色土	
8	〃	4/6	褐色土	(含,オレンジパミス)
8	〃		暗褐色土	粘土(含,パミス)



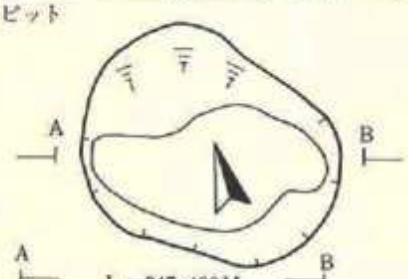
1	5YR	1.2/1	黒色土	
2	〃	4/6	赤褐色土	焼土(含,草木灰)
3	〃	3/3	暗赤褐色土	焼土(含,炭)
4	7.5YR	4/4	褐色土	(含,パミス)

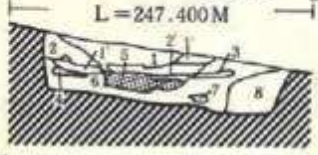
IX C－3ピット



1	7.5YR	3/1	黒褐色土	(含,To-a)
2	〃	3/3	暗褐色土	(含,焼土粒)
2'	〃	〃	黒色土	粘土(含,草木灰)
3	〃	2/1	〃	(含,To-a少)
4	〃	4/4	褐色土	

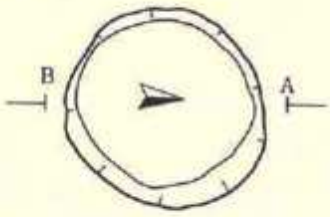
VII D－4ピット

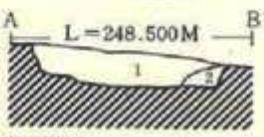




1	10YR	4/2	灰黄褐色土	(含,To-a一多)
1'	〃	〃	〃	(含,To-a一少)
2	〃	3/1	黒褐色土	(含,炭一少)
2'	〃	〃	〃	(含,炭一多)
3	〃	4/1	灰色	草木灰
4				炭
5	5YR	3/3	暗赤褐色土	焼土
6	7.5YR	2/2	黒褐色土	粘土
7	〃	3/4	暗褐色土	
8	〃	4/4	褐色土	

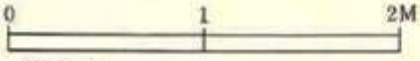
VI D－8ピット



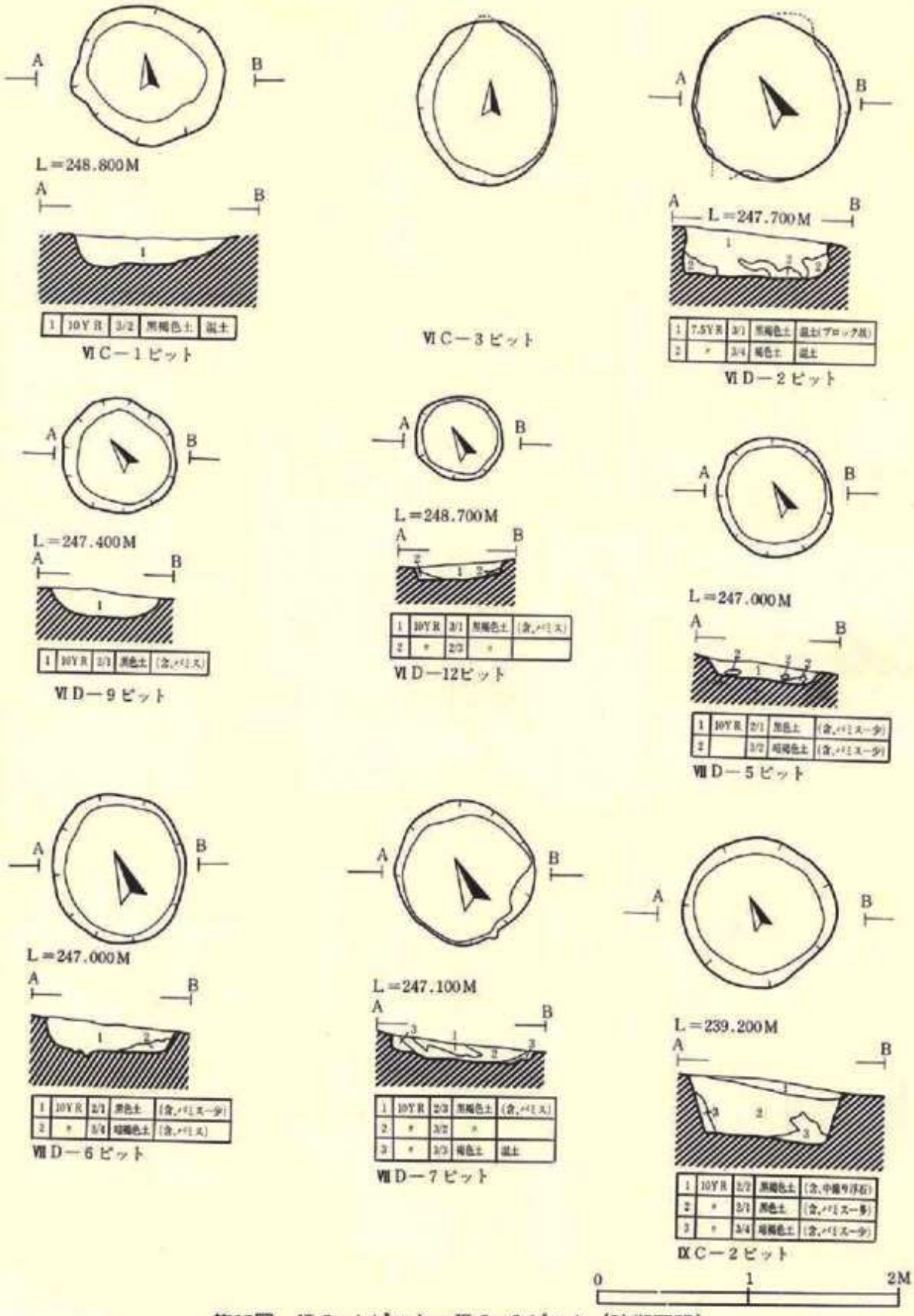


1	10YR	2/2	黒褐色土	(含,To-a,粒炭)
2	〃	2/1	黒色土	

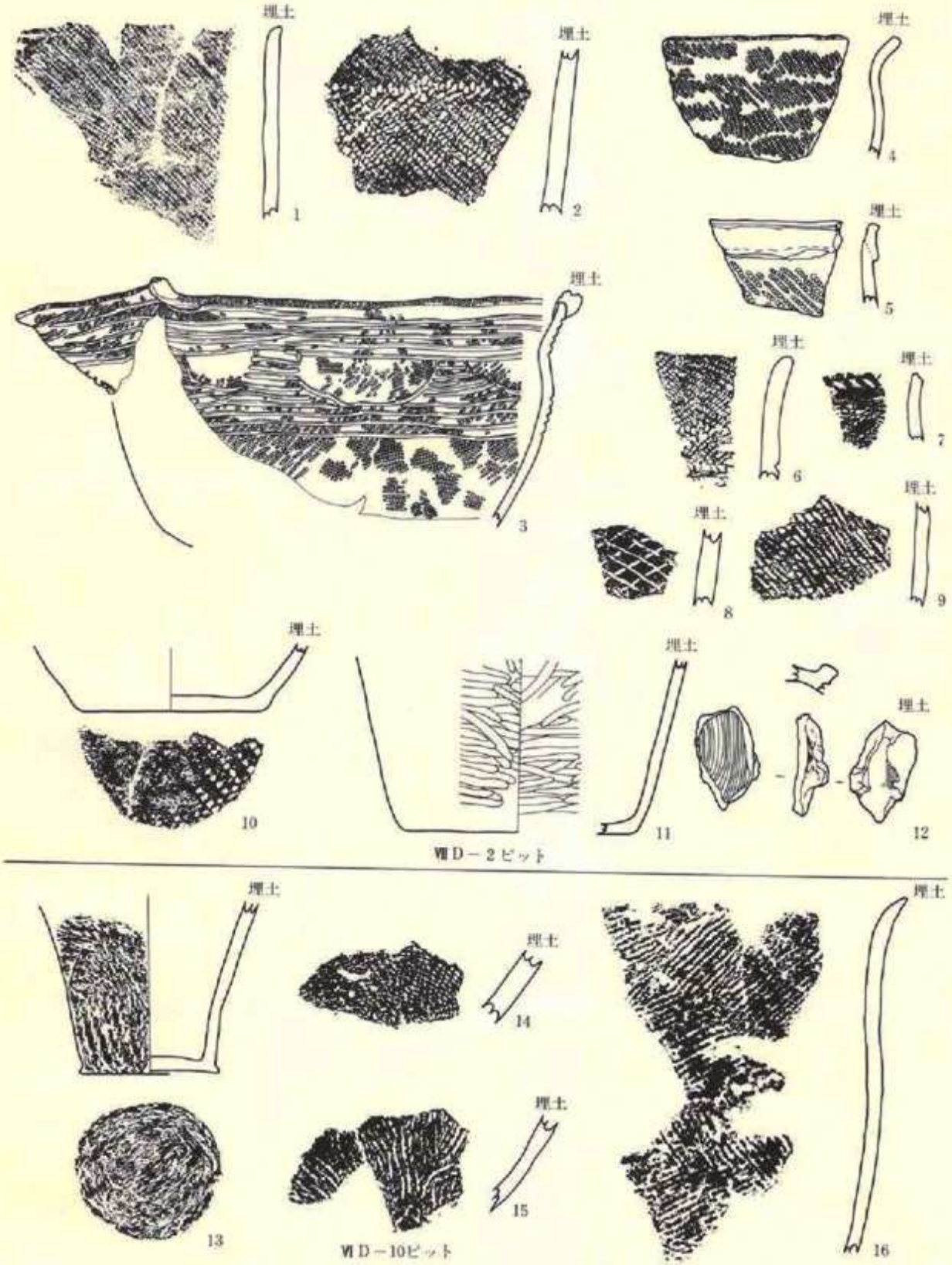
VII C－2ピット



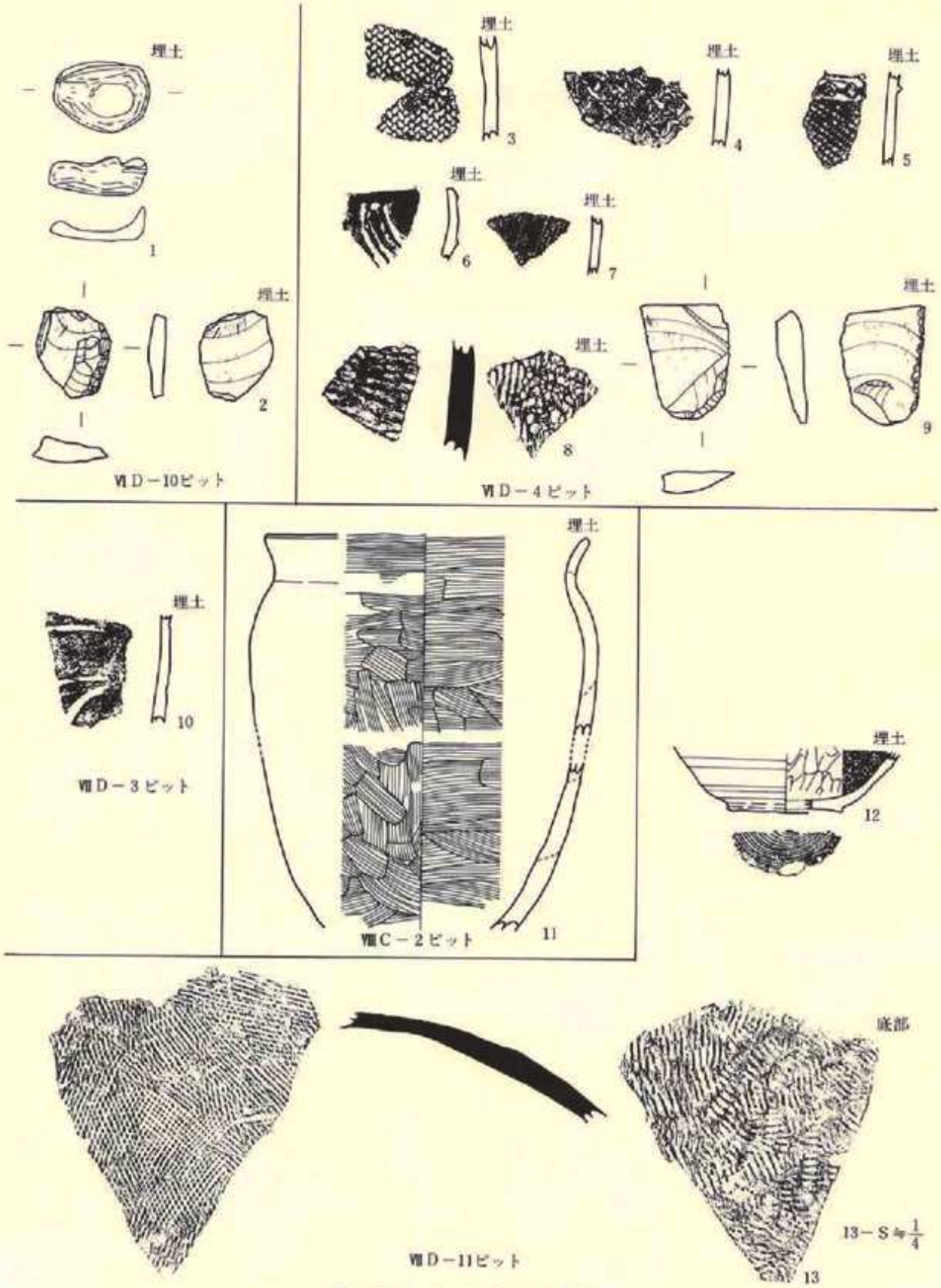
第84図　IX C-10ピット～VII C-2ピット（平安）



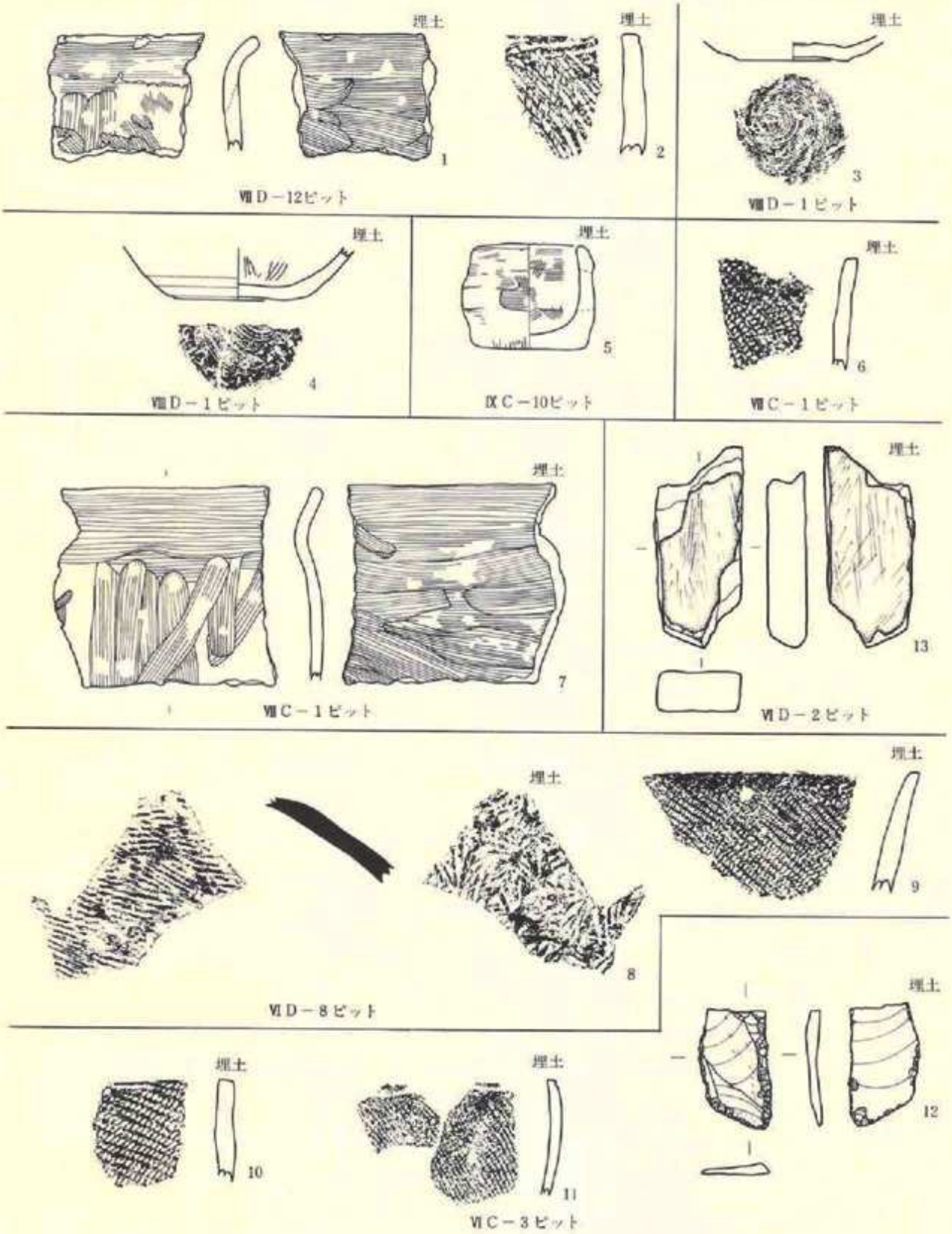
第85図　Ⅵ C－1 ピット～Ⅺ C－2 ピット（時期不明）



第86図　ピット内出土遺物(1)



第87図　ピット内出土遺物(2)



第88図　ピット内出土遺物(3)

〔5〕焼土遺構（第87図）

焼土遺構は合計10箇所で検出された。周辺からの出土した遺物はあるが、焼土遺構に共伴する遺物はなく時期が不明である。また、周囲に何らの施設も見いだせず性格等も不明である。

VIC－1焼土遺構からVID－3焼土遺構までの8箇所はすべて尾根の頂部ないしその付近に集中する。同所は一部を除き基盤層の褐色土（Ⅷ層）上面まで耕作されており、耕作土直下の褐色土ないし、その上の黒褐色土（Ⅶ層）に焼土が形成されている。焼土の平面プランは不整形で、厚さは最大でも数センチに達しない。極めて淡い焼土である。特にVIC－2焼土遺構は面的な広がりをもつが、焼土は薄くしかも一部が耕作によって攪乱されている。VIC－5焼土遺構とVID－3焼土遺構は薄く、厚さを実測するまでには至らない。

ⅧD－1焼土遺構は比較的明瞭な焼土を形成する。縄文時代の遺構検出面での検出ではあるが、その上位が耕作土であることから時期は不明である。

XC－1焼土遺構は黒色土中に厚くかつ大きく形成された焼土遺構である。東側の一部は重機によって削られたものである。同地点は黒色土（Ⅰ層）が深く、平安時代の遺構検出面は本遺構の10～15cm下位である。したがって、本遺構は中～近世相当面にのることになる。掘り込み等は一切検出されていない。

〔6〕遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、石製品、鉄製品、古銭等である。その大半は縄文土器と石器、石製品である。弥生土器はVID－1住居址の貼床から出土した38－5と同一個体と思われるもの数点と本項で取り上げる3点が出土したのみである。土師器は甕の破片が数点と本項で取り上げた坏一点が出土した。須恵器は大甕の体部と見られる平行叩き目文と放射状当て具痕が見られるもの2点が出土した。陶磁器は近世に属すると思われるもの19点、さらにルツボの小破片1点が出土した。鉄製品は本項で取り上げた物以外では針金、トタン等が出土した。古銭は1点のみである。ここでは縄文土器、石器、石製品及び鉄製品についてのみ取り上げることにする。なお、弥生土器、土師器及び古銭については作図及び計測等の一覧表に掲げる。

（1）土器及び土製品等

遺構外から出土した縄文土器は90％以上が、尾根の頂部付近のVIC、VID、ⅦC区に集中しており、縄文時代の住居址が集中するⅧD区及びその周辺からはほとんど出土しないという際立った特徴を有する。これはVIC、VID、ⅦC区は遺物が包含されている黒色土層が残っていたためで、その他のブロックは耕作地の造成や自然流失等によるためと思われる。

第1群土器（第90図、第7表、写真図版64）

縄文時代早期に属する土器である。二類に細分される。

第1類　貝殻腹縁文である。吹切沢式に比定される。

90－1～2の2点である。口縁部は波状口縁をなし、貝殻腹縁文が縦位及び斜位に押圧される。胎土に繊維は含まれない。焼成は良好である。1と2は同一個体である。

第2類　縄文条痕文（表が縄文、裏は貝殻条痕文）土器である。早稲田5類に比定される。

90－3～4の2点である。縄文は0段多集、条痕は口縁部に平行する。胎土に繊維が含まれる。焼成は良好である。

第II群土器（第90図、第7表、写真図版64）

縄文時代前期初頭に位置し、大木1式土器以前に属する土器を一括した。

90－5～7は撚糸文、90－8は0段多条の原体を用いた斜縄文、9は付加条で両端をそれとは異なる条で結んでいる。90－10～11は口唇部に真上から連続するやや粗い刻み目が付けられる。地文はＬＲの単節斜縄文であるが、小片のため羽状縄文であるかどうかは不明である。すべての土器の胎土に繊維が含まれるが、5～8は多量、9～11は微量である。

第III群土器（第90～91図、第7表、写真図版64～65）

大木1式に比定される土器である。

90－12は小型深鉢土器で、底部及び体部の一部を欠損する。口縁部は平縁であるが、不整形に大きく波打っている。地文はＬＲの単節斜縄文である。90－13～16は閉端の原体を使用し、ループ文が見られる。13と16及び91－1は結束しない羽状縄文である。特に16は山形口縁で、口縁部の上端には浅い刻み目が付けられ、その直下には3段の綾絡文が施文される。地文は閉端の複節の原体を使用し、菱型状に整然とした羽状縄文となっている。明瞭なループ文も見られる。91－1も同様に口縁部上端に刻み目をもち、地文は結束しない羽状縄文である。91－2も山形口縁で口縁部上端にはやや細かな刻み目が見られる。原体は複節の斜縄文である。90－17は4本の組紐回転圧痕文である。90－16と91－1は胎土に繊維が含まれない。90－4は多量の繊維が含まれるが他は少ない。

第IV群土器（第91図、第7表、写真図版65）

大木2式に比定される土器を一括した。2類に細分される。

第1類　大木2ａ式に相当すると思われる土器群である。

91－3～6は結束第1種の羽状縄文土器で、比較的多量に出土した。5と6は平縁で底部に向かって直線的にすぼむ。ともに羽状縄文は菱形状に施文される。3は1部の口縁部を欠損するため詳細は不明であるが、3個の補修孔が穿たれ、少なくとも2箇所で補修されている。5と6は体部下端及び底部である。平底で底部にも体部と同様な羽状縄文が施文される。91－7～8は緩やかな山形口縁をなし、半截竹管による押し引き文が横位に6段併走する。91－9は短い原体で、ループ文が整然と横位に施文される。以上の7～9の3点は同一個体と思われる。

91—10～11はＲＬの単節斜縄文の地文の上に２～３本の平行沈線がまわる。口縁部は山形口縁である。色調は明褐色～灰白色である。同一個体である。91—12～13は網目状撚糸文である。前者は０段の紐を、後者は２段の紐を原体に使用している。以上の11点は胎土に多少の差はあるが、すべてに繊維を含んでいる。

第２類　大木２ｂ式に相当すると思われる土器群である。

91—14～15は綾絡文である。14はＲＬの単節斜縄文を施文した後綾絡文を、15は３段又はそれ以上の連続して結節する綾絡文が施文される。91—16はＳ字状連鎖沈線文、91—17は口縁部下端に粗い刻み目をもつ隆帯が一本貼付される。小片のため詳細は不明であるが、口縁部は無文、体部はＬＲの単節斜縄文が施文されるが、その端部にはループ文が見られる。以上の４点は胎土に微量の繊維を含んでいる。

第Ｖ群土器（第92図、第７表、写真図版66）

前期に属する土器で、型式比定が困難な土器を一括した。

92—１～２は平縁でＲＬの単節斜縄文が横回転で整然と施文される。92—３はＲＬの単節斜縄文が縦回転に施文される。92—４は原体側面圧痕文、92—5～7は付加条文で、６～７は同一個体である。92—８は山形沈線文である。色調は灰白色で胎土には長石が含まれる。92—９～10は無文で同一個体である。５と８を除いて胎土に繊維が含まれる。１は特に多量である。５～７は大木３式、８は大木５式に比定されるかもしれない。

第Ⅵ群土器（第92～94図、第７表、写真図版66～68）

中期と後期に属する土器を一括した。

この群に属する土器は極めて少量で、しかも細片のため器形も不明なものが多い。また、粗製のものが大部分であるため、型式比定も困難なものが多く、一部は晩期のものを含んでいる。可能性もある。

92—11は磨消縄文が帯状に垂下する。大木９式に比定される。92—12は細い隆帯があり外側は磨消しとなっている。92—13は細い隆帯で曲線文が描かれる。92—14は地文の上に細く鋭い沈線文が描かれる。13と14は十腰内Ｉ式に比定される。92—15～17は同一個体である。細い沈線と竹管刺突で文様が構成される。15には補修孔が見られる。92—18～19はやや太い沈線文である。92—20は無文の口縁部に浅い平行沈線文が、92—21～22は縄文み施文した上にやや深い平行沈線が引かれる。22は口唇部にも縄文が施文され、内側には細い帯状に縄文を施文した後沈線で区画される。92—23は口縁部上端に斜位の棒状工具による刻み目がつけられるが、小片のうえ大部分の器面が剥落しており詳細は不明である。92—24は壺形土器である。体部下半は欠損し不明であるが文様は体部上半に限られると思われる。３本１対の沈線によって文様が構成され、帯状の磨消縄文となっている。93—１～３も磨消縄文（１と２は同一個体）である。

以上の土器は後期中葉、十腰内Ⅲ式又はその前後に属すると思われる。93－4は櫛歯状文、93－5は口唇部に縄文が施文され、山形口縁の突起の内側に2条の原体側面圧痕文がU字状に押圧される。93－6も口唇部に縄文が施文される。93－7は口縁部上端に、93－8～9は口縁部下端に1条の原体側面圧痕が押圧される。8と9は口縁部は無文帯となる。9は肩部に最大径をもち、底部に向かってほぼ直線的にすぼまる深鉢形土器である。体部の地文は無節縄文が横走する。93－10は器形は9と同じで、体部の地文にはＬＲの単節斜縄文が施文される。93－11は口縁部は短く外反し、内外とも入念なミガキをかけたのち体部に無節縄文が施文される。93－12は口縁部は直立し、地文は無節縄文が口縁部上端から施文される。93－13は口縁部が肥厚する。地文は口縁部上端から施文される。94－1～2は深鉢形土器である。縄文が横走するが詳細は不明である。

第Ⅶ群土器（第94図、第7表、写直図版68）

縄文土器のうち尖底を除く底部を一括した。図化したものは底部に圧痕があるもののみであるが、無文の平底も出土している。94－3は必ずしも明瞭な痕跡ではないが、2本1組の素材を使用し、経緯を交互に繰り返している。素材は割竹や細い蔓状のものが考えられる。94－4～8の編方は1と同様、経と緯を交互に繰り返す。素材は1本であるが、それが繊維であるか、紐であるかは不明である。4～7は方形、8は長円形の網目である。94－9は竹又は笹の葉痕である。94－10は上げ底、94－11は平底でミニチュア土器の底部である。

第Ⅷ群土器（第94図、第7表、写真図版68）

弥生土器を一括した。

小片のため詳細は不明であるが、94－12は縦走する縄文に平行沈線又は弧状の沈線で文様が付けられる。中期末葉から後期初頭で、宇津ノ台式に併行すると思われる。94－13～14は、上半に沈線文が付けられる。地文は撚糸文で、94－15も同様である。これらは後期後葉の天王山式に併行すると思われる。94－16は小形の鉢形土器であるが時期は不明である。

第Ⅸ群土器（第94図、第7表、写真図版68）

円盤状土製品である。

粗製土器の体部を円形に打ち欠いて作っている。94－17は直前段反撚、94－18は直前段合撚と思われる。前者は内面が剥落している。ともに胎土に繊維は含まれない。前者は直径5.5cm、後者は5cmである。

第Ｘ群土器（第94図、第7表、写真図版68）

平安時代の土器を一括した。

94－19は内面黒色処理の坏で底部は静止糸切り無調整である。94－20は甕の底部で回転糸切り無調整である。94－21は須恵器の甕で、外面は平行叩き目文、内面には放射状当て具痕が見

られる。なお、94—22はルツボの破片である。

（2）石器

遺構外から出土した石器は石鏃4点、石錐2点、ポイント1点、石匙5点、スクレイパー24点、両面調整石器2点、ピーエス、エスキューユ1点、調整痕を有する剥片石器4点、凹石8点、磨石、敲石4点、砥石3点、石皿2点、両面礫器2点、片面礫器2点、石斧2点、半円状扁平打製石器2点である。

石鏃（第95図、第8表、写真図版69）

すべて無茎鏃で基部は抉られている。95—4は大半を欠損するため詳細は不明であるが、95—1～3は長さ3.5cm、厚みはなく扁平である。1、2は完形品、3は尖端の一部が欠損する。石材は凝灰質珪質泥岩3点と玻璃質流紋岩1点である。

石錐（第95図、第8表、写真図版69）

95—5は先端部が、95—6は上部が欠損する。錐部はやや太めである。95—5の残存する長さは3.5cmである。石材は凝灰質珪質泥岩と玻璃質流文岩である。

尖頭器（第95図、第8表、写真図版69）

95—7のみである。柳葉状で扁平である。全面で入念な細部調整を加えている。完形品である。石材は凝灰質珪質泥岩である。

石匙（第95図、第8表、写真図版69）

95—8～9は完形品、95—10～12は一部欠損する。8～11は縦形石匙、12は横形石匙である。細部調整は入念である。石材は凝灰質珪質泥岩、凝灰質硬質泥岩の2種類である。

スクレイパー（第95～97図、第8表、写真図版69～70）

95—13～96—5までは一辺にのみ刃部が形成される。細部調整は比較的急角度である。すべて片面調整であり、95—13の裏面は使用に伴う剥落と思われる。刃部形成の角度からみると、「掻器」と呼べるかもしれないが、その形状は不整形である。96—6～8は周縁全体が刃部になるように成形される。特に96—7はほぼ円形をなす。これらの刃部の調整角度も急であり、円形掻器（ラウンド・スクレイパー）と言える。96—9～97—8は側縁に刃部を調整する。その角度は緩く、刃部は鋭利である。97—8は石匙等の半製品の可能性もある。以上のスクレイパーの材質は凝灰質硬質泥岩、凝灰質珪質泥岩、珪質泥岩、チャート質粘板岩、玻璃質流紋岩等である。

両面調整石器（第97図、第8表、写真図版70）

97—9～10の2点である。9は一部欠損するが、10は完成品である。9は欠損面を除く縁辺に、10は上部を除く縁辺に細部調整が加えられる。刃部は石匙やスクレイパーに比べると粗い。9、10とも厚みがある。材質は玻璃質流紋岩と凝灰質珪質泥岩である。

ピーエス・エスキューユ（第97図、第８表、写真図版70）

97－11の１点である。縦位に剥離痕があることから、二次使用が考えられる。石材は樹脂岩である。

調整痕を有する剥片石器（第97図、第８表、写真図版70）

部分的に調整痕を有するものである。形状は不整形である。スクレイパーの破片が含まれている可能性がある。97－12～15がこれにあたる。

凹石（第98～99図、第８表、写真図版71）

98－１～７が凹石で、99－１は蜂の巣石である。98－１、２、６、７が完形品で他は一部欠損している。４は砥石としても使用されている。99の裏は磨滅している。石皿等としても利用されたと思われる。材質は輝石安山岩又は両輝石安山岩である。

磨石・敲石（第99～100図、第８表、写真図版71～72）

99－２～４、100－１の４点である。99－２は両面、99－３はほぼ全面を、99－４は陵線部のみ、100－１は両面を磨面として使用している。99－３と100－１は敲石としても使用されている。材質は輝石安山岩、両輝石安山岩である。

砥石（第100図、第８表、写真図版72）

100－２～４の３点である。２は石皿状であるが、扁平な摩滅した面の中で、とくに一部分が僅かに凹みツルツルに摩滅している。３は多くが欠損するため全体の形状や法量は不明であるが四面が平らに磨滅している。材質は３点とも両輝石安山岩である。

石皿（第100図、第８表、写真図版72）

100－５～６の２点である。ともに一面のみが使用されているが、凹状にはなっていない。６は一部に火熱を受け赤色化している。材質は輝石安山岩と両輝石安山岩である。

両面礫器（第101図、第８表、写真図版72）

101－１の１点である。直線的な縁辺とそれに続く両縁辺を両面から打ち欠き刃部を形成している。刃部の反対側の縁辺は摩滅している。長径が12cmでちょうど片手で握るのに適している。完形品である。材質は輝石安山岩である。

片面礫器（第101図、第８表、写真図版72）

101－２～４の３点である。２は２箇所で打ち欠かれた跡が裏面に見られるが、刃部成形を目的とした連続調整とは見做されず片面礫器とした。両面及び刃部の反対側の縁辺は摩滅している。明瞭な使用痕である。３は川原石で１方の縁辺に片面から打ち欠いている。完形品である。４は半截された川原石の側縁の一方を打ち欠き刃部を成形している。材質は両輝石安山岩と輝石安山岩である。

石斧（第102図、第８表、写真図版73）

102－１～２の２点である。いずれも打製であるが１は両側面が摩滅している。これは摩滅してある石を使用したものであるが、人為的な摩滅か自然的摩滅かは不明である。刃部は両面から打ち欠いて成形したものである。横断面形は隅丸長方形で頭部は四角錐であるが、稜線がやや不明瞭で円錐状に見える。２は頭部のみであるが加工は１より丁寧である。材質はプロピライトと硬砂岩である。

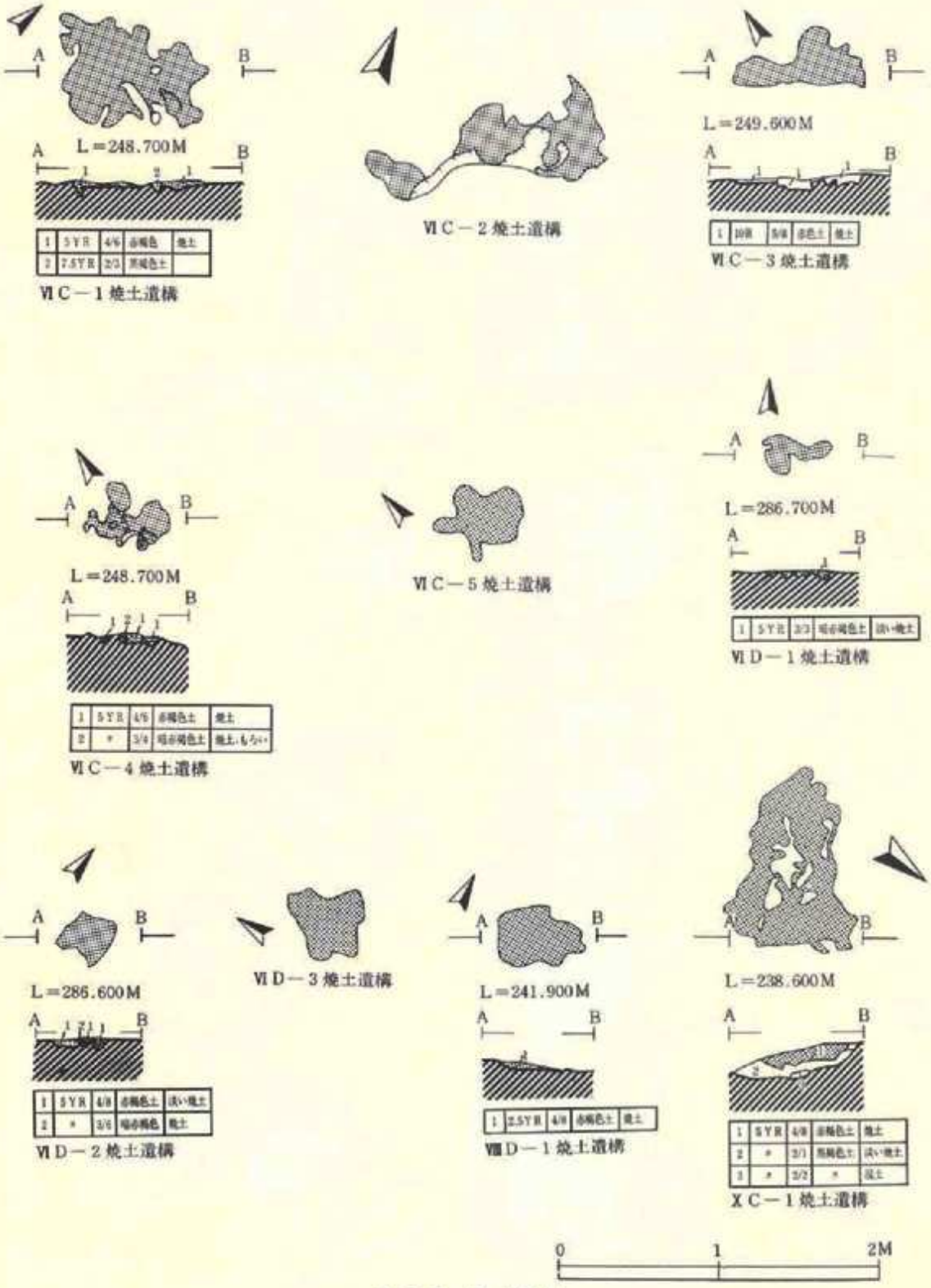
半円状扁平打製石器（等102図、第８表、写真図版73）

102－３～４の２点である。４は周縁を両面から打ち欠いて刃部を成形し、直線の刃部は摩滅し、所謂半円状扁平打製石器である。それに対して、３は打ち欠いて刃部を成形したとは言えず、半円状の川原石を利用したものである。直線の刃部に当る面と一方の側面に摩滅痕が見られる。磨石に分類されるかもしれない。

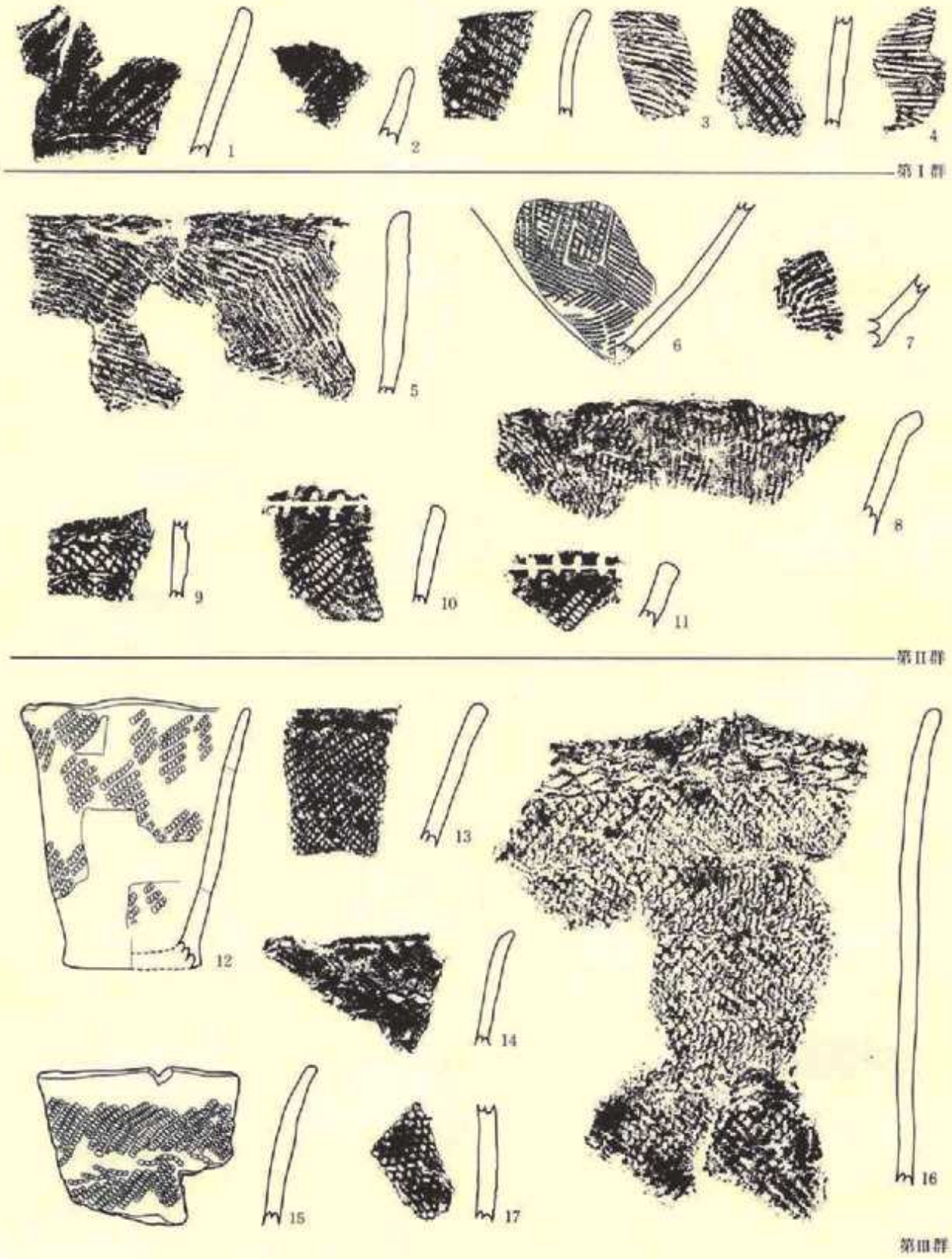
（３）鉄器・古銭（第103図、写真図版74）

鉄器は103－１～４の４点出土したが、出土地点及び層位から、１～３は平安時代、４は近現代のものと思われる。１～２は腐蝕が進み全体の器形は不明であるが、ⅦC－１住民址内から出土した22－１と、３はⅦD－３住居址内から出土した50－７～９と同様のものと思われる。前者は穂積み具、後者は釘状のものである。４は扁平な三角形の鉄板を半円形に曲げたもので腐蝕も進んでいない。漆掻きの道具の可能性がある。

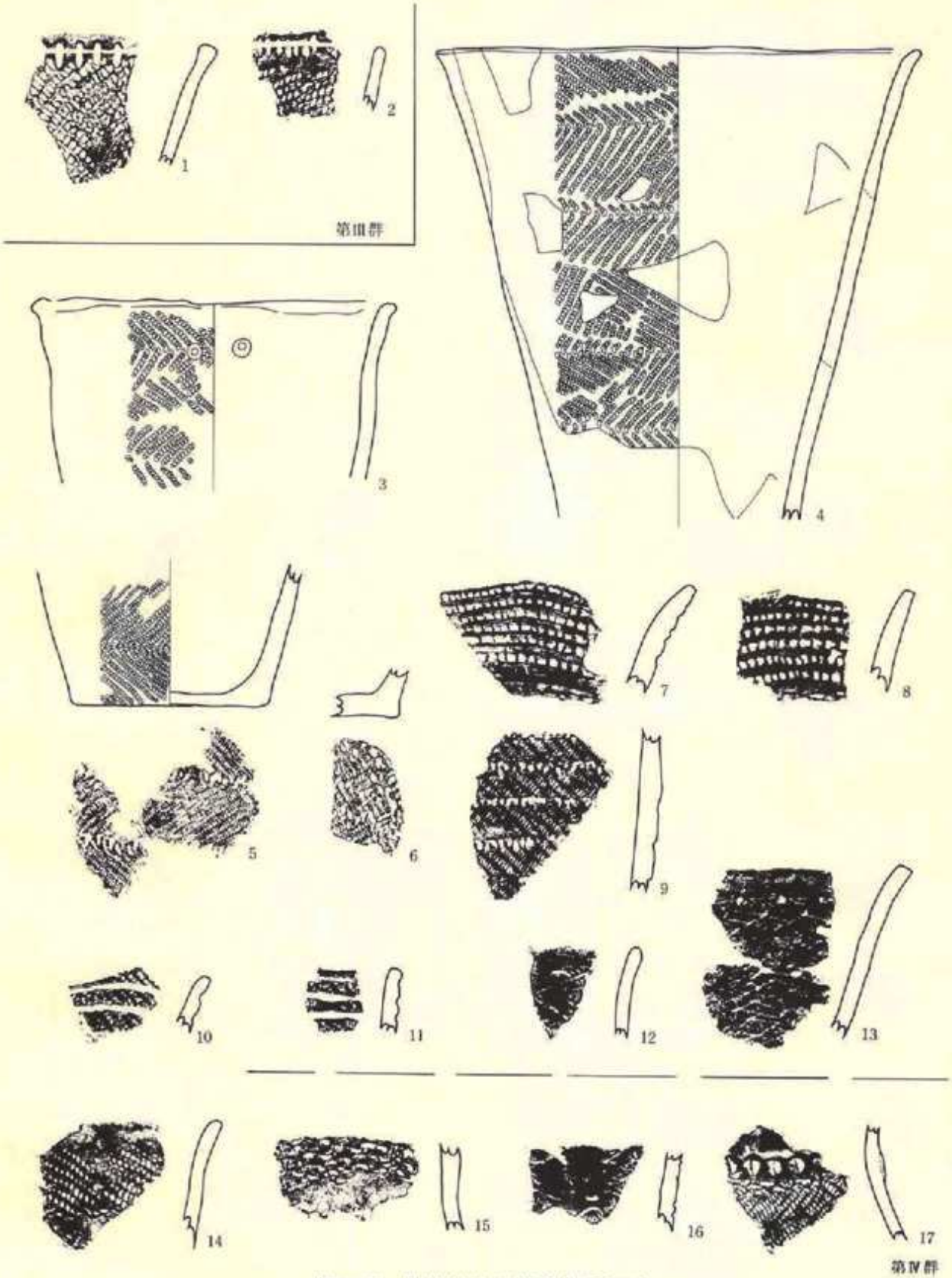
古銭は５の１点で、寛永通寶である。この古銭に伴う遺構や遺物は出土していない。


A
B
L＝248.700M
1 5YR 4/6 赤褐色 焼土
2 7.5YR 2/3 黒褐色土
Ⅵ C－1 焼土遺構
Ⅵ C－2 焼土遺構
L＝249.600M
1 10R 5/8 赤色土 焼土
Ⅵ C－3 焼土遺構
L＝248.700M
1 5YR 4/6 赤褐色土 焼土
2 〃 3/4 暗赤褐色土 焼土ともろい
Ⅵ C－4 焼土遺構
Ⅵ C－5 焼土遺構
L＝286.700M
1 5YR 3/3 暗赤褐色土 淡い焼土
Ⅵ D－1 焼土遺構
L＝286.600M
1 5YR 4/8 赤褐色土 淡い焼土
2 〃 3/6 暗赤褐色 焼土
Ⅵ D－2 焼土遺構
Ⅵ D－3 焼土遺構
L＝241.900M
1 2.5YR 4/8 赤褐色土 焼土
Ⅷ D－1 焼土遺構
L＝238.600M
1 5YR 4/8 赤褐色土 焼土
2 〃 3/1 黒褐色土 淡い焼土
3 〃 3/2 〃 炭土
Ⅹ C－1 焼土遺構
0
1
2M

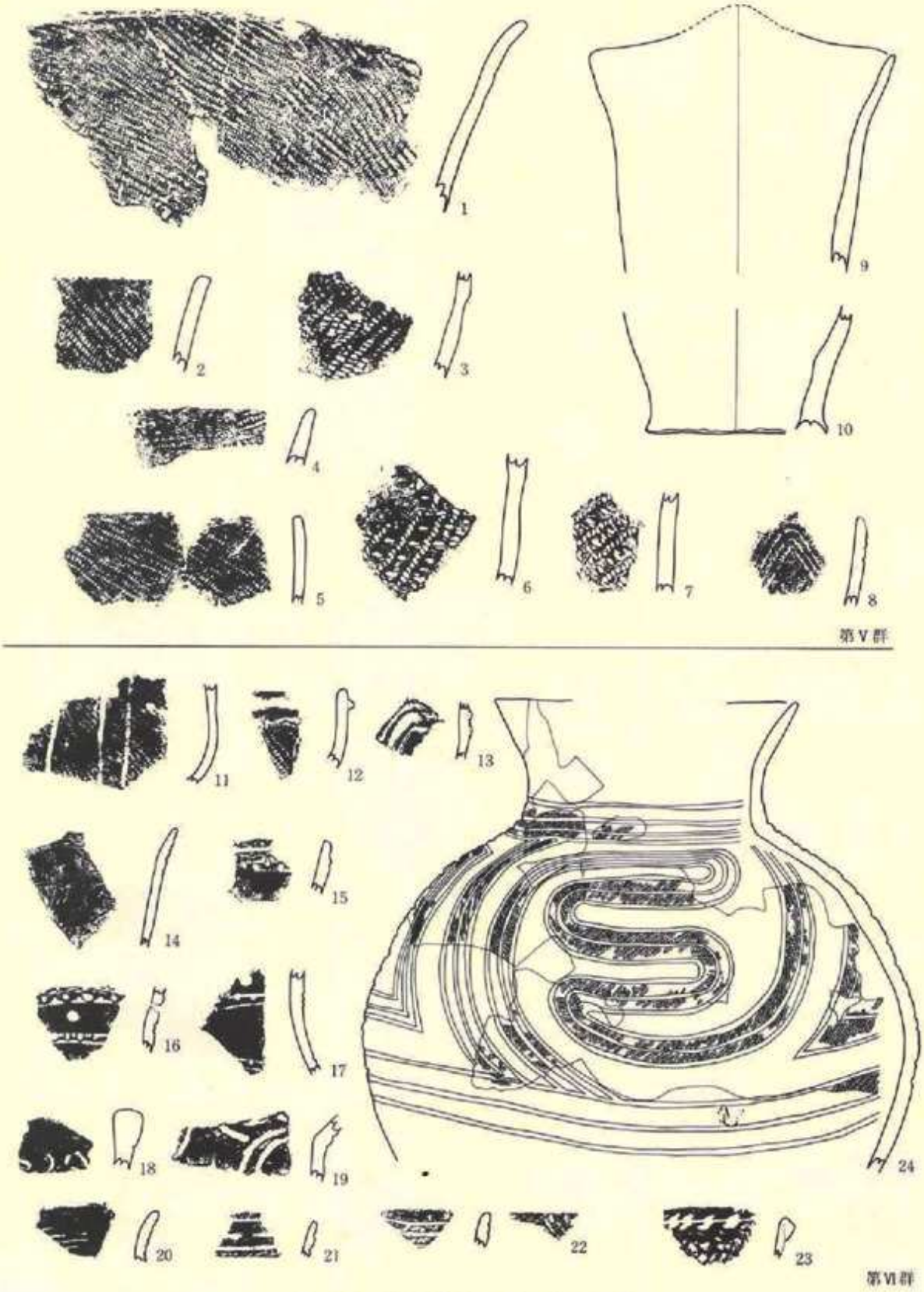
第89図　焼土遺構



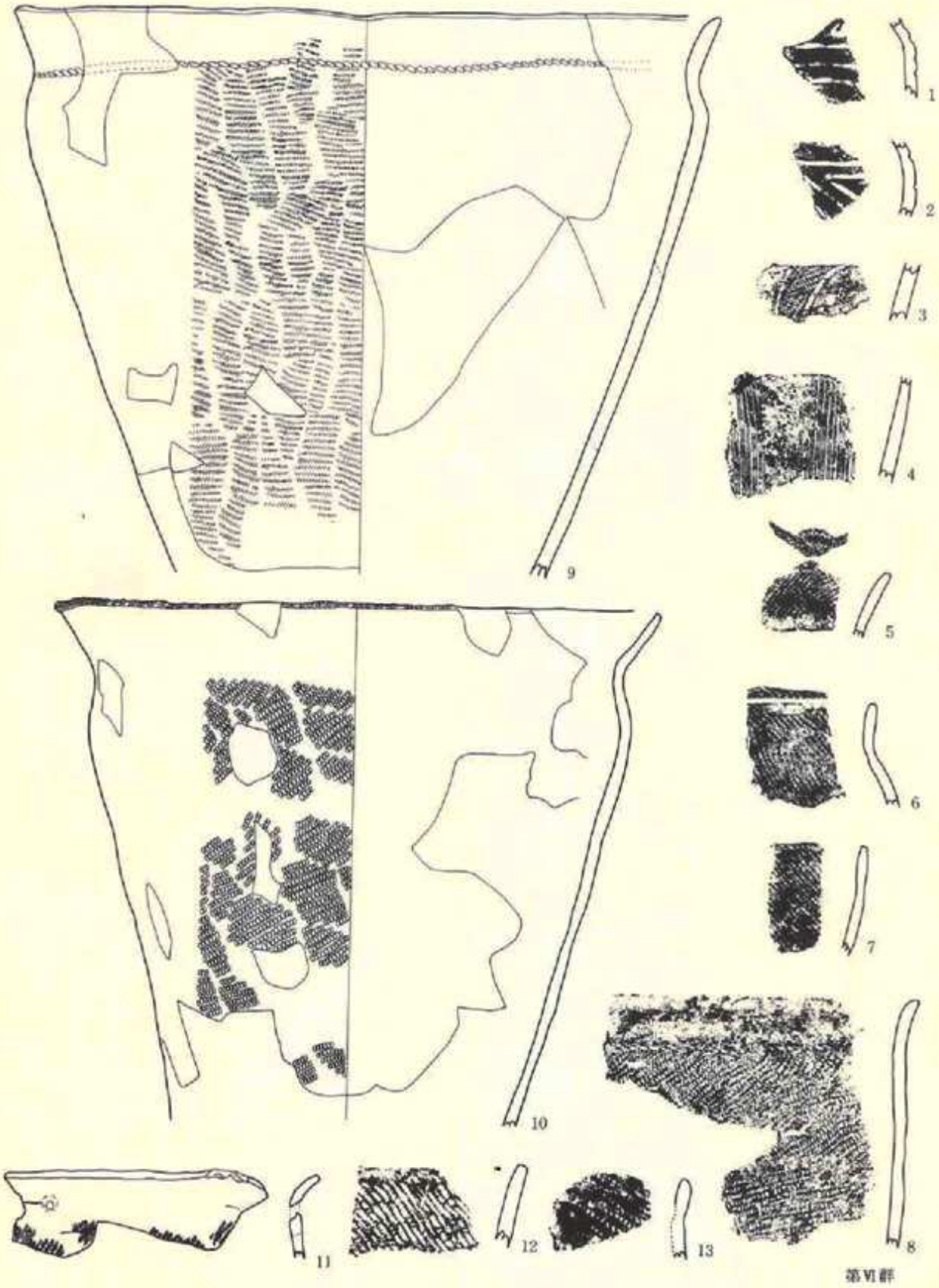
第90図　遺構外出土遺物(土器Ⅰ)



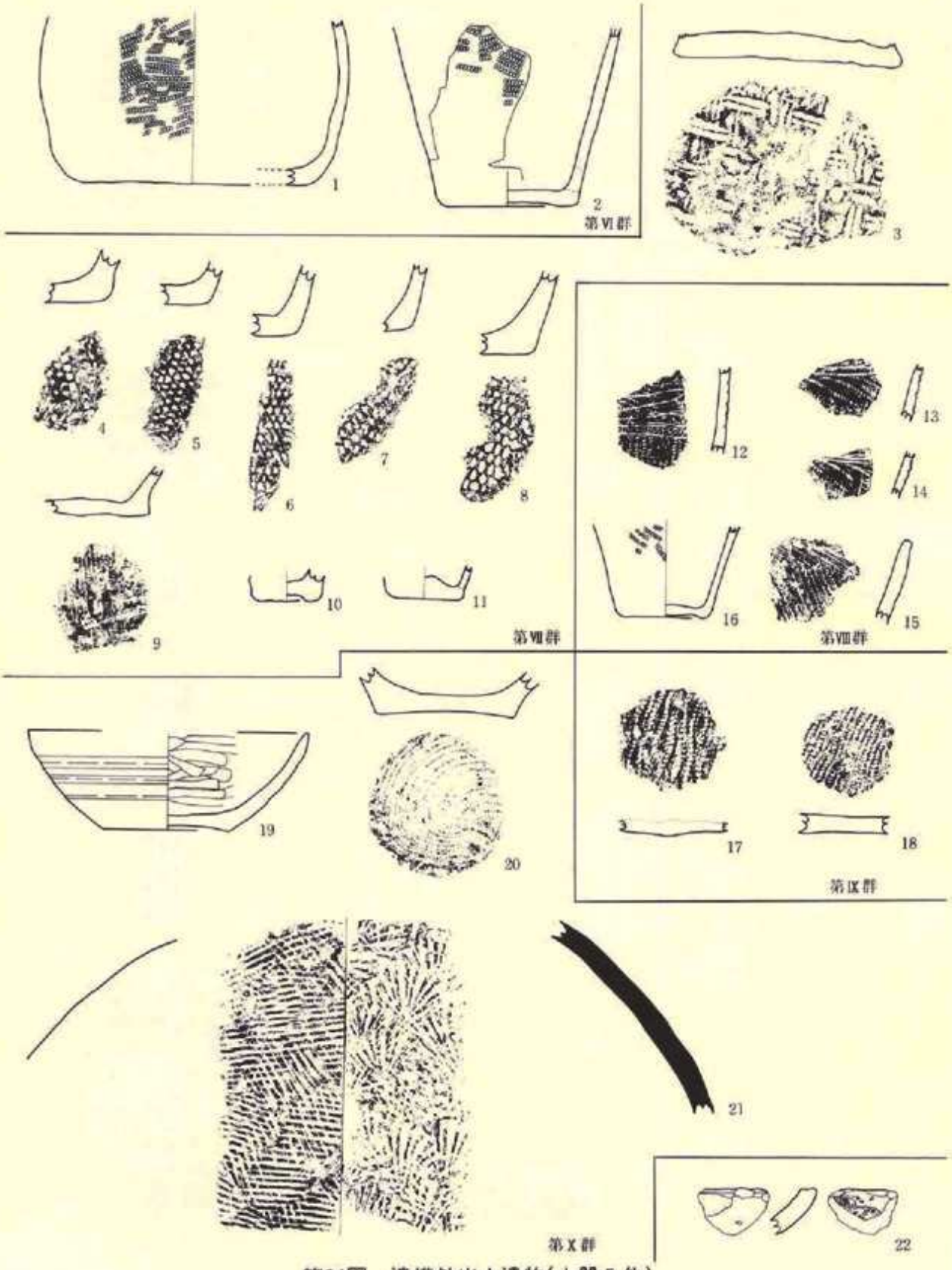
第91図　遺構外出土遺物(土器２)



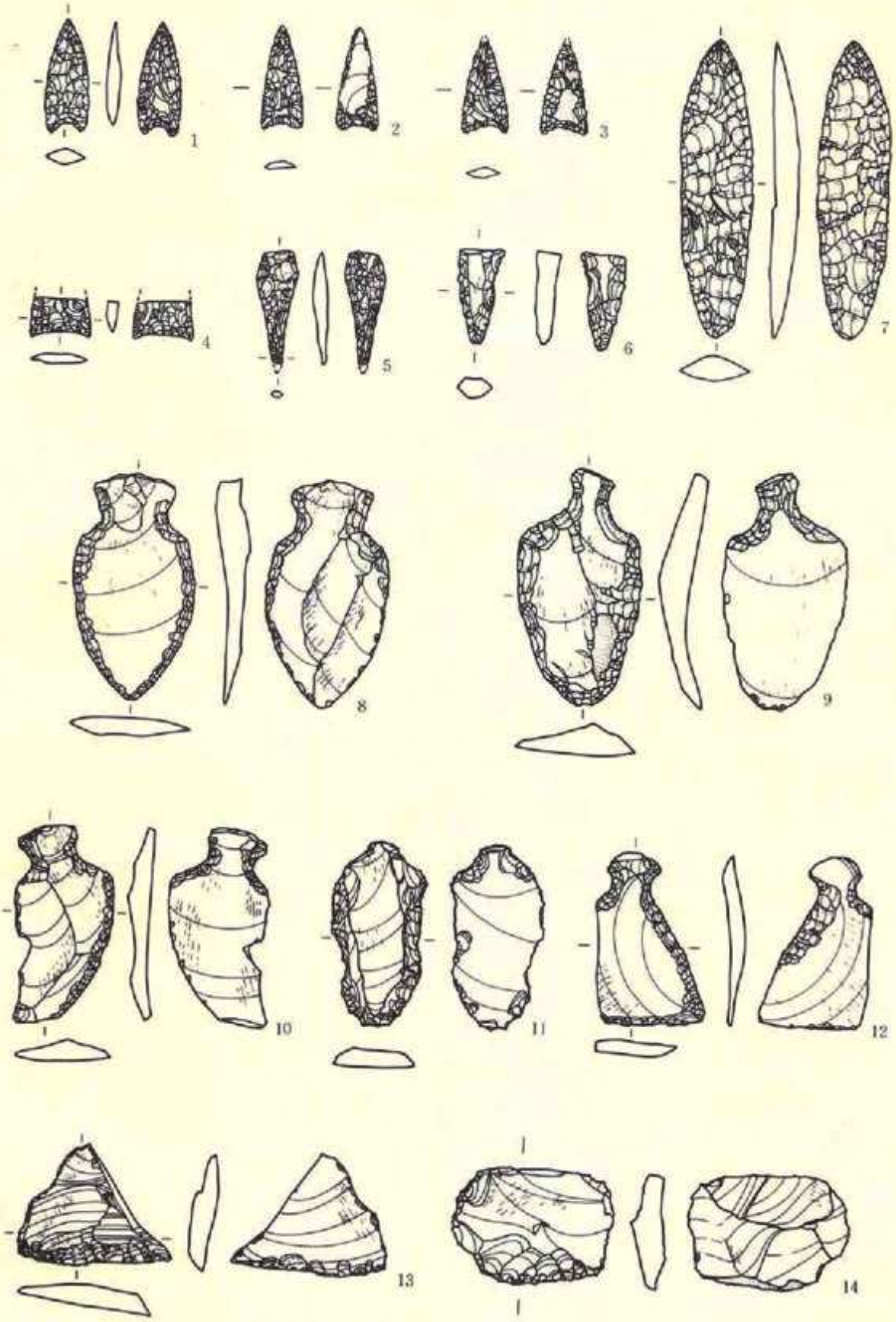
第92図　遺構外出土遺物(土器３)



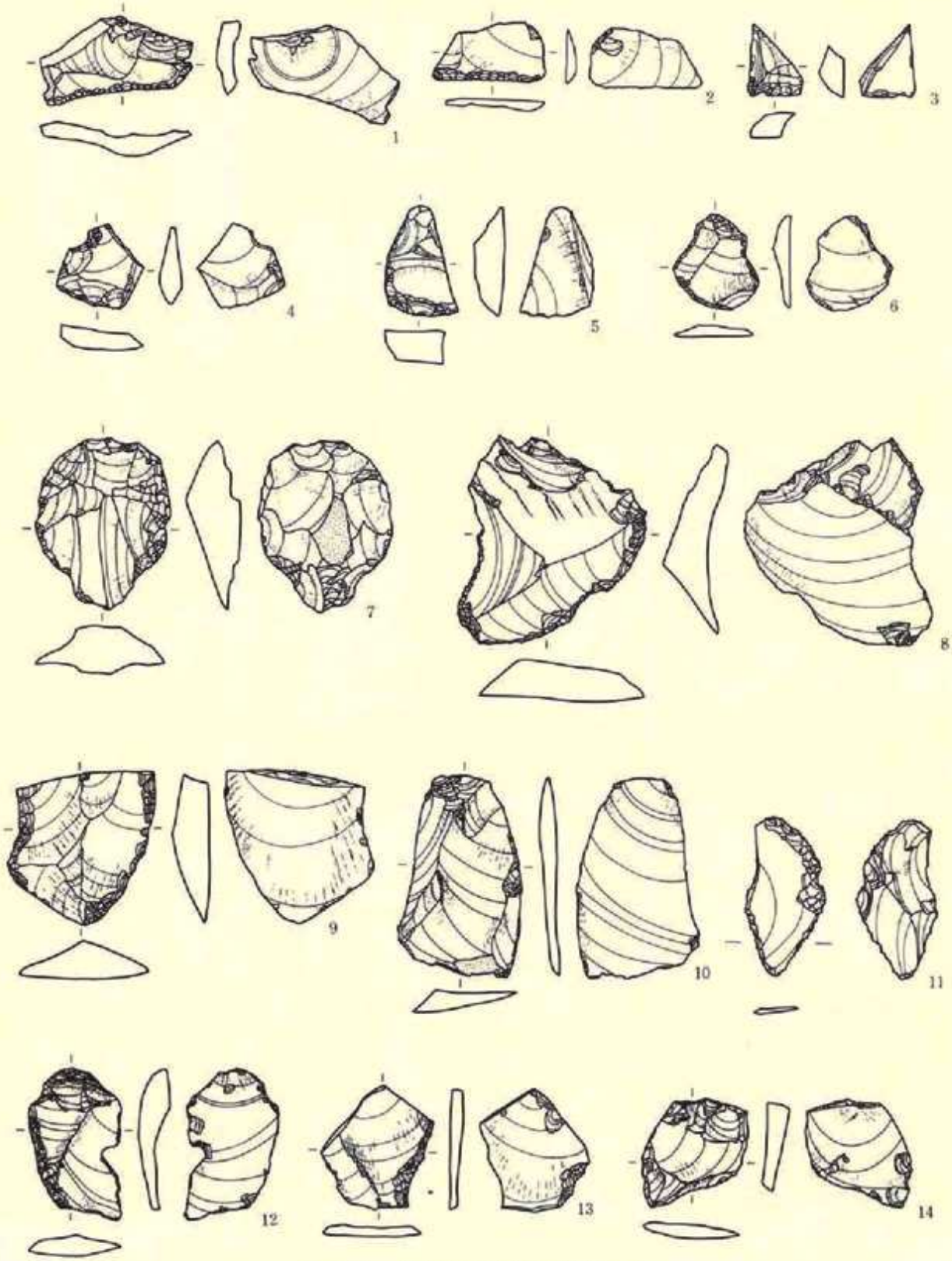
第93図　遺構外出土遺物(土器４)



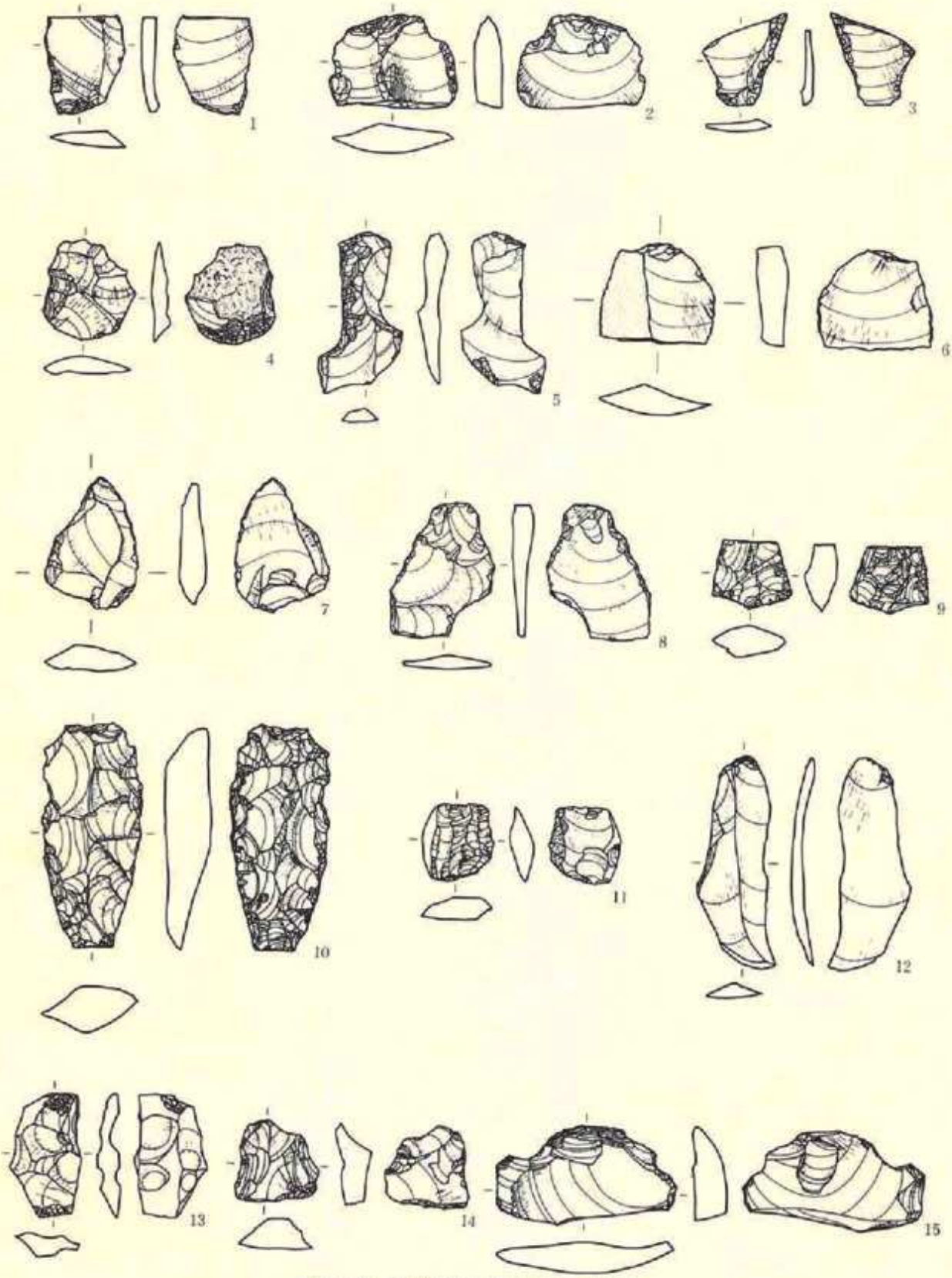
第94図　遺構外出土遺物(土器5他)



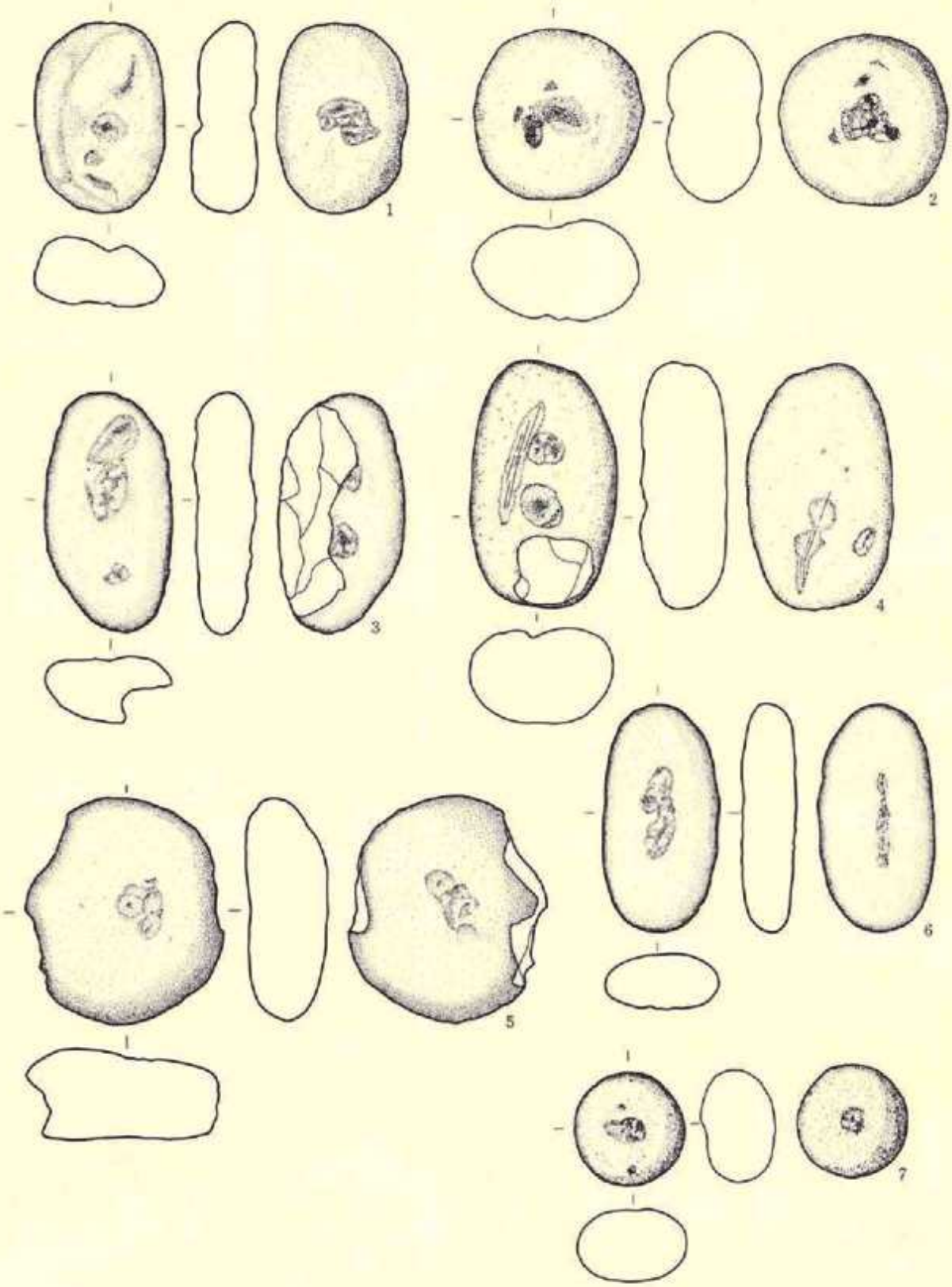
第95図　遺構外出土遺物(石器Ⅰ)



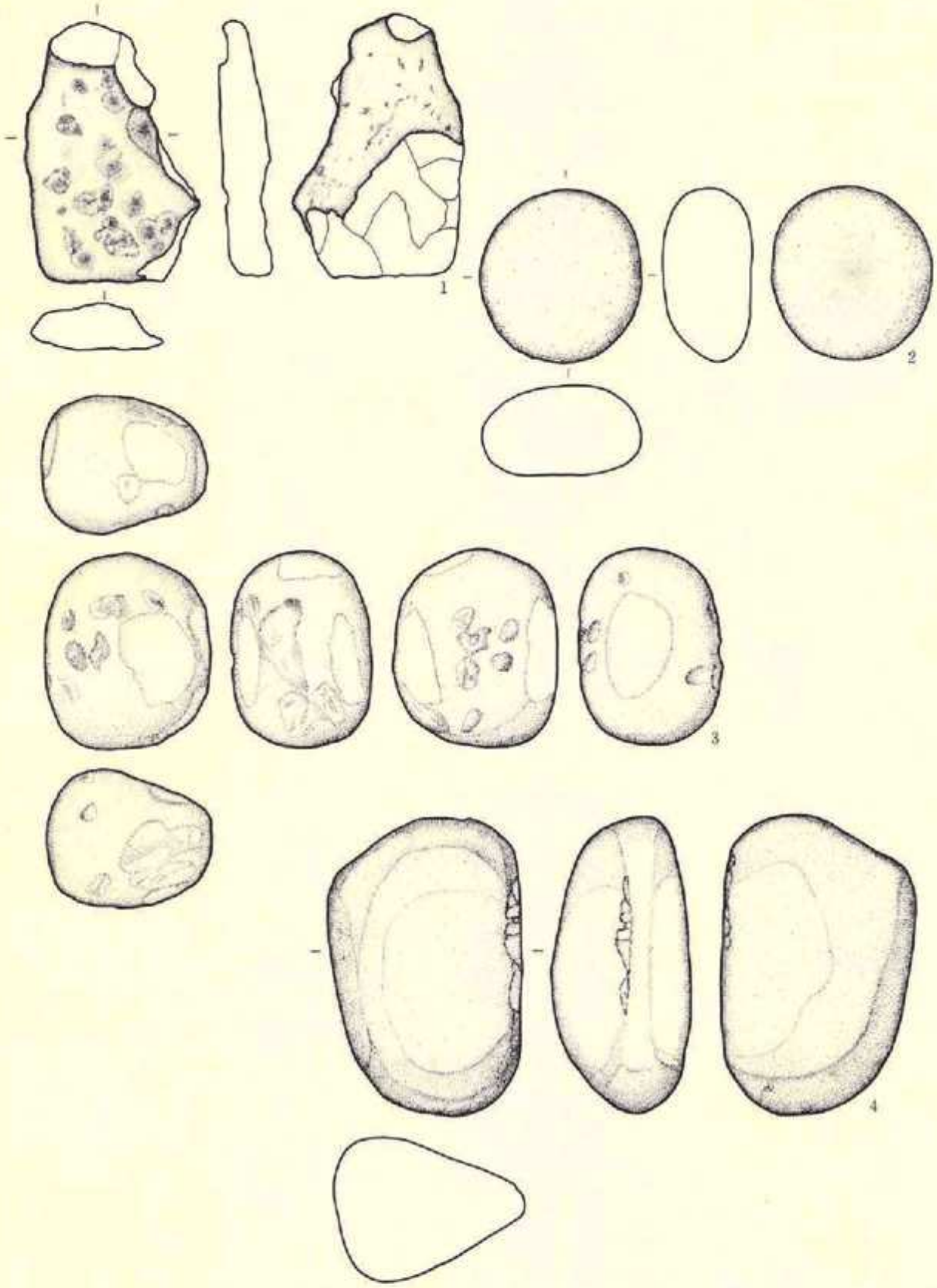
第96図　遺構外出土遺物(石器２)



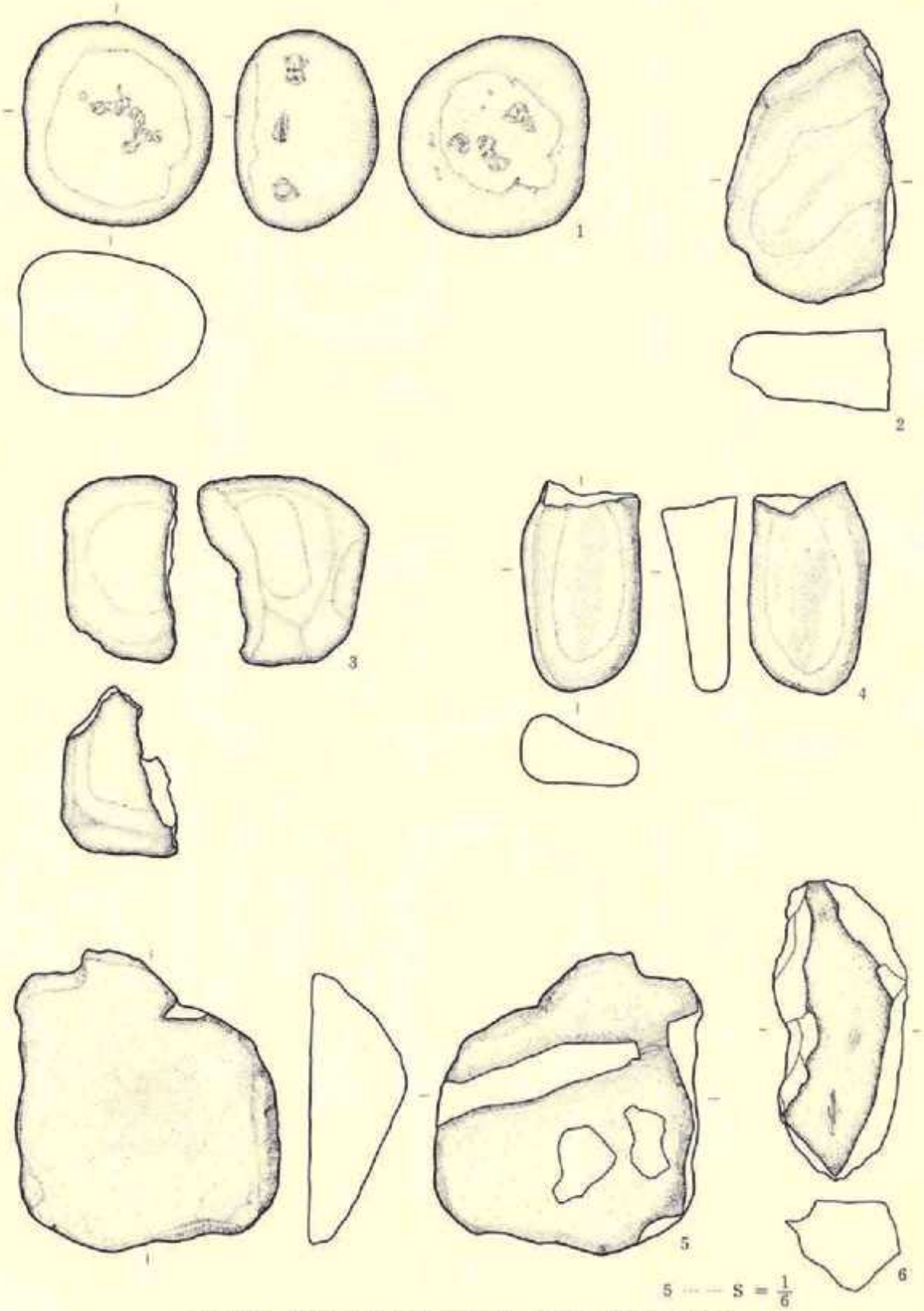
第97図　遺構外出土遺物(石器３)



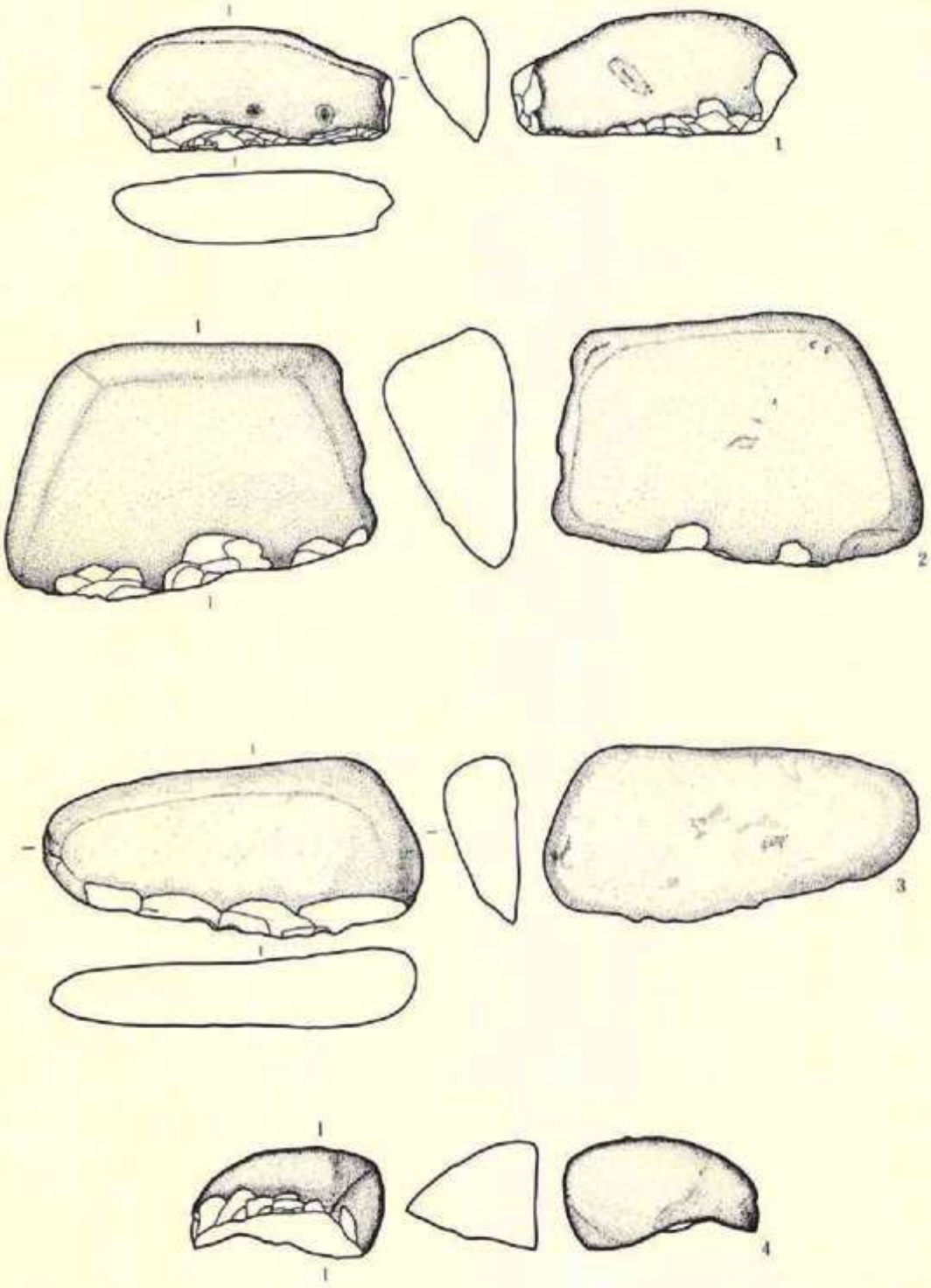
第98図　遺構外出土遺物(凹石)



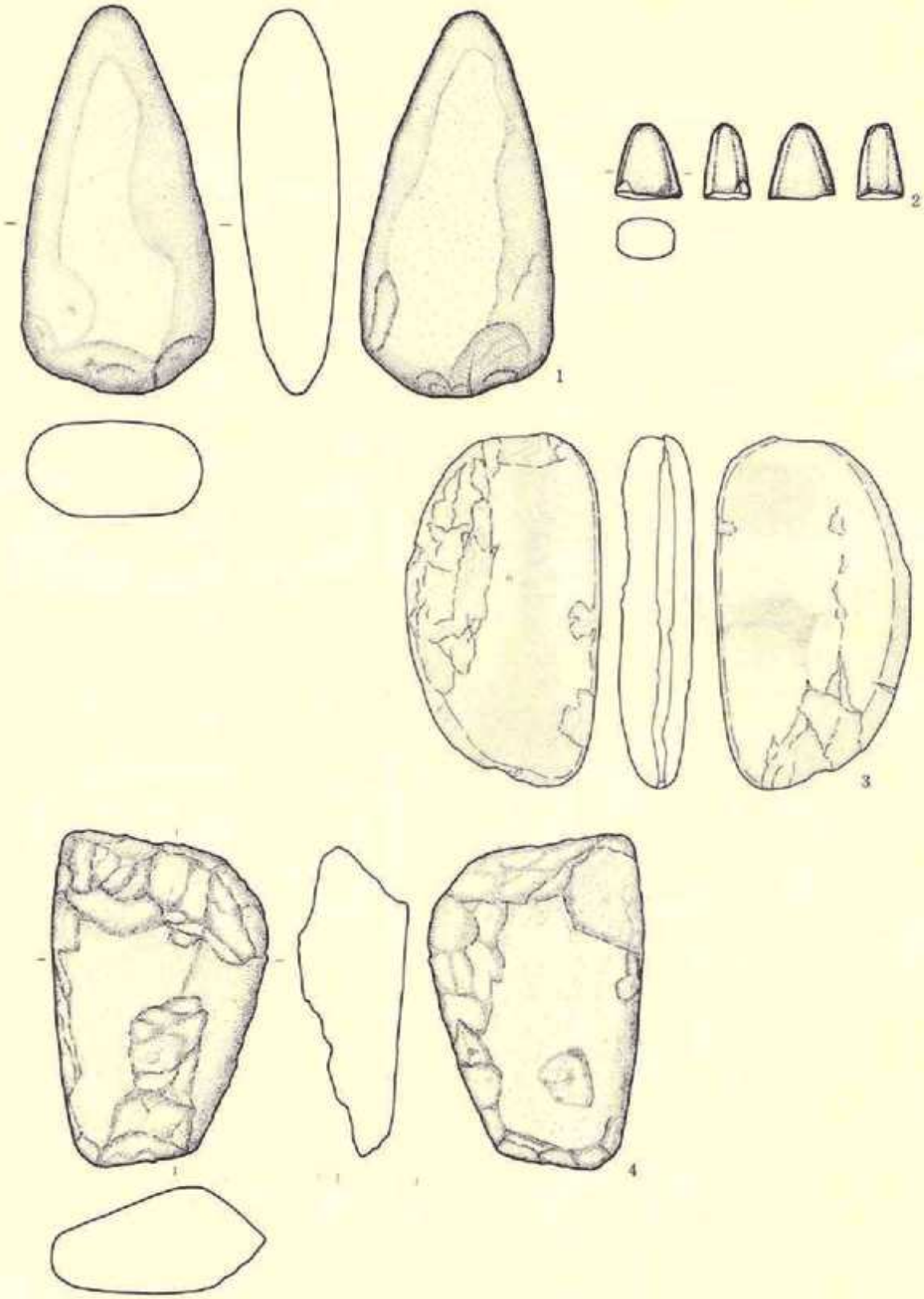
第99図　遺構外出土遺物(凹石・磨石・敲石)



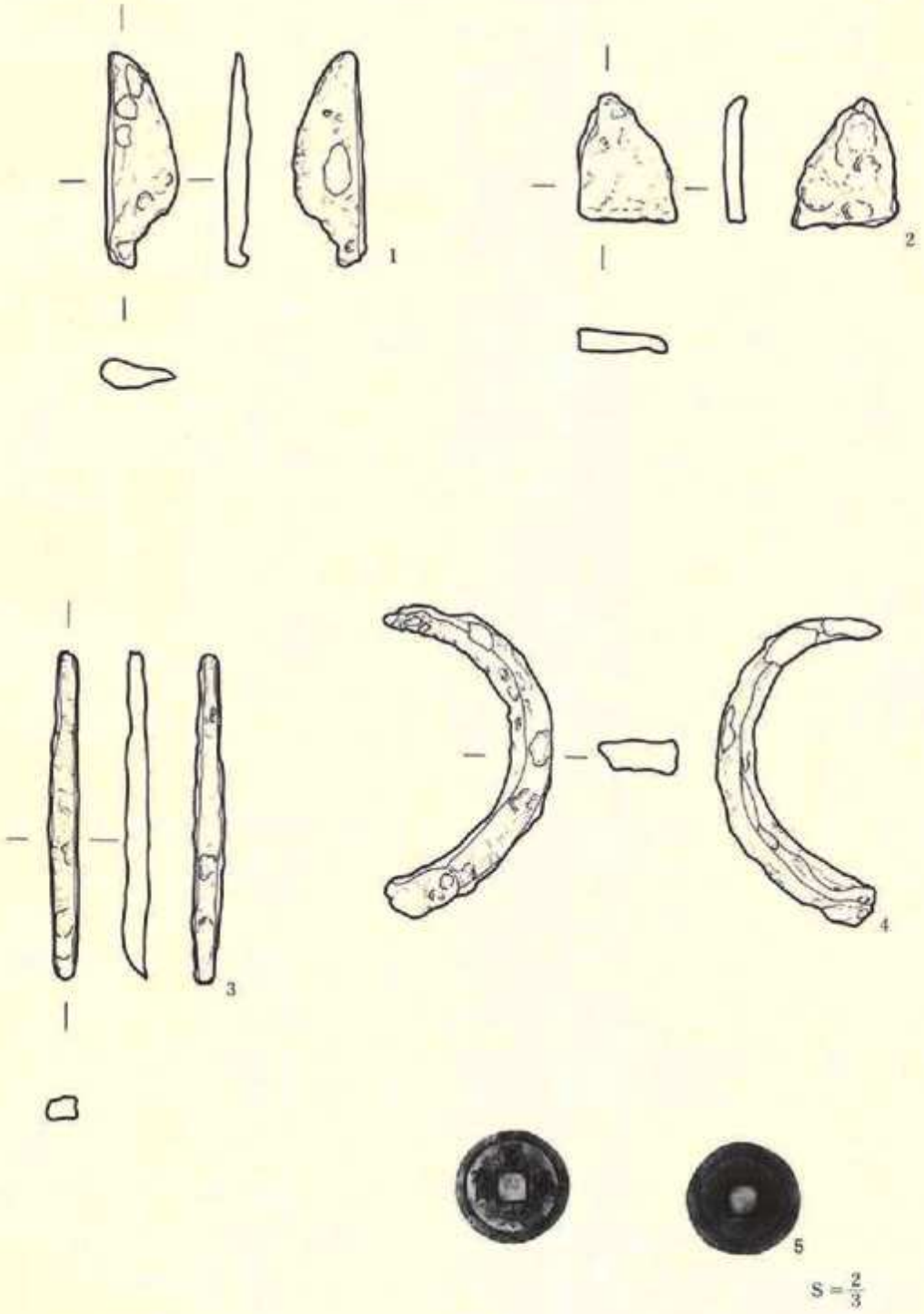
第100図　遺構外出土遺物(磨石・敲石・砥石・石皿)



第101図　遺構外出土遺物(両面礫器・片面礫器)



第102図　遺構外出土遺物(石斧・半円状扁平打製石器)



第103図　遺構外出土遺物(鉄製品等)

V. まとめと考察

本遺跡の調査結果は前章で述べたとおりである。以下、項目に従ってその内容を簡単にまとめ、最後に平安時代の住居址について若干考察することにする。

〔1〕縄文時代の住居址

検出された住居址は4棟であるが、うち1棟（ⅧD－4住居址）はその大半を流失し，柱穴と地床炉、周溝が確認されたのみである。このⅧD－4住居址も含めて4棟とも後期中葉に属し、同時存在の可能性もある。これらは4～7mの間隔で隣接し、東側を流れる沢に近い低地に位置している。この占地の状況は隣接する沼久保遺跡でも同様である。平面プランの比較的明瞭な2棟（ⅧD－3住居址、ⅨD－1住居址）をもとに考えると、平面形は円形又は楕円形(注1)である。掘り込みは浅く、建て替えはみられない。埋土上位に十和田a降下火山灰は含まれない。床面積は13～16m²で4棟ともほぼ同様の規模である。主柱穴は4本でⅧD－4住居址は長方形に近いが、他の3棟は台形状の配置をとる。柱間は最小で1.5m、最大2.5mである。(注2)ⅧD－3住居址とⅨD－1住居址の2棟の主柱穴には明瞭な掘り方が見られたが、他では掘り方と柱当りは区別できなかった。柱には直径10cmほどの丸太材を使用している。深さは一部を除くと、30～50cmで平均すると40cmほどである。柱配置は最大の辺が斜面上位にとるもの2棟、下位にとるもの1棟である。いずれも床の中央に配置される。出入口状施設は不明である。柱によって区画されたほぼ中央に地床炉が作られる。斜面上位の壁際に小規模な柱穴列（杭跡？）や周溝が回る。

4棟のうち少なくとも2棟は焼失しているが、粉炭と焼土粒が薄く堆積しているのみで、柱材や垂木材などは一部を除いて原形をとどめていない。木材の材質は，ⅧD－3住居址はクリとナラがほぼ半数ずつ、ⅨD－1住居址は大部分がクリで僅かにミズキがみられる。

出土した遺物はどの住居址も少ない。土器は粗製土器の破片がその大半を占める。床面及び埋土の中から原形をとどめる形で出土した土器はない。また、完全に復元できたものもない。石器は数点の完形品が出土したが、2点の石皿を除けばいずれも石匙など剥片石器である。以上の遺物出土状況は故意に住居を廃棄し、火災も廃棄後におこったことを暗示させる。

上記のことを前提とした場合、次の2点の遺物は注目される。1点はⅧD－3住居址から出土した11－4の小形の鉢で、やや大きい盃（グイ飲み）状のものである。無文で内外を入念にみがき、底部は上げ底となっている完形品である。これは壁際の柱穴状ピットの底部から正立の状態で出土したものである。用途については不明であるが、同ピットに意図的に埋置されたものと解されるため埋土を詳細に分析、検討すべきであった。他の1点は極めて純度の高いアスファルト塊が出土したことである。これはⅨD－1住居址の床面から出土したものであるが、

100g以上の塊である。ⅧC－4住居址から出土した17－1と2の土器はその割れ口にアスファルトと思われるものが塗布されていることと無関係とは思われない。土器の接着などに使用されたと思われる。当地ではアスファルトは産出しないことから、貴重品であったと思われる。しかし、これを残していったということはアスファルトに対する当時の人々の価値感を考えるうえで興味ある事例と思われる。

〔2〕平安時代の住居址

平安時代に属する住居址は合計14棟、小屋址と思われる住居址状遺構が3棟検出された。時期については後述するが、大まかに平安時代後葉が想定される。遺跡の南東斜面のほぼ全域で検出される。各遺構は5～10mの間隔をたもつが、ⅦC区のみが3棟寄り合い、うち1棟が重複している。尾根の頂部は旧地形をある程度残しているが、耕作地造成に伴いⅦD区以東が大幅に削平されている。そのため旧地形を残す地域で検出されたⅦC－1住居址、ⅦC－2住居址、ⅦC－5住居址状遺構、ⅦC－3住居址状遺構、ⅦC－4住居址、ⅥD－1住居址、ⅥE－2住居址状遺構、ⅥE－1住居址は掘り込みが深く、検出面からの深さは平均値で約72cmとなる。それに対して、ⅦD－2住居址より東側で検出された9棟の平均値は約32cmである。埋土は攪乱されたものはなく、すべて自然堆積である。ただし、上部が大幅に削平されたり流失したりしているものはある。埋土内に十和田a降下火山灰と白頭山火山灰が見られる。十和田a降下火山灰は層状に堆積（第1次堆積）するものはなく、小ブロック状や部分的な層を作るなど二次堆積である。それに対して白頭山火山灰は遺構内に明瞭な層を作り第1次堆積となっている。また、平安期の遺構には必ずこれらの火山灰が何らかの形で混入している。

平面形は正方形を基調とする。一部の壁が流失したり、辺の中央部がやや膨らんでいるものもある。また歪つなものもあり正確な正方形や長方形となるものは少ない。長軸（カマドのある方向）と短軸の差は10～50cmがほとんどであり、30cm未満を無視すると次のように分類される。なお、意図的に隅丸としているものは3棟、辺の中央部を膨らます胴丸形はない。

正方形……ⅦD－2住居址、ⅦD－1住居址、ⅥE－1住居址、ⅧD－1住居址、
ⅨC－1住居址、　計5棟
隅丸方形……Ⅷc－3住居址、ⅧC－1住居址、　計2棟　} 計7棟
長方形……ⅦC－1住居址、ⅦC－2住居址、ⅦC－4住居址、ⅥD－1住居址、
ⅦD－3住居址、　計5棟
隅丸長方形……XC－1住居址、　計1棟　} 計6棟

規模からみると3つに分類される。特に大きいのはⅥD－1住居址1棟で、床面積は約46.8㎡である。次はおよそ10㎡以上20㎡以下で9棟、10㎡未満は3棟である。したがって、10㎡以上20㎡以下の中規模な住居が主体となるが、このグループは20㎡に近いグループ5棟と10㎡に

近い4棟に更に細分が可能である。

柱穴が検出されたのは3棟であるが、うちⅦD－1住居址は深い主柱穴と思われるものは1基のみであり、しかもカマドが作り替えられていることから拡張も考えられ、主柱穴の配置は不詳である。ⅥD－1住居址とⅦD－2住居址は4本柱である。前者は床面のほぼ中央に、後者は2本がカマドとは反対の壁際に寄る。どちらも柱には割材を使用している。この4本柱穴の住居址は沼久保遺跡でも少くとも2棟は検出されている。この2棟（ⅤF－1住居址、ⅢF－1住居址）は1対の柱がカマドの作られている壁か又はその反対の壁に寄る。規模は中規模である。

カマドは中央部に作られるもの8棟、隅に寄るもの6棟である。方向は北が2棟、西～北西が3棟、北東6棟、東1棟、南～南東2棟である。これを斜面の上位と下位とに分けると、上位を向くもの10棟、下位を向くもの4棟となる。ただし、カマドを作り替えてあるものは3棟である。ⅦD－2住居址は東から北へ、ⅧD－1住居址は南東から北東へ、ⅧC－1住居址は北東で同一方向を向いている。煙道部が刳貫き式のものが8棟、掘り込み式が5棟、不明ないし煙道部をもたず本体からすぐ煙出し部へ立ち上がるもの3棟である。ⅦD－2住居址は刳貫き式から掘り込み式へ、ⅧC－1住居址は掘り込み式から刳貫き式へと替えられている。

焼失した住居址はⅦC－1住居址、ⅥD－1住居址、ⅦD－2住居址、ⅦD－3居住址、ⅦD－1住居址、ⅧD－1住居址、ⅨC－1住居址の計7棟である。この7棟のうち、ⅦC－1住居址を除く6棟は出土した遺物は少なく、廃棄された後に焼失したと思われる。ⅦC－1住居址は多くの木器（大多数は曲物）が炭化して出土したが遺存状態は悪く、形状をとらえられたのは木Ⅲのみである。ⅥD－1住居址は南側に板が敷いてある。5～6枚の板で幅1.5mほど、長さは約2.7mのものを2列につないでいる。したがって使用された1枚の板の法量は長さ2.7m、幅0.3m、厚さ2～4cmである。材質はクリである。この敷板の面積は8.1m²である。板敷の住居址は同じ浄法寺町の五庵Ⅰ遺跡や飛鳥台地Ⅰ遺跡からも検出され、しかも、本遺構と大きな時期差はないことから特異な例ではない。(注3) しかし、本遺跡あるいは沼久保遺跡を合わせても、板敷の住居はこの1棟のみであり、同様のことは先に上げた2遺跡についても言えることから一般的な住居址と見做すことも妥当ではない。特に本遺跡においては、この住居址のみが格別に大きく、占地する場所も尾根の頂部で桂平・沼久保一帯を見下す位置にあること、カマドの作りも丁寧で、刀剣も出土していることなどを考え合わせると族長など特権階級の居住したことを暗示させるものがある。しかし、五庵Ⅰ遺跡の例では板敷の住居址がただちに特権階級の人々の居住した住居址とは言えない状況にあるのも事実であり、なお類例を重ねるとともに多方面から検討する必要がある。

第6表　平安時代の住居址一覧表

住居址名	面積 (m²)	主軸方向	カマド		火山灰	遺物						備考
			位置	方向		甕		坏		須恵	鉄製品	
						(ロクロ不)	(ロクロ使)	(土師)	(赤焼)			
(第1期)												
Ⅶ C－1住	10.2	N－21°－W	中央	北	To－a	○	○		○		○	焼失
Ⅶ C－2住	6.5	N－24°－W	隅	北東	〃							Ⅶ C－5住状に切られる
Ⅶ C－3住状	2.1	——	—	—	〃	○						
Ⅶ C－4住	5.3	N－82°－E	隅	東	〃	○						
Ⅶ C－5住状	4.5	——	—	—	〃							
Ⅷ C－2住	——	N－24°－W	隅	南東	〃	○			○			一部調査
Ⅷ C－3住	19.4	N－16°－W	〃	南	〃	○	○	○		○		
Ⅵ E－2住状	4.0	——	—	—	〃	○				○		
(第2期)												
Ⅵ D－1住	46.8	N－69°－W	中央	西	(To－a Ht)	○	○	○	○		○	焼失、板敷
Ⅶ D－1住	10.5	N－55°－W	〃	東／北	〃	○	○	○		○		〃
Ⅶ D－2住	18.5	N－10°－W	〃	北西	〃	○		○	○	○		〃
Ⅶ D－3住	15.9	N－43°－W	〃	〃	〃	○		○	○		○	〃
(第3期)												
Ⅵ E－1住	5.8	N－58°－E	隅	北東	Ht	○		○				
Ⅷ C－1住	12.2	N－31°－E	中央	〃	〃	○						
Ⅷ D－1住	16.8	N－30°－E	〃	〃	〃	○		○	○			焼失
Ⅸ C－1住	18.5	N－35°－E	〃	〃	〃	○		○			○	〃
Ⅹ C－1住	9.9	N－36°－E	〃	〃	〃	○	○		○			

To－a……十和田a降下火山灰　　Ht……白頭山火山灰

〔3〕陥し穴

陥し穴は合計36基検出された。そのうち円筒状陥し穴は19基、溝状陥し穴は17基である。時期決定できる資料はほとんどない。したがって時期別に区分することはできないが、これまでに類例が多く報告されていることからそのほとんどは縄文時代に属すると考えられる。

円筒状陥し穴

円筒状陥し穴は開口部・底部とも正円となるものは少なく、楕円形や隅丸長方形となるものが含まれる。断面形は開口部付近が外反しロート状になる。外反する角度は遺構によって大きく異なっているが、概ね40°～20°の範囲である。これは住居址や溝状陥し穴等と比べ著しく異なる形状が遺存したもの、自然崩壊によって開口部が外反したものではなく、そのように構築されたと考えられる。それを前提とした場合、ⅧC－5陥し穴は上部がⅧC－3住居址によって削平されており外反する開口部が切られたと解せられる。XC－5陥し穴とⅨC－6陥し穴は他と異なる性格を有している可能性が強い。また、ⅧD－11陥し穴は開口部は楕円形、底部は長方形であるが、これも陥し穴ではない可能性がある。底部に杭跡と思われる小穴をもつものは、ⅧD－5陥し穴とⅨC－6陥し穴の2基のみである。XC－5陥し穴は底部中央に所謂副穴を1基有するが杭跡かどうかは不明である。

規模は特殊なⅧD－11陥し穴、XC－5陥し穴、ⅨC－6陥し穴を除くとほぼ同様である。底部の直径が60cm、深さ148cmが平均値となる。この平均値と断面形から最も標準的な遺構をとり上げるとⅧD－15陥し穴やⅨC－4陥し穴である。この二つの陥し穴を標準的なものとして詳細に検討してみよう。底部径は50cmと45cm、開口部は105cmと115cm、深さは158cmと163cmでそのうちほぼ垂直に壁が立つ深さは1mと1.3mである。開口部は円形、底部も円形で水平である。即ち、開口部は底部の約2倍の大きさで、開口部の外反(外傾)する角度は25°～35°である。垂直に落ち込む深さは1～1.3mである。底部から杭跡と思われる小穴が発見されたのは少ないが、逆木をたてることを想定すると底部を水平に作った方が便利である。

以上の陥し穴は時期決定資料を欠くため時期を特定させることはできないが、埋土を比較検討すると4つに大別される。一つは粘土質シルトに南部浮石と思われるオレンジ状の浮石粒が混入する埋土で非常に硬い。この埋土を有する陥し穴はⅦD－16陥し穴、ⅧD－10陥し穴、ⅧD－11陥し穴、ⅧD－9陥し穴、ⅧC－5陥し穴である。もう一つは黒褐色土に南部浮石と思われる黄色状の浮石粒が混入する埋土で前者に比べると軟らかい。ⅦE－1陥し穴、ⅧE－1陥し穴、ⅧD－6陥し穴、ⅧD－12陥し穴、ⅧD－13陥し穴、ⅧD－15陥し穴、ⅨC－6陥し穴、ⅨC－4陥し穴、XC－2陥し穴などである。第3のグループは第1群の指標となる暗褐色土と第2群の黒褐色土のどちらも含まれるグループである。ⅧD－14陥し穴、ⅨC－9陥し穴、ⅨC－7陥し穴、ⅨC－8陥し穴などがこれにあたる。第4群はXC－5陥し穴のみで

埋土の構成は3群と同じであるが、ラミナが発達し第2、3群より軟らかい。以上のように分類してみると位置的にかなりまとまっている。これは時期別であるか占地する地山の相異を反映したものであるかは即断できないが、少なくともこれらのグループ内の陥し穴は同時存在か又はあまり時間を経ないで構築された可能性が強い。また、第2群のⅦE－1陥し穴はⅥ層で検出されているため、前期又はそれ以前と思われる。

これらの円筒状陥し穴は時期差があるとしても、その占地は斜面の中腹よりやや下方に集中している。その配置には強い規則性が見られないが、(ⅧC－5、ⅧD－10、ⅧD－9)(ⅧD－5、ⅧD－13、ⅧD－12)(ⅧD－6、ⅧE－1、ⅦE－1)(ⅨC－8、ⅨC－7、ⅨC－9)と直線的に並ぶといえるかもしれない。ただし、陥し穴間が一定せず、しかも一基はやや離れるなどの問題が残る。この円筒状陥し穴の配列については、川口Ⅰ遺跡(第10図)、五庵Ⅰ遺跡(第105図)でも同様に何基か連続して検出されている。しかし、この円筒状陥し穴(注4)については不詳な点(注5)が多く、今後更に類例を待って検討する必要がある。

溝状陥し穴

溝状陥し穴は17基検出された。そのうち14基は底部幅が20cmほどのものが大部分であるが、3基は底部幅が倍の40cmほどである。後者の幅広なタイプはすべて埋土最上位に十和田a降下火山灰がやや厚く堆積する。したがってこの3基は別のグループと考えられる。以下前者の14基をaグループ、後者の3基をbグループと呼ぶ。

aグループは底部幅が約20cmのものとしたが、ⅥE－5陥し穴のみは33cmで約1.5倍の広さである。しかし、埋土等からaグループに属すると思われる。上部は削平されたものが多く、断面形は逆台形や長方形となる。長軸方向の断面は底部が長く、オーバーハングしている。開口部の平面形は削平されなかったものほど長楕円形となっている。長軸方向の両端が円形状に膨らむバーベル型はない。ただ、ⅥD－3陥し穴は一方が円形状に膨らんでいる。埋土の状況から、崩落による膨らみとは考えられない。規模は底部でみると長さが4mを超えるもの3基、3.5m前後のもの2基、2.9m前後のもの3基、2.5～2.2mのもの3基、1.7mが1基、その他は調査区外へ延びるため不明である。深さは削平を考慮に入れると少なくとも1.2m以上と考えられ、最も深いもので1.5mとなっている。底部及び壁に杭跡などは見られない。出土遺物は若干の土器片とフレイクを主とする石器であるが、埋土上位でもあり時期決定資料とはならない。

溝状陥し穴は連続して構築される例が多く見られるが(第106図)、本遺跡ではⅥE区で1例見られるほかはほとんど連続しない。占地も尾根の頂部(注6)に多く見られるが、中腹や下位からも検出される。斜面に直交して作る例(長軸方向が斜面に直角)が6基、平行なのは8基である。

bグループは底部幅がaグループの2倍である。断面形は長方形又はそれに近い逆台形である。底部は中央部から屈折し、斜面下位は水平に、上位は斜面に沿って上がる。斜面下位の底部

には柱穴（杭跡）が1基、上位の底部には2基検出される。埋土は南部浮石粒を若干含む黒褐色土が主であるが、aグループの埋土に比較して非常に軟らかい。埋土の最上位に十和田a降下火山層がほぼ純層に近い形でやや厚く堆積するが、それ以外には混入しない。

検出された地点はIX区、X区に限られ、長軸方向はいずれも斜面と平行である。

十和田a降下火山灰の堆積状況に着目すれば、平安時代の住居址やピットなどの埋土には、このような堆積をしていないことから、これらの遺構よりは古い。また、縄文時代後期の住居址の埋土やaグループの陥し穴などには一切含まれていないことから、これらよりは新しい時期と思われる。

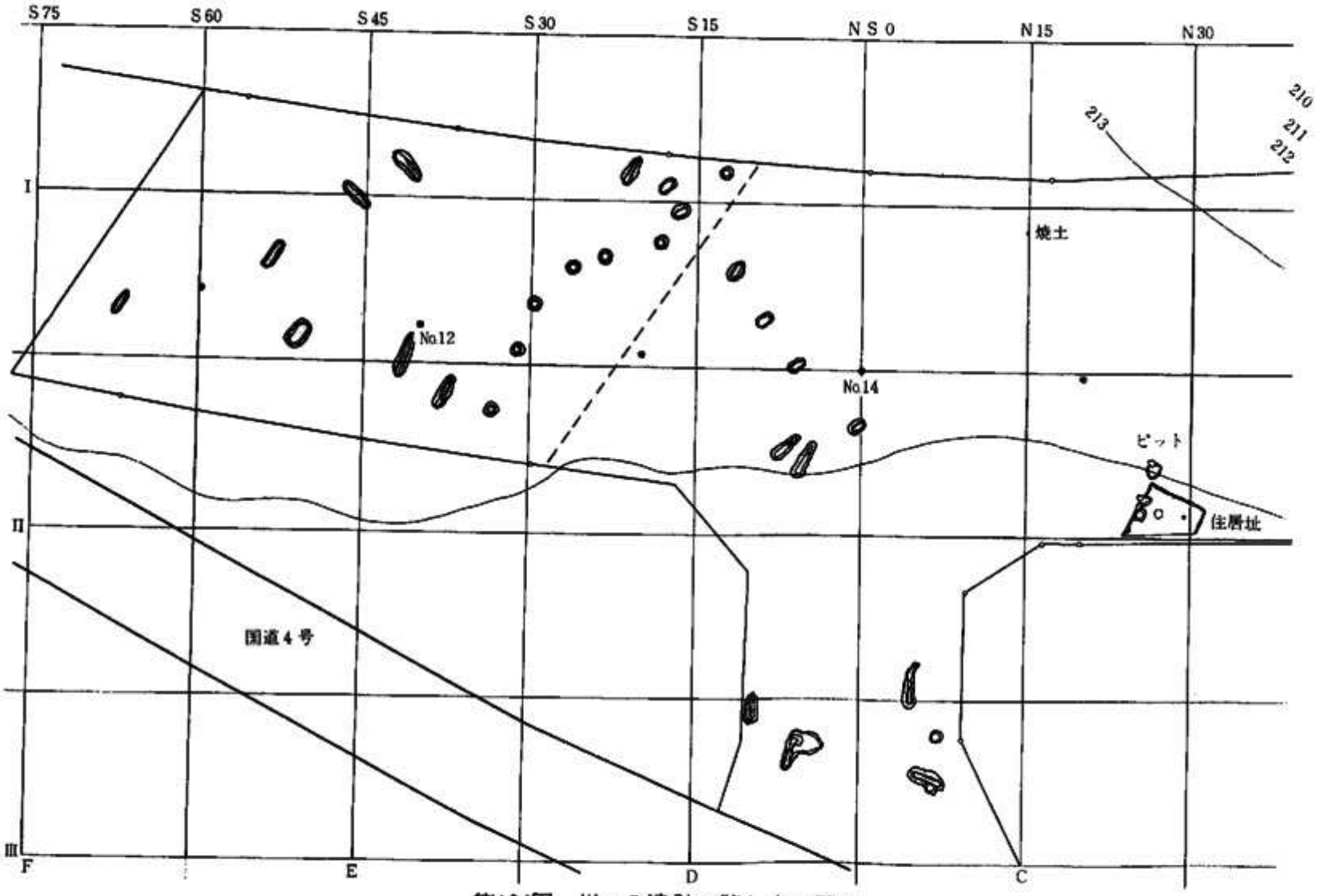
〔4〕ピット

ピットは埋土、形態、共伴する遺物等によって縄文時代と平安時代及び時期不明のものと3つに大別される。しかし、縄文時代の各期に細分することはできない。縄文時代のピットは14基である。うちフラスコ状ピット6基、ピーカー状ピット7基、皿状ピット1基に細分される。フラスコ状ピットは内傾する角度が緩く、とくにVID－10ピットは円筒状に近い皿状ピットは上位が削平されたものである。

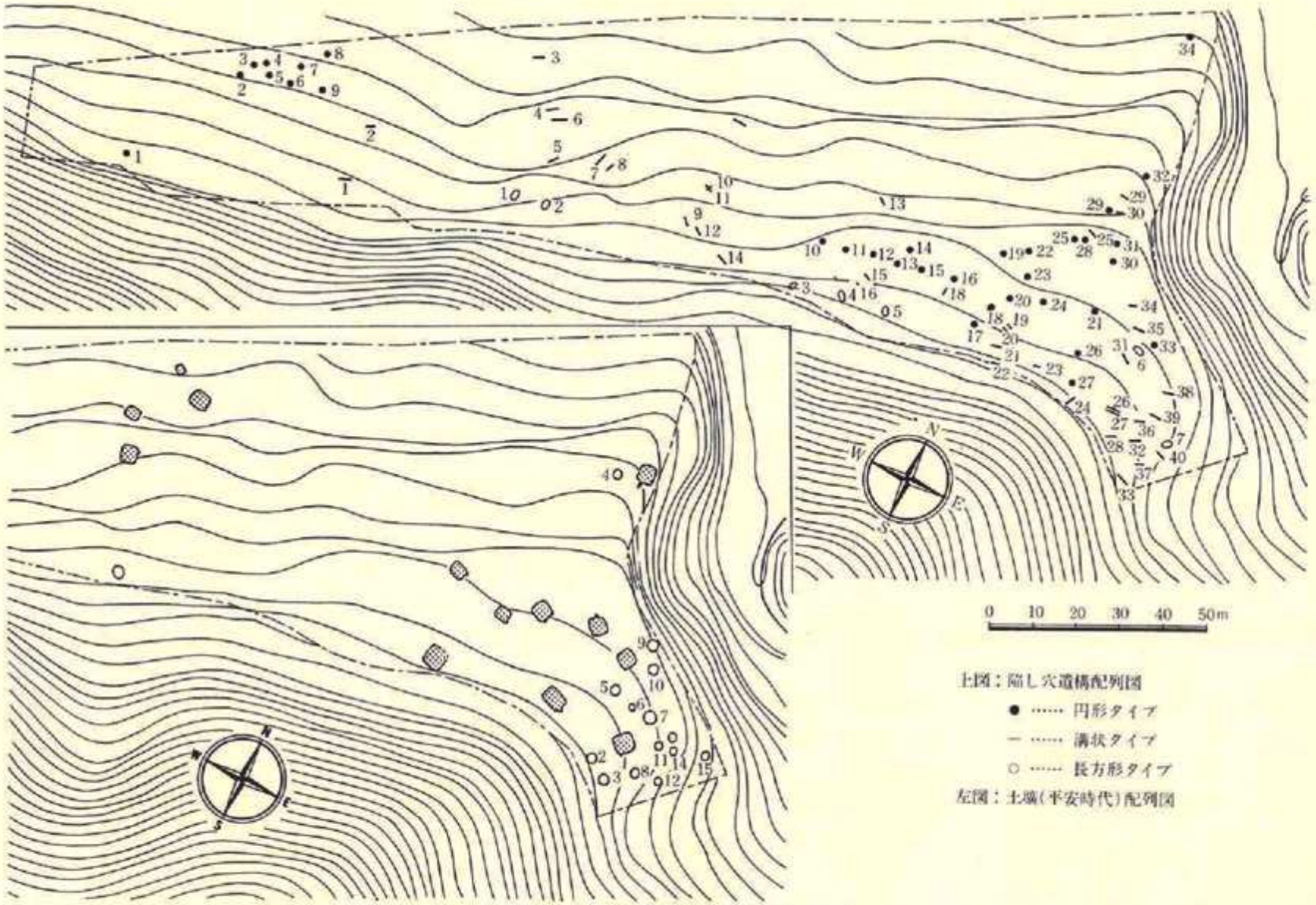
平安時代に属するピットは16基で4群に細分される。第1群は平面形は隅丸方形を基調とするものである。VIIIC－2ピットを除いてブロック状の十和田a降下火山灰が埋土内に見られる。VIID－10ピット、VIID－17ピット、VIID－11ピット、VIID－12ピット、VIIIC－2ピット、VIIIC－3ピットの計6基である。第2群は直径が1.2m以上で平面形が円形、断面形はピーカー状のものである。埋土内に十和田a降下火山灰が見られ、層状を呈する。VIE－2ピット、VIIID－1ピット、VIIID－4ピット、VIID－1ピットの4基である。第3群は平面形は不整形、断面形は皿状を呈する。埋土内又は底部に焼土がまとまって検出される。VIIC－1ピット、VID－8ピット、VIID－4ピット、IXC－3ピットの4基がこれにあたる。第4群は平安時代の遺構で第1群～第3群に含まれないピット、VIIC－2ピットとIXC－10ピットの2基である。どちらも埋土内に十和田aの降下火山灰が含まれている。

これらのピットの性格は不明であるが、第1群はすべて住居址の近くに占地し、VIID－11ピットなどは底部に草を敷いたか又は積んでいたと思われることから小屋としての機能を持った可能性がある。第2群は住居址とは関係なく占地すると思われる。貯蔵穴であるかどうかは不明であるが、穴そのものを使用する目的があったと思われる。それに対して第3群は穴は結果として掘り込まれたもので、何かを焼くためのものと思われる。

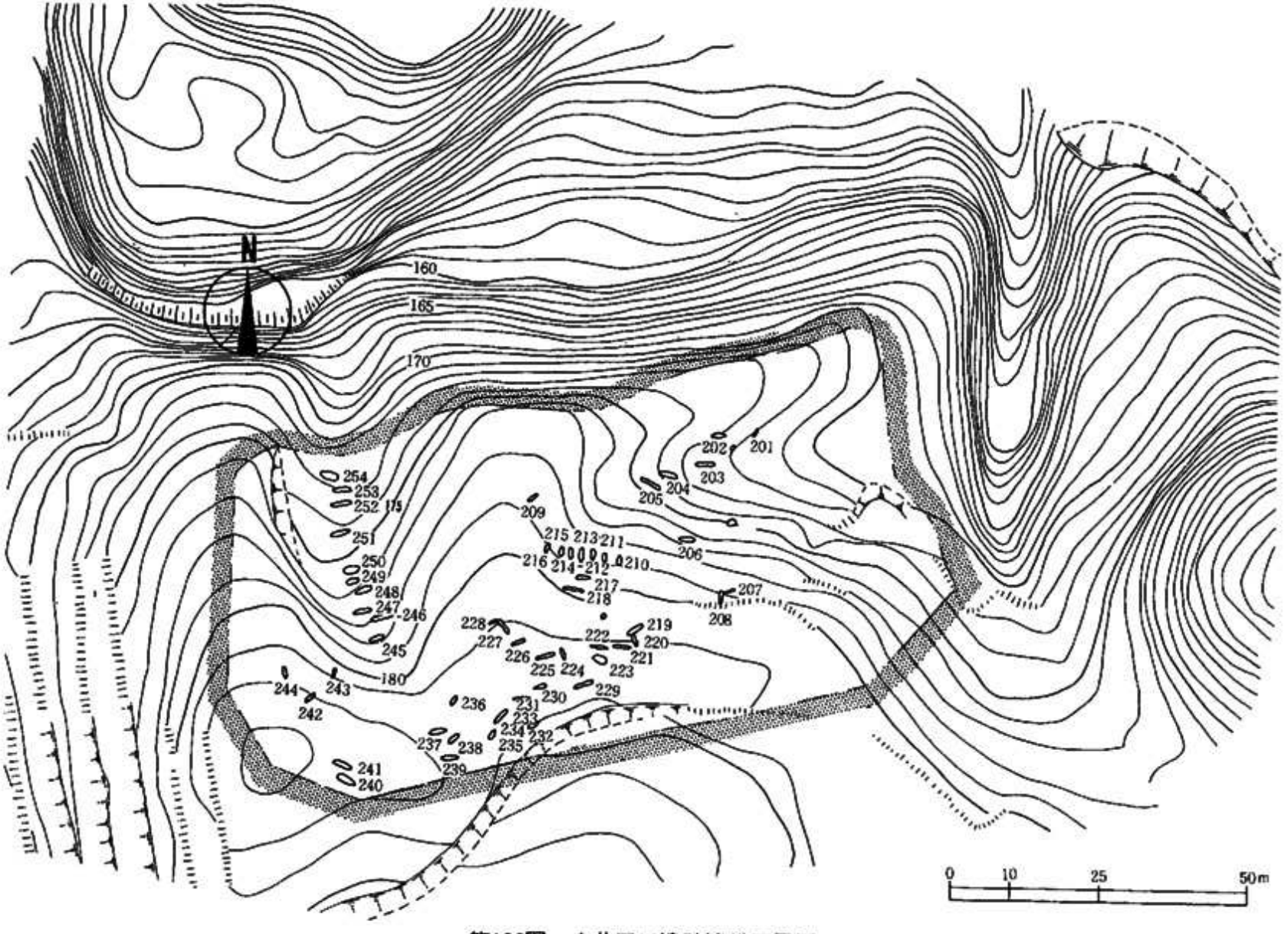
時期不明のピットはいずれも小型で埋土が黒～黒褐色土のものが大半を占める。旧地形が残る尾根の頂部に集中して検出されたが、これらはいずれも浅い掘り込みのために他の地点では流失した可能性が強い。



第104図　川口Ⅰ遺跡の陥し穴の配列



第105図　五庵Ⅰ遺跡の陥し穴の配列



第106図　小井田Ⅲ遺跡遺構配置図

〔5〕遺物

本遺跡から出土した遺物は縄文土器及び土製品、弥生土器、土師器、須恵器、石器及び石製品、鉄器・鉄製品及び鉄滓、陶磁器、古銭等の人工遺物とアスファルト塊や炭化物など自然遺物等が出土した。縄文土器、土師器、石器がその大部分で他は少量である。

縄文土器・土製品

縄文土器の大部分は旧地形の残る尾根の頂部付近から出土した。その多くは粗製の鉢形土器の体部片であり、器種・器形が推定できるまで接合復元できたものは極少数である。時期別に分類すると前期と後期に分かれ、他の時期はほとんどない。前期の土器で特徴的なことは以下のとおりである。

①初頭から前半にかけての土器が主体である。(第2～4群土器)

②前期の土器は大木系土器群が中心で、円筒下層式はほとんど見られない。

③前期の土期は胎土に繊維が含まれる。第2群は多量、第3群は普通、第4群は少量、第5群は微量となる。

後期の土器は遺構内から出土したものが主である。器種、器形が判明するのは11－4の小鉢、16－1の小鉢、86－3の片口土器、87－1のミニチュア土器、92－23の壺、94－1の鉢等である。時期は17－1の瘤付き土器、8－1の鉢(注口土器？)、11－8や11－10の角状突起を有するもの、50－5の木葉状入組文などから中葉から後葉のものである。

土師器

土師器の主体をなすのは長胴甕で、坏は少ない。その特徴は概ね次のようなものである。甕はロクロ成形するもの（20－3、21－6、21－9、38－2、39－1)、口縁部又は体上半部のみロクロナデをしたもの（38－3、38－7、50－6、68－5）もみられるが、大多数の甕はロクロ不使用である。長胴甕は高さ30cm台のもの（20－1～2、68－1～2）も出土したが、その多くは20cm台である。小甕（32－1、38－3等）も見られるが完形品が得られず器高は不明である。器形は体部上半に最大径をもつが、膨らみが小さく、所謂ずんどう形である。頸部が明瞭にくびれるものは口縁部が2～3cmで外傾する。頸部が緩く僅かにすぼまるものは口縁部が1～2cmと短く直立又は外反する。この器形の違いによって若干の時期差が考えられる。この点については〔6〕考察で述べることにする。器面の調整は、口縁部はヨコナデ、体部は上～中部は口縁部に向かって、下部は底部に向かって縦位にヘラナデ調整をする。内部は20－4と56－1の2点が縦位に、他は横位にヘラナデ調整をする。調整は雑である。胎土は長石や砂、小石を多く含みザラザラしている。焼成は良い。ロクロ使用の甕は小さく、器高が15cm程度と推定される。口縁部は短い。胎土は細砂を含むが小石等は含まれず緻密である。焼成も良い。

坏はロクロ水挽きである。底部の切り離しは、静止糸切り無調整のもの1点（38－10）と静

止糸切り再調整のもの1点（20－6）を除く他はすべて回転糸切り無調整である。内面黒色処理するものと非黒色処理のものに分かれ、内外面黒色処理するものは54－4の1点のみである。内面黒色処理する坏はやや内湾ぎみに立ち上がり、器厚は厚く、色調は暗褐色に近い。胎土も緻密である。それに対して、内面非黒色処理の坏はやや外傾して立ち上がり、器厚は薄く、色調は明褐色～赤褐色である。胎土は粗砂を含みザラザラする。この内面非黒処理の坏はロクロ水挽きで内外面は全く再調整されず、底部は回転糸切り無調整である。しかし、その焼成は須恵器のそれとは異なり土師器と変わらない。本報告書ではこれを「あか焼き土器」と呼び、内面黒色処理された土器又は再調整（ヘラミガキ）された坏とは区別した。

石器・石製品

石器の種類は多岐に渡っているが、ある器種のみが多量に出土するということはない。器種別に点数をあげると次の通りである。

フレイク28点、スクレイパー26点、調整痕を有する剥片石器21点、石匙10点、チップ7点、石鏃5点、ポイント4点、コア3点、石錐2点、凹石11点、砥石9点、磨石・敲石8点、石皿7点、石斧4点、半円状扁平打製石器4点、チョッパー2点、チョッピングトゥール2点、石錘2点、磨製石器1点、浮子1点、計163点

石材は安山岩系統、流紋岩系統、泥岩系統のものが80%以上を占める。産地は奥羽山脈、北上山地に限られる。

石器の時期区分は不詳な点が多いが、石鏃は無茎鏃のみであることやポイント（77－1）等から見ても前期に属するものが目立つ。礫石器は砥石・磨石、石皿等の出土が顕著である。石製品は12－9の四角形の浮子1点である。

鉄器・鉄製品

VID－1住居址から出土した刀剣は茎側を欠くため細部は不明であるが、片刃でやや反りが見られる。鎬造りかどうかは不明である。切先は短峰である。出土したのはこの刀身部のみで鍔や鞘などは発見されなかった。しかし、沼久保遺跡からは帯金具が出土している。

紡錘車が2点出土した。1点はIXC－1住居址のカマドの袖内から、1点はVIID－3住居址のカマド脇から出土した。前者はカマドを作る時に故意に埋置したものかどうかは不明であり、今後の類例をみなければならない。後者は鉄製の軸を装着したままで出土した。軸の長さは8.6cm、紡錘車の直径は6.3cmである。紡錘車の法量はともに同じである。

穂積み具と思われる鉄製品（22－1）がVIIC－1住居址から出土した。一部を欠損するため不詳な点が多いが、同時に調査した飛鳥台地I遺跡からほぼ完形に近い形で出土しており、それに類似している。

VIID－2住居址床面から鉄滓が出土した。また、その出土地点付近の床は不整形な掘り込み

が見られ、広く焼土化している。小さな鍛冶工房があったことも想定される。なお、本住居址の西約15m付近からルツボの破片（94－22）や鉄滓も出土している。

炭化材

当遺跡から検出された住居址は合計18棟であるが、そのうち焼失している住居址は半数の9棟である。この9棟から得られた炭化材の材質を調査したところ以下のとおりである。

ⅧD－3住居跡……クリとナラが半々に使用される。
ⅨD－1住居址……クリがほとんどでミズキが若干使用される。
} この2棟は縄文時代である。

ⅥD－1住居址……敷板や根太など大部分はクリ、垂木や柱はナラがほとんどでクリが若干含まれる。

ⅦD－2住居址……ナラとクリがほぼ同じくらい使用されている。

ⅦD－3住居址……クリがほとんどでミズキが若干見られる。

ⅦD－1住居址……広葉樹ではあるが詳細は不明。ススキが若干検出される。

ⅦC－1住居地……クリが主体で、ホウ、ミズキ、ナラが若干とカヤが少し検出される。

ⅧD－1住居址……ケヤキが多く、ナラが若干とススキが少し見られる。

ⅨC－1住居址……クリが大多数でナラとカヤが若干見られる。

焼失住居址ではないが、ⅥE－1住居址内のピット間に埋込まれていた板材はケヤキである。また、ⅦC－1住居址内から出土した木皿はセンである。曲物の材質は不明である。

以上のことから、縄文時代・平安時代を問わずクリが主たる材料で、それについでナラが利用されている。ミズキは主として垂木材に、ホウ、センは一部に使用されている。草はカヤが多く使用されているが、一部にカヤではないもの（ガマ？）も使用されている。

〔注〕

注1．酒井宗孝「沼久保遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986

注2．沼久保遺跡のⅡF－3住居址はほぼ同期の遺構であるが、埋土上位に十和田a降下火山灰が純層となって堆積している。

注3．石川長喜「五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986

注4．近藤宗光・酒井宗孝「川口Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文化財センター　1985

注5．五庵Ⅰ遺跡（前掲）

注6．栃沢満郎「小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文化財センター　1983

〔6〕考　察

問題の所在　本遺跡から検出された古代の住居址及び住居址状遺構は17棟である。これらの埋土内には十和田a降下火山灰と白頭山火山灰が何らかの形で認められる。その堆積の仕方によって3群に分類することが可能である。

第1群……十和田a降下火山灰のみが堆積する。十和田a降下火山灰は純層では堆積していない。小ブロック状の塊となって黒褐色土又は暗褐色土に混入するタイプと層状となるタイプとがある。後者の場合、十和田a降下火山灰と黒色土や黒褐色土あるいは炭や焼土などが混入しており、堆積状況がブロック状であれ層状であれ第2次堆積と思われる。従ってここではその堆積状況の相違については問題としない。

第2群……十和田a降下火山灰と白頭山火山灰がみられる。十和田a降下火山灰と白頭山火山灰は間層を挟んで層状に堆積する。その層序が逆転している例や混土となる例はない。

第3群……白頭山火山灰のみが堆積する。埋土の中～上位で検出される例はなく、床面～埋土下位に層状に堆積する。第1次堆積である。

以上の観点から住居址及び住居址状遺構を分類すると次のようになる。

第1群……VIIC－1住居址、VIIC－3住居址状遺構、VIIC－2住居址、
VIIC－5住居址状遺構、VIIC－4住居址、VIIIC－3住居址、VIIIC－2住居址、
VIE－2住居址状遺構、　合計8棟

第2群……VID－1住居址、VIID－2住居址、VIID－3住居址、VIID－1住居址　合計4棟

第3群……VIE－1住居址、VIID－1住居址、VIIIC－1住居址、IXC－1住居址、
XC－1住居址、　合計5棟

以上の操作によって得られたグループをもとに、まず、出土遺物を検討してみたい。次に遺構の形態及び占地等を考え、最後にこの両火山灰に係ってその絶対年代の問題に若干言及することとしたい。

出土遺物の検討　当該の遺構が包蔵していた土器は少なく、完形品や器形が分かるまで復元できた遺物は更に少ない。そこで反転し図上で復元した遺物も含め、遺構ごとにまとめたのが第107～109図である。なお、ここでは土器の組成については触れないこととする。なぜなら、VIIC－1住居址のように不意の火災による住居址の場合はその検討は有意義であるが、ほとんどの住居址は意図的に廃棄した後、焼失したと思われるからである。

第1群から第3群まで出土した土器の中心は長胴甕であることは変わりがない。しかし、個々の遺物を子細に検討すると、次のような特徴がみられる。

○第1群住居址内土器の長胴甕にはロクロ成形のものが見られるが、第2～3群には見られない。ただし、口縁部付近の調整にロクロを使用しているものが第2、第3群の中にそれぞれ

1点（50－6、68－5）が含まれているが主体的ではない。

○第1群には球胴甕状に底部に向かって急にすぼまる形を有するもの（21－1、26－1）が含まれるが第2群には53－4の1点のみ、第3群にはみられない。

○第1群土器は頸部が明瞭で口縁部が広く、きちっと外傾するもの（20－1、26－3、29－1）あるいは口縁部が狭くても頸部のくびれが明瞭だったり、口縁部の外反が明瞭なものがほとんどである。

○第2群土器は第1群で見られた広い口縁部はなくなり、口縁部は狭くなるが外反の明瞭なものが大半を占める。

○第3群土器は口縁部が外傾したり外反するものは少く、大半はほぼ直立するか僅かに外反する。したがって、頸部のくびれは非常に緩やかなものとなる。

○器面調整の技法や胎土などに大きな差は見られないが、第3群土器ほど胎土に混入する小石粗砂は多くなる。

○坏は内黒の土師器とあか焼き土器とが共伴する。

以上の土器の特徴は特に長胴甕の口縁部に着目すると、第1群から第3群へと変化していると言える。即ち鍵層になる火山灰の堆積状況によって分類されたものが、土器の様相のえうでもそのまま適用される。よって第1群、第2群、第3群は時期差と把握され、そのまま第1期、第2期、第3期とみることができる。

遺構の形態と占地　前述した第1期～第3期の時期別の遺構配置は第110図である。第1期は尾根の頂部付近北側に、第2期は尾根の頂部付近中央部、第3期は尾根の中腹に占地する一群、下位に位置する住居址（ⅧD－1住居址）と尾根の頂部付近に位置する住居址（ⅥE－1住居址）とに分かれる。遺跡は本調査区の南北に広がることから、第3期のⅧD－1住居址とⅥE－1住居址は南側に1グループを形成する住居址が存在していると思われる。同様に第2期のⅦD－1住居址も南側に同一グループを有している可能性もある。

次に遺構の形態をみると、第1期は平面プランが長方形で小規模な住居址群と方形で中規模の住居址とに分かれる。前者はカマドの設置する方向が北ないし東であるのに対し後者は南向きである。また前者は刳貫き式の煙道部を構築するのに対し、後者は掘り込み式又は煙道部を持たず、カマド本体からすぐに煙出し部が取り付けられる。カマドの位置はⅦC－1住居址のみほぼ中央に設置されるが、他の4棟は南西隅又は南東隅で隅に寄る。柱穴はない。以上のように第1期の住居址はⅦC－1住居址～ⅦC－5住居址状遺構が1～2mという極めて近い距離に建てられ、そのカマド方向も統一性に欠けるなど総じて規則性に欠ける。

第2期は大規模1、中規模2、小規模1の構成で、大規模な住居址のみが横長で他は方形を基調とする。カマドの方向は北～西の間に設置されるが、必ずしも同一方向をとるとは言い難

い。ただし、すべて斜面の上位で壁の中央部に設置されている。煙道部は刳貫き式3、掘り込み式1、本体からすぐに煙出し部へ立ち上がるもの1である。柱穴を有するもの2、無いもの2である。柱穴を有する2棟はともに4本柱で割材を使用しているが、1棟は中央に、他の1棟は1対が壁に寄る。

第3期は中～小規模でやや小型のものが多い。平面プランは方形と長方形があるが、整然とした区形で、所謂台形状に歪むものはない。カマドはすべて北東方向で一致する。カマドの位置は中央部が3棟、隅に寄るもの2棟である。煙道部は刳貫き式3、掘り込み式3である。柱穴が無いもの4、浅い柱穴を有するもの1である。

以上3期の住居址群はそれぞれ3～4棟を単位とし、互いの間隔は15～20mを保っている。特に第3期はカマドの方向に強い規制性が見られる。

第1期の住居址群は尾根の頂部付近で北側に占地する。なお、VIE－2住居址遺構の西側5mから西側一帯は土取り場となって大きく、広く削り取られている。そのためこの付近に住居址があった可能性が残っている。第2期の住居址群は第1期より南側に位置し、第3期は更に南側、あるいは東側へと移っている。また、同時期内では建て替えによる重複や拡張はみられるが、時期を異にして同じ場所に住居を作ることはない。

以上のように、火山灰の堆積状況、土器の様相、遺構の形態と占地はすべて整合性をもって統一的に把握され、これは小さな時期差であると理解される。これを前提とすると、平安時代のピットに見られる火山灰の状況もまた同様に時期差を示めす指標として把握される。この観点からピットを時期区分し、住居址の時期区分配置図に加えたのが第111図である。この図から、径が1m以下の小ピットは住居址の近くに位置するが、大きなピットは住居址から離れた所に位置している。これは第1期～第3期の全期を通じて共通している。

絶対年代の問題　土器などの遺物を通じて絶対年代に迫ろうとする時、それが年号又はそれに匹敵する事柄でも書かれた木簡とか墨書土器でも出土しないかぎり、かなりの幅をもって想定されることは止むを得ないことである。そこで考古学で従来から用いられてきた土器の編年という作業によって積み上げられて来た成果を元に、キーテフラの降下年代を模索し、それを照合した場合どのようなことが言えるであろうか。

はじめに、本遺跡から出土した古代の土器に相当する土器群はどこに位置付けられてきたかをみることにしたい。高田和徳氏は一戸バイパス工事に伴う一連の発掘調査の中から古代の土器の編年に言及した。それによると古代をI～IV期に大別し、I、II期はロクロ未使用の段階、III、IV期はロクロ使用の段階とした。(注1) そして推論の域をでないとしながらも、I期を8C前半II a期8C後半、II b期9C前半、III期9C後半、IV a期10C前半、IV b期10C後半以降とした。そこでIV a期とされた土器は「土師器長胴甕は口縁部が短く屈曲し体部でやや直線的な器

形を呈し、口縁部横ナデ、体部を粗いヘラケズリ調整し胎土に砂を多量に含んでいる。(中略)坏はいずれもロクロ調整され内黒処理、省略の両例あり、体部から底部にかけ再調整するものと無調整のものとある。」とした。ここで述べられた土器の様相は本遺跡から出土した当該土器の2群即ち第2期に相当すると思われる。(注2)

関豊氏は「駒焼場遺跡緊急発掘調査報告書」の中で「馬渕川上流域の古代土器の様相」として I ～VII期にわたる編年を試みた。その中で第VI期とされたものは「1．坏は全てロクロ使用のものとなる。2．甕はA類：単純に外反するロクロ不使用のものと、B類：複雑な口縁部形態のものが共伴する。3．一部の遺跡では須恵器や酸化炎焼成の土器（坏）を共伴するが、その量は多くない。」というものである。これは本遺跡では第1～2期の土器に相当するまた第VII期とされた土器は「1．甕はVI期のB類に相当するものがみられなくなり、A類の系譜をひく、単純な口縁部形態をもち、胴部の中位より下に最大径部がくる「ずんどう」な形となる。2．坏は絶対量に乏しく、殆どみられない遺跡もある。」というもので、本遺跡では第3期に相当する。そして、第VI期の想定年代は10世紀前半、第VII期は10世紀後半～11世紀？とした。(注3)(注4-1)(注4-2)

高橋信雄氏は「岩手の古代集落」において、やはり古代を4期に分類した。そのIV期は「土師器・須恵器ともその生産に衰退がみられ、古代土器の終末期の様相を呈する土器群である。表杉ノ入式の一部と国分寺式C類に相当する土器群で、小笠原好彦氏（1976他）の「あかやき土器」・桑原滋郎氏（1976他）の「須恵系土器」を含むものである。」として、想定年代は大きくいって11世紀頃とした。(注5)(注6)

すなわち本遺跡から出土した当該土器は古代の土器の末葉に編年され、実年代は多少の差はあるものの10世紀～11世紀とされてきている。

	第1期	第2期	第3期
高田	IVa期 10C前半		
関	VI期 10世紀前半		VII期 10世紀後半 11世紀
高橋	IV期 11世紀		

さて、従来、平安期の遺構を覆うとして注目されてきた十和田a降下火山灰はその降下時期について諸説を生み出してきた。

この問題に先鞭をつけたのが草間俊一氏の「堀野遺跡」であったといわれている。その中で氏は同遺跡で確認された古代の住居址は弘仁2年に征討された時の頃のものであろうとし、その埋土の中～上位に層状に堆積する灰白色火山灰（層厚10～20cm）は「貞観11年は西暦869年で、弘仁2年より58年後であり、竪穴の埋没状態を考えると丁度良い時期とも云える。」と述べた。(注7)

中川久夫氏は「北上川流域地質図説明書」の中で、十和田－aの降下時期について次頁の表を掲げた後「十和田－aとごく近いと思われる層準に毛馬内浮石流凝灰岩がある。」とし、同火(注8)(注9)

表2－1　十和田火山完新世火山灰編年表（大池・中川，1979）

編年			火山灰	^{14}C年代・遺跡
B.P. 1,000年	土師器時代		毛馬内浮石流 十和田－a	1280±90（平山ら，1966） くるみ館遺跡－平安中～末期 堀野遺跡－A.D.810（草間，1965） 1180±80（大池ら，1974）
2,000	（弥生）		十和田－b	2200±100（大池ら，1974） 泉山遺跡II層－大狗A'式
3,000	縄文時代	晩期		
		後期		五戸町西張遺跡－十腰内1式 大湯ストンサークル－3680±130（渡辺，1966） 3920±140（松井ら，1969）
4,000		中期	中振浮石	泉山遺跡III層－4440±140（青森県教委，1976） 泉山遺跡III層下部－円筒上層d式 4200±110（八甲田湿原研究グループ，1969） 6550±170（松井ら，1969）
5,000		前期		三戸町境ノ沢遺跡
6,000		早期		類家自然貝層　5280±100（大池ら，1972） 日ヶ久保貝塚　5850±105（大池ら，1972） 類家貝塚，長七谷地貝塚
7,000				三戸町館遺跡
8,000			南部浮石	8600±250（大池ら，1970） 三戸町寺ノ沢遺跡－田戸下層式
9,000			二ノ倉火山灰	三戸町赤坂遺跡
				←？●－階上村角柄折遺跡－無文土器
10,000	先縄文時代	（晩期旧石器時代）		
13,000			八戸浮石流凝灰岩 八戸降下浮石層	12,700±260（大池，1964） 埋没林－13,770±510（大池ら，1977） 長者久保遺跡

山灰によって埋まった胡桃館遺跡から平安時代中〜末期とした。C^{14}年代は1280年である。

高田氏は前掲書の中で十和田a降下火山灰の降下時期を10C代の前半とした。もっともIII期を9C後半とし、IVa期10C前半、IVb期10C後半以降とした後で「十和田a降下火山灰はIII期までは層を形成、IVa期でブロック状堆積、IVb期の比較的保存状態の良好なAG56住の堆積土中に含まれていないことから、その降下時期は10C代の前半と推定」したものである。この「層」「ブロック状」をそれぞれ「一次堆積」「二次堆積」と読みかえられるものとすれば、IVa期の10C前半に降下したものではなく、VIII期の9C後半に降下したと解するべきである。瀬川司男氏は当該火山灰の降下時期を10世紀と考えられるとした。(注10)

松山力氏は「馬場瀬遺跡」で十和田a降下火山灰の降下年代については先に述べた中川氏らの示した編年図を上げただけで直接触れることを避けたが、その折同火山灰よりも新しい火山灰層について触れた。一つは白頭山に由来すると推定される苫小牧火山灰の可能性を指摘すると同時にもう一つの同様な火山灰があることを指摘し、両タイプをまとめて未命名火山灰とした。そして、「2つのタイプの上下関係は、明確ではないが、相互の降下時期はそれほど離れたものではない。十和田a降下火山灰の降下時期とは、遺物・遺構との関係からみて、1世紀程度の開きがあると推定される。」とした。更に同氏は「韮窪遺跡」では未命名火山灰の一つは苫小牧火山灰であるとしたうえで「近年になって、十和田a降下火山灰層より数10〜200年後の間の降下と考えられる苫小牧火山灰層ともう一つの降下火山灰層の存在が」と述べた。(注12)そして、十和田a降下火山灰の降下時期を10世紀頃とした。(注13)

以上のように主として考古学の側から同火山灰の降下時期を10世紀とすると見解が主流を占めてきた。そこに鈴木恵治氏が文献上から同火山灰の降下時期を推定した。鈴木氏は「(扶桑略記・延喜15年(915)7月13日条)出羽国、灰ふること二寸、諸郷の農桑枯損の由を言上す。」との記事から、この灰は十和田a降下火山灰と考えられるとした。この鈴木説を肯定すると、石鎚が降ったことを再三記した「三代実録」に降灰の件が記されていないことは理解できる。(注14)なぜなら、降灰が915年であるのに対し「三代実録」の完成は901年だからである。しかし、915年と記された降灰が十和田起源とする積極的根拠は薄い。鈴木氏が同説を展開するに当り、同降灰が鳥海山起源ではないことについて詳しく述べた。そして、鳥海山でなければ十和田山以外には考えられないとしたものである。この前提は噴出源を東北地方に限定した場合に了解されるものである。しかし、仮に915年の降灰は白頭山に由来するものであったとしたらどうなるのであろうか。当時、成層圏まで噴き上げるほどの大爆発が起ったとすれば朝鮮の正史である「三国史」に何らかの形で触れられると思うがそのような記事はない。

神徳王4年(915)夏6月、槃浦(ばんほ)(慶北迎日郡義昌面)の海水と東海(日本海)の海水とがぶつかりあって、浪の高さが、20丈ばかりになった。〔このような状態が、〕3日つづいて終っ

た。
(注16)
この記事は津波の発生を伝えたと思われる。場所は迎日郡である。白頭山は現在の中国と国境を接する山で朝鮮半島の基部にある。津波発生を伝える迎日郡は朝鮮半島の端部に近い。とても白頭山の異状を伝える記事とはいえない。むしろこの記事は日本海をわたって津波が押し寄せてきたと理解するのが妥当である。とすれば震源は日本海か若しくはその対岸の日本に求められるべきである。かくて、鈴木説は「三国史記」によって補強されることになる。

さて、十和田a降下火山灰は915年に降下したとすると、本遺跡で検出された古代の住居址群は次のような位置付けとなる。本遺跡内では最も古い時期の第1期は915年以降である。最も新しい第III期は松山氏の説に従うと、915年より200年後の1115年頃よりは下がらない。しかも、第I～II期の十和田a降下火山灰は再堆積でその量も少なく、第III期の白頭山火山灰は床面を覆うことから、白頭山火山灰の降下時期及びそれに近い時期と推測される。即ち10世紀後半から11世紀又は12世紀初頭が考えられる。白頭山火山灰の正確な降下時期を設定できない現在ではこれ以上絶対年代に言及することができないが、ここでは概ね11世紀としておきたい。

〔6〕注記

1．高田和徳　他　「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　I」　一戸町文化財愛護協会　1981

2．高田　前掲書　p.369

3．関豊　「駒焼場遺跡緊急発掘調査報告書」　二戸市教育委員会　1983

4－1～2．関　前掲書　p.30

5．高橋信雄　「岩手の古代集落」　『日高見国』菊池啓治郎学兄還暦記念会　所収　1985

6．高橋　前掲書　p.250

7．草間俊一　「堀野遺跡」　福岡町教育委員会　1965

8．草間　前掲書　p.38

9．中川久夫　「第四系」　『北上川流域地質図説明書』　p.290　長谷地質調査事務所　所収　1981

10．高田　前掲書　p.371

11．瀬川司男　「縄文期以降の火山灰と遺跡」　『どるめん』No.19　ＪＩＣＣ出版局　1978

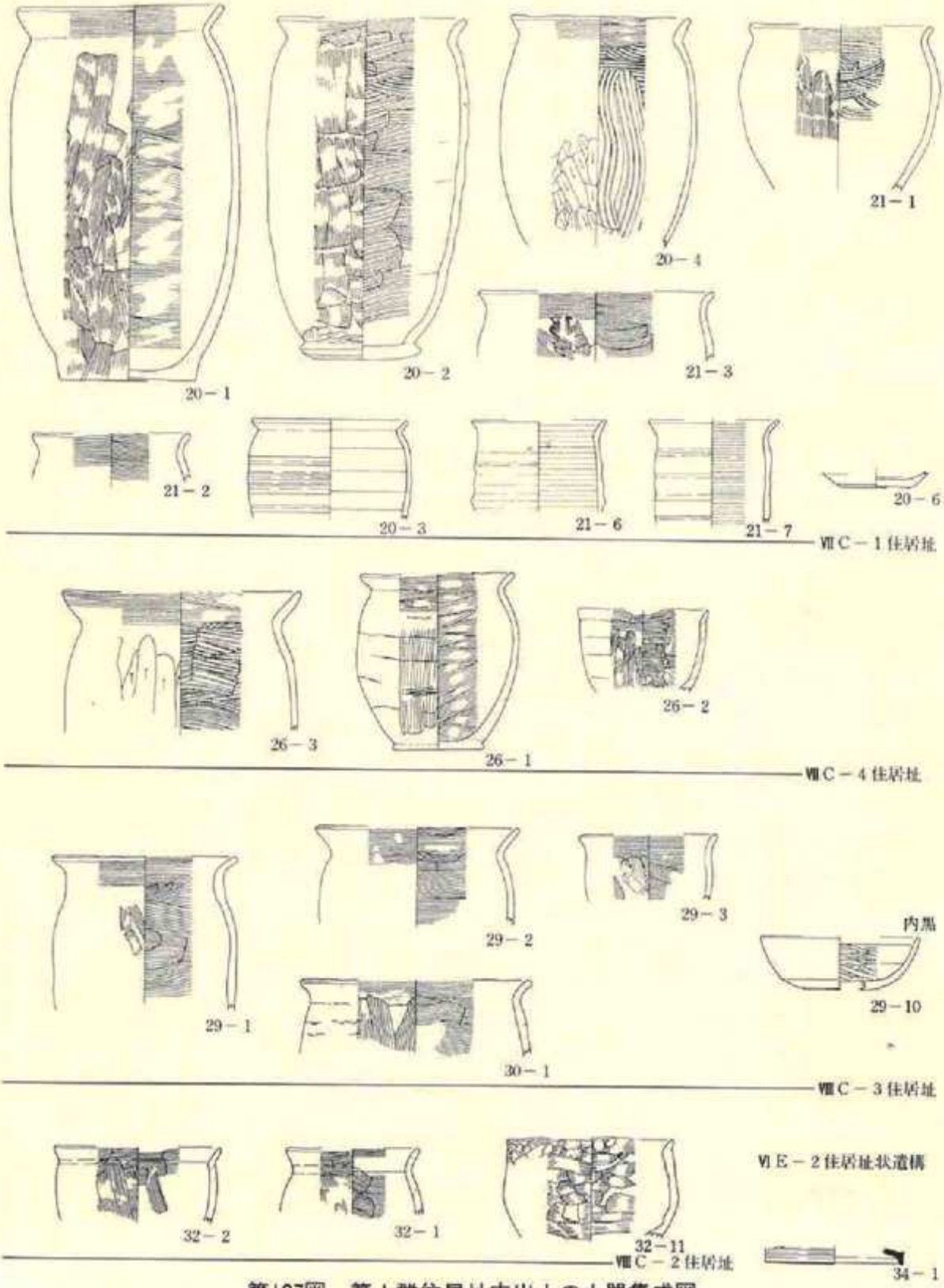
12．松山力　他　「馬場瀬遺跡」　p.12　青森県教育委員会　1981

13．松山力　他　「韮窪遺跡」　p.12　青森県教育委員会　1983

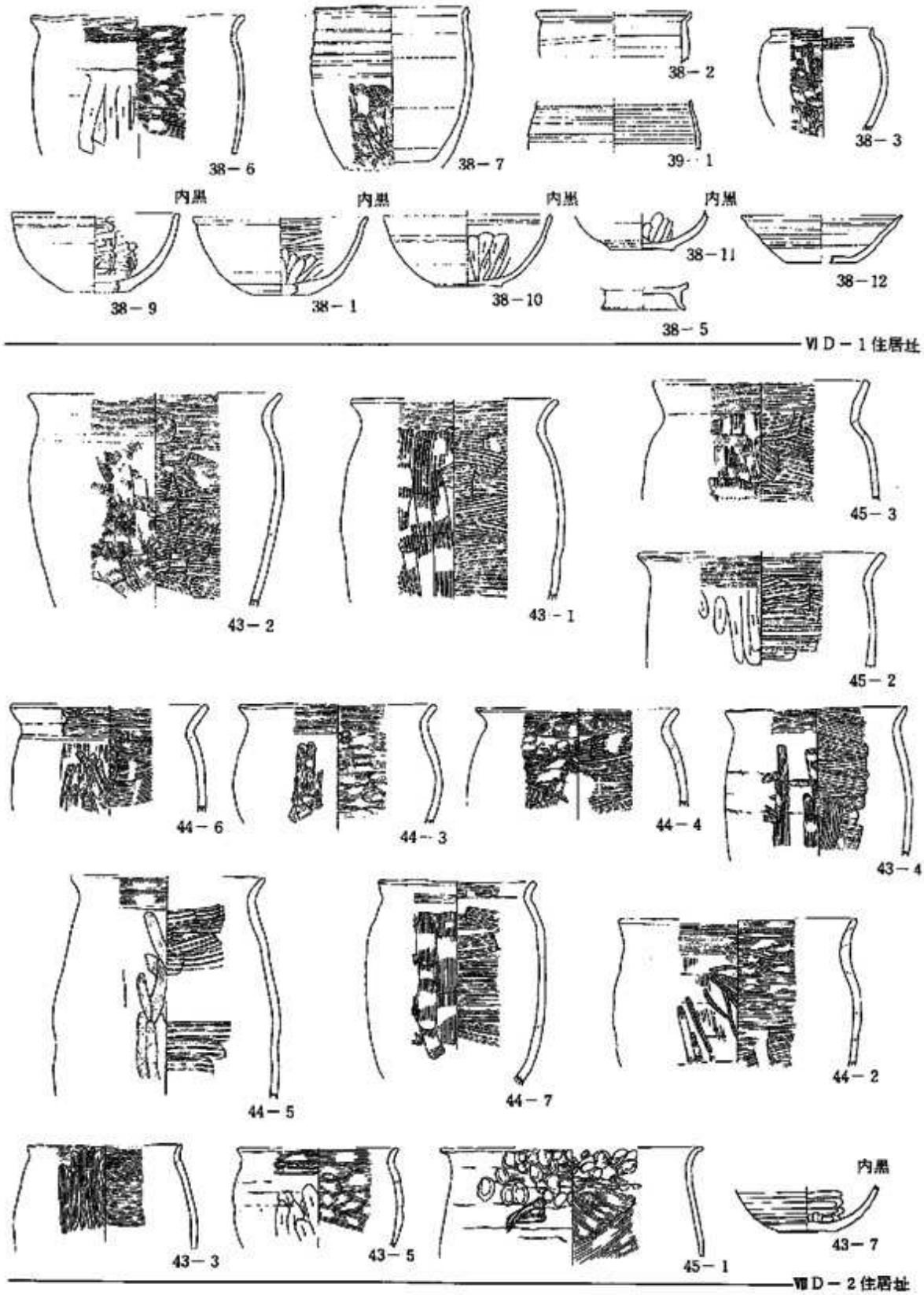
14．鈴木恵治　「文献史料から見た古代奥羽での天災」　『考古風土記』第7号　所収　1982

15．「三代実録」には元慶8年（884）、仁和元年（885）、仁和2年に出羽国で石鏃が降ったという記事が見られる。

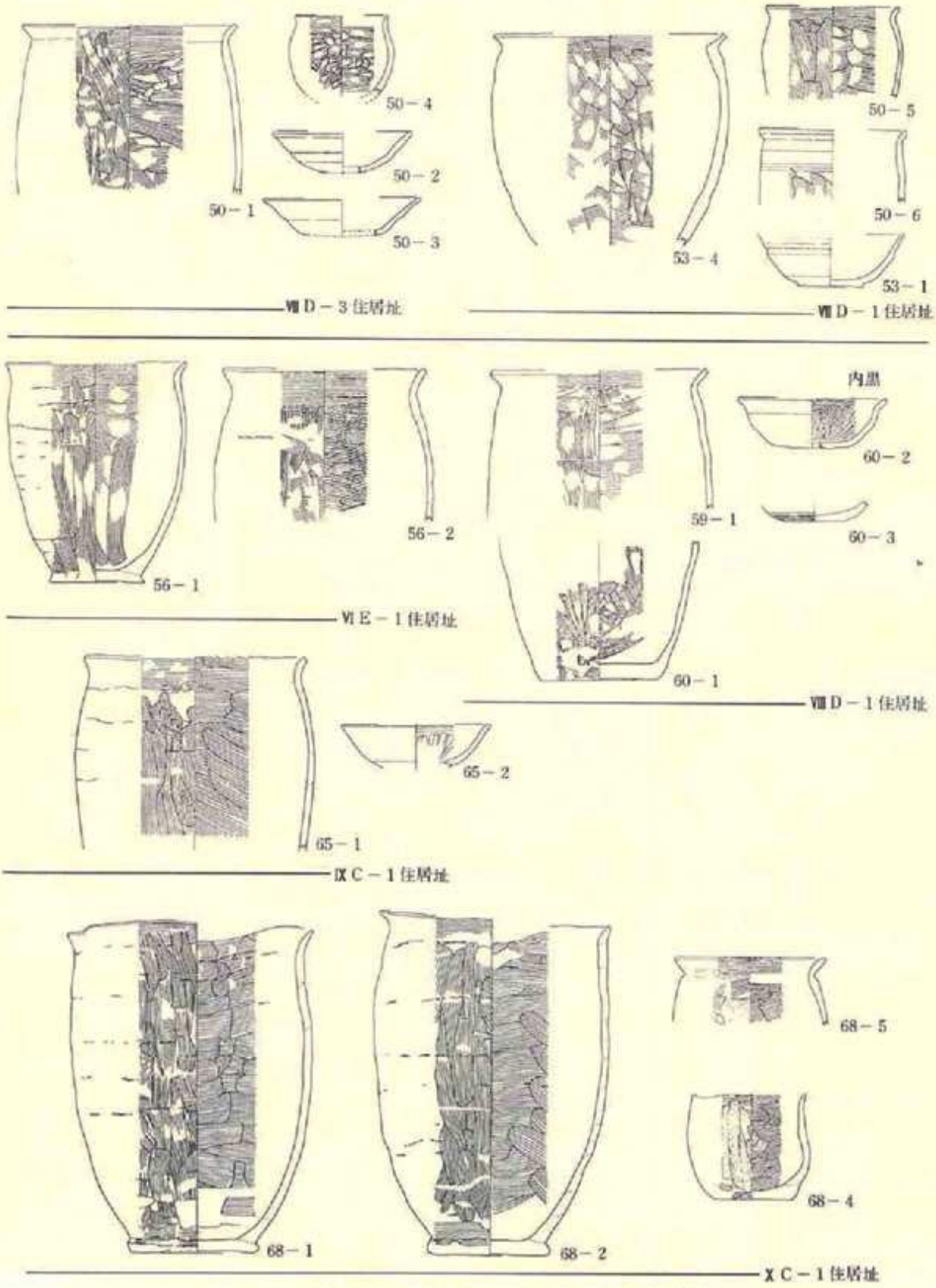
16．金富軾　「三国史記I」　p.394　平凡社　1985



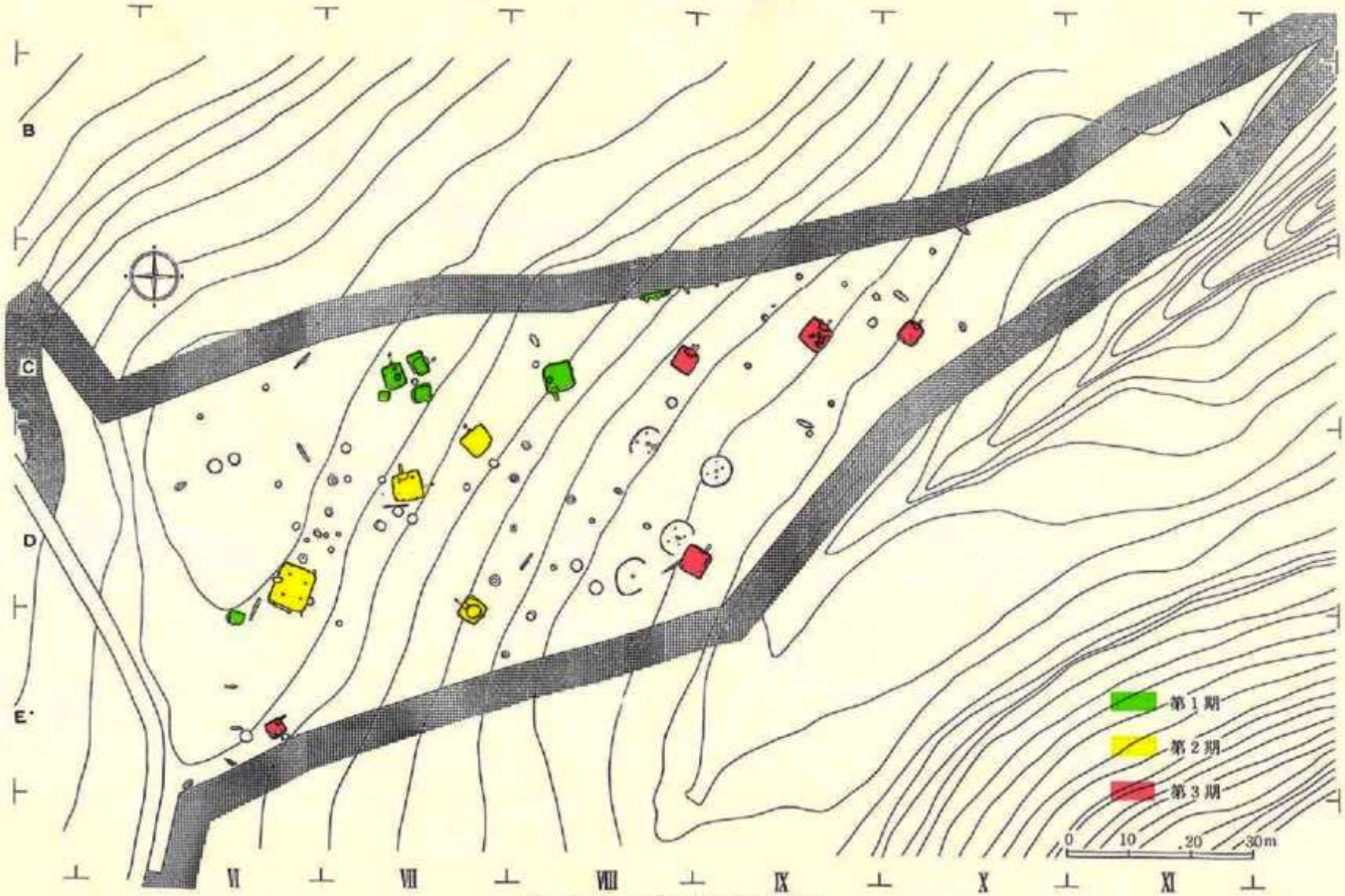
第107図　第Ⅰ群住居址内出土の土器集成図



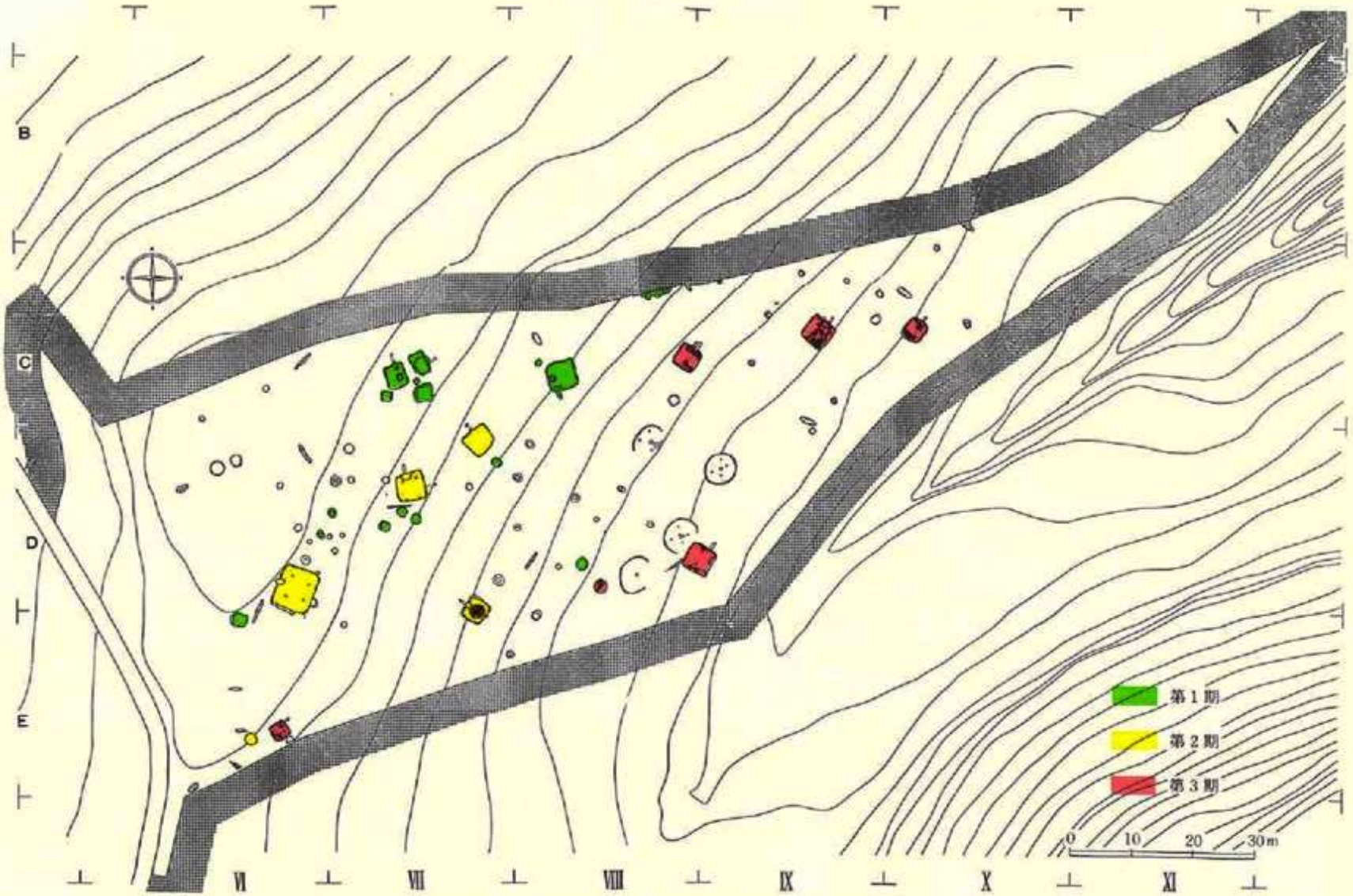
第108図　第2群住居址内出土の土器集成図



第109図　第２～３群住居址内出土の土器集成図



第110図　時期別遺構配置図



第111図　住居址・ピット時期別遺構配置図

第7表 土器観察表

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量 口径	法量 底径	法量 高さ	粘土	色調	成形技法	調整技法 外面	調整技法 内面	特徴 器形	特徴 文様体等	付着物	時期	写真図版
8－1	壺又は甕	雛D－2住	床	(16.0) cm	cm	cm	緻密	暗褐色				広口、体中央で張さむ	磨消、羽状、刻み目帯		後期中葉	42
8－2	壺又は鉢	〃	〃		4.5		〃	〃				上げ底	単節	内一部	〃	〃
8－3		〃	〃				良	〃					磨消、刻み目帯	残澤	後期中葉	〃
8－4		〃	〃				〃	〃					〃	〃	〃	〃
8－5		〃	〃				〃	〃					〃	〃	〃	〃
11－1		雛D－3住	〃				〃	〃				口縁部一肥厚	羽状	〃	後期	〃
11－2	深鉢	〃	〃		8.5		〃	〃				平底	無文	〃	〃	〃
11－3	〃	〃	〃		8.0		〃(砂)	〃				上げ底	〃	〃	〃	〃
11－4	鉢	〃	ピット	8.0	2.0	4.7	〃	褐色				上げ底　定形	〃	内一部(少)	〃	〃
11－5		〃	〃				〃	明褐色					沈線文		〃	〃
11－6		〃	埋土				〃	暗褐色				平縁一大きく外反	磨消、羽状	残澤	後期中葉	〃
11－7		〃	〃				緻密	〃				平縁	帯縄文		〃	〃
11－8		〃	〃				〃	〃				山形突起、口縁部一肥厚	帯縄文、羽状、磨消	残澤	〃	〃
11－9		〃	〃				〃	〃				平縁	帯縄文、磨消		〃	〃
11－10		〃	〃				〃	〃				山形突起	帯縄文、羽状、磨消		〃	〃
11－11		〃	〃				〃	黒褐色				>同一個体	磨消、刻み目帯、羽状	残澤	〃	〃
11－12		〃	〃				〃	〃					磨消、刻み目帯、羽状	〃	〃	〃
11－13	深鉢	〃	〃				良	明褐色					羽状	〃		〃
11－14		〃	〃				緻密	暗褐色					磨消、羽状	〃	後期中葉	〃
11－15	鉢	〃	〃		4.0		〃	〃				>同一個体		〃		〃
11－16	〃	〃	〃		5.0		良	褐色				平底	単節(LR)、沈線			〃
16－1	〃	雛D－1住	覆土下	9.7			緻密	〃				平縁	沈線文、磨消、羽状		後期中葉	44
16－2		〃	〃				〃	黒褐色				>同一個体	磨消、羽状		〃	〃
16－3		〃	〃				〃	〃					〃		〃	〃
16－4		〃	〃				良	〃					磨消、羽状、刻み目帯		〃	〃
16－5		〃	〃				良(小石)	黄灰色					羽状	残澤		〃
16－6		〃	〃				良(砂)	黒褐色				平縁	無文	煤		〃
16－7		〃	埋土				〃	〃					羽状	残澤		〃
16－8		〃	〃				〃	赤褐色					磨消、羽状			〃
16－9		〃	〃				緻密	黒褐色				平縁	刻み目帯	アスファルト	後期中葉	〃
16－10		〃	〃				〃	〃				>同一個体	刻み目帯、瘤付	アスファルト	〃	〃
16－11	壺	〃	〃	12.7			良(小石)	褐色					磨消、羽状、沈線、刻み目	残澤	〃	〃
16－12		〃	〃				良	赤褐色				平縁　8と同一個体	磨消、刻み目	〃	〃	〃
16－13	結縄車	〃	〃	4.5			〃	褐色				5mの穴孔	羽状	〃		〃
17－1		雛D－4住	床				良(極砂)	明褐色				>同一	瘤付、刻み目帯	アスファルト	後期中葉	7
17－2		〃	〃				〃	〃					磨消、刻み目帯、羽状	煤	〃	〃
17－3	壺(?)	〃	〃				〃	〃				2と同一(?)	磨消、羽状	〃	〃	〃
17－4		〃	〃				〃	〃					刻み目帯	〃	〃	〃
20－1	長胴甕	雛C－1住	カマド	18.5	12.6	34.0	良	褐色		口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	口…くの字に外傾 胴…上開き 口…短かくくの字に外傾 胴…平底			平安後期	45
20－2	〃	〃	〃	17.2	11.2	31.3	良(粗砂)	〃	輪積又は巻き上げ	〃	〃				〃	〃
20－3	甕	〃	〃	14.2			良	明赤褐色	ロクロ	無調整	無調整	ロ…短かく直立(ロクロ)			〃	〃
20－4	長胴甕	〃	〃	16.8			〃	褐色		口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	ロ…短かくくの字に外傾			〃	〃
20－5	〃	〃	〃		11.2		〃	〃		体…ヘラナデ	体…ナデ	砂底			〃	〃
20－6	坏	〃	〃			6.2	〃	赤褐色	ロクロ水挽	無調整	無調整	静止糸切り　土師?			〃	〃
21－1	長胴甕	〃	埋土	16.8			可(粗砂)	〃		口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	口…短かくくの字に外反 体…胴部にかけ急にすぼむ		煤(多)	〃	〃
21－2	〃	〃	〃	(14.5)			〃	褐色		口…ナデ 体…刷毛	〃	ロ…短かくくの字に外反			〃	46
21－3	〃	〃	〃	(21.3)			〃	〃		口…ヘラナデ 体…ヘラナデ	〃	〃				〃
21－4	〃	〃	〃				良(小石)	〃		〃	〃	ロ…長く外傾		炭化物	平安後期	〃
21－5	〃	〃	〃				良	〃		〃	〃	ロ…短くくの字に外傾		残澤	〃	〃
21－6	小壺	〃	〃	(12.5)			〃	暗赤褐色	ロクロ	無調整	無調整	ロ…短く開く外反	補修孔(0.4cm)	〃	〃	〃

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量			胎土	色調	成形技法	調整技法		特徴		付着物	時期	写真図版
				口径	底	高さ				外面	内面	器形	文様体等			
21－7	小 壺	ⅦC－1住	埋 土	(12.0)			可(粗砂)	明褐色	ロクロ	無調整	無調整	口…緩く外反			平安後葉	46
21－8	壺	〃	〃		(10.0)		〃	褐 色		剥 落		平 底			〃	〃
21－9	〃	〃	〃		(11.0)		〃	〃		体…ヘラケズリ		〃			〃	〃
21－10	〃	〃	〃				緻 密	明赤褐色		ナ デ		〃	非常に硬い		〃	〃
21－11	鉢	〃(ピット)	〃				良	褐 色					単節（L R）		縄文前期	〃
26－1	壺	ⅦC－4住	床	(14.4)	8.5	16.2	〃	黒褐色	輪積又は巻き上げ	口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	口…小さく短く外反 体…底部にかけ急にすぼむ	底部…本葉痕	炭化物	平安後葉	47
26－2	小 鉢	〃	〃	(12.0)			緻 密	明赤褐色	〃	〃	ヘラケズリ後ナデ	口…薄く直立	非常に硬い		〃	〃
26－3	長胴壺	〃	埋 土	(22.0)			良	褐 色		〃	ナ デ	口…長く大きく外傾			〃	〃
26－4	〃	〃	〃		9.6		〃	〃		ヘラケズリ	ヘラケズリ(?)	平 底				〃
26－5	鉢	〃	〃				良(繊維)	〃				口…直立	口縁部に粗い刻み目、綾杉文		縄文前期	〃
29－1	長胴壺	ⅦC－3住	床	(17.0)			可(粗砂)	〃		口…ナデ	ナ デ	口…短かくくの字に外反			平安後葉	48
29－2	〃	〃	〃	(19.0)			良	〃		〃	〃	口…やや長くくの字に外傾		炭化物	〃	〃
29－3	鉢	〃	〃	(12.8)			〃(砂)	明赤褐色		〃	〃	口…緩く僅かに外反			〃	〃
29－4	長胴壺	〃	〃				〃(小石)	褐 色		〃	〃	口…長くくの字に外傾		残 渣	〃	〃
29－5	〃	〃	〃				〃	明褐色		口…ナデ 体…ヘラナデ	ヘラナデ	口…短かく大きく外傾	非常に硬い		〃	〃
29－6	〃	〃	〃				〃	〃	輪積又は巻き上げ	〃	ナ デ	口…短かく僅かに外反			〃	〃
29－7	〃	〃	〃		10.6		〃(粗砂)	褐 色			ヘナナデ		砂 底			〃
29－8	〃	〃	〃		9.0		〃(粗砂)	〃			ナ デ		〃			〃
29－9	壺	〃	〃				〃	青灰色	ロクロ	ヘラナデ	無調整		綾杉(自然)、須恵器		平安後葉	〃
29－10	坏	〃	P_2	(14.6)	(6.2)	4.7	緻 密	褐 色	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	底…再調整	内 黒		〃	〃
30－1	長胴壺	〃	カマド	(21.2)			良(粗砂)	〃	輪積又は巻き上げ	口…ナデ 体…ヘラナデ	ヘラナデ	口…短かくくの字に外反			〃	〃
30－2	壺	〃	〃		(7.2)		可(砂)	〃					底…本葉痕			〃
30－3	〃	〃	〃		6.3		良	灰褐色				底…上げ底				〃
30－4	〃	〃	埋				〃(砂)	赤褐色		口…ナデ		口…短かく僅かに外反				〃
30－5	甕又は鉢	〃	〃				〃(砂)	褐 色	手捏ね	ヘラナデ	ヘラナデ	口…短かく内側が削がれ直立する				〃
30－6	壺	〃	〃				良	赤褐色	ロクロ	無調整	無調整	口…短かく水平に外傾し立ちあがる	非常に硬い		平安後葉	〃
30－7	鉢	〃	〃	(12.7)	(3.4)	7.7	良(繊維)	暗褐色				口…平縁 底…きわめて小さい	無 節	残 渣	縄文前期	〃
32－1	壺	ⅦC－2住	床	(12.0)			可(粗砂)	橙 色		口…ナデ	ナ デ	口…短かく外傾			平安後葉	49
32－2	鉢	〃	〃	(15.2)			良(小石)	灰褐色	ロクロ(?)	口…ロクロ痕 体…ヘラナデ	〃	口…非常に短かく、内側に削がれ、立ちあがる僅かに外傾		残 渣	〃	〃
32－3	〃	〃	〃				〃(粗砂)	にぶい褐色		口…ナデ 体…ヘラナデ	〃	口…内面が削がれ、口縁直立			〃	〃
32－4	長胴壺	〃	〃		(12.0)		〃(粗砂)	橙 色		体…ヘラケズリ	〃		底…本葉痕		〃	〃
32－5	〃 (?)	〃	P_1				〃	灰褐色		口…ナデ 体…ヘラナデ	〃	口…非常に短かく、内側に削がれ、ほぼ直立		残 渣	〃	〃
32－6	〃	〃	カマド		8.2		〃(粗砂)	淡い橙色		体…ヘラナデ	〃		底…本葉痕		〃	〃
32－7	〃	〃	〃		13.3		〃(粗砂)	橙 色		〃	〃		底…砂底		〃	〃
32－8	〃	〃	〃		11.1		〃	黒褐色		〃	ヘラナデ	底…平底		残 渣	〃	〃
32－9	〃	〃	〃		11.4		〃(粗砂)	〃		〃	ナ デ	〃			〃	〃
32－10	〃	〃	〃		(12.0)		〃(粗砂)	明褐灰色			ヘラナデ		底…砂底		〃	〃
32－11	壺	〃	埋 土	(15.4)		(10.0)	〃(粗砂)	橙 色		ヘラナデ	ナ デ	口…内側に削がれ直立	口…指頭圧痕		〃	〃
32－12	〃 (?)	〃	〃				〃	〃		口…ナデ 体…ヘラナデ	〃	口…短かく緩く外反			〃	〃
32－13	坏	〃	〃				〃	明褐色	ロクロ	無調整	無調整		あか焼き		〃	〃
32－14	〃	〃	〃				〃	〃	〃	〃	〃				〃	〃
34－1	蓋	ⅦE－2住床	床	(12.8)			〃	青灰色	〃	〃	〃		有段、須恵器		〃	50
34－2	長胴壺	〃	埋 土				〃	褐 色	輪積又は巻き上げ	口…ナデ 体…ヘラナデ	ナ デ	口…短かく外傾			〃	〃
38－1	坏	ⅦD－1住	床	(16.2)		7.2	〃	暗褐色	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	口…やや外反 底…再調整	内 黒		〃	〃
38－2	鉢	〃	〃	(14.5)			〃	にぶい赤褐色	〃	〃	無調整	口…外側に膨らみ直立薄い			〃	〃
38－3	球胴壺	〃	〃	(9.5)			〃(粗砂)	黒褐色		口…ロクロナデ 体…ヘラナデ	ロ…ロクロナデ	口…薄く直立			〃	〃
38－4	長胴壺	〃	〃		9.5		〃	橙 色		体…ヘラケズリ	ナ デ	底…平底			〃	〃
38－5	台付坏	〃	〃		7.8		〃	〃	ロクロ	無調整	無調整				〃	〃
38－6	長胴壺	〃	カマド	(20.0)			〃(粗砂)	にぶい橙色	輪積又は巻き上げ	口…ナデ 体…ヘラナデ	ナ デ	口…短かく緩く外反			〃	〃
38－7	〃	〃	〃	14.2	8.7	15.2	〃	〃		口…ロクロナデ 体…ヘラナデ	ロクロナデ	口…短かく直立 底…平底		炭化物	〃	〃

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量 口径	法量 底	法量 高さ	胎土	色調	成形技法	調整技法 外面	調整技法 内面	特徴 器形	特徴 文様体等	付着物	時期	写真図版
38－8	長胴甕	ⅥD－1住	カマド		(11.0)		良(粗砂)	にぶい橙色		体…ヘラナデ 底…ナデ		底…平底			平安後葉	50
38－9	坏	〃	〃	(15.5)	(5.8)	7.2	緻密	暗褐色	ロクロ 糸切り	無調整	ヘラミガキ	底…無調整	内黒		〃	〃
38－10	〃	〃	〃	15.5	6.2	6.5	〃	〃	〃	〃	〃	底…回転糸切り、無調整	〃		〃	〃
38－11	〃	〃	〃		6.0		〃	明赤褐色	〃	〃	〃	〃	黒色処理が剥落したもの		〃	〃
38－12	〃	〃	〃	(15.0)	(6.6)	4.3	良(砂)	灰白色	〃	〃	無調整	体…直線的に外傾	あか焼き土器		〃	〃
38－13	鉢(?)	〃	ピット				良	褐色		ヘラケズリ		底…上げ底			〃	〃
39－1	〃	〃	壁土				〃	明褐色	ロクロ	無調整	無調整	薄い			〃	〃
39－2	〃	〃	貼床内				〃	灰白色				〃	沈線文、補修孔		弥生	51
39－3	〃	〃	〃				〃	〃				〃	〃		〃	〃
39－4	〃	〃	〃				〃	〃				同一個体	〃		〃	〃
39－5	〃	〃	〃				〃	〃				〃	〃 縄文、撚糸文		〃	〃
39－6	〃	〃	〃				〃	〃				〃 〃			〃	〃
39－7	〃	〃	〃				〃	〃					撚糸文		〃	〃
39－8		〃	〃				〃	黒褐色				同一個体	原体圧痕文、撚糸文		〃	〃
39－9		〃	〃				〃	〃					〃 〃		〃	〃
39－10		〃	〃				〃	〃					沈線文 〃		〃	〃
39－11	甕	〃	壁土				〃	〃				口…小さく直角に外傾	無文			〃
39－12	鉢	〃	〃				可(繊維)	暗褐色				口…平縁	付加条文		縄文前期	〃
39－13	〃	〃	〃				良	〃					S字状連続沈線文		〃	〃
43－1	長胴甕	ⅥD－2住	床	(19.0)			良(粗砂)	橙色	輪積又は巻き上げ	口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	口…やや長く開く外反、口縁部は角ばる			平安後葉	52
43－2	〃	〃	〃	(23.5)			〃(粗砂)	灰褐色		〃	〃	〃		覆土	〃	〃
43－3	〃	〃	〃	(14.0)			良	〃		〃	〃	口…短くほぼ直立		〃	〃	〃
43－4	〃	〃	〃	(16.8)			可(粗砂多)	橙色		〃	〃	口…短く緩く外反			〃	〃
43－5	〃	〃	〃	(15.0)			良	灰褐色	輪積又は巻き上げ	〃	〃	〃		覆土	〃	〃
43－6	〃	〃	〃		11.8		〃	黒褐色		〃	〃		砂底		〃	〃
43－7	坏	〃	〃		5.8		〃	褐色	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	底…回転糸切り無調整	内黒		〃	〃
43－8	甕	〃	〃				〃	青灰色		平行叩き目	放射状当て具痕		頸部節		〃	〃
44－1	長胴甕	〃	カマド	15.1			良(粗砂)	橙色		口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	口…短く外反			〃	〃
44－2	〃	〃	〃	(22.0)			〃	〃	輪積又は巻き上げ	〃	〃	口…短く緩く外反			〃	〃
44－3	〃	〃	〃	(18.4)			〃(粗砂)	にぶい橙色		〃	〃	〃			〃	53
44－4	〃	〃	〃	(18.8)			〃(粗砂)	橙色		〃	〃	口…短くくの字に外反 口縁部は高ばる			〃	〃
44－5	〃	〃	〃	(17.8)			〃(粗砂)	〃		〃	〃	口…短く外反			〃	〃
44－6	〃	〃	〃	(18.4)			良	淡い橙色		〃	〃	口…やや長く外反 口縁部は高ばる			〃	〃
45－1	〃	〃	〃	(24.4)			良(粗砂)	明赤褐色	輪積又は巻き上げ	無調整	〃	口…緩く外反 口縁部はまくれる	口…指頭圧痕		〃	〃
45－2	〃	〃	〃	(23.0)			〃(粗砂)	淡い橙色		口…ナデ 体…ヘラナデ	〃	口…長く緩く外反		炭化物	〃	〃
45－3	〃	〃	〃	(20.2)			良	〃		〃	〃	〃			〃	〃
45－4	〃	〃	〃		11.9		〃	灰褐色		〃	〃		砂底		〃	〃
45－5	〃	〃	〃		(16.6)		〃	〃		〃	〃		〃		〃	〃
45－6	〃	〃	〃		(12.0)		〃	にぶい橙色					〃 非常に硬い		〃	〃
45－7	〃	〃	〃		(7.6)		〃	赤褐色		ヘラナデ	ヘナナデ	平底			〃	〃
50－1	長胴甕	ⅥD－3住	カマド	(20.0)			〃	橙色		口…ナデ 体…ヘラナデ	ナデ	口…短くくの字に外反			〃	56
50－2	坏	〃	〃	(13.0)	(4.2)	3.8	可(粗砂)	灰白色	ロクロ	無調整	無調整	外傾する	あか焼き土器		〃	〃
50－3	〃	〃	〃	(14.6)	(7.0)	3.5	〃(粗砂)	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃
50－4	鉢	〃	壁土	(8.6)			緻密	明赤褐色		ヘラナデ	ナデ	口…内側が削がれ直立する	モミ痕		〃	〃
50－5	〃	〃	〃				〃	暗褐色				山形口縁	櫛描、羽状		縄文後期	〃
53－1	坏	ⅥD－1住	床	(13.4)	(6.0)	4.9	良(小石)	黄褐色	ロクロ	無調整	無調整	底…回転糸切り無調整	あか焼き土器		平安後葉	56
53－2	甕	〃	〃		11.3		良	にぶい橙色					砂底		〃	〃
53－3	〃	〃	〃				〃	青灰色		平行叩き目	放射状当て具痕		頸部節		平安後葉	〃
53－4	長胴甕	〃	カマド	(21.0)			可(砂小石)	暗色		口…ナデ 体…ヘラナデ	口…ナデ 体…ヘラナデ	口…短く大きく外反			〃	〃
53－5	〃	〃	〃	(12.1)			良(砂小石)	明赤褐色		〃	〃	口…短く僅かに外反			〃	〃

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量 口径	法量 底	法量 高さ	胎土	色調	成形技法	調整技法 外面	調整技法 内面	特徴 器形	特徴 文様体等	付着物	時期	写真図版
53－6	甕	Ⅷ D－1住	カマド	(13.4)			良	橙色	上部…ロクロ	上部…ロクロ 小部…ヘラナデ		ロ…短く直立する			平安後葉	56
53－7	〃	〃	〃				〃	淡橙色		ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ヘラナデ	ロ…大きく外反			〃	〃
53－8	〃	〃	〃				〃	にぶい橙色	輪積又は巻き上げ	〃	〃	ロ…短く大きく外反			〃	〃
53－9	〃	〃	〃				〃	淡橙色	〃	〃	〃	ロ…短く外反			〃	〃
53－10	〃	〃	〃				〃	黒褐色		〃	ナデ	ロ…短く、ほぼ直立			〃	〃
53－11	〃	〃	〃				緻密	橙色	ロクロ	〃	〃	ロ…短く、大きく外反		炭化物	〃	〃
53－12	〃	〃	〃				良	灰橙色	ロクロ？	無調整	無調整	ロ…短く直立			〃	〃
54－1	〃	〃	〃				〃	淡橙色		ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…短く直角に外傾			〃	〃
54－2	〃	〃	埋土				〃	〃	ロクロ	無調整	無調整	ロ…まくれて直角に外傾			〃	〃
54－3	〃	〃	〃				〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃
54－4	坏	〃	〃				〃	黒色	〃	ヘラミガキ	ヘラミガキ		内外面黒色処理		〃	〃
54－5	鉢	〃	〃	(4.6)			〃	黒褐色	手づくね	ロ…つまみ 体…ナデ	ナデ	ロ…短く直角に外反	ミニチュア			〃
54－6	〃	〃	〃		4.2		〃	淡橙色					〃			〃
54－7	〃	〃	〃				〃	〃				ロ…肥厚、平縁	羽状、補修孔（6mm）		縄文後期	〃
54－8	〃	〃	〃				〃	明褐灰色				〃	磨消、羽状		〃	〃
54－9	〃	〃	〃				〃	〃					沈線、刻み目		〃	〃
54－10	〃	〃	〃				〃	淡橙色					網目状撚糸文		〃	〃
56－1	長胴甕	Ⅷ E－1住	カマド	(16.5)	8.9	20.2	良(砂・小石)	黄褐色	輪積又は巻き上げ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…短かく続く外反、平縁		炭	平安後葉	57
56－2	〃	〃	〃	(18.6)			〃	黄褐色	〃	〃	〃	ロ…続く外反			〃	〃
56－3	〃	〃	埋土		10.7		〃	黒色		〃	指ナデ	平縁	格子目状沈線文		〃	〃
59－1	〃	Ⅷ D－1住	カマド	(19.6)			〃	にぶい黄橙色		ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…短く「の字に外反		炭	〃	〃
59－2	甕	〃	〃				〃	赤褐色		〃	〃	〃			〃	〃
59－3	〃	〃	〃				〃	〃		〃	〃	〃		残澤	〃	〃
59－4	長胴甕	〃	〃				〃	〃		〃	〃	ロ…内側が残ぎようにほぼ直立			〃	〃
59－5	〃	〃	〃				〃	にぶい褐色		〃	〃	ロ…ほぼ直立ロ…		残澤	〃	〃
59－6	甕	〃	〃				良(粗砂)	にぶい褐色		〃	ナデ	ロ…内側が開かれほぼ直立		〃	〃	〃
59－7	長胴甕	〃	〃				〃(粗砂)	にぶい橙色		〃	ヘラナデ			炭	〃	〃
59－8	〃	〃	〃		10.3		可(砂・小石)	黒褐色		ナデ	ナデ	平底			〃	〃
59－9	甕	〃	ピット		8.6		良(粗砂)	橙色		ヘラナデ	〃		底…木葉痕		〃	〃
60－1	長胴甕	〃	カマド		10.7		可(砂・小石)	黒褐色		〃	ヘラナデ	59－1と同一？	〃		〃	58
60－2	坏	〃	床	(13.8)	4.0	(4.6)	良	淡橙色	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	ロ…やや外反	内黒		〃	〃
60－3	〃	〃	カマド		5.4		良(砂)	〃	〃	〃	無調整	底…回転糸切り無調整 底…回転糸切り無調整	あか焼き土器	炭	〃	〃
60－4	鉢？	〃	埋土				良	〃					磨消、羽状		縄文後期	〃
62－1	長胴甕	Ⅷ C－1住	〃				良(砂・小石)	赤褐色		ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…短く外反			平安後葉	〃
62－2	〃	〃	〃				良(粗砂)	黄褐色	輪積又は巻き上げ	〃	〃	ロ…内側が開かれ急かに外反			〃	〃
62－3	〃	〃	〃				〃(粗砂)	〃		〃	〃	ロ…肥厚、直立			〃	〃
62－4	壺	〃	〃		(4.4)		良	〃				底…無紋に4穴	底…縄文		弥生	〃
65－1	長胴甕	Ⅸ C－1住	床	(21.5)			〃	橙色	巻き上げ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ヘラナデ	ロ…ほぼ直立		残澤	平安後葉	〃
65－2	鉢	カマド	(14.0)				〃	〃	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	底…欠損	内黒		〃	〃
68－1	長胴甕	Ⅹ C－1住	〃	21.5	11.0	31.0	良(小石)	にぶい橙色	輪積又は巻き上げ	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ヘラナデ	ロ…全体が歪む、短く僅かに外反	底…木葉痕		〃	59
68－2	〃	〃	〃	22.5	11.7	31.9	可(砂・小石)	黒褐色	巻き上げ	〃	〃	ロ…短くまくれて外反	〃		〃	〃
68－3	〃	〃	〃				〃	灰褐色		〃	〃	〃			〃	58
68－4	鉢	〃	〃	10.7	7.5	10.0	可(粗砂)	橙色	手づくね？	〃	ロ…ナデ 体…ヘラナデ	ロ…歪む			〃	〃
68－5	長胴甕	〃	埋土	(14.5)			良	にぶい赤褐色		ロ…ロクロ(?) 体…ヘラナデ	〃	ロ…短くく の字に外反		残澤	〃	〃
68－6	坏	〃	〃				良(細砂)	橙色	ロクロ	無調整	無調整		あか焼き土器		〃	〃
68－7	甕	〃	〃				良(粗砂)	にぶい橙色		ヘラナデ	ヘラナデ	ロ…短く内側が開かれほぼ直立			〃	〃
68－8	鉢(?)	〃	〃				良	〃					沈線、磨消		縄文後期	〃
77－2	鉢	Ⅹ C－6陥	〃				良(編糸)	黒褐色					綾杉文、撚糸文、補修孔		縄文前期	59
77－5	〃	Ⅷ C－2陥	〃				〃(編糸)	〃					付加条文		〃	60
77－6	〃	〃	〃				良	橙色					無節			〃

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量 口径	法量 底	法量 高さ	胎土	色調	成形技法	調整技法 外面	調整技法 内面	特徴 器形	特徴 文様体等	付着物	時期	写真図版
77－7	鉢	Ⅶ C－2 階	埋土				良(繊維)	黒褐色				口…内側が削がれる	綾絡文、羽状？		縄文前期	60
77－8	〃	Ⅶ D－3 階	〃				〃	黄褐色				口…外側にまくれる、平縁	撚糸文（RL）		〃	〃
77－9	〃	〃	〃				〃	〃					撚糸文、原体側面圧痕文		〃	〃
77－10	〃	〃	〃				〃	暗褐色					S字状連続沈線文		〃	〃
77－11	〃	〃	〃				〃	暗褐色				口…肥厚し外側にまくれる	羽状（単節＋丸組紐）、ループ状		〃	〃
77－12	〃	〃	〃				良	明赤褐色					羽状、ループ状		〃	〃
78－3		Ⅶ E－5 階	〃				〃	黄褐色					磨消		縄文後期	〃
78－4		〃	〃				〃	〃					〃		〃	〃
78－5		Ⅰ C－3 階	〃				良(繊維)	灰褐色					0段多条		縄文前期	〃
86－1	鉢	Ⅶ D－2 P	〃				〃	暗赤褐色				口…外傾しながら直立	付加条文		〃	61
86－2	〃	〃	〃				〃	橙色					羽状（結束）		〃	〃
86－3	片口土器	〃	〃	(28.5)			良	にぶい橙色					平行沈線、弧状沈線、突起		縄文後期	〃
86－4	鉢	〃	〃				〃	〃				口…外反	単節、口唇部にも施文	炭化物	〃	〃
86－5	〃	〃	〃				〃	灰褐色				折り返し口縁状	単節		〃	〃
86－6	〃	〃	〃				良(繊維)	黒褐色				口…内側が削がれる	原体側面圧痕文		縄文前期	〃
86－7	〃	〃	〃				良	にぶい橙色				口…外側に削がれる	口唇部…刻み目、網目状撚糸文		〃	〃
86－8		〃	〃				〃	黒褐色					網目状撚糸文（繊維）		〃？	〃
86－9		〃	〃				良(繊維)	にぶい橙色					無節撚糸文		〃	〃
86－10	壺	〃	〃		9.5		良	〃					網代痕		平安	〃
86－11	〃	〃	〃		(11.2)		良	〃		ヘラミガキ	ヘラミガキ	平底			〃	〃
86－12	台付坏	〃	〃				良	〃	ロクロ				朱塗り		〃	〃
86－13	鉢	Ⅶ D－10 P	〃		7.1		良(繊維)	〃				平底	原体側面圧痕文		縄文前期	62
86－14	〃	〃	〃				〃	暗赤褐色				尖底	単節(?)	炭化物	〃	〃
86－15	〃	〃	〃				〃	〃				〃	撚糸文	〃	〃	〃
86－16	〃	〃	〃				〃	赤褐色				口…内側が削がれ外反する、平縁	〃		〃	〃
87－1	片口土器	〃	〃	3.0	3.1	1.0	良	明褐灰色	手づくね			ミニチュア土器			縄文後期	〃
87－3	鉢	Ⅶ D－4 P	〃				良(繊維)	にぶい橙色					4本丸組紐		縄文前期	〃
87－4	〃	〃	〃				良	赤褐色					網目状撚糸文	炭化物	〃？	〃
87－5	〃	〃	〃				〃	〃					隆帯（刻み目）		縄文後期	〃
87－6	〃	〃	〃				〃	〃					隆線文		〃	〃
87－7	〃	〃	〃				〃	にぶい橙色					撚糸文		弥生	〃
87－8	壺	〃	〃				〃	青灰色		平行叩き目	（剥落）		頸部		平安	〃
87－10	鉢	Ⅶ D－3 P	〃				〃	浅黄橙色					沈線文		縄文後期	〃
87－11	長胴壺	Ⅶ C－2 P	底部	(16.4)			良(粗砂)	橙色		口…ナデ 体…ヘラナデ	口…ナデ 体…ヘラナデ	口…緩る く僅かに外反			平安	〃
87－12	坏	Ⅶ D－11 P	埋土				緻密	淡赤橙色	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	底…回転糸切り無調整	内黒		〃	〃
87－13	壺	〃	底部				良	青灰色		平行叩き目	平行当て具痕		頸部		〃	62
88－1	長胴壺	Ⅶ D－12 P	埋土				良(粗砂)	橙色		口…ナデ 体…ヘラナデ	口…ナデ 体…ヘラナデ				〃	63
88－2	鉢	〃	〃				良(繊維)	にぶい褐色	輪積又は巻き上げ				撚糸文、縄文原体圧痕文		縄文前期	〃
88－3	坏	Ⅶ D－1 P	〃		5.8		良	にぶい褐色	ロクロ	無調整	無調整	底…回転糸切り無調整	あか焼き土器	煤	平安後期	
88－4	〃	〃	〃		(6.0)		〃	黄褐色	〃	〃	ヘラミガキ	〃	（内黒？）		〃	63
88－5	鉢	Ⅰ C－10 P	〃	(6.0)	(6.2)		良(粗砂)	にぶい褐色	巻き上げ	ナデ	ナデ		砂底		〃	〃
88－6	〃	Ⅶ C－1 P	〃				良(繊維)	にぶい橙色					単節	煤 澤	縄文前期	〃
88－7	長胴壺	〃	〃				良	〃		口…ナデ 体…ヘラナデ	口…ナデ 体…ヘラナデ	口…緩く僅かに外反			平安後期	〃
88－8	壺	Ⅶ D－8 P	〃				〃	青灰色		平行叩き目	放射状当て具痕		頸部		〃	〃
88－9	鉢	〃	〃				〃	黒褐色					羽状（単節＋2段4条）		縄文	〃
88－10	〃	Ⅶ C－3 P	〃				〃	〃					単節		〃	〃
88－11	〃	〃	〃				〃	暗褐色					単節、原体側面圧痕文		〃	〃
90－1	〃	Ⅶ C区					〃	暗褐色				口…小波状口縁 >同一	貝殻腹縁文		縄文早期	64
90－2	〃	〃					〃	〃					〃		〃	〃
90－3	〃	〃					良(繊維)	〃		縄文	条痕文	口…外反	縄文条痕文（0段多条）		〃	64

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量 口径	法量 底	法量 高さ	胎土	色調	成形技法	調整技法 外面	調整技法 内面	特徴 器形	特徴 文様体等	付着物	時期	写真図版
90－4	鉢	Ⅶ C区					良(繊維)	暗褐色		縄文	条痕文		縄文条痕文		縄文早期	64
90－5	〃	〃 D区					〃	黒褐色		凹凸あり粗雑	凹凸あり粗雑	平縁、やや外反	撚糸文		縄文前期	〃
90－6	〃						〃	褐 色			ミガキ	尖底	〃		〃	〃
90－7	〃	Ⅶ D区					〃	〃				〃	〃		〃	〃
90－8	〃	〃 D区					〃	〃					0段多条		〃	〃
90－9	〃	Ⅶ D区					〃	黒褐色					付加条文ループ文		〃	〃
90－10	〃	〃 C区					〃	〃				同一く	平節、口唇部…刻み目		〃	〃
90－11	〃	〃 C区					〃	〃					〃 〃 〃		〃	〃
90－12	〃	Ⅶ D区		11.5	(7.0)	13.5	〃	褐 色				平縁	平節		〃	〃
90－13	〃	〃 D区					〃	暗褐色				〃	羽状、ループ文		〃	〃
90－14	〃	Ⅶ D区					〃	黒褐色				口…内側が削かれる	羽状(結束)ループ文		〃	〃
90－15	〃	〃													〃	〃
90－16	〃	〃 C区					良	褐 色				山形口縁	撚節、撚形羽状と無結束ループ状、縄線文、刺突口		〃	〃
90－17	〃	Ⅶ C区					良(繊維)	〃					4本丸棒線		〃	〃
91－1	〃	Ⅶ D区					良	〃					羽状、口唇部…刻み目		〃	65
91－2	〃	〃 C区					良(繊維)	黒褐色				山形口縁(?)	口唇部…刻み目		〃	〃
91－3	〃	Ⅶ D区					〃	褐 色				平縁	撚形羽状、補修孔(3)	粘 土	〃	〃
91－4	〃						〃	赤褐色				〃	〃	〃	〃	〃
91－5	〃	Ⅶ D区					〃	〃				平底	体・底…羽状	〃	〃	〃
91－6	〃	〃					〃	〃				〃 同一く	〃	〃	〃	〃
91－7	〃	〃					〃	褐 色				山形口縁	半截竹管の押し引き文		〃	〃
91－8	〃	〃 C区					〃	〃				〃 同一	〃		〃	〃
91－9	〃	Ⅶ D区					〃	〃					ループ状、0段多条		〃	〃
91－10	〃	〃					〃	明黄褐色				山形口縁 同一く	沈線文		〃	〃
91－11	〃	〃					〃	〃							〃	〃
91－12	〃	Ⅶ C区					良	黒褐色					網目状撚糸文		〃	〃
91－13	〃	Ⅶ D区					良(繊維)	褐 色					〃		〃	〃
91－14	〃	Ⅶ C区					〃	黒褐色					平節、綾絡文		〃	〃
91－15	〃	Ⅶ D区					〃	褐 色					綾絡文		〃	〃
91－16	〃	〃					〃	黒褐色					S字状連続沈線文		〃	〃
91－17	〃	〃 C区					良	褐 色					粘土帯(刻み目)ループ状		〃	〃
92－1	〃	〃 D区					良(繊維)	〃				平縁	平面		〃	66
92－2	〃	Ⅶ C区					〃	〃				〃	〃		〃	〃
92－3	〃	〃					良	〃				折り返し口縁状	〃 (縦回転)		〃	〃
92－4	〃	〃					良(繊維)	暗褐色					原体圧痕圧痕文		〃	〃
92－5	〃	〃					良	褐 色				平縁	付加条文		〃	〃
92－6	〃	Ⅶ D区					良(繊維)	〃					〃		〃	〃
92－7		〃					〃	〃				同一く	〃		〃	〃
92－8	有口土器?	〃					良(小石)	灰白色				注口部(?)	山形沈線文		〃	〃
92－9	鉢	〃					良(繊維)	褐 色				山形口縁	無文		〃	〃
92－10	〃	〃					〃	〃				体下端	〃		〃	〃
92－11	〃 (?)	〃 D区					良	〃					磨消		縄文後期	〃
92－12	〃	Ⅶ D区					〃	黒褐色					隆帯、磨消		〃	〃
92－13	〃	〃					〃	明褐色					〃		〃	〃
92－14	〃 (?)	〃					〃	褐 色					沈線文		〃	〃
92－15		〃					〃	〃				補修孔	竹管刺突文、沈線文		〃	〃
92－16		〃					〃	〃				〃 同一	〃 〃		〃	〃
92－17		〃					〃	〃				〃	〃 〃		〃	〃
92－18		〃					〃	〃				口…肥厚	沈線		〃	〃
92－19		Ⅶ C区					〃	〃					〃		〃	〃

遺物番号	品種	出土地点	層位	法量 口径	法量 底	法量 高さ	胎土	色調	成形技法	調整技法 外面	調整技法 内面	特徴 器形	特徴 文様体等	付着物	時期	写真図版
92－20		Ⅷ D区					良	褐色					沈線文		縄文後期	66
92－21		Ⅷ C区					〃	〃					〃 口唇部…縄文		〃	〃
92－22		Ⅶ D区					〃	黒褐色					口…内外沈線文		〃	〃
92－23		〃					〃	褐色					口唇部…縄文		〃	〃
92－24	壺	Ⅷ C区		(15.7)			〃	明褐色				(刻目)	口唇部…刻み目		〃	〃
93－1		Ⅶ C区					〃	〃					櫛状		〃	〃
93－2		Ⅶ D区					〃	〃				同一く	〃 、平行沈線文		〃	67
93－3		〃					〃	赤褐色					〃 〃		〃	〃
93－4	鉢？	Ⅷ D区					〃	黒褐色					〃		〃	〃
93－5		Ⅷ C区					〃	褐色				山形口縁	櫛歯状条痕文		〃	〃
93－6		〃					〃	〃					突起内側に原体圧痕		〃	〃
93－7		Ⅶ D区					〃	黒褐色					口唇部…縄文	板 津	〃	〃
93－8	鉢	Ⅷ D区					〃	〃					口縁部…原体圧痕		〃	〃
93－9	〃	Ⅷ C区		(35.5)			〃	明黄褐色				口…外反	〃 〃		〃？	〃
93－10	〃	Ⅷ D区		(30.4)			やや良	赤褐色				〃	〃 無節			〃
93－11	〃	〃					良	褐色		ミガキ	ミガキ	平縁、穿孔	口唇部…縄文		晩期？	〃
93－12		Ⅶ C区					〃	赤褐色				〃	無節			〃
93－13		〃					〃	明褐色				口…肥厚	〃			〃
94－1	鉢	Ⅷ D区			11.5		〃	〃					単節			〃
94－2	〃	Ⅷ C区			7.2		〃	〃					単節（横走）			〃
94－3		〃					〃	褐色					〃 （ 〃 ）			〃
94－4		Ⅶ D区					〃	赤褐色					網代痕（2本1組）			〃
94－5		〃					〃	褐色					〃			〃
94－6		〃					〃	〃					〃			〃
94－7		Ⅶ C区					〃	明褐色					〃			〃
94－8		Ⅶ D区					〃	赤褐色					〃			〃
94－9		〃					〃	明褐色					網代痕			〃
94－10		Ⅷ D区					〃	褐色				上げ底	竹又状工具の刺痕			〃
94－11		〃					〃	〃				平底	ミニチュア土器			
94－12		Ⅶ D区					〃	〃					〃			
94－13		〃					〃	〃					沈線文		弥生	68
94－14		〃					〃	〃				同一く	〃 、撚糸文		〃	〃
94－15		〃					〃	〃					〃 〃		〃	〃
94－16	鉢	Ⅷ C区					〃	明褐色					〃		〃	〃
94－17	土製品	Ⅶ D区					〃	褐色					縄文		〃？	〃
94－18	〃	〃					〃	赤褐色					赤彩段状部		縄文前期？	〃
94－19	坏	〃		(14.4)	(6.6)	5.0	〃	褐色	ロクロ	無調整	ヘラミガキ	底…静止糸切り無調整	縄文			〃
94－20	鉢	Ⅷ D区			7.0		〃	赤褐色	〃			底…回転糸切り無調整	内黒		平安	〃
94－21	壺	Ⅶ D区					〃	青灰色		平行叩き目	放射状当て具痕				〃	〃

第8表 石 器 一 覧 表

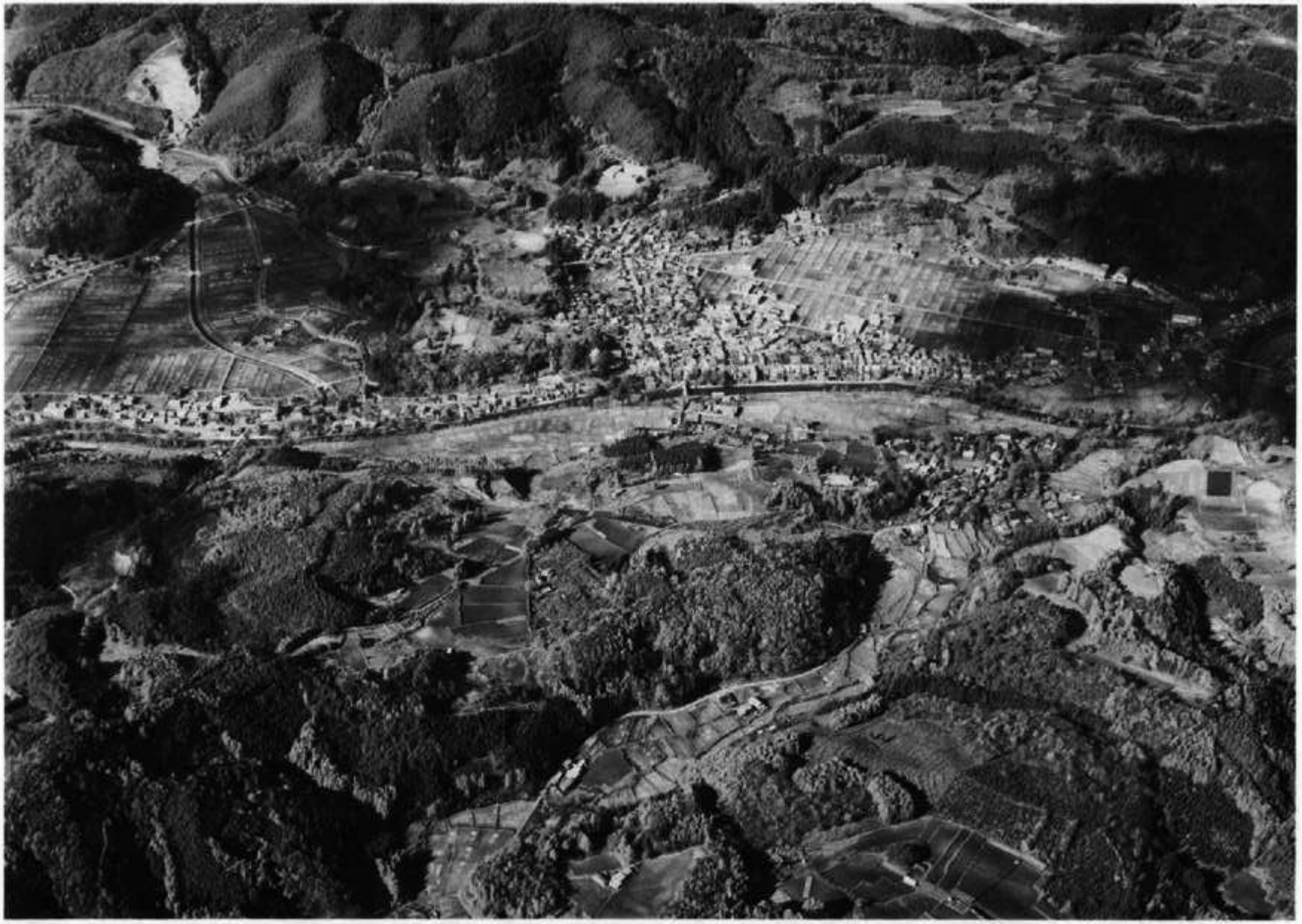
遺物番号	品種	出土地点	法量 長さ(cm)	法量 巾(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	石質	産地等	写真図版
8－6	横型石鏃	Ⅷ D－2住	3.5	6.9	0.4	9.1	完形	チャート	北上山地 古生界	42
8－7	スクレイパー	〃	7.1	3.8	0.5	17.0	〃	〃	〃 〃	〃
8－8	加工痕を有する剥片	〃	6.0	2.7	0.8	10.2	〃	珪質泥岩	新第三系 中新統	〃
12－1	縦形石鏃	Ⅷ D－3住	7.4	2.4	0.9	15.4	一部欠損	粘板岩	北上山地 古生界	43
12－2	〃	〃	3.7	2.3	0.6	6.4	完形	凝灰質珪質泥岩	新第三系 中新統	〃
12－3	スクレイパー	〃	4.0	4.0	0.9	14.4	〃	チャート	北上山地 古生界	
12－4	〃	〃	6.9	2.4	0.8	13.3	〃	〃	〃 〃	43
12－5	〃	〃	6.1	4.6	1.2	25.9	〃	珪質泥岩	新第三系 中新統	〃
12－6	〃	〃	7.0	5.0	1.1	25.8	一部欠損	チャート	北上山地 古生界	〃
12－7	磨石	〃	12.7	9.9	5.5	1100	完形	角閃黒雲母花崗岩	〃 中生界	〃
12－8	磨石，敲石	〃	11.2	8.4	4.4	642	〃	両輝石安山岩	奥羽山地 新第三系 中新統	〃
12－9	浮子	〃	7.1	6.0	1.8	12.7	〃 孔－1ヶ	軽石	安比川流域 第四系	〃
13－1	石皿	〃	38.0	28.8	6.0	——	〃	角閃石英安山石	新第三系 中新統	〃
13－2	〃	〃	30.8	30.0	6.0	——	〃	両輝石安山岩	奥羽山地 〃 〃	〃
16－14	両面調整石器	Ⅸ D－1住	3.5	1.7	0.4	2.6	〃 タール付着	凝灰質珪質泥岩	〃 〃	44
16－15	スクレイパー	〃	4.1	8.6	1.4	51.9	〃	チャート	北上山地 古生界	〃
16－16	〃	〃	6.5	3.5	0.9	16.9	〃 タール付着	凝灰質珪質泥岩	新第三系 中新統	〃
16－17	磨製石斧	〃	8.6	3.8	2.5	119	一部欠損	硬砂岩	北上山地 古生界	〃
26－6	敲石	Ⅶ C－4住	12.1	7.0	7.2	——	〃	両輝石安山岩	奥羽山地 新第三系 中新統	47
26－7	石錘	〃	9.0	8.4	1.9	270.0	完形	〃	〃 〃 〃	〃
30－8	石皿	Ⅷ C－3住	(15.0)	(17.8)	7.5	——		角閃石英安山岩	〃 〃 〃	
30－9	敲石	〃	12.3	4.0	2.4	150.0	一部欠損	白色細粒凝灰岩	〃 〃 〃	48
33－1	磨石，敲石	Ⅷ C－2住	16.0	5.4	4.4	600	完形	両輝石安山岩	〃 〃 〃	49
33－2	敲石	〃	8.5	3.5	2.4	103.0	〃	チャート	北上山地 古生界	〃
33－3	凹石	〃	——	——	5.3	——	一部残存	角閃石英安山岩	奥羽山地 新第三系 中新統	〃
39－15	磨石(?)	Ⅶ D－1住	15.5	6.8	2.4	363.0	完形	両輝石安山岩	〃 〃 〃	51
39－16	石皿(?)	〃	——	——	——	——	破片	〃	〃 〃 〃	〃
39－17	石棒(?)	〃	——	5.1	3.0	——	〃	〃	〃 〃 〃	〃
40－1	縦型石鏃	〃	7.6	2.2	0.8	16.8	完形	凝灰質珪質泥岩	〃 〃	〃
40－2	〃	〃	——	3.0	1.1	12.8	一部欠損	〃	〃 〃	〃
40－3	ポイント	〃	6.3	2.6	0.8	14.4	完形	硬質泥岩	〃 〃	〃
40－4	調整痕を有する剥片	〃	2.0	2.7	0.2	1.3	一部欠損	玻璃質流紋岩	雫石盆地 西南縁 〃 〃	
46－1	半円状扁平打製石器	Ⅶ D－2住	13.4	15.6	2.9	1147	完形	硬砂岩	北上山地 古生界	54
46－2	〃	〃	11.7	15.9	4.2	1116	〃	両輝石安山岩	奥羽山地 新第三系 中新統	〃
46－3	石皿	〃	——	18.2	7.7	——	一部残存	輝石安山岩	〃 〃 〃	〃
47－1	〃	〃	33.0	15.4	13.4	——	完形	〃	〃 〃 〃	〃
47－2	敲石	〃	11.7	4.9	2.0	195.0	一部欠損	〃	〃 〃 〃	〃
47－3	マイクロコア	〃	3.3	2.0	1.2	6.5		チャート	北上山地 古生界	
77－1	スクレイパー	Ⅸ C－6陥		2.3	0.7	6.0	一部欠損	凝灰質珪質泥岩	新第三系 中新統	59
77－3	磨石	Ⅵ D－11陥	11.3	9.7	7.7	1160	完形	両輝石安山岩	奥羽山地 〃 〃	〃
77－4	石鏃(ポイント)	Ⅷ D－3陥	16.1	3.3	0.9	60.0	〃	凝灰質珪質泥岩	〃 〃	〃
78－1	磨製石斧	Ⅵ D－3陥			2.9	168.0	一部欠損	粘板岩	北上山地 古生界	60
78－2	凹石	〃	11.3	5.3	2.8	248.0	完形	両輝石安山岩	奥羽山地 新第三系 中新統	〃
87－2	スクレイパー	Ⅵ D－10P	2.8	2.5	0.5	6.4	〃	珪質泥岩	〃 〃	62
87－9	〃 (?)	Ⅵ D－4P	3.8	2.5	0.7	8.1	一部欠損	〃	〃 〃	〃

遺物番号	器種	出土地点	法量				備考	石質	産地等			写真図版
			長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)						
88－12	縦型石錐	Ⅶ C－3 P		2.4	0.4	4.5	一部欠損	凝灰質珪質泥岩		新第三系	中新統	63
88－13	礫石	Ⅶ D－2 P		4.3	2.0	165.0	〃	凝灰質チャート	北上山地	古生界		
95－1	石鏃	Ⅹ B区	3.6	1.6	0.5	2.1	完形	凝灰質珪質泥岩		新第三系	中新統	69
95－2	〃	Ⅶ E区	3.3	1.3	0.3	1.1	〃	〃		〃	〃	〃
95－3	〃	〃	(3.2)	1.5	0.4	1.5	先端部欠損	〃		〃	〃	〃
95－4	〃	Ⅶ D区		2.0	0.3	0.8	一部欠損	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域	〃	〃	〃
95－5	石鏃	Ⅶ C区	(4.4)	1.3	0.5	1.7	先端部欠損	凝灰質珪質泥岩		〃	〃	〃
95－6	〃	Ⅶ D区		1.5	0.8	3.2	鋸部欠損	玻璃質流文岩	雫石盆地西南域	〃	〃	〃
95－7	尖頭器	Ⅶ D区	9.4	2.3	0.8	19.1	完形	凝灰質珪質泥岩		〃	〃	〃
95－8	石匙	Ⅶ D区	7.1	3.9	1.0	18.6	〃	凝灰質硬質泥岩		〃	〃	〃
95－9	〃	〃	7.4	3.9	1.0	29.8	〃	〃		〃	〃	〃
95－10	〃	〃	6.3	3.2	0.7	13.1	〃	〃		〃	〃	〃
95－11	〃	〃		3.0	0.6	15.3	つまみ部欠損	凝灰質珪質泥岩		〃	〃	〃
95－12	〃	Ⅴ E区	5.5		0.5	10.0	一部欠損	〃		〃	〃	〃
95－13	スクレイパー	Ⅶ C区	4.0	5.0	0.7	13.1	完形	〃		〃	〃	〃
95－14	〃	Ⅶ D区	3.7	5.1	0.9	18.9	〃 、二次使用	〃		〃	〃	〃
96－1	〃	Ⅶ D区	2.5	5.0	0.5	9.5	一部欠損	珪質泥岩		〃	〃	〃
96－2	〃	〃	1.9	3.7	0.3	2.8	完形	凝灰質硬質泥岩		〃	〃	〃
96－3	〃	〃	2.4	1.8	0.8	3.1		凝灰質珪質泥岩		〃	〃	〃
96－4	〃	Ⅶ C区	2.7	2.9	0.7	6.0		玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域	〃	〃	〃
96－5	〃	〃	4.6	2.5	1.0	4.1		チャート質粘板岩	北上山地	古生界		〃
96－6	〃	Ⅶ D区	3.1	2.9	0.5	3.5	完形	凝灰質珪質泥岩		新第三系	中新統	〃
96－7	〃	〃	5.6	4.5	1.9	33.8	〃	〃		〃	〃	70
96－8	〃	〃	6.8	6.2	1.5	55.0	〃	凝灰質硬質泥岩		〃	〃	〃
96－9	〃	Ⅶ C区	5.0	4.5	1.2	27.2	一部欠損	〃		〃	〃	〃
96－10	〃	Ⅶ C区	6.6	4.1	0.6	16.1	完形	凝灰質珪質泥岩		〃	〃	〃
96－11	〃	Ⅶ E区	5.2	2.6	0.3	6.2	〃	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域	〃	〃	〃
96－12	〃	Ⅶ C区	5.0	3.1	1.0	10.6	一部欠損	凝灰質珪質泥岩		〃	〃	〃
96－13	〃	Ⅶ C区	4.0	3.7	0.4	5.7		〃		〃	〃	〃
96－14	〃	Ⅶ D区	3.5	3.5	0.7	7.3	完形	〃		〃	〃	〃
97－1	〃	Ⅶ D区		2.6	0.5	5.2	一部欠損	〃		〃	〃	〃
97－2	〃	Ⅶ D区		5.3	0.9	13.7	〃	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域	〃	〃	〃
97－3	〃	Ⅶ C区			0.3	2.4	〃	〃	〃	〃	〃	〃
97－4	〃	Ⅴ D区	3.3	3.1	0.6	5.1		チャート質粘板岩	北上山地	古生界		〃
97－5	〃	Ⅶ D区	5.0	2.0	0.7	5.7	一部欠損	凝灰質珪質泥岩		新第三系	中新統	〃
97－6	〃	〃		3.8	0.9	12.4	〃	硬質泥岩		〃	〃	
97－7	〃	〃	4.3	3.0	0.9	9.2	完形	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域	〃	〃	70
97－8	〃	Ⅸ C区		3.2	0.7	8.2	一部欠損	珪質泥岩		〃	〃	〃
97－9	両面調整石器	Ⅶ D区		2.6	1.1	5.7	〃	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域	〃	〃	
97－10	〃	〃	7.4	3.3	1.5	37.0	完形	凝灰質珪質泥岩		〃	〃	70
97－11	ピーエス エスキュース	〃	2.5	2.4	0.8	2.0		剥離片				〃
97－12	剥離痕を有する剥片石器	〃	7.0	2.4	0.4	7.4						
97－13	〃	〃	4.1		0.7	7.9		放散虫含有チャート	北上山地	古生界		70
97－14	〃	Ⅶ D区	2.7	2.6	0.9	9.8		チャート	〃	〃		〃
97－15	〃	Ⅶ C区		6.0	1.1	22.2	一部欠損	凝灰質珪質泥岩		新第三系	中新統	〃

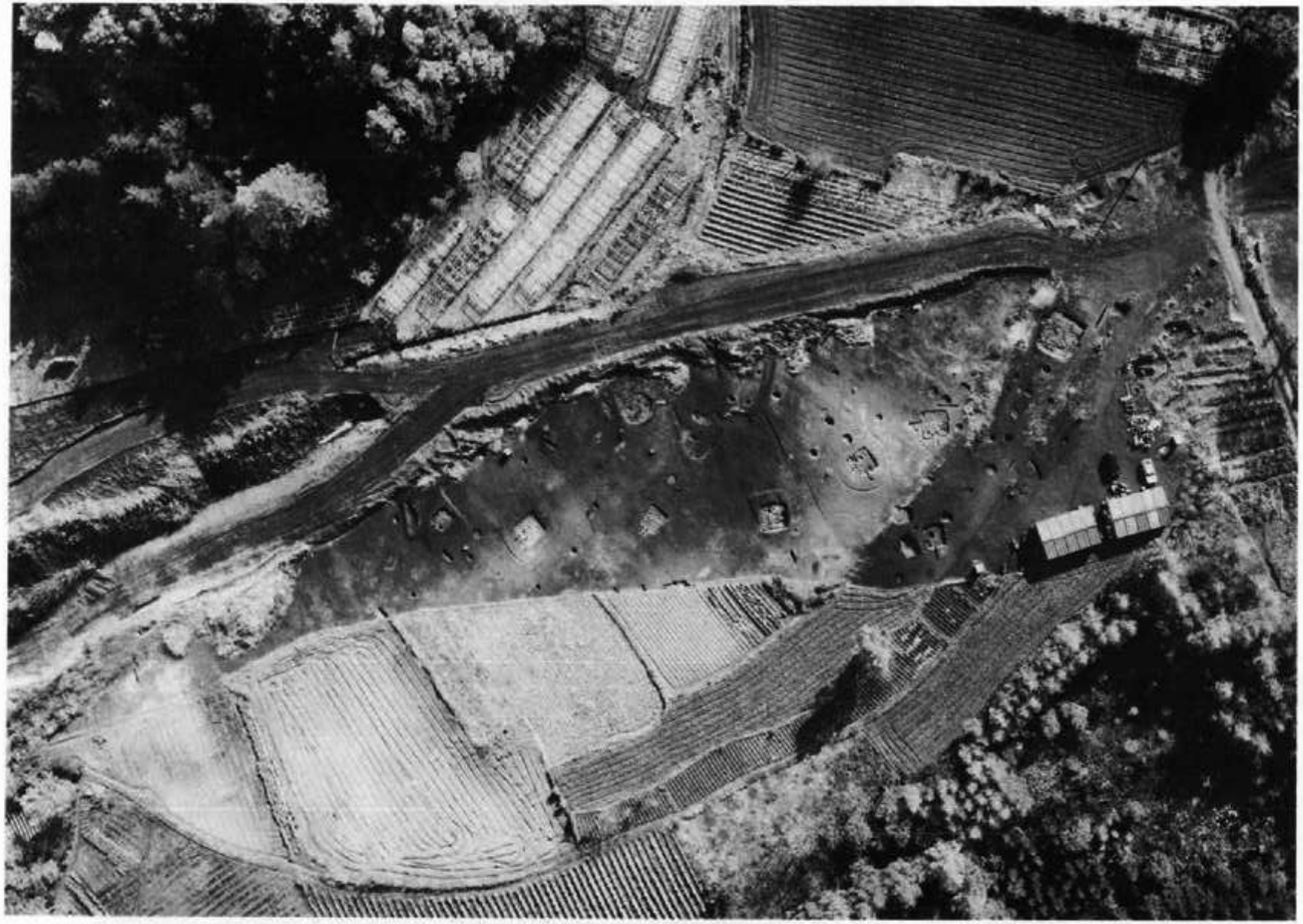
遺物番号	器種	出土地点	法量				備考	石質	産地等			写真図版
			長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)						
98－1	磨石	Ⅵ D区	9.3	6.4	3.3	285.0	完形	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系	中新統	71
98－2	〃	〃	8.2	8.3	4.7	430.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃
98－3	〃	〃	11.6	6.2	2.9	243.0	一部欠損	両輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
98－4	〃	〃	12.0	6.2	4.3	525	〃	〃	〃	〃	〃	〃
98－5	〃	〃	11.1	9.3	4.0	664	〃	輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
98－6	〃	〃	11.1	5.7	2.7	260.0	完形	〃	〃	〃	〃	〃
98－7	〃	〃	5.5	5.5	3.7	133.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃
99－1	〃	Ⅹ C区	13.0	8.7	2.3	335.0	一部欠損(蜂の巣状)	角閃石英安山岩	〃	〃	〃	〃
99－2	磨石	Ⅵ D区	8.6	8.0	4.4	490.0	完形	両輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
99－3	磨石、敲石	〃	9.8	7.0	6.8	780.0	〃	輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
99－4	〃	Ⅹ D区	4.8	7.0	7.2	1434	〃	〃	〃	〃	〃	〃
100－1	〃	Ⅵ D区	9.8	9.2	7.0	900	〃	〃	〃	〃	〃	72
100－2	砥石	Ⅵ D区		11.2	3.6	620	一部欠損	両輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
100－3	〃	Ⅵ C区	9.0	8.2	5.5	463.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃
100－4	〃	〃	(11.0)	5.8	4.6	283.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃
100－5	石臼	不明	39.2	25.0	9.4	——	〃	輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
100－6	〃	Ⅵ D区	14.5		4.4	——	〃	両輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
101－1	両面磨器	〃	3.0	12.5	3.3	295.0	完形	輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
101－2	片面磨器	〃	11.0	16.5	5.8	1405	〃	両輝石安山岩	〃	〃	〃	〃
101－3	〃	Ⅹ C区	7.5	16.3	2.7	632.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃
101－4	〃	Ⅵ D区	9.0	8.5	5.7	250.0	〃	流紋岩質無斑晶凝灰岩	〃	〃	〃	73
102－1	石斧	〃	18.5	9.0	4.8	1190	〃、一部磨製	プロピライト	〃	〃	〃	〃
102－2	〃	〃			2.5	36.6	基部のみ	硬砂岩	北上山地	古生界		
102－3	半円状扁平打製石器	Ⅵ C区	9.5	16.8	3.5	737	完形	両輝石安山岩	奥羽山地	新第三系	中新統	〃
102－4	〃	Ⅵ E区	10.5	16.2	5.1	1000	〃	〃	〃	〃	〃	〃

＊法量は有効数値のみを記した。空欄は測定の意義がないもの、——は測定の不要のものである。

写真図版



写真図版１　柱平遺跡の周辺状況（空中写真）



写真図版２　桂平遺跡全景(空中写真)

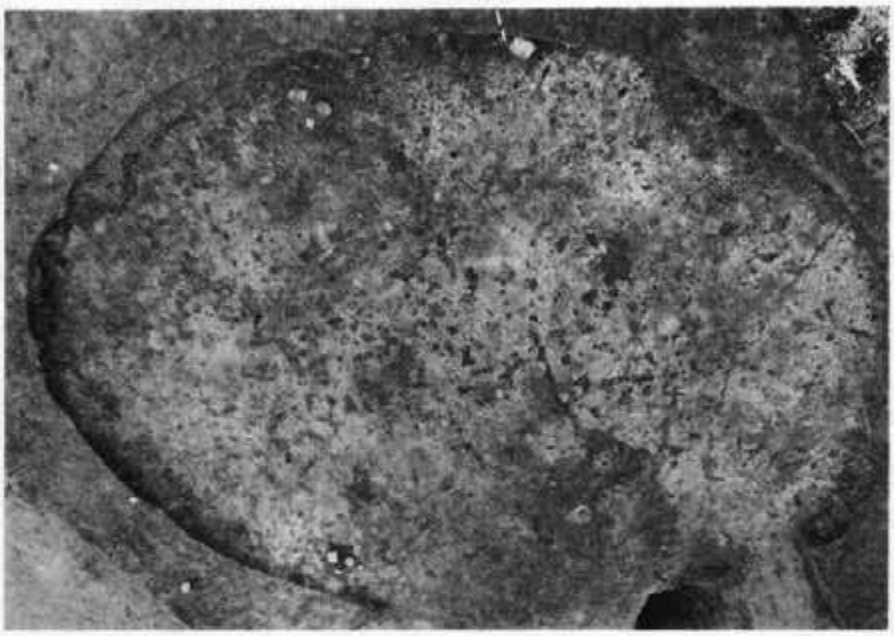
調査前

実測風景

現地説明会

写真図版 3　調査前，実測風景，現地説明会

遺物出土状況



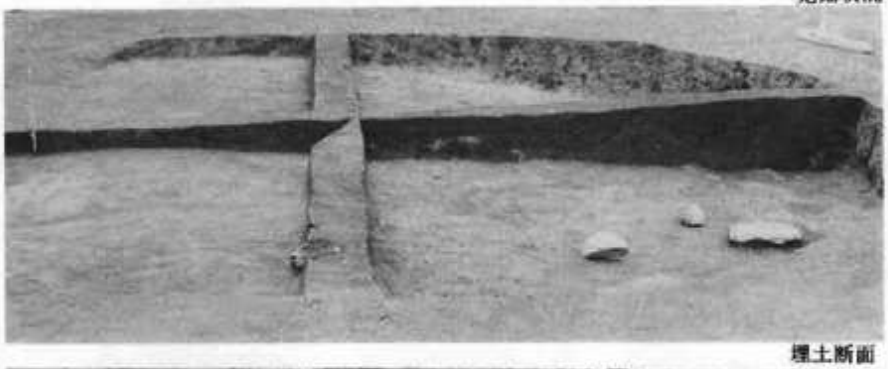
完掘状況

P_1柱穴断面

P_2柱穴断面

写真図版4　Ⅷ D－2住居址

完掘状況



埋土断面

（炭化材）

（粘　土）

（小　鉢）

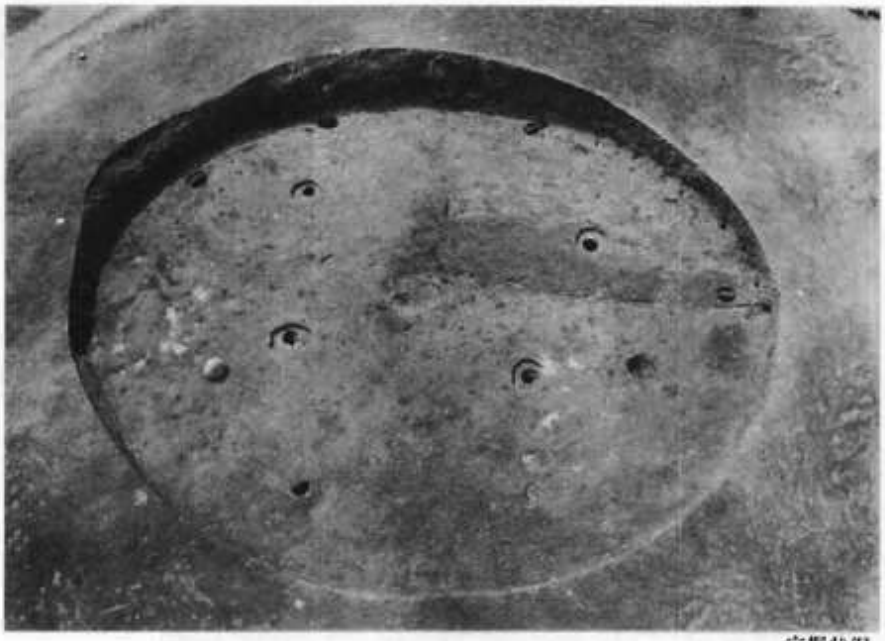
遺物出土状況

P_3埋土断面

P_3柱当り完掘

P_3掘り方完掘

写真図版５　Ⅷ Ｄ－３住居址



完掘状況

埋土断面

焼失状況

炉跡断面

柱穴断面

写真図版６　Ⅸ Ｄ－１住居址

完掘状況

炉跡断面

17－1

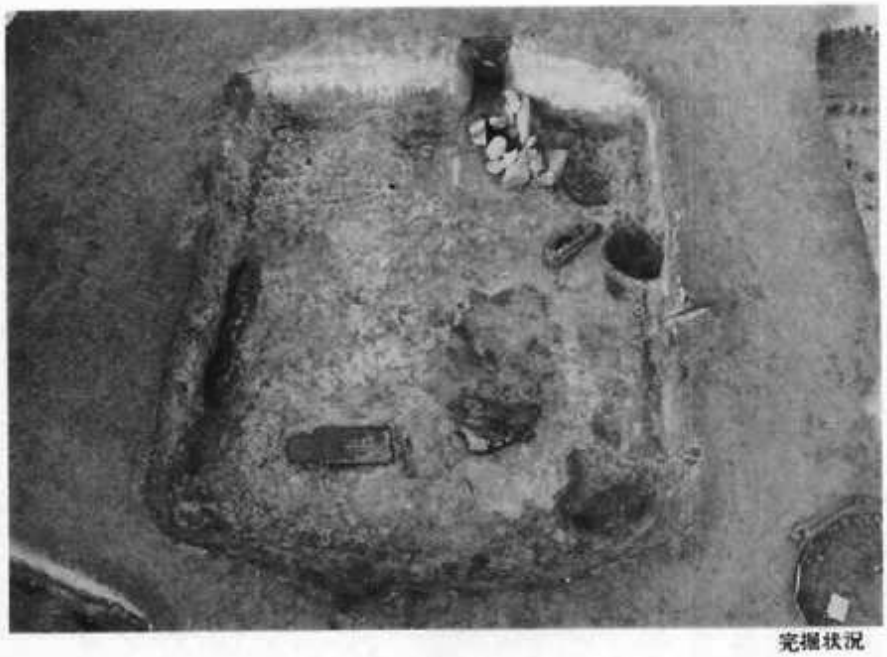
17－2

17－3

17－4

出土遺物

写真図版７　Ⅷ Ｄ－４住居址及び出土遺物



完掘状況

堀土断面

完掘状況

ピット完掘状況

カマド完掘状況

木皿出土状況

炭化材出土状況

写真図版８　ⅦＣ－１住居址

完掘状況

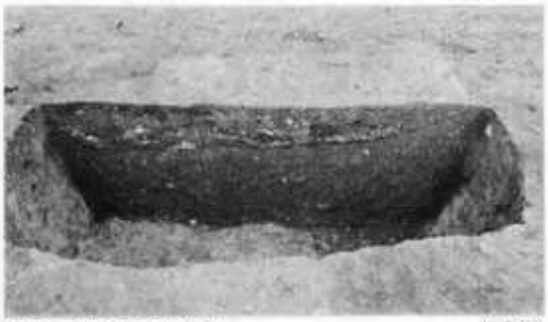
埋土断面

煙道部断面

写真図版９　Ⅶ C －２住居址

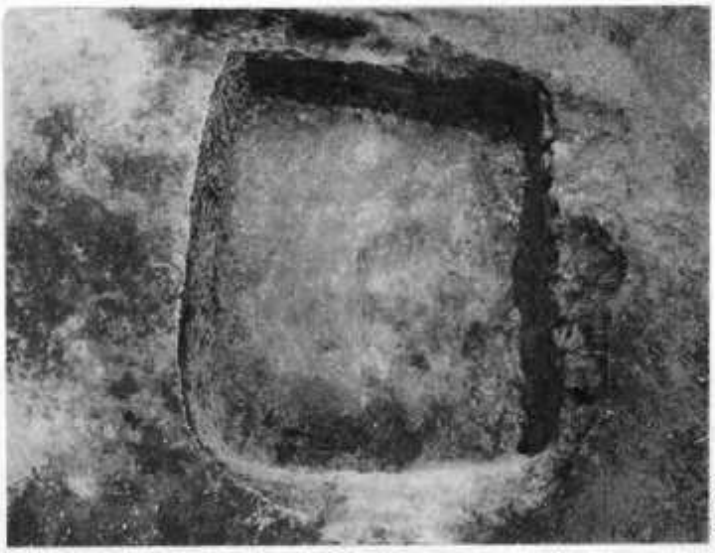
（平面）

（平面）



Ⅶ C－3 住居址状遺構　（断面）

Ⅶ C－5 住居址状遺構　（断面）

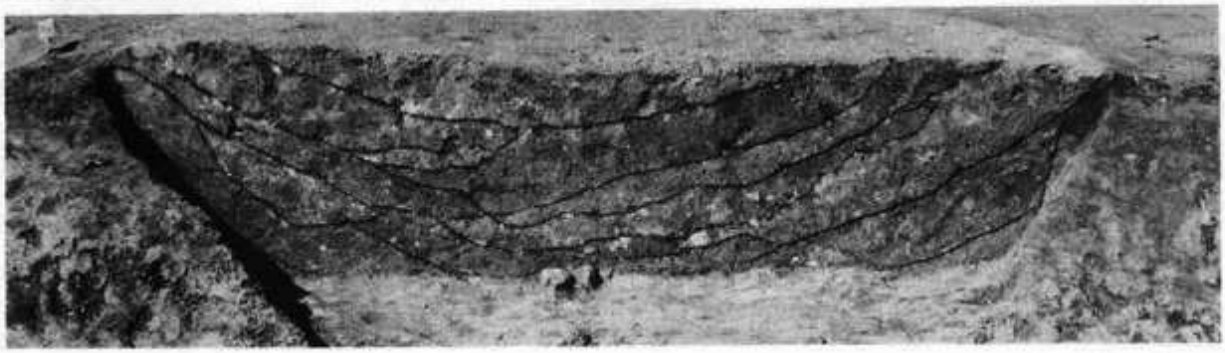


（平面）

Ⅵ E－2 住居址状遺構

（断面）

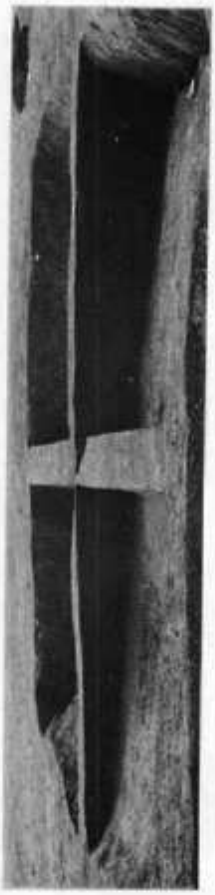
写真図版10　Ⅶ C－3 住居址状遺構，Ⅶ C－5 住居址状遺構
Ⅵ E－2 住居址状遺構

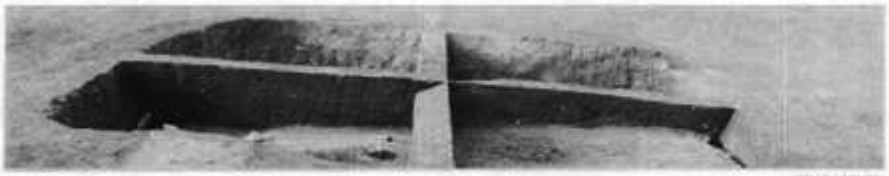


上：完掘状況
中：埋土断面
下：遺物出土状況

写真図版11　Ⅶ C－4 住居址

完掘状況

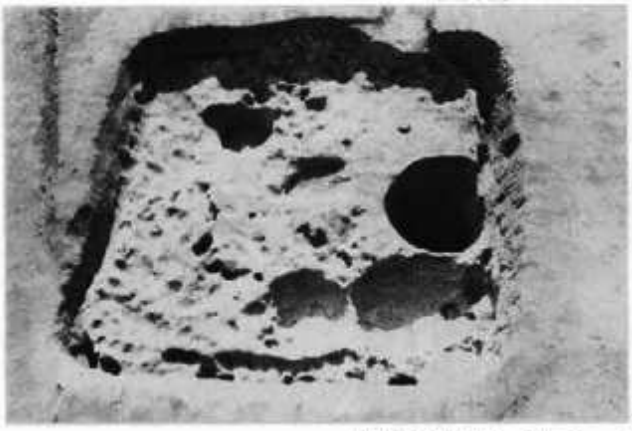




埋土断面

カマド跡

P_1完掘状況



掘り方完掘状況

貼床断面

写真図版12　VIIIC－3住居址

完掘状況

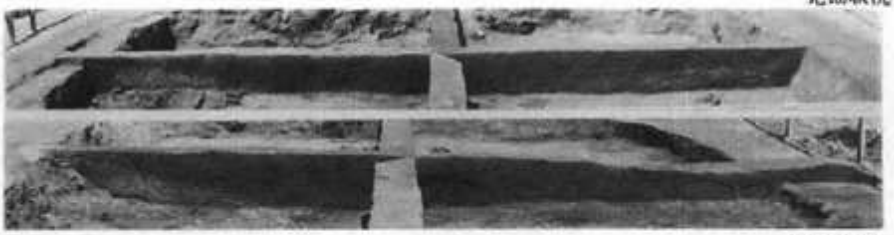
埋土断面

掘り方完掘

カマド検出

写真図版13　Ⅷ C－2住居址

完掘状況



埋土断面

掘り方完掘

カマド

鉄剣出土状況

カマド内遺物出土状況

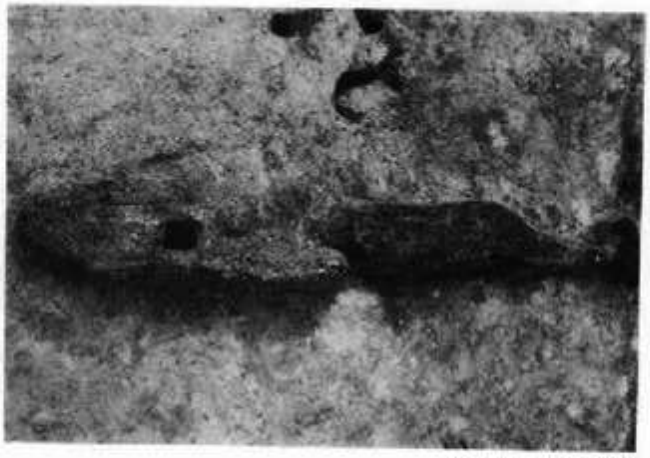
写真図版14　Ⅵ D－1 住居址

敷板出土状況

根太出土状況

根太(拡大)

床面掘り方(拡大)

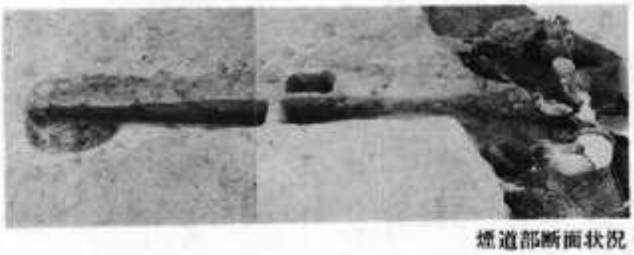


根太出土状況(部分)

写真図版15　VI D－I 住居址・敷板等

完掘状況

埋土断面



煙道部断面状況

カマド検出状況

遺物出土状況

写真図版16　Ⅶ D－2住居址

完掘状況

埋土断面

煙道部断面

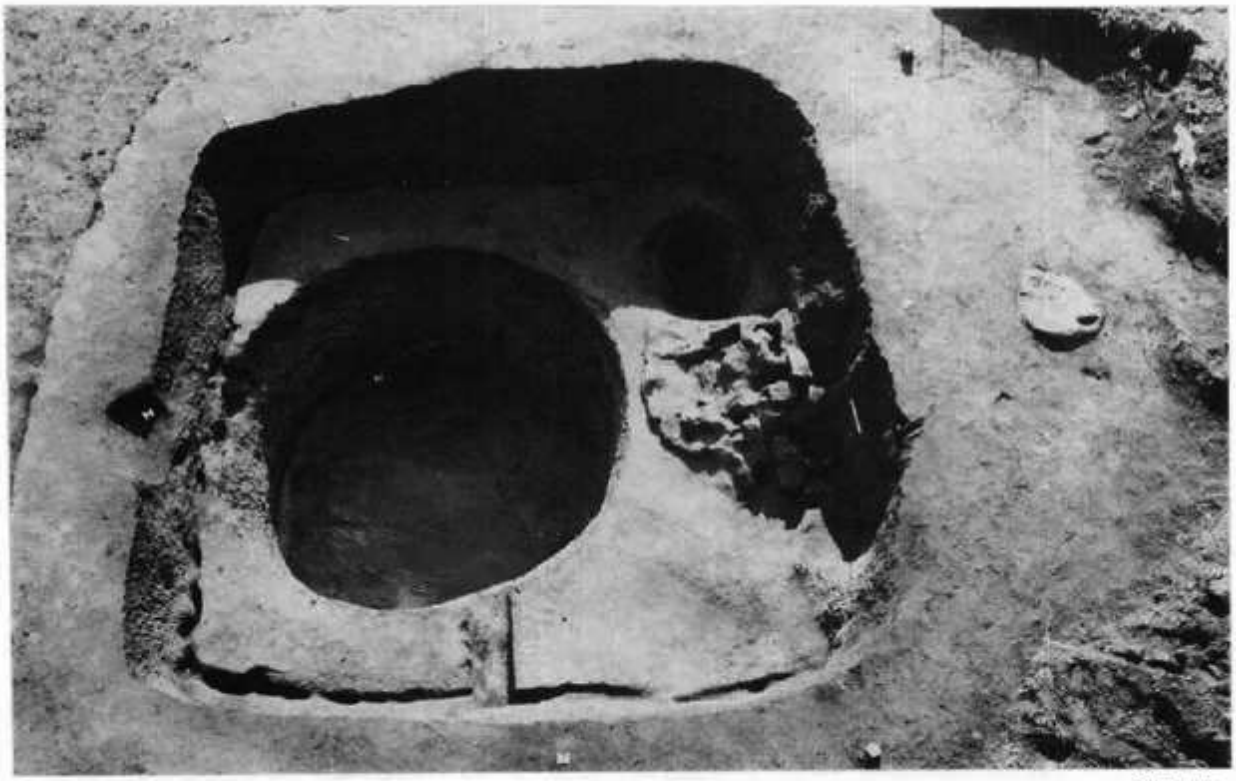
カマド跡

（紡錘車）

（土器片と炭化材）

遺物出土状況

写真図版17　Ⅶ D－3住居址



完掘状況

埋土断面

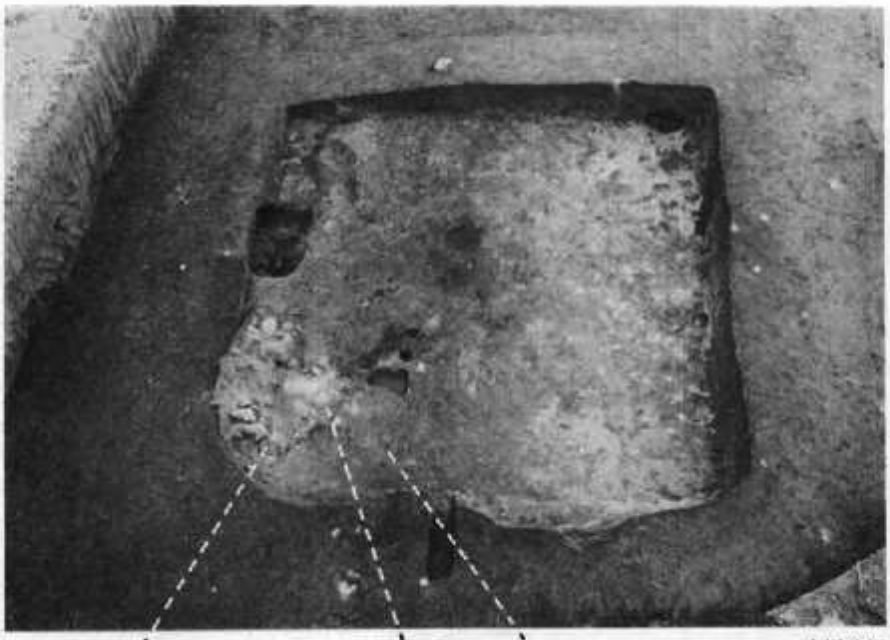
カマド断面

写真図版18　Ⅶ D－1 住居址

完掘状況

埋土断面

写真図版19　Ⅵ E－1 住居址



完掘状況

カマド跡

カマド跡燃焼部

先行カマド跡燃焼部

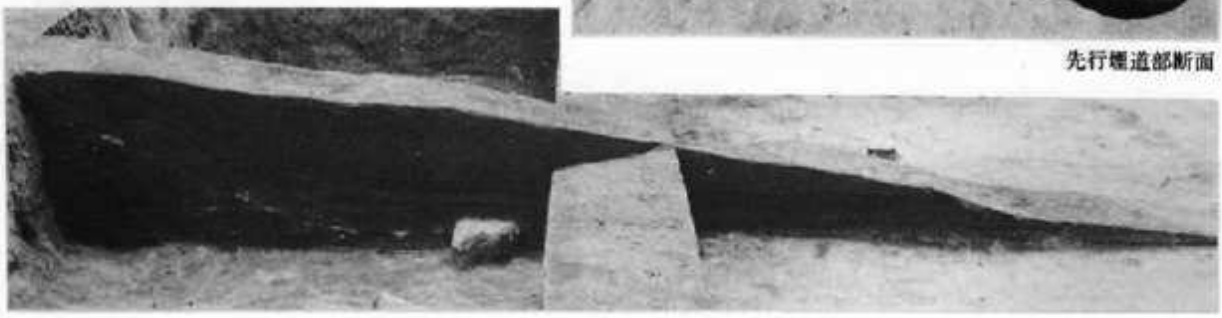
埋土断面

白頭山火山灰

写真図版20　Ⅷ D－1 住居址

完掘状況

先行煙道部断面

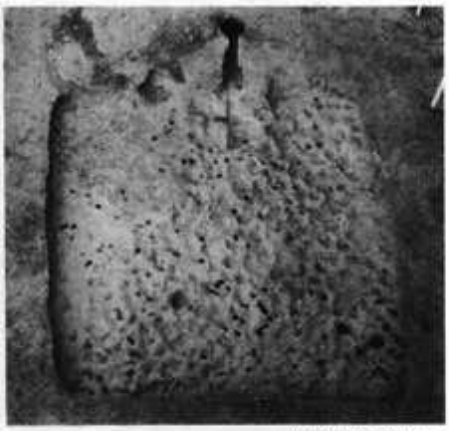


埋土断面

写真図版21　Ⅷ C－1 住居址

焼失状況

完掘状況



掘り方完掘状況

埋土断面

カマド完掘状況

写真図版22　IX C－1 住居址

掘状況

埋土断面

白頭山火山灰

カマド検出状況

完掘状況

先行ピット断面

写真図版23　ＸＣ－Ｉ住居址

（平面）

Ⅷ D－10陥し穴　（断面）

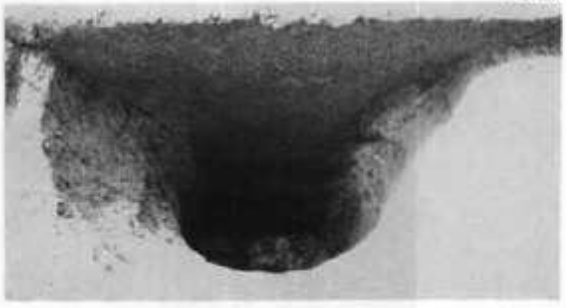
Ⅷ D－16陥し穴　（断面）

Ⅷ D－11陥し穴　（断面）

（平面）

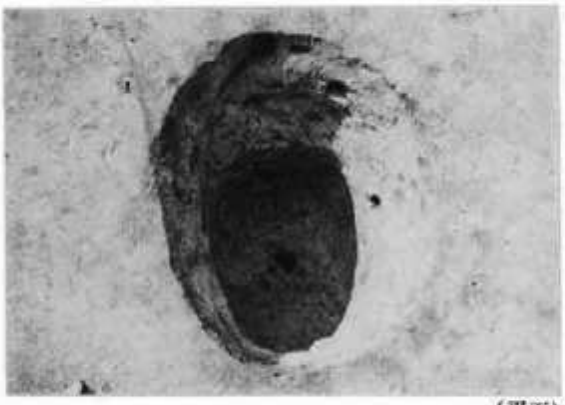
（平面）

Ⅹ C－5陥し穴　（断面）



Ⅷ D－15陥し穴　（断面）

写真図版24　円筒状陥し穴(1)

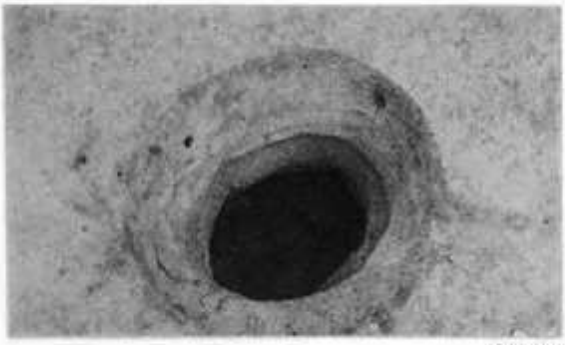


（平面）

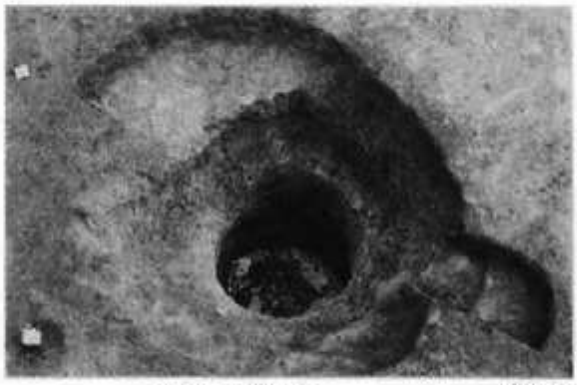
（平面）

Ⅸ C－6 陥し穴　（断面）

Ⅸ C－4 陥し穴　（断面）



（平面）



Ⅷ E－1 陥し穴　（平面）

Ⅷ D－9 陥し穴　（断面）

Ⅷ C－5 陥し穴　（平面）

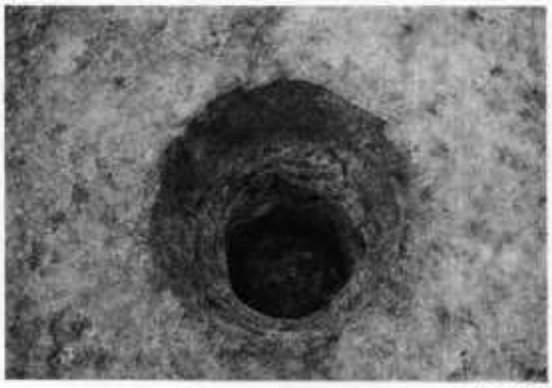
写真図版25　円筒状陥し穴(2)

（平面）

Ⅷ D－6 陥し穴　（平面）

Ⅷ D－14陥し穴　（断面）

Ⅷ D－13陥し穴　（平面）



（平面）

（平面）

Ⅹ C－2 陥し穴　（断面）

Ⅶ E－1 陥し穴　（断面）

写真図版26　円筒状陥し穴(3)

（平面）

Ⅷ D－12陥し穴　（平面）

Ⅸ C－7陥し穴　（断面）

Ⅸ C－8陥し穴　（平面）

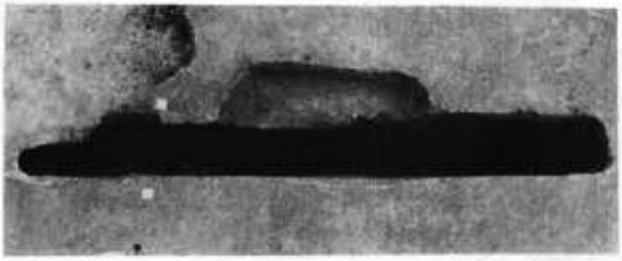
（平面）

Ⅸ C－9陥し穴　（断面）

写真図版27　円筒状陥し穴(4)

Ⅵ D－11陥し穴　（平面）

（断面）



Ⅷ D－3陥し穴　（平面）

（断面）

Ⅶ D－18陥し穴

（断面）

写真図版28　溝状陥し穴(1)

（平面）

（断面）

Ⅵ C－2 陥し穴

（平面）

（断面）

Ⅵ D－3 陥し穴

Ⅷ D－7 陥し穴　（平面）

（断面）

Ⅷ C－4 陥し穴　（平面）

（断面）

写真図版29　溝状陥し穴(2)

（平面）

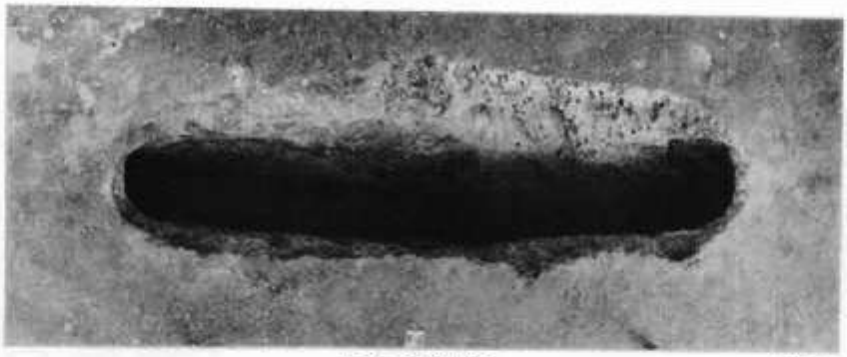
（断面）

Ⅸ B－1陥し穴

（平面）

（断面）

Ⅵ D－6陥し穴



Ⅵ E－3陥し穴　（平面）

Ⅵ E－6陥し穴　（平面）

（断面）

写真図版30　溝状陥し穴(3)

（平面）

（断面）

Ⅵ E－4 陥し穴

（平面）

Ⅵ E－5 陥し穴

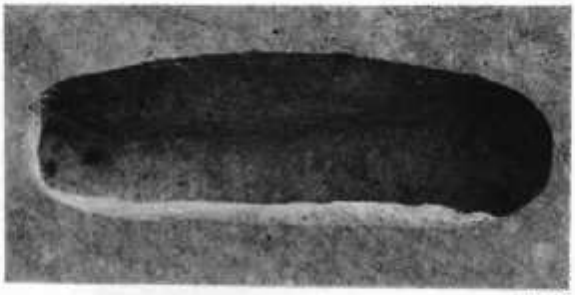
（断面）

（平面）

Ⅷ C－1 陥し穴

（断面）

写真図版31　溝状陥し穴(4)



Ⅸ C－1陥し穴　（平面）

（断面）

Ⅸ C－3陥し穴　（平面）

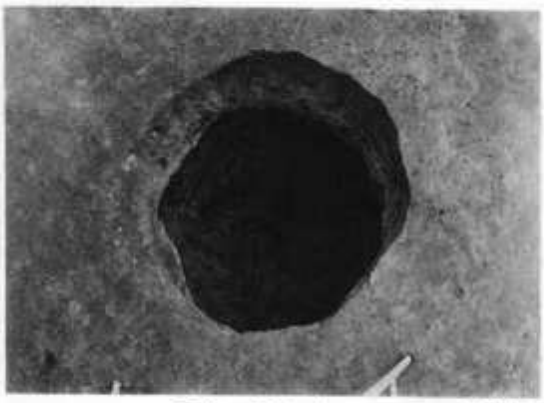
（断面）

（平面）

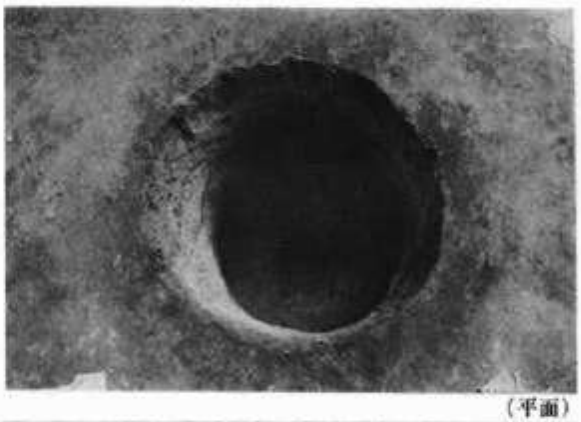
（断面）

Ⅹ B－1陥し穴

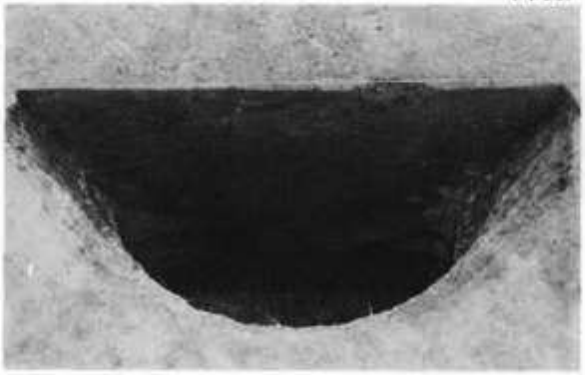
写真図版32　溝状陥し穴(5)



Ⅶ D－2ピット　（平面）

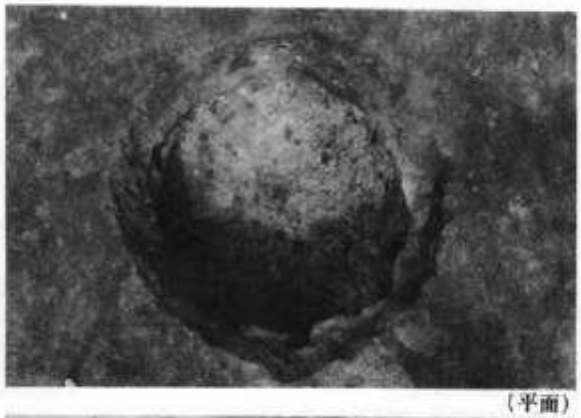


（平面）



Ⅵ D－10ピット　（断面）

（平面）

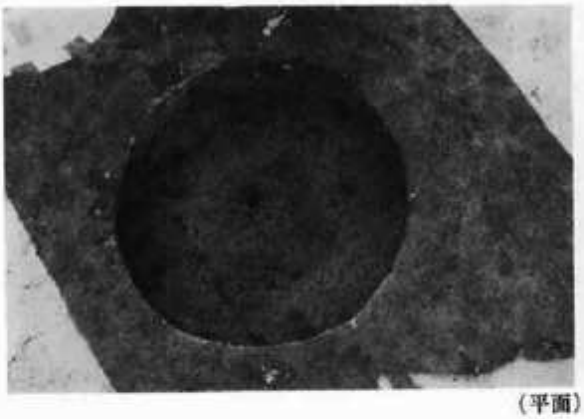


（平面）

Ⅵ E－1ピット　（断面）

Ⅶ D－9ピット　（断面）

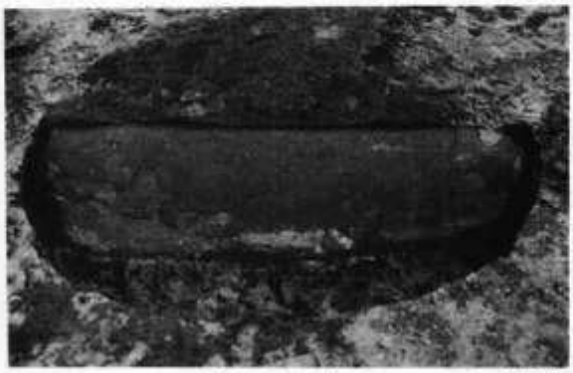
写真図版33　ピット（縄文）（1）



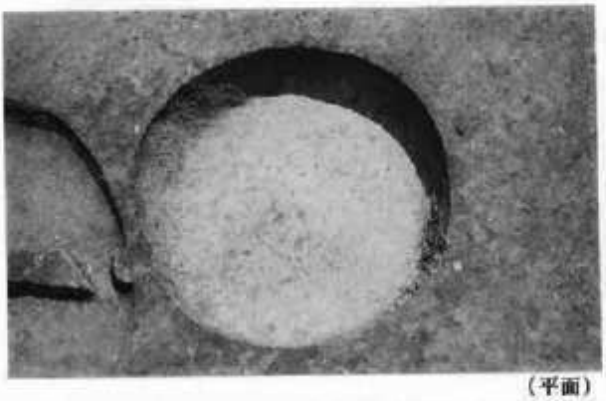
（平面）

（平面）

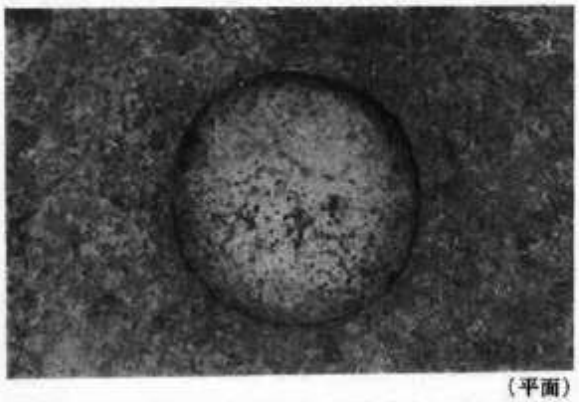
Ⅷ D－8ピット　（断面）



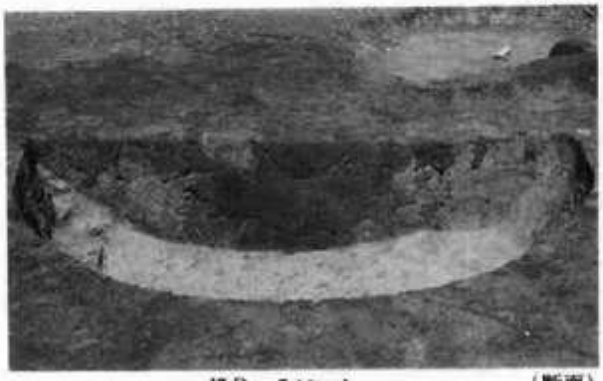
Ⅵ D－7ピット　（断面）



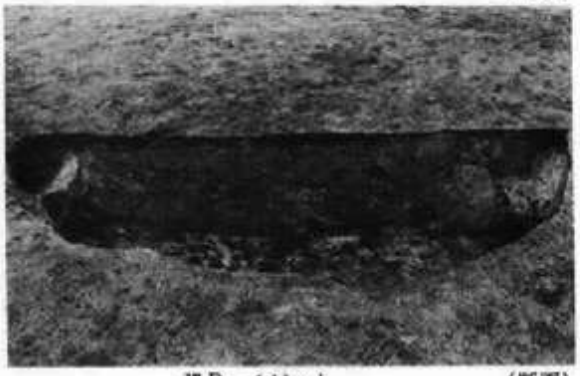
（平面）



（平面）



Ⅵ D－5ピット　（断面）



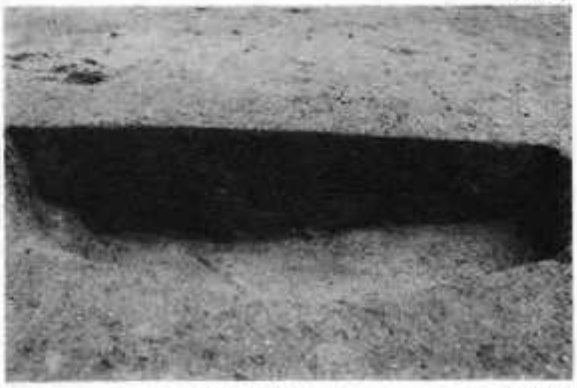
Ⅵ D－4ピット　（断面）

写真図版34　ピット（縄文）(2)

（平面）

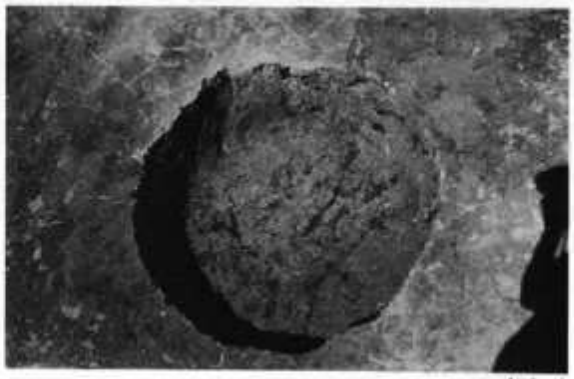
（平面）

Ⅷ D－3 ピット　（断面）



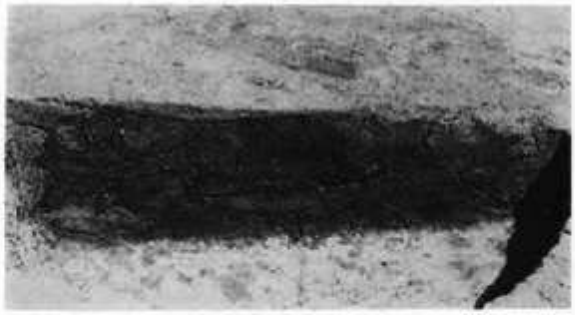
Ⅸ C－5 ピット　（断面）

（平面）



（平面）

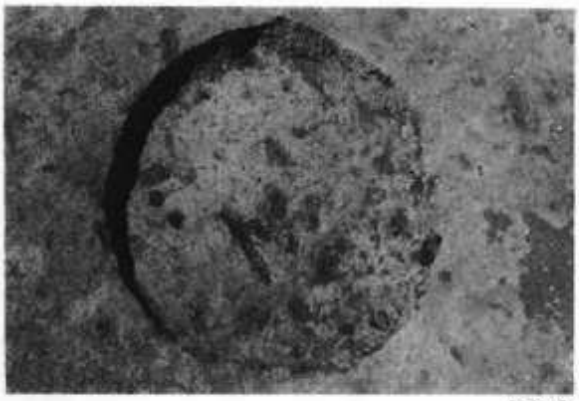
Ⅷ D－14ピット　（断面）



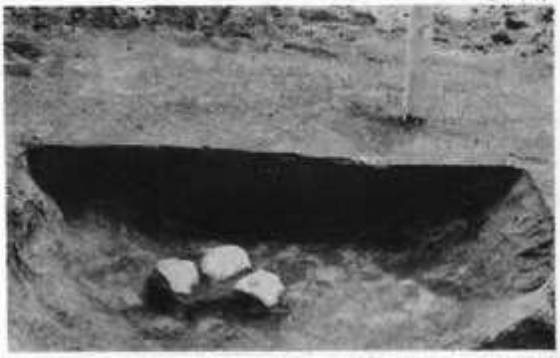
Ⅷ D－15ピット

写真図版35　ピット（縄文）(3)

（平面）

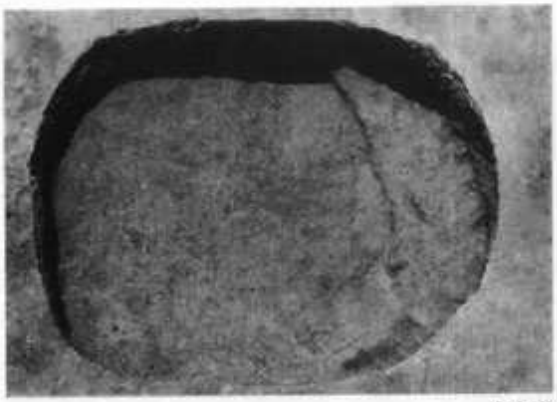


（平面）



Ⅵ D－13ピット　（断面）

Ⅶ E－2ピット　（断面）



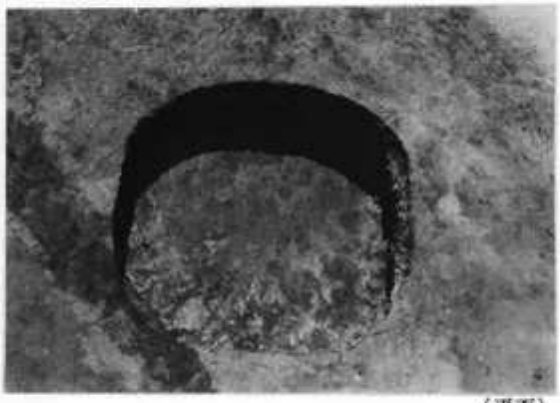
（平面）

（平面）

Ⅶ D－10ピット　（断面）

Ⅶ D－17ピット　（断面）

写真図版36　ピット（縄文・土師）(4)



（平面）

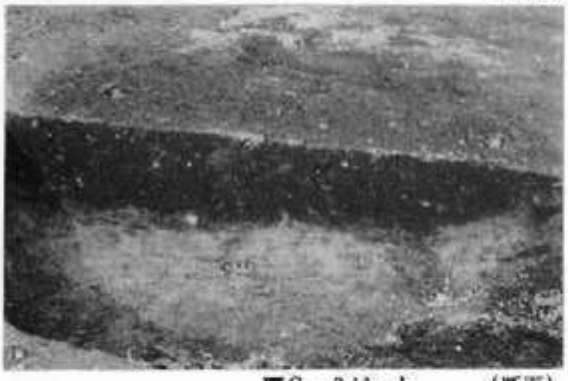
（平面）

Ⅶ D－11ピット　（断面）

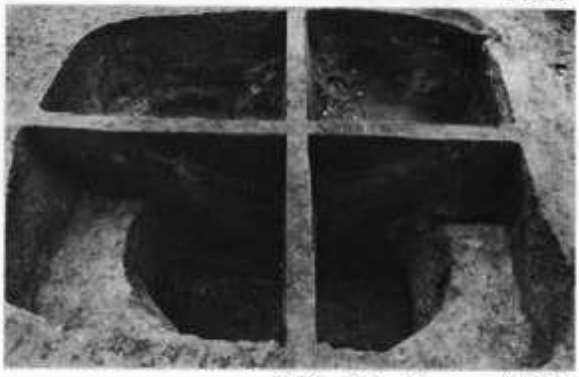
Ⅶ D－12ピット　（断面）

（平面）

（平面）



Ⅶ C－3ピット　（断面）



Ⅶ D－1ピット　（断面）

写真図版37　ピット（土師）(5)

（平面）

（平面）

Ⅵ E－2ピット　（断面）

Ⅷ D－1ピット　（断面）

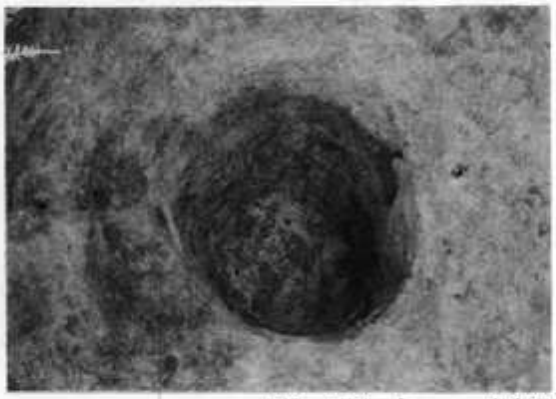
（平面）

（平面）

Ⅷ D－4ピット　（断面）

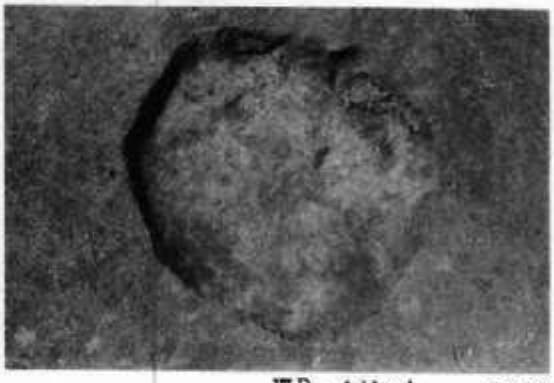
Ⅷ C－2ピット　（断面）

写真図版38　ピット（土師）(6)



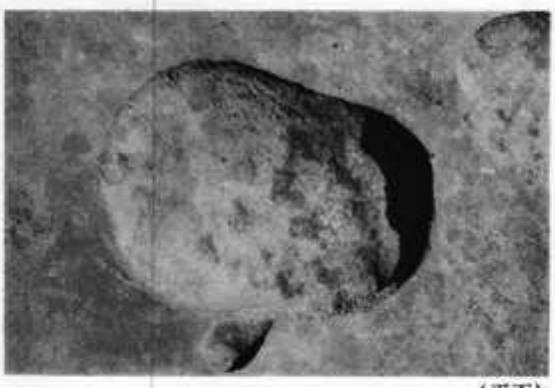
Ⅸ C－10ピット　（平面）

（平面）



Ⅶ D－4ピット　（平面）

Ⅶ C－1ピット　（断面）



（平面）

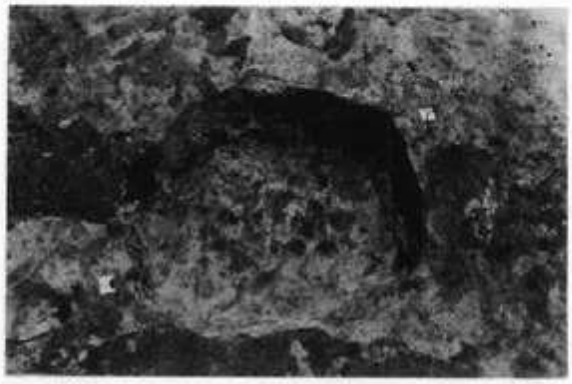
（平面）

Ⅵ D－8ピット　（断面）

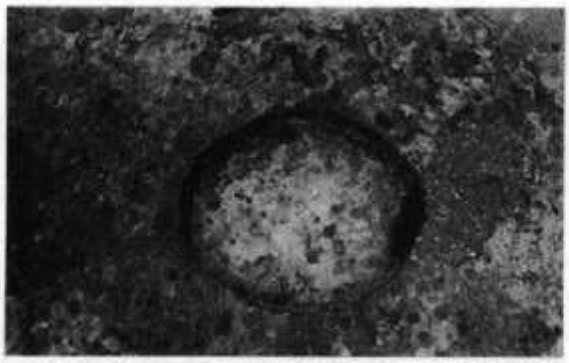
Ⅸ C－3ピット　（断面）

写真図版39　ピット（土師）(7)

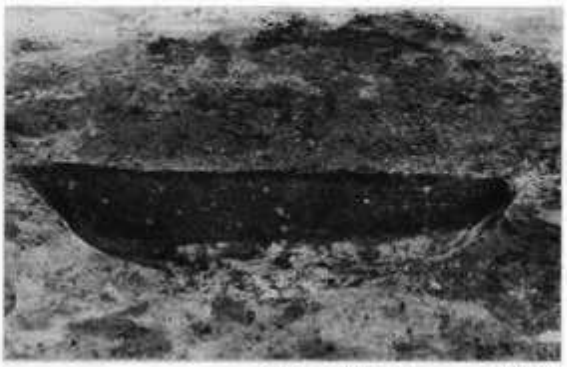
ⅦC－2ピット　（断面）



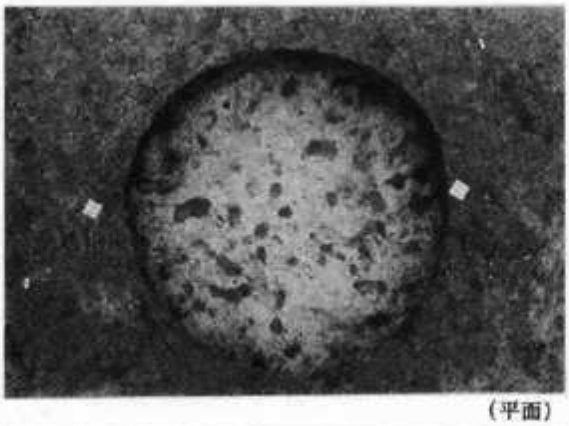
（平面）



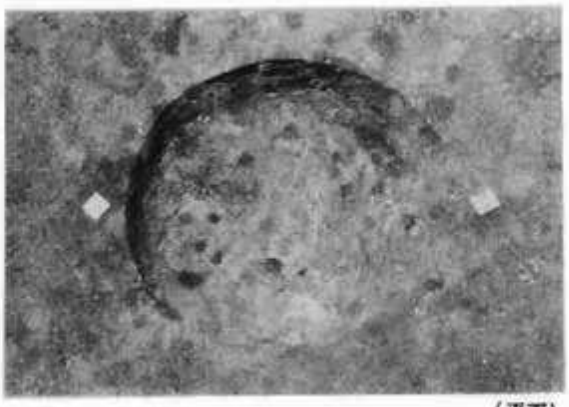
ⅥC－3ピット　（平面）



ⅥC－1ピット　（断面）

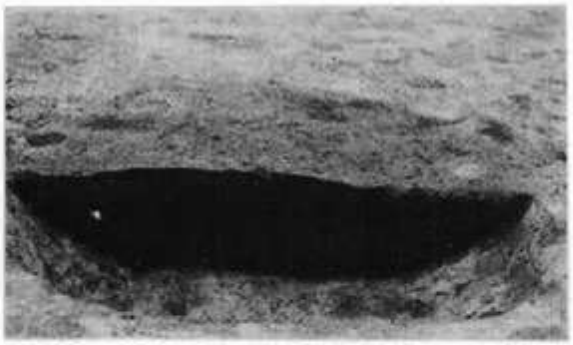


（平面）



（平面）

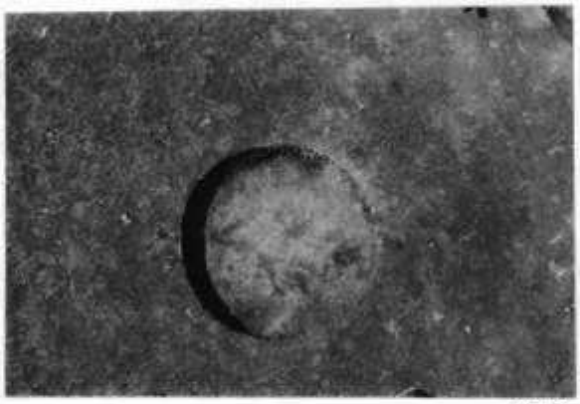
ⅥD－2ピット　（断面）



ⅥD－9ピット　（断面）

写真図版40　ピット（土師・時期不明）(8)

（平面）

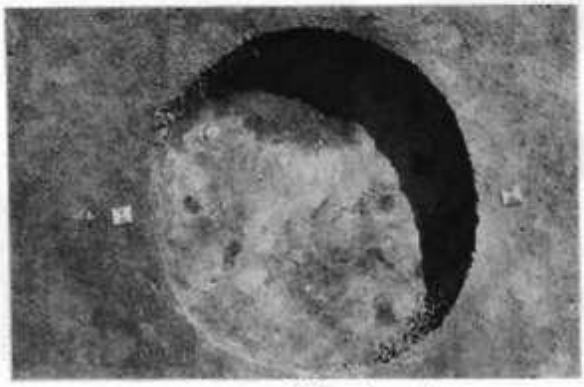


（平面）

Ⅵ D－12ピット　（断面）

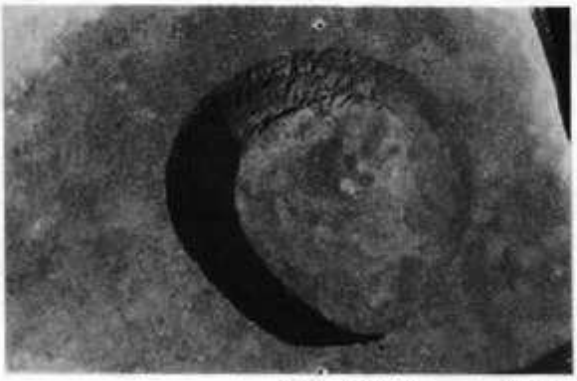
Ⅶ D－5ピット　（断面）

（平面）



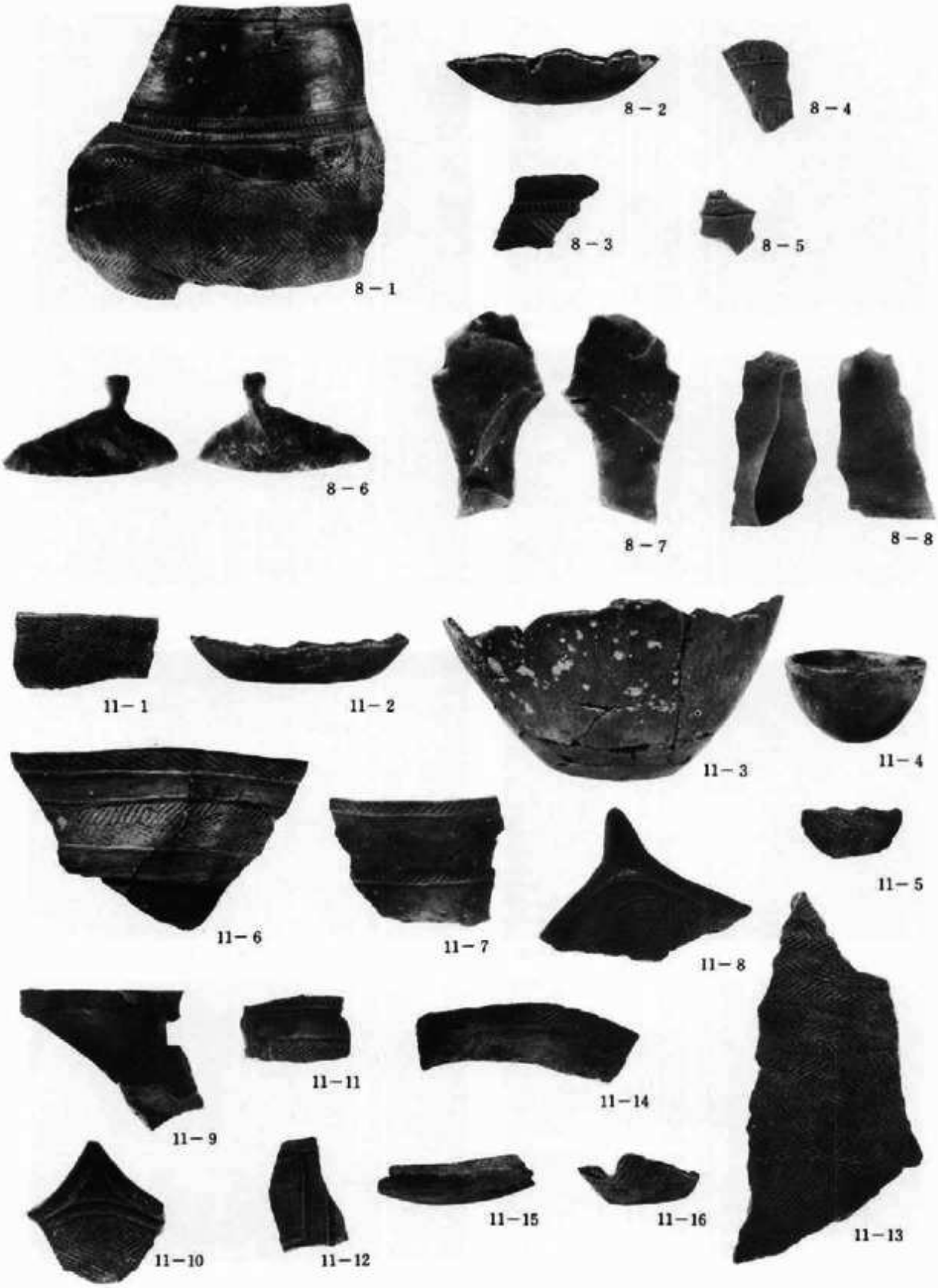
Ⅶ D－6ピット　（平面）

Ⅶ D－7ピット　（断面）

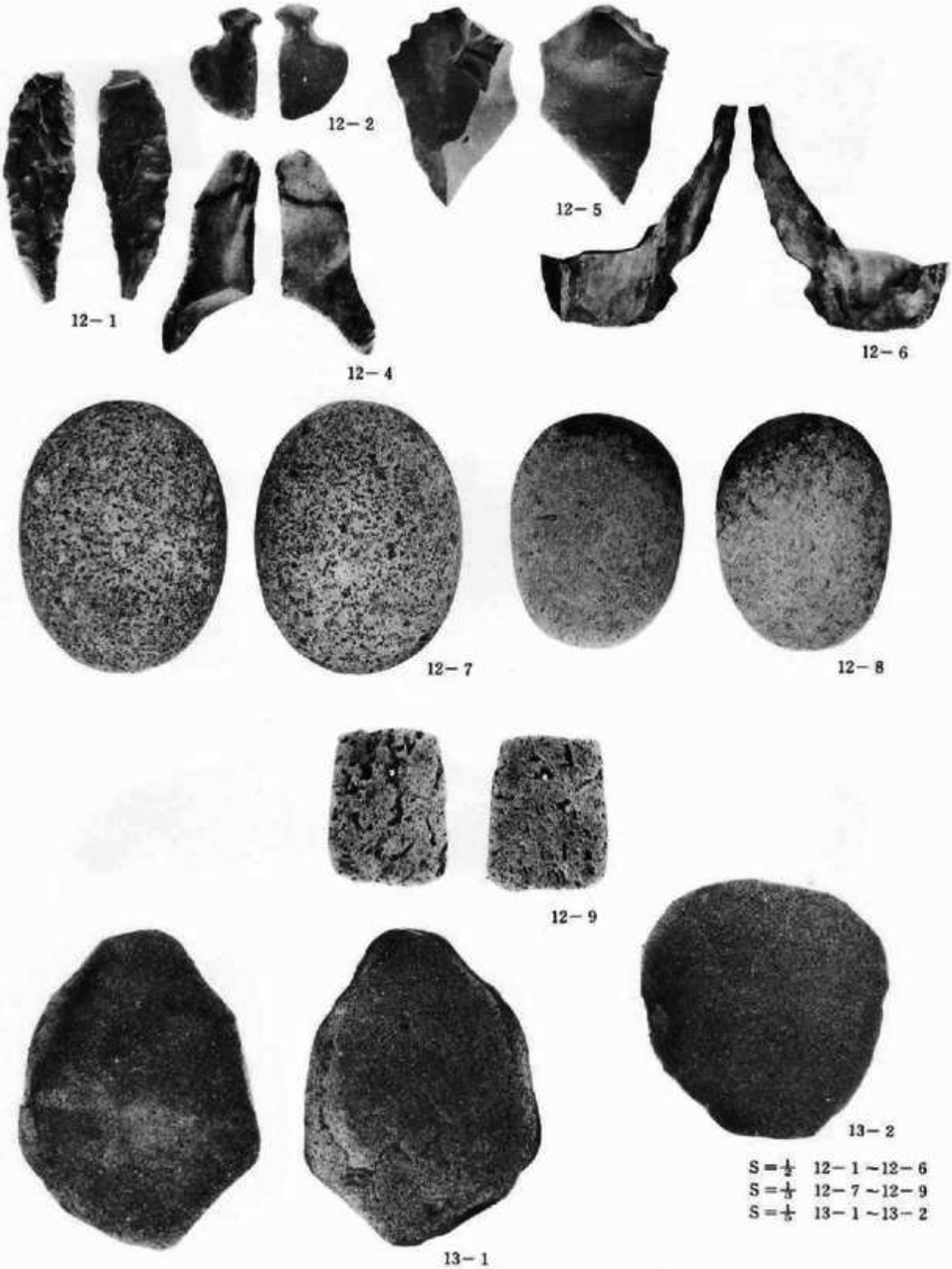


Ⅸ D－2ピット　（平面）

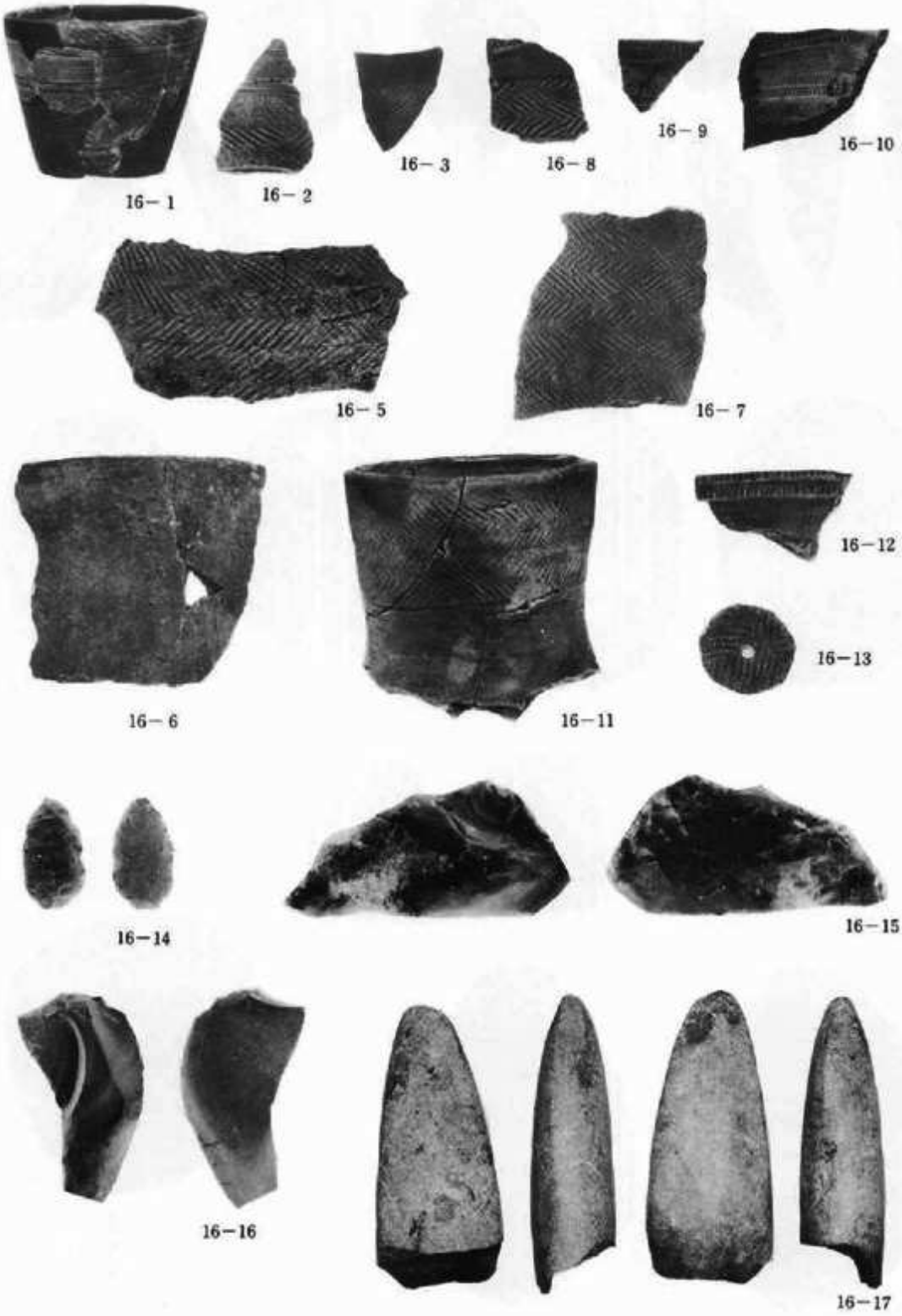
写真図版41　ピット（時期不明）(9)



写真図版42　Ⅷ D－2住居址，Ⅷ D－3住居址内出土遺物



写真図版43　Ⅷ D－3 住居址内出土遺物



写真図版44　Ⅸ D－Ⅰ住居址内出土遺物

20－1

20－2

20－3

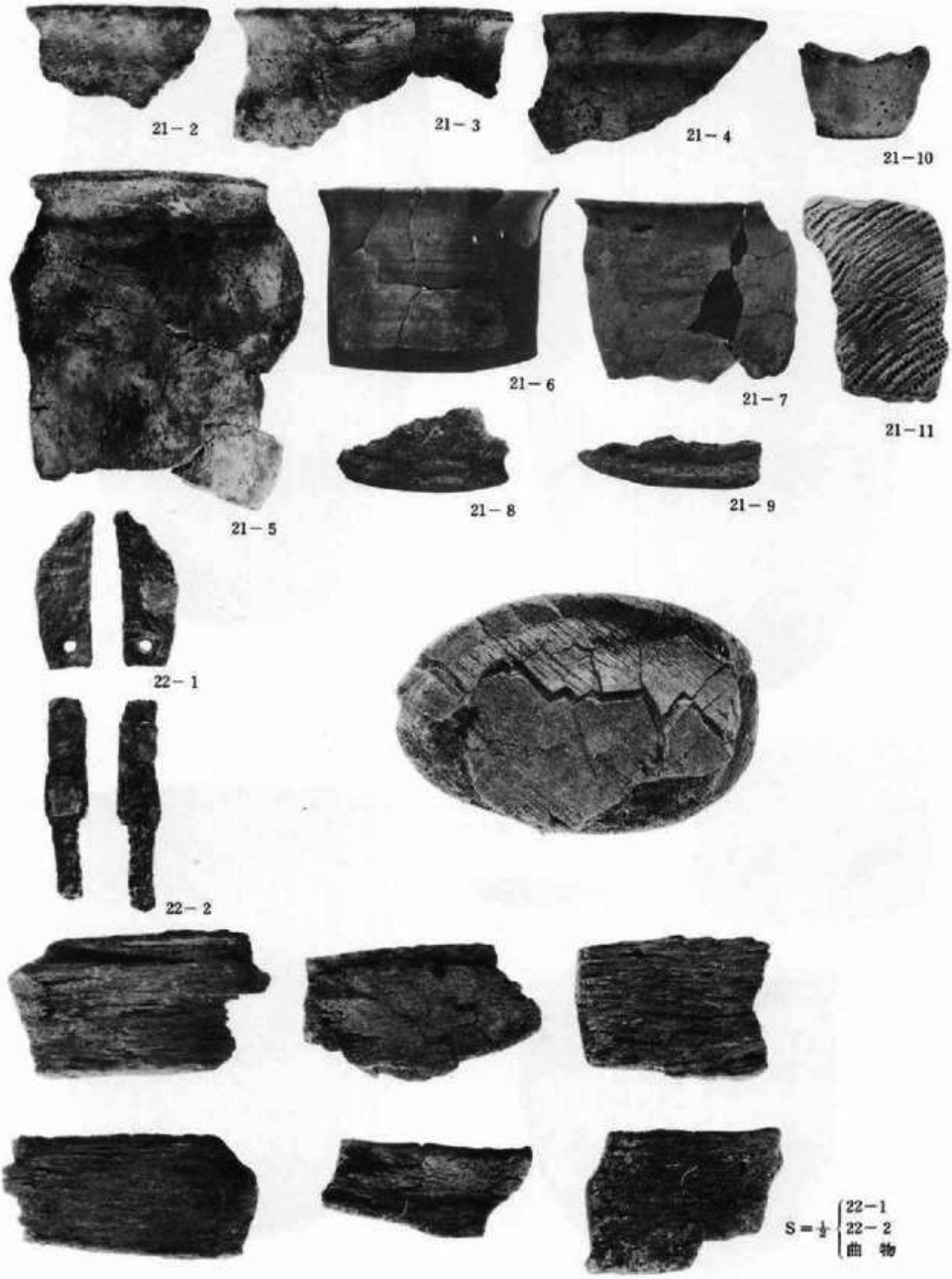
20－5

20－6

20－4

21－1

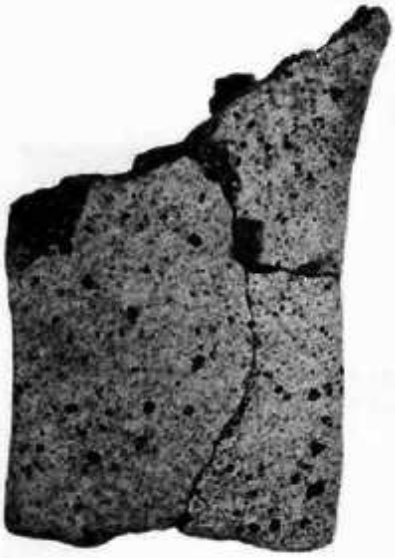
写真図版45　Ⅶ C －Ⅰ住居址内出土遺物(1)



写真図版46　Ⅶ C ー 1 住居址内出土遺物(2)

26－1

26－3



26－6

26－2

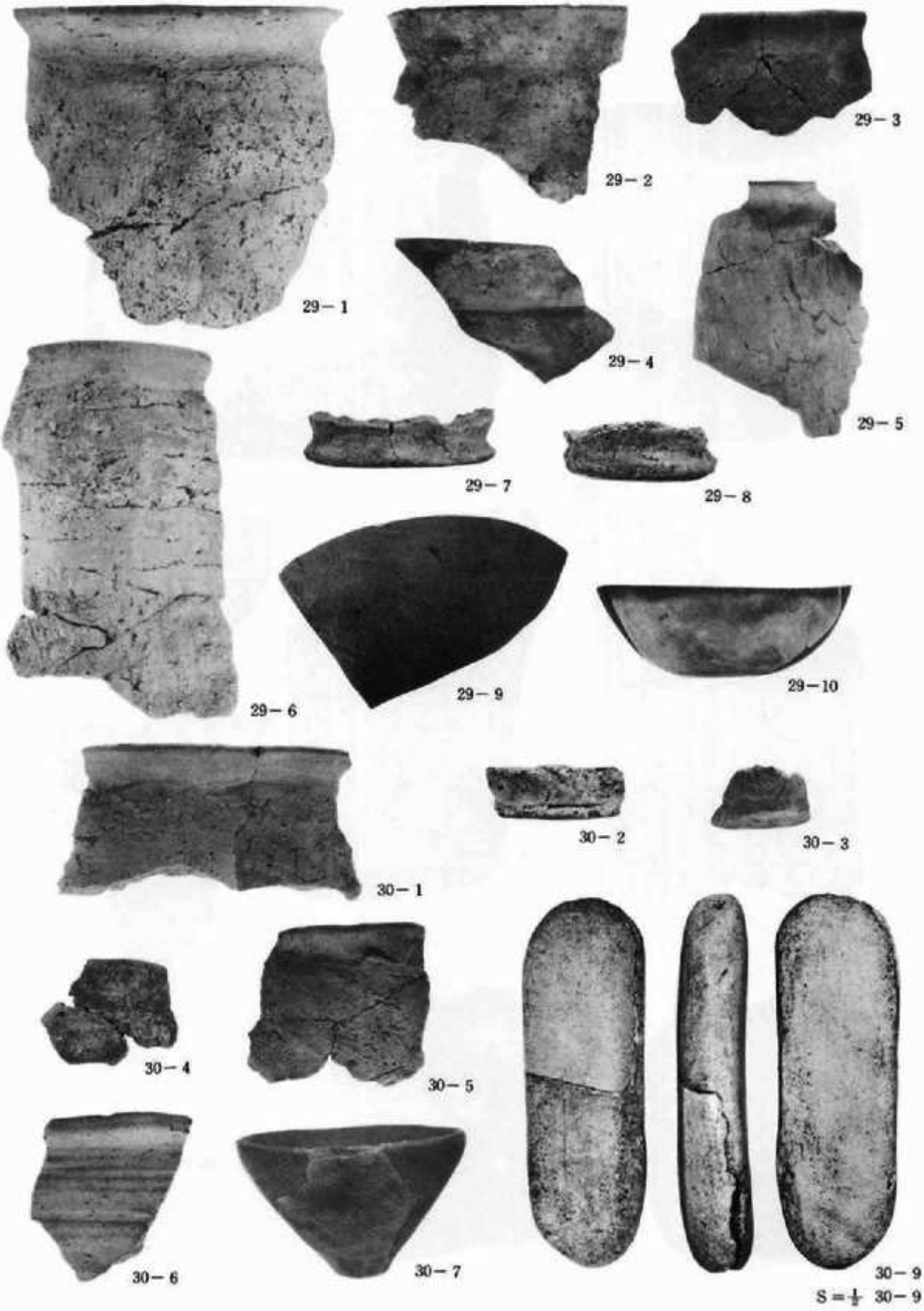
26－4

26－5

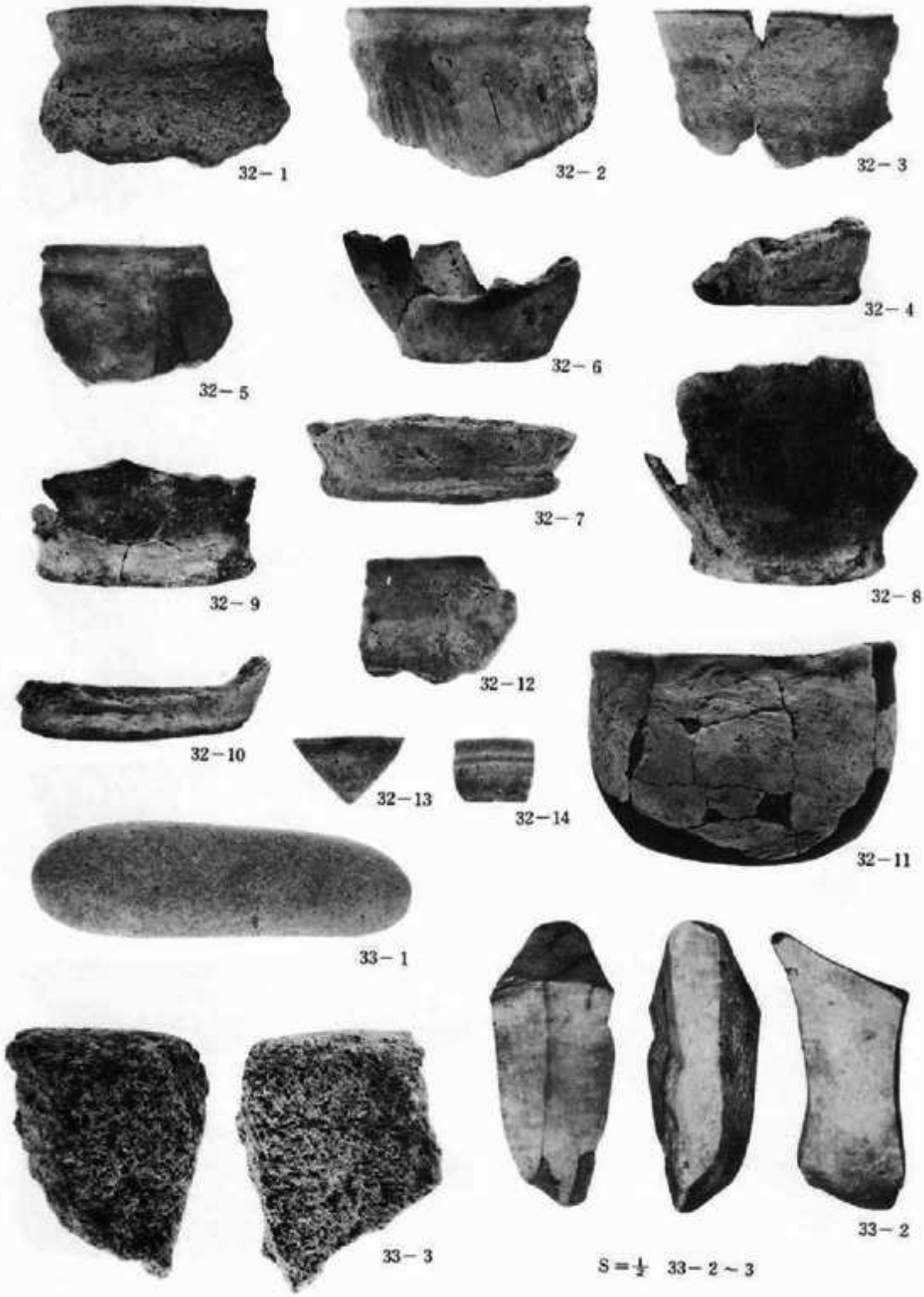
26－7

S＝$\frac{1}{3}$　26－1～5
S＝$\frac{1}{2}$　26－6～7

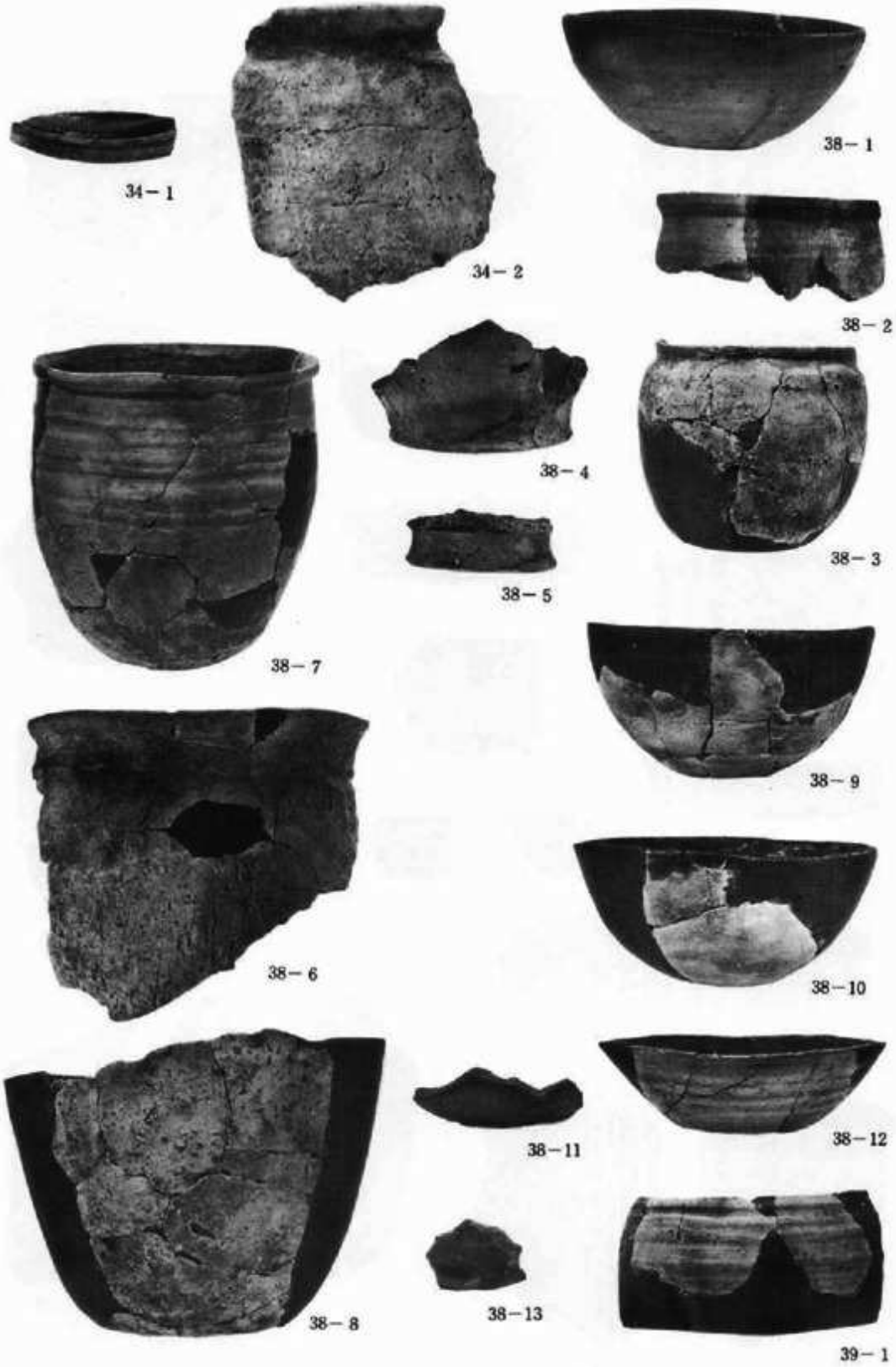
写真図版47　Ⅶ C－4 住居址内出土遺物



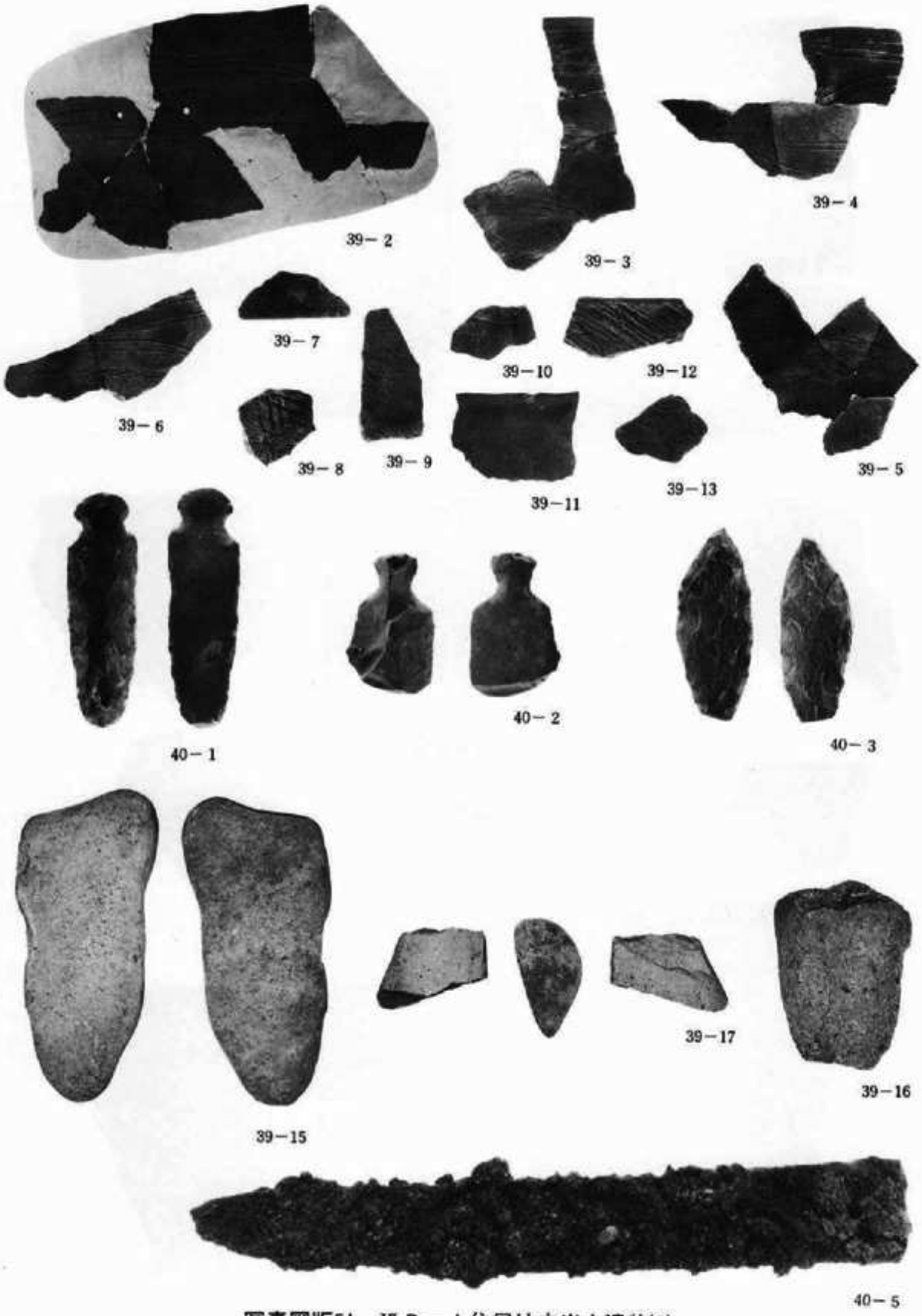
写真図版48　Ⅷ C －3 住居址内出土遺物



写真図版49　Ⅷ C－2 住居址内出土遺物



写真図版50　Ⅵ E－2住居址状遺構
Ⅵ D－Ⅰ住居址内出土遺物(Ⅰ)

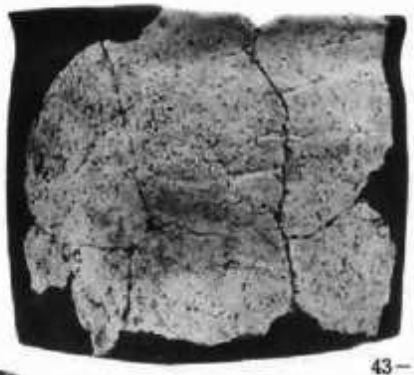


写真図版51　Ⅵ D－Ⅰ住居址内出土遺物(2)

43－1

43－2

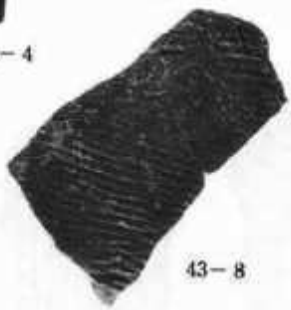
43－3


43－4

43－5

43－6

43－7

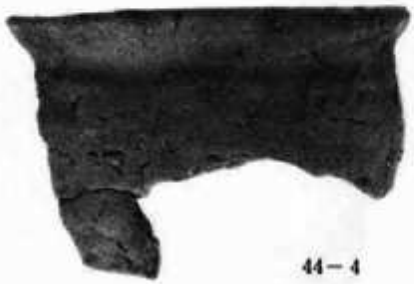

43－8

44－1

44－2

写真図版52　Ⅶ D－2 住居址内出土遺物(1)

44－3


44－4

44－5

44－6

45－1

45－2

45－3

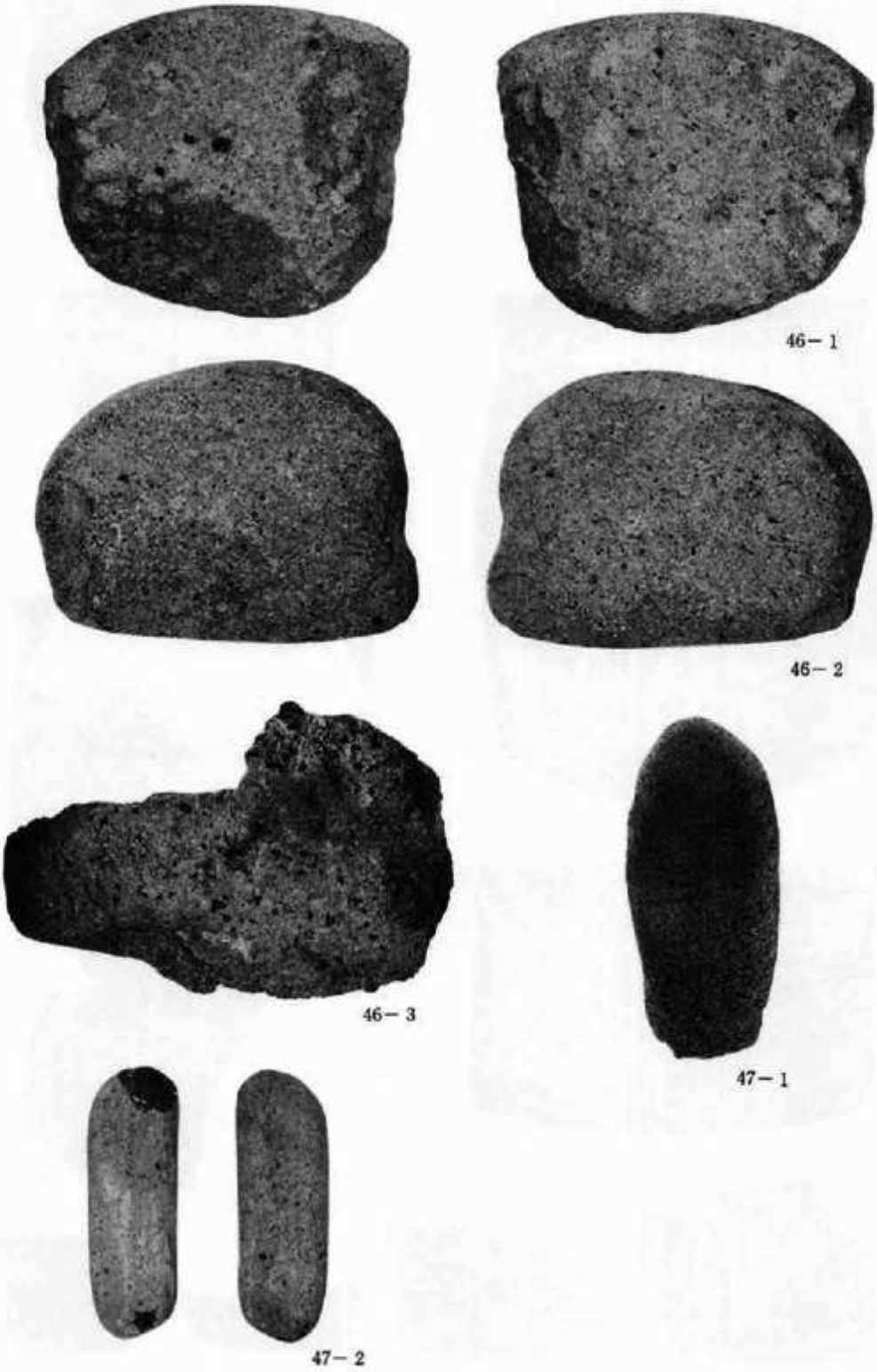
45－4

45－5

45－6

45－7

写真図版53　Ⅶ D－2 住居址内出土遺物(2)



写真図版54　Ⅶ D－2 住居址内出土遺物(3)

50－1

50－2

50－3

50－4

50－4（裸眼）

50－6

50－5

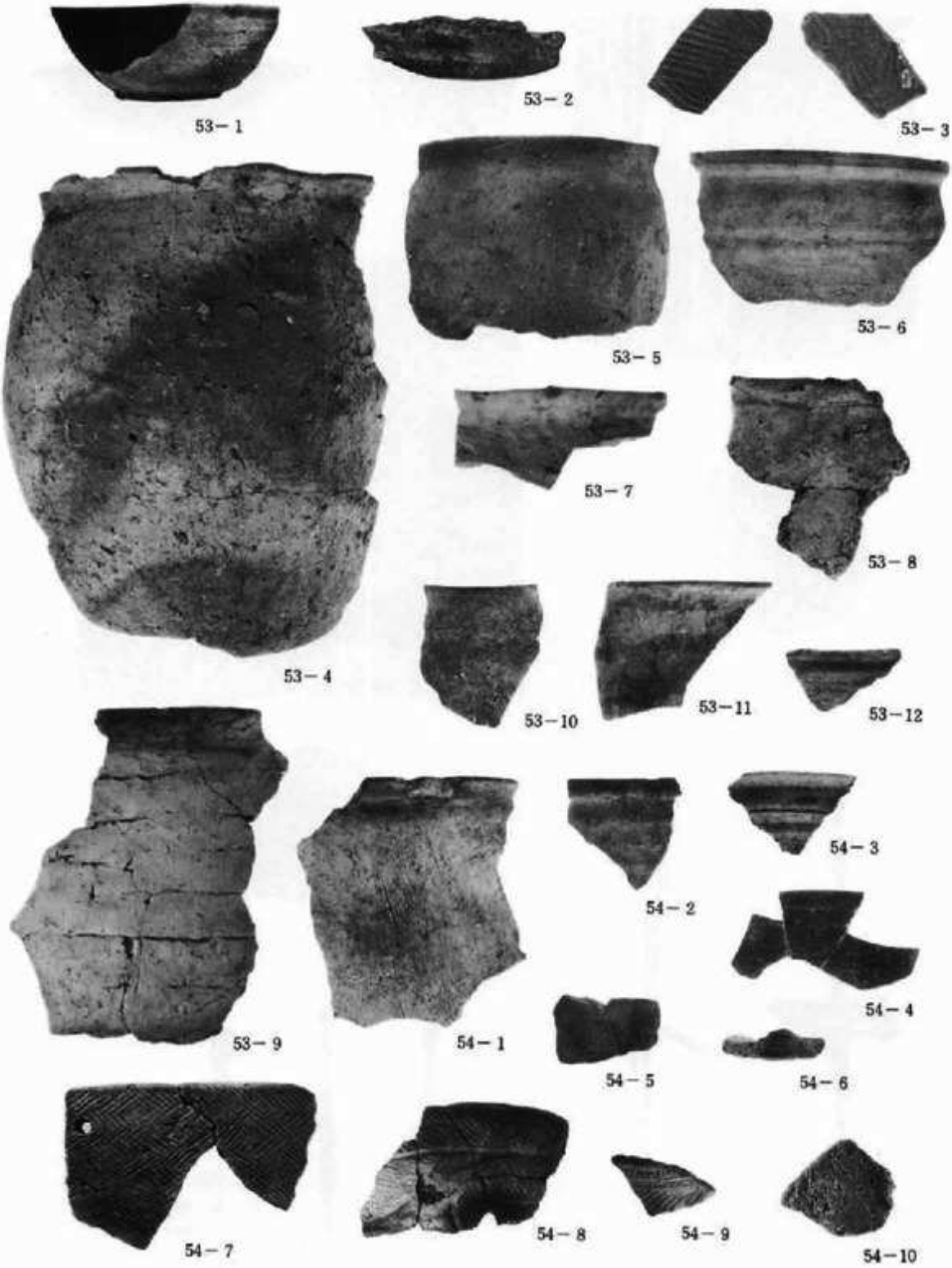
50－7

50－8

50－9

S＝不定　50－4（裸眼）
S＝$\frac{1}{3}$　50－6
S＝$\frac{1}{2}$　50－7～9

写真図版55　ⅦＤ－３住居址内出土遺物



写真図版56　Ⅶ D－Ⅰ住居址内出土遺物

56－1

56－2

56－3

59－1

59－2

59－3

59－4

59－6

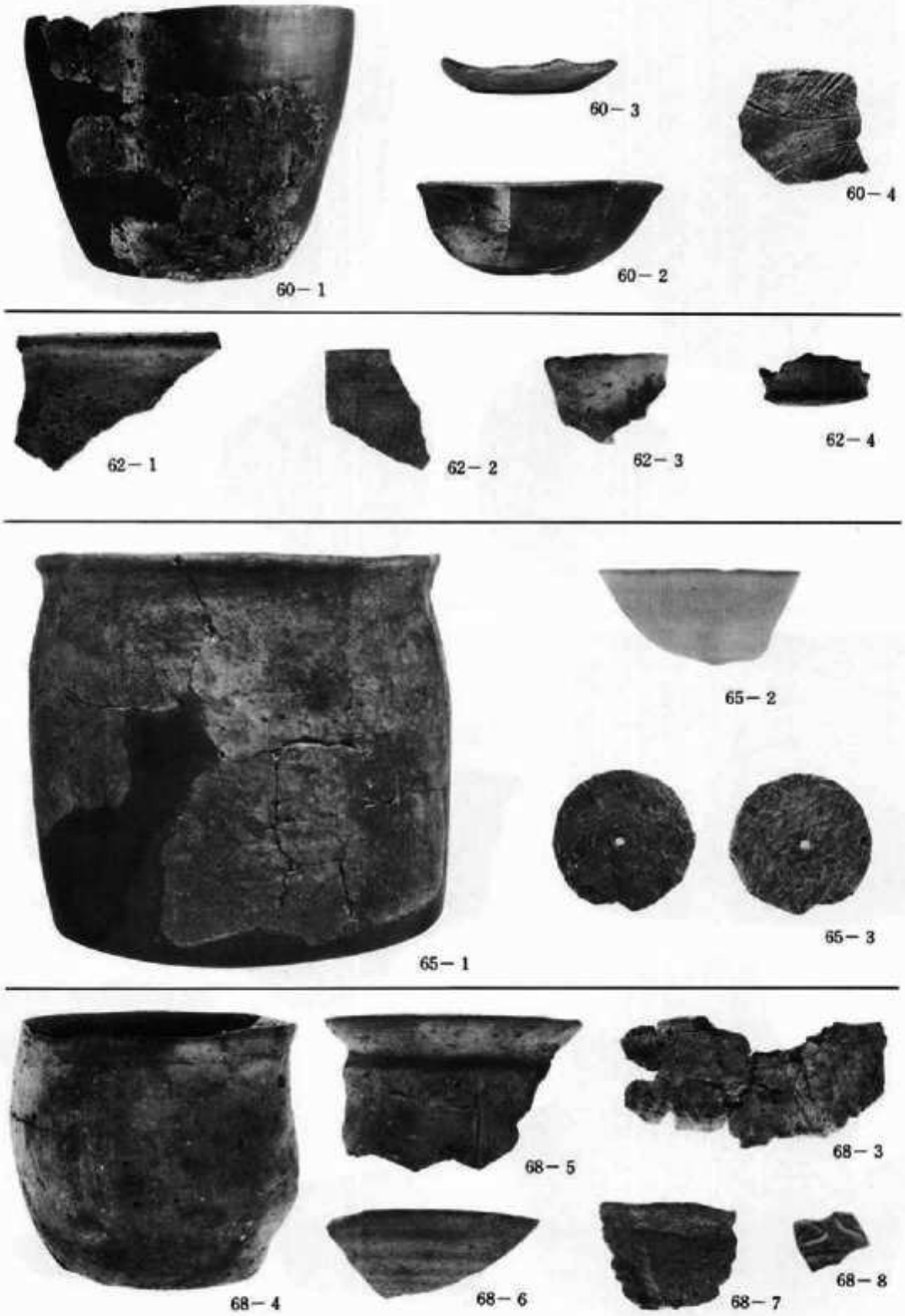
59－5

59－7

59－8

59－9

写真図版57　Ⅵ E－Ⅰ住居址，Ⅷ D－Ⅰ住居址内出土遺物



写真図版58　Ⅷ D－Ⅰ住居址内出土遺物，Ⅷ C－Ⅰ住居址内出土遺物
Ⅸ C－Ⅰ住居址内出土遺物，Ⅹ C－Ⅰ住居址内出土遺物

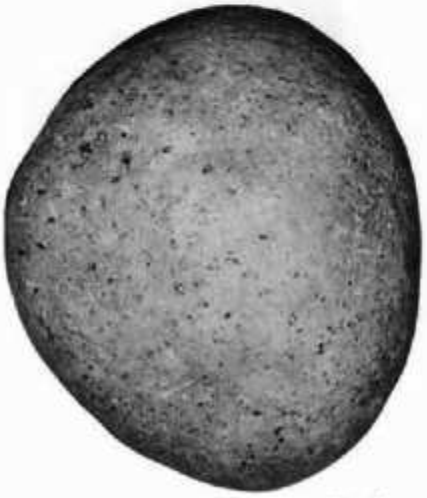
68－1

68－2

77－4

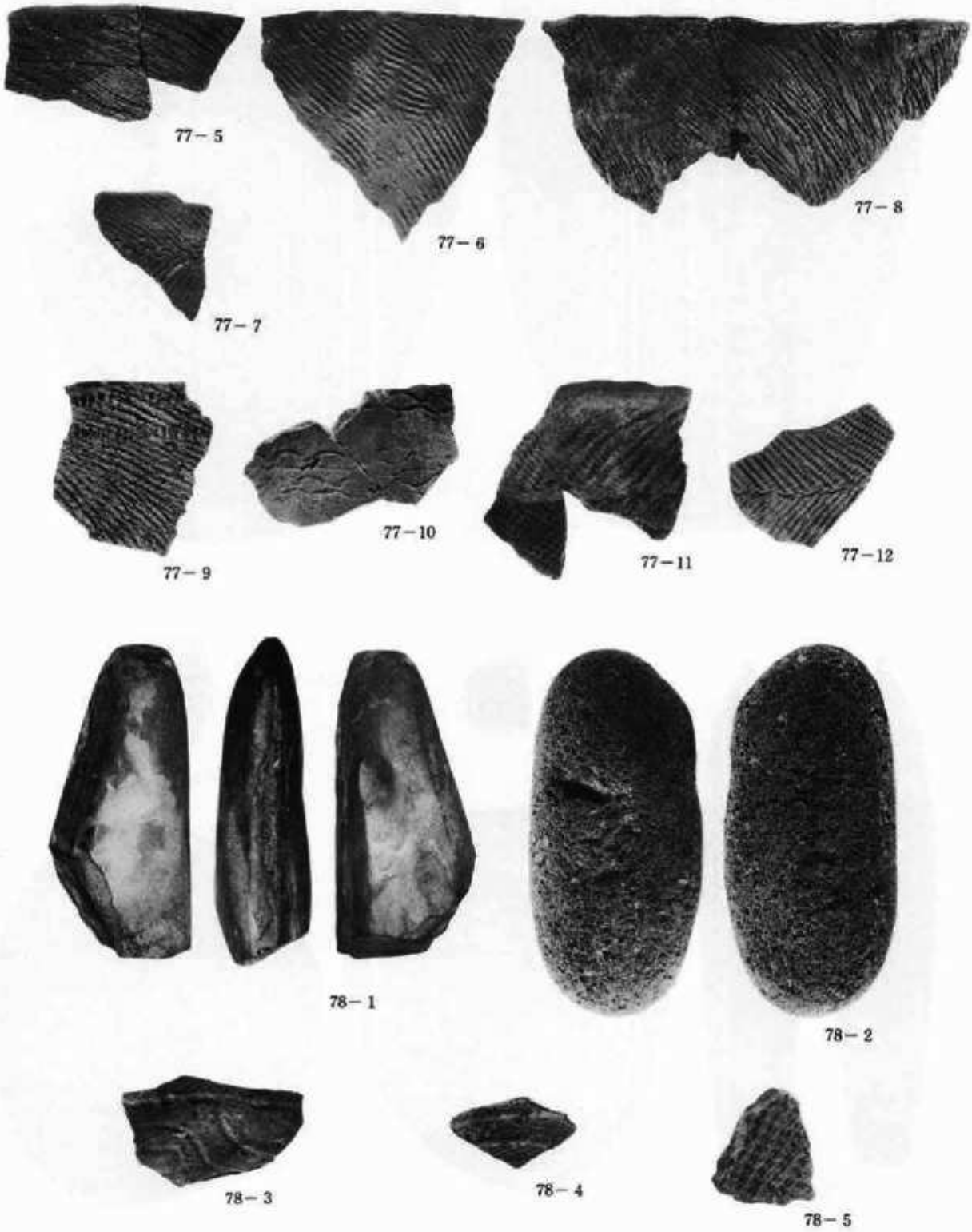
77－1

77－2

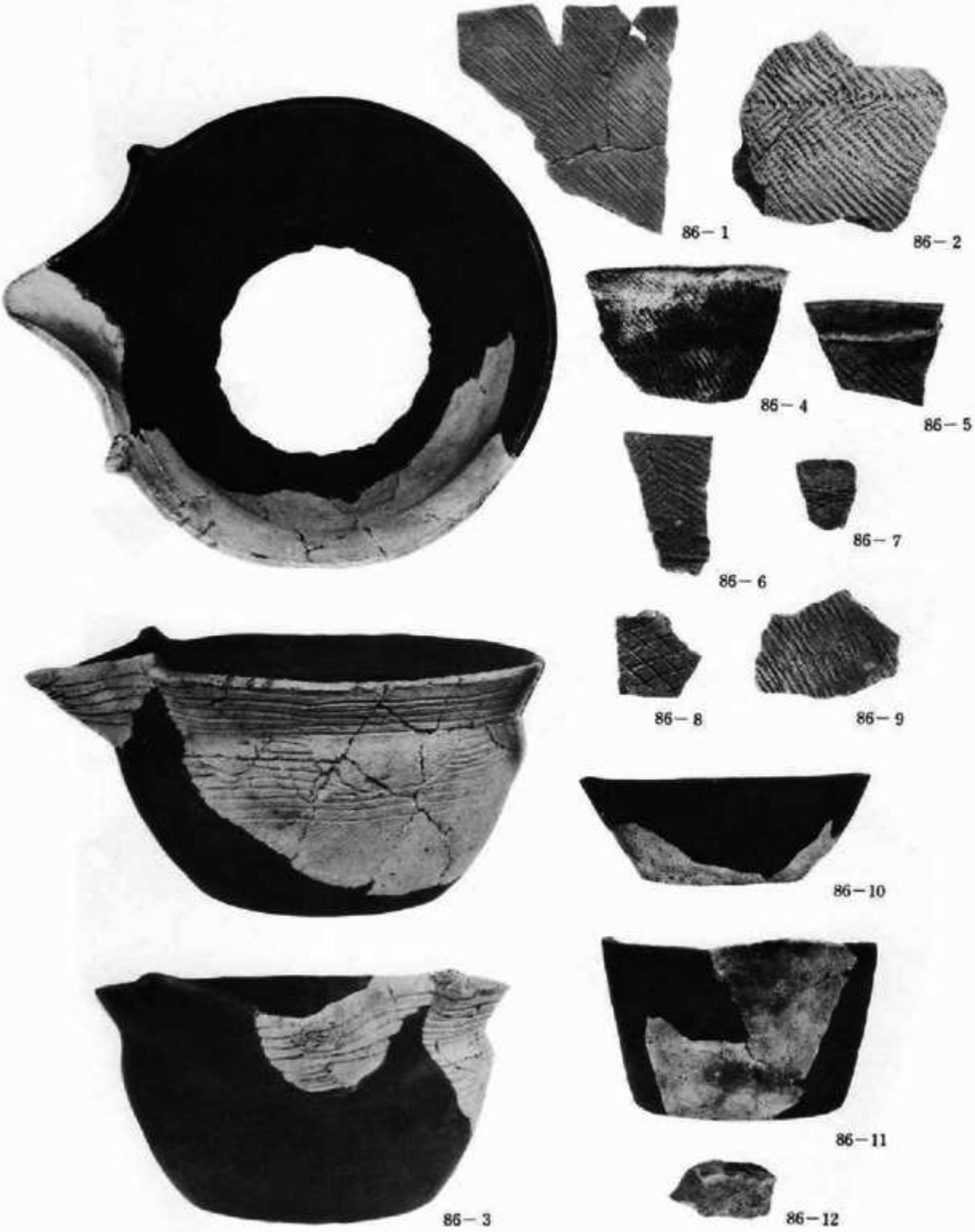


77－3

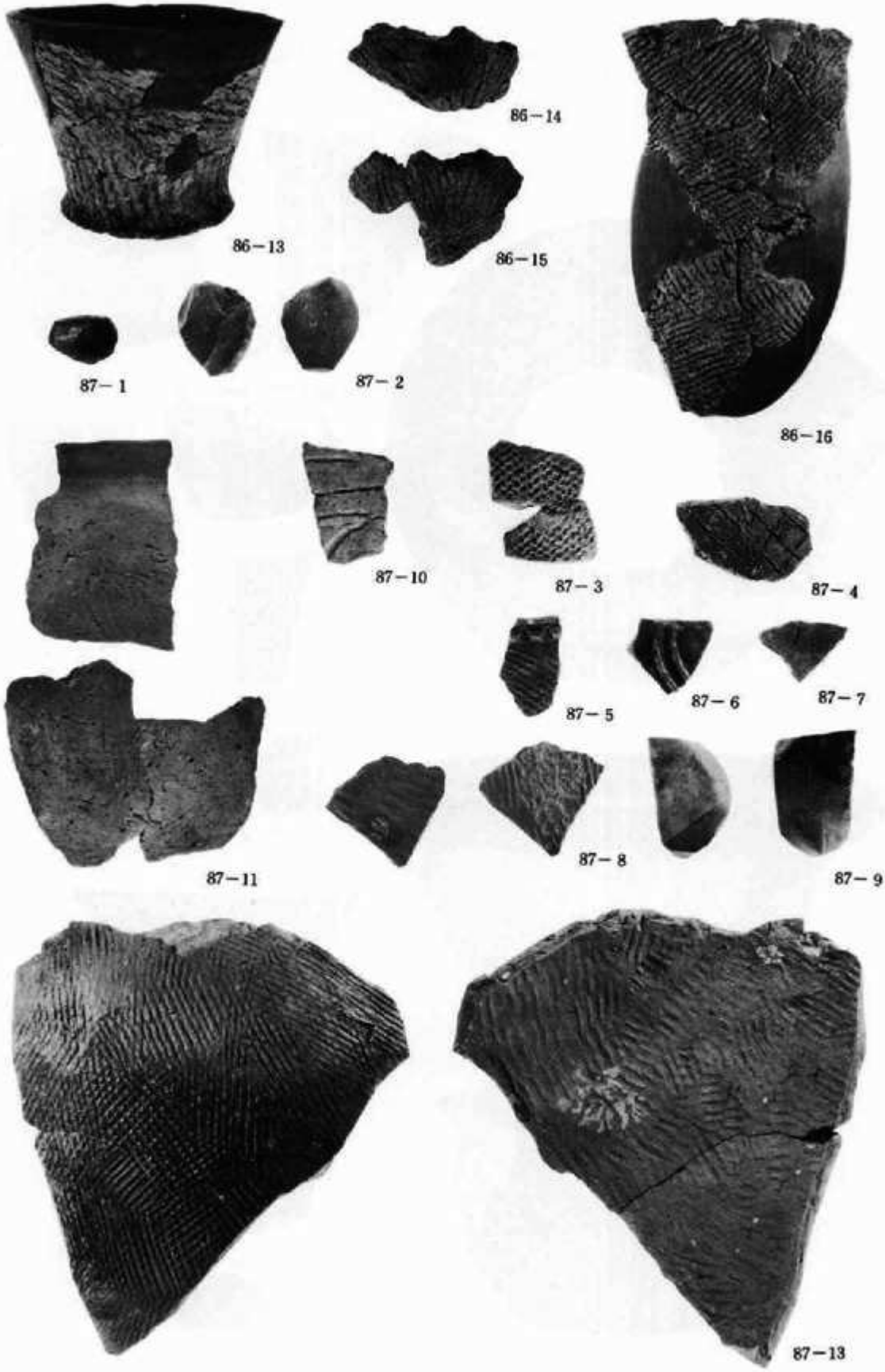
写真図版59　ＸＣ－１住居址内出土遺物
陥し穴内出土遺物



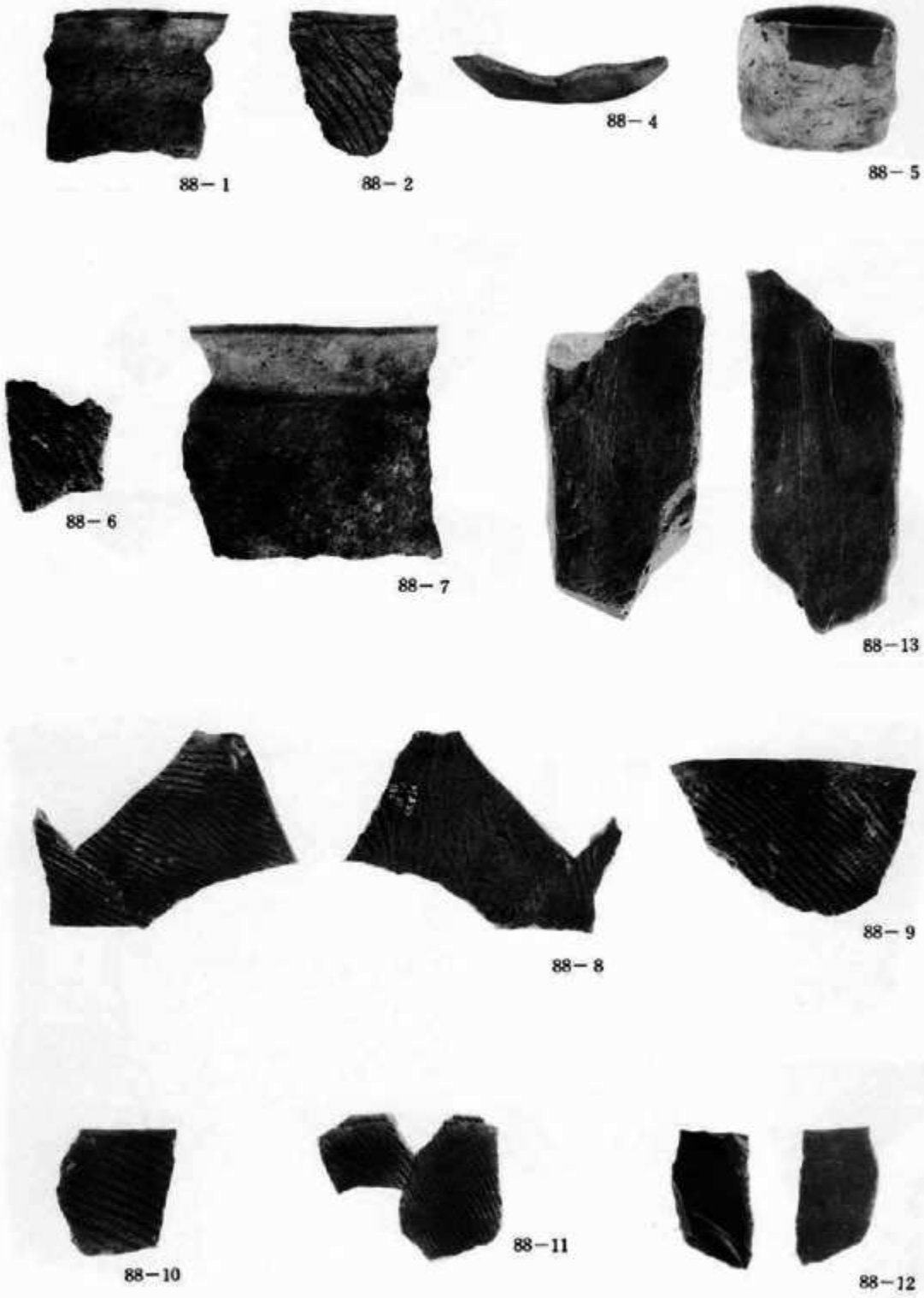
写真図版60　陥し穴内出土遺物



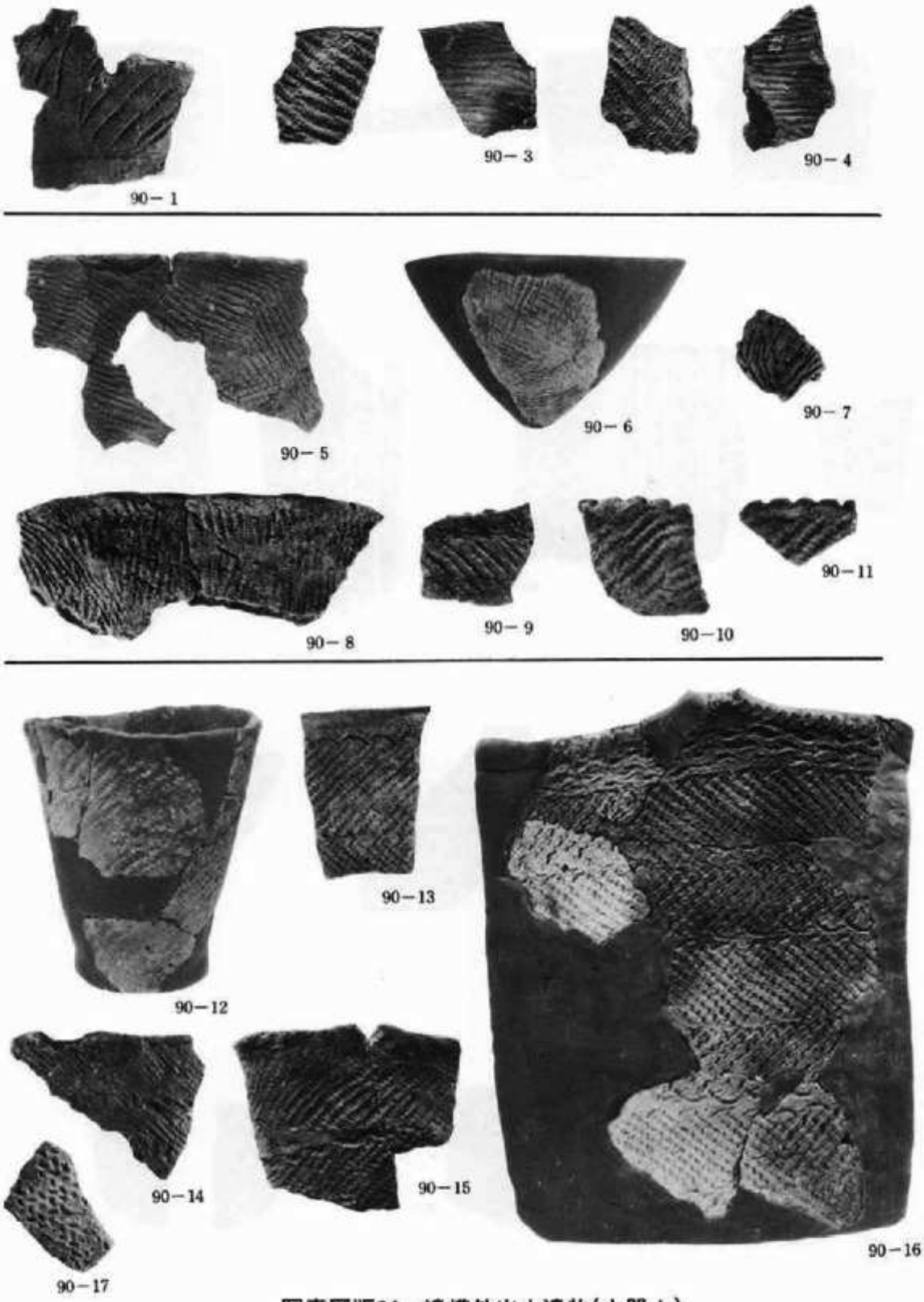
写真図版61　ピット内出土遺物



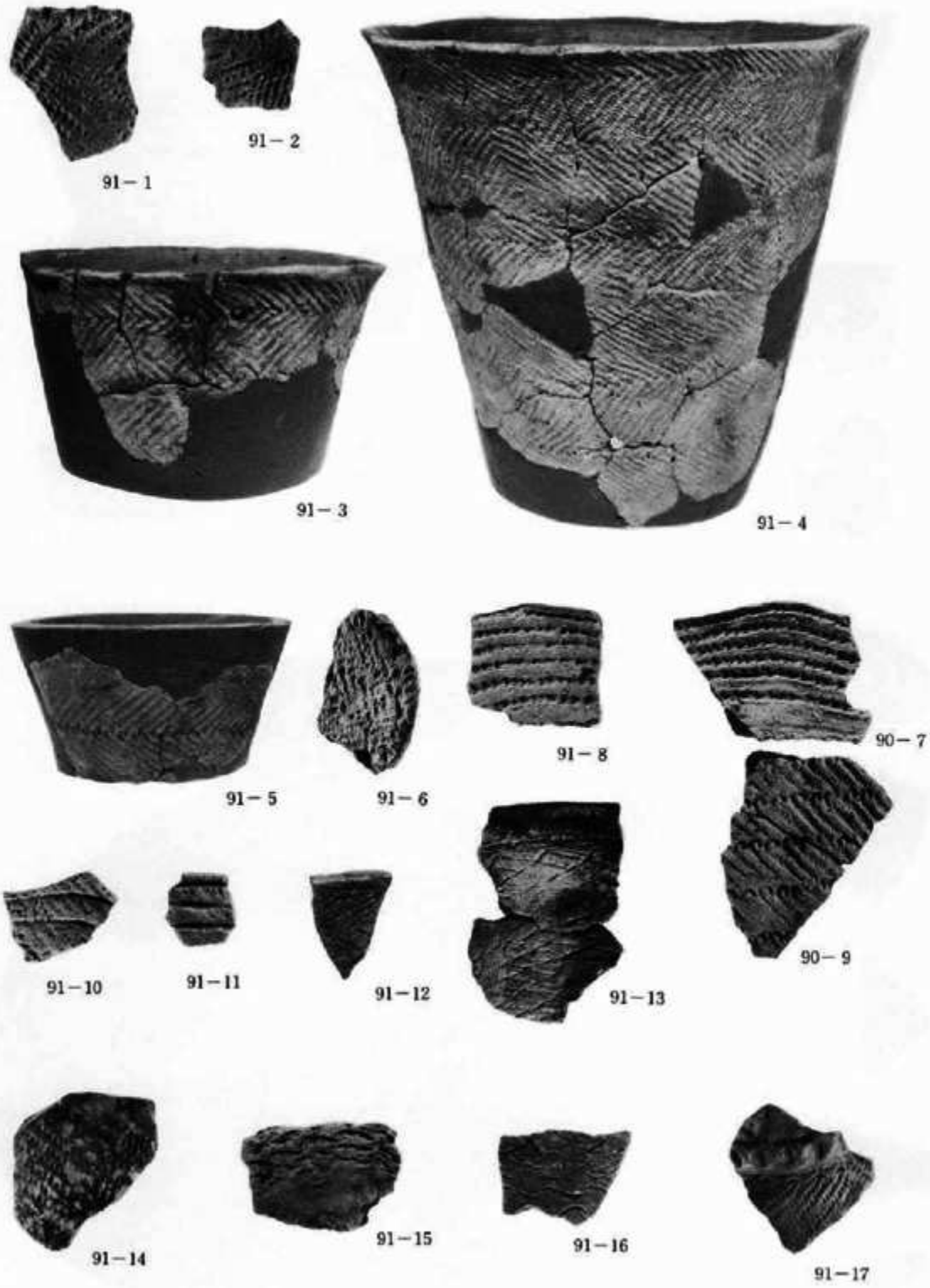
写真図版62　ピット内出土遺物



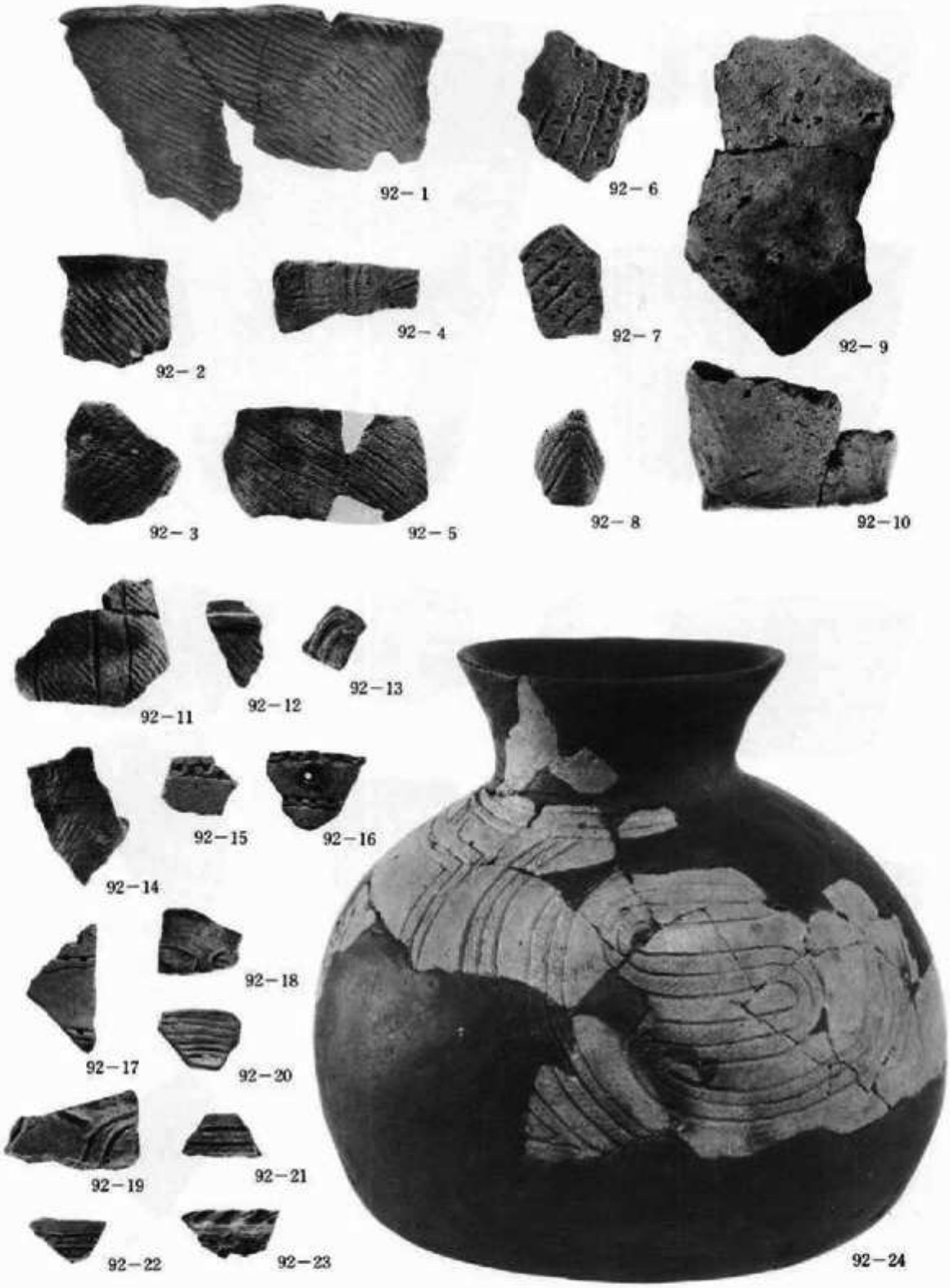
写真図版63　ピット内出土遺物



写真図版64　遺構外出土遺物(土器Ⅰ)

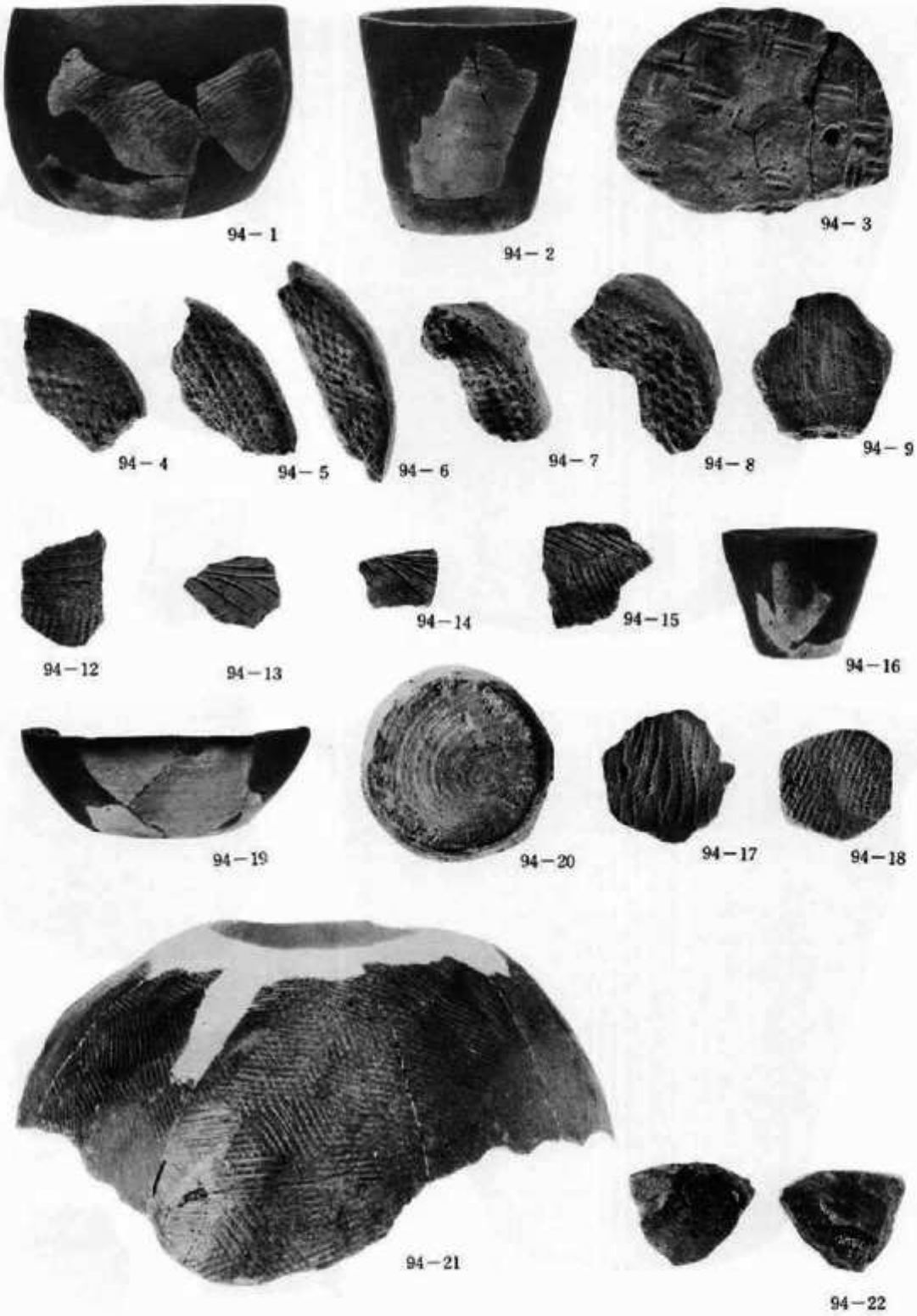


写真図版65　遺構外出土遺物(土器２)

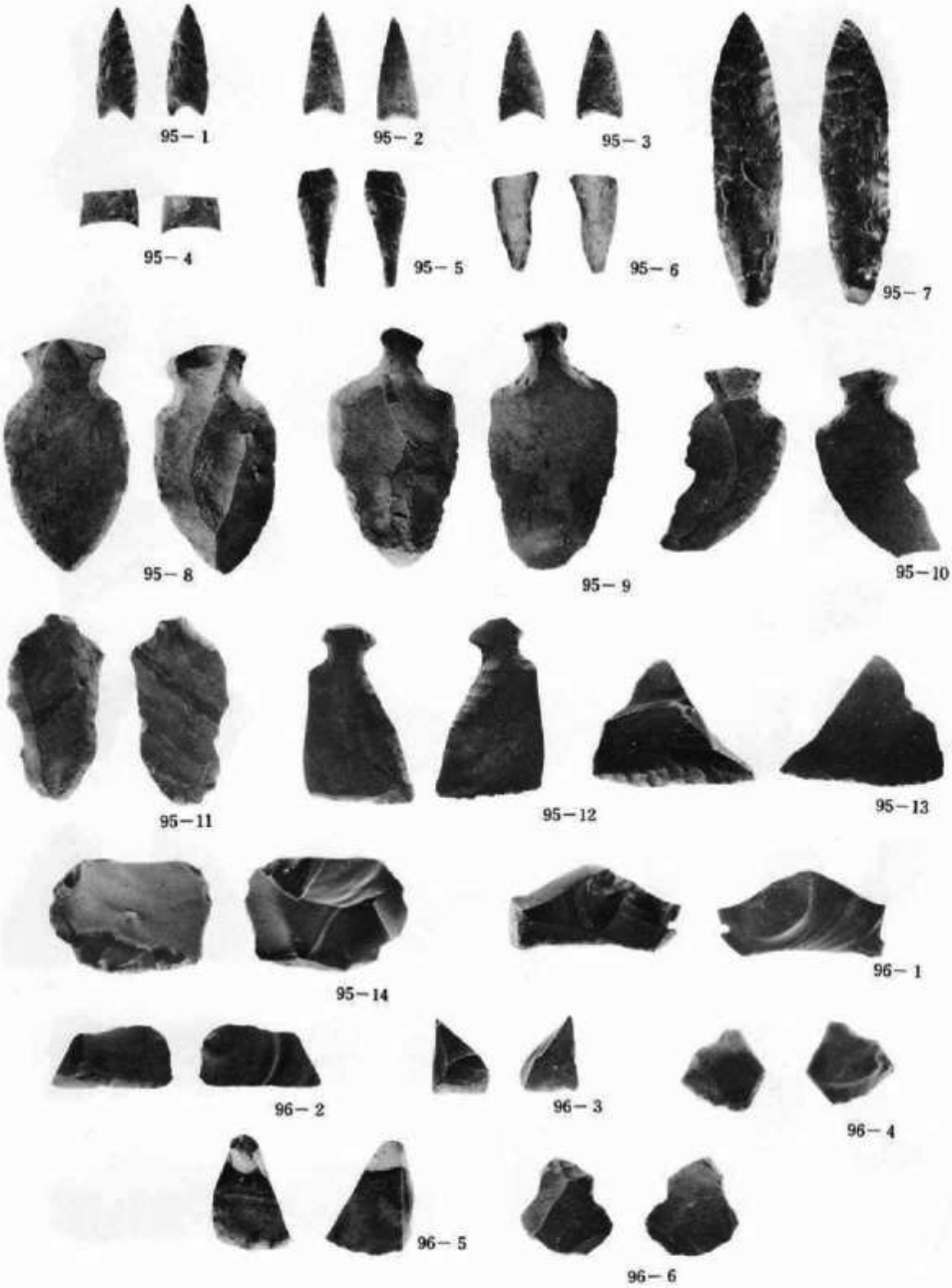


写真図版66　遺構外出土遺物(土器３)

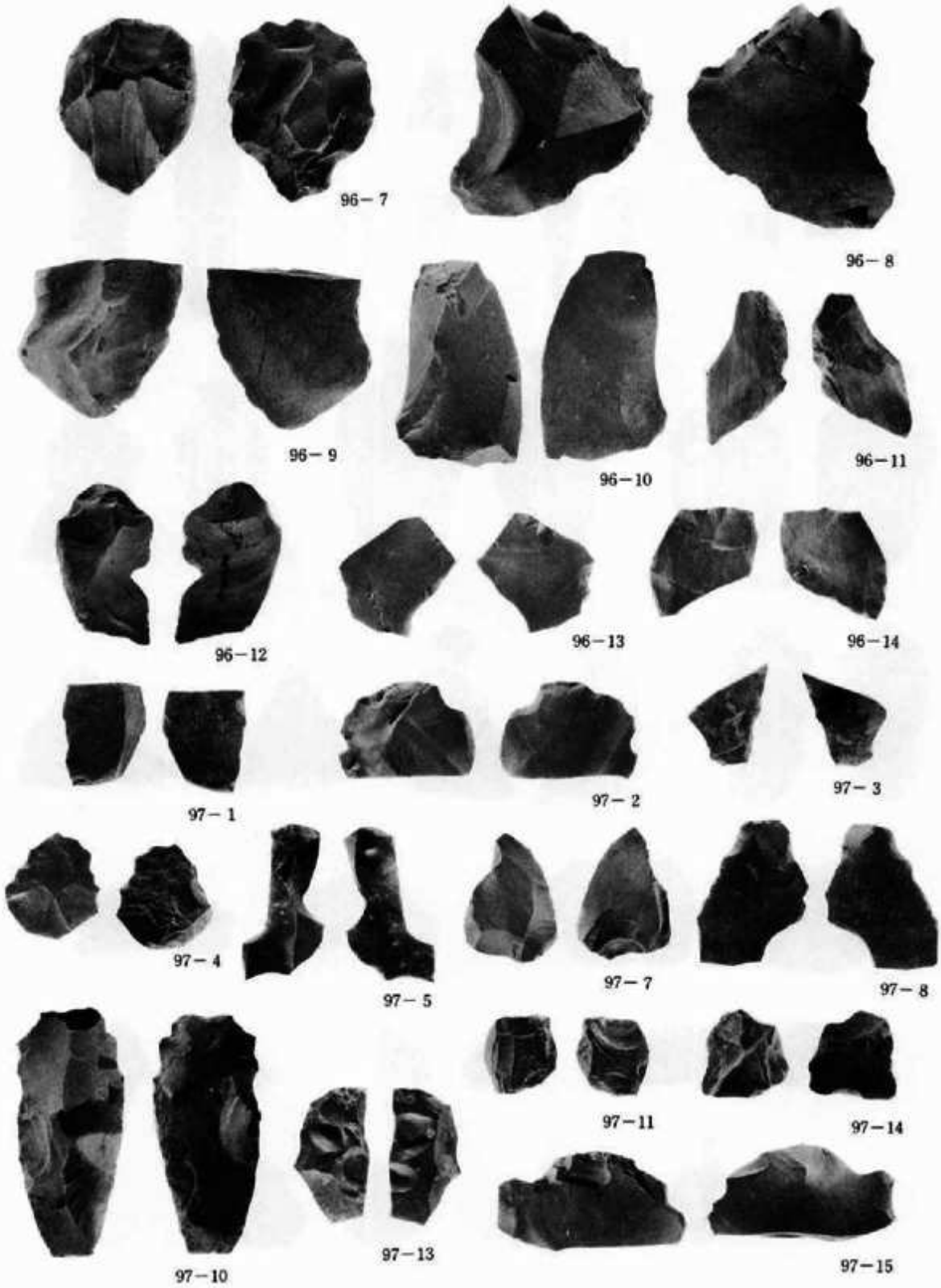
写真図版67　遺構外出土遺物(土器４)



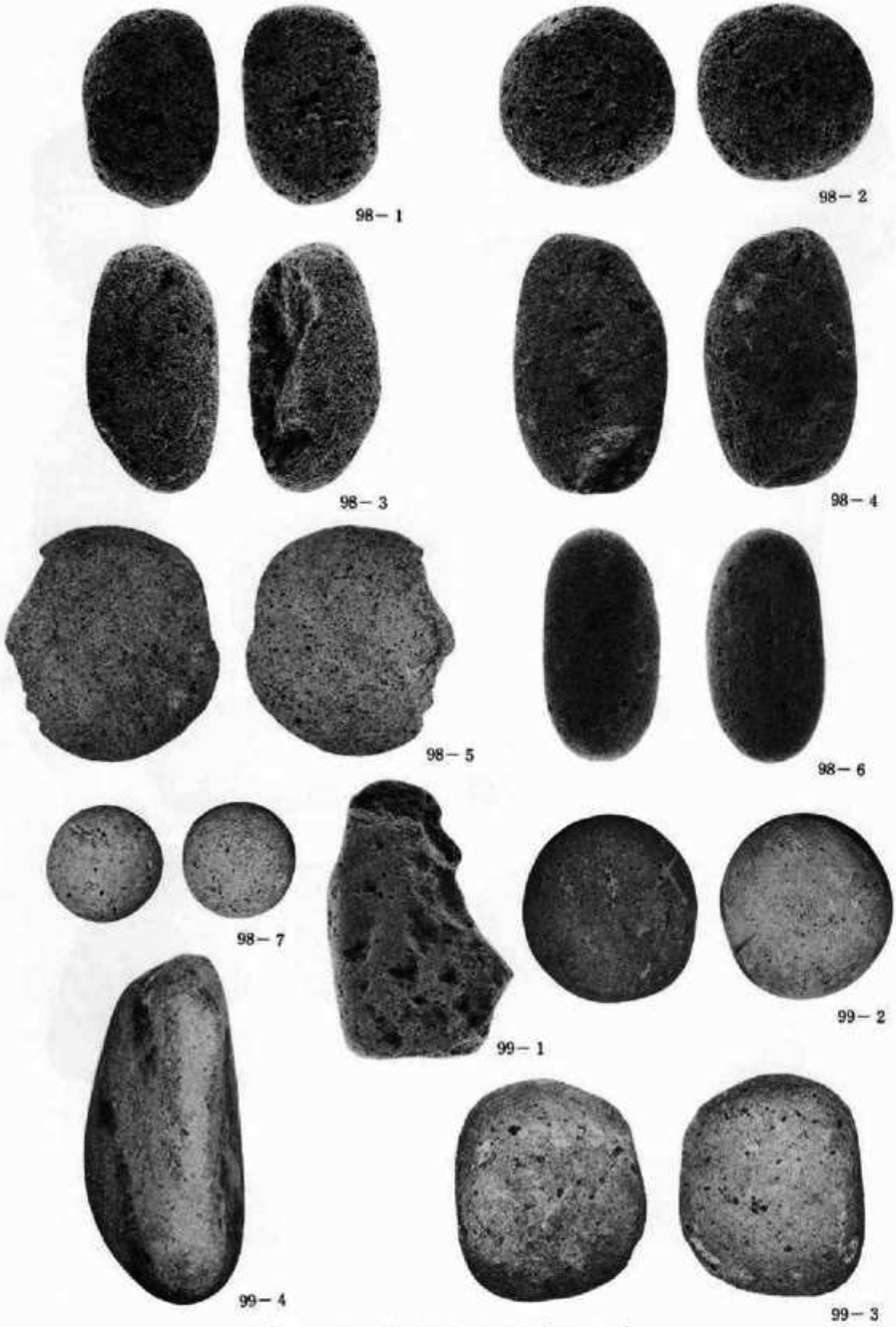
写真図版68　遺構外出土遺物(土器５他)



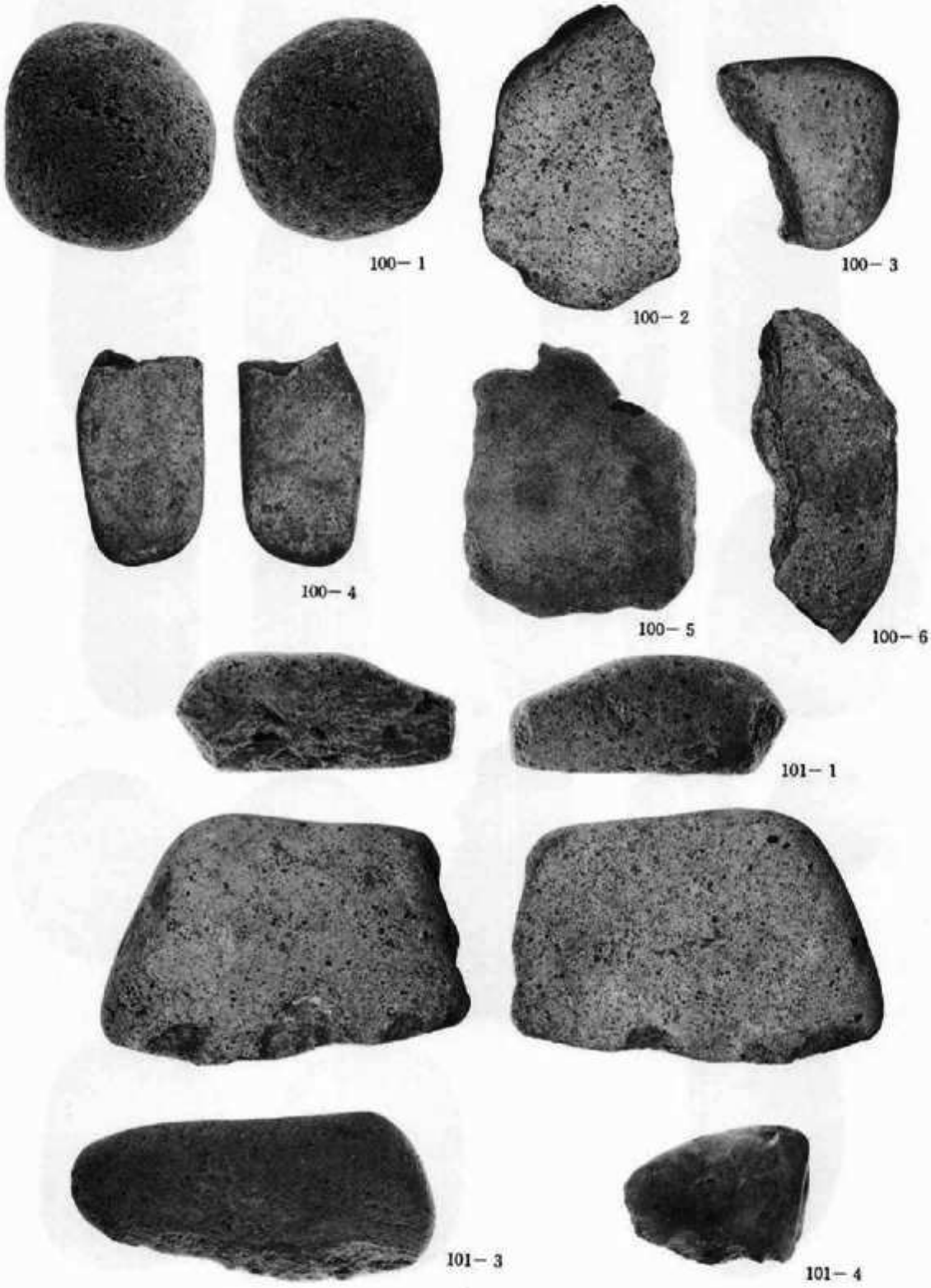
写真図版69　遺構外出土遺物(石器１～２)



写真図版70　遺構外出土遺物(石器２～３)



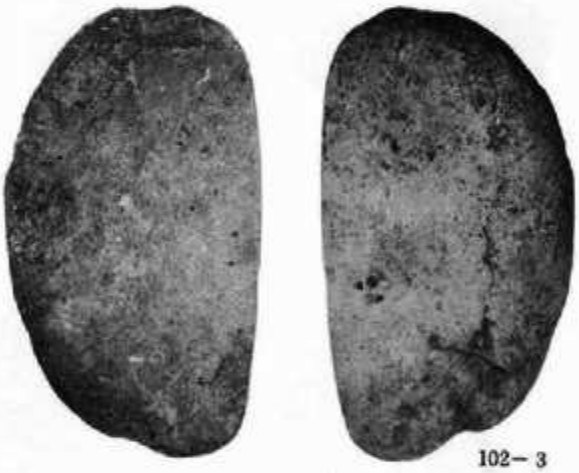
写真図版71　遺構外出土遺物(礫石器)



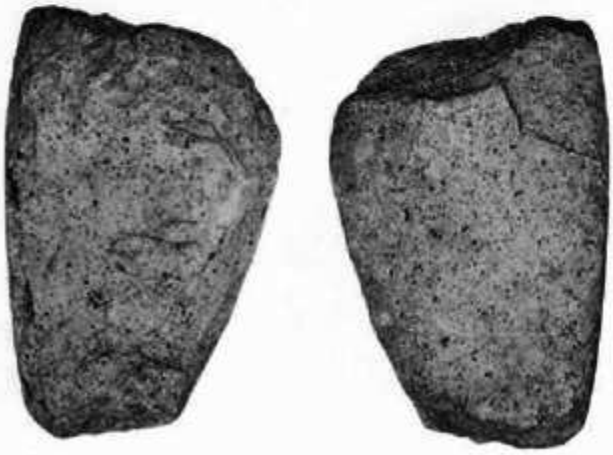
写真図版72　遺構外出土遺物(礫石器)

102－2

102－1

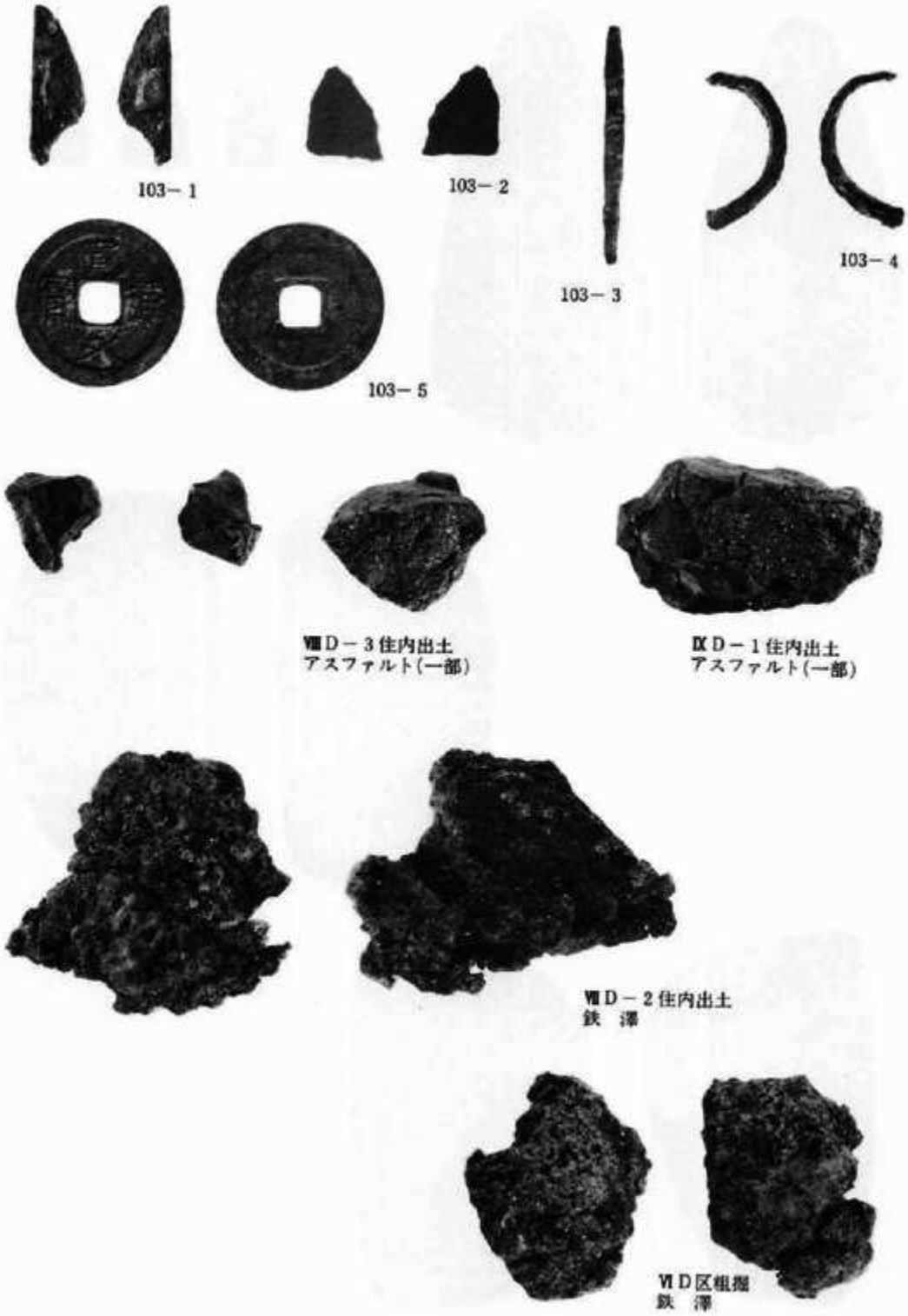


102－3



102－4

写真図版73　遺構外出土遺物(礫石器)



写真図版74　遺構外出土遺物(鉄製品等)、他

参考文献

「北上山系開発地域　土地分類基本調査　浄法寺」　岩手県　1971年

「二戸の地学」　二戸科学教育研究会地学研究部　1978

山内清男　「日本先史土器の縄文」　先史考古学会　1979年

「岩手の土器」　岩手県立博物館　1982年

橋　善光　「弥生土器」　『月刊考古学ジャーナル』　等所収　1979年

三宅徹也他　「小田野沢　下田代納屋Ｂ遺跡発掘調査報告書」　青森県立郷土館　1976年

八木光則他　「太田方八丁遺跡」盛岡市教育委員会　1979年

「縄文土器大成」　講談社　1982年

「岩手の遺跡」　岩手県埋蔵文化財センター　1985年

加藤晋平他　「石器の基礎知識」　柏書房　1981年

高橋与右衛門他　「東北地方北部の遺跡と火山灰の検討」　『考古風土記』８号　所収　1983年

「日本三代実録」　吉川弘文館　1977年

※各章の脚注で記した引用文献は再録していない。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二
副所長	宮英一

［管理課］

課長	千葉久夫
課長補佐	阿部昭夫
主事	立花多加志
運転技士兼技能員	佐藤春男

［調査課］

課長	昆野靖		
主任文化財専門調査員	工藤利幸		
〃	高橋与右ェ門		
文化財専門調査員	菊池利和	文化財専門調査員	光井文行
〃	渡辺洋一	〃	玉川英喜
〃	田鎖寿夫	〃	石川長喜
〃	佐々木嘉直	〃	中川重紀
〃	平井進	〃	高橋義介
〃	中村良一	〃	酒井宗孝
〃	田村壮一		

［資料課］

課長	名須川溢男
主任文化財専門調査員	三浦謙一
文化財専門調査員	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第110集

桂平遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷　昭和61年9月25日
発行　昭和61年9月30日

発　行　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　紫波郡都南村大字下飯岡11－185
電　話　(0196) 38－9001～2
印　刷　川　口　印　刷　工　業　株　式　会　社
〒020　盛岡市本町通二丁目13番8号
電　話　(0196) 23－3351

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986